

夏の梅の子ども*

マイロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織田作が子どもたちと触れ合っている場面が忘れられず。

もし織田作が何らかの異能力によって蘇り、自分の子どもができたら……と暴走しました。

目次

人物概要・参考資料	1
第一幕 吾輩はこういう者である。	
このままがいい。	5
はじめまして。	12
まだ三歳だよ。	16
三日前だよ。	21
流れてる。	27
お呼びじゃない。	34
ひとりでできるよ。	42
じゃあまたね。	49
『みんなで行けば』	58
『はじめてみたよ』	67
「わるい人さん」*	78
幕間 とある新人のための長い一日	
おんなじだね。	87
むずかしいの。	94
第二幕 彼岸に帰ろう side O	
どうしたものかな。	101
心配するだろう。	107
檸檬アイスだな。	117
危ないものだ。	124
久しぶりだな。	130
気が付いたのか。	138

空き部屋か。

独り占めする。

澱んだ空気。

第二幕 夜行列車に亡霊はいたか…

きれいに消えて。

食べていこうよ。

つかれるよ。

飲んでよね。

せいかくわるいな。

みんな寝る時間。

えだにや。

ねぼすけだ。

うそだー。

静かにしよう。

うれしいね。そうだな。

幕間 それぞれの裏側 & 小噺

水琴窟と茶室

武人と初孫

空蝉と老医

第三幕 絵画は真実を騙らない。

赤点だらけ。

似るの似ないの

痛い痛くないの

きらいすきじゃない

言える言えない

145

152

160

166

174

184

190

197

205

214

223

230

240

247

258

265

270

283

292

301

310

322

知ってる知らない

335

来るの来ないの

346

見つけた見つけてない

353

まさかたまさか

362

倅あれかし

370

不思議不可思議

382

緑の黒髪

391

無理危ない

401

刹那よりも永く

411

ここどこどこ

423

ないないあるない

432

うそうそついた?

441

花の芳香に紛れる影

450

黙れる黙れない

458

真実の色は

468

嘘の色は

477

真実の嘘

487

幕間 隙間を埋める小唄

陰に日向に

499

妙な神妙な

513

学芸員と画家の子

522

第四章 亡霊は闊歩する。

常々言っていた。

532

眼を合わせ、

537

言いつけを破り、

547

姿を現し、

足音を聞いたたら、

人物概要・参考資料

? 主人公

異能により、よく身体が成長したり若返ったりする。三歳。母を早くに亡くし、父親のみ。名前は木天蓼マタタビの異名で『夏梅ナツメ』猫より犬派。三歳児基準なので、夜更かし後はいつも眠くどこでも眠る。

瀬戸で生まれ育ったが、横浜へ行った父を追い、探偵社の一員に。

異能力：『***』

- ・ 控えめに云つても父親には似ていない。
- ・ 年齢差から、まず父子とは思われない。
- ・ 記憶力が頗る佳い。

? 父

皆大好き織田作さん。本作では戸籍を新たに作り、中村姓で記載。男鰥夫やもめだけど、別に蛆は湧いていないし花も咲いてない。瀬戸に居を構えていたけど、訳あつて横浜へ移り住んだ。現在は、主人公と暮らしている。武装探偵社の一員。

探偵社では何故か「織田作」と呼ばれている。

異能力：『天衣無縫』

- ・ 原作とは違い、長い赤髪を鎖編みにして首に巻きつけている。
- ・ 一時期、遺髪の入った懐中時計を所持。
- ・ 部分的な健忘と診断される。

? 母

故人。芸術家。熱狂的な愛好家からの人気は未だに根強い。
緻密で繊細な描写と色彩感覚が特徴的。
精神疾患を疑われ、昔から主治医が付けられていた。
異能力：『*****』

・ 黒髪に昏い瞳を持つ。（主人公の容姿は母親に酷似）
・ 物心ついた頃に、福沢家の家督を継いでいた父が早逝。
・ 福沢家の家督は叔父が継ぎ、家同士の交友があつた中村家の養女に。
・ なぜか周囲で厄介ごとが頻発する。養父の判断で、一時横浜へ避難させられたことも。

？ 大叔父

福沢家で長兄が早逝したため、養子先から呼び戻され家督を継ぐことになった。

亡き長兄の一人娘が養子に出されたことが気がかり。

養子先の瀬戸から避難しに来る姪を預かっていた。

探偵社を立ち上げてからは、姪の残した家人を受け入れる。

異能力『人上人不造』

・ 袖の下用のお菓子を常備している。

・ 瀬戸、横浜両女学校での事件を安井刑事と瀬戸の家と連携して追っている。

・ 瀬戸の家からは老医、探偵社からは春野を介し、情報を共有していた。

? 老医

中村家お抱えの医者。屋敷の一角に駐在。精神科が主だけれども、緊急であれば瀬戸の住民たちの診察もする。

臨床家というより研究者寄り。

主人公が瀬戸に残されたとき、世話をしていた。織田作の問診も担当。

・ つい引つ張りたくなるような白い口髭。

・ いつも手袋をはめ、分厚いレンズの眼鏡をかけている。

・ 見た目に反して声は何だか若々しい。

? 祖父

和装の渋い壮年。

中村家の先々代当主。主人公とは直接の血縁上のつながりはない。

実子は色々あつて勘当。

思春期手を焼いた養女の、忘れ形見である孫には甘い。

最近下はまりした茶道の腕と買い込んだ茶器を披露したくてたまらない。

高価な茶器に高級な茶葉でとても苦いお茶を出してくれる。

・ まだまだ現役の筋肉。

・ 毎年屋敷の増築を指示している。

・ 割と放任。

? 伯父

祖父の実子。

理由もなく家出してからは、一度も帰って来ない。
健康面でも精神面でも問題ない実子がいるのに、養子が必要とした
原因の人。

・福沢とは友人。

第一幕 吾輩はこういう者である。

このままがいい。

亡くなった母は、常々言っていた。

——人が完全に死ぬには間あるのだと。

いつごろのことにや、世間のあちこちで起きる事件に首をすくめ、「くわばら、くわばら」と唱えている閉鎖的な片田舎から、ひとりの女学生が横浜へやって来た。大きな旅行鞆ひとつを携えて。画材道具がぎつしりと入ったそれは重く、家の者はそれを他の荷物とともに送れと言ったが、女学生は頑としてそれに応じなかった。重量のある荷物を細腕の女学生が持ち運べるはずもなく、タクシーに乗り継いで移動だった。付き添いのひとりもつけずにやって来た地には、女学生の叔父がいてその家に居候することになっていた。会ったことすらもない叔父に、気難しい時分の女学生はすっかり気がささくれだつといたらなかった。不満げに車窓を眺める女学生に何を感じたか、この先からは海が見えると世間話を始めたタクシー運転手の言葉に、女学生は少し考えて行き先を変更させた。お喋りな運転手が、旅行ガイド気分にも車を走らせていると、雑木林の奥から、立ち上る煙を見つけて。客に断って近くに車を止め、会社の無線で確認を取り出す運転手に、ひとこと言って荷物とともに降りた女学生は、地面に旅行鞆を引きずると、拓けた場所に立つ屋敷へたどり着いた。それは燃え崩れようとしていた。そこで女学生は、死体を見つけた。それは銃で撃たれたが、いやに綺麗なままの、男の死体だった。女学生は、持ってきた画材道具をすべて火にくべた。代わりの物を旅行鞆に詰め込んで、道を引き返す。運転手は消防署へ連絡を済ませたところだった。女学生は何事もなく、再び、重い荷物とともにタクシーに乗り込んだ。ところで世の理と言えば、生があれば死があるということもひとつだろう。

そしてその女学生は、世にも稀な異能という力を持っていた。

それによってその死体の男は、もう一度目を開く。

しかし死者が生き返ってはい終わり、といった単純な問題ではないようで、一度死んだ人間というのは、どうやらやけに死にやすいのだそう。幸運にも生き返った男は、何度も日常生活の中で不慮の事故やら不運な事件やらに巻き込まれて死に、そのたびに異能によって生き返る。ちなみに、生き返るごとに、ある特定の記憶が失われる。……
当人からすれば、生き返ったのが幸か不幸かわかったものではないが。

何も分からないことをいいことに、女学生は卒業後に、海辺の別荘へ連れて戻った。

そしていつしか、死にやすい男と元女学生との間に子どもが生まれた。

子どももまた異能力を持っていた。

「ゆきち大叔父さん、ゆきち大叔父さん」

椅子に悠々と座す、白髪に和装姿の、武人然とした壮年の男。その男を、猫のような大きな一對の目が見上げている。

子どもはさあやるぞと唇を舌で湿らせた。幼い子どもにとってそれは日常的な小さな小さな駆け引きのひとつに過ぎなかったが、今度のそれはまた違う大きな意味を持っていた。

「ね、いつも大けがすると、体が変わっちゃうでしょ」

「あまり妄りに異能力について語るものではないぞ、夏梅」

書類に目を落としつつ、姪の子どもの相手をしていた男は表情のないまま返答する。

意気込んでの会話のつかかりは一刀両断。だがこういったやりとりは大叔父相手では標準だ。

子どもはめげた様子も見せず、言葉を継ぐ。

「じゃあ、もう言わないから——」

はやる気持ちとともに、書斎机の両手をついた子どもが身を乗り出した。

「ここではたらかせてよ」

長身の男は目を見開いて固まる。

子どもの手のひらが壮年の男の顔の前で振られる。
反応がない。聞こえなかったのかもしれない。

「ゆきち大叔父さん、ゆきち大叔父さん」

子どもはぴかぴかと、暗所にいる猫のように目を光らせる。

父を雇う大叔父を見上げる。

椅子に座っていてもなかなか高いのだ。

「ね、ぼくおおきいでしょ。せもたくさんのびたよ。もう、おとなみたいでしょ」

「……駄目だ。お前は、未だ三歳だ」

子どもの周りで、そのような当たり前の事実を、今はもう誰も言わなくなってきた。子どもの父でさえ、時折三歳児であることを忘れていることだつて多々あるのだから、それを理由に、希望を聞いてもらえないのは子どもにとつてただただ非常に都合が悪かった。

「そんなのだけれも、しんじないよ。ぼく何歳くらいにみえる、おねえさんは」

茶を持ってやって来た女性に聞いてみる。この人とは初対面だった。ならば、子どもはこの女性が、子どもにとつて都合の良い返事をしてくれるだろうと思った。その通り、女性は――

「ううんと……十六歳くらいかしら？」

やわらかく微笑み女性は言う。

事情を知らぬ女性からの言葉は、だからこそ意味を持つ。女性は見事に子どもの意に沿った回答を呈示してくれた。どうだと言わんばかりの目で、子どもは大叔父を振り返る。……子どもには異能力があつた。見かけはそれほど幼くない。

子どもの異能は、致命的な怪我を負うと、無傷に回復するというただそれだけのもの。筋力が格段に強くなるわけでも、身体的に無敵になるわけでも、不死であるわけでもない。しかしそこに全快の代償とでもいうのか、身体が恣意的に成長したものになったり、幼児に戻ったりする。そして異能力の副産物である身体年齢の変化というのは、その能力者によって制御はできない。

田舎での生活は異質なものの、異端なものを兎角嫌う。

見た目に大きな変化が表れてしまうこの異能力の発動は、閉鎖的な環境においては生きづらい。

「ありがとう、おねえさん」

「あら、どういたしまして。やけどしないようにね」

子どもにも湯呑を置いた女性は、にこりとまた微笑む。

そしてそのまま頭を下げてから、後を引くことなくそのまま愛想のいい印象だけを残して室内から出ていく。

横浜は、人が多い。

人の多さは、他者への関心の度合いを薄れさせる。

かつて母がこの横浜の地に来たのと似たような理由からやって来たわけであるが、理由はそれだけではない。

この子どもの大叔父は、同じく異能力者でもあるのだ。

母も世話になった人物、福沢諭吉。

そして、この大叔父のもとには異能力者が集い、探偵なるものを生業としているという。

なんでも大叔父の下にいれば、異能力の制御が効くようになるとも聞く。

とすれば、だ。

子どもが父の所属する大叔父の探偵事務所に自分も属することに
はいいことしかないと思うのだ。子どもが思いつくなかでの問題がある
とすれば年齢だが、見かけ上の年齢であれば、先ほどの女性の返答通り、
なんら問題はない。

さて、我が意を得たり、と子どもは有頂天になる。しかし、表情筋の
乏しきゆえに、内情のそれはあまり表れない。

「ほらね。それに学校だってちゃんといくから、ね、いいでしょ」

難しい顔で悩み込む大叔父にさらにいう。

「このまま、また何かあつて、また変わっちゃったら、たいへんだよ」
「……………」

「ねえ、だめ？　ここではたらいいたら、もつとだいじょうぶになるかも
しれないんだよ？　このままがいい。また変わったらもつとたくさ
んたいへんだよ」

大変なことをあげていく。これは子どもも父にとっても、支援してくれている大叔父にとつても、負担なことだ。子どもは彼らの負担になっていく。それを正確に理解している。その子どもも庇護者である父と大叔父からしてみれば、それは負担でもなんでもない当たり前のことに過ぎないのを、子どもは識らない。

大叔父は、子どもの思う大変な手間についてではなく、危険性を問題視して苦言を呈す。

「危険なこともある」

子どもは突然話題が変わったように感じられて、ぽかんと首をかしげる。

「きけん……?」

「危ないことだ」

大叔父が易しい単語に置き換えて言いなおす。子どもは内心でもまた首を傾げた。危ないこともあるのなら、それをしなければいいだけではないだろうか。先生も言っていた。危ないことをしないように、危ないところへ行かないように、危ない人に近づかないように。危険なものからは逃げるように。

「じゃあ、あぶなくないしごとをする。こわいひとにはついていかない。やくそくする。ちゃんと気をつけるよ」

「……………」

「また身体がちっさくなったら、おとうさんといられなくなるかもしれない、のはいやだな……………」

大叔父が頷いてくれなければ、父だつて頷いてはくれない。目を伏せて、がっかりして悲しそうな顔を作る。半分は本当だ。本当だった。そして長い沈黙のあと、子どもは望んだとおりの答えを得られたので、大叔父が大変好ましく思っている笑顔を浮かべてみせて感謝を伝えた。

湯呑みに息をふうふう吹きかけて、傾けた。

「……………あ、あつ……………」

「気をつけなさい」

子どもは舌を出してひいひいしている。

甲斐甲斐しく大叔父が寄越してきた冷めた茶をもらい、ゆつくりと飲み下し、違う意味で舌を出す。大叔父の茶は苦いのだ。

「にがい」

「……そうか。やけどは平気か」

「もうだめだあ……にがくて千切れそう」

打たれ弱い子どもはそうひどくない状態でも、音をあげてみせた。理由はない。強いて言えば、暇だったから。

それに対する大叔父の返しも慣れたもので、

「安心しろ。苦味で舌は千切れん」

「……ちぎれちゃったらこわいよ」

返された正論に、真面目に返事をする。

そのとき、子どもは事務所の方で人がやって来た音を聞く——話し声や足音、物音。

ああ、返って来たのだなど、父の声を耳で探す。

いた、と思ったとき、大叔父が腕を下ろさせてくるので、ずっと腕をあげたままだったのだなと気づく。道理で腕がふるふるするわけだ。異能力の代償は、たとえば体が成長した場合では、日常生活程度の筋力が備わっているくらいに成長度合いの差がすくなければいいのだが、大幅に縮んだり伸びたりする場合は少々不自由さを感じる状態なのが多いことだ。

腕を休めるように撫でながら、父の声に耳を傾ける。知らない人と話す、父の声だった。そのとき沸き起こった感情が、どんなものなのか、良いものなのか悪いものなのか、子どもには解らなかつた。ただ、早く会って、自分の知る父の顔を見たいと思った。

扉が開き、父が入ってくる。

「——夏梅」

「おとうさん、おかえりなさい」

父にはまた後日、大叔父から説得を受けることだろう。

ああ——そうそう、子どもの父の名は、中村作之助。旧姓を織田という。

父もまた異能の力を持っている。

まあ、それもおいおい。

まずは、子ども物語についてだ。

子どもは大叔父によって、新たに戸籍を作ってもらい、父の旧姓を用いて織田夏梅として十六歳用の身分を得て、父も働く武装探偵社へ勤務することになる。

はじめまして。

「おだなつめといひます。おはつにおめも……おもめ……おめじ」

『お初に御目文字仕ります』……はじめまして、でいいんじゃないか、
夏梅なつめ」

「はじめまして、おとうさん」

「……。……うん？」

父は頷きかけてから、その首を捻った。

すると、その父の肩口から顔を出した人物が、目を瞬かせて夏梅を覗き込む。

夏梅はじつと見返して、その細い首に包帯が巻かれているのを見て、いたそうだなあ痛くないのかなあと考えてその包帯の傷がどんなものかを想像していた。考え得る限り最も痛いものを想像して、傷を自分のものと錯覚して顔をしかめた。

探偵社の人間がそれぞれ自己紹介を始める。といっても、名前くらいだった。

首に包帯を巻いた瘦躯の人物の名は、太宰治。にこにこことわらつていて、手に持っている緑色の本を振ってくる。

夏梅は元来の人見知り顔を出し、短く顎を引いて会釈で返した。持っている本に視線をやると、表紙の角がよれるほど読み込んでいるのが分かる。ふせんが冊子の間にたくさん貼られていた。何の本かは分からないが、勉強熱心な人だと思った。

父はどこことなくこの人物に気を許しているように見えた。一方で、すこし身構えているようにも感じられた。父がこれほどひとりの人間に反応するのは珍しく、夏梅はこの太宰治という人間のこと気がなくなった。

次に、頭に大きな蝶の髪飾りを短い髪につけた女性。名は、与謝野晶子。若くして亡くなった母を思い出して、すこし印象に残った。母にもあんなふうにきれいな髪飾りをつけたらうつくしかつただろうなど。彼女は、医者だという。学校の保険医と雰囲気が似ているような気がした。不良より不真面目には厳しそうという点で。

そして、江戸川乱歩。小柄な印象を受けた。身長自体は、夏梅とそう変わらないだろう。もしかしたら同じくらいかもしれない。そうではなく、この探偵社の面々のなかではあまり目立たないという意味で。

しかしこの人物のことは、父から聞いていた。ナゾナゾを解くのが世界で一番上手な人間だと。

楽しそうな人かと思ったのだが、つまらなさそうな顔をしている。ナゾナゾがないからだろうか、と思う。

すごい人だと言っていた、父も大叔父も。そんなにすごい人なら、すごいところを見てみたいと思った。

父には、気分で動くところがあるから、機嫌がいい時に頼んで見なさいと言われた。機嫌が分かりやすい人ならいいなと思っていたが、分かりやすそうだった。……とりあえず、今は機嫌が良くも悪くもなさそう、だからきつと今お願いしても快く引き受けてはくれないかもしれない。

この他には事務の女性たちと、今は仕事をしていて不在の人もいるという。

それは後日改めて、といわれ、夏梅は頷いた。

すると、父の肩に腕を回して夏梅の顔を見下ろしている包帯の人物が口を開く。

「へー、その子がきみの子ども？ ……どうみても年齢が合わないんだがねえ。織田作ってば、いくつでこの子作ったのさー」

完全に冗談交じりといったお道化た仕草という包帯の男性が、身長が近い父の方に腕を置く。父はふいに、腕の乗せられている自分の肩をみて何度か瞬いた。包帯の男性は、にっこりと笑みを浮かべている。そのやり取りも気になるが、もつと気になることがあった。

「おださへー」

父と妙に親しげな男性の、父への呼称に、首を捻っていると、父が近い目線になって微笑んだ。その手は包帯の男性の首に伸びていた。

「ここではそう呼ばれている。人から恨まれることもある。実名を伏せておくに越したことはない」

ふうん、とよくわからないながら頷いた。父は包帯の怪我人の首を絞めながら、普通に返してきた。怪我している首を絞められて痛そうだなあと思っ、やっぱり顔をしかめた。

それはいいのだが、周りが妙に視線を泳がせているのが気になった。首を絞められている包帯の男性などは、口元が弧を描いているようにすら見える。

「ここでは、織田作之助ということになっている」

父の言葉に、はっとして夏梅は顔をあげた。

「ぼくも、おだなつめだよ。おんなじだね、おとうさん」

「同じだな」

なるほど、偽名というのは親子でセットなわけだ。

相槌を打った父は口許で薄く微笑して、くしゃくしゃと頭を撫でてきた。子どものように柔らかく軽い髪質であるので（実際、三歳児だ）、すぐにぼさぼさになってしまう。鼻先にまで髪の毛が降りてきて、呻くと、辺りが静かになっていった。

「子煩悩……いや、これは……」

首を傾げていると、背後から大叔父がやって来た。

「——紹介する。織田夏梅だ。年齢は表向き十六歳となっているが、真正銘、私の姪の子で、織田の子だ。今は、故あってこのような姿をしているが」

口を開けたり、目を見開いたりしていたが、大叔父の言葉だからか、誰も騒ぐことはなかった。

『故』っていうと、異能力ですか？」

そうだ、と大叔父が頷く。和服の袖に腕を入れて、夏梅の方へと鋭い眼光を向けてきた。

「夏梅、なにか皆にいうことはあるか」

「うーんと……なつめは、『なつ』に『うめ』とかきます」

そうかあ、と周囲は何度もうなずいてくれる。それで夏梅はほっとして言おうと思っていたことを口にした。

「あと、ぼくは男です。女のごみたいな名まえっていわれるけど」

そっかあ……と周囲は油の切れたブリキのようなギョギョとした

動きでひとつ頷いてくれる。その顔はさきほどのものと変わらないはずなのに、どこか違うように思えた。

真顔でいう父と、これまた真面目くさった顔で頷く大叔父は雰囲気はどこか似ている。ふたりとも目の下に隈があるところも似ている。父は母を亡くしてからずっと、大叔父は夏梅の記憶では隈があることが多い。忙しいのかもしれないと夏梅は思う。

夏梅は向き直って頭を下げた。

「よろしくおねがいします」

そのとき、事務所のドアが勢いよく開かれた。

銃を向けてきた眼鏡をかけた男性が手を上げると怒鳴ってきた。頭の後ろで一つに結わえている黄色い髪が背中に揺れていた。

夏梅は周りにならっておなじように手を上げた。何が起きているのだろうかと思いつつながら、銃をもつ男性をじつと見ていると、早口で何かをまくし立てていた。夏梅は聞き取ることができず、ぽかんと口を開けていると、噴き出す声がすぐ近くで聞こえた。

それは包帯を首に巻いている人と、大きな蝶の髪飾りをつけた女性だった。あげていた手を口元に持っていつている。

手を上げなくてもいいのだろうか、と観ていると、銃を持つ男性が怒鳴ってきた。その後ろから、郵便だという帽子をかぶった少年がやって来て、あつという間に人質として取られていた。

探偵事務所において、目の前で瞬く間に襲撃者と人質の構図が作られていく。そこでどう動くのか——それが夏梅の入社試験だった。

まだ三歳だよ。

夏梅は試験に合格して、晴れて探偵社の一員となった。「きみに訊きたいことがあるのだよ」

包帯の人物は、夏梅がひとりになるとそう言つて声をかけてきた。まるで、人さらいをする人間のようなだと思つた。人の良さそうな声と笑顔で近づいてくる男性は、ひよろひよると肉の薄い体をしている。首に巻いた包帯が痛々しい。けれども、夏梅の記憶するかぎり、その包帯が解かれたことはない。おしやれでもしているのだろうか。包帯で？ 夏梅は思考がお他所^{よそ}へ飛んでいくのを引き戻した。

「ぼくにですか」

新入りの夏梅に訊きたいこととはなんだろう。振り返る際に、制服の襟が首もとの隙間を詰めてきて、息苦しさに顔をしかめた。書類を持つていないほうの指で襟元を寛げていると、対面する包帯の人物は包帯が巻かれた両手首を背中へ回し、小さい子へするように態々腰を折つて顔を近づけてきた。

「織田作……いや、きみのお父さんの話なんだけど」

「あの、これを社長にもつていったあとでもいいですか」
もちろん、と包帯の男性はにこやかに頷いた。

ふさぎ込む父に、追い打ちをかけるように、子がさらわれた。その土地の子どもたちとともに子狩りにあつたのだ。猟奇的な連続誘拐殺人に巻き込まれたのだ。子は、頭を砕かれた。そして次々に集められた子どもたちが殺された。父は探してその連続誘拐殺人犯を追い詰めた。そこには殺されかけようとしている子どももいた。父は、子の死も目にしたのだろう。犯人を殺そうとしたとき、父は踏みとどまった。死んだはずの小さな手が成長して、それを止めたのだ。警察へは匿名者による通報によつて事件は収束した。

「でもころされた子たちはたくさんいて、怪我をした子どもたちもいて」

「それは凄惨な事件だねえ」

「おとうさんは、生き残った子どもたちで、行き場のない子をひきとつて面倒をみることにしたんです」

「へえ……相変わらずお人好しだねえ」

『凄惨』という言葉が分からなくて、小首を捻ったが、そのまま続けていうと、その人は父を『お人好し』といった。

『お人好し』の意味も解らなかつたけれども、それは妙に夏梅の頭に残った。

父は事件で親元のわからない子どもたちや身寄りのない子どもたちを集めて、暮らしていた海の別荘を改築し、子どもたちを養育する施設を開いた。直接の運営は地元の人々の手を借りた。父はなれたように子どもたちの世話を買って出ていた。それが、『お人好し』なのだろうか。

「ぼくはその事件で、頭をなぐられました。そこで異能がかいきました」

「そう説明されたのだね」

「はい。ずがいこつがかんぼつしていたらしいです。ぼくがおきたとき、十二歳くらいに大きくなっていました」

「そりゃ暴力的な犯人だねえ。頭蓋が陥没するといったら……ああ、やられたのは幼児の頃だっけ」

「二歳のときです。それからいたいけがをすると、ちいさくなったり大きくなったりします」

「なるほど、きみは自分の異能を把握できない……それで社長の『部下』になりにきたと」

夏梅は頷いた。そして首を傾げて、相手の男性に尋ねた。

「太宰さんは、どうしてここにはいったんですか？」

「うーん……人助けかな」

えらいですね、と頷いた。ウェイターの女性が珈琲とジュースをもってくるので、ありがとうございますと会釈をした。ジュースのほうに口をつけてから、目の前の彼に尋ねた。

「ぼくもおとうさんのことで訊いてもいいですか」

「うん、何だい？」

にこやかに微笑むその人は机の上で両手を組み、先を促した。

「太宰さんは、おとうさんのむかしのともだちですか」

やっと違和感の正体が分かった気がした。

妙に、親しげに見えたのは、どこか引いている父と一方的に父の多くを知っているような彼との温度差が目についたからだろう。

そして、その理由として考えられるのは、父がなくなった記憶の中に彼が深くかかわっていたということだ。その人が死ぬ前に強く思った記憶が無くなるのだから。

つまり、父がなくなった記憶に彼がいたのなら、彼は父にとってかわりの深い人間だということだ。……そして父が、特に何の理由もないのに相手に危害を加えようとするのは、昔にかかわりの深かった相手だったと記憶している。

夏梅の入社初日に、父が夏梅の前で普通の顔をして、太宰の包帯がまかれた首を絞めていたのは、そういうことだろう。これでもこうした行動は収まった方だ。大叔父の異能力の影響なのかもしれない。

「昔の……きみは、彼が。きみのお父さんが記憶を失くしていることを知っているのだね」

知っている。一歳ぐらいの頃に母が話しているのを聞いたことがある。夏梅は、母の胎中のなかでの記憶も覚えているくらいだ。生まれる瞬間の記憶もあるし、生まれた後の記憶はもっと鮮明だ。目ではほとんど情報を拾えなかったことも覚えている。

「彼はね、私がここにいる理由——大切な友人だよ」

「そうですか。……これからも父のことをよろしくおねがいます」

夏梅の大切な存在を、同じく大切だと言ってくれる人がいる。夏梅はわらって頭を下げた。すると、頭上で太宰がふっと息を吐くのが聞こえた。不思議に思っただ顔をあげると、太宰は眉を下げた笑みで夏梅を見下ろしてきていた。

その眼差しになにか影を見たような気がして瞬くと、太宰は目を細めてそれを隠した。

「きみはきつとお母さん似だね。あいつとは大違いだ」

「……おかあさん？」

「とても素直ってことだよ」

母とも知り合いなのだろうかとも思ったが、それは違うような気がした。太宰のことには、父に対するもののようにには気持ちが悪くもつていなかった。

それが、中村夏梅に太宰治という人物を苦手に思わせた。

「ところで、お酒飲む？ 織田作とも一杯くらいやってるんだらう？」

「ぼく未成年です」

「あーあー、そういうえば真面目だったものねえ……そういうえば、きみが織田作の息子っていうのは分かったけど、改めて年は一体幾つなんだい？」

珈琲を片手に軽快にわらう太宰に、夏梅はいま聞くのかと思いいながら答えた、「まだ三歳だよ」

ぷぷーと口に含んでいた珈琲を噴き出す太宰の正面をささつと通路の方へ移動して避けた。その夏梅の肩に手がおかれた、「帰るぞ、夏梅」

いつの間にかやって来ていたらしい父の姿がそこにあつた。

うん、おとうさん、と席を立ちあがる。じつと追ってくる視線を感じて、夏梅はその人物の方へと向いた。そして口を開いた。

「おごつてくれてありがとうございます。次は、おとうさんにおごってもらってくださいね」

太宰治は、にこりとわらって手を上げふたりの父子を見送った。背は父の方が高く、まだ育ち切っていない子は、それでも父子よりは兄弟だ。どことなく表情ははっとするほど似ている時はあるが、細面で柔らかく整った顔立ちが程遠い。少年の域を出ていないせいも、首も手首も足首も細い。ほっそりとした白い指が、父親の腕の部分の衣服を掴んで連れ立って行く。太宰はそれを頬杖をついて眺めた。

「……まあまあ、織田作のやつってば、しつかり父親やってくれちゃつて」

こんな日が来るとは思わなかった。

「——というより、今でも信じられないけど」

織田作之助は死んだ。太宰治の目の前で——確実に。生きていることは望外の喜びの筈なのに、あまりにもありえなさすぎて、それを疑ってかかるしかない。とはいえ、太宰は恩義ある探偵社の社長、福沢から詮索無用と直々に釘を刺されてしまったので、表だって探るわけにもいかない。目の前の事象を受けとめればいい。

けれど、太宰自身が、それをさせない。

「織田作をつかった死体人形かとも思ったけど、違う。あれは織田作自身だ。記憶がないだけ……記憶が無くなるだけで人を生き返らせる異能力をもつものがいた？」

そんなめちやくちやな異能があるはずがない。思い出すのは、織田夏梅という織田作之助の息子として入社してきた少年のことだ。致命傷ともいべき大けがを負うと、年を重ねる代わりに、死を回避する異能力……だろうか。

「織田作に奢ってもらう時に訊いてみるかなあ……」

何を考えているのか分からない。このことまで考えが及んでいたのだろうか。

太宰は机に突っ伏した、「……………三歳児だぞー、相手は」

三日前だよ。

夏梅が生まれる前に、母は父とともに瀬戸へと引越した。瀬戸の海は、数多くの島々が浮いているのが見えることで、画師たちの憧れの海だった。

母はそこで亡くなった実父の遺産である別荘で、父と暮らしていた。海が見える別荘で、ふたりの子は生まれる。そして悲しい別れがふたりに訪れたのも、その場所だった。

海——それは夏梅に、戻れない時間に『かえりたい』と思わせる場所だ。

朝のニュースでは、女性の左腕と頭部が海で発見されたというだけだった。

その事件は、深夜に漁師たちによって引き上げられた網にかかっていたバラバラの死体。見つかったのは左腕と頭部のみ。水を吸って、皮膚は膨張してふやけており、顔の判別はできない。身元は確認できないが、髪長さからおそらく女性だという。

探偵社に来た依頼内容は、ニュースで見た情報よりもよほど詳しくかった。

「横浜はおつかないところですね。ひとをばらばらにして海にすてるなんて」

江戸川乱歩に依頼された仕事に、夏梅ははじめて同行することになった。電車に乗って、江戸川と共に現場まで行くのだ。平日とは違う、休日の駅になんとなく不慣れな自分の姿を見つけた。

江戸川に切符を買い、夏梅はもっている定期をつかって改札口に入ろうとしたとき、ひとりの駅員と目が合い、手を上げて微笑まれる。夏梅はおじぎをして改札口を通った。

「なに、知り合い？」

「たすけてくれたんだよ」

夏梅たちは電車の席に座って目的地まで待つ。

「みつかまえ、じんしん事故で、でんしゃが一時間くらいおくれたんで

す。それで、学校にもつていく遅延しようめい書があるから……あの
駅員さんにももらいました。はじめてでよくわからなかったので、おし
えてくれました。やさしいです」

「そういえば、高校生だったっけ」

「あさはやくおきるのは、あんまり、すぎじゃないです」

「朝五時に起きてるなんて、偉いねえ」

「おとうさんがごはんつくってくれるので」

夏梅はふと、何時に起きているのか江戸川に話しただろうかと首を
捻った。尋ねようとしたところで、目的の駅に着いた。

改札口を出ると、潮の薫りがした。

「遺体の一部は、午前三時頃、沖に出ていた漁船に引き上げられまし
た。まず、頭部が網に引き上げられました。まだ夜も明けていなかっ
たため、漁師たちは新手の深海魚かと思ったそうです。しかし、その
網には左腕が引っ掛かっているのを見て、人間の頭部ではないかと気
付いたそうです」

第一発見者である漁師たちには警察が既に話を聞いているようで、
江戸川に情報を伝えている。

生真面目そうな若い警察官が青い顔だったが、刑事に促されて、メ
モを見ながら説明している。その脇には、上がった水死体の一部がブ
ルーシートに被せられていた。

「第一発見者の証言通り、遺体の損傷が激しくてな……死亡推定時刻
を割り出すのも困難だ。鑑定もお手上げの状態だ」

「幸いなことに、引き上げられた左腕の手首には腕時計がつけられて
いました。『五時三十八分』という時刻を指した状態で止まっている
ことから、おそらくそれが犯行時刻なのではないかと」

「見せてくれる?」

水死した遺体は見るに堪えない悲惨なものだという。未成年であ
る夏梅は、江戸川にびったりとついて袖を握っている。刑事と若い警
察官が壁となって、夏梅からは死体が見えないように気遣われてい
た。

はじめは未成年が現場について来ていると知って、いい顔はされなかつたように思うのだが、江戸川がひとことというとき夏梅は受け入れられた。正直何故、受け入れられたのかは分からないのだが。

江戸川がすごいと大叔父である福沢や父である中村作之助——ここでは織田作と呼ばれているが——によって称賛されている、その実力の一端を垣間見ることができたと思っておく。

江戸川がいくつか質問している間、夏梅の頭はまたぼんやりと思考が他へ移った。夏梅の母の異能力を思い出す。母の能力は、死後49日以内であれば、生き返らせることができるかもしれない、という代物だったらしい。けれども、それはこのバラバラにされた死体も同じなのだろうか。夏梅の頭でも、腕の欠片や頭から人を生き返らせることはできないのではないかと思った。

母の異能力はもともと死者を蘇らせる『かもしれない』という規格外さだが、その発動で蘇る確率はそれほど高くはない。実感のこもった母の言葉は、女学生時代の事件のことを思い出しているのだろうと、幼い夏梅は思ったものだ。

人間というには、あまりに小さくなってしまった遺体。ブルーシートのかくすみからしか夏梅は知ることはできないし、それが生き返るところを想像することもまたできなかつた。

母は、異能力によって対象が生き返るか、完全なる物質になるか、と言っていた。

完全な物質とはなんだろうか。二度と母の異能力を行使することができない、生き返る可能性のないものになるということだろうか。考えても仕方がないことだ。その稀少で謎の多い異能力と共に、母は死んだのだ。

夏梅はふと、自分はこの先、死者を前にするたびに同じように自問することになるのかもしれないと思った。死者をよみがえらせる力を持っていた母がいたから、死からよみがえった父がいるから。母が亡くなっても、父がその象徴なのだ。

その異能力のことを、その度に夏梅はずっと考え続けるのかもしれないなかつた。

「——分かっていることはこれだけです」

「おかげで捜査は難航してる。こんなことができる凶悪な人物というので大分絞られるが、犯行時刻も分からなければ、被害者のことも分からない。ただ、このところ行方不明者として届けが出されている者を片端から捜査するのにも限界がある」

「なるほど」

江戸川は屈んで、ビニールシートをめくり、腕の部分のおそらく時計を見ているのだろう。そして立ち上がった。

「——ねえ、何か隠してない?」

それに反応したのは、若い警察官だ。夏梅の目からも明らかほど肩をびくつかせていた。対する刑事は、顔をしかめていたが、落ち着いていた。

「何の話だ」

「ここにほぼ毎日、早朝にやって来る人物がいるだろう。港に似合わないサラリーマンかなにかで、それはおそらく若い男性で二十代から三十代くらい、妻子持ちの」

「——おい、杉本。お前が喋ったのか」

「い、いいえ警部。じ、自分は話していません。本当です!」

江戸川は「ふーむなるほど」と顎に手を当てている。その傍らで、裾をしつかりと握りしめたまま、夏梅は刑事に口をとがらせて言った。「どうしていわなかったんですか」

唯でさえ、手がかりの少ないなかで、その情報を伝えないのは不親切だと思った。

それに答えたのは、江戸川だった。「それは彼に確実なアリバイがあったからだよ」

刑事が舌打ちした。じろりと若い警察官に目を向けた。彼は体の前に両手をあげて必死に首を横に振っている。夏梅の目から見ても分かる、彼は嘘をついていないだろう。

ならば、これは江戸川の推理だ。

夏梅は素直に感嘆するも、刑事は違ったようだった。開いた口からは、とげとげしい言葉が飛び出る。

「俺はな、上の連中が寄越したからって、お前らを信用しちゃいねえ。これから徹夜でも何でもしてホシをあげなきゃなんねえんだ。冷やかしたらとつとどこから出てつてもらう」

これには夏梅も黙っておれず、目に力を入れて、自分よりはるかに年上で、大人な人物に抗議した。この行為には、特別勇気が要った。袖を掴んでいない空いた手で握りしめた拳を体の前で振わせるも、意を決して口を開く。

「乱歩さんのちからがいるから、おねがいしてきたんでしよう。おねがいしたひとが、そんなふうにいるのはよくないです」

誰よりも正しいはずの警察に、間違っていると言うことがどれほど難しいか、この刑事が知るはずはない。知っていたなら、正しい行動、善い行動に徹するはずなのだから。

警察とは、そういう職業だと、夏梅は思っている。

「俺は自分の目で見えた物しか信用しない性質だ。上の指示に従うが、それとこれとは別だ」

いいか、坊主。と刑事がいう。

「組織にいる以上、こういうことはままあるもんだ。だが、上の判断にほいほい従って、自分の頭で何にも考えねえで行動する奴は、いずれ自滅する。……覚えておけ」

何故、そのようなことを夏梅に言うのだろう。じつと顔を見てくる刑事に、思わず首をひねりながら尋ねた。

「……刑事さん、ぼくのこととしてるんですか？」

「お前じゃねえ。いや……詮無いことを言ったな」

江戸川が「ふふん、なるほど」と何かを知ったように相槌を打つ。それに目を向けた。

「ま、きみに関係ある人物のことをよく知っているってことさ。そうだね……五、六年前ってどこかな」

「……何をいつてる」

「担当したその事件は、女学校で起きた」

刑事は表情を硬くして絶句する。

「何で、そのことを」

江戸川は飄々と笑い、刑事の問いに答えない。

そして、「この悲劇を終わらせようか」とマイペースに眼鏡を取り出した——【超推理】のはじまりだ。

「あなた方が把握している凶悪な人物のなかに、今回の犯人はいません。そして——そもそも、これは殺人ではない」

ちら、と視線を夏梅に寄越して来る。

「夏梅、きみが学校を一時間も遅れたのはいつのことだったかな」

そう、そうなのだ。一時間も。ちゃんと起こしてくれる父によってそれまで皆勤賞だったのに。それが破られてから日は浅い。ふくれっ面になりながら、夏梅はしぶしぶ答える。

「……二日前だよ」

江戸川はにやりと笑い——そして、ものの数秒で謎は解かれた。

流れてる。

微妙な顔をした刑事と目を輝かせる若い警察官に見送られる。

事件について、例の男性に聞いたところ、すぐに被害者の身元が分かった。何故、そのことを言わなかったのかと声を荒げて問う刑事は相手の言葉を聞いて何かに口ごもった。それからただ頷いて、署に来るように落ち着いた声で頼んでいた。

夏梅は父や大叔父の言葉ではなく、自分の目で見て、江戸川乱歩という人物がすごいと感じた。

夏梅のふくれっ面もおさまるくらいに、それは圧巻だった。

江戸川の姿を見つつ、夏梅は帰りの電車に乗った。そして江戸川の異能力を褒めつつ、どうやって解決に導いたのかを質問した。機嫌のよい江戸川は、それに答えてくれた。

頭がぷすぷすと湯気を上げるような興奮に包まれた夏梅は、窓の外に視線をやって落ち着こうとした。

電車の窓は、きらきらと光る水面がみえる川を切り取っていた。そこに、なにか見慣れないものを見つけて目を細める。

ううん……？と首を捻っていると、江戸川がひよいと顔を出してきた。

「ありやあ、まーたやってる」

「ぼく……あれ、人の両足にみえるんですけど。……流れてる」

「気にすることはない、いつものことだ。放っておけばいい」

太宰だよ、と江戸川は言う。がたがたと夏梅は身じろいだ。

「え、たすけないと」

「へーきだよ。すぐに川から引き上げられるよ。その岸边にいる少年にね」

そう言った途端に、川の中へ少年がとびこむのが見えた。電車からはそれ以上みえなかったが、江戸川のまったりとした様子から落ち着きを取り戻し、夏梅はいつの間にか浮かせていた腰をおろした。

探偵社まで送って、夏梅は報告書を作成し、茶を淹れていた父に出

迎えられた。その手には、何かの資料があった。

「夏梅、戻ったのか。乱歩さん、お疲れさまです」

「どーもー」

自由気ままに江戸川は席に飛び乗って本を読みだす。斜陽のなかでは読みづらいだろうと思ひ、江戸川の席のところの電気をつけてから、父の方へと近寄った。

「おとうさん、それは？」

「このところ騒ぎになってる、『人食い虎』の被害についての資料だ。独歩に頼まれてな」

「ふうん。お茶は、大叔父さんに？」

「社長と呼ぶように。——持って行ってくれるか。今日は、事務の方が非番でいないんだ」

父は人からものを頼まれやすく、そしてそれを何でも受け付けてしまう。自分の手に負えない案件は断るが、そんなに何でもかんでもしよい込むのは、子としては不安に思う面だった。

「いいけど、おとうさんの報告書の提出は、休日だとおひるの三時までだよ」

「それはもう終わっている。これは太宰のだ」

「……………太宰さん？」

用事があるからと頼まれた、と父は言うが、夏梅は電車で見かけた両足を思い出して微妙な顔になった。どうした、と父は首を傾げる。そして夏梅の頭を撫でてきた。口許にはほんの少しの笑み。

「それにしても、しっかりするようになったな、夏梅」

夏梅はすこし目を大きくしてから茶くみ用の盆で口許を隠して、父を見あげた、

「——もっとほめてもいいんだよ、おとうさん」

すると、調子にのるなど頬を引つ張られた。いたい。

大叔父の福沢に茶を持って行き、江戸川の代わりに報告書を作る。

そうしているうちに、日はすっかり暮れた。

作成した報告書を、父に確認してもらう。本当なら、同行した先輩

社員に見てもらおうところだが、江戸川に関してはそれが当てはまらない。

父は既に太宰から頼まれていた報告書をあげ、さらに『人食い虎』についての資料をまとめているところだった。地図に日付や被害について書き込んでいるところだったが、夏梅が近寄ってくるのを認めると手を止めた。

父の作業に一区切りつくまで待つつもりだったが、夏梅は手に持っていた報告書を渡した。

父はぎつと目を通しただけで、赤ペンで次々にチェックを入れた。

「使える漢字が増えたな」

しかし、直しはなくならない。むむむと口をとがらせていると、父は何故か微笑した。

「……学校で友だちがおしえてくれるから。ないしよで、おかしもくれるよ」

父はそうか、と頷いた。学校でのことは心配いらないうことが伝わっただろうか。安心してくれたように思って、満足して、夏梅は報告書を直すために席に戻った。

すると、休日だというのに、探偵社のドアが開き、社員たちがやって来るところだった。

父に資料を頼んでいた国木田独歩を筆頭に、谷崎兄妹、宮沢賢治、与謝野晶子ら。勢ぞろいでどうしたというのか。ここまで揃っている、太宰がいけないことが気にかかってくる。帰りに見かけたおそらく太宰の足は無事に少年に助けられたのだろうか。

「どうしたんだ、独歩。太宰を追いかけたんじゃないのか」

父が目を上げて言う。そして後ろのメンバーも見て、目を細めた。

「その太宰から伝言だ。織田作と……帰ってきたばかりの夏梅にも悪いが、来てもらいたい」

江戸川は社長とともに留守番だ。

夏梅は、父や他の社員とともに目的地へと急行する。

青白い月が浮かぶ空を見あげつつ、夏梅は父に今日の仕事について

話をした。

「乱歩さん、すごかったんだよ。警察のひともおしえてくれなかったのに、よく来てる男のひとがいることを当てたんだ。それも二十代から三十代って言って、奥さんも子供もいるってあてたんだよ」

江戸川の力を目の前にして、夏梅は感嘆した。筋だつて言われると、なるほど、と誰をも納得させる根拠も言ってみせた。

「そうか。——それは、どんな事件だったんだ」

要領を得ない話だと夏梅でも思うが、父は根気強く続きを聞いてきた。夏梅は声をひそめたまま、言葉を選んでいう。

この事件——いや事故の全貌はこうだ。被害者は、ここ数日の間、毎日やって来る男性と付き合っていた。三日前、男性と待ち合わせをしていた被害者は、結局男性とは逢えなかった。それは、待ち合わせの時間に男性が来なかったからだ。その日は、早朝の電車が遅延していた。一時間遅れて、男性は待ち合わせ場所に来たが、そこに被害者はいなかった。被害者は、その頃には既に、海へ転落してしまっていたのだ。その時刻が、朝の五時三十八分だ。被害者は転落する際に、漁船が密集した場所で、縄か何かに絡まってしまい、溺死する。しかしその遺体は絡まったままですぐには発見されず、待ち合わせに来ていた男性もまた、見つけられずにその場を去った。そして、今日。深夜のうちに出航する漁船のスクリューに遺体が巻き込まれる。体は既に膨張していて簡単に切断されてバラバラになった。その欠片が、海に放った網にかかった。

そして江戸川は、被害者の身元は、男性に訊けば分かるだろうと言葉を締めくくった。

「殺人ではなかったんだな」

「うん。腕におなじような傷がたくさんあって、ひとにはできないっていつてた。それがプロペラでできたものだって」

「そうか。——そういえば、三日前といえば、夏梅が遅刻した時だったな」

「……遅延しようめい書をちゃんと提出したから、公欠にしてくれる……はずだよ」

夏梅は顔をあげる。

「でも、すごいよね。乱歩さんには、ちよつと話しただけなのにちゃんとそのことを覚えていたんだよ。それで、待ちあわせに相手のひとが遅れたっていうのを当てたんだよ」

電話で刑事が確認した時、その通りだったということを知つただ。

「相手は待ち合わせしていた被害者が死んだということ、ニュースで見なかったのか。名乗りを上げそうなものだが」

夏梅はぱつと口を開いてそれはね、と声を上げる。慌てて口を押えて、ひそめた声で言い直した。

倉庫の中も外もしんとして静かだ。この静けさに見合った、小さい声で話すように心がける。今もまだ一応、工作中だ。

「それはね、ニュースでは女のひとのからだが見つかったっていつてたけど、ほんとうは男のひとだったんだ。女のひとだと思つてたのは、かみのけが長かったからだけなんだって」

「……へえ？　そういえば、見つかったのは左腕と頭部だけだったか」「うん。そのひとはね、ニュースは見たけど、男のひとをさがしていたから、女のひとがしんでるっていつて不安になつてずっと港に来てたんだって」

「大切な友人だったんだな」

目を伏せる父に、すこし冷静になった。人が死んだというのに、このように得意になつて話すのは良くなかった。

近くにいた国木田が、中の物音を聞き取り、父を呼んで扉の近くに待機するように言つて、一旦離れた。代わりに、国木田が建物から下がつてふうと息を吐いた。

国木田は、夏梅の入社試験で、強盗犯を演じていた。そのときは目まぐるしく動く場面についていけず、突拍子のない人と思つていたが、実際はごちゃごちゃと個性の強すぎる社員のまとめ役だった。

夏梅は正直、こういつたしつかりした人からよく世話をされる。学校では、小テストの範囲から勉強の仕方までみてくれる。相手をしてくれるだけ、ありがたいと思う。

「聞こえて来たから、つい聞いてしまったんだが、どうして被害者の男は海に転落したんだ？」

さきほど、死んだ人のことを話すのは良くないと思ったばかりなので、夏梅は落ち着きなく目を瞬かせて、江戸川から聞いた事故の顛末をむりやりまとめ口にした。

「ひだりのおねえさん指が少し細かったんだって」

薬指だな、と律儀に訂正を入れてくる。むむと口をとがらせるが、話を続ける。

「ぼくはよく分からなかったけど……よく来てた男のひとと死んじゃった人はずっとまえからつきあって、くすりゆびに指輪がはまってたって」

ずっと指輪をしていると、成長してもその指は細いままだという。被害者と待ち合わせしていた男性とは、ずっと前から付き合いがあったことを表していると、江戸川は言っていた。

「……おい？ 待ち合わせていたのは男同士だったと聞いたような気がするんだが」

うん、そうだよ、と夏梅は頷く。そういえば、刑事も若い警察官も何とも言えない顔になっていた。

「それをうみに投げようか、どうしようかってうろろうしてるうちにうみに落ちちゃったんだって」

「……それは待ち合わせに、相手が遅れたからか？」

「怒りっぽいひとだったのかも。いやなことがあるとものをなげるひといるもんね」

夏梅は自分の考えを言う。江戸川の話は難しくてよく分からなかったのだ。夏梅が幼い頃——今だって十二分に幼いが——母が健在だったとき、いらいらすると大事にしている絵筆さえ壁にたたきついたり、力任せに折ったりすることがあったのでそれを参考にした。

しかし、一応江戸川の話も国木田にする。

「ええっと、『妻子を持った男との関係を終わらせようと呼び出し、待ち合わせ時間までじっと待っていたが、相手は現れなかった。帰ろうかと思ったが、男との関係に一人でもけりをつけるべきか悩み、長年

の関係の象徴でもある指輪を捨てようかとうろろした結果、足を滑らせた』……です」

国木田は顔の下半分を押さえるのか、眼鏡を直すのか、手を顔の前をやっていた。結局、その手は眼鏡を直した。反射した眼鏡で見えない表情のまま、国木田は口ごもりながら言った。

「その……指輪は見つかったのか」

「うん、あとで。ほそくなってたゆびには、なにもなかったけど、あとで調べてみたら交番に届けられてたって。乱歩さんはすごいね」

そういえば、国木田はしっかりと頷いた、「ああ、乱歩さんはすごい」その言葉に迷いはなかった。

青白い月夜に、白い虎の少年が現われた。

彼の名は、中島敦。

夏梅は、他の社員とともに倉庫の中へと入って、その驚いた顔を見つけた。

お呼びじゃない。

非番の人も集まって指定された倉庫に向かった満月の夜、中を覗けば驚いた顔を見つけた。

そして驚いた顔をしたその人物はこういったのだ、『あれー、乱歩さんは留守番なのかい?』

「ねえ、ねえ、おとうさん。あれってどういう意味だったと思う?」

「乱歩さんは珍しい事象に興味があるから、来るなど言っても来ると思っただんじやないか」

袖を掴んで注意を引きながら尋ねると、苦笑しながら父は言った。

「ふうん? ぼくは、お前みたいな三歳児お呼びじゃない、乱歩さんを連れて来いって意味かと」

「どうしてそうなったんだ」

父の声は不思議そうだった。

「だって……」

夏梅はちよつとぶすくれてそっぽ向いた。

すると、ふっと頭上で息が吐かれて、沈黙が落ちる。

そのまま家までの道のりを黙って歩く。青白い月が、暗い海のような空に鏡のように輝いていて……そのせいで周りの小さな星々の姿は、夏梅の目には見えなかった。

電灯に照らされた街路を父の腕を掴んで歩く。

海の波打つ音から遠ざかると、人が産みだす雑音が耳を掠めるようになる。いつもどこかで聞こえる自動車が走る音。偶に見かける電気の切れた街灯の点滅。高いビルのたくさんある窓の内の明るいとこころ。

それは、父と母と共にすごした瀬戸内の閑静な街とは違っていた。

瀬戸内の海に浮いているような山の端から月が昇ってくれば、陸の動物も魚もねぐらにかえり、鳥は羽をたたみ、植物さえ夜の姿になつて——人はみな自然と共に寝静まる。

一日が終わりましたよ、という夕焼けがお休みの時間を連れてくるのだ。音がしない道路は霧に覆われ、ときおりトラックがそこを走っ

ていたり、バイクの音が夜の静寂を駆け抜けていく。

父と母に抱かれて眠る夜に感じたことは、夏梅の知っている少ない言葉のなかでは言い表せない。

高く昇った冷たい蒼い月を見あげた。

ここは、父と母と過ごした海の街とは違う。

きつとこの横浜の地では、夜が更けても、必ず誰かが起きている。それはとても安心できるようなことに思えた。誰かの息遣いが、動く音がこの街ではいつも響いている。

はじめは気まずさからだったけれども、父と肩を並べて（実際には身長差がまだあったけれど）歩を進めることが、なんだかとても幸福なことに感じられて、夏梅はもつとずっとこの夜道をいっしょに歩いていたと思った。

???

???

さて、耳を通して頭のなかを揺さぶるは、古くから親しまれた黒電話の騒音。

電話の音といえばこれ！ という着信音にしたのは、夏梅である。つまり、これは夏梅の携帯の音である。

「……お……とう……さん……」

けたたましい音に、寢床から出ずに父を呼んだ。しかし、寝起きの声は喉に絡みついて上手く出ない。それでもいつもならばすぐにあるはずの応答がなかった。

そこで、夏梅は、父が早朝出勤であることを思い出す。

「……………うううーい」

軽く——絶望だ。

昨夜は夜更かししたので、朝起きるのが殊のほか辛かった。父は低血圧の夏梅のために遮光カーテンを閉めたまま出ていってくれている。寝ようと思えば、いくらでも寝られる環境は整っていた。

しかしながら安らかな眠りから叩き起こそうと朝から鳴り響く携帯の大音量に、割と早々に白旗を振った夏梅はもぞもぞと布団の中から腕を出して応える、

「もしもし……なつめです」

「夏梅くん、おはよう！ いい朝だね。その声はひよつとしなくとも寝起きかな？ もしかしなくとも起こしちゃったかな？」

朝からテンションの高い声で、「ごめんねー」と言ってくる太宰。知らず半眼になりながら、夏梅は問うた。

「……おしごとですか」

「ううん、ちがうよ。これはとつても私的なお話なんだよ。とつても個人的なお願いで心苦しいんだけど」

太宰の流暢な言葉が耳からすこーんと飛んでいってしまうのを何とか引き止めつつ、夏梅は少し考えて、返答した。

「……なら、でんわしてこないでください」

眠気眼で、腹這いのまま電話に出ていると、内臓が下に落ちるような感覚がした。むかむかしてくる。

この理由は分かっている。うまく腹の筋肉、つまり腹筋がついていないのだ。あばらとあばらの間、鳩尾といった骨で支えられていないところから、内臓が下に落ちてきている。内臓を支える筋力不足なんて、誰にも言えない。故郷で夏梅を見てくれた医者と夏梅との秘密だ。

もともと筋肉があまりついていない状態なので、鍛えるも何もない。ない筋肉を作らなくてはならないので鍛えるよりもずっと難しいのだ。運動だけでなく高タンパクの食事が必要だ。それにも、夏梅はちよつとした壁があるのだが。

夏梅は、通話終了と判断して電話を切って寝返りをしようとした。しかしそれを声の主が引き留める。

「い、いやっ 待ってくれ、夏梅くん！ とつても重要な事なんだ」

「……なんですか」

寝返りをいったんあきらめて耳を傾ける。これでくだらないことだったら切ろう、そうしよう。

「聞いて驚かないでくれよ。実はね今——死にそうなん、だっ」

「おめでとうございます」

くだらないこと——いや、おめでたいことでした。さようなら。

ピツと通話を切って、夏梅は携帯を枕元に戻して、再び布団の中にもぐりこんだ。

父は早朝から、江戸川とともに仕事に出ていた。朝食を作り置きしてくれているのは知っているので、可能な限り惰眠をむさぼる所存。

今日は振替え休日だ。世の学生たちはお休みである。

休日と言えば、夏梅は探偵社の助手の手伝いがある。しかし、それだけではない。

試験前のちよつとした、いやまあそれなりに大切な抜き打ち小テストで、赤点を取ってしまった夏梅は午後から補講があるのだ。

……ああ、そうだ。そうだと知っているから、夏梅は意地でも今は寝るのだ。

そこできゆうと腹の奥、鳩尾の辺りが苦しくなった。

これは——つらい。

貧弱なひゆるひゆるの筋肉の奥で、小さな胃袋が自分の胃酸に焼かれそうつと悲鳴をあげている光景が鮮明に思い浮かぶ。

「うううう……しかたない」

いったん自覚してしまった胃袋の訴えを無視するわけには行かず、もそもそと布団を被りながら食卓の上におかれた食事へと足を伸ばすことにした。

お腹すきすぎ。好き？ いや空き。空き？ お腹空きる？

空っぽの腹が頭の回転を鈍らせる。せつかく覚えて頭のなかで組み立て、整えた文法も、覚えた意味もぐちゃぐちゃになっていく。

糖分が足りていないんだ、糖分が！ と頭のなかがわちゃわちゃと騒ぎ立てる。いやちよつと待って、落ち着いてよ頭さん。

頭のなかの何人もの自分の声を自分で制しながら、ちよつと頭がおかしくなっているかも、と自覚する。空腹はなんておそろしいものだろう。日常のうちで人を狂気に陥らせる、実に生理的でありふれたきつかけだ。——それは置いておくとしても。

正直、太宰の電話に起こされなければ、こんな朝早くから空腹の苦痛に苛まされることはなかったのではないかと思うと、ちよつと恨む。

頭の中に何人もの自分の声を抱えながら、父に怒られるので普段はしないけれども、今日はいないから、と掛け布団を頭から被つたまま、リビングの食卓に移動する。ずるずると床を擦る音に頓着せず、テーブルの上を確認した。

鍋式に置かれた鍋のふたをつかみ、いざ中身を拝見……

「きょうはー、カレーだ」

おおおーとふたをもつたまま万歳をする。頭からずるりと布団が床に落ちた。その途端に、頭のなかの夥しいほどの声も静まり返る。餌があると解つたからか、現金なものである。よたよたとしながらふたをいったん鍋に戻す。そして床に落ちてしまった布団を部屋にたたんで戻して来て、食事が用意されている席に座る。

これは父の好物で、夏梅の好物でもある。父は仕事柄、匂いのつく食べ物はあまり食べないのだけれども、今日は江戸川の付き添いなので、気にする必要はないのだろう。

「カレーは、一晩おくと、おいしくなる、もつと……って、誰が言つてたっけー？」

父がいないとひとり言が多くなる。広い部屋に一人きりだと、とても寂しい。

鍋からカレーを取り出して、レンジの中に入れて温める。電子音がして、中身を取り出す。白米と混ぜて食べる。

机の上に他に用意されているのは、サラダだ。まだ瑞々しいサラダの葉と、四等分にされたゆで卵。ドレッシングは市販のものを和風青紫蘇と胡麻ダレ、洋風シーフードとヨーグルトドレッシングなど種類は豊富。

異能力によって、見かけがいくら成長しようと、それに順応できるとは限らない。

夏梅は、胃袋の大きさに慣れないせいで、少量しか食べられず、常に栄養失調気味だ。父はそのことを気にかけていて、野菜や果物のジュースや高カロリーのおやつなどを食事に用意してくれる。

少し食べるだけでも栄養が取れるようなものや、ちよつとした時間に補給できるものをこまめに買い置きしてくれている。いまや、すっかり主夫である。まあ、そればかり食べていると、食事が食べられなくなってしまうので、やはりこれも調整しなくてはならないのだけれども。

——あ。

『カレーは一晩おくともつとおいしくなるの』

「おかあさんだった、なあ……」

そのとき、まだ一歳にしかならなかった夏梅は、母の作ったカレーの味を知らない。カレーと聞いて、その母の言葉しか、思い起こすことができない。

「どうしておいしくなるのか聞けばよかった……かな」

喋る舌はまだ育っていないかったけれど。

戸籍では十六歳になったからといって、身体が大きく成長したからといって……心まで成熟したわけではない。これは不自然な状態なのだ。草木のように一朝一夕で生長することはできない。

ひとりで食べる朝食は、父の優しい気遣いと、どうにもならない孤独が身に迫って感じられてちよつと泣きそうになった。

電話がもう一度なった。誰だろうと出ると、それは太宰だった。

「あれ、今度は早かったね、夏梅くん？ ご飯はちゃんと食べて準備は出来ているかなー？」

「……………」

調子のいい声に、つい黙ってしまう。電話に早く出てしまったのは、きつと寂しかったからだ。

こんな時に聞く、この太宰治という人間の言葉は、何だかほっとするのが、夏梅は不思議でならない。

「うーん？　もしかしてどこか調子悪いのかな？」

「太宰さんは、ぼくのことときらいなんじゃないですか」

だから、つい言ってしまった。

口から飛び出してしまった言葉が、少したつて怖くなって手が震えた。

切ろうと思った電話の向こうで、太宰の静かな声が響いてきて手を止めた。

「——嫌いじゃないよ。そうだねえ、あとで話をしよう」

その言葉を聞いて、ほんとうに不思議なことに、手の震えが止まった。

いつもとは違い、夏梅は誰もいない玄関をひとり出ていく。

オートロックで、勝手に鍵がしまる音が背後ですると、肺に冷たい空気が入ったような心地がした。

学校の用意を持って制服を着たまま仕事へ向かうと、そこはにぎやかだった。

挨拶をして、夏梅はそくさと鞆を邪魔にならないところに置いてきた。夏梅と同じ様な内容なら、ちよつとばかり部屋のなかがごちゃごちゃしそうだからだ。

試験の準備は大方出来ているらしかった。立てこもり犯が決まると、人質役は率先して手が挙がり、あつという間に少ない配役が決まった。夏梅は、大人しく社長にお茶を持って行く係りを引き受けた。社長はいないことになっているので、入社試験の状況を隣室で伺うのみだ。

猫舌気味の大叔父のとなりで、熱い緑茶を両手で持ちつつ、耳を傾ける。

果たして、中島敦は合格——。

『家族も友だちもない、孤児院さえも追い出され、行く場所も生きる希望もない』かあ……」

大変だなあ。

でも、この少年はとても、生きていると、そういう気がした。

白髪の頭を抱える、夏梅の外見年齢よりいくつか年上であるような少年を大叔父の傍らで眺めて、目を細めた。

大叔父の和装の袖を掴んだ。

「おとうさんは、いなくならないよね」

袖は揺れた。

答えはないまま、夏梅の手を、広くて大きくて乾いた手のひらが包んだ。

俯いた夏梅の視界の端に、白髪の少年がこちらを向くのが分かって、そちらへと目を上げた。

「きみは……？」

傾げられる首に、夏梅は大叔父の影から離れて一歩前に出た。

「中村夏梅……じゃなかった、織田夏梅です。これからよろしくおねがいします。おにいさん」

夏梅は背後の大叔父に見守られて、にっこりとほほえんだ。

ひとりでききるよ。

どうして緑色なのに、黒板という名称なのか。

きつと誰もが疑問に思うだろうことなのではないか。

最近、語彙力と使える漢字を着々と習得してきていると思っている夏梅は、そんなことを考えながら、上の空で黒板消しを黒板にあてたせいか、勢い余って白い粉が舞いあがってとっさに目をつぶって咳き込んだ。

力の加減は苦手だ。手先を器用に動かすのはもつと苦手だ。

薄目を開けて、粉が収まったのを確認すると両目を開けて、ゆっくりと黒板消しをチョーク置きに戻した。

そしてそろそろを目線を下げて制服の惨状を確認する。

「うわあ……」

頭から粉を被ってしまったせいか、黒い制服には特に汚れが顕著だった。

白いチョークがついた制服の上着を手で払うと、白い汚れが広がってしまふ、手を止める。

しばし考えて、脱ごうと決意する。しかしこのとき、黒板消しを持っていたことも忘れて襟に手をかけたことで、ますます制服を汚してしまう。詰襟に指の型がついたのに気づいてむむむとうなった。

それ以上汚れを酷くするわけにもいかず、どうしようと手を空に浮かせたまま真顔で悩んでいると、ガラガラと戸を開けて教室に戻ってきたもうひとりの日直の女子生徒に「何やってるの？」と声をかけられる。

振り返ると、怪訝そうな顔で夏梅の方を見ているところだった。

彼女は日誌を担当していて、職員室から戻ってきたところなのだろう。字を書くことがまだ不慣れな夏梅に代わってこうした役割分担を申し出てくれるあたり、面倒見がよいのだろう。

すぐに夏梅の両手がぶらりとした状態と襟元を見て状況を把握したか、ひとつ頷くとつかつかと大股で教壇へと上がってきた。

「織田君はこういふこと不器用だね。いままでどうやってきたんだ

ろって不思議なんだけど」

「いままでは……」

精神も肉体も少々込み入った事情はあるけれども、正真正銘の三歳児である夏梅は、全部父母がやってくれたとしか言いようがない。

とはいえ、はつきりと生まれてからこの方の記憶のある夏梅は、彼女に不器用といわれる原因に思い当たらないではない。

おそらく、要領の悪さは父から、上の空の行動は母から受け継いでいるのだろうか、と。

悪いところを似たといいたくはないけれど、どうにも原因はそこらへんにあるように思える。

父は持ち前の能力の高さから、要領の悪さをカバーして有り余るほどだけだ。

母はどこかぼうっとした性質で、家のなかを歩けば机に足をぶつけ、皿を洗えば落として割り、風呂に入れば足を滑らせ転ぶなどといったことがよくあった。集中力の散漫というのだろうか。

目も碌に開かない乳幼児期の時から、母の周りはやたらと騒がしい音が溢れていた。皿が割れた、その音にびくついていたものだ。

とりあえず、母が器用か不器用かと問われれば、不器用に分類されるのではないかと――。

「うん？ ……ただのおつちよこちよい？」

考えていたことが、つい口から零れると、「目の前に人がいるのそっちのけで考え事とは……ねえ？」と気迫のある笑顔で思考を呼びもどされて、咄嗟に口許を手で押さえる。途端に、煙たくなる口のなか……。

「あ、」「あああー！」

夏梅よりも高くて大きい悲鳴が目の前で上がる。その声音に肩を小さくしていると、

「あらら……もう、すぐに違うこと考えてやっちゃうんだから」

そう零しながらも、女子生徒は女子らしくハンカチをポケットから取り出して、夏梅の口周りについてしまった白いチョークの跡をふき取ってくれた。縁に猫の刺しゅうが入ったピンク色のタオル地のハ

ンカチだ。ふかれながら夏梅はその猫の刺しゅうを目で追った。

湿らせた方がいいんだけどねえ、と言いつつ夏梅を見あげてくる少女はため息をついた。

「ここで私が廊下を出て蛇口ひねってる間に、織田君もつと酷い惨状になってそうだから、これで我慢よ」

きつい物言いだ、直接的で分かりやすい。面倒見がいいのだ。夏梅は頬を和らげてなんとかほほえんだ。

「ありがとう、三谷さん」

「二谷だから！」

渾身の感謝の笑顔——効果はなし、と。

『ミニ』タニ、違う。『ニ』タニ。その『ニ』が言いにくい。

マ行は唇で、ナ行は舌の動きで発音する。夏梅は、どうも舌周りの動きが鈍いようなのだ。だから、近い音で見逃してくれないかなあと思うのだが、さすがに名前を呼び変えるのはまずいかも。

うーんと悩んでいると、空いたままの教室の扉の前で見知った男子生徒が立っているのに気づいた。

「大きな声出してどうした？」

部活帰りの男子生徒だ。刈り上げた頭と切れ長の瞳をもつ彼と夏梅とは隣のクラスということ以外に、仕事上で間接的にはあるが接点がある。そして、面倒見のいい女子生徒である二谷とは、幼馴染とすること。

当然、二谷とのほうが親しいのではないかと思うだろうが、ところがどっこい、男同士の友情というものは重きが置かれるらしい。

明らかに大きな声を出していた幼馴染の二谷に向けられた言葉には、親しみからの碎けた物言い以外に少々咎めるような響きがあるようだった。

「野球部の練習、終わったんだ安井」

「ああ、テスト週間だから自主練だけだしな。夏梅は——日直か」

「うんそう、三谷さんといっしょよ」

「二谷！」「二谷だろ」

夏梅が首をかしげながら、

「そう大きな声を出さなくても……」

それを聞いた男子生徒は、未だにふーふー毛を逆立てている二谷の先ほどの大声のいきさつに、ようやくと気がついたようで眉間から陰をとり払うなり、深々とため息を吐いた。

夏梅の通う高等学校では体育やら音楽やら美術やらの時間は二クラス合同授業となるのだが、その際彼はよく自分のクラスの友人とわかれて夏梅の面倒を見てくれる生徒の筆頭なのだ。

何故ここまでしてくれるのか。夏梅があまりにもふらふらしているからというのは無関係ではないだろう。けれども、敢えて他の要因をひとつ挙げるとすれば、仕事の間接的な影響なのではないかということだ。

江戸川乱歩。父の勤める武装探偵社の一員で、【超推理】という異能力をもつ。彼はその異能力によって数々の事件を解決してきた名探偵だ。

そして、この男子生徒は安井。江戸川乱歩の実力を認め、高く評価している刑事の息子というのは、彼の父親である刑事から聞いたことだ。

あまり探偵社のことは口に出すなどは父の言いつけなので、「江戸川さんのこと知ってるの？」と直接彼に聞いたりはいしなないけれど。

「あ、安井。上着脱ぐの手伝ってよ。白い粉がついちやうから」

「いいけど、俺が消そうか？」

むっとして夏梅は長身の安井を見あげてねめつけた。

「ぼく、ひとりでできるよ」

「あー、わるい、わるかった。自分の役割はなんでもちやんと熟さないと、だもんな」

「安井、勝手に手を出すもんじやないわよ。ほら、脱がせてあげるから、やんなさい」

白のカッターシャツになった夏梅は白い粉を被りながら、黒板をきれいにして満足して振り返ると、保護者のように律儀に待っている二人の姿を見つめる。目をぱちくりと瞬かせた。

「……あー、ごめん？　ありがとう？」

夢中になつていた黒板消しを終えると、急に頭が冷めて先ほどのきつい物言いを振り返り、反省した。

謝罪を先に言おうか、それとも待っていてくれたことに感謝を先に述べた方がいいかと迷った末、自信なく疑問形で謝罪を口にする、二人はまるで同じ人物のようにそろってふっと噴き出して肩を震わせた。

まあ、その次にお互いの顔を見合つて、二谷の方は気まり悪そうにそっぽ向き、安井の方は肩をすくめていたという差はあるけれど。

どうにも、夏梅は学校ではこうした我が儘な側面が出てしまう。家や仕事では父を困らせないようにきちんとして、心配させないようにしつかりしようと気を張っているせいかもしれない。

学校でもきちんときたらいいのだが、そこは三歳児の自制心ではほころびが出て来てしまうというもの。

夏梅自身は自覚していないものの、わりと完璧主義なのだ。同じくらいずぼらではあるのだけど、それはそれ。

「ああ、夏梅、姉貴から菓子渡すように頼まれてたんだよ。えっと……」

そこで安井にストップをかけるのは、二谷だ。

「ちよつと、あんたまさかその土まみれの手で食べ物に触るつもり？」

正気？」

安井と夏梅のふたりであれば、スムーズに流れる会話が、第三者が加わるだけでこうも腰がおられるものなのか、と夏梅は黙ったままじつと成り行きを見つつ感慨深く思った。

そして、二谷の言葉をまともに受けて、正気を問われるほど非常識なことなのか、と夏梅は真顔のままびっくりした。

父にも手洗うがいはいいつけられていたけれど、外でもこれほどとやかく言われるのならば真面目に気をつけようと思った。

——まあ、もちろん、それくらいその人にとって常識を外した行動であるという言葉であつたことは知っている。

「ちゃんとさつき洗ったけど」

「爪見て見なさいよ、土が入り込んでるじゃない」

言い合いになりそうな面倒な空気を察して、夏梅はふたりの間に割って入った。

「お菓子？ 安井のおねえさんのとてもおいしいよね。見たい」

夏梅が二人の間に手を差し出すと、横から手首をグイと掴まれた。二谷再び、だ。

「ちよつと、織田君もチョコクまみれのこの手でつて……ひつ……織田君の手首細くない!? 私の片手で回りきつちゃうんだけど!」

なんで、なんでと近づいてくる顔と気迫に驚いて言葉を詰まらせていると、慌てたように二谷が手を離れた。ついでに顔も離す。

対照的に、安井はそんなに細いのかと体を傾けて覗き込んでくる始末。

「ほ、ほら、泣かないの。私も飴あげるから」

「……クツキーが、いい」

泣いてはいないし、泣くつもりもなかった。けれども何やら意図せず譲歩を引き出したようなので、さらに要求してみた。

夏梅は一人っ子なのだ。ちよつとばかり我が強い。人見知りだが、構ってくれる相手とみると、地が出る。特に相手が世話好きとくれば、さらに懐く傾向にあった。つまり、図々しくなる。

「夏梅は洋菓子が好きなんだ」

安井が汚れているといわれた手で触るのを惑う仕草をして、手を降ろしながら言った。

二谷は動揺の声で、絞り出すように言った。

「ちよ、チョコレート味のキャンディーなら、あるわ」

「それ、食べたことない……」

生まれてからこの方の記憶をしつかりと鮮明に保つ夏梅が思わずそう断言すると、二谷はやつと調子を取り戻したようにふふんと鼻で笑って、顎を上げて告げてきた。

「まずは。二人ともちゃんと手を洗いなさい」

安井は「あー、はいはい」と坊主頭を搔いていたが、夏梅は頭から

指図されるのが納得いかず、むむと口をとがらせて二谷を見あげる。

「……三谷さんは？」

「二谷も、洗います」

そう言われると、夏梅は何も言うことがない。しゅんと肩を落とすて頷く。

二谷は名前の部分を強調して、大人しくなった夏梅と安井の背を押しながら廊下にある流しに押し寄せていった。

「そういえば——と。」

教室を出る前に時計を確認すると、下校時間から一時間半を過ぎていた。電車はいつもより遅いものに乗らないといけないな、と頭で考えていると、流しの縁に大腿をぶつけて呻いた。

じゃあまたね。

靴箱まで三人で行ったところで忘れ物をしたと断って、ひとり教室に戻った夏梅は、目当ての定期入れを机のなかから探り当ててほっと息を吐く。

いつもは鞆につけておいているのだが、江戸川とともに事件に同行した際に、鞆から外して単体で持ち運びしていたのをそのままにしていたのだ。

これがないではちよつとまずい。

教室の壁に掛けられた時計を見ると時刻は午後六時二十三分となっていた。だんだんと日が暮れてきた外の景色を窓から眺めて、靴箱で待たせたままにしている二人のことを思い出した。

しかし、焦ればボロが出るのは夏梅なのでゆつたりと教室を出ると、来るとき急いでいた際には気づかなかった隣の教室にひとりの女子生徒がいることに気づいた。

こんな時間まで残っているのはちよつと不自然だと感じた。

夏梅たちが茶番をしているときにもこの生徒はずつと隣の教室にいたのだろうか。

「ねえ、どうしたの？」

長い黒髪の女子生徒が振り返る。紫色の花がついたヘアピンでサイドの髪を留めているのが見えた。女子はおしゃれだなと思いがながら、夏梅は見知らぬ女子生徒に問いかけた。

「帰らないの？」

「……………友だち、を待ってるの」

「そうなんだ」

女子生徒は膝のうえで両手を握っている。行儀よく、真面目な印象を受けた。

友人と約束しているのなら、待つのは当然だ。でも夏梅はなんとなく納得がいかず、食い下がった。日直の夏梅もふつうであればとくに仕事を終わらせて帰っているはずなのだ。部活動だつてテスト週間だから自主練ぐらいでそれも短時間で切り上げるはず。委員会

だってこの一週間は免除されている。

そういった事情をいちいち挙げずとも、なんとなく不自然さを夏梅は感じたのだ。

それにテスト週間の時間はとても重要だ。いつも赤点ぎりぎりの夏梅にとっては死活問題。

この生徒が夏梅のように不出来だとは思わないが、時間が大切というのはみんな同じであるべきという幼さからくる少々傲慢な考えから口をとがらせた。

「でも、外暗くなってるよ」

「待っててって言われたから」

一生懸命考えて、夏梅は言った。

「もしかしたら、その友だち……何か急に用が出来て、何も言えずに帰ったんじゃないかな。ごめんなさいって思いながら」

席に座ったままじっと机の一点を見つめるように、目を伏せていた女子生徒はどうにも、好んでこの教室でひとり友人を待っているようには見えなかった。

けれども、こうして夏梅が声をかけるまで微動だにせず座って待っていたのかと思うと、待たせている方の友人はきつと慌てるのではないかと思った。

夏梅は、人を待たせてばかりいるから、そう思うのかもしれないけれど。

そういう気持ちから、少し親身になって言うと、はじめて女子生徒の物静かな空気が揺らいだ気がした。

「……そう、なら……わたし、は……帰ってもいいの、かな……もう」

「いいんじゃない？」

どうして自分の行動なのに人に聞くのだろうと首を傾げながら夏梅は言い放つ。

女子生徒は思ってもみなかったことを言われたという顔で、こちらをぱっと見てきた。

そんなに不思議なことを言っているだろうか。

首を傾げたまま、夏梅は目を細めた。単純に、教室の窓の斜陽が射しこんできて眩しかったので。

「——もし駄目だったら、ごめんなさいって言えばいいよ」

そうして、おそろおそろといった具合に頷いた女子生徒を認めて、ようやく気が済んだ。

そのまま背を向けて帰ろうとして、夏梅は思い出したように足を止めた。

「そういえば、君の名前なんていうの？　僕は、な……織田、夏梅だよ？」

「藤咲みのり」

彼女は肩に鞆を掛けながら呟くように言った。

ちよつと動揺して語尾が上がってしまい、疑問形に聞こえてしまう。

夏梅は自分の失態にもだもだしそうになったが、相手は気にしていないようだったので一安心。

ふうん、と夏梅は頷いた。やっぱり聞き覚えのない名前だ。

まあ……夏梅はクラスメイトの名前だって碌に憶えていないけれど。

「じゃあまたね、ふじしやきさん……ぬうう……」

夏梅は二度目の失態に、今度は相手が何か言うのも待たず、頬を押さえながら廊下を走った。それこそ脱兎のごとく——今、夏梅は風になる。

バタバタと足音荒げて靴箱に着くと、びっくりした顔ふたつに出迎えられた。

「……噛んだ」

詳細省き簡潔にまとめる。

それに対して安井が「痛かったな」とありきたりな言葉を返してきて、夏梅はそれにすこし救われて精神を回復した。

「はいはい。で、定期は？」

「あつたよ」

忘れ物の所在を追求してきた二谷にぴらりと定期入れを見せると、

重々しく頷かれた。ちよつと先生に認められたような満足感が得られて夏梅は頬を緩めた。

駅まで一緒に歩いたものの、途中で安井が「腹減った」と売店へ寄る。

パンやスナック菓子などを買うのに付き合うため、一本遅れた電車に乗り込むことになった。二谷はダイエットで、夏梅は夕食が食べられなくなるため間食禁止なので、ほんとうに付き合うだけだ。

安井の両腕いっぱいパンの山を手伝って持ったが、二谷といっしょにちよつと戦慄く。

カレーパンにメロンパンに焼きそばパン、肉まん、ホットドッグ、マフィン、シュークリーム、ポテトチップス……甘いもしよっぱいも関係ないのか。水は要らないのだろうか。ああ、自前のスポーツドリンクがあるんですね失礼しました……

体幹のしつかりとした恵まれた体格の安井は決して太っているわけではない。背は平均より少し高いというくらい。横幅があるわけではない、単純に筋肉の質というのだろうか。そういった要素が合わさってなんとなく実際より大きく感じるものの、隣を歩けば目立って大柄ということはない。

なので、夏梅としては、安井のいったいどこにこの大量のパン達が入るのか、不思議でならなかった。食べるだけでは大きくはなれないんだな、と電車の広告にある力士の写真を見て思った。

いつもは目に入らない広告はいつもそこにあっただのだろう。けれど人の多さ故、目に入らなかつたのだ。視線も心なしかいつも下げていたようだと感じく。

そうしたいいつもとはちよつと違ったところを車内で見つけるのが楽しくなった。

江戸川とともに乗った休日の電車でも感じたけれど――

やはり、いつもは乗らない時間帯の電車のなかは殊さらもの珍しくて、人の少ない車内を見回すと、隣の号車に教室でわかれた女子生徒がいることに気づいて「あ」と声を上げる。もちろん、別の車両なので、彼女が気づいて振り向くことはない。

しかし、隣にいた二谷は夏梅の視線を追ってあれ、と首をひねって反応した。

「ああ、B組の藤咲さんね。こんな遅くまで、どうしたんだらう。学校で勉強でもしてたのかな」

「三谷さん、知ってるの?」

「二谷です。そうね、有名かしら。私は同じクラスになったことないけど、才女って話よ。……まあ、私が知ってるのは彼女のことじゃなくて、彼女のおねえさんのことだけ」

「おねえさん?」

「安井のがもつと詳しいんじゃない?」

「ああ? 何がだ?」

まったく二谷が舌打ちをする。けれど、夏梅や二谷の隣のクラス、安井は左隣だ。つまり、B組が藤咲で、C組が夏梅たちで、D組が安井なのだ。ふつうだったら、他クラスの女子のことなど知らなくても、不思議ではないのではないだろうか。

しかし、二谷には安井が知っている筈という何がしかの根拠があるようだった。

「あなたのおねえさんが藤咲さんのおねえさんと同じ女学校に通ったの。たしか六年前になるのかな。いまでも覚えてる。当時は情報が錯綜しててね、結局あれはどうなったんだっけ? 解決してないんだっけ?」

「……ああ、あの事件。どうだったか……さすがに親父は口を開かなかったけど、姉貴は当事者だったからいろいろ聞いたな」

「私も聞いたわ。たぶん、真智さん、誰かに話すことで落ち着きたかったんだと思う……」

二谷はめずらしく言葉が尻すぼみになって、俯いていた。

安井は二谷の言葉に昔を思い返しているようで、気づいているのか分からない。

「あの時の姉貴は、ちょっとおかしかったな。ちょっとした影とかに怯えてて」

夏梅を挟んで、ふたりが会話するのを聞いていると、夏梅が完全に

聞き役に回っているのを気遣ってか、二谷が顔をあげて微笑む。

「さつきは言わなかったけれどね、織田君が安井のおねえさんからお菓子もらってるって聞いてほっとしたの。ちゃんとあの時から回復してるんだって。……昔は真智さん、お菓子なんて作るような人じゃなかったけど、新しい趣味を見つけたのね。やっぱり、女学校に通っている、女子力が上がるのかしら」

なんだか彼女らしくない柔らかい物言いは、夏梅にはちよつと難解だった。分からないなりに頷いておいたけれども。

そういえば、夏梅の母も女学校へ通っていたし、料理も上手だった気がする。夏梅の離乳食は母の手作りだった。

「……さあな」

安井はそっけなく言う。

ちなみに夏梅の両隣にふたりが座っている理由については、山盛りパンを抱える安井がすたすたと電車に乗り込み、それにカモガルのように夏梅が、遅れてはっとした二谷が乗り込んだままの順番で席に座っただけである。

「ふうん……おねえさんのお菓子おいしかったって伝えてね、安井。ありがとうって」

二谷に話を振られないよう、安井の方を向いて話題の流れを変えてみた。

安井はああ、と切れ長の目を緩めて頷いた。

二谷と安井は家が近くということであたりそろって降りた。降りるとき踏み出した足が揃っていたことにぎやあぎやあと騒ぎながら。主に、二谷が。

気がつくとも藤咲もいなかったの、話している間か二谷たちと同じ時にでも下車したのだろう。

喧噪が遠ざかると、静かな車内が顔を出した。夏梅は鞆を抱えて、暗い車窓に映る自分の姿を見ていた。

光を飲み込んだような黒々とした眼が、じっと夏梅を覗き込んでいるようだった。そこから目を反らせば窓から自分の姿をしたものが出てきて夏梅を襲ってくるのではないか。

そう想像してしまつて、夏梅はそれから目を離すことができなかつた。

目的地がアナウンスされ、駅の明るいホームに迎えられると、こちらをじつと見つめてくる少年が窓から消えた。ほつと息をついて、足早に電車を降りる。

家に帰ると、父が腕をまくつた格好でドアを開けてくれた。夕食の用意をしてくれていたのだろう。長ネギの匂いがした。夏梅は、長ネギ、きらいだけれど。

「おかえり、夏梅。今日は遅かつたんだな」

「ただいま。日直だったんだ。手伝ってもらつたり、忘れ物したりしておそくなつちやつた」

まるで日直の仕事が、手伝ってもらふことだったり忘れ物をしたりすることのように話していることに気づかない。もちろん、夏梅がきちんと黒板消しや日誌ができていたなら、そう話せていたのだろうが。

忘れ物のくだりで、父はちよつと苦笑した。あー、なるほど想像できる……みたいな感じだろうか。

「友だちに手伝ってもらつたのか。ちゃんとお礼は言えたか」

靴を脱いで、家の中に入りながら夏梅は思い返す。

手伝ってもらつた礼は言つただろうか。待つててくれたことには礼を言つたけれども。

父に続いてリビングに入ると、ふんわりとした鍋のいい匂いがした。

黙して長考した夏梅は、食欲をそそる匂いに意識が逸れてしまい、とりあえず頷いておいた。

「うん、たぶん」

「そうか」

父はその沈黙もしつかりと待っていてくれた。多分というあやふやな回答にも頷いてくれる。

口をすぼませて夏梅は鞆を降ろしながら、ちよつとだけ父の方をちらつと見てみた。

父がいうには、夏梅は目が大きいので、どこを向いているのかすぐに分かるというので気を付けて。

父が視線に気づくかどうかという時に、夏梅は「手を洗ってくる―」と何かいわれる前に洗面所に行った。

手を洗い、うがいもする。顔も洗ってタオルでふいていた夏梅は、鏡に映る自分がゆるゆるとわらっていることに気づいて、むむむと口をとがらせてみる。しかし、口の端から緩んで……失敗。

何もおもしろいことなどないのに。強いていえば、顔を洗っていたくらい。

鏡の前でタオルを置いて、両手で顔をぎゅつとつまむ。制服を着替えてリビングへ戻る。

鍋に火をつけ直していた父が「頬が赤いぞ、熱でもあるんじゃないか」という心配性な顔を覗かせる台詞に、返事にもならない相槌を打って席に座る。じつとコンロの火を見る夏梅に、父もまた席に座った。

距離が近くなると、青い火のゆれを眺めながら、夏梅はいつの間にかするすると今日あった学校のことを口にしていった。

「きようはね、日直でいっしょになった子といつも話をする子とさんにんで帰ってきたよ」

父は友人と帰ってきたということに声を和らげた。何気なく話し出した夏梅より、静かに耳を傾けて聞いている父の方が嬉しそうだった。コンロの青い火から目を上げて、思わず父の顔を伺う。

ちよつと目が合って、夏梅はちよつと首を傾げて「ねえ……おとうさん」

気付けば、父を呼んでいた。

「なんだ？」

すぐに父の応えがある。

「……どうして、この火は赤色じゃなくって、青いの？」
本当は、別に、呼んでみただけなのだけれども。

『みんなで行けば』

到底かなうはずのない相手を前にした。

地面に倒れている人たちが、自分のせいで傷ついていることを知った。

中島敦は治療室のベッドのうえで目を覚ました。ことのあらまは国木田から聞いた。動揺を隠すことのできていない様子に、不安が伝染する。と同時に、居た堪れず、申し訳なさを感じずにはいられない。

自分の首には70億もの賞金が掛けられている。誰からも見放され、何の価値もなく、何の利益も生み出さない自分は、無害どころか、救ってくれた人にも害を与える人間だったのだ。

自分に出来ることを、と国木田に言われた。

正直、自分のような人間が、何かを成すことができるとは思えない。その自信もない。

そんな自分は、いるだけでも社会の迷惑なのだ。知っている。でも、こんな自分でも、生きていてもいいという何かがあればと思っていた。

そんな自分が考えたすえ、辿り着いた結論。

出来ること——いや、自分がやらなくてはならないことは、これだと。

厄介でしかない自分のような存在を受け入れてくれた人たち。少々強引な成り行きに巻き込まれたような形だった。けれども、そんな人たちが自分のために傷つけられていいはずがない。

振り払え。振り向くな。このまま自分が去ることで、ここにいる彼らの憂いを払うのだ。

変わりなく声をかけてくる国木田の脇を俯いてすり抜け、走り出す。

戻るつもりはなかった。

耐えがたい飢えのなかで、罪を犯しても生きたいと思った。そんな

とき、奢ってもらった茶漬けのおかげで、人様の財布を奪う、なんてことをせずにすんだ。

虎の影におびえて、人々が安心して家のなかで眠る夜を、ひとり孤独に星を見あげながら浅い眠りについた。それが、屋根のある場所で眠ることができた。久しぶりの深い眠りで、布団に横たわりながら薫った畳の匂いが、人間としての生活を思い出させた。

ずっと着たきりだった自分に、新しい服を用意してくれた。

食事を、住居を、衣服を与えてくれた。

人心地つくことができた。束の間の平穏だった。

生きていて楽しいことなどなかった。けれども生きていたかった。生きることにしか、考えていなかった。

電話はもうした。

自分がするべきことをした。でも、どうしてだろう。心が晴れないのは。

これから自分はどうなるのだろうかというわが身の憂いよりも、これで探偵社のみんなが救われるのだろうかという不安が付きまとうって頭を離れない。

そうやって街中を歩いていたところで、顔をあげてしまったのはどうしてだろう。

初対面で「おにいさん」と親しげに声をかけてくれた、細い首に格式ばった詰襟が窮屈そうな制服姿の少年は、自分を見つけると目を細めて口許で微笑む笑顔を向けて来た。それははじめて会った時と何ら変わらない、含みのない笑顔だった。たしか、入社試験の日は、午後から学校の用事があるということ、太宰と少し話した後はもう行ってしまったらしく、会うのは今で二度目だ。

その後、ポートマフィアの襲撃に遭った。谷崎潤一郎とナオミは大怪我を負った。誰かが死んでもおかしくない状況だった。

この少年がそこに巻き込まれなかったのは本当に良かった。

彼は何も聞いていないのだろうか。こんなところにひとりでは危ない、と。

他の人たちは探偵社に集結しているらしいというのに。そういえば、太宰、織田作の姿は探偵社に見当たらなかった。どうしたのだろう。

……いや、自分がいなくなればすべて解決する。むしろ、ここにいらっしゃる方がこの少年を危険にさらすことになる。

鞆の肩紐を握りしめて、すぐ脇を通り過ぎようとしたとき、「たすけてください」

あと一拍遅ければ、駆け出しかけた足は止まらなかった。あと少し早ければ、固めたばかりの決意から何も聞かずに振りきれたかもしれない。

しかし、耳を傾けてしまった。自分に出来ること。国木田の言葉が、耳に蘇った。

結果、立ち止まり、何故か走って離れたはずの探偵社に、そう重くない買い物袋を持って戻ることになった。

助けてくれというからには見かけに反してとても重いものを持っているのだろうと思ったのだが、拍子抜けするほど軽かった。まさか、自分をからかっているのではないだろうかと少年の顔を見るも、ちょうど持っていた手に息を吹きかけているところで、その指には赤いビニールの跡が残っていた。

見ているだけで痛々しい。

もしや、この少年が持つときにだけ重くなるような、何か特別なものが入っているのではないかと勘繰ったほど。

「たすかります。おにいさん」

たすかった、などと。この少年は言うのか、自分に。こんな他人に迷惑しかかけていない自分に。

情けない。

情けないとは思ったが、この何気ない言葉を大事に思った。

この言葉に、今だけは自分が存在してもいい気がした。

そしてその言葉の後に、「あ、探偵社までおねがいます」という台詞が続いても、断ることができなかつた自分のヘタレ具合に、全自分が泣いた。これでは本末転倒……。

「——どうかした？」

目を離すとどこかへいってしまいそうな、ふわふわとした足取りに不安を覚え、道路側を歩くようにしていると、大きな目がこちらを見あげて来ていた。

大きな瞳をしているので、彼が今どこを向いているのかというのはすぐに分かつてしまう。表情にあまり出ない分、目線の動きによって彼の興味関心がどこへ向かっているのかを知るのは手がかりになるかもしれない。

「……ううん。なんでもないよ。えっと、夏梅くん」

「はい」

「いいにくいんだけどね、僕が付き合ってあげられるのは探偵社の前までなん、」

路地から腕が伸びてきて、それを何とか避ける。はっとした。ここは自分だけではない。

その手には拳銃が握られていた。白昼の日差しを浴びて、ぎらりと光る銃口。それが向いているのは自分にはなかつた。

「やめ……やめろおおおおお」

自分の発する大声にびくりと肩を震わせたまま、こちらに見開く大きな瞳。

状況について行けず、表情が変わらず固まった少年。

少年の大きな瞳の中に、手を伸ばし必死の形相の自分が映っている。それを目にして更に焦りで息が乱れる。

傷つけさせて堪るか。死なせて堪るか。

手を伸ばす。虎になつていなくても、素手でもいい。手がちぎれても、この身の痛みなど、どうでもいい。

「うおおおおおおおおおお」

絶対に。

絶対に。

建物の壁の側面を蹴って、一気に距離を詰める。

「……敦おにいさん？」

絶対に、だ！

少年の、思ったよりも軽く細い体を抱えて、放たれた銃弾の雨を潜り抜けるようにして上に上にと建物の間を跳躍する。ぐわんと腕のなかの身体がしなる。

ビルの屋上にまで跳びあがって着地。高所を吹きすさぶ強い風に耐える。

屋上に倒れ込んで、どつと心臓が音を立てるのが聞こえた。思わず胸を押さえる。自分にこんなことができたことに驚愕し、動転し……そしてうひゃあと情けない悲鳴をあげる。

両脚が虎のものになっているのを目にしていたのだ。

いや、いや、今は足の一本や二本が虎化してしまったことは放っておいてもいい。

中島敦少年の頭は、それとは違った焦りで占められていた。

先ほどの黒服の——おそらくポトマフィアの黒蜥蜴とかいう集団に襲われたことに対してだ。

彼等の前で、少年を庇い、逃亡……。

自分は、もしかしなくとも最悪手を打ってしまったのではないか。こうして探偵社の少年と共にいるところをみて、まだ手を切っていないと思われでもしかかねない——いや、そうとしか思えない状況を作ってしまったのではないか。

手足が震える。ざつと顔から血の気が引き、屋上を吹きすさぶ強風に煽られるまま倒れそうになる。

どうすれば、どうすれば……。自分に出来ること。国木田の言葉が、頭のなかを——

「敦おにいさん、だいじょうぶですか」

柔らかかのような赤味のある髪が強風であおられている。それを両手で押さえようとしていたが、その努力はあまり実を結んではない。一緒に倒れ込んでしまったものの、少年の方は体を起こしていた。その手にはまだ痛々しいビニール袋の跡がついていた。

ゆっくりとゆったりとした口調は、聞きようによつてはとても単調に聞こえる。そのため、感情の浮き沈みが少ないように感じられた。

突然、抱え上げられて高層ビルの屋上にまで急上昇させられる人の反応は、いったいどんなものが普通なのだろうと、この状況を作った元凶である自分が思わず考えってしまうくらい、この少年は落ち着いていた。

いや、そうじゃない、今は。

「怪我はない!？」

「……………ないよ?。」

怪我をしているかどうかを聞いているだけなのに、返答に間があるのは何故だろう。怪我をしているのを隠そうとしているのではなからうか。

「本当に?。」

「ほんとうに?。」

疑わしそうな目をしていたのは自覚している。けれども、少年はそれには気づいていないのか、周りをきよろきよろと見回して、ゆつたりと「ここはどこですか」と尋ねてきた。

「どっかの、ビルの屋上かな」

「ふうん。あ、買い物袋みつけ」

重みのある物が入っているせいか、風に飛ばされずにあつたのを、少年が取りに行つて中身を確認していた。そして、ちゃんとあつたのか頷く。

「ねえ、おなかすきませんか」

そういつて少年は、ビニール袋のなかから猫缶を取り出している。

食い物なら何でもいい。そう思ったことがあるのは認める。

残飯でも何でもいいと。

しかしそれは、人の食べ物ではないのでは、と妙な抵抗を覚えたのが自分でも衝撃だった。

何かを言う前に、少年は猫缶を開けていた。

「ほんとうはこのあとおゆうはんの買い物も手伝ってもらおうと思っ
てたんですけど」

「ちよ、ちよ、ちよ！ 食べちゃうの？ 本当に？」

「意外といけるかなって。敦おにいさんも、いる？」

これはとんだ食いしん坊か、と以前の自分の行動を棚にあげて思っ
てしまう。

「ぼ、僕はいいかな」

「えー、いっしょに食べましょうよ。ひとりだと渡れない信号も、みん
なで行けば渡れるよっていいですよ」

「それ赤信号のことかな?! 駄目だよ、渡っちゃー!」

もしかしたら、この少年、そうとう変わり者なのかもしれない。マ
イペース、我が道を行く……あれ、何だか最近よく関わりあった人た
ちにけっこう共通しているような。

「ちなみに君も、異能力者なのかな？」

猫缶のふたを開けようと、指を引っかけているのを眺めながら尋ね
ると、少年は事もなげに頷いた。

「うん……じゃなかった、はい」

「敬語じゃなくていいよ。そんなに年も違わないだろうし」

敬語を使い慣れていない様子に、そう口にする、細い首をひねっ
て大きな瞳を細めた。

「年すごくちがう、とおもうけど」

ひねっていた首を戻して、「じゃあ、そうする」とほほえんだ。その
幼げな表情に、三、四歳くらいい下かなと思った。

「おにいさん、これ開けてくれる？」

猫缶を差し出されて、本当に食べる気だったのかと驚く。指を引っ
かけたまま静止していたので、このまま食べないつもりかと思ってい
たのだ。しかし、差し出された猫缶のタップ部分から真っ赤な痕が指
についているのに気づいて、うわあ……と頬が引き攣る。

「ちよ、ちよつと待って。もう少ししたら、ここを降りて、何か食べに行こう……ちや、茶づけをぐ馳走するよ！」

???

???

『夏梅』とはマタタビの別名で、「なつうめ」と読む。そして猫はマタタビが好きである。

補講が終わった日にたまたま見かけた三毛猫と顔見知りになった夏梅。どうしてか夏梅についてくるようになった。何か思い当たる節も何もない。

ペットショップから出た夏梅は、猫缶がいくつか入ったビニール袋を手に提げて探偵社への道のりに行く。

谷崎兄妹と新人の中島敦がポートマフィアという集団に襲われて大怪我をしてしまったので、急遽、学生の本分である勉強——テスト週間中の夏梅が代打で出勤することになりましたとき。

給料は増えるけれども、夏梅の目の前は真っ暗——いや、父のように未来を予知してむしろ赤点減点おめめはまっかつかである。

猫缶を買ってから探偵社に向かう途中で、中島敦にばったりと顔を合わせた。

入社試験日以来、話す機会がなかったなと夏梅はにこりと笑顔を作って、話しかけた。

「たすけてください」

幸か不幸か、この中島敦少年には、こうした他に誰もいないといった助けを求める呼びかけが有効だとは知らない夏梅だったけれども、今にもどこかへ駆けだそうとしていた少年は、「た、助ける？ な、何

を？」と振り向いた。

「腕が……ええつと、びりびり？　して、うごかない」

「え!!　怪我？　さすがに僕はお医者さんじゃないから、与謝野さんとかに……」

途端に、気弱な顔になっておろおろし出す少年。

夏梅はああ、そうじゃなくてとちよつと目を伏せてから、少年の顔を見あげた。

「荷物、もつの手伝ってください？　敦おにいさん」

夏梅は、ペットショップにある八種類の猫缶を一つずつぜんぶ買ったのだ。指にビニール袋が食い込み、白くなるくらい。めちやくちや重いということはないだろうが、夏梅の筋力は脆弱なので、既に痙攣している。

もつとも、夏梅は、八種類の猫缶が陳列した下の棚二列と、上の棚一列にも種類の違う猫缶が並んでいたのを見落としていた。合計すると、だいたい三十種類くらいあっただろう。それらをすべて買おうとしていたら、持てずに右往左往する羽目になっただろうから、良かったのかもしれない。

こんな風に、らしくもなく張り切って猫缶なんてものを買ってしまった夏梅。動物に後ろをついて回られるほど懐かれるというのは生まれて初めての経験だった——という浮かれ要素があったというのも理由の一つだろう。

まあ、そもそも三年しか生きていない夏梅にとっては何もかもがだいたい真新しくはじめてのことばかりだ。

この三年の間、まま経験したことのある事柄も、あるのだけれど。

拳銃を持つ男が不自然に宙に浮いてから地面に落ちる。

妙な格好で止まった白い手には、ビニール袋の跡がついていた。

「だいじょうぶですか」

『はじめてみたよ』

だいじょうぶですか。

口数のそう多くない少年が、度々口にしてた言葉がそれだった。

茶漬けを奢ることを約束すると、ようやく猫缶をビニール袋に戻した少年が、体育座りで話しかけてきた。

「敦おにいさん、怪我したってきいたけど、だいじょうぶですか」

ああ、と合点がいった。そういうえば、片脚を千切られる大怪我をしたのだった。濃い一日で、忘れていた。怪我を負ったのが随分と昔のことのように感じる。

「はじめてのおしごと、大変なのに当たっちゃったね」

入社試験が終わって早々、仕事をするなんて、と少年はほつそりとした顎に白い指を引っかけて首をかしげている。働き者、とても思われているのだろうか。苦笑しながら、先刻のことを思い返す。

「危険が少ないものだろうって国木田さんは判断されてたんだけど、実はその依頼主がポートマフィアっていう凶悪な組織の一員で……」状況を説明すると、なかなかどうして運が悪すぎるんじゃないか。入ってしまった武装探偵社。少年の言う通り、初仕事でこの危険度。

項垂れそうになっていると、少年はははあ、と頷く。

「——ぼく、おとうさんとおなじくらい運がわるい人、はじめてみたよ」

同じくらい不運な人がいるというのか。今日体験したことでのそのようなことを言われるなんて、その人よく今まで生きてきたな、という思いがわく。

こんな命の危機に瀕したのは……孤児院では割と日常茶飯事だっただろうか？ いやいや、碌でもない。

こんなアグレッシブな命の危機は滅多になかった。

この少年の父親が少し心配になった。

他の社員の話では、彼の父親は「織田作」と呼ばれているらしいが、まだ一度も顔を合わせていない。

国木田は頼りになると言っていたし、谷崎潤一郎、ナオミ兄妹もすごい人だと口をそろえていた。何よりあの太宰が、称賛していた。

こんなにまで探偵社のみんなから慕われる「織田作」という人物は、どんな人なのだろうと思っていた。

顔を合わせないまま、自分は探偵社を辞めてしまった。

とある人物——「織田作」という人間を知らないでいるだけ。それは仕方ないことだと割り切れる。

(でも——)

孤児院育ちの自分は、親子の形を良く知らない。

この少年の父親とはどんな人なのだろう。

「織田作」という人物への興味というよりは、この少年の父親への好奇心だった。

父子という関係は、自分には程遠くて、分からない。

——父とは、いつたい、どういった存在なのだろう。

「じゃあ、敦おにいさんは、探偵のしごとはまだなんだね。それなら、乱歩さんのおしごとのおてつだいするといいよ。ほんとうにすごいから。あとで、国木田さんにたのんでみるね」

たぶん、考えているだろうけど、と白い横顔の少年は目を伏せた。中島敦は、ああ、うんと頷いて、躊躇った。自分が探偵社を辞めたことを少年に言い出せないでいた。こうして、探偵社の一員として考えてくれるのは居たたまれない。けれども、それを今告げてしまうのは、少年の心遣いを無下にしてしまうような気がして怖かった。

この少年のなかで自分は、新人探偵として仕事をこなしていくことが当たり前のように考えられている。当たり前のように、受け入れて

いる。

こうして不審な黒服の男に襲われても、こうして突然抱えられてピルの屋上に連れてこられても……。

(ふつう、もつと慌てるものだと思うんだけど……大人しい子、だなあ。探偵社の人にしてはまともそう……いや普通すぎるような)

ふと、脳裏によみがえる。

大皿が次々と割れる音。懐かしい、冷たい孤児院。

気が付いたら、自分の周りにはけたたましい音を立てて割れただらう大皿の破片が散乱していた。

大人たちから跳んできたのは叱責と平手と鞭だった。

(——って、そんなことを思い出してる場合じゃない！)

人々の平穩をぶち壊す——銃声。
数発。

「た、探偵社の方向から!？」

思わず屋上の端へと駆け寄って身を乗り出した。

ビルから、探偵社のある四階の窓が割れるのが見えた。少年に付き合って、目前まで来ていたことが幸いした……のかどうか。

これは、襲撃だ。異能者からなる武装探偵社に手を出そうなんて考える人間は限られている。最も心当たりのある組織、ポートマフィア。けれども、確かに電話したのだ。

自分は探偵社を辞める、と。

探偵社には手を出さないでほしいという意図は相手に伝わっていた。それなのに。

「なんで……! どうしてこんな」

「どうしたの?」

座り込んだ場所から顔を向けてくる少年を振り向いて、身振り手振りで状況を伝える。

そんなはずはないと思いながら、しかし目の前の光景がそれを否定

する。

「しゅ、襲撃されてるんだ！ さつき電話して、探偵社を攻撃するのはやめてるはずなのに」

それって、と少年が首を傾げる。

「相手のひとは、『うん』っていったの？」

はっとして少年を凝視する。思い返しても、電話で返答を得た記憶はない。

また、銃声が聞こえる。何か壊れる音が、ここでは細く聞こえる。ああ、ああと屋上の淵に縫りついて、拳を叩きつけた。

「どうして僕……ああもう、ここじゃ遠い。た、確かめに行かないと」
立ち上がって、目の前の光景から後ずさったときだった。

ガン、と突然金属音がなり、背後を振り向くとどたとやっ来て来る黒服の男たちが、座り込んだままだった少年の肩を荒々しく掴んで立たせると銃口をこめかみに突き付ける。

「夏梅くん!? くそっ上がって来たのか……!」

そこまで執拗に追って来るとは思わなかった。たしかに、このビルの上にいると分かって以上、のぼって来ないはずはない。ちらりと眼下を見ると、数人の黒服の男たちが見上げて来ているのが分かる。見張られていたのだ。このビルから隣の建物へと移るべきだった。あるいは人に紛れて裏口からでもこの場を去るべきだった。

(どうしよう、どうするべきなんだ? こういう時、僕はどうすれば……)

高いビルとはいえ、ここを上がれば標的がいると分かっているのなら逃すはずもない。ああ、それに気づかない自分は大間抜けだ。

上がって来ている黒服の男たちは五人。うち一人が少年を拘束している。残りは後ろで銃を構えている。あの数の銃を振り切った動くことは、おそらくできる。しかし、捕まっている少年は、たった一つの銃の引き金で命を失ってしまうだろう。

息を吸って、吐いた。

落ち着いて、落ち着いて、平静を装い、両手を挙げて話しかける、「待ってくれ」

唇を引き結んでから、目に力を入れる。

「僕が、そっちへ行く。だからその子を離せ。でないと、ここから飛び降りてやる」

ここ、の部分で、ビルの下を顎でしゃくった。落ちればさすがにひとたまりもない、と思う。

生け捕りなんだろう、と奥歯を噛みしめながらゆっくり言うと、黒服の男たちに動きがあった。

「……分かった。人虎はこっちへ来い」

ゆっくりと近づく。

強風が吹き荒れる。

いつの間にか、探偵社の方からは銃声も何も聞こえなくなっていた。震えそうになる足を叱咤して、一步また一步と近づき、あと数歩で腕を伸ばせば少年に手が届くというところ。

少年の肩を掴む男の銃口がこめかみから逸れた瞬間、地面を蹴った。少年の肩を掴む男の側頭部を蹴りつけて昏倒させる。引き離れた少年の腹に腕を回して空へ跳躍すると、自分を追って男たちの銃がこちらを向く。屋上の入り口のところへと少年を降ろした後、男たちの方へと突っ込んで行く。男たちが引き金を引くその間を潜って、足を引っかけ腹を殴って何とかあとふたりというところで、そこまでだ、と声がした。

屋上の開かれたままの入り口から、新たに黒服の男たちが少年を人

質に取っていた。

「下にいたやつら……」

ああ、もう、本当に。どうして自分はこんなに愚鈍なのだろう。全てが後手後手に回っている。

「敦おにいさん、にげて」

詰襟がきつそうに首を動かした少年がはた、と付け足す。

「たすけてくれて、ありがとう」

男に拘束されている少年の頭に、銃口が押し当てられて顔が傾く。少年は、生を諦めているかのように目を伏せながら、ありがとう、と。

それを見ているのが耐え切れずに叫んだ。

「ちがう、違うんだ！ 僕のせいで、君がこんな目に合っているんだ」
感謝されるなんておこがましい。その言葉を受け入れることなど出来なかった。

「でも、ぼくつかまってばかりだし……」

（た、確かにさつきから掴まっただけで、でも普通はそういうものだし。一般人に銃を持って武装してる人間相手に何かできるはずもない。僕だって、そっち側だった）

異能力が開花するまでは。

そして、巻き込んだのは自分だ。だから、何としてでも、彼を助けないといけない。そうでないと、いけない。

残っていた二人の男が両側から腹を蹴りつけ、頭を地面に押しさえつけてきた。

蹴り入れられた腹を押しさえ、咳き込みながら、髪を掴む男の手に押しさえられたまま、地面から少年の顔を見あげた。

少年の顔は俯いていて、でも地面に伏せている自分からはその表情がよく見えた。

「——何にも、悪くないんだよ、夏梅くんは」

涙も緊張も悲しみも怯えもない。ただ、乾いた表情。

そんな顔をする少年に、声をかけると少年は銃口を白いこめかみに当てられつつ、表情なく唇を動かした。

中島敦の目には、その少年の唇の動きよりも、もっと凶悪で残酷な動きが目の端に映った。

やめろ、と両側の腕を暴れさせようとすると、少年のこめかみに向けられた銃の引き金を、黒服の男が引いた——

「だけど、おにいさんだって、きっと悪くないよ」

少年の声が耳もとを通り過ぎていく。

パァン、と鳴ったあとの虚しい音が途切れる。

「……………ええ」

限界まで目を見開いた自分の喉から、声が漏れる。

目の前で、影が素通りした。

引き金を引いたはずの男の手が不自然に折れ曲がり、次いで宙に浮いて黒い影を作ってから地面に落ちる。

妙な格好で止まった白い手には、ビニール袋の跡がついていた。

「……………あ、えっ？」

その手の主は——

少年の、制服に包まれた細身の体躯が目の前で反転して、少年の背

後から銃を向けていた男たちを回し蹴りで一掃する。すぐ後ろが階段だったのか、ドミノ式に転げ落ちて良く悲鳴と音が聞こえた。

そして、先ほどとは打って変わってつかつかとした足取りで戻ってくる、両側から拘束してきていたふたりの男たちの顎と腹に一撃ずつ突きいれて失神させ、さらに中島敦の頭の上すれすれをいく回し蹴りによって後方へと容赦なく吹っ飛ばした。

軽くなった体に呆然としてみると、少年が蹴っ飛ばしたまま静止させていた体勢をゆっくりと解いて、手を指しのばしてきた。

「だいじょうぶですか」

「……………ええ？」

そこで中島敦は思い出す。

彼、織田夏梅は一般人でも何でもなく、異能力者であると。

???

窓ガラスが街路に散らばってきらきらと光っていた。

少年と共にビルから降り、探偵社まで戻ると、まず扉が吹っ飛んでいた。そして部屋のなかは無数の弾丸が壁を抉り、無事な窓は一つもない。夏梅は常々、窓は防弾ガラスにしたらいいと思っている。でないと、街路に落ちてしまったガラスで、タイヤがパンクしたという苦情や、歩行者にかかってけがをしたとして通報されたりと、事後処理

が大変なのだ。

夏梅はもう、この場から裸足で逃げ出したい。

いくら特別手当とはいえ、酷過ぎる。

夏梅が悪いわけでもないのに、こうして銃をぶっ放してくる非常識な輩の後始末をしなくてはならないのだ。悪い人というのは、もうちよつとそこをを考えてみてほしい。

修理代はいい。ご近所さんに謝り倒していく係りをぜひとも押し付けたい。

「あーあ。またごめんなさいごめんなさい巡りいかないといけない……」

ごめんなさい巡りではない。ごめんなさい×2巡りだ。

怒られると分かっているのに人に会いに行くというのは、つらい。特に人と接するのが苦手な人ほど、敬遠するこの仕事。けれども社会人としては、ご近所付き合いもしつかりやって行かなくてはならない。

「せんせいに怒られるのいやなのに、知らない人に怒られに行くのもつといやだあ……」

しかし、夏梅が嫌なことは他の人にとっても嫌なこと。個性とプライドの高い探偵社のメンバーは協調性というものが乏しく、社交スキルも低い。こうした社会で生きていくうえで必要な付き合いを喜ぶ人はいないため、順番なのだ。

「今回はあんたの番だからね」

与謝野が国木田に水を向けた。

国木田はくるりと反転して、夏梅の方を向いて眼鏡を押し上げる仕事をした。

「いいか、夏梅。『動揺は達人をも殺す』と師匠がいつていた。ここはひとつ、織田作を呼んでくれないか」

「……国木田さんは、今どうようしてるんじゃないです？」

ちなみに、国木田の顔には眼鏡はない。エア眼鏡直しだ。

しぶしぶ口を開いてそう言い返すと、「いいや！ まったく」と断言していた。

「——おとうさんは、きょうは用事があるんです。太宰さんと約束したんです」

友人同士の話にお邪魔するほど夏梅は物わかりが悪くはないのだ。水入らずで過ごさせてやりたい。だから、今日は駄目だ。

「約束っていつ？ そんなのしてたのか、あいつら」

「敦おにいさんの入社試験のあとです。太宰さんがおとうさんにおねがいしてってぼくと約束したんです」

夏梅がいつもに見せない頑さで言うのと、横から江戸川が割って入った。

「——まあ、まあ、いいじゃないの。ふたりが非番なのは決まってたし。それに僕には関係ないけれど、これは当番制だろう、国木田」

「はあ……確かに、乱歩さんの言うとおりです」

国木田も江戸川の言うことには逆らえないのか頷く。

「悪かったな、夏梅。俺は覚悟を決めた」

「……ぼくもついていきますよ、おかし持つのか」

やけにすつきりした顔で言う国木田に、夏梅もちよつと態度を改めておそれるおそれる控えめに申し出た。すると、先ほど涙を流していた中島敦が、手を挙げた。

「僕が行きます。僕に、できることなら」

声は震えてはいなかった。

すごいなあと夏梅は思った。夏梅は内心は駄々をこねたいほど嫌だった。

机に座ったままの江戸川が、ソーダ瓶をのぞきながら言う。

「何だか、君たちがついていくと、子どもが銃を乱射した謝罪回りみたいに誤解されそうだけどねえ」

「うっ……その通りですね、乱歩さん。おい、大丈夫だ、お前たち。

俺一人で行く」

「はじめっからそう言いなさい、情けないわねえ」

与謝野の辛辣な言葉で、国木田のごめんなさい×2巡りの件は収束がかった。

ほっとした夏梅は、隣にいる中島敦少年を見あげてにっこりと笑っ

た。

「おもったよりも、なんとなかった」

少年は目を瞬かせ息を飲んだ。

夏梅は、その目を見て思い出し、にんまりとした。

「ぼく、お茶漬け、はやくたべたいな」

白い髪の少年は、笑って頷いた、「僕も、かな」

おいしい茶漬けを期待しよう。

猫缶も、食べてみても良かったかもしれないけれど、と頭の隅で
く声が出た。

「わるい人さん」＊

思えば、妻という存在、そして我が子の誕生とは、自分にはあまりに過ぎた幸福だった。

片方を喪った今でさえ——生きて傍にいる我が子が、この世のすべてだと言えるくらいに。

???

???

妻と夏梅の三人で暮らしていた、海の近くの別荘は、夏梅と同じとある凄惨な事件の被害に巻き込まれた子どもたちのための施設として——妻の家である中村の名義ではあるが——運営されることになった。

地元住民たちの協力のもと、必要な人員と寄付金が集められ、そこは一種の共同体のようになった。

——一人息子を海難で亡くした漁師は、獲れたての新鮮な魚を子どもたちに提供し、施設の子どもが成長したあとには、働き口としての受け入れまで申し出てくれた。

——農家の老夫婦は、耕さなくなった畑をいずれ手放す場所だったからと子どもたちに譲り、昼間の農業を手伝ったときには駄賃として収穫した野菜を多めに分けてくれるようになった。

——里親を見繕うため、街の重役だった人物たちが挙こぞつて後見人名乗りを上げてくれた。

——必要最低限の筋肉しか持たない、二歳になるはずの成長した我が子を、中村家お抱えの主治医は何も言わずに診察してくれた。

あれは平凡で、平穏な、いつまでも続くかと思われた穏やかな日々のこと。

半分透ける白いカーテンが揺れる別荘の窓から眺めていた。

——漁師は夜も明けない時間帯から海へ出ていき、命がけで漁をして港へ戻ってくる。ほとんど何も獲れないときもある。潮風に髪や肌は痛み、荒い波に反射する太陽の光に焼かれながら、汗水たらして生活の糧を大海原から得てくるのだ。

潮風にたなびくカーテンを背に感じ、白紙にペンを走らせながら、土の匂いがして顔をあげると、妻が階下で応対しているのが聞こえてきた。

——年を取り、農業が難しくなってきたので、田畑を完全に放棄したり別の作物に移行したりすることで過剰生産されていた農作物の補償金が、十分に国から降りる。その補償金で、都会に行った孫に祝い金を遣り、残った金で老後を健やかに過ごしたいと話す声が。

刻一刻と様を変える波に、風に、感性が鋭敏になっていく。人の心はそれより変化するものではない。

——何処の馬の骨とも知れぬ身。出自を自分でも正確に示すことができない不詳な男。地域社会の枠組みを乱す異物。そんな自分が、警戒されていたのは知っていた。ただ甘受という名の諦観だったのかもしれない。昔からその地に根ざし、その地での役割を担っていた功労者たちは、有事となったとき、すぐに行動を起こした。こんな不確かな男を、受け入れた。

小さな変化はやがて大きな様相となる。さまざまな些事が遠ざかり、圧倒的なものに自分という矮小な人間は飲み込まれる。

——分不相応な家に入った者を誇る様々な言葉を耳にしているはずの侍医は、泰然としたまま誰に対しても態度を崩さなかった。

文字を、綴る。

傍らに日常を。

傍らに、どこまでも続く大海原を。

文字を、綴る。

潮風に手元から離れた紙片が室内の乾いた床に落ちる。一枚、また一枚。そうして床に散らばった紙片が一面を埋め尽くす——そうなる前に、いつの間にか空いたままの扉から部屋に入って来た妻が、一枚、また一枚と拾い上げて、何の説明もしていないというのに、書かれた順番通りに並べ替える。

真向かいの壁際に置かれた日陰の椅子に座って静かにそれに目を落とす。そうして読み終わると、朝の海で拾ってきた大きな貝殻を文鎮代わりに、机の端の上に重ねておかれる。それらの行動の途中に気が付くこともあれば、いつの間にか重ねられた紙片に見覚えのある貝殻が乗っていることに気が付くだけの時もある。

知らぬうちに傍にいる。

その存在に気づくも気づかぬも、関係はない。……関係は、なかった。

一方に、かけがえのない存在の気配を。

一方に、何の思惑にも捕われない大自然の揺るがなさを。

ともすれば人間よりも移ろいやすい海の様相。けれども人間よりも繊細で、広大で、寛容で、厳しい。恨みや憎しみといった人の感情さえ置き去りに、ただそこにあり続ける。

ああ——いつの間にか傍らにいた彼女はいつたいどんな姿だったろうか。今や、彼女の気配も声も仕草も遠い。刻々と変化してゆく自然の有り様よりも、自分の記憶の不確かさの方がよほど頼りにならない。

されど、綴ろう。物語を綴ろう。

文字は変わらずそこに残るのだから。

そして物語は——。

書き綴っていると、知らず落涙が紙片を濡らし、文字を滲ませた。

こんなことができるのは奇跡だと、きっと記憶のない穴の部分が知っていたのではないだろうか。自分には、こうした恵まれた時間が

与えられる資格は本当はないのではないか。——そう思うと、ペンを持つ手が止まった。

そう、あの時にペンを置いたのだ。

——今は遠い、島々の浮く海。

異能力者である自分の周りは、平穏ではいられない。

それは、年端も行かぬ、この小さな我が子でさえ変わらなかつた。骨身にしみて思い知らされた。目の前が真っ赤に染まるほど、焦りと絶望と行き場のない激情が全身を駆け抜けた。そうだ、留まってはられない。行動しろ。すべての清算をつけるために——

もう何も失う者などなく、手に入れることもしない。すべての未来を諦め、ただ一つにこの身を遂げさせる。

いらぬ。いらぬ。すべては燃え尽きたのだ。燃え残った灰が自分だ。この身はもう死んだのだ。

死んだが、動く屍なのだ。

「おきやくさん、そのままでもいいんですか」

我が子の声に思考を引き戻される。

そうか、今は入社試験中だったか。

強盗犯を「お客さん」と勘違いしている夏梅に、太宰がにこにこしながら「あれはねえ、悪い人なんだ」と説明する。

このやりとりをかたわらで聞いていると気が抜ける。

マイペースという点では、我が子とこの同僚は似ているかもしれない。

強盗犯役の国木田が、拳銃を振り回しているというのに、緊迫した空気はこのふたりの間にはない——というより、これが試験だと夏梅以外のみな知っているので無理からぬことかもしれない。

太宰とは、一年違いにこの探偵社に入った。妻の叔父である福沢諭

吉の異能力に頼り、夏梅を連れて横浜へとやってきた。その当時、夏梅は二歳になって間もなかったが、外見は異能力によつて十二歳ほどの姿に成長していた。

決定打といえることある事件のあとも、致命傷を受けた夏梅は何度か体が退行したり成長したりしていたが、今のところ数か月ほどは十五、六ほどの少年の姿のままだ。

横浜の地で十六歳の高校生「織田おだ 夏梅なつめ」として学校にやるのは最後まで悩んだものだ。

こうして心臓を鷲掴みにされるような心配の極致にある親の心など知りもしないという風に、呑気に同僚と話に興じている姿を見ると………世界は平和だと思つづくと思う。

「………わるい人のいうことをきくんですか」

笑顔のまま、太宰の顔が固まるのが分かる。微妙に空を泳ぐ目とかち合い、何かを訴えかけるそれからそつと視線を反らした。

言葉はなくとも言いたいことはなんとなく解るような気がした。

それなりの年をした見掛けだが、中身は三歳の子どものもので、どうにも物言いが直接的に過ぎる。ともすれば、的を射た言葉が、ストリートに胸に突き刺さるといふ事態も………まあ。

「銃を突きつけられている。私たちは動くことができない」

助け舟といえるのか、与謝野が両手を上げたまま状況を端的に夏梅に説明した。

役に立たない男ども、といった視線に流し見られる羽目になったが。

太宰とともに視線を避ける。

ここは女が強い。……いや、どこでも、女は強いのかもしれない。

現実逃避をしていると、自分に似ているのか似ていないのか、我が子は、強盗犯に銃を向けられているという状況下で（疑問に応えてくれる相手と見た——か？）与謝野に親しく話しかけ始めた。

「銃を向けると、みんなはうごけない？」

「時と場合による」

ケースバイケースという返答を受けた夏梅が、肩をすくめる。

あ、今面倒くさがったな、と父親の目で分かった。

「てがつかれた……下げてもいいですか、わるい人さん」

十中八九、強盗犯がどういったものか分からないのだろう。直接、許可を得にくい姿勢に、予定と違うぞという視線をいくつも向けられるが、正直なところ、分かるはずではないか。

ちよつと前まで、言葉も話せない幼児に退行したり、成長したかと思えば舌がうまく回らなかつたりで、碌に意思を伝達できたのは三年という時間のなかでここ数か月のことなのだ。成長目覚ましいとはいえ、夏梅は思っていることすべてを言語化できているわけでもないのだろうし――

「う、動くなー。動けば、他の奴らを撃つぞ」

慌てた国木田の声。

完全にアドリブだ。ちよつと予定を早めた方がいいかもしれない、と太宰に合図すると、心得たという領きが返ってきた。……大丈夫だろうか。

大人たちがそうしている間にも、夏梅の腕は限界のようだった。筋力のない腕がもう既にふるふるると痙攣していた。大きな瞳にも薄く膜がはっていた。

ぎよつとし出したのは周りだ。

当の自分といえば、くいしばる白い歯を見て、あれは永久歯なのかそれともぜんぶ親不知という括りでいいのかと疑問に思っていた。

「よし、じゃあ、その女……ではなく、ええと、その赤い髪の男、こつちにこい」

銃口が与謝野を向きかけて、こちらへ向けられるや否や、夏梅はいった、

「おーい」

緊張感のない平坦な声。聞きようによつては、やる気がないとも取られてしまいかねない。

光に反射して表情のみえない国木田の眼鏡が、ぴくりとして夏梅の方を向くのが分かった。

我が子は、夏梅は、淡々と言った。

「ぼくがひとじちになるよ」

手を挙げたまま、何の術てらいなく、てくてくと国木田の方へと向かう。ここまでは予想しえた。

断っておけば、この子は普段はこうした能動的な行動は億劫がる方だ。

いつも受け身で、あまりにも動かないので、周りが色々手を出してしまう。

そうして自分から何も行動アクションを起こさなくとも、結果をみればなんとかなってしまっているの、ますます自分では動かない。

生来の気質が、周りの環境によって助長される——悪循環だ。

とはいえ、手を出すのを辞めようとは思えないほどに、この子は不器用で不摂生な子どもだった。

まったく誰に似たのだから……と考えて、はたとまだ我が子が三歳児であることを思い出す。

まだまだ、親の手が離れない時期なのだ、本来ならば。

……大丈夫と理解していても手を伸ばしたくなる後姿をそれでも耐えて見送っている、横から声がした。

「人質って言葉、よく知ってるね、きみの子ども」

「まあ……場数、踏んでるからな」

ひそひそと太宰が話しかけてくるのに、短く返す。

首を傾げる太宰が視界の端に映る。

話を戻そう。

あの子が、人質を申し出ることまでは予想済みだった。

その後、予定を早めてやってきた変化。

手はず通り、事態に動きをもたらすため、強盗犯の背後の扉から新聞配達人がやって来る。実際は、新聞配達人という第三者に扮している探偵社の人物なのだ。

麦わら帽子が普段通りの宮沢賢治が現われた。

この時点で、予定にはないほど豪快にドアが開け放たれてはいたものだが……。

配役がおかしい。

ここは谷崎潤一郎が無難だと、太宰が推したはず。

ちらりと目を向けると、「演技力に差を設けなかったために急遽変更したのさ」とくすくすわらう。

楽しそうで、なによりだ。

目の前の寸劇はなかなかのものだった。

新聞配達です！ おやや、銃で撃たれてしまいます、あーれーと見事な役者ぶりを披露し、皆の気が緩んだ、その時だった。

宮沢賢治に向けられようと動きかけていた銃口が、国木田の手元から吹っ飛んでいた。

そして、夏梅の緩く指を丸めた手のひらが国木田の顎の下を垂直に押し上げ——その状態で静止。それは瞬く間もなく、速やかな動きで、無防備な国木田の喉が周りにいたそれぞれ者の眼前に晒される。

国木田の長身が床から軽く浮いた。

まるで時間が止まったかのよう——いや、周りが動きを止めたのだ。

声が、息が、その瞬間止まった。

夏梅がいつの間にか数歩あつたはずの距離を一息で詰め、蹴りで銃を飛ばし、手のひらの突き上げで相手を無力化した——その一連の動作をきちんと捉えた者は何人いるのだろうか。太宰が目を丸くするのが目に入り、おかしくて嘔き出しそうになった。

国木田が完全に意識のない状態でふらりと崩れるのを両手で支えようとして共倒れしかけるのを、手伝うと、大きな瞳が見上げてきた。

「だいじょうぶ、おとうさん？」

我が子の、もはや口癖のようになってこの言葉。

親として、不甲斐ないとはこういう時のことを、言うのだろう。
苦笑して、その柔らかな頭をかき混ぜた。

指に触れる髪は、幼児らしい、さらさらと繊細な髪質だった。

ああ、大丈夫だ。お前がいる限り。

——子は、己の死と再生の象徴だった。

幕間 とある新人のための長い一日
おんなじだね。

「こいつを選んだお前自身を恨むんだな」

その言葉は白髪の少年に向けられていたものだったが、妙に夏梅の耳に残った。

???
???

騒がしい彼らの中心にいるのが、中島敦だ。項垂れているので顔が見えない。その代り、中島敦の特徴的な髪色がよく見えた。

若白髪ってやつだろうか、と大叔父の霜が降りたような白頭と見比べる。年を取らずとも、白い髪の人はいららしい。それで、それは生まれた時から、白いのだろうか。

大叔父の袖をつかんで、横からそれを眺めていた。

夏梅は大叔父のように白くもないし、父のように赤くもない。わずかな記憶にしかない、母のような純粋な黒でもない。

夏梅は、ドアが閉まるまで、彼等の後姿を見送る。音を立ててドアは閉まる。

賑やかな彼らが去っていくと、探偵社はとても静かになった。

閉じきられたドアは、音を外へと追い出し、静寂を中へと連れ込んできたのかもしれない。さて、では音はいつたい外のどこへ行ったのだろう。静けさはドアの前で待っていたのだろうか。

そう上の空で想像しながら、夏梅の手は不満そうに和装の袖をぎゅうと引つ張っていた。

大叔父は反対側の掴まれている方の袖で夏梅を隠すようにして、入ってきた風から守った。

「……おんなじだね、まっしろ」

騒がしく出て行った彼らの、中心にいた白髪の少年の頭を思い出し

ながらつぶやく。

不服そうに袖を引っ張ったり、握ったりする夏梅を、大叔父は見下ろすだけで、つぶやきに応えることはない。応えを期待したわけでもなかった。

ただ、黙って聞いてくれて、そばにいただけでよかった。

(髪の毛のいろ、ぼくもまつしろ、なるかなあ)

父の赤い髪の毛のなかに、白い髪の毛の筋を見つけたことがある。夏梅はもの珍しくて宝物を見つけたみたいに見える。教えてあげた。

父は声をあげて驚くと、俺も年を取ったものだ、と白い髪を抓む夏梅の手をとってきた。こんなに大きくなるんだからな、としみじみ手を見ながら言っていたけれど、自分の手を見下ろしながらも夏梅は、三歳なんだけどなど思っていた。

そのときのことだ。夏梅が、どうして白いのと言ったら、年を取ると白くなるんだよって。若い人もときどきいるけどねって。そう聞いたのだ。

父がいれば、「あれが若いひとの白い髪？」とさっきの場で話すことができただろうけれど。

「――社長、すみません。今宜しいですか」

遠慮がちに事務の春野がやってきて、大叔父に見てもらいたい資料があることを口頭で伝える。そのやり取りを聞いて、大叔父の和装の袖から手を離れた。

大叔父と春野が部屋を出ていくようだ。控えめに目礼を寄越す春野に、にこりと顎を引いて応えた。そしてひそひそと声を潜めて話すのをちよつと目を伏せて聞いていた。傍から大叔父の気配が遠ざかる。そして、ぱたん、と事務所内の別のドアが開けられて閉まる音がした。以前お話されていた件で……ええ、そうです……それで、安井刑事から連絡がありました……あ、いいえ……なんでも新たな情報が手に入ったとのこと……ええ、一度社長にも見ていただきたくらいと。それで……と、仕事の話をする春野の言葉は、夏梅の耳には通り過ぎる。

頭に入らない、遠ざかっていく話し声もぷつりと届いてこなくな

る。

夏梅は——ドアが閉まる音は好きじゃない。夏梅を温かなところからひとりだけ締め出すみたいで。誰もいない家に帰るとき、誰もいない家を出るとき。誰も迎えてくれないし、誰も背中を見てくれない。

ふすと鼻から息を吐くと、くるりと閉まったばかりのドアに背を向ける。

……なんだかとてもつまらない。つまらないけれども、やることは毎日あって、それを毎回熟すのだ。この繰り返し。終わりは見えない。けれども、夏梅がすることは決まっている。そこに父がいるのなら。

(今日は、乱歩さんのお供かあ……)

その父も、今この場にはいないわけであるが。

かたん、と席に座ると、静けさがしみじみと感じられた。ああ、静かだ。とても静かだ。さて、どうしよう？

あまりにも静かなので、夏梅はわざとため息をついて音を立てた。それでもやっぱり静かだった。カタカタとパソコンが鳴る音が、奥の事務室から聞こえてくるくらいには。

そこには事務員が詰めている。夏梅は、このだだっ広い部屋に今はひとりきり。午後から用事があるので、合格した新人の少年を迎える彼らについて下に降りるわけにもいかない。やることがあるのだ。あと少しで完了するのだけれども……なんだか、やる気がでない。

席に座ったまましばらくぼんやりしていると、ドアが開いた。瞬いてそちらを向くと、先ほどの春野が盆を片手に入ってきてくるところだった。そうして、部屋に唯一人いる夏梅の席まで来ると、柔らかな笑顔で、緑茶の入った湯呑を机の端に置いてくれた。

さらに、橙色の茶請けの和菓子のをせた漆塗りの皿がそばに置かれた。夏梅はきよとりと目を瞬かせてそれを見る。

漆塗りのさらには橙色の和菓子のそばに、朱色の串が添えられている。竹を割って細くした串の先端はふたつに別れている。夏梅はそれを見て、絵本でデフォルメされている蛇の細長い、真っ赤な舌を思

い浮かべた。

「社長が頂き物のおすそ分けだそうですよ。夏梅君、頑張っているからって」

「大叔父さんが……？」

「ええ。お茶が熱いうちにどうぞ」

にこりと微笑む春野に、夏梅は開いた口をどう動かそうかと迷った末、自然と下がった眉につられるように唇がゆるんだ。

「ありがとうございます」

ふふふ、と柔らかく笑って、春野は事務室へと戻って行った。

使い慣れない、和菓子用の短い竹串を持つ。父は、いつも怪我をしないように、とプラスチックの先端のどがつていない小さなスプーンを出してくれる。外に出れば、見掛けにあつた対応をされる。だから、夏梅は背伸びをしてもがんばらなないと、思うのだ。

がんばりたい、と思えることだっけと大事なことだと夏梅は思った。

ちよつとがんばって、笑顔を作ってみる。何も面白いことなどないけれど、そうしたい気分だった。

しかし、あまりうまくいかない。頬が強張っていた。あまり表情を動かしていないような……。それで夏梅はああ、と気づく。

落ち込んでいたのだ、夏梅は。

わらっていても、笑っていない。

理由は分かっている、でも分からないふりをする。分かっている、それに気づいてしまうのはもつと悲しくなる予感がした。

「……おいしそうー」

努めて軽く小声で口に出してみる。よし、大丈夫そう。がんばった、がんばった。

褒めてくれる父も大叔父もないので、夏梅は自分で褒めてみた。目の前にはきれいな和菓子がある。

甘いものを食べて自分を甘やかそう、と思った。こうしてちようど良いタイミングでおいしそうなお菓子がもらえたわけであるし。

気合い、とばかりに和菓子を口にして茶を飲み、はふうと一息を吐

いてから、夏梅は自分のやることにかかった——といっても大してあるわけではない。

茶を飲みながら隣室で待機していた大叔父の傍らでこつこつと作っていた新入社員向けの書類を、確認するだけ。全てあるか、抜けがないかを五回通り確認すると、封筒の中に入れた。

もうやることなかったかなと自分の机のメモを見て、ああと思いつす。

伝えなくてはならないことがあるのだ。勤務形態と報酬について。固定休日の希望については本人に記載してもらおうとして、どうやらお金を持っていないようなので、はじめは日払い方式にするか、前払いにするかを聞こう。

午前中の今のところ、新しい依頼は入って来ていない。

細かな労働条件については、明日にでも尋ねよう。

書類の入った封筒を中島敦の席になる机において、メモをはる。

メモには入金方法についての希望についてを問う内容がある。書き慣れない文字を鉛筆で書いた後、ボールペンで清書して、消しゴムで鉛筆の跡を消す。

夏梅のつかっているメモは、赤い梅が四つ角に描かれている。何とか読める黒い文字と赤い花びらのバランスがなかなか良いのではないかとちよつと自画自賛してみる。

しかし、それも中村敦がこれを見た時の反応を想像するまでで、はたと気づいて手を止めた。

いつもならば、このメモ用紙を使うだけで、夏梅からの伝言だと分かるのだけれども、入社したての彼には誰からのものか分からないだろう。

名前と入社祝いの言葉を添えた。

メモのバランスはちよつと崩れた。今度はもつと上手くしよう。肩をすくめて反省すると、そのまま席に戻って鞆をとって肩にかけた。

午前中の夏梅の用事はこれで終わりだ。

昼休憩に入る事務の人に挨拶をして、先に失礼する。壁に手をつけて、廊下を歩き階段のところまでつくつくと、夏梅くんと声をかけられた。

顔をあげると、いつかのように首や腕にも包帯を巻き付けた人物が人の良さそうな笑みを浮かべて片手をあげていた。

中島敦の方へ他のみんななど行ったのかと思っていた。相変わらず、周りに人がいないときに話しかけてくるのだなと思いつつ、一瞬でこわばった手を壁から離して近づいた。

「……どうしたんですか」

「今朝言っただろう？ あとで話そうって」

そんなことを電話先で、この人物がいつていたのは憶えている。寝ていたところをたたき起こしてきたあの着信音を、夏梅はちよつと恨んだので。憶えているとも。

でも、約束をしたこの人物が中島敦という少年の方へ行ったと思つたものだから、あれはなかったことになつたのではと考えていた。

彼は素直と夏梅のことを称していた。

けれども、たぶん、そんなことはないと思う。

学生鞆の肩掛けの部分を、体の前で握りしめる。

「じかん、ないし……」

目を逸らしてそういうと、太宰は肩をすくめた。

「そうだろうか、きみはこれから学校へ行くんだろう？」

一拍遅れて首を捻った。自分が何か先に告げただろうかと疑問に思つた。

太宰は、大仰に腕を組み、人差し指を一つ立て、ぱちりと片目をつぶってくる。芝居がかつた仕草が、役者のようだ。

太宰の口から流暢に根拠が次々と挙げられる。

「制服はいつも通りだけど、休日は持つてこない学校指定の鞆を持つてる。中身を重そうにしていることから、これから学校で何がしかの用事がある。休日に制服で鞆を持つて登校するっていうのは、まあ自主学習か追試か補講くらいだね。でも、テスト週間だから追試はない

だろうし、きみってあまり勉強に真面目って感じじゃないから、先生が心配して時間を作った補講かな」

言い当てられて、びっくりしていると太宰は更に言った。

「補講は午後からで、時間はそんなにかからないだろう、一、二時間くらいかな。お昼時すぐに補講を始めることはないだろうから、十三時くらいがはじまりなんじゃないかい？」

「お昼の二時からだよ」

ちがう部分を訂正するために言うと、太宰はほうほうという顔をして顎に指をかけ、目をきらりと光らせる。

「おや、じゃあ時間はまだあるねえ？」

「……………あつ……………え……………えーとお……………」

ぐぐう、と言葉に詰まる。夏梅はこの流れで首を縦に振るしかできない。

首を垂れるようにひとつ頷く。顎を引いたとき、自分のつま先が見えた。こうして頭を下げると、自分が負けてしまったような気持ちになる。いやだなあ、と思いながら厭々下げるときもあるけれど——今は、こうして頭を下げてしまったことで、ほっとした。どうしてだろう。断ろうと思っていたのに。しかたなく頷いただけなのに。

そう思いながら、ほらやつぱり自分は素直ではないのだとちよつと情けなく、眉がハの字になった。

むずかしいの。

太宰の、空気をくすぐるような窃めた笑いが聞こえて、垂れていた頭を上げた。

じゃあついてきたまえとエレベーターのボタンを押す。

下からエレベーターが上がってくるのは、分度器の輪郭に沿ったように並ぶランプに標識される数字の値が徐々に大きくなっていくところからわかる。誰かいたのか、1回のところで少し止まっていたようだったが、程なくして光が次の階の数字に移っていく。

着々と値の大きくなる数字を見あげていると、同じように点灯した数字を眺めていた太宰が口をひらく。

「私はねえ……きみを嫌っているのでは決してないのだよ」

息を詰める音が聞こえた。

ここには太宰と夏梅しかいないというのに、夏梅には、その音が、自分ののどから発せられたものだったのか、それとも太宰からのものだったのか、定かには分からなかった。

「わからないよ……」

つい口から零れてしまった。それは、辺りの静けさを浮き彫りにした。唇をかみしめる。

息をするのもためらわれるような、耳の痛くなるような沈黙。授業の時間で、ときどきどうしていきなりこんなに静かになってしまったのだらうという、先生も生徒も口を開かない瞬間がある。夏梅は、その時のことを思い出して、ちよつと現実逃避を試してみた。

けれども夏梅の意識は、となりの人物に動きに気づいて引き戻される。

頭上で、開かれた口から声が辺りに響いた、

「きみのことは、むしろ——そう、たぶん、好ましく思っている」

考えをまとめるように、気持ちを整理するように、言葉に出して語っている——そんな気がした。まるで、仲の良くない相手のいいところを必死で挙げようとしている、夏梅の煮え切らない態度と似ているなあ、と感じた。それで、つまり——つまり、太宰はほんとうは、夏

梅のことをどう思いながら、今の言葉を口にしたのだろうか？

父は頷かなかつたけれども、こんな三歳児およびじゃないって思っているのではないだろうか。父は太宰とよく話している友だちのようだったけれども、太宰のほんとうの気持ちなんて、実際尋ねなければわからないではないか。

『好ましく』とは、嫌いではないという意味に感じられる。夏梅のなかにある、好きという気持ちには、到底届かないような意味で使われているように思われた。

言葉そのままの意味を受け取ってよいものか、それとも自分が感じたことをとるべきなのか。

黙っていると、太宰は番号を見あげたまま、続ける。

夏梅はもどかしく思いながら、その横顔を見ながら耳を傾けるしかなかった。

「この気持ちをも、どう表現すればいいのだろうかね」

これは、独白。

夏梅は、吾が身に降りかかるだろう、何らかの形容の言葉に備えて鞆の肩紐を握りしめていたのだが、それは予期していたものではなく、拍子抜けしてしまった。だからだろうか、夏梅はうっかり訊いてしまう。

「そんなにむずかしいの？」

好きなら好き、嫌いなら嫌い。でも、夏梅は嫌いという言葉がとても冷たく感じられるから、「好きじゃない」をよく使う。それだって気持ちはちゃんとわかるのだ。夏梅は自分が話す言葉がどんな気持ちを表しているのか、分かるのだ。けれども、最近は何からないこと——たしかに、あった。

自分はこの、父の友人である人物のことを、いったいどう思っているのだろうか、と。

それが知りたくて、夏梅は出ない答えを探るようにその横顔をじつと見た。

黒々とした太宰の瞳は依然として数字を見ている。そうして夏梅は気づく——どうして、さつきからずっと……太宰は『夏梅』を見な

いのだろう。

「そうだねえ。私にしては、珍しく悩んでいる」

夏梅をどう思っているのか分からないのなら、夏梅を見て考えようとするのではないだろうか。まるで、これでは——そう思った時、「きみは想像したことがあるかい」と太宰が首を傾けてやつと夏梅を見てきた。

しかし、何だろう、この問いかけは。夏梅はとっさに首をそのまま横に倒した。傾いた顔をそのまま見あげる。想像……。

「なにを？」

「死んだと思った相手と再会して」

想像、というからには、今から言われることはたとえ話なのだろう。

さてさて、どんなことなのだろう、と夏梅は軽い気持ちで耳を傾けたが、それは大いに失敗だとすぐに気がつく。

「……子どもまでいて、ちゃんと、らしい父親の顔をして、いまでも生きている」

生きている人を想像するのだろうか。それで、それは子どもなのか、大人なのか、女なのか男なのか……。

判定は難しいところだな、と夏梅の背中に冷たい汗が流れる。これはひよつとすると、

「本当に、意味のない夢想だと知りながらも想像したならそのまま——いやそれ以上に」

——この瞬間、夏梅は確信に近いものを抱いた。目の前のこの包帯人間がいったい何を言っているのか、理解するのは、これから学校へ行き補講を受ける問題の文章を頭に入れるよりもずっと難解なのではなかるうか、と。

「ああ『こうあったかもしれない』って姿を目にする、している」

するすると滑らかに回る太宰の舌が、言葉を紡いでいく。何度も言葉を探すように音が途切れるので、頭のなかでつながれるはずの意味もその度にぶつつんぶつつんと途切れる。そうであるから、さつき何を言ったのかその内容を忘れてしまう。するするすると抜け出ていってしまう。

そう、これはたとえ話だ。しかし……いったい、何の話をしているのだろう。誰の話をしているのだろう。夏梅の話では、きつと……ないようだ。

解っている、たとえ話だと。そのはずで、そのように太宰がいつているのだから。

『夏梅』の話ではない。

よく分からない。なんだか物言いがふわふわとしていて、太宰という人間の言葉らしくない、ような気がする。

太宰によつて口にされた単語は、文章は、難解だ。……『再会』とは、どういう単語だったろうか。国語の勉強をしないと。勉強は好きではないけれど、夏梅は、ちゃんとこの包帯だらけの人物の言葉を、理解しなくてはならないような気がした。

想像したことがあるかい、と問われたが、答えるのならば否。

夏梅は夏梅の関わりのあるごく狭い——けれども夏梅にとっては世界と等しい重要性を持つ事柄しか想像することはない。たとえば、生かすこと。けれどもそれらを口に出しはしなかった。

太宰は、夏梅の答えを待っているようには思えなかったのだ。

何も言わずに黙っていると、やはり夏梅の反応など関係なかったのか、再びエレベーターの番号を見あげて言葉が続けた。

「私が看取つたんだ。死んだと知っているんだ。でも、もしかして、生きていて、私が死んだと思っていた間もずっと生きていて……生きていたんだとすれば」

『看取つた』とは、なんだろう。見ていたということだろうか。

死んだ、知っている、生きていて、死んだ、思う、生きていて、生きていた。

幾度となく太宰の口から出てくる「死」という言葉と「生きていて」「生きていた」という言葉。太宰はこれらのことについてとても思い入れがあるようだった。

以前、太宰が、自殺を試みているというのをふとした拍子に耳にしました——そのとき以来の、夏梅の衝撃だった。

「だが、それは夢だ」

「ゆめ……?」

たとえ話なのか、夢の話なのか。それすらよくわからない。

夏梅を置いてけぼりにして、言葉は漂々と頭上の口から滑り出ている。それはどこへ行くのだろうか。その言葉は、夏梅に向かってはいないのでないだろうか？

「違^{たが}えた、幸福の延長線」

「こうふく……しあわせ?」

太宰はエレベーターの文字盤を見あげたまま、首を振る。

違う、のだろうか。

「それは悪夢でしかない。目覚めた後に、夢だったと悟るしかないのなら」

夢の話をしているのか、と理解する。……それで、いつから夢の話になっていたのだろうか。夏梅にはさっぱりだった。言語というのは難しい。

「つまらなく、ちっぽけで無意味な幻想だ」

「あんまり……」

楽しそうじゃないね、と言おうとして口をつぐむ。触れている話の内容ではなく、夏梅ということ自体が、楽しくないものかもしれない、ともとれることに思い至って怖気づいたのだ。そんな俯き加減になる夏梅のことなど、視界にも入っていないだろう、この包帯だらけの人物は、ほんの少し抑えた声で続きを口にする。

「私はね、たった一度の死に迎えられたい……けれど」

自らの命を絶たんといつも試行錯誤している人物が、「死」を尊いものとしている。

そういった思いを、夏梅は幼いなりに理解する。

「織田作が、きみと一緒にいる姿をみるとき、ああこれは夢なんじゃないかって、いつも現実味がないんだ」

エレベーターがやって来る。扉が開き、先を促される。避けられた脇を通って、先に乗り込む。

後ろから太宰も乗り込んできた。扉の前に向き直る。太宰の口からは父と自分の話が出てきた。それに一拍か二拍か遅れて気づき、

ぎよつとした夏梅は慌てて首をもたげ、夏梅より高い位置にある太宰の面を見上げた。

閉じ切ったエレベーターの扉と向かい合った父の友人は、じつとその境目を眺め——まるでこの閉ざされた狭い空間に、彼独りしか存在しないかのように、眩きを落とした。

「私はもしかしたら、この謎を永遠に解きたくはないのかもしれない——」

ボタンを押して扉が閉まる。夏梅のことがやつとこの人物の口から出てきた。けれども、先ほど感じたのとまた同じように思う。まるで、『目の前にいる夏梅のことを考えたくないようだ』と。

決して向けられない顔、交わらない視線。それなのに、その人は夏梅のすぐ傍らに佇んでいる。彼はいったい何なのだろう。何を思い、何を考えているのだろうか。どうして——夏梅を見ないのに、側にいてくれているのだろうか。分からなかった。悟れなかった。ただ、見上げるしかなかった。重苦しい空気に、夏梅は幼さ故になんとなく発言するのがためらわれるのを不思議に思っていた。

エレベーターが徐々に降下していく。もうすぐでこの閉ざされた空間が開かれ、二人っきりの重苦しい空気からも解放される。でも夏梅にはそれが少し、勿体ない気がした。

それはどうしてなのか。……父の友人と話せる機会が減多にないから？ 考え込んでみると、エレベーターが閉じてから、ただの一度も顔を向けず、視線もよこさず、語られる言葉すら独白のようだった太宰が、明確な意思を持った言葉を夏梅に向けてきた。

「でも、私はこのことを放置することなど出来ない」

その言葉は、その人の意図する意味をきちんと理解することができないものの、夏梅は厳しい響きを感じ取った。温度のない抜き身の刃のような鋭さが、どうしてだか今この瞬間に、夏梅に向けられ、宣言されているように感じられた。思わず息を飲んだ夏梅の許に、ようやくとその人物の黒い瞳が向けられる。木の幹にぼっくりと空いた洞のような黒々とした双眸が、感情のない能面のような相貌が。

目を逸らせば、夏梅を飲み込んでしまいそうだ。

それは夏梅のよく知っているもののように、感じた。

「——きみはいつたい、何者なのだろう」

太宰の言葉が、いやに、夏梅の耳に染み入った。

???

???

あいするあなたへ。

いまごろあなたはどこでなにをしているでしょうか。

わたしたちはここからうごけません。

でも、こころはいつもあなたをきにかけてやみません。

やみません。

ああ、いとしいあなたへ。

あなたはどこでなにをしているのでしょうか。

もし、わたしたちにあしがあり、うでがあり、くちびるがあるのな

ら、

あなたをそのあしでどこまでもおつて、そのりょううでであなただきしめ、そのくちびるであなたのなをよぶでしょう。

ああ、わたしたちにあしがあり、うでがあり、くちびるがあるのな
ら。

第二幕 彼岸に帰ろう side O どうしたものかな。

波打ち際の、白い泡に足を濡らしながら海辺で見上げるそれに似た、どこまでも青く広い空。

巨大な白い鯨のように悠々と浮かぶのは、入道雲だろうか。

その日は——そう。ゴールデンウィーク四日前のこと。

天候に恵まれたこの時期、世間はゴールデンウィークというまとまった休暇に、意気揚々と遠出を計画している。斯くいう自分もまたそうなのだ。

いつもよりも少し手抜きをして、カナディアン・ベーコンとスクランブル・エッグを乗せた皿を二つと、トーストした食パン三枚を朝食の支度とした。

ぼうつと黒い一滴がコップに落ちていくのを見送って、一旦湯を傾けるのを中断した。引き立ての珈琲豆の薫りを背に、居間を離れて、子どもを夢の中から呼び起こした。子どもはもそもそと布団の中から這い出るとよたよたと顔を洗いに行った。

「終わったら朝食だ」

「……………はあーい」

一拍か、二拍か遅れて聞こえる返事。まだ寝足りないらしい。

連休に入るさらに数日前である今日から、子どもに学校を休ませ、申請していた土日を含んでの長期の休みを、妻の実家へと帰省する機会にしようと計画していた。ちなみに妻は二年前に亡くなっている。気安く戻るには敷居の高い場所だ。

だが、今回は先方からの帰郷の要望があった。

さて、居間に戻り、珈琲の続きを淹れていると、机の上に出したままだったチケットが目に入った。

前もって予約していた寝台列車の優等客チケットだ。大人二人、というのを目で追って、ゆるやかに流れていった月日に瞑目し——忽ちハツとする。我が子が、それ相応の時間を経て成長してきたかのよう

に、その文字を目で見ても錯覚したので。

忘れ形見であるひとり息子を思いやる者の名は、中村作之助。

今は仕事上、旧姓を使用し——織田作之助と名乗っている。不甲斐なくも、一児の父親として男手一つで子育てに試行錯誤している、現在二十七の若輩者である。

決して若いとは云えない歳ではあるものの、部分的健忘の状態にあり、社会経験には多少の支障がある、ようだ。

この横浜の地へ転居し、義理の叔父の下で、個性的で才ある同僚の助けを得ながら、何とか仕事をこなすようになった。仕事上の枠を越え、友人という間柄になれたと思う人物もいる。

振り返り、と云っては何であるけれども、今回はこうして帰郷する機会に恵まれたのだろう。

おとうさーん、と我が子の呼び声が聞こえる。

その声は、声変りしかけている、少年のものだった。

子どもが呼んでいる。

石鹼でも切らしたのかもしれない。ぼんやりと珈琲の最後の一滴がカップに落ちるのを見送りながら「どうした」と応える。

中村作之助改め、織田作之助。特に抜きん出た才能も、誇ることのできる人格もなく、未熟で取るに足らぬ、不肖の身ではあるが、異能力を持ち、同じく異能力によって翻弄される三歳児の子どもを持つ、どこにでもいる父親である。そうであるべきで、そうあるはずなのだ。

——めまいがした。慣れた感覚だ。だが、いくら慣れていても心地よいものではない。

目を閉じると、少しはましになった気がする。

すると、瞼の裏に、黄金の飛沫が散り、どこからか猫の鳴き声が聞こえた気がした。

にやーお、と。

つられて目を開くと、我が子が扉から顔を出していた。顔を洗った後なのか、洗う前なのか、濡れてはいない。

「もう、終わったのか」

にっこりと夏梅は目を細める笑みで悪戯気にわらった。

「まーただだよ」

???

???

夏梅を残していた事務所のほうへと向かう。夏梅は他の面々に囲まれる中で宮沢賢治からそろいの麦わら帽子を一緒にかぶっているところだった。

帽子のつばに手をかけて小さく笑む姿を目にして、ふと織田作の鼻先に潮風が掠めた気がした。

「あ、織田作！　社長への挨拶は済んだのかい？」

じつと夏梅のことを見ていた太宰に間もなく見つけられて名を呼びかけられる。一拍か二拍か遅れて反応する。

不思議そうに首を傾げる太宰の仕草とは入れ違いに、夏梅がとたたた、と駆け寄ってくる。

「おとうさん、もう行くの？」

やけに生暖かい目が複数向けられている気がして、不思議だった。

向けられる視線にたじろぐ。

「そういうえば、織田作たちはどこへ行くんだい？」

「うん？……夏梅は何も言っていないのか」

太宰にそう問われ、はたと首を傾げる。夏梅を見下ろすと、麦わら帽子の奥で大きな瞳が見上げてきた。

「ねる電車にのるっていったよ」

寝台列車に乗るといっなのは間違いない。

「そうだな」

頷いて頭を撫でようとあげた手だったが、その頭に既に帽子が鎮座

していることに気づいて手を降ろす。

織田作、と国木田が呆れたように眼鏡を直す。

「夏梅を連れて妻の実家に、顔を見せようと思っっている」

「奥さんも一緒に行かれるんですか」

新人の中島敦は、織田作と夏梅が父子関係であることを既に聞かされてきているのだろう。

二十代後半の織田作と高校生の夏梅の組み合わせを見て、まず親子だとは思わない。

探偵社のだれかが説明したのだろう。面倒見のよい国木田だろうか。新人である中島敦の担当をしている太宰かもしれない。はたまた年の近い宮沢かもしれない。ともすれば、中島の部屋に泊まったという夏梅自身からだろうか。

ここにいる面々を順々にあげて考えていると、国木田が言い辛そうに、中島に向かって言う。

「織田作の奥方は、その……」

織田作は、国木田の言葉を引き取った。

それはただの事実だった。

「もう二年になる。今回は妻の彼岸も兼ねている」

「……？ ……あ……」

「おはかまいりだよ」

「ああ〜お墓参り！……え、お墓……彼岸？ 妻？ んんん?!」

夏梅の言葉を聞いて新人の少年はその顔を蒼白にした。

急に顔色が悪くなった中島敦を、夏梅が具合でも悪くなったのかと心配する

ぱつと顔を向けて死にそうな顔をする少年に、気にするなと手をあげて振った。

「中島が入ったおかげで、休みが取れるようになったんだ。感謝している」

「さくらの花をあげたかったなあ」

夏梅は人の話を聞いてというよりは、自分の頭のなかでのつながり

から話しているのだろう。

「……もう散っちゃったけど」

外の景色を思い出すように窓の外へと目を向けた夏梅は気まり悪そうに付け加える。季節外れの発言をしたのが居心地悪かったのだろう。

夏梅の言葉を受けて、その場は一部を除いて湿っぽくなった。

「——くそっなんで五月に桜は咲かない！」

「根性が足りないからかな？」

国木田が顔を歪めながら無理を叫ぶと、宮沢が顎に指を添えて首を傾げて言う。まるで今から葉だけの桜の樹木をしばきに行けば、花が咲くかもしれないと真面目に考えているような様子に見受けられたが、さすがにそれはないだろう。

場違いなのは、こんな悲愴な叫びをしたり、無邪気に口許で拳を握らせたり、顔を蒼白にしたままおろおろとしたりする面々の関心事の中心にいるはずの子は、どこかのほんとは彼らを見返していた。今にも、急に騒ぎ出してどうしたんだろう、とでも言い出しそうだ。

その場に居合わせているけれども、情情的には少し距離を置いている織田作は、そういったある種混沌とした状況に一石が投じられようとしているのに気づくことができた、「桜は——」

実にゆったりとした足取りでその人物は、混沌とした場の中心に分け入った。体の横で腕を大きく広げ、まるで役者のように滔々と嘯く。

「根性なんてものと無縁なところがいいんじゃないか。一度きりの散り際が儂げで薄命——美しい心中に似ていると私は感じるね」

太宰が自分の両腕で体を抱きしめながら芝居がかったように言い放つ。

「私も是非そんな心中をしたいものだよ。もちろん、桜のようにたおやかな女性とね！」

太宰の言葉に、夏梅が分かりやすく鼻の頭に皺を寄せる。麦わら帽子を目深にかぶって、唇を尖らせていた。

夏梅のこの反応は仕方ないとしても、太宰の台詞のおかげで、しみりとした場の空気が一気に霧散していた。ありがたいと太宰に目を向けると、片目をつぶって寄越してきた。気を回してくれていたのだと分かり、苦笑した。

心配するだろう。

麦わら帽子を深くかぶった夏梅を見て、中島敦は、まだ桜について落ち込んでいるのかと思ったのか、代わりに供える花について夏梅に話しかけていた、

「菊とかどうかな」

黄色くて、花火みたいな大きな菊を見たことがある、と両手でその大きさを示す仕草をする。夏梅は思案気な顔をしていた。

大きな花頭を細い茎で支えきろうとぐらぐらする、大輪の菊を思い浮かべる。

まさしく夏梅の頭は今、桜と菊という天秤でぐらんぐらんと揺れていることだろう。

その様子を見たのだろう眼鏡を直しながら国木田が、そして口許の辺りで握っていた拳を解いた宮沢が、考えるような顔になる。墓参りの花で、菊というのは妥当だと思っただが、

「……ありきたりだな、無難すぎるぞ」

「じゃあ向日葵とかどうでしょう？ 明るい気分になりますよ！」

「ひまわり……いいなあ」

「母御の墓前なら——麝香撫子カーネーションとかどうだ」

夏梅に向けた中島敦の言葉に、国木田と宮沢も乗って、そこは集まっているのが男児とは思えない、花の話題に和気あいあいと盛り上がっていた。田舎から来たという宮沢が草花の種類を多く知っているのはともかく、国木田も花の名をよく知っているのは、何というか意外だった。

「それもきいろいろいの？」

「いや、黄色は避けた方がいい。花言葉が『軽蔑』というからな。特に色に拘らないのなら、赤が適しているだろう。……白もまあ」といって、国木田は眼鏡を直し、言葉を切る。

夏梅は、中島の大輪の黄色い菊、宮沢が黄色い向日葵……と来て、国木田の挙げた麝香撫子カーネーションもまた黄色なのかと思っただろう。尋ねた夏梅に、博識なことに国木田は花言葉まで考慮した提案をする。意外

な側面を見た気がした。ほう、と感心していると、同じように思ったのか、ただ気になっただけなのか、中島と宮沢も自分たちの挙げた花の言葉を次々尋ねていた。

花に疎い織田作とその話題に加わらなかつた太宰とは、その和やかな輪から外れていた。

すると、太宰が背中中で両手を組み、何気ない調子で話しかけてきた。

「——それにしても、織田作は、横浜の前は奥さんの実家で過ごしていたのかい？」

「いや、実家というのは少し違う、か？」

「横浜ではなかつたんだね」

「うん？ そうだが……言つてなかつたか？」

「まあね。それでどこにいたのさ」

じつと見てくる黒い双眸を不思議に思いながら答える。

大した情報でもない。福沢に聞いた方がよほど詳しいほどだろう。

記憶がないというのはつくづく面倒だ。

「瀬戸の海街だな。割と複雑な事情があつて、とりあえず妻とはそこで暮らしていた」

「それは人に言える事情かい？」

自分でも大雑把と感じた部分に、太宰がおかしそうに訊いてきた。

弓形になつた眼は、織田作にはどこか冷静な光が宿つているように見えた気がしたが。

人に言える事情、か。

「そうだな。人には言えぬ事情というわけではない。ただ人に吹聴するような内容でも、ない」

「ふうん……それはまたお家の都合つてやつかな」

太宰がこうまで掘り下げて尋ねて来たのは意外だったが、肩をすくめてそれを流した。

そして、懐から懐中時計を取り出す。開けば、その時計の針は止まっていて、そして黒い髪が一房、蓋の内側に留めてあった。今は亡き人の遺髪だ。

それを指で撫でてから再び閉じて懐にしまう。

「はじめは横浜にいた、と思う。その後、瀬戸に……」

途端に、記憶の穴を自覚してしまい、眉間にしわを寄せて首を振る。誤魔化すように、口許に微苦笑を浮かべる、「すまない、このことは話したことはなかったな」

気遣わしげな視線が注がれていることに気づく。何か言いたげに口が開閉していた。

どうした、とその顔を覗き込もうとすると、避けられた、「太宰？」
「……いいよ、織田作。話せるときに話してくれたら、それで」

口早にそう言われ、それ以上は追及するのをやめた、「そうか」
首を傾げざるを得なかったが、自分のなかに何かを押しとどめた様子の子の太宰に、それを無理に聞き出す理由も見当たらない気がした。まあ——答えるべきことに、答えるべきか、と慎重に洞のように穴の空いた部分避けながら口を開く。

「俺には、失っている記憶がある、というのはお前も気づいていると思うが……」

他に気づかれたことはなかった。国木田にも、谷崎にも、宮沢にも、与謝野にも。ただ、太宰だけが、気付いているのだらうと、なんとなく思っていた。妙な確信だ——そう、確信なのだ。

それは——何故だ？ 思考が進む。急にいろいろなことが関連づいて、何か複数の……いや一つかもしれない、とある答えに行きつきそうになったとき、ちょうどそこにまた記憶の穴があった。ああ、辿り着けないのだ、肝心なところには。

身を乗り出してのぞけば、今以上に何かを持って行かれそうになる——そんな予感があった。それは不安になるような悪い予感ではない。ただ、そうしたならば何かを失うだろうという親切な忠告のようなものだ。

まるで何もわからない子どもが崖の下をのぞき込もうとする、その腕を、背後から引きめるようなもの。親切にも引き止めるその主の顔は背後なので見えない。

織田作のなかの何かがそうしているのだとしても、そう警告してくるものがどこから来ているのかその正体も分からない。ただ、害をな

そうとしているのではないというのが分かるだけ。

空気を揺らす窃笑が聞こえた。

目の前で太宰がくすくすと笑い、顎を上げた。

「私が、気づいているって?」

「ああ。お前ならそうだろう」

お前は聡明だからな、と太宰とは反対に目を伏せると、自然と自分の唇に苦笑がのぼった。年下のこの友人は、頭の回転が速い。そう……識っている。

記憶の何もないところから目を反らすように一度強く瞼を閉じた。それから、ゆつくりと目を開け、太宰の顔を見ると、感情の読めない黒々とした双眸がこちらを向いていた。

「すまないな、俺の勝手な想像だ。ただ——あの時のように、一人で抱え込んで突っ走らないでくれ。……心配するだろう」

といっても、俺が言っても説得力ないかもしれないが、と激昂したその時のことを思い出しながら、同じように目の前にいる太宰を見た。

こちらを見つめる、黒々とした双眸は、夏梅のものと似ていた。『約束だよ』と言って大人びた微笑を浮かべた夏梅の姿が重なる。

「夏梅から聞いた。あの日のことは……胸倉を掴んで悪かったな」

「——いつの話をしているのさ。忘れたよ、それにあの後ちゃんと奢ってくれたじゃないか」

「約束だったからな」

『かわりばんこ』だったつけ?」

「ああ。知らない内に、大きくなるものなんだな」

太宰はふふつと笑っている。

すつかり父親だな、と。

「でも、子どもはまだ三歳だよ」

「違うない」

一通り、脇に逸れた話を終えると、太宰が笑みをおさめて、答えた。先ほどの返答だ。

「——そうだね。判るよ」

ああ、そうだな、そうか、やっぱり。そんな納得の感情が胸中に広がる。多少ならずとも鎌をかけた部分があつたのだが、そうか、やはり——解るのか。

そんなところまで、理解してしまうこともないだろうに。解つてしまふのか。

もはやため息どころでは追いつかない気がした。

「……事情があつて、全てを打ち明けることはできない。情けないことだが、この件に関して俺自身、分からないことが多すぎる」

その言葉にも太宰は動じた様子はなかつた。どこをどこまで解つているのだろう。

友人の頭のなかを推し量っていると、脇に、花談義を終えた夏梅がとことこと戻ってくる。故人にくべる花についての話はひと段落ついたらしい。いつものように、腕の袖を掴んでくると、その半身を隠す。……人に囲まれて育つた割には、大きな物音や声にもびくつくし、人見知りの傾向がある夏梅を小脇に抱えながら、未だに自然な表情に見える年下の友人の顔を探るようしてみた。

（何か、なんでもいい。何か尋ねでもしてきたなら、その内容から太宰が何を考えているのかを知る手掛かりになるんだが……）

太宰はいつもと何ら変わりなく飄々とした笑みを浮かべて、砂色のコートに手をつ突つ込んでいた。こちらの視線に気づいて笑みさえ深める始末。

頭が良すぎるのも考えものだな、と嘆息する。その太宰の視線が、少し下がったような気がして、それを追つていくと、腕に掴まって半身を隠す夏梅に辿り着いた。

太宰とは反対に何も考えていない我が子を見下ろす。何を考えているのか、口にする話題ですぐに分かる。

夏梅のようにとまでは言わないが、太宰も話してくれればいいものを。

このふたりを足して半分に分つたら……いや、やめよう。とんでもない人間ができあがりそうだ。と、そこではたと気づく。

夏梅は、自分と“彼女”との子だ。つまり、自分と“彼女”を足し

て半分に分かれたのが、夏梅ということになるのだろうか。それを知る術は既に半分失われている。自分は自分のことすら解らない。そして、彼女についての記憶もまた多くはない。——自分のなかに、答えを求めてはならない。そこに何もなかったことが分かっているのなら、そこへ行ってはならない。自分のことは知って生けるだろう。しかし、彼女のことは、もう知ることすら叶わない。この破れかぶれの記憶を携え、今を生きてゆくのだ。

「……俺の記憶は穴だらけだ。俺は、俺がどういう人間なのかもはっきりとは分からない」

太宰は静かに耳を傾けていた。

なんとか、言葉にしようと思った。ゆっくりと慎重に、残っている部分の記憶を遡って口にしていく。

「最も深いところから目覚めた。そのはじまりは、知らない天井だった。そこは諭吉叔父……社長の屋敷だった」

「奥さんは社長の姪っ子さんだっけね。彼女もそこに？」

「さあ……どうだろうな。おそらく、妻もそこにいたのだと思うが」
ちようど、記憶が欠けているところ。その情報を得ることはできそうにない。

人からの伝聞で知るしかないけれども、唯一知っていそうな福沢は口を閉ざしている。

自分のなかで推測しようとしても、残っている記憶といえどひたすら暗殺していた少年期くらいのこと、それだって年を重ねるごとに自然な忘却によって霞んでくる。どうあっても、日の下でまっとうに生きていたとは思えない。そんな自分はこうして拾い上げられた。

「織田作は、社長に救われたのかい？」

救われた、という太宰の言葉に、おぼろげな記憶を思い返しながらか、苦い笑みを薄く刷いた。

「社長は俺とは何のかわりもない人だった。身元の不祥な俺を置いてくれた、そういった意味で、社長に救われたというのは間違いない」

記憶が欠けている。それは、自分という存在を根底から揺るがす。女々しいと思うが、あの当時は常に落ち着かず精神が不安定だった

た。

何もない穴に何かがあると喚いて縋ってそれしかない、記憶の洞穴を直視し続けた。それは狂人のようだっただろう。

「俺が今生きているのは、彼女のおかげだ。……それだけは解る」

彼女なしには、俺は生きていくことはないだろう、と。

軽く聞こえるように口にしたけれども、内容が内容だけに、この頭のいい太宰にどのように聞こえたかは分からない。

「——ふうん。……興味深いね。瀬戸か」

興味を引かれ着いて来たそうにしているように見えた太宰を軽い調子で誘ってみた。予約した寝台列車にはあと三つ四つほど空きがあると聞いた。当日飛び入りでも良いようだったし、今日でなくともあの静かな瀬戸の海に行く機会はいつでもあるだろう。

太宰はすこし押し黙ったあとに首を振って断った、「いや、遠慮しとくよ」

なんだどうした、と首をかしげると、太宰はその場にいた夏梅に目を向けて、僅かに残っていた眉間のしわを解いて小さく笑み、

「行っておいでよ——親子水入らずでさ」

そう言つて、包帯を巻いた腕をあげて控えめに手をあげる。

それは距離を置こうとしているように思えて、ぐつと眉を寄せる。

傍らの夏梅もまたそれが少し気がかりなようだったが、いつものように腕の袖を掴んでくると、背中に顔を隠してしまった。こうなると織田作には子の顔を見ることができないので、どう接したものかと困惑する。自分の子でなければ、もつと複雑に考えずに接することができたのかもしれない、となんとなく思う。

「時間じゃないのかい?」

太宰の声に、操られるように時計を見て慌てる。夏梅の名を呼んで、荷物を背負わせ、見知った面々と新しい顔に辞して（夏梅は手を振って）探偵社を出る。

麦わら帽子を両手で持った夏梅は、屋根のある電車のホームに一足先に降りるとくるりと振り返る。白い頬に、しつとりとした黒髪が筋

をひく。その瞬間が、何かの記憶の箱に触れた気がした。それは決して戻らないと確信できているところだった。

瞬きをするのも忘れていると、目の前の我が子が見上げてくる。

「よるにねれる電車はじめてだね、おとうさん」

大切そうに両手で麦わら帽子を胸の前で持ちながら、夏梅は黒々とした瞳を細めている。

よく知っているな、と実質は三歳にしかならない子どもの頭をくしやりと撫でて、苦笑をみられないようにする。

戻らないものに執着していると、目の前のものを取りこぼしてしまう。指にかかる、柔らかな髪を梳くようにして手を引き抜く。くしやくしやで、目にかかりそうになってしまった。夏梅は眉間にしわを寄せ、分かりやすいしかめ面になった。

「寝ながら星も見えるらしい。夜遅くまで起きていられたら、一緒に見られるな」

そう言うと、夏梅は顔を横に傾けて前髪を避けていた目を大きく見開いて、ぜつたいおこしてよ、と真顔で言った。自分で起きていられる自信はないらしい。

自己分析は出来ているようだ、とくしやくしやになってしまった髪を一房ひとふさずつ直しながら、そうだなと頷いた。

目も開かないうちの記憶も（どの程度かは分からないもの）あるというのだから、下手をしたら所々記憶を失っている自分よりもずっと記憶に残っている情報が多いのかもしれない。それは、親として情けないような、哀しいことのような、気がした。

けれども、そんな感傷を抱えていることなど、子に知られてはならないだろう。

手に持っていた旅行鞆を地面に降ろして夏梅に向き直る。

背囊リュックの肩の部分の直してやりながら、両手がふさがらないようにと頭に麦わら帽子をかぶせると、手荷物を持ってベンチに並んで座った。

あと三分ほどでくるはずの目的の電車は、夏梅の言う通り、夜間は寝台で横になることのできる列車だ。

寝台列車での移動を決めたのは、最近、我が子が電車から見える景色に興味を持っていることを知ったからだ。何に関心があるのかというのは、この夏梅に関してでは解りやすい。食事のときに話題に上るのが、そのときの夏梅の密かな流行りであるようだ。

一泊二日かけて横浜から瀬戸までの道のりを行く。

なかなか決まった休みが取れないばかりだったので、こうして思い出作りが出来ればと思っていた。

しかし、異能力者の周囲は平穩ではいられないのだということ、すっかり平和ボケして忘れていたと、この後思い知るのだった。

その日は、そう。一点の曇りもない霄おちぞらだった。

横よこに流れていく切り取られた空は青く晴れ渡っていた。雲一つない晴天に小さな飛行機が白い線を描いていく様は、夏梅が十歳くらいの姿になったばかりで描いたクレヨンの絵を織田作に思い起こさせる。

はじめは赤と黒の絵ばかり描いていた我が子が、海に連れ出したあとは水色の画用紙に白いクレヨンで一つ横に線を引いて見せてきた。

空と海——同じ景色を見ていたのでそれがすぐに分かった。

あまりに簡素な絵に、幼いながらこの子の性が相当面倒くさがりなのではと思つた瞬間だ。

そのとき、同時に安堵した。その白い線一本しかひかれていない水色の画用紙の性根さえ見透かせる無精さに。

今、我が子を抱え、不安だったあの頃のことを思い出す。

妻によく似た目鼻立ちの幼子が、無表情のまま白い画用紙を黒く塗りつぶし、赤いクレヨンをまるで花びらでも描くように叩きつけて、一枚の絵としていた。それは幼いながらあまりに凄惨な物を見てきた、経験してきたことによる心象だっただろう。

我が子が口を開いて再び言葉を紡ぐようになるまで、この子のなかに拭いきれない闇が巣食っているのではないかという不安は消えな

かった。

——いや、今でも疑っている。

この涼しげな表情の下で、いったいどんな心を抱えているのだろう、と。

この年に似合わぬ、在ってはならない憂いはないかと。

今、敷かれた線路の上を走る列車のなかを、我が子を抱えて駆けながら、異能力者であることの宿命とその行く末について、考えずにはいられなかった。

檸檬アイスだな。

内装は清潔で整っていて、それと相応しい造りの車内の通路だった。凝った装飾だが、それらは木目調の落ち着いた素材で揃えられていたので、品が失われることはなかった。はじめてとはいえ記憶にある限りではあるが、はじめての寝台列車は大きな感慨を抱かせなかったものの、高級感あるデザインがもの珍しく感じられたので、おそらくと本当にはじめてなのではないかと思われた。間接照明によつて柔らかい色合いに照らし出されている通路を、気分が弾んでいゝらしい我が子は喜び勇んで先に進んでいた。

手元の予約票にある、決められた部屋番号を探していると、前をひよこひよここと機嫌よく歩いてきた夏梅が立ち止まって振り返る。足音はほとんどない。足元に敷かれた分厚い絨毯によつて、音は最小限に吸収されていた。

夏梅の白い右手の人差し指は、扉の前の番号を指していた。さて、その子はこう云った、

「あつたよ、おとうさん」

手に持っている部屋割りの番号と見比べて確認し終わると、一つ頷いた、「そうだな」

大きな瞳がきゆうつと細められる。

「……………そうだよ」

時々、この夏梅は平然として堂々間違えることがあるので、油断ならない。

信頼していないわけではないが、信用するには信じるに値する経験の積み重ねが足りない。くしゃりと頭を掻き交せて、言葉にしない思考を誤魔化す。

やってきた列車に乗り込み、宛がわれた部屋の車窓から駅のホームを眺めた。雑多な人の波の中で、別段目を引く特徴のない、片手に花を携えた青年に目を引かれた。空いた方の手に、大きめの旅行鞆を提

げている。駅では珍しくもないその光景に目がひかれたのは、きつと花と黒髪の青年という組み合わせに既視感を覚えたからだろう。バスで同乗した青年と打って変わって普通のその青年は、ホームで待っていたらしい年配の夫婦の許へ足早に近づき、花を持つ手を振って笑顔を見せる。祖父母宅にでも帰省したのだろうか。もしかすると墓参りなのかもしれない。もしそうならば自分たちといっしょだな。そんなことを考えていると、やがて動きだした車窓はその切り取った風景を後ろへ流していった。列車はトンネルに入ったのか真っ暗になる。

「……うさん、おとうさん」

瞬いた先に、光が飛び込んでくる。目もくらむようなそれは唐突で、ふと衣服を引つ張られる感触に視線を下げると、子どもが首をもたげていた。……これは夏梅だ。そうだ成長したのだった。我に返ると、手に荷物を持ったまま、バス停の前で案山子のように突っ立っていることに気付いた。すぐ傍らに夏梅がいる。麦わら帽子を被り、背嚢を背負っている。

どういう状況なのか思い出そうとして——その答えはあつさりとした。なんとということもない、先ほど駅前で停車したバスを降りたばかりだった。ぼうつとしていたところ、夏梅がずっと声をかけ続けていたのだろう。

夏梅の問うような視線が向けられたが、頭を撫でて置くに留めた。その隙に何故自分が立ち止まっていたかと考えていると、はたとその理由を思い出した。

バスで先を譲ってきた、花を抱えた青年だ。何故だかその青年のことが頭の片隅に違和感として残っていた。それが無意識の下でもずっと気がかりだったのだ。

納得すると、自分の中で何かがつきりとした。今度は腕がひかれた。視線をやると、「時間は大丈夫？」とその大きな双眸がこちらを見上げていた。時間——時間。時間といえば、何の時間か。

視線をあたりに巡らせると、駅前の時計が、乗車予定の列車の出発時刻、一時間前を示していた。十分に余裕がある。

そのことにほつと息を吐いた。ここで何かしら夏梅に何か物を食わせなければならぬのだ。

「十分間に合う。何か食べていくか」

「いらぬ。おなかすいてない」

その言葉に、一旦閉口する。

胃の大きさにまだ慣れていない夏梅は、口の中に入れる量も、多くは受け付けない。勝手に頭が満腹であると判断してしまう。中村家の老医は、夏梅について、おそらく本当の満腹感を知らないだろうと語っていた。ただ、もう腹に入れるには不快感がするとか、食欲が失せたという感覚を、『満腹』と捉えているのだろうと。

今の夏梅が口にする『お腹が空いていない』というのは、腹に何かいれる不快さは感じないし、何かいれなくてはならない苦痛も感じないという状態だろう。腹が空いたといわないのは、積極的に口にしたいものもないということだ。

当人も気が付いていないことなので、どうしたものかと思案し——すぐにこの子が実に単純な『子ども』であることを思い出す。そうだ、まだこの子は三歳の幼児なのだ。

「そうか、せっかくそこでアイスを買ってやろうかと思ったんだが」「れもんあいす」

即答に対して、知らぬ顔をして訊き返す。

「なんだ食べるのか？ さっきはいらぬいと聞いた気がしたが」「おとうさん、それは『もうろく』ってやつだね」

しっかりと見あげてきた大きな瞳を感慨深く見返した。

「——すごいな。そんな言葉も使えるようになったのか」「すごいでしょう」

ふふんと鼻を鳴らす。生意気だなやつだ、まったくそうだ。

その語彙力の急成長に、最近は何が覚めるような思いばかりする。声音は調子づいたものだが、夏梅は、相も変わらずこれといった表情は浮かべていない。

「もつと褒めてもいいんだよ」

「あまり調子にのるなよ」

柔らかな頬をつまむ。ときどきどれぐらい柔らかいのだろうか心配になってつい力を入れてしまう。すると大抵は、その過ぎた力の強さに、大きな瞳に決壊寸前の涙をさっと溜めたかと思うと、鼻をすすって痛いと言うのだ。

「檸檬アイスだな」

「おとうさんは？」

「そうだな……。夏蜜柑味で」

「——きかんげんていだ」

「期間限定だな。いるなら分けよう。全部は駄目だ、補助食が食べられなくなるからな」

二つ分、それぞれのアイスを買って、食べながら駅へ入っていく。途中で食べ終わって出た塵をゴミ箱に捨てて駅のホームへと向かう。

エスカレーターの最後の四段を、歩いて降りていく夏梅が転ばないかを注意深く見ていると、無事に地面に着地した夏梅がくるりと振り返る。

「そうだ、それでそのとき『夏梅』の顔が——」

???

???

「……うさん、おとうさん」

肩を揺さぶられ、目が覚める。見慣れない壁を背景に、顔を覗き込んでくる、目になじんだ夏梅の『今』の姿。ここはどこで、自分は誰で、何をしていたのか。覚えのありすぎる不安感を伴う混乱から、徐々に思い出していく、そして頭から波が勢いよく引いたように覚醒する。

ここは……列車のなかだ。予約していた二人部屋に入り、荷解きをしていた。暇を持て余した夏梅が外を探検してくるというので、この部屋に一人残って作業をしていた筈で——体を見下し、自分の状態を確かめる。列車の車窓近くの寝台に腰掛け、頬杖を長時間ついていたような跡がある。どうやら、先ほどまで夢を見ていたらしい。という

ことは、そうか。

「眠って、いたのか」

寝台に腰掛け、窓枠に突いていた頬杖の握りこぶしを解くと、指の関節やら肘の骨がバキバキと音を立てた。寝落ちたのか、時間はかなり経過していたらしい。身体の節々が硬くなっていた。反対の手でまず肘を解していると、じんわりと鈍い痺れのような感覚が広がって怯む。こういうとき、強襲などがあつた場合、咄嗟に身体が動かない恐れがある。そうならないため、例え拘束されていたとしても血が通うよう、身体を少しずつ動かすものだが、どうにも気が緩んでいたらしい。

自省しながら腕を伸ばしていると、夏梅は白い頬を控えめに膨らませていた。不満を意図したものでだろうが、その顔は割と無表情だった。

少々尖った口調で夏梅は云う。

「そうだよ。ぼくが戻ってきたとき、マフラーのお兄さんが来てたのに、おとうさんが寝てるからどうしようっておもつたよ」

「マフラー？ この時期に？」

夏梅は上から下まで初夏仕様の涼しげな装いである。夏の初めとはいえ、年々暑さがいや増すばかりのこの国で、この季節にマフラーとはずいぶんと寒がりがいいたものだ。——いや、それ以前に、その人物がこの部屋にいったい何の用なのか。

「おとうさん、忘れたの？ 駅に来る前に乗ったバスにいつしよだつたよ」

至極、当たり前のように夏梅はそう云う。

「ああ……」

ただ乗り合わせただけの赤の他人の顔を覚えている。普段の言動から、薄々察してはいたが、この子は本当に、記憶力がいい。全体的にみれば、記憶力だけはいい。他はすべてが延びしろだと思う。

「……すまないな。乗り合わせた顔を覚えていなくて」

言いかけて、口をつぐむ。バスの乗客の一人ひとり覚えていてるわけではない。しかし、途中からバスに乗り込んできた花を抱えた青年

のことは記憶に残っている。無意識下では相当気になっていたらしい、と改めて実感した。

その青年は駅で一緒に下車した。混んでいる出口で、夏梅に先を譲っていた。夏梅に手を引かれて先に降りてしまった。それで、その青年は織田作たちの後の続いてバスを降りた。目を離れたつもりはなかったのだが、いつの間にか青年の姿を見失ってしまい、それが気がかりだったのだろう。

——夢にまで出てくるほどに。

「……そういえば、何で檸檬なんだ」

ふいに気になった。夏梅に、列車に乗る前に、何か冷たいものでも食べさせようと思っていたのだが、探偵社で時間を食い、太宰に云われてギリギリに飛びだして、何とか時間に間に合ったくらいなので、そうする余裕がなかった。

暑い日は子どもは熱中症に注意しなくてはならない。

だから、それも自分の気がかりだったのだろう。

しかし、何故、夢のなかで夏梅は檸檬味と云ったのだろう。

期間限定の夏蜜柑味は、付き添っていた江戸川がご当地名物ということで買って食べていたのが頭に残っていたのだろう。それは解る。けれども、夏梅は特に檸檬が好きというわけではないのに。

不思議に思っていたのが、口に出た。

すると、夏梅は首を傾げて云った。

「あれ、おとうさん起きてたの？」

夏梅はとことと自分の寝台に戻って行く。

さつきねえ、緑のマフラーに眼鏡をかけてた、お兄さんがね、と夏梅が自分の寝台の端に乗せていたものを手に取った。

織田作の目はそれに向かう。

それはまず、黄色かった。

丸い形が印象的で、とても黄色かった。

それは夏梅の五本の白い指によって掴まれて、ゆっくりと白い寝台のシートから浮く。

「これ、」

くれたんだよ、と云いかけた夏梅を遮るように、光が目には飛び込み、鼓膜が震え、血煙が上がる。そして織田作の顔に焦げた赤いものが飛び散る。煙が途絶えると、見えた先には夏梅の指が半分欠けていた。白かったそれは焼け焦げた断面を覗かせてなお鮮血を滴らせている。そしてぐらりと少年の体が傾ぐ。夏梅は――。

危ないものだ。

言葉は記憶だ、と彼女は云った。

だから、言葉を放さないで。

文字にして残し続けて。

あなたはペンを、わたしは絵筆を、それで各々の記憶の在り処としましよう、と。

夏梅の誕生の記憶を忘れた時、彼女はそう云って手を握ってくれた。

放さないで、と何度も——そう、何度も聴いたのだ。

???

???

映像は五、六秒先の未来だ。

「それを放せ、夏梅！」

呼びかけつつ、それよりも早く檸檬の形をした物体を拾う夏梅の白い五指からそれを掠め取ろうと手を伸ばす。行動を変えると、結果は変わる。その行動は、結果を変えられるものでなければならぬ。夏梅の動きの変化はそれより早いものだった。あと少しというところで、夏梅の手が悪戯につい、と後退して、織田作の手は空を掻いた。その間二秒。まるで大事なものをとられまいとからかうような幼気で愛らしささえ感じさせる挙動だった。

「やだよ」

我が子の微笑ましい笑顔で、こんなにもぞつとする感情を味わうことになろうとは、想像だにしていない。不意を突かれてすげなく断られ、喉に言葉が詰まった。……反抗期だろうか。

にこりと笑んで、夏梅は黄色い物体を持った手を横に避けるなり、びよい、とベッドの上から飛び降りて個室の端へと逃げる。小兎のように一跨ぎで移動してみせ、振り返るその顔は、どこか得意げだった。三秒。

焦りに、手足の痺れを忘れて立ち上がるうとし、がっくりと膝から力が抜けた。前のめりによろける。浅い眠りから覚めて間もない身体は、どうあつても憶えている暗殺を生業としていた若い時分とは比べ物にならない。

『寄る年波には勝てません』と内輪で福沢にそう語ったのが——こんな時だというのに、不意に思い出された。こうして閃く記憶の断片は、思考を遮る。それはまた動作にも、ほんの数瞬の後れを及ぼす。四秒。

目の前で大の大人がこけたからだろう。驚いたような顔をする夏梅の顔を通り過ぎ、地面が視界をしめる。それではいけない。どうなったのかが判らなくなる。中途半端な体勢のなかで転倒しかけながら突きだした手が、敷かれた絨毯の上につくことができた。無理な体勢から首をもたげてふり仰ぐ。中腰よりも低い体勢では、見上げるしかない。五秒。

夏梅の姿に、何かが重なった気がした。線が二重にぶれ、見たことのない表情でこちらを見下ろす夏梅の姿がおぼろげに観えて——けれども瞬きよりも早くその残像は消えうせた。

目の前の夏梅は、ここにただひとりだ。

「それは危ないものだ。こっちに渡すんだ、夏梅」

それを聞いた夏梅は、心底不思議そうにことりと小首を傾げたあと、さも可笑しなことを聞いたといった顔でわらった。

「——あぶないもの？」

見あげた先の、朗らかで——夏梅にしてはあけっぴろげな——楽しげな表情にかすかな違和感を覚えた。うっかりこけてしまった父親が、やはり無事だったと知ってまたにこにこと楽しそうな顔。反論の余地もなく、それは我が子のものだ。少々、小憎たらしい。夏梅の幼稚な悪戯っ子の振る舞いとは対照的に、ざっと全身の血の気が下がる音が耳もとで聞こえた。

間に合わないと知りながらも右手を伸ばした。爆発まであと一秒もない。

右手で黄色い物体を掴んでいた夏梅は、対面からそれを追った織田

作の右手の動きに合わせて、自分の頭部を避けて大きく腕を伸ばした。

夏梅は笑いながら、明るい色合いの玩具のような凶器を、咄嗟の体勢が低く到底届かない織田作の手をさらに逃れるように高く手を掲げた。

「おとうさんてば、ねぼすけだ、」

ね、と口の形が見えた。織田作の手から逃れるように退かれた夏梅の手は、突然の光と轟音と黒煙に巻き上げられるようにしてはじけ飛ぶ。強すぎる光が網膜へと突き刺さる。織田作は神経が張り詰めるような緊張と恐怖により、反射という人の持つ機能すら排した極致に在って、瞬き一つしなかった。

見開いた目は強烈な光と黒焦げた熱風に焼かれて、一時的に視力を失う。目を開いているはずなのに、視界は黒かったり白かったり点滅したりと忙しない。眼球が失われてしまったのか、とその時本気で考えた。目は見えずとも、尋常ではない臭い——人肉の焦げた臭いがした。

把握しなければ。捉えたくない現状も、知らなければもつと恐ろしい。

人は現実において辛いことや耐えがたいことがあると、おもむろ徐に空想に興じたり、何時もは為しない善いこと——たとえば自室の掃除などをしたりするという。けれども、それで事態が好転するわけではない。手をこまねいているばかりでは、時を逸する。つまりは現実が凡て——ということだ。

とは云え、直視したくない現実の恐ろしさというのは理解できる。頭では大口をたたいておきながら、現実では喉が震えるばかりだ。夏梅、と惑うような声が出た、と思った。しかし織田作は、自分の声が聞こえなかった。喉も焼かれたのか。真っ先に思ったのがそれで、暫くして暴力的な耳鳴りがして、突如音が戻ってきた。耳が聞こえなくなっていたのだ。すると、色の点滅ばかりでせわしい視界が正常に戻ってきて、織田作はその見える景色のなかから夏梅を探した。

夏梅は、指が吹っ飛んだ自分の右手の有り様に気が付いていないの

か、不快なのだろう両耳をそれぞれの手で押さえていた。ぽたぽたと右手の指の欠損部分から血が耳から顔に伝い、滴っている。白い頬はいつもより蒼褪めている。

煙に反応した散水機スプリンクラーから水が降り注ぐ。青白い頬はまるで石膏の像のように思え、雨を避ける屋根のない外に設置されたもの悲しい芸術品のようにも見えてしまう。しかし、命のない像とは異なり、夏梅は生きています。

生きていなければならないか、と云った、入ったばかりの新人がそう口にしていたが、それはその通りだと思った。

黒煙を手で払い除けて荒々しい足音を立てて近づくと、夏梅は顔をあげた。ひそめられた眉に、目は——閉じきっている。光に目を焼かれたのだろう。

「夏梅、怪我は……あるな」

見た目に反して凶悪な凶器であったそれは、夏梅の指二本を欠損させた。石膏像とは違い、蒼褪められても血肉の通った肉体の損傷は無残なものだ。吹き飛んだ二本の指は辺りを見回しても見つからない。見つけたとして、造形品の修復のように接着剤で固めてしまうわけにもいかない。

予見したものよりは、よほど軽い怪我で済んではいるが……はたして複数の指の欠損が、軽いけがと呼んで善いものだろうか。

自然、眉間にしわが寄ってしまう。夏梅は爆砕の瞬間、手を躰から離れた位置にしていたので他は無事だった。元凶となった黄色い物体は、名残を思わせる破片すら散らばっていない。

直接の威力を被ることは免れた夏梅は、鼓膜を殴打するような強い衝撃を受けた耳を押さえている。人としてごく普通の反応だった。

——しかし何より、普通ではないのは、このような惨事に巻き込まれることだ。

肉の薄い肩を掴み、天井から降り注ぐ水から隔てるために、上着を脱いで夏梅の頭に被せた。しばらくすれば、水は止まるだろう。

「痛いな、なつめ」

それでも、生きています。無機質な印象を与えるような見た目のせい

で、壊れやすそうに思えるが、その実、そこらの屈強な大男よりもずっとしぶといのだ。以前、水場で夏によく見かける黒光りする蟲の、神がかり的な生命力の強さになぞらえて国木田に夏梅の異能力について説明したのだが、顔を渋くして苦言を呈された。喩えが酷いということらしいかった。そうは云つても、これ以上しぶとい生物は、自分には思いつかなかったのだが。

撃たれても死にそうにない子どもだ。

死なないと、そうと判つていても、口から出たのは、みつともないほど震えた声だった。

夏梅の肩を掴んだ手は、大きな脈動が感じていた。それは織田作のものだった。

どくどくと心臓が破裂しそうなほど音を立てる。

震える手で、腕に抱えた夏梅の、欠損した右手を捕まえる。目を閉じたまま、そしておそらく間近で爆発音を聞いてしまい、聞こえなくなっているのだろう夏梅は、それでも大人しく引かれるままに手を出してきた。先ほど近づいたときに顔をあげたのは、床の振動を感じたからだろう。

表面が焼け焦げているせいか、血はそれほど流れ出てはいなかった。

「……………うさん？ おとうさん？」

薄青色の襟つきの、柔らかい木綿の襟衣シャツには、ぽたぽたと血のあとが染みを作っていた。右側の頬は、煙のせいで黒く煤けている。柔らかな髪は乱れ、目にかかりそうになっていた。腕のなかの夏梅は軽かった。まだ水を入れたバケツの方が重く感じられるだろう。

掠れた声で呼んでくる夏梅に、応える。

「ここにいる、ここにいるから。大丈夫だ、夏梅」

聞こえないのだろうか、と先ほど推測したばかりだというのに、何度も、大丈夫だと言い続けた。それでも、その言葉が届いたのか、夏梅の欠損した手から、強張っていた力が抜けた。

夏梅が目を開ける。とつさに、右手を隠した。

痛みを感じていないのは、自分が怪我をしていると気が付いていな

いせいかもしれない、と思ったからだ。
しかし、それは無用というものだったらしい。

「——みえない」

静かに、室内の雨は止んだ。

久しぶりだな。

喉で息がつまった。いや、大丈夫だ。自分だってさつきは見えなかったではないか。少しすれば視力も戻るはずだ。その、はずだ。

「……そう、か。声は、聞こえるか？」

「……」

夏梅は黙ったまま、見えない目で周りを伺おうと首を回していた。織田作もその視線を追って、室内を見回した。壁の両端に置かれた二つの寝台。壁に取り付けられた受像機テレビが真つ暗な画面のまま一つ。そして車窓から見える、流れゆく風景。シャワー室と洗面台。鏡の下に突き出た白い棚があり、コップが二つあった。ひとつは使われたもののように、逆さまにされている。そして上半身まではゆうに映せるだろう鏡を通り過ぎて、取り付け棚に仕舞われているタオルと、出入り口の引き戸になっている扉があった。視線は上がって、天井に提げられている、和紙を思わせる装飾に囲われた間接照明、とその周辺を彩る壁紙の唐草。その紺藍の模様が、夏梅が先ほど立っていた天井のところだけ黒々と煤に汚れていた。先ほどまで水を散布していた散水機は、仕事を終えたらしい。そして視線は下ろされ、夏梅の手元に戻る。右手は織田作の手によって覆われて隠されていた。

こうして織田作には一つ一つ視認できたものを、夏梅は何も見つけられなかったのか、握っている欠けた方の手を動かして掴んできた。冷たい指三本の感触しがなく、思わず肌にぞわぞわと寒気が走った。

「おとう、さん？」

覚束ない声だった。迷子になった幼子のような——いやそれはまさしく織田作自身の心境を反映したかのような、不安を伝えてくるものだった。

思わず手に力を入れてしまいそうになった。すんでのところでそれを押さえると、一つ大きく深呼吸をした。不安と焦燥が伝染しないように、心を落ち着けて。

今度は夏梅の右手に触れないよう、両腕で夏梅の躰を抱えてそつと寝台の上に横たわらせる。

夏梅は、本当に大人しいものだった。神経が一時的に麻痺して、痛みを感じないのだろうか。それは異常な状態ではあるが、痛覚が正常に戻れば、それはそれで辛い時間となる。

「大丈夫だ、夏梅。俺が何とかする」

足元に置いていた荷物を跨いで、壁際に備え付けの洗面台に行く。逆さまになっていている方のコップは、そういえば転寝する前に、自分が使ったものだった。記憶にある限り、寝台の脇のチェストの上に置いていたはずだが。……夏梅が洗って片付けたのだろうか。僅かな引つ掛かりを覚えたが、今はそんなことよりも手当てが先だった。

水を、使われていない方のコップに注いで、それを寝台の上に横になる夏梅の元へと戻る。首に手を遣り後頭部を支えると、なんとか夏梅に水を口にさせることができた。そして掛けてあったタオルを蛇口を捻って足した流水に浸す。火傷を負った右手全体を包むように巻きつけた。体温ですぐにぬるくなってしまいうだろうが。

目もやけどをおつたらしいので、壁に嵌っている小さな冷蔵庫から冷えたミネラルウォーターを取り出して、夏梅の背囊リュックのなかから取り出した手巾ハンカチを濡らした。冷たく濡れた手巾を乗せてやろうとしたのだが、夏梅の大きな瞳が未だ開きっぱなしであるのをみて、そっと目を閉じさせてからその瞼のうえに乗せてやった。

夏梅は、生きている。ほっと安堵する気持ちも何処かにはあつて、懺悔するように両手で顔を覆った。この手が、夏梅には届かなかつたということを意識すると、殊さら右手が疎ましく思え、顔から右手を降ろすと膝のうえできつく握り込んだ。

許されることではない。夏梅は、死ぬところだった。

濡れたタオルを巻き付けた指の欠けた手は、表面がしっかりと焼け焦げていた。ここには与謝野はいない。夏梅は、指が欠損したままになつてしまう。

異能力者である夏梅には、他に手段はあるけれども。

「……………いいや、医者だ。医者を呼んでくる。夏梅はここで、じつとしていろ」

聞こえていないとは知りつつも、声をかけずにはいられなかった。

ひとまずの命の危機がさつとことを確認すると、なぜという疑問が次々と湧いてきた。この状況、この時、この場所……。誰が犯人で、どのような意図があつてこれを？ 爆弾という手段が用いられているのならば、この状況を犯人は確認できる場所にいるだろう。走る列車のなかで、まさか外部者が犯人というわけでもないだろう。この列車内に、犯人はいる。

この時点で、既に誤っていたのだ。それは間もなく気づくことになることだが。

「医者を呼ぶのが先か、首謀者を捕まえるのが先か」

どちらがより安全に、迅速に事を運ぶことができるのか。

夏梅が左手をさまよわせる。それを握って、脈をはかる。それは至つて規則的で、動揺の欠片も見受けられない。

信頼されている、と感じた。買いかぶり過ぎだろうか。そうかもしれない。

単独犯ならいいが、複数人では困る。もし複数犯であれば、この狭い列車内で、一所に固まっているわけではないだろう。何らかの連絡手段を持って、逐一確認をとっているはず。であれば、此处を離れている間に、他の犯人が凶行に出ないとも限らない。傷つける相手には困らないだけの乗客がいるからだ。

単独で、敵地に殴り込むのはわけが違う。

「……久しぶりだな、一人でやるのは」

探偵社では何時もタッグを組んで、依頼に当たっていた。

現在は、夏梅もいるとはいえ、離脱せざるを得ない状況。そうでなくとも、自分が夏梅に危険にさらす選択を許容できるかと云われれば、自信は……ない。

深々とため息を吐く。

ままならないものだ。躰が二つに割けて、夏梅の傍に残る自分と、離れる自分とに分けることができたなら善いのだが。

「……………」

それはそれで、どちらが夏梅のところに残るか、揉めに揉めそうだが、自分という存在がひとりで良かった。まったく、それは本当だ。

(それに、そのような都合の異能力は持っていない)

出来ることは限られている。しかし、この状況を打破するには、おそらく万の手がある。どれが最善なのか。こうして考えている時間は有限であり、これ以上消費するのは憚られる。

今、やれることをやらなくてどうするのだろうか。考えてばかりでは、時間の浪費だ。襲撃される側というのは既に後手に回っているのだから、迅速に対応をしなくてはならない。

と、そこで不自然な点に気づいた。爆散した音は、小さくはなかった。それにしても周囲が静か過ぎはしないか。室内の散水機は正常に機能した。こうした非常事態で、警報なり列車の人員なり、こちらへ向かってきてもおかしくはないだろうに。

「どうなっているのか、か……」

ここを離れなくてはやはり、知り得ない情報だ。

夏梅の無事な方の手をようやくと放し、寝台に横たわる夏梅の躰の上に戻した。

「いい子だ。……少しだけ待っていてくれ、夏梅」

そして足元の転がっている荷物から、手になじんだ銃を組み立てて装備する。弾の替えも見直して、もう一度だけ目許に乗せた手巾をとり冷水で濡らして替えておいた。

大人しくされるままになっている夏梅は、周囲の状況を耳や肌で感じるしかない。我が子の心の内を思いやっていると、唐突に、思い出した。それは少年期で、ちよつとした仕事のミスで視覚を閉ざされた時のことだ。織田作は椅子に括りつけられ、頭には袋を被せられていた。そして、その時――

車内を揺らすような大きな音が聞こえた。同時に悲鳴が上がるのが聞こえた。隣の車両からだった。夏梅と同じ、あの黄色い物体が思い出された。

浮かびかけていた古い感傷を引きずるような記憶を振り払い、今の自分の立場を確認する。

「少し、見てくる。すぐに戻る」

声をかけるのは、自己満足だ。

警戒を解かず、武器を構えて個室を出た。後ろ手で個室の扉を静かに閉め、耳を澄ませる。すすり泣くような声や悲鳴が聞こえるもの、他は至って静か、だった。奇妙な違和感を覚える。

痛みに呻くような声を聴き、咄嗟にそちらへ向かおうとして、足元が揺れる。今度は反対側の車両からも同じように音と悲鳴が上がった。思わずその場でたたらを踏んだ。

時間差で、次々とあの黄色い物体が爆裂しているのだ、と気付く。迂闊に目が見えない夏梅をおいて離れるというのは危険だと判断した。

そしてこれは列車全体が対象になっており、異能力者を狙つての襲撃ではないとも。

一般人は次々に被害の対象になってしまう。

けれども、対処のしようはあるはずだ。

どうする、と考えた時——壁が織田作の躰に向かって突進して来た。壁にぶつかる前に何とか体勢を変えて、衝撃を最小限にする。すぐ脇の小窓からみえる景色は、一方向に流れる色でしかなくなっていた。寝台列車は、急加速を始めた。

列車内のあちこちから物が落ち、人がぶつかる悲鳴が聞こえた。夏梅の悲鳴は聞こえない。

それがよけいに悪い想像を掻きたてた。

織田作は、勢いをつけて部屋に戻ろうとした。

その足を一步、後退させた。そして振り返る。

足元に黄色い物体が転がり、それが爆発した。反身を晒して、直撃を避ける。爆風自体は大したことはない。それでも肺が圧迫され、咳き込んだ。

投げられた方を向くと、そこには緑のマフラーをし、色眼鏡をかけた男が——顔面をボロボロにして佇んでいた。青あぎを作り、瞼は大きく腫れ、鼻や口からは血を流している。顔面破壊と言っても言い過ぎではないほど損傷を受けてはいたが、その顔に見覚えがあった。福沢から渡されていた要注意の異能力者のリストの中にあつた。名前

は、梶井基次郎。世間によく知られているといった点で、特異なポトマフィアとして知られている。

(たしか、異能力は……)

考えていると、梶井はぐらりと前に倒れた。それは考えてみれば、不思議ではないほどの傷を受けているようだったので、驚くことでもなかったかもしれない。けれども、ボマーとして知名度があつた梶井であつたため、この一件の主犯であると疑いもしなかつた。

だから、半死半生の状態となつている梶井の躰が夏梅のように傾いだとき、思わず反応が遅れた。

その反応の遅れを見過ごすほど、今回の件に関わる人物は易しくはなかつた。

梶井の傾いだ躰の後ろに、少女がいた。

ゆっくりと上向く顔。口角が上がリ、にっとわらう。

黒黒とした、虚のような二つの双眸が、弓形になつて織田作を見返してくる。

もやがかかつたように、意識が朦朧としてくる。銃を持ったままの手を壁につきながら、ずるずると腰を滑らす。頭のなか、五月蠅かつた。ただただ、うるさかつた。

けたたましく警鐘が鳴る。体に染みついた本能というべきものだ。憶えていないものも含めた経験から来る「勘」——それに今まで自分は何度も救われてきた。

しかし、それを抑えるように何かは全身を覆つた。同じく織田作の中から生じて来たものだ。

耳鳴りが遠のいた。屈んでいた体勢から立ち上がる。通り過ぎた違和感は、跡形もなくなつた。

目の前のものがよく見えた。

ポトマフィアの梶井基次郎。

その後ろに立つ少女。

そう、梶井の傾いだ体の後ろに、「少女」がいた。

乗客と思しき少女は、牛乳瓶の底を思わせる分厚い眼鏡をかけていた。セーラー服姿のその少女は、眼鏡の奥で織田作を捉えると、その神経質そうな眉が下がり、まるで友人に向けるように、親しげな笑みを浮かべた。学校に通ったことはないが、こういった少女は必ず教室にひとりはいるものだと、彼女から聞いた。特徴も印象もそのままだ。

殺気も、悪意も、感じない。少女自身に特別秀でた身体能力があるとも感じられない。それはごく普通の少女だった——いや、そんなことがあり得るのか。この状況で。

思考を遮るように、今度はこの車両のどこかで爆発音が響く。

「——此処は危険だ。その男から離れ、」

梶井から離れるよう少女に告げようと近づきかけて、その分厚い眼鏡に映る何者かに気がついた。光を反射しているその眼鏡は、灰白色のコートを着込み、首には濃色の襟巻をし、帽子を目深に被っている人物を映していた。『そこ』に、いた。

ぎよつとして振り返る。生身の、その人物は車両の奥にいた。

すぐに銃を取り出せるように手元だけで確認する。距離があり、仕留めるには早打ちの技術が問われるだろう。

不審人物は、ゆっくりと手袋に覆われた指が何かを意図して指さして来る。その指は、着ぶくれている体と同じように、何枚も重ねられているのか奇妙に分厚い。不気味さが際立つ。

その指は、織田作の心臓の位置を教えるかのようにまっすぐでぶれない。——勘だ。この人物は医学の知識あるいは生物学的知識を持つている、と直感した。それほど意図された動作だった。

動機が激しい。

ひたすら、嫌な予感がした。

奇妙な、この上なく不気味なこの不明な人物の挙動から、織田作は目を外すことはできなかつた。

その人物が顎を上げる気配を見せた。

容貌を見極めようと目を眇めた織田作はその露わになった顔に自分の失態を悟る。

——その顔は、黒いガスマスクに覆われていた。

織田作は見えないはずのその顔がにこりと、優雅にわらったように錯覚した。

いつの間にか絨毯ばかりが映る視界に朦朧として目だけを動かす。自分と同じように、床に転がる、梶井の、糸の切れた傀儡人形のような姿に、疑問と、疑問と、疑問とが次々に湧きあがって、それは意味を失くすように瞼の暗闇に消えていく——

『放さないで』

霞んでいる、とも呼べない。何も見えない。瞼すら開いていないのかも知れない。しかし手はわずかに動いた。記憶と勘だ。そのふたつを頼りに、銃を打った。

——最も近い窓に。

手応えはあった。硝子が割れる音を聞いた。そして、引き戸が開く音も聞いた。

気が付いたのか。

目を開けると、見覚えのある焦げ跡が目に入った。黄色い物体が暴発した痕跡だ。つまり、この部屋は自分たちに宛がわれた客室ということだ。ここから数歩も出ていないうちに逆戻りしたわけだ。

しかし、途切れる間際の意識が曖昧だったとはいえ、自力でこの客室に戻ったとは考え難い。

自分をこの部屋に移動させたのは——何者なのか。

身じろぎしてすぐに、装備が取り外されていることに気づいた。ちらりと視線を走らせると、傍にハーネスが無造作に置かれていた。自分をここに運んだ人物には、敵意はないらしい。とすれば、夏梅くらいなものでは……。

はつとして、身を起こし目を遣った隣の寝台に——夏梅の姿は、見当たらない。脳が一気に覚醒して、躰に巻き付いていたシーツを払って靴に足をつ突っ込んだところで、がらりと引き戸が動いた。

ちらりとその一對の瞳が向けられる。

「ねぼすけだね、おとうさん」

警戒した体勢になったが、そこから何気なく表した人物に、ほっと力を抜いた。

「夏梅、気が付いたのか」

「——それ、おとうさんのほう……じゃないの？」

ええー、と眉間に僅かな皺を寄せて不服そうな顔をしながら、夏梅は返してきた。耳は聞こえるようになったらしい。そして動きからして視力も戻っているようだ。

「よかった」

夏梅はきよとんとした顔をしたが、「おとうさんがよかつたらよかつたけど」と不思議そうに呟く。その後ろ手で引き戸を閉めた。手には布がきつちりと固定して巻きつけられてあった。夏梅は手先が器用な部類ではない。負傷している片手をもう片方の手で手当てするなど、とても想像できなかつた。

……そして指は欠けたままなのだろう。隙間なく巻かれた布には、

うつすらと血が滲んでいた。

「自分で、したのか？」

首を傾げる夏梅に、それ、と目で負傷している方の手を示すと、夏梅は自分の顔の前にそれをあげてひらひらと眺めてから首を振った、「ううん」

首は、横に振られた。

会話が途切れ、しばらく考えていると夏梅が、自分の寝台ではなく、織田作の隣に腰をおろしてきた。

「誰が手当てしてくれたんだ？」

尋ねると、夏梅はなんてことないように答える。それは思いもよらない人物だった。

「緑のマフラーのお兄さん」

「……………それは、」

口ごもっていると、夏梅が布の巻かれた手を庇いながら、体の横で寝台の端を掴んだ。

お礼だつて、と淡々と云う夏梅の声を耳半分で聴きながら、今回の敵対する相手は梶井ではなかったのだろうか、と再考した。

あの場にいたのは、梶井だけではない。

そういえば、少女とガスマスクの人物はどうなったのか。少女については、一般客だろうから、行方が気になる。

そしてガスマスクの人物は、敵なのか。

それにしても、爆発物という殺傷能力の高い凶器を用いた件と、人を無力化するだけのガスを使用した先ほどの件とは、繋がらない気がした。もちろん、織田作が気を失う前に窓ガラスを割ったから、昏倒した程度で済んだだけで、実際は使用されたガスが致死性の猛毒だった可能性はある。

だが、その可能性はかなり低いように思えた。

何故なら、ガスマスクをしていた人物は執拗に、姿を隠す服装をしていた。初夏だというのに、体型が分からなくなるほど着ぶくれ、外套まで着込み、帽子は目深にかぶられ、さらに黒いガスマスクで顔は耳くらいしか見えなかった。手には手袋、足は着ぶくれた下衣に長靴

……。見えていたのは、首と耳だけだった。

致死性の毒ガスを使用していたなら、あそこまで執拗に姿を隠す必要はない。

何故なら、同じ車両にいた、少女も梶井も、織田作も、そこで死んでいた筈なのだ。

つまり、あそこまで姿を徹底して隠していたのは、昏倒性のガスでしかなかったからではないか。

はじめから殺す気はなかった——という結論が最も妥当だ。

そして意識が途切れる間際に聞いた、引き戸の開く音は——。

「おとうさんとお兄さんを運ぶの大変だった」

ぼやく夏梅に虚を突かれて、その問題が頭の脇に行った。

「梶井もここに連れてきたのか？」

「かじい？ ……顔が痛そうなお兄さんのこと？ お兄さんもけがしてたから、あっちのべつどにねかせたよ」

おとうさんはこつち、とぽんぽんと手で寝台を叩く。負傷した手で大の大人ふたりを運んだのは、相当大変だっただろう。

「おとうさんより、お兄さんのほうが先に起きて、てあてしてくれだよ。血が固まってたけど、うごいたらまたちよつと出てきたから」

「——痛いかな」

夏梅はちらりとこちらを見て、しばらくして「……いたくないよ」と云った。

「そう、か」

周りはとても静かだった。

他の状況はどうなっているのか。

織田作は、夏梅に梶井と自分のほかに、制服姿の少女とガスマスクをした人物について聞いてみた。

答えた夏梅の話によると、意識を失う間際の扉の音は、やはり夏梅のものだったらしい。

夏梅は、硝子が割れる音が急に聞こえて、慌てて部屋の外に出たが、そこには織田作と梶井が倒れているだけだったという。一つ隔てた隣の車両は見えないため、ガスマスクの人物の存在には気づかな

かった。

そして、同じ車両にいたはずの少女についてだったが――。

「少女はいなかったか？ 水兵服を着ていた十五、六くらいの年の。傍にいたと思うが」

夏梅は怪訝な顔で見あげてくる。妙な事を聞いた、という顔だ。

「すいへいふく……せーらー服？」

「そうだな」

水夫が着用しているという制服だ。海で活動するのに適した機能を備えたものだという、特徴的な襟は衣装の流行に疎い自分にも見分けがついた。確か、あの大きな襟を耳もとに立てて、海風に掻き消される号令を拾うもの……だった筈。

「せーらー服？」

「ああ」

尚も怪訝そうに、夏梅が繰り返して来た。頷いたが、何か違っただろうかと記憶を掘り返す。この作業は、慎重にしなくてはならないため、気づいたら眉間にしわが寄っていた。それを指で解していると、夏梅がもう一度繰り返す。

「ぼくは見えてないけど……そのこが、せーらー服きてたの？」

夏梅は見えていない？ ほぼノータイムで扉の音は聞こえたはずだ。あの場にいた少女を見ていないと答えた夏梅に少し引つ掛かったが、夏梅の質問に意識を向ける。

その少女は、セーラー服を着ていた。

頷いたが、この返答で満足できなかったのか、夏梅はもう一度問いかけてくる。

今度は少し考えてから答えた。

「そうだ」

夏梅は黙りこんで、なおも怪訝そうな顔で問いを重ねてくる。

口をとがらせているのが子どもらしい。

「……って、あそびにいく電車だよ、おとうさん」

「……そうだ」

遊びに行くかどうかは人に因るだろうが、夏梅の感覚では自分たち

はその部類に入るのだろうか。

「ふつうは、制服きてあそびにいかないんだよ」

「そうなのか」

夏梅は深々と頷いた。

物わがりの悪い大人に呆れたように、あるいは思い通りにならないことにむくれるように、顔をしかめた。

それにしても、この子が『ふつう』と云ったのか。知らない内に常識を具えるようになったのか。物の分別がつくようになったのは、学校という環境のおかげだろうか、それとも探偵社の面々が関わってくれたからだろうか。

「ぼくだって、きがえたでしょ」

正装として制服を着て、里帰りするのも手ではあった。しかし、郷里の人々が高校の制服を着た夏梅を見て、動揺するのではないかと思った。だから、夏梅にはプライベート用の服をわざわざ買って着せていた。

「制服は学校へ行くとき以外は着ないのか」

「……だいたいそうだよ」

なるほど、夏梅がそう云うのならそうなのだろう。

「そうか」

穏やかな気持ちになり頷くと、夏梅はじと目で睨んできた。やや険しいこの視線は何を意味するのだろうか。

それでしばらく考え直してみた。そして、今までの会話から、思い至る。

「あの少女は制服を着ていた。彼女は『あそびに』来たのではないのか」

首を傾げると、夏梅もまた同じように首をかしげてきた。

夏梅は、何か酸味を口にしたような表情だったが。

「あそびに、来たのかもしれないけど……」

眉間の皺を深くして、夏梅は口ごもる。傾けたままの目許に、前髪がかかりそうになったのをどけてやると、細めた眼を普通に開いた。大きいな、と改めて思う。

「目と、耳は、大丈夫か」

「だいじょうぶだよ。……さつきまでおとうさんのほうが床で寝てたのに」

どうやら随分と信用を無くしたらしい。一度失った信頼を回復するのは大変だ。無理難題を押し付けられたとしても、二つ返事で叶えねばなるまい。子どもというのは、時に大人よりも目が厳しい。心がかもっているか、いないかの違いを見極める眼はなかなかのものだ。「おとうさんのほうこそ、だいじょうぶなの？」

夏梅が見返して来るので、織田作なりに夏梅の云わんとするところを考えた。

躰に負傷したところはない。手足の末端はわずかに痺れるがそれだけだ。ガスはそれほど吸い込んでいないようだ。頭は先ほどまでぼうつとしていたが、それもすっかり覚めた。十分、『無事』に入るだろう。

「ああ」

「ふうーん………」

すん、と鼻を鳴らして側向いた。窓の外を向く形になっている。机に肘を預けてその横顔を眺めた。窓からは斜陽が入って来て、夏梅の顔に陰影をつくる。おかしな話かもしれないが、こうした自然の光によるものの方が、夏梅の顔に表情をつくるのが上手だと感じられた。勝手なものだな、と反省していると、夏梅が窓の外を見たまま、肩を落とした。

「制服きててのってるおんなのこはなんか……へんだよ」

そういうものなのか、と考えていると、夏梅は眉を寄せて窓の外を睨みながら不機嫌そうに云った。

「だって、どこにいくの？ この電車に乗ったままでしょ？ 寝るときはねまきにきがえると思うけど。きようはみんな、ずっとこの電車からおりないのに」

「……そうだな」

何時もより饒舌な夏梅の言葉を耳にしながら、織田作は、目も開かない頃の、むずかる夏梅の姿を思い出した。どうやって彼女はあやし

ただろう。……思い出せない。どういった時、夏梅はむずかっていただろう。機嫌が悪い時——もあつたが、それだけではなかつたように思う。

おとうさん、と夏梅が呼んだ。いつの間にかぼんやりしていた焦点を戻すと、我が子は機嫌を損ねたらしく顔をしかめた、

「おとうさん、きょうは寝てばかりだよ」

その表情に反して、声はか細く小さかった。

俯くその頭に手を乗せた。心配をかけた、というのも違う気がした。

ただ、こうして我が子に氣遣われるのが、とても不思議だった。あり得ないことで、考えたことも想像したこともない。夢に見たことさえなく、ただそれが今当たり前のように、こうして差し出される現実が、むずがゆく感じた。

「大丈夫だ」

結局のところ、この言葉が夏梅の口癖になってしまったのは、自分のせいなのかもしれない。

そう思って織田作は、口許に微笑を刻んだ。

空き部屋か。

「他の乗客たちはどうしているか分かるか？」

「ほかの……ほかのひとたちが、どうかしたの？」

話題が突拍子もなく感じたのか、怪訝そうな目がこちらを向く。

この様子では知らないようだ。あれから黄色い物体が破裂するころとはなかったのか……。

「夏梅は知らないか？ 彼方此方であの黄色い物体が爆発していたよ
うなんだが」

「ぼくはつ……あんまり気にしてなかったかな。緑のマフラーの、あ
あ、ええと梶井のお兄さんを静かにしてもらうのにおはなししてたか
ら」

首を傾げずにはいられなかった。

梶井が何者かにやられていたとはいえ、完全にこの爆発の件に関し
ての犯人ではないとは云い切れない。夏梅は梶井がポトトファイア
の一員であるという情報を知らなかった。知らされていなかった。
だからこそ、倒れている梶井も共に運んで介抱したのだろう。

……今更ながら思い至る。夏梅の様子があまりにも自然だったの
で、思いもよらなかった。梶井の目が覚めた時、夏梅に危害を加える
可能性は決して低くはなかった、ということに。

しかし、夏梅は静かにしてもらおうように話をしていたという。つま
り、それほど険悪な態度ではなかったのかもしれない。それに、あの
傷だ。暴れるにしてもそれほど大したことは出来ないはずだ。右手
を負傷しているとはいえ、無手の夏梅の強さはそれなりのもの。武闘
派の異能力者でも、身体的基础がしっかりしていない者には、まず負
けることはない……と夏梅の師範が云っていた。

「梶井が騒いだのか？」

夏梅が頷いた。どういう騒ぎをしたのか。

さも当然といった体で語る次の言葉に気をとられた。

「みんなだっつてねてるでしょう？」

「そう、なのか？」

妙に静かだとは思っていた。

だがまだ夕刻にもなっていない。

時間を意識して、やるべきことを思い出す。

荷物の中から、夏梅の補助食を取り出して手渡す。慣れたようにびりびりと包装を破いて、砕いた大豆と乾燥した果実を固めたスティック状の食料を口にする。こちらにいらなしかと訊いてくる夏梅に、首を振って断る。夏梅の言う通り、今日は寝てばかりだ。全く空腹を感じない。

この列車に乗ってから、起きている時間の方が少ない気がする。

「他の人がねてるときはしずかにしないとイケないってせんせいがいってた」

それはその通りだ。夏梅の教師は間違っていない。

保健室の先生にでも云われた言葉だろうか。

「そうだな」

気になっていたことを確認した。

「乗客は眠っているのか？」

「——ちがうの？ おとうさんもお兄さんもねむってたよ」

「それは……」

いや、しかし……そうか。

夏梅は実際に他の上客たちの様子を目で見たわけではないようだが、そう外れてはいないのかもしれない。

「あの瓦斯は、催眠性のものか」

夏梅に被害がないのは、織田作が銃を撃って窓を割ったあとにこの客室から出たからだ。

しかし、あの少女はどうなる？ うまく逃げたのだろうか？

あの黄色い爆発物を持っていたのは、梶井の物だったのだろうか。

「夏梅、あの黄色い……物体は、梶井からもらったものか」

「うーん……うん。そう、だよ」

歯切れが悪い。

「知らない人——でなくとも、よく知らない相手から、物をもらってはイケない。分かるか？」

夏梅曰く、梶井はバスで同乗していた顔見知りということになっているので、補足する。

夏梅は素直に頷いた。

「もらっちゃだめ」

「そうだ」

「……………うんと…」

伏せ気味の瞳がゆらゆらと揺れていた。

何か言いたげな、あるいは言いたいけれども憚られるといった表情だ。

何を言われても驚かない。そう心に決めて促した。

「どうした」

「それってこれからだよね？」

今、云ったのでこれからのことで間違いないだろう。頷く。

「そうだ」

夏梅は顔をあげた。

「じゃあだいじょうぶだ。……………それで、おとうさん。これ『さつき』もらったんだけど」

『さつき』であれば、今の織田作の言葉の範疇にない。

動揺して言葉に詰まったが、とりあえず先を促す。

「一応、聞こう。……………誰にだ」

「梶井のお兄さん」

爆発物を渡された人間から、再び物を受け取ったのか……………。

殺意の垣間見える贈り物を渡してきたはじめとは違い、同じ相手に怪我の手当てするくらいには立ち位置に変化があったのかもしれないが。受け取るだろうか……………？

しかし我が子は受け取った。それが問題——いや、事実だ。

「聞こう。……………これはなんだ」

目の前に映るものが、信じられなくて我が子に再度尋ねた。

「おまもり。……………はじめはもっと『ちがう』ものだっていつてたきがあるけど、そういうならそうなんだなって」

「そうか」

「そうだよ」

それは、はじめに破裂したあの黄色い物体と寸分変わらないものに、織田作の目には映った。

しかし、こうしてあの時のようには破裂していない。異能力も、それがすぐに危険を及ぼすものではないことを教えている。

織田作は静かに考えた。

「だめだった?」

「……いいや。それなら、しかたないな」

こちらを伺ってくる夏梅の頭を手のひらでかき混ぜるように撫でた。

窓の外の風景は横に流れていくが、きちんと見えた。速度はゆっくりになっていくらしい。とはいえ、飛び降りて無事に脱出できるほどではない。

「他の乗客たちが心配だ。様子を見に行こう」

連れ立って外に出ると、そこは無人であるかのように静かだったが、人の気配はいつくかした。眠っているという夏梅の言葉は正しいのだろう。死人であれば、気配はないのだから。

すぐ右の部屋は気配が感じられない。まずその部屋を見ることにした。

「御免ください。誰か居られませんか」

問いかけながら、拳銃に指をかける。我ながら、物騒だと思う。

そこから返事が来ないのは知っていた。後ろに夏梅を下がらせて、拳銃を片手に持って引き戸を開ける。そこに、半ば予想していた惨状はなかった。

「いない……空き部屋か」

拍子抜けする。いや、不謹慎だった。

人が死んでいないことに、まず安心した。眠っている間に隣室で殺人が起こっているなど……想像したくない。

夏梅を連れ立って他の部屋も順次見ていく。

結果は、無人あるいは昏倒している乗客たちがいるのみだった。

先頭車両に近い方、右隣の部屋は無人だった。人が入った形跡もな

く、おそらく予約時に空きがあつた客室なのだろう。三、四室は空いていたはずだ。太宰に勧めたのを覚えている。太宰がこの件に巻き込まれずに済んだのは幸いだ。……この場にいたのなら、と考えてしまふけれども。

思いのほか、あの年下の友人に頼っていたらしいと気づかされる。横浜へ戻った時には、酒でも差し入れよう。

左隣の部屋には、昏倒している乗客が、静かに床に倒れていた。ただ、状況が悪い方へ傾いているのを知らしめるのはそれ以外の客室で、そこに滞在していた形跡があるのに無人の部屋があつたこと。それらの部屋には、何かが爆発してそれに巻き込まれたのか寝具や内装の焦げ付きや……血の飛び散ったあとがもれなくあつた。

爆発で混乱して荷物などが落ちているほかには、爪痕も靴の踏み荒らされた後もない。中の乗客たちは抵抗なく移動した、あるいはさせられた。

「計画的なもの、なのか」

寝台の下を覗き込んでいた夏梅が、腕を伸ばして何かを掴んで顔をあげた。

「くつ、かたほうだけ落ちてるね」

子どもの小さな靴だった。紐のところになくなく血が付着している。少なくともこの子どもは移動させられた、ということだ。

親が傍にいただろうから、怪我をした子どもを抱えて移動したのかもしれない。だが、どこへ向かったのか。

黄色い凶器が猛威を振るった宿泊室には、乗客の姿は全く見えな

い。

はじめの突発的な爆発の件は、梶井以外にありえない。

だが、負傷した乗客を移動させたのは、梶井ではありえない。

ボマーとしてその名が通っている梶井が、周りの被害を気にするとうい側面があるとは考えにくい。なにより、梶井自身は半死の目に合

い、おそらく現在は逃亡を……。

「梶井の計画を、第三者が妨害しているのだとして……梶井は諦めたのか？」

夏梅、と呼び寄せると、黒目がちの瞳をこちらへ寄越してきた。

「梶井が起きた時、夏梅は外に出ていたな」

頷く夏梅に、さらに問いかける。

「梶井は、自分から外へ出ていったのか」

「うん。けがしてるよって云ったのに、行っちゃった」

逃亡したのか。

無防備だった織田作と、夏梅は見逃されたのだろうか。

「……どこに向かったか分かるか」

「そとだよ」

夏梅は、窓の外を指さした。

「電車と電車のあいだのせまいところがあつたでしょ。その窓にきいろいのおいてばーんとして、そこからそとに出ちやつた。屋根のうえを歩くおとが聞こえたよ」

正面突破ではなく、自ら抜け道を作つて移動することから、ここは既に梶井の手中から外れた状態にあるのだと確信が持てた。

しかし、屋根の上を移動していたことから、そのまま外へ身を投げ出して脱出したのではなさそうだった。車両と車両の間に足を掛けて、出来るだけ低い位置から草むらやら池やらに飛び降りるのが、最も衝撃を減らす方法だからだ。

再起不能に追い込んだ人物を恐れてか、あるいはガスのことを避けて外から移動しているか。

そうであれば、この列車で起きていることは、やはりあのガスマスクの人物が手綱を握っているのだろうか。

「とりあえず……夏梅はさつき受け取つた物を渡すんだ」

「おいてきたよ？」

「……どうした」

「ねるへや」

沈黙した末、まあいいか、とそれほど威力の強くない凶器が隣室に昏倒する乗客まで巻き込む暴発はないだろうと見当をつける。

目下の悩みは、この列車で起こっている状況が一筋縄ではいかないらしいこと、だ。

ガスマスクの人物の単独……あるいは、あの少女も一派なのかもしれない。悪名高い梶井の背後をとって無事だったのだ。なんらかの異能力を持っているのかもしれない。いくらその外見が、普通の少女に見えたとしても、だ。

だが、この介入者の意図が分からない。

もしかすれば、ポートマフィアである梶井の犯行を妨害する何者かの存在であり、その人物がこの一連の流れを左右しているのかもしれない。

善い方向に、だろうか。殺傷性のないガスを用いていたとはいえ、それだけではまだ分からない。

梶井と夏梅とは何があったのか知らないが、和解したのか。

半死の目にあわされて、逆上、という線も捨てきれない。

「瓦斯^{ガス}、か。厄介だな」

目的のわからない介入者について。偶然、梶井の犯行に巻き込まれたとは思えない。人相を徹底的に隠す変装に、何より、ガスマスクとガスを両方用意しているなど、これから何かしでかそうと計画していたと見るのが妥当だ。

ガスマスクだけ、あるいはガスだけならば、多少おかしくとも他に考えはあるが。

我が子の欠けてしまった指を視界に入れながら考えていると、我が子が振り仰いだ。

「おとうさん、にもつ取ってきていい？」

夏梅の願いに、一も二もなく頷いた。

独り占めする。

夏梅が一旦、部屋へ荷物を取りに戻るのに付き添う。

しばらくどちらの捜索を進めるかを考え込んでいると、荷物を足元に置いて静かにしていた夏梅が客室の壁に凭れながら口を開いた。

「ほんとおんなのこがいたの？ ガスマスクの人も？」

絨毯を眺めながら、淡々と問うのに、一旦思考を中断して顔をあげた。

「——ああ。ガスマスクの不審者は隣の車両にいた。だから、見えなかったのだろう」

絨毯を眺めながら、細かく動いていた視線が顔をあげる。

隣、と。夏梅が近い方の車両を指さした。

「ガスマスクの人は、こっち？」

「いや、あちらだ」

先頭車両の方だ。指さす夏梅とは、真逆の方向を目線で示す。客室の区画を越え、ラウンジにつながる直線の通路をくぐると次の車両が見える。ラウンジの奥には後方車両の出入り口が見える。硝子張りで、その向こうにガスマスクの人物はいた。

「じゃあ、おんなのこもそっち？」

「……いや、おそらくこちらだ」

夏梅が見ていないというのなら、近い車両か部屋へ隠れたのだろう。

先頭車両の方へ指差す。少女が立っていたのはあの辺りだろうか。「どっちにいくの？」

背後から攻撃されたのではひとたまりもない。相手からの殺意は皆無とは云い切れないとはいえ、凡そ低いと云えるだろう。夏梅がいるからと後回しにしている案件でもない。おそらくこの一連の出来事に、何らかの形で関わっている。

「先に、不審人物がいた車両を確認する。行けるか」

「うん。……はい、これ」

バスケットでも差し出すかのように、足元に置いていた荷物の中か

ら軽く交換弾倉を渡され、そういえば発砲した分の弾の替えがまだだったことに気づく。

「ああ、ありがとう」

布に巻かれた、数本欠けている方の手で危うげに持ち上げられている弾倉を受け取る。怪我をしているというのに、未だに右手を使い続けるのは、利き手だからだろう。痛くはない、と云うのだから。

「その荷物は持って行く心算なのか？」
「うん」

その背囊には夏梅の補助食や着替えの衣服しか入れていなかったと思うのだが、弾倉の替えが出てきたことを考えると、中身を入れ替えたのだろう。

背囊を右肩にかけて負い、云われるまま大人しくついてくる夏梅を確認すると、辺りを警戒しながら進む。

「だあれもいないね。梶井のお兄さんが『かしきりじようたい』っていったけど、しずかなのがそう？」

梶井と何の話をしたのか。

「貸し切り状態というのは、皆が利用している店や施設を、個人が許可を得て、その場の使用を独占することだ」

「どくせん」

「……そうだな、独り占めすることだ」

「ひとりじめ……」

夏梅は真顔をあげ、弁明するように口を開いた。

「ちやんとぶらんこはかわりばんこしてるよ」

「そうか。偉いな」

夏梅はそれつきり黙って静かについてきた。

通路は一本の直線で、左側が窓であるので、右側さえ警戒していればいい。突然敵が飛び出してきても良いように、拳銃を構えながら慎重に歩を進めた。想定は敵のみで良いと考えていた。善良な乗客たちは皆、催眠ガスで眠ってしまったはずだからだ。

何者にも出会わず、引き金を引くこともなく、無事に広いラウンジに着く。車両の壁の両側に統一された卓上と椅子が整然と置かれて

いた。しかし、そこにいるはずの給仕係といった列車の乗務員の姿は見られない。無論、乗客は否や。

防弾繊維ケブで編まれた香色の、夏物の上着の衣ポケットを掴んでついて来ていた夏梅が、何かに目を留めて脇を離れる。

拳銃を片手に一挺構えて、辺りのほんの少しの気配にも神経を張りつめさせつつ、夏梅を背後に庇う。ラウンジの壁際に軽い足取りで近づくと夏梅にゆっくりと後退しながら近づいて、抑えた声で問いかける。

「どうした」

「これ、何かかいてあるよ」

横目で肩口を見遣ると、そこには列車の見取り図があつた。現在地であるラウンジには赤い星がある。そこにおかしなところはない。

ぱたり、と何か落ちる音がして、すぐに目の前に目を戻して銃口を向ける。

そこには何もなかった。いや、違和感を感じて視線を滑らす。

何か、何か。

すると視界の端に何か線が降ってきた。

すぐ目の前だ。

ぱたり、とまた。

その線は、分厚い絨毯に落ちて染み込まれていった。

絨毯の色は、僅かに濃くなって円形状に染みが広がっていた。天井を見あげると——そこには血と細かな肉片がぶちまけられ、悪趣味な模様がつくられていた。その模様は、星のような形状に見えないこともない。なんてことのない日常と非日常的な光景の中に符合するものを見つけて、勝手に鳥肌が立つ。

天井に張り付いていた肉片の一部が、剥がれてぺたっと絨毯に落ちた。

呆然とした。殺意が低い？

違う。これは、残虐で猟奇的な人物の仕業だ。

夏梅、と呼びかけようとした。

「おとうさん」

壁に張り付いていた夏梅が振り返る、「これ、なんだろう」

夏梅が指さす案内図には、黒いペンで棒人間が、客室らしき小部屋とラウンジの奥の談話室らしき大部屋に書き込まれていた。

「たくさん、人みたい。あと、ここから……」

織田作の目は、ついと夏梅が指さす場所に吸い寄せられる。

ここ、と示す夏梅の布に巻かれた数本の指は、自分たちに宛がわれた客室で、そこは何も描かれていない。しかし、部屋を出た廊下からこのラウンジまで、破線で経路が描き込まれていた。

そこをついとなぞって行き、そしてラウンジの先の出入り口のところで×印が書き込まれているところで夏梅の指は静止した。

布に包まれた夏梅の指がその印に触れるか触れないか、というところで手を肉の薄い胸に戻した。

「ここにくること、だれか知ってたのかな」

眩くような夏梅の声が厭に耳に響いた。

「あっちの電車に、なにかあるのかな」

棒人間が大量に描かれている一角を見透かすように、夏梅がラウンジの奥を見た。

隔てられた壁の先に、別の車両がある。そこにガスマスクの人物はいた。

「……夏梅、お前はここで待っている」

猟奇的な天井の惨状やらを目にした後で、この先に愉快な光景が広がっているのと望みを持つほど楽観的ではない。

夏梅の肩を左手で抱えて、右手で拳銃を構えつつ、ラウンジの通路のところに促す。

ここからでは天井の凄惨な光景が目に入ってしまふのだが、一緒にこの先に行くのも、このまま一人で戻すのも心もとない。

少なくともここには人の気配はないのだ。人がいないということ、危害を加えられることもない。無人であるというのが、夏梅をここに置いておく選択に有利に傾いた。

宿泊部屋につながる通路の前に夏梅を待たせて、何かあればすぐに部屋へ逃げ込むように云いつけると、傍を離れて拳銃一挺を両手で持

ち、体の横へ下ろす。小走りで、ラウンジの奥へと向かう。

ラウンジの奥は、ガスが充満している可能性が高い。

まず、ラウンジの出入り口を開き、隣の車両へとつながる扉のガラスを割ろうと拳銃を構えたところで、ふと引掛かる。

——催眠性のガスを仕掛けてきた人物が、致死性のガスまで持っているだろうか。

この車両で使われているガスの種類。

これはこの一連の出来事を把握するための鍵である気がした。

隔てられた先、ガスが充満する車両で、何が行われているのか？

すべての窓に遮光シートが下ろされているのか、ガスが充満しているからなのか、奥の車両は薄暗く、様子を窺うことすらできそうもない。

これをしたガスマスクの人物の意図は一体何なのか。

夥しい数の描かれた黒い棒人間が、思い浮かぶ。あれが、本当の人間を表しているのなら……。

判断に躊躇していると、不意を突かれるように呼び声がした。

おとうさん、と夏梅の声だ。振り返った。当たり前の光景があると思っていた。それは裏切られた。

どさりと荷物が絨毯に落ちる音がした。

赤い花びらが宙を舞う。それは織田作の頬に触れると、微かな音を立てて形を失くした。人肌の生暖かいものが頬を伝う。

目の前で夏梅が顔を俯けさせ、血痕を辺りに散らしながら横薙ぎに倒れていく。

咄嗟に壁と夏梅との間に体を滑り込ませて、受け止めた。

「なつめー」

腕の中の我が子を見ると、左のこめかみの辺りがぱつくりと柘榴を割ったように皮膚が裂けていた。次から次へと血が零れ、あつという間に夏梅の襟衣シヤッは赤く染まる。

傷口を抑えつつ、夏梅をこのようにした相手を見極めようと視線を走らせたが、そこには誰もいなかった。気配さえない。しかし、不可

視の攻撃を受ける自らの姿を「見た」織田作は、その場から夏梅を抱えて一歩退いた。そのまま歩みを留めず、後方へ駆けだした。はじめ避けた一撃から、間をおかず次々に攻撃が迫ってくる。

異能力者に違いない。その人物は見えないだけでこの場にいるのか、それともここにはおらず、遠距離での攻撃手段を持っているのか。腕に抱えた夏梅のこめかみを抑えて、ちらりと車両の中に設置されている監視カメラの配置をざっと視認すると、一瞬だけ夏梅の体を浮かせて左腕だけで抱えると、右手でハーネスから抜き取った銃で、前方の二つのカメラ、そして振り返って後方にあつたカメラ一つのすべてを打ちぬいた。

それは一瞬のことだった。命中した弾によってカメラのレンズが壊れる音がそれぞれほぼ同時に聞こえた。そこで、織田作は拳銃を握ったまま、表情を険しくした。

無防備に浮き上がった夏梅の頭を、銃を持ったままの右手で押さえると、そのまま体勢を低くした。カウンターのテーブルよりも低い姿勢になると、その頭上を何か鞭のようなものが通り過ぎてカウンターの上を荒らしていった。

カメラから覗いて、遠距離から攻撃して来ているわけではないようだ。

見えないだけなのか。それにしても気配を全く感じない。……殺気すら。

退路を探そうとしていると——ガタン、と車両が揺れる。

猛スピードのままカーブに差し掛かったらしい。

横薙ぎの倒れていったカウンターの上的ものに倣うように、椅子やらコップなどが滑って行く。本来きちんと机上に備えられているようなものがあてどなく、上下も気にせず奔放に織田作も遠心力によって、空中を横切って行く。

身体が倒れ込みそうになるのを耐えようと低くした体勢で脚に力を入れる——と、ずるりと片脚が滑ってしまった。それが幸いしたか、紙一重で織田作の頭上を何も入っていないグラスが通り過ぎ、カウンターの脚にぶつかって砕けた。

このまま体勢が崩れるのでは拙い。慌てて手を突きだし床に触れると、そこもまたぬるりとした赤いものが広がっていた。予期した分厚い絨毯ではない感触に、僅かに怯む。

思い当たるのは、ひとつしかない。

腕の中の夏梅を見ると、その顔は紙のように白く、流れる血は目がいたくなるほど鮮やかな色をしていた。

血の温かさを夏梅の体温だと思っていたのかもしれない。その顔は流れ出た血よりもずっと温度が残っていないようだった。

「夏梅、なつめ。聞こえるか？」

蒼褪めた瞼がふると動くと、中の暗い色合いの瞳がぼんやりと織田作を見返してきた。

生きている。まだ、生きている。

夏梅の方とひざ裏に腕を回して、夏梅のこめかみを抑える。

「おいさ、しゃん、ゆ……るよ」

口の中の血を吐き出しながら告げて、ぱたりと目を閉じた夏梅に動転して手が緩む。すると瞬く間に、顔の半分は溢れ出る流血によつて真っ赤に染まった。

同時に、徐々に無視できない変化が腕の重みに掛かってくる。

脚を留めた。目の前が色で塗りつぶされていく。

壁が目の前に迫り、足で蹴つて勢いを殺す。顔をあげると、そこには物が散乱し、テーブルの端が砕け、椅子はひっくり返っている。無残な有り様だ。そこに何の影も、何の気配もない。だが、それで善かった。

少し先の未来を「見た」織田作は、見えない攻撃を避けた。

攻撃を避け続ける中で、見えないそれがどのような凶器なのかを知るには十分すぎる。

——頭部に叩き落とされたのは鉄棒の鈍器のような、硬く重いものだった。

——防弾繊維ケブラーの上着の表面を滑り、衝撃は軽減されているはずだったが、掠めた場所は打ち身になった。

頭部に振り下ろされた攻撃、脇に入った攻撃、肩に掠めた攻撃……

動いていれば攻撃などそうそう当たるものではない。

子どもの父親は、ガスが蔓延する車両の前で方向転換する。腕に抱えた小さな頭を、庇いながら低姿勢で、もと来た道を逆に疾走する。

腕の中での変化が、何よりも正常な神経を削いだ。

澱んだ空気。

客室をつつきつて、次の車両へ繋がる扉へ跳びこめるよう、使い切った弾倉を片手で抜き取って投げる。ガラゴロと何に当たるでもなく、壁にぶつかり、閉まっていた扉の前の床に転がる。動くものに反応して開かれる自動式扉の隙間を、扉の方を背にして横向きに体を滑り込ませるようにして、別車両に入る。まだ、電気は通っているようだった。真紅の絨毯に、金の唐草模様の内装、壁に取り付けられた古風な灯りが光を落としている。時代を二世紀ほど遡ったかのように錯覚する。そして、攻撃を受けるビジョンが途絶えた。

わざわざ外つ国から仕入れたらしいマホガニーの一枚扉が並んでいる。その数だけ客室がある。無人かどうかも分からない。有人だとしたら、恐ろしく静かだ。昏倒しているか、すでに息を引き取っているのか。

(気にしている余裕はないか)

すぐわきに死角となる場所があり、そこへ身を翻す。極力静かに呼吸を整える。さつきほど、物に反応して開いた自動式扉は、夏梅を抱える織田作を通すと、また少しして閉まる。壁に背中を押し付け、気配を殺す——それでもしばらく、音沙汰はない。

(追ってはこないのか)

横目で内装を見てみると、ここには目立った焼け跡などは見つからない。手入れの行き届いた絨毯は、土足で歩くのをためらわれるほど。こうして、血の匂いをまとって粗暴に踏み入ったのが、場違いに感じられる——それほど、この空間は、何事もない様相を呈していた。逆に、警戒心が吊り上がった織田作は壁際へ寄る。その際にも、周囲を確認していたが、どうやらこの車両では、あの黄色い物体が爆発といったことはないようだった。そして、不可視の敵も、何故か追ってくる様子はない。

不気味な安全地帯は、罨のようにも感じられる。しかし、悩んでいる時間はなかった。

腕の中に目を落とすと、小さな頭が見える。ちやんと異能ははたら

いたらしい。

だが、この状態では、夏梅はまともに動けない。今のうちに夏梅を隠せる場所を探さなければ。今や片手でも抱えられるほどの縮んでしまっていた。血を含んだ前髪は、黒々と濡れている。顔は少し伸びた髪によつて隠れてしまっていた。

どこか、見つかりにくく安全なところがいい。血はもう滴つてはいない。しかし自衛ができる状態でないことは火を見るよりも明らかだった。

ざつと目だけで車両を見渡し、連続して同じように並んだ部屋のなかで一室だけ異なる場所を見つける。――倉庫のようだった。

倉庫らしき部屋は鍵が締まっていた。物音を立てるのは敵に居場所を教えるようなもので、避けたかったが、今もまだ鍵がかかっているということとは、ここには入っていないということだった。倉庫というからには、物が雑多に置かれているはず。整然とした客室よりは、まだましだろう。銃で鍵を撃った。ゴロリと床に落ちる錠前を手に取り、乱暴に扉を開けると、そこは黴の臭いがした。

木箱が積みあげられていて、せつかくの窓からの光を遮っていて、薄暗い。木箱の中にいろいろな備品が入っているのだろう。保管状態がいいとは言えないかもしれないが、隠れるにはちょうどいい。積みあげられた木箱の陰に、夏梅を降ろした。錠前を傍において、夏梅の体を確認した。

服は血に濡れていて、このままでは身体が冷えてしまうだろう。

織田作はすぐに自分の上着の襟に手をかけた。上着を脱ぐ際に、首にチリと何かが引つ掛かる感覚がした。

あまり気にせず、我が子の様子を確認する。それは、十歳になるかどうかといった幼い容貌だった。

「……あたたかい、な」

触れた頬は、思った以上に温かかった。子ども体温とっていい。生きている。そのことに神経がほぐれるのを感じて、ずっとぎりぎりとした頭痛を覚えるほどの緊張があったことを知る。

子どもの体温は、緊張をほぐす効果でもあるのかもしれない。

来ていた服が合わなくなってしまうので、夏梅はすこし困るかもしれない。代わりにもならないだろうが、上着をしっかりと巻き付ける。ちょうど木箱の色と同系色なので、紛れやすくなるかもしれない……というのは期待観測が過ぎるだろうか。

夏梅をできるだけ隠し、しかし、逃げ道を作るように物を動かしてから、立ち上がる。

胸元が心無く感じた。

夏梅を降ろしたからだろうか。

その時にどたどたという騒がしい足音が天井を駆け抜けていった。向こうの車両から、爆発する音、窓が割れる音が聞こえる。足音は追い追われているようで、二つ分あった。

(ここにいるのはガスマスクの男と爆弾魔の梶井、そして見えない敵)そして、織田作と夏梅。

挙げてみれば、なんというか、まとまりがない。それぞれがそれぞれに對し、攻撃を仕掛けている。織田作と夏梅を置いておくとして、敵の全貌がつかめない。ポートファイアの梶井は、ガスマスクの男とは敵対しているようにみえた。梶井は夏梅に、爆弾を渡してよこしたらしい。つまり、敵——であるとして、しかし梶井を襲ったのだろうか。ガスマスクの男は、梶井が戦闘不能になっっているなかで、睡眠性だがガスを使ってわざわざ織田作の意識を刈り取りに来た。分かるのは、不可視の者だけが明確に攻撃を仕掛けてきたということのみ。

それにしても、不可視の者を除けば、残りの者たちの行動は奇妙だ。梶井は、夏梅を狙っていたのだとしたら、なぜ爆弾を寄越すなどという遠回しな手を打ってきたのか？ 想像さえしたくもないことだが、手渡したその時に爆発させれば良かったはずだ。

なにか、前提が、根拠が違うのだろうか。

わからない。織田作は手がかりを持たない。なぜなら、起きた物事のほとんどが、織田作が寝ていたり、意識がなかったりしていた間の出来事なのだ。情報も、夏梅が語ったことや、織田作の目で見た断片的な場面のみだからだ。

敵味方がわからないことはもちろんだが。

そもそも、だ。

そもそも他の乗客はどうしたというのか。

どこへ消えた——？

情報が圧倒的に足りていない。

車両の奥で、ガタガタと音がした。

夏梅のいる倉庫へ行かせないよう、囿となるために、次の行く先を探す。

通路を出る。出た扉の前から離れたところで待った。これで夏梅のいる車両から引き離す。

間を隔てる扉が開閉した音はしなかった。

しかし、攻撃を受ける自分の姿を「見た」織田作は、すぐに避けた。

そして攻撃してきた方向から見当をつけて銃を放つ。車両の開閉扉へと銃弾が貫通する。

手応えはない。しくじった、のか。

その方向へ撃ちながら逆走するも、壁に穴が開くだけだ。

それでも攻撃の手は緩んだようだった。

弱体化させることができたのか、銃に怯んでいるのか。

ラウンジの方へ戻ろうと壁を横走りして扉を抜けた時、視界の端に緑のマフラーが移った。見過ごせるはずもない。

ラウンジの窓を蹴り破って、窓枠に手をかけ、腕と腹筋によって車両の上の装甲へと乗りあがった。

夏場に緑のマフラーが異様な、ポトマフィアの梶井基次郎。

資料通りの外見に、色眼鏡の奥で薄く笑うその男は、武器を持っていなかった。

織田作は銃口を向ける。

「何が目的だ」

「やめてくれないかね、いきなり銃を突き付けてくるのは。私は君を助けたんだよ」

両手をあげておどけたように言う。銃を突き付けられているというのに、飄々としたものだ。

「ポートマフィアのお前が、か？」

面白い冗談だ。一笑に付すまでもなく、黒だ。

「この列車の乗客たちはどうした」

「知らないね。それは私とは何のかかわりもないことさ。私も襲われた口でね」

夏梅に爆弾を寄越した口でよくいうものだ。

夏梅が凶器を寄越した人物を介抱するというのは、まだあるかもしれないと思う。しかし、梶井もそれを受け入れたというのには、違和感しかない。

その前提が間違っているとすれば。

悪意あつて爆弾を夏梅によこしたのではないとすれば。

少なくともこの場の梶井は、いやに協力的であるようだ。

敵対ではないということか。

「澱んだ空気のようなやつらだよ、あいつらはね」

「澱んだ空気……見えない者のことか」

「あれに襲われて無事だったのか。実に興味深いよ」

自分はこのぎまだった、と両手を広げる。両手には何も無い。服のどこかにあの檸檬を持っているのかもしれない。しげしげと服の上から細部へと視線を滑らせ、隠し持っていそうな場所を探していると、緑のマフラーの上にある青あざばかりの酷い有り様の顔へ行きついた。

「手ひどくやられたようだな」

「まあね。君にはばれてしまったようだが、その通りだ。——体中叩かれてないってところはないね」

そう云つて梶井はマフラーを解き、首の鬱血を見せ、腕をまくつて平たい棒状のもので殴られた痕をわざわざ披露してきた。こんなにも怪我をしていたのか。気づかなかつた。

「ここには来ないさ。心配は無用だ」

「なぜそんなことがわかる」

「車両のなかでは無尽蔵に攻撃してきたものだが、私の爆弾で窓が吹き飛んだと同時に攻撃がやんだり、外に出てきたところで追いかけて

こないからね。まあ、停滞した空気が好きなんだろうさ。こうして外に出ていれば、奴らはやって来れない」

信じるかどうかはともかくとして、現時点では敵が追ってきてはいない。

織田作は銃口を下げた。ホルスターに収めはしないものの話は通じる相手のようだった。

「逃げたのかと思った」

「戦略的逃走と言ってくれ。まあ、今回はこちらの分が悪かった。実験というのはいや管理された環境下で行うべきだ。今回はそれに当てはまると踏んでいたのだが……少々想定外だったな」

「あの透明な敵はお前の仲間ではないのか」

夏梅が無事か気にかかった。胸を抑えると、そこに在るはずのものがなかった。

遺髪を入れた懐中時計は、上着の囊衣のなかだ。

「ところで、私たち。どこかで会ったこと覚えはないかなあ？」

「いや……濟まない。記憶にないが、会ったかもしれない」

正確であろうとすればするほど、曖昧な返答になってしまう。ジレンマだ。

憶測で物を語ろうとする。記憶を埋めるのは、残っている断片と現在の情報から導き出す想像力——お粗末にも推理力とはいえない。江戸川のような人間を一度でも前にすれば、口にするのもおこがましく感じるのだ。

織田作の乏しい想像力で、導き出されたのは——

「同業……ではなさそうだ」

暗殺者は忍ぶものだ。派手な爆発物など使用しない。

「動いたな」

「待て。奴はどこへ向かっている」

「一つ向こうの車両だね。君がやって来たほうの」

——夏梅のいる車両だ。

そして夏梅のいる倉庫は密室だった。

第二幕 夜行列車に亡霊はいたか… きれいに消えて。

夏梅は一人でいた。

そこは真つ暗で、ガタゴトと音を立てて床が揺れた。積み重ねられた、古めかしい大きな木箱の隙間に身を潜めてひっそりと息を殺した。

夏梅はそこに一人でいた。身の丈に余る長い袖のなかに指をに潜ませてもぞもぞと握る。長いこと狭いところでじっとしていると指先の末端から、びりびりと、じわじわと、痺れが上ってくる。上着は父のもので、身じろいだ時に、硬い音を立てて何かが床に滑り落ちた。

それは父が肌身離さず首にかけて胸ポケットに入れている懐中時計だった。それを、五指揃ったやや小さい手で拾い上げて、辺りを見回す。うっかりものの父が落としていったのだろう。夏梅が代わりに首に下げしておく。

埃っぽい空気は息苦しく、喘息の気もある夏梅は、外の新鮮な空気を吸いたくてたまらない。しかし外はうだるような初夏のような暑さだ。望んだような涼やかな空気をというのはいないだろう。というのに、手先、足先は冷え冷えとしている。ふう……。違う。はあ。はああーと息を指先に吹きかける。

夏梅以外の音は雑多だけれども規則的で退屈だった。一人残されて一体どうしたものか。思わずうなりかけたとき、ガタリと部屋の一部がずれる音がした。とつさに口を押さえた夏梅の目には、二メートルほど先の床に光が差すのが映る。

……はあああ、と光を遮る大きな影の主が息を吐く。

夏梅は緊張していた。口を手で押さえたまま、瞬きもせず……。いや、瞬きは普通にしていただけれども、息を殺して……。いや、息をしていないということではなく、ひっそりと息をしていたのだ。

そこで侵入者の溜息に思ったことといえば、

(おんなじことしないでよ……)

頬を膨らませたい気分だった。えらく長いため息を深々と吐き出されたことに、納得がいかない。

溜息を吐きたいのは夏梅の方だった。

木目の荒い床を擦る硬質な音が、緩慢な足音とともに狭い貨物車両のなかに響く。

夏梅は確認してはいないけれども、硬い音を立てて摩擦している一方が、火かき棒の側面に細かな溝が入ったような凶器であることを知っている。

硬い音はそれでも、赤い液体で濡れていて摩擦音を多少なりとも軽減しているだろう。

なんと、夏梅はこんな凶悪な武器を持つ人物に見つかれば、脳天をかち割られてしまうのだ。一度目は既に経験済み。

そしてともにいたはずの肉親の姿は見えない。

はてさて。見えない敵に追われるこのシチュエーションはさながらホラー映画のよう。

どうしてこのような事態になってしまったのか、打ち合わせと少々異なる状況に夏梅は戸惑いを隠せない。

べつとりと首周りの襟に染み込んだ血液を、気持ち悪く思いながら、首を竦める。

つい先日のことを思う。随分と昔のことのように感じるが、たった一日前のことなのだ。

織田君、と呼ばれた。

移動教室である数学の授業は、進み具合によって組み分けられていて、二クラスずつの合同選択授業だった。体育と同じ形式だ。夏梅はそこで最も速度の遅い教室を選択していた。いつも見慣れた教室からではない空が窓から見えて、ぼうつとそれを眺めていた。

『織田君』

今日の空は大きな鯨が泳いでいるように見えた。この季節は、こうした雲をよく見かける。

「織田、夏梅君」

「あ、はい」

数学の先生は、「なんで君は名前を呼ばれてすぐに返事をしないのかねえ」と、真夏の太陽を受けて反射する頭頂部にしきりに流れる汗をハンカチで拭いながらため息をついた。その間も流れ続ける汗に、タオルを乗せてあげたい気分になりつつ、言葉をかけた。

「暑いね、先生」

寒がりの夏梅はまだ、それほど暑いとは感じていなかったけれども、この先生の姿を見ているとんだか急に暑苦しく感じてきた。

すると、後ろの席に座っていた、安井が机の上上半身を投げ出していた体勢から、ため息をつきながら云う。

「クーラーとかつけてほしいよなー」

「暑いのは否定しないけど、まだ、冷房をつけてよい期間ではないですよ、安井君」

何時もなら、硬派な野球少年で、真面目に授業を受けている安井だが、らしくなく、だらしない姿をさらしている。といつてもここ数日はこんな有様で、どうやら夏梅とは反対に、暑さに弱いらしい。野球や体育の時間は違うらしいのだけれど。

「それからね、安井君。いくら下にシャツを着ているといっても、第四ボタンまで開けちゃあだめでしょう。織田君を見てみなさい。校則通りに第一ボタンしか開けていませんよ。……私はみていて胸が熱くなつてきますよ」

ふきふき、ふきふき……と忙しく動く先生の腕にも汗が出ている。

どうやら、数学の先生も夏梅を見たら暑く感じるらしい。

完全に止まってしまっている授業により、隣席では、教科書が放り出された。

「なのに涼しそうだよなー、織田って」

夏梅と同じクラスで、唯一夏梅と張れるぐらいの学力を持つ——決して良い意味とは限らないだろう——少年が口と鼻の間に、シャープペンシルを器用に乗せながら口を出す。文字通り、口を丸めて突き出す。ちなみに名前は泉田^{せんた}だ。

田たんぼつながりで、夏梅は新しい苗字のために、親近感を覚えている。

「泉田君も、そのやる気のない体裁はともかくとして、きちんと服装は整っていますねえ。……私としては意外ですが」

「せんっせー、ひどっ」

げらげらと泉田とよくつるんでいるまた別の少年が笑う。

泉田自身は特に気にした風もなく、

「おれんところ、親が両方とも教師なんで、こういうところ厳しく育てられたんですわ」

ま、頭の出来はこの通りっすけど、と両手を肩の位置まで上げる。その拍子に、タコのように丸めていた口の上からシャープペンシルが落ちて、ノートにその軌跡が黒く引かれた。瞬間、かつと目を見開いて、鬼のような形相で消しゴムを引っ掴むと、背中を丸めて猛烈な勢いで線を消しだした。

親の仇でも見ているかのようなぞつとする目でにらみつけ、ノートと鼻が触れ合うほど顔を近づけての行為。

親しい友人のいきなりの凶行に、先ほどまで笑っていた泉田と仲のいい少年は、ぎよつとした顔で肩を抱き身を引いた。

「きちょうめんだね」

夏梅は覚えたばかりの言葉を使ってみた。

蝉が叫ぶには早い季節。ただ妙に、しんと静かになった数学の先生と安井がようやくと泉田の奇行から目をそらして動き出す。

「……公務員って、大変だよなあ。規則ばっかりで」

どこかよそよそしい声音で安井がつぶやく。

「なあ、おい。規則に縛られたら、あいつみたいになるのかよ」と泉田の友人が小声で話しかけて、安井の肩をゆすつていたが、安井は暑さ

からか、うつとうしそうにそれを払った。

「ひどっ」と悲しげな声を上げて、今度はそれを眺めていた夏梅に目を向けてくる。何かすがるような視線に感じたが、よくわからず、夏梅は大叔父に受けの良い笑顔でにこりと笑っておいた。……よくわからないが、泉田の友人は机に沈没した。

授業を進めることを半ばあきらめたような数学の先生が、生活指導のために口を開く。

「他人ごとではないよ、安井君。ルールを守ってこそその大人です。君のお父上は素晴らしいお手本ですから見習うといいです。……お父上の職業柄、君の家もいろいろあったようだけれど、規律を正す警察官というのは、悪いことをする連中にとつては疎ましいかもしれないが、そうでない善良な市民にしてみればありがたい」

「……先生、ごめんだけど、今は暑すぎて何か言われるとそれと反対のことがしたくなる、無性に」

堂々とした安井の自己申告を聞いた先生は「自腹で扇風機持ち込みますかねえ」と流れる汗をふきふきため息をついた。

よし、消えた、と白い消しゴム片手に、同じく白い歯を見せて笑う泉田。その友人が、「そうかよ……」と若干怯えをうかがわせる声で相槌を打った。

ふうと息をついて、汗のにじむ額をぬぐう姿を見て、夏梅は相手を労わった。

「よかったね、きれいに消えて」

チャイムが鳴った。

「えー皆さんに、残念なお知らせです。今日の数学はこれといって進みませんでした」

いえーい、と泉田の友人が拳をやる気なさそうに頭の上に振り上げた。口の端にはかすかに喜色が広がっていた。

それとは対照的に夏梅の隣では、泉田がやっと上げた顔をだんだんと曇らせ、「とてつもなく……嫌な、予感がする」と肩を震わせた。

「えっ？」

夏梅が泉田の方を振り向くと、泉田は寒気を感じたように自分の体

を抱きしめていた。

「このパターン、この流れ、この空気……！　なんか、めちやくちや覚えがあるような」

そして良いことではないような、と不吉なことを口にする。

つられて夏梅も安井も他の面々も、不安な顔になる。

「えー、教師のご両親をお持ちの泉田君はもうお察しのようですが、授業は進めなければなりません」

「でも、もう授業はおわったよ……？」

時計を指さして、夏梅はそわそわとした。探偵社で助手として書類整理などをしているので、自然と時間には気を付けるようになっていた。

「はい。そうですね」

夏梅と安井は同時に、「そうですね……？」と疑問の声を上げた。一緒にいることが多いせいか、こうして声がそろうことが、結構ある。

「織田君は二度目ですが。……私が開講する補講と、皆さんが家で自主学習して学校で抜き打ち小テストするのと、どちらがいいですか」

泉田が頭を抱えて叫んだ、「そんなこったろうと思った！」

そんな隣の学友を他所に、夏梅は手を挙げて先生に告げた。

「せんせ、ほかの授業も合わせたら、補講は三回目です」

数学と国語……と数えていると、大きなため息を聞いて顔を上げた。——そして目を細める。

くたびれたように首を垂れる数学の先生の頭頂部が汗でいつも以上に光を反射していた。

「織田君は、補講マスターになりそうですねえ……」

夏梅はそのまばゆさに顔をしかめた。

仁義なき教師と生徒とのやり取り。折衷案の、妥協案。勉強したくない、学校来たくない、遊びたいという生徒の訴えが、教師に補講という案を取り下げさせた。

授業時間外の白熱した話し合いの末、先生の有り難い取り計らいに

より、抜き打ちテストと決まり、連休休み前の宿題の山を家に持ち帰ることとなった夏梅は、その晩からすでに教本を開いてぼうつとする人形となり果てていた。

そこへ素晴らしいタイミングでやって来た、父からの数日かけての瀬戸への参り。逃避行の誘い。

学校を休めると聞いて、もう見飽きてしまった教本を放り出した夏梅は諸手を上げて受け入れた。それも休みは明日からだという。学校にも仕事場にもすでに連絡しているらしい。素晴らしい。夏梅が嫌ならば、と撤回しそうな気配を察知——すぐに行くかと答える。

夜更かしを宣言して敷いた布団の上に飛び込む。夏でも薄手の毛布をかぶって眠る夏梅の寝る場所はふかふかとしていた。

スマホを用意して、すぐに安井を筆頭とする男友だち数名となんとなく仲良くなった(?)二谷へメールする。

安井らとは誰が抜き打ちの小テストで赤点をとるかでお菓子をかけていた。一番指名があつまったのは夏梅ともうひとりの男子生徒で、どっこいどっこいだった。しかし、夏梅がいなくなったこと、お流れになるだろう。抜き打ちと云いながら、とある男友だちのひとりが教師の思考と学期の残り日数から、ある授業日を小テストの日だと予想づけていた。おそらく間違いのないと思われる。それまでせつせと勉強しているわけだ。ちなみに、賭けは、自分に賭けていた。

故郷之母は貰った、となかなか自信があつたのだが……。

二谷は日直の後からよく気にかけてくれるのだが、ちよつと授業中で眠くなつてぼうつと虚空を眺めていると、具合が悪くなつたのではと心配してくるくらいに過保護だった……ので、明日いなければよい心配をかけるだろうから連絡をしておく次第——別に、後からなんて休んだのと般若の如き微笑を向けられるのが怖いとかではない。

いろいろ連絡を入れおわると同時に電源を切つておいた。理由は簡単だ、返信するのが面倒くさいから。

存分に夜更かししようと思気込んでいるといつの間にか眠つていたようで、夜は明ける。

目が覚めて最初にスマホを開いたとき、六件メールが来ていたが、

その中に、見覚えのないメールアドレスからのメールを2通見つける。

「ああ……なるほど」

そっか、そっかと夏梅は頷いた。

つまり、これも抜き打ちテストということらしかった。

食べていこうよ。

身支度が終わり、夏梅は廊下を出て、居間への入り口から顔をのぞかせた。電話に対応する父の声から、『そつと静かに』を心がけた。そうなのだが、父はすぐに気づいて、テーブルを指さした。そこにはすでに朝食が用意されていた。

音を立てないように、忍び足で居間へ入ると、慎重にドアを閉めた。机の上には、夏梅が必要とする栄養を補うようにと高カロリーで、野菜豊富な皿たちが鎮座していた。果物や糖分は、補助食品で補いやすい部類なので、そこまではない。

二つしかない椅子の、前に珈琲がない方の椅子に座って、手を合わせる。

それで、トマトジュースを飲みつつ待っていると、ほどなくして電話を切った父が椅子に座った。いただきます、と手を合わせた父に、夏梅はフォーク片手に尋ねた。

「電話、誰だったの？」

「瀬戸のお爺さまだ」

「ふうん。……なんて？」

最近よく電話が掛かってくる。電話はいつも固定電話にかかってくるので、父はなるべく電話が掛かってくる時間帯には家に帰ってくるようになっていた。

「いや、ただ、今日は何時ごろに着くのかという話だった」

夏梅は小首をかしげた。フォークでスクランブルエッグを刺したまま、手を止める。

「きょうは、でんしゃで寝るんじゃないかった？」

「ああ。少し連絡の行き違いがあつてな。今日出立だと言ったから、今日中には着くだろうとお思ひになつたらしい。寝台列車を利用すると、伝え忘れていたんだ」

「へえ……」

夏梅は、さらに目を落とし、ケチャップをかけて真っ赤になつたスクランブルエッグをぐしゃぐしゃとかき混ぜながら、聞いていた。

「最近、また、おとうさん……」

「なんだ？」

俯く夏梅の耳に、父の声がクリアに聞こえる。父が顔をあげたのだろう、と思った。

皿から顔をあげて、父を見ると、「どうかしたのか」と父が不思議そうに聞いてきた。

夏梅は、頬の内側の肉を噛んだ。

「……なんでもないよ」

ぐしゃぐしゃになった卵を口いっぱいに入れて、鉄みたいな変な味がするなあと思いつながらそれを飲み込んだ。大叔父に会いたかった。こんなときに、悩みが言えるのは、ここでは大叔父ぐらいだった。

「そうか？　もしかして、戻りたくなかったか？」

父は、強引に事を進めたのではないかと見当はずれな心配をしているようだった。

「それなら今からでも、取りやめにするが」

夏梅は首を振った。

「——行く……がつこう、やすめるしね！」

夏梅は大叔父が好ましく思っている笑顔を浮かべ、半熟卵の黄身がかかったサラダを食べる。さつさと食べて、さつさと出発しなければ、父が余計な気を回しそうだと思った。

今回、瀬戸に戻るのには、何も、『母の彼岸のため』だけではないのだ。「そうか」

それを知らないのはきつと、それとなく緊張しながら珈琲を口にしている目の前の父だけだろう。潮風に傷んだ赤い髪を鎖編みにして首に巻き付けている父は、既に食事を終わらせたようで、こうしてのんびりと食後の珈琲を飲んでいる。ちゃんと眠っているのか、夏梅には解らない。それくらいに、目の下には不健康そうな隈ができていて、いつも珈琲を飲んでいる。

テレビすらつけない、静かな部屋では、食事する音だけがしばらく響く。

そうであつたからか、小さな音でも夏梅の耳は敏感に拾った。

ぱたり、と机に液体が零れる音。夏梅は音が立った方に目を向ける。

父の前の机だった。

コップの縁にかけた父の指が緩んで、多くもない残りの珈琲が零れるほど、縁が傾いていた。お父さん、と声をかけようとしたときだった。

「——ああ、またふしんしゃか」

心なしか、ぼんやりとしているように見える。サラダをつつく手を止めて、夏梅は腰を浮かせて、父の顔を覗き見た。

「おとうさん、ねむい？」

父はきよんとした顔を向けて来た、「なんだ、ねむいのか、夏梅」
「…………おとうさんがねむいんじゃないかって、いま、ききました」
なんなんだ、と。ふいと顔をそらして、口がもごつくの隠そうとした。一回で聞き取らない父が悪い。最近、また父の様子がおかしい。だから夏梅は——

「早く食べていこうよ」

半眼で、ぱちぱちと瞬く父を見上げた。何もわかっていなさそう
な、いや、何もわかっていない父はマグカップを片手に首をかしげて
いた。夏梅から見たらとても、実に呑気そうに見えて、ついつい夏梅
は口を尖らせた。

「そんなに瀬戸に戻りたかったのか？」

「……………そうだね、とっても『行きたい』かも」

夏梅はとても意地悪な気持ちになりそうだった。

父の気持ちはなんだかんだ、まだまだずっと瀬戸にあつたらしい。
まあそんなの、知っているけども。

ため息をこらえる。ちよつと頭が痛い。

こんなことをしていると、夏梅はなんだかとても自分が大人にな
っている気がする。学校では、夏梅はとてもマイペースだと言われ
ることが多い。ただ、夏梅からしてみれば、自分の父はもつとだ、と
思う。

「いちそうさまー歯みがきしてくる」

ワンフレーズで言って、立ち上がると、父が珈琲を飲みほすのが分かった。

「そうだな……」

珈琲のコップを離して、肩に垂らしていた、腰まで届く一本の三つ編みを代わりに手に取っていた。男の人にしてはだいぶ長すぎる髪を、いつも通り首に巻き付けている。外に出るときはいつもそうしている。

ということとは、だ。

「それが終わったら、探偵社へあいさつに行こう」

——好しよし。

夏梅は口角をあげた、「はーい」

父のことを、大叔父に告げ口できるチャンス機会である。

???

はなさない。はなさない。はなさないで——。

ずっといつしよにいるっていったじゃない。

わたし（たち）だけっていったじゃない。

あのもりで、あのろうかで、あのきようしつで、あのかいだんで、あのおくじようで、あのいけのそばで、あのなかにわで、あのうすぐらいちかのくうかんで、

ちみどろになりながら、わたし（たち）は、ちかったじゃない。

そばにいるってちかいあつたじゃない。

うそつき、うそつき。ゆるさない。

ああでも、わたしをうらぎらないで。わたしを、わたしたちをすてないで。

おねがいだから、おねがいだから——。

まって、まってまっている。おわりじゃないわ。そのつもりでわたしは、わたしたちは、このもりで、このろうかで、このきようしつで、このかいだんで、このおくじようで、このいけで、このにわで、この

うすぐらいちかで、さげんでいるの。おもいだしてと。

しんじて、しんじて、しんじているから。

おねがいだから。ひとりにしないっていったでしょう。

——ああ、いやだ。いやなおとがきこえる。

わたしの、わたしたちのらくえんをふみあらず、かたいくつおとが

???

???

当日の朝は父とばたばたと用意をして、正午前には挨拶するために探偵社へと向かう。

そこには、一度家に泊まらせてもらったことのある中島敦もいた。江戸川と与謝野は仕事で不在とのこと。谷崎兄妹は学校だという。今日は、平日。よい子はみな、学校へ通っている時間だ。夏梅の学校として例外ではないのだけれど（事実、夏梅の学友たちはみな平常どおり登校し、今頃は空腹と睡魔の四限目授業を受けていることだろう）、家の用事という列記とした名目があるので、教師に咎められることはない。

いつもの詰襟の制服ではなく、ポロシャツと半ズボンといった涼しい装いで父とともに探偵事務所へやって来たのだが、なかなか落ち着かなかった。父の肘のところをつかんで、半身を隠すようにして昇降機に入った。扉が開いたとき、ちょうど春野が書類を抱えて横切るところだった。

「あら、織田作さん……に、夏梅君。おはようございます」

ちらりと長身の父の傍らにいた夏梅を確認するのが見えた。

夏梅は小さく、「おはようございます」と挨拶して、おどおどと視線を春野の足元に落とした。

父は目礼して、そつと「社長は」と聞いた。少し硬い声だった。

「社長は今ちょうど、お手が空いたところですよ」

父は口数少なく礼を言って、春野が入ろうとした扉を開いてやって

いた。

どうもありがとうございます、と春野も礼を言う。

扉をくぐる際に春野が落とした書類を夏梅がかがんで拾う。

夏梅に微笑みながらもちよい、と目配せされる。

それについて事務室の中へ入り、春野の机までいくと、後ろの方で扉が閉まる音がした。

「元気にしていた、夏梅君？」

春野はここ数日、休みを取っていたのだ。

夏梅はこくりと頷いた。

夏梅は春野に、大叔父へ向けての伝言を預けて、事務所の部屋に入った。

すこし時間がかかったので、父もいるだろうと思っただが、すぐに目についたのが、首を絞められている太宰と絞めている国木田、そして何故か椅子にあお向けて伸びている中島敦だった。

父はどこだろうか。その姿を探して部屋の中を見回すと、

「ああー！ ナツメくんだー！」

ひよっこりと本棚の上から顔を見せたのは、宮沢賢治だ。右手につかんでいるのは黄金のカブトムシ。夏梅はこの少年の前回の依頼が何だったのかとても気になった。

「よつとー！」

小柄な体軀をしならせて、高い本棚の上からひとつ跳びで夏梅の目の前に降りてくる。きらきらとした金髪と水色の瞳が明るい印象を与える、事実とても朗らかな少年だ。そういえば、父はこの少年のことを牧歌的といっていた。どういう意味だろうか。

夏梅より少し後に大叔父によってスカウトされた少年である。探偵社では夏梅ともっとも年が近い——とはいっても十も年上ではあるけれど。

大叔父である福沢が自ら探偵社に受け入れたのは、父のほかにはこの宮沢だけだと聞いている。

「ナツメくん！ お出かけだそうですね！ 熱中症には気をつけな

きやだめですよ！ ほら、ぼくこれ持って来たんです！」

差し出されたのは麦わら帽子だった。

「前、いっしょに買い物に気になっていようだったから、ぼくプレゼントしようと思って。どうですか、ぼくとおそろいですよ！」

両手で受け取る。

「……………ありがとう」

夏梅はにっこりと笑った。

そのままいっこうに動く気配のない夏梅に、不審がったのか、太宰の手伝いをしていた国木田が、その手を止めて問いかけてくる。

「——どうした、かぶらないのか？」

その言葉に、夏梅は周りの視線が自分に向かっていていることに改めて気づいた。

舌が、カラカラに乾いていた。黙ったままできず、しばらくして夏梅は怪訝な視線を向けられながら口を開いた。

「かぶったことない……………から」

全員が首を傾げる。それがすこし悲しかった気がする。

せつかくもらったのに、自分の手の中にあるのが落ち着かなかった。すると手のなかから麦わら帽子が細長い白い指に支えられてそつと離れていく。

せつかくもらったものを取り上げられる心地で、悲しい気持ちになった。

それでも、自分がこれを持っている資格はないように思ったので、じつとそれを見送った。

誰の手であろうか。

「帽子はね、こうやって被るのだよ」

そら似合ってる、と太宰はいった。

その笑顔に押されるようにして、夏梅はいつの間にか竦めていた首を元に戻して周りを見回した。

つばが少し揺れるのに、おっかなびっくりしながら、慌ててつばを両手で支えた。

「似合ってます、似合ってますよ、ナツメくん！」

「織田作にも見せてやりたいものだよ、いったいどこにいるんだか」
太宰の言葉に、この部屋に父がいないことを把握する。

「おとうさんは？」

「社長にぐい挨拶しに行ったんじゃないかな」

それにしては少し時間が長い気がする。

「なんだか、元気ない？ お腹減った？」

「おにいさん……お腹は、減ってないかな」

中島が顔を覗き込んくる。

そうなれば国木田が気遣うのは当然だった。誰かが不調を抱えているのを見過ごす人間ではないのだ。一人が、ふたりに。そしてまた、人が増える。ここは、そういうところだ。その中心には、国木田がいると夏梅は勝手に思っている。

「そういうばそうだな。どうした、夏梅。せつかくの休みをもらったというのに、浮かない顔して」

「きつと織田作さんがいないから、元気ないんですよ！ 大丈夫、すぐに戻ってきますつて！」

「……うん、ありがとう」

黙ったままの太宰の視線が、夏梅はなんだか居心地悪く感じた。

よそよそしく視線をさまよわせていると、国木田が眼鏡の蔓を指で押し上げて言った。

「めったにない長期休暇だ。何処か旅行にでも行くのか？」

「ねるでんしゃのるよ……のり、ます」

国木田は手帳を片手に「練る電車」とオウム返しに言う、何か違う気がする。

「寝る電車——寝台列車のことかな。ここからだど東西に向けて列車は出ているからねえ。だが、横浜から乗って一泊するとすれば、距離的に考えると、西かな？」

太宰がにこやかに推察する。いや、合っているのだが、ぽかんとしってしまう。

夏梅はいつのまにか完全に探偵社の面々に囲まれていることに気付いた。

なんだか、ほっとした。

これから、父とともにこの横浜を離れるのが、心細く感じさせます。父はまた少し違うようだが。

気に欠けられていることを実感して、夏梅はこのひとときに自然と笑みをこぼした。

饑別としてもらった麦わら帽子が、心なしか温かく感じる。

つばに手をかけて、同じ麦わら帽子をかぶる宮沢と笑いあっている、太宰が父を呼んだ。

「織田作、こつちこつち」

やって来た父に真つ先に気付いた太宰は、そのまま父と話をするので、話しかけてはまずいだろうかと遠慮した。

父は太宰と話をする、波があるのだが、夏梅は、それが悪い影響だとは感じない。それは、こうして会話の内容が聞こえなかったとしても、少し離れたところから見た太宰の表情は、沈んでいて、けれどもとても落ち着いて見えたのだ。だから、きつと父は大丈夫だと思った。

「行つておいでよ、親子水入らずでさ」

太宰はそういった。だから、太宰は知らない。

昔の父のことを何か知っていたとしても、今の父を知らない。

大叔父は、太宰にまだ父のことを知らせてはいないのだ。

夏梅は父の傍に駆け寄って、太宰を上目でちらりと確認した。

夏梅の視線に気づいて、視線を合わせるように僅かにかがむ。その面には、につこりと弓なりになった眼と口許。

分かっていたけれど、これは知らないな、と夏梅は再認して気落ちした。

それから時間に余裕がないことに気付いて、どたばたと探偵社を後にする。

麦わら帽子が切り取る青空には、大きな雲が泳いでいた。

初夏を感じさせる気候はすがしく、世間の人々より一足先に長期休暇が入った夏梅は、このときはまだ、「抜き打ちテスト」トがきちんと運行されると疑いもしていなかった。休暇が終われば、再び高校

へ行き、学友にお土産を渡したり、夏梅のための抜き打ちテストを受けたり。

でも、そうはならなかった。

そうはならないのだった。

つかれるよ。

父に里帰りという内容を聞いて、真つ先に思い浮かんだのが、それこそ呼吸音と同じように意識せずに聞いていた波の音のことだった。以前、江戸川の仕事に同行していた時に聞いた海の音は、なんだか耳慣れず、ちよつとした騒音のようだ——と思えばそう感じられもしてくる。

ひとりの人が事故で亡くなった事件だった。遺体の部位がばらばらに海で見つかった。

誰かが海で泳いで遊んでいる。また一方で、死んでしまった人の体が沈んでいたり浮かんでいたりする。あの海とその海はつながっている。誰かが楽しんでいる海は、誰かが死んでしまっている海なのだ。

『早朝に起きてるなんて、偉いねえ』

飴玉を宙に放ったのを、ちやつかりその口に収める。

放られた飴玉が虹色のきらめきが、江戸川の口に消えていくのを見追っていた夏梅は、不意の言葉にぱちぱちと瞬いた。

『でも——起きるのを努力しているのは君だけじゃあないようだよ』

糸目が片方だけ開かれて、夏梅を正面から見すえた。逆光の太陽が目にまぶしく、夏梅は反対に目を細めてそれを受けた。

『君は***が眠っているところを見たことはない、だろう?』

江戸川は、見てもいないのに確信のある口調をしていた。

加えてそれがその通りだったものだから、夏梅は目をぱちくりさせたのだ。

注意力が散漫な傾向のある夏梅だからか、父は夏梅の両手がふさがらないようにと背負いの鞆を選んで荷物を詰めてくれた。夏梅は身軽である一方、父は片手がふさがれようと、すぐに物を取り出せるようにと、手に旅行鞆を下げていた。中には、夏梅の補助食料やら常

備薬やらが入っている。

あわただしく探偵社から出てきたものの、駅までのバスは五分ほど前に出てしまっていた。割とさくさく仕事をこなす父は、すでに時刻表を確認している。

「まだ少し時間があるらしいな………ああ、うん………そうだな………いや、まあ大丈夫だろう………それで」

時刻表の方を向いていたが、途中からうわごとのような言葉をつぶやいている。突っ立っている父の袖を引いた。

「おとうさん………?」

いつもと違い、反応がない。

再び、今度は強めに袖を引く。

「すわって待とうよ。おとうさん、荷物もってるし、つかれるよ」

父は夏梅へと視線を落として、やっと首を動かした。喉に巻きつけている赤い縄のような三つ編みの髪が暑苦しそうに見えた。

父はこちらを見ていて、しかし少したってから夏梅のことに気づいたといった顔になった。

疲れているのかなあと夏梅は力なく笑った。

働き過ぎなのかもしれない。心配だ。

「………ああ、夏梅。どうした?」

「つかれるから、すわってまとうよ」

無表情といわれることが多いけれども、夏梅には父が笑ったと判る。

「今日はよく歩いたから、疲れたな」

父は持っていた手荷物を地面に落とした。そう重たげではない音を立てて、落下。

ふたりして落ちた旅行鞆を見下ろした。

「……………」

夏梅は胡乱な目で父を見上げた。

父は自分のあげかけた手のひらに気づいて、不思議そうに首をかしげていた。たぶん、夏梅の頭をなでようとしたのだろうと思う。でも、その手で旅行鞆を持っていたのを忘れていたのかも、と拙いなが

ら『推理』してみる

そんなことって、よくあることなのか夏梅にはわからなかったけれども。

少し離れたところから特有のエンジンの音が聞こえた。

夏梅はやってくるバスを認めて、それを知らせようと父のほうを見た。そして開きかけの口を閉ざした。

父は、目元を暗くして、いつの間にか取り出していた懐中時計へじっと目を落としていた。赤い髪が目に入りそうになっていたのに、頓着せずじつとうつむく。目が向けられている時計の蓋の内側の部分には、黒いつややかな髪が一房、とめられていた。その髪に触れながら、目はぼうつと手元の時計すら通り越して何かを探るように虚空をさまよっていた。

夏梅は父が、その懐中時計を肌身離さず持っていることを知っている。

『人間は現実のことをどのくらい考えているか知っているかい？』

夏梅は、脳裏によみがえる言葉を思い出しながら、そうつと用心深く父の肩に手を置いた、

「——おとうさん」

懐中時計を胸ポケットから取り出して、眺めていた父が顔を上げた。

「……どうした？」

待合のベンチに座っている父の瞳の中をのぞき込むと、そこには夏梅がいた。

夏梅の目にも、父が入っているのかもしれない。

父は、ここにいます。けれども、半分くらいはここにいない。

『目の前のことを考えているのは、53%といわれている。残りの47%は、今ではないことを考えている。未来や、過去のことをね』

夏梅は今、意識の半分より少し少ないくらいは、江戸川の言葉を思い出しているのだろう。

「ええと……」

今、父の目の前には夏梅がいる。

けれども、半分よりすこし少ないぐらいは、母のことを考えているのだろうか。それとも、欠けた記憶のことを考え込んでいるのだろうか。

それで。それは、夏梅のことが半分くらいは大事じゃないということの意味しているのだろうか。

「……バス、来たよ」

父が顔を上げると、二つの瞳はその色を明るくする。紺碧の海の様相のようだという感想を抱いた。夏梅のものとは違う。こうして見ると、容姿としては父とはあまり似ていないのだ、夏梅は。……昔の父を知っているらしい太宰も、云っていた、『きみはお母さん似だね』と。

「ああ、そうだな。……行こうか」

手に荷物を持って立ち上がった父は、手を差し伸べてくる。その手を見て、夏梅は安心した。

「空いているようだな」

「うん……」

父の横顔を見上げて、そこから目をそらした。バスの窓から、白いマスクをしている少女と女性が座っているのが見えた。少女の口元がマスクに隠れているものの、見える目もとが、隣り合って座っている女性とそっくりだった。たれ気味の眉など写し取ったかのよう。彼女らはきつと母子だ。

世の中には似ていない親子だっているだろうに、どうしていま目に入るのがよく似ている母子なのだろう。

疎らなバス内では、降車地の案内の声が流れているほかは静かだった。騒がしいのが苦手な夏梅は気を緩めた。

夏梅の目の前には、薄紫色のプラスチックの衝立があった。それはバス内の照明を反射し、バス内に乗り合せている面々を見ることができた。

揺れるバスのなかで読書をしている若い女の人、杖をついた年配の人、マスクをつけた少女の隣に座る母親らしき中年くらいの女の人、色つき眼鏡をつけて長い緑色のマフラーを巻いた男の人、貧乏ゆすり

をする黒いニット帽をかぶる無精ひげの男の人、そして父と夏梅と運転手の人だ。

マスクをつけた少女と母らしき人たちは、少しして小児科の病院前のバス停で降りていった。

代わりに、花を抱えた細身の男の人が乗り込んできた。

乗り込んで生きた細身の男の人は、目を伏せ気味にして夏梅の傍を通り過ぎた。男の人は、手に花を持っていた。花の強い匂いが夏梅の鼻先をくすぐる。なんだかくしゃみが出そうだった。

その時、バスが止まった。

駅に着いたのだ。

あわただしく周りの乗客たちが立ち上がるなか、夏梅は、衝立に映る父が軽く立ち上がり荷物を持つのを見て、それに倣った。それでもほかの乗客たちが全員降りて行ってしまうから、出ようと思っていたので、のんびりと背囊リュックを負って、立ち上がった。

「お先にどうぞ」

さっきの乗ったばかりの男の人だった。一駅でわざわざバスに乗ったかと少し不思議に思った。彼は、ぼろぼろの指先を揃えて、道を譲ってくれた。怪我でもしたのだろうか。真新しい傷と古い傷が混在していた。粉をふいたように青ざめた指先は乾燥している。

もしかしたら、病院に行った帰りなのかもしれない。

母子が小児科の前で降りて行ったバス停で、この男の人は乗り込んできたのだから。

「どうしました?」

首をひねる男の人に、慌てて答える。

「あ、ううん。ありがとうございます」

行かないのだろうか、と父へと目を向けると、父はなぜか険しい顔をしてこの親切な男の人のほうを見ていた、「おとう——」

「おいっ 早くしろ! こっちは急いでんだぞ」

後ろから、バスのなかで貧乏ゆすりしていた黒いニット帽の男の人が、怒鳴ってきたので、その大声に驚いた夏梅は慌てて父の袖を引いてバスを降りた。夏梅の力はとても弱かったけれども、父はすぐに動

いた。

バスを降りると、どこか土の匂いのする風が吹いてきた。

「——あ、おとうさん、かばんちゃんがある？」

返事がないので不思議に思い、首を捻って父の顔を見あげた。ちようど、正午だった。だから、高く上った太陽を直視してしまつて、夏梅は一度ぎゅつと目を閉じた。

何かどこか懐かしい臭いを嗅いだ気がした。すぐ脇を誰かが通る。

目を開けると、バスから降りた乗客たちが立ち止まる夏梅たちの脇を通つて駅のなかへと向かうところだった。

そこでふと、黒髪の男の人に目が留まる。手に抱えていたはずの花束がなくなっていた。

「もうこんな時間か、行こうか。夏梅」

父が駅の時計を見上げて、そう云う。

せかす父の言葉に従つて、足を速めた。

飲んでよね。

忙しい人込みに、夏梅は早くも疲れを感じていた。駅のホームが見えてくると、夏梅はエスカレーターの残りの段をひよいひよいと跳び登った。

背中から父が咎めたが、たとえ若し夏梅が誤ってこけてもいいように後ろにいるのだから問題ないのではと思うのだ。

「だーいじょうぶ、だいじょうぶ」

ホームには、並んでいる他の乗客たちが既にたくさんいた。時間には間に合ったもよう。乗客たちには、こどもも大人もお年寄りも、顔ぶれはさまざまだ。うきうきとしているのは同じで、夏梅もつられて気分が上向きだった。ここにいる人たちは、みんな知らない人だけれども、同じ電車に乗って同じ所へ行く旅をするのだ。なんだかとつても不思議に感じた。独特の空気がそこにはあった。

知らない人たちの群れに入っていくのも、父といっしょなのでこわくない。

頭にかぶった麦わら帽子を押さえて、夏梅は振り返った。

父もちょうど上ってきたところだった。

眉をさげて肩をすくめる父は、チケットを取り出した。それは緑色をしていて、特別なものなのだろう。すぐに目につく他の待ち人たちの手には、黄色いチケットがあった。

……緑と言えば、先ほど見かけた緑のマフラーの人もここにいるんだなあ、と思い返しながら、チケットの記載事項はだいたい覚えていたので、「あっちだよ」と夏梅はいう。

場所が分かっているのですいすいと人を避けながら先に進む。父はついてくると思っただけ、声はかけなかった。チケットの車両番号にある表示の辺りには、人はまばらだった。

「なんだか、ここはひと少ないね」

「優等客で予約しておいたからな。この車両の乗客は多くはない。客室が4つしかない。専用のラウンジがあって、ここに来る車両へは他

の客たちは入れないようになっていた」

父は、近くのベンチを見つけ、夏梅に目線で促した、「あそこに座ろう」

夏梅は座ったが、父は座らず、夏梅の横に荷物を置いて立ったままだ。

胸ポケットから懐中時計を取り出して、時刻を確認する。

「時間はあまりないな。……ジュースぐらいなら買えるか」

何がいい、と尋ねてくるので、夏梅は心そのままにいやそうな顔をした。飲みたいと感じない時、食べたいと感じない時の飲食ほど苦痛なことは――……たぶんたくさんある。

だが、いやだ。

「ええー、いやだよ」

「だが夏梅、今だいぶ疲れてきているだろう？」

首をかしげてくる父が、夏梅の脚をみてくる。今ベンチに座った夏梅は、正直ここから動きたくないほどだ。少し黙って……ふへつとわらった。

「……ちよつと？」

「それは重畳。疲れを感じる前に、糖分は摂取しておかないとな。旅行の最中に倒れるなんて、夏梅も嫌だろう」

「やだ」

いろいろな意味を込めた「やだ」だったが、父は、そうだろう、と言って頷いた。荷物を見ておいてくれと言いつつ、懐から小銭入れを取り出して自動販売機に向かう。……結局父の言うとおりになるんだ、そうなんだ。

ふてくされた夏梅はその背中から目を離して、ベンチに置かれた旅行鞆を膝に移動させて、腕と顔に乗せた。うきうき気分がしぼんでしまう。燃費の悪い体に、ため息をつく。燃費が悪いというのか、そもそも一度にたくさんは入らないというのか。下手をしたらほぼ一日中何か飲んだり食べたりしないといけないのは、今のこの体を持つてからの悩みだった。

「のど渴いてないけどな――……」

人のざわめきと、外からの風とが合わさって、逆に夏梅のなかは静かになった。ぼうつとしてしていると、唐突に、背中から黒電話の音がした。

夏梅の背負ったリュックの中からだ。

おなじみの着信音に、夏梅はリュックから手探りでスマホを取り出した。表示されている番号は、夏梅がつい最近見知ったものだった。

「もしもし——」

突然のプラットホーム内での音楽。ホーム内に響き渡る音で、列車がやってくることを知らせる。言葉を途切れさせた夏梅の近くで、「やっと来るのね」と婦人の嬉しそうな声があがる。そして、人ごみの中から父が、スポーツドリンクを両手に持って帰ってくるのが見えた。

それらの情報は勢いよくやって来た列車によって、夏梅が目を閉じたことで、捕らえられなくなる。

夏梅の耳元で、同じ音が二重に響いてきた。

列車を出迎える音楽、列車がやって来た風の音が、スマホを添えている右耳だけ重音だった。

『あとで会いましょう、夏梅坊ちゃん』

辺りの音がやんだ、と同時に、耳元で電話の途絶えた後の音がした。ツーツーと会話が終了した事を知らせる音。知っている声の主の、一方的な言葉には、どこで会おうとかが抜けているのだが。そもそもあとつていつのことだろう。

こういうのがあばうとつていうんだよと悩んでいると、目の前で両手にドリンクを持ったまま首をかしげる父の姿に気付いた。

父がああ騒音の中でも普通に動いて、やってきていたらしい。

父は、「誰からだ？」と尋ねてきた。

夏梅はスマホをリュックにしまい、差し出された飲み物を受け取りながら「間違いない電話だったよ」と答えて、ペットボトルに口をつけた。甘い水分が喉を伝って、染み入ってくるようだった。これで気力が戻ってくるのだから、やっぱり父の言葉は正しいのか。なんだか、悔しい。

時刻場所ともに曖昧な「会いましょう」宣言にうーんと悩みながら、手がふさがれないようにリュックの外ポケットにペットボトルを入れておく。父は普通に片手ずつ鞆と飲み物を手に持っている。身体能力と反射神経の差かな、とその背中を恨めしげにみた。

到着した列車に人が集まった。黒光りした、いかにも強そうな外装に、夏梅や他の乗客たちは思わず歓声を上げる。強そう、なんかつよそう。

お目当ての車両には人が少ないので順番に並べば、すぐに中へ入ることができた。

他の乗客たちも通路にいたり、ラウンジを見に行ったりと、ごちゃごちゃとしている。おもおもしろい外の見かけとは違い、内は木でできていて、窓の格子の彫りがとてもきれいで、人肌のようなぬくもりがあるように感じられた。

夏梅は部屋をみつけて父に知らせる。父が引き戸になっている扉を開けて入るのに続こうとすると、夏梅はシャツを引っ張られて動きを止めた。

振り向くと、そこには小さな女の子がいた。といっても、夏梅より年上だろう、五つくらいの子どもだ。

「おにいちゃん、これ、落としたよ！」

女の子の手には、さつき仕舞ったはずのジュースのボトルがあった。リュックの脇のポケットを見ると、そこには何もなくなっていた。

あれ、落とすかな？とちよつとだけ不思議に思いながらも、夏梅は、少女にかがんでありがとう、と目を細めてお礼を言った。

「どういたしまして！」

女の子はにこつと笑って、両親らしき人のところへ走って戻っていった。

夏梅は、受け取ったペットボトルを持って、父に続いて部屋に入った。

「どうしたんだ？ 女の子の声がしたが」

「ちよつとね、落としちゃつともものを拾ってもらつたんだ」

「そうか、よかつたな。——これで荷物を下ろしたら、ラウンジで昼食をいただこう」

夏梅の頭を撫でようと思ったのだろうが、夏梅の頭は麦わら帽子が居座っている。

室内だと、帽子は脱ぐのかなと思って、夏梅はいそいそと背中に降ろした。そしてにっと笑顔になる。

「お昼ごはん楽しみー！」

お腹はすいていなかったが、ちらりとみえた食事処はとてもきれいで、早く行ってみたかった。夏梅は父の荷物の傍にリュックと、寝台の上に置かれたペットボトルに手に持っていた自分のものを置く。冷たいものを持っていた手に、息を吹きかける。あー、冷たい。

荷ほどきのために、屈んだ父の小脇から、バイブが振動する。ぶるぶると震える音がするのは夏梅のリュックの中からだ。

父のほうが近くだったので、父が夏梅のリュックでなっているスマホを取り出した。父は画面を見て、肩をすくめた。

「メール、だれから？」

電話番号で送られてくるメールの着信はバイブ設定にしている夏梅は、父に聞いた。

「ただの広告だな」

「ふうん？ ……みーせて」

荷物の整理をしている父の傍でぼうっとしているのも暇なので、スマホを受け取って、壁に寄りかかり、迷惑メールとして処理しようとした。

しかし、その電話番号はさきほどの着信と同じものだった。

なんか怪しげだなあと思いつつ、父をしり目に、その広告メールをタップすると、携帯会社の長い広告文の下に、用件が書かれてあった。

『展望車で落ち合いますよう Dより』

画面に表示されるのはメールの一部だけだったので、父は気づかなかったのだろう。

別に知らないわけではないし、『D』などと書かなくても、夏梅は分

かるのにと思ったが。

これから昼食だったんだけどなあと夏梅は悩む。時間がかかれないので、きつと今ということなのだろう。この人物の言葉はちゃんと聞くようにと言われていた夏梅は、仕方なく父に言う。

「おとうさん、ちよつと探検してきていい？」

「荷物はまだすこし時間がかかるから、暇なら行ってきていいが。――その前に、もう一回飲み物を飲んでおけ」

「はあーい……」

夏梅が自分が置いたと思ったペットボトルのキャップを開くと、がりつとプラスチック音がした。あれ？と首をひねる。

未開封を開けた音がした――ということとは父の分だ。確か夏梅の記憶では、こつちに置いたのが一口飲んだ夏梅の分だと思ったのだが。

「おとうさん、まちがえておとうさんのほう開けちゃった」

「どちらでもいい。もともとどつちもお前が飲めるように買ってきたものだからな」

確かに父は、わざわざ塩分と糖分を摂取する飲み物は普段自分には買わない。

「えー、でもおとうさんのぶんだし」

父は頓着せずに、荷物を出して整理している。言葉はほんとうで、夏梅がいつも飲み切れなかった分は、父が代わりに飲んでいた。昔は気にしていなかった夏梅だが、学校で回し飲みを二谷にとがめられてから、気をつけるようにしていたのでひとまず躊躇して悩む。

「うーん……あー」

夏梅は、室内に、コップがあるのを見つけた。

「ぼくがお父さんの入れてあげる！ ちよつと待ってて」

備え付けのコップ二つのうち一つに飲み物を入れた。整理の手を止めた父に、コップを手渡す、「……ありがとう」

「ちゃんと飲んでよね！ じゃ、ぼくは外を探検しに行くから！」

「すぐに戻るんだぞ」

「わかってるー！ たぶんね！」

夏梅はスマホとペットボトルを片手に部屋を飛び出した。

さて、展望車とは何でどこにあるのだろう。

夏梅はすぐに乗務員に声を掛けられ、展望車がどこにあるかを教えてもらった。

最後尾にあるというそこへは、車両を一つ隔てているのみ。

すぐとはいかないまでもまあ戻ってこられるだろうと考え、にぎやかな列車の中を突っ切っていくと、展望車に当たる最後尾につく。展望デッキへ出ようと取っ手に手をかけた。

『申し訳ありません、お客様。ここは危ないので、出てはなりません』

「あ、ごめんなさ……うん？」

聞き知った声に、夏梅は振り返った。

そして、夏梅は顔をほころばせた。

「あ、先生——」

せいかわるいな。

今朝確認してきたメールの、登録されていない連絡先のうち一通は、実家お抱えの医師からのものだった。そして、客室で受け取った、広告メールを装ったものも、彼からのものだ。

「坊ちゃん、大きくなりましたね。お元気でしたか」

「うん、元気だよ。神西先生はなんでここにいるの？」

背の高い初老の人は、口ひげを生やしている。夏梅はいつもこの人に抱き上げられると、よくそのひげを引っ張っていた。あれば引っ張りたくなるひげというものだったのか、昔の自分の行動がわからない。彼——神西と中村家との付き合いは、遡ると、母の学生時代の頃からになる。

母の頃から二代にわたって親交のある医師だが、本来であるなら横浜にはいないはずだ。

「坊ちゃんや作之助殿がおられなくなつてから、ずいぶんと日々が味気なくなつてしまいました……。先代に無理言つて、ここまで足を伸ばさせていただいたのです。お迎えにあがろうと」

「……へえ」

とりあえず、何となくの内容を雰囲気ですわつと理解した夏梅は、深く突っ込まれないために自分から質問した。

「で、用事はなあに？　なんで、おとうさんに秘密にするの？　朝みたけど、めーるおくるのおそくない？　あと、ぼくこのあとおとうさんのところに戻らなきゃいけないんだけど、先生はいつしよにこないの？」

「はい。沢山の質問ありがとうございます。お屋敷での利発さはそのままですね。質問にはお答えしたいのですが、その前に、一つ確認をさせていただきます。——作之助殿には、ちゃんと内緒にしていただけでしたかな？」

「してきたよー」

理由ぐらい知らせてほしいものだけれども。

「ぼくがこたえたんだから、先生もこたえてよ」

「では、ひとつひとつお答えしましょう。とりあえず、その喫茶処でお茶を飲みながらお話ししましょう」

夏梅の質問には答えないで、自分の要求だけ通そうとする。

どうして父も大叔父も、神西の言うことを聞けというのだろう。

すくなくとも、夏梅にとっては父の言葉の方が大事なのだ。

「おとうさんにはやく戻って来てって、いわれてるんだけど」

「大丈夫ですよ。私たちがゆっくりとお話する時間はありますとも」

神西は自信たつぷりに言う。

なんだか、何とも言えないものを感じ取って、夏梅はうろんに神西を見上げる。

「夏梅坊ちゃんがこの……に來られたということなら、そういうことだということですよ」

「……。……。先生、また何かやったの？」

顎ひげを撫でる神西は、どうにもうさんくさい。

ふむ、と小首をかしげる。

「ちよつとした運試しを、と。どちらがより運がいいかということですね」

「……。それって、だれとだれのこと？」

「どうしましょうね。聞きたいですか？ これに関して話すかどうかは別として、先ほどのご質問には誠意をもってお答えしますよ」

だれとだれのことか、なんでもいいから名前を出して、神西の反応を見ればよかったかな、とちよつとだけ夏梅は後悔した。

神西がこのようにいうのなら、父は何か問題ごとに手を取られて、夏梅どころではなくなっているのかもしれない。

「おとうさんに電話して遅れるっていうよ」

「電話してもいいですが、たぶん出ないでしょう」

夏梅はむつととしてスマホを操作しようとした手を止める。

父が何か厄介ごとに巻き込まれていて、それで夏梅からの電話が原因で、もっと悪い事態に、なんてことになったら目も当てられない。父の運の悪さは、甘く見られたものではないのだ。

「しんぱいしないかな」

「大丈夫です。あとで私も一緒に伺いましょう」

「なら、いいかなー……」

わかった、と夏梅は展望デッキへの入り口前から離れ、神西の後ろをついて行った。

窓枠の、うつくしい木彫がつくるやわらかい光と影が落ちる分厚い絨毯は、しっかりと音を吸収する。

「飲み物だけなら、甘いものを。甘味も食べられるようでしたら、飲み物は何でもいいですよ。頭を使う前には、甘いものを補給しませんね」

夏梅の食事が厳しく管理されているのは、元をたどれば、この神西のせいなのだ。

父に口うるさく言うので、父はそれまでカレーぐらいしかこだわりがなかったというのに、今では栄養士にでもなれるのではないかというほど細かく調整するようになっていく。

諸悪の根源は先生だ。夏梅はそう結論付けて、横目で飾つてある赤い花を睨んだ。

喫茶処では、神西がおごるといっているので遠慮なくおごってもらうことにした、財布もないことだし。

「二つ目の質問はなんでしたっけ」

とぼけているけれども、これで質問を繰り返さなかったら、言わなかった分は答えないつもりだ。ほんとうに。

「せいかくわるいな」

「これは悲しいことを言いますね」

大人は夏梅が何を言っても、結局変わってくれない。大人はずるい。夏梅は言うことを聞いているのに、聞いてくれない。

必要な質問とそうでないものを考える。

「じゃあ、どうして先生は、ここで何をするつもりなの？」

「ここでは、作之助殿の抜き打ち『健康診断』しようかと。恒例の、能力テストですよ。思考力、判断力、そして記憶力です」

「へえ……」

父はいつもその穴だらけの記憶のために、精神が不安定になりがちだ。だから、定期的に、医師による検査をしている。内容が内容なので、お抱えの神西が担当している。これは、母が生前の時からの続いているものらしい。なので、夏梅が生まれる前からのものだ。夏梅は詳しい内容は知らない。

「それって、ここでやる必要ないよね？ れっしやのなかだし。だから、ここへ来たのって、何かほかに用事があるんじゃないの？」

「はい。それを訊かれますとね。実は、福沢殿から先代に連絡が入りまして——こちら、横浜で、かの女学校の事件の捜査に、進展が見られたと。……坊ちゃんは、この件をどこまでご存じですか？」

思い当ることがない。

「知らない。何それ？」

「四年前の、この横浜の女学校で起きた、女学生連続失踪事件です」

紅茶を飲んで、曇った眼鏡をとった神西は、懐から布を取り出して、レンズをぬぐう。細待った眼を開くと、赤い目が露わになる。久しぶりに見た気がして、夏梅はしげしげとそれを眺めた。

「元をたどれば、坊ちゃんの御母堂の通ってらっしゃった女学校での事故が無関係ではないのでしょうか」

「事故？のことは知ってるよ。たしか……おかあさんの同級生の子がなくなっちゃったって」

母の異能力は、四十九日以内であれば、死人を生き返らせることができるかもしれないというもの。屋敷の者の話を聞く限り、母はどうやらそこで異能力を使ってしまったらしい。結果は、生き返らなかつた。代わりに、生きても死んでもいない、『物質』になってしまった、という。

詳しいことは誰も知らないようだったが、その日を境に、幽霊を見たとか、黒い何かを追ってくるだとか、果ては体調不良や心身の不調で学校を欠席する学生が増えた。唯一無事だったのが、母であったことで、不審の目で見られるようになったという。

噂によって精神に異常をきたすのでは、と状況を慮った先代——母の養父が横浜にいる、母の実の叔父である福沢の下へ行かせたのだと

いう。

「和枝お嬢さんが編入した女学校でも、女学生が連続で失踪し、騒ぎになりました。その後、その学校の体育館裏から白骨が見つかり、殺人事件とされました。その際にも、多数の女学生が学校に訴えたので、『幽霊が見える』『影が追ってくる』などとね」

うーん、と腕を組んで目を閉じた夏梅は、腕を解いて神西を見上げた。

「それって、いいたくないけどさ………おかあさんがやったんじゃないの？」

神西は口ひげを撫でながら、小さく笑った。

「坊ちゃんにそういわれますと、あの方はさすがに哀しまれ……いえ、どうでしょうね。彼女のごとは私などには推し量れませんから」

神西にもわからないことあるんだなあ、と夏梅は思った。

いい気味だ、ともちよつと思った。

しつたかぶりをしているけれども、ほんとうは何にも解っていない、とかだつたら夏梅の気が済むんだけどなあ、と思う。

「能力だけ見ればそうですね。しかし、和枝お嬢様にはちゃんとアリバイがあつたんですよ」

「へえ。じゃあ、ちがうの？」

「なんらかの関係はあるかもしれませんが、なにせ、我々はもちろんのこと、和枝お嬢様ご自身でさえ、その異能のことを完全には理解しておいでありませんでしたから」

「なるほど？」

夏梅が分かったのは、一番最初の「なんでここにいるの？」という質問にきちんと答えていなかったということだ。

「さいしよつから、おかあさんの事件のことでここまで来たっていえばいいのに」

「羽を伸ばしたかったのも嘘ではないですよ。ですが、そこはまだ『誠意をもって』という前でしたから」

「うわあ………せこい」

「ちそうさまでした、と夏梅は手を合わせた。

「じゃあ、いつしよに行くんだよね？」

「いえ、先に『健康診断』だけさせてもらおうと思つていたので、坊ちゃんも少し後で来てください。そうですね、先頭車両へ行つてみるのはどうでしょう。車掌たちが働く姿が見れますよ」

健康診断なら仕方ない。

「わかったー……」

途中までは一緒に行くということで、夏梅は元の車両に行く。

ラウンジで、ちよつと困るんじゃないかなと思つたけど、神西は普通に入ることができていた。

「先生、ここには入れるんだ」

「空き室があつたのでね。急遽予約しましたよ」

ラウンジを抜け、夏梅が「あの部屋だよ」と指さした先に、緑のマフラーの人がいた。その手には、黄色いレモンがあり、まさに夏梅たちの部屋に入ろうとしていたようだった。

「あれ、その部屋にようですか？」

夏梅が首をかしげる。

夏梅の後ろから神西が前に出た。

「御用でしたら、ここで伺いますよ」

「——いやあ、実はねっ」

にこやかな笑みを浮かべたであろう緑のマフラーの男へ、神西が一気に距離を詰める。男は驚いたように硬直した。

夏梅もびっくりである。何をしているんだろう、この医者は。

「これは面白いものですね。もしかしてこれを譲つてくれようとしたのですか、なるほどありがとうございます」

「——え？」

夏梅はともかく、マフラーの人と声が被つたのだが、それはどうしたことなのだろう。夏梅はマフラーの人を気遣うように見たが、色眼鏡をしているので、いまひとつ表情がうかがい知れない。

「おっと、もう一個あるのですね。これもまたくれるのですか？」

夏梅の目には、マフラーの人のもう片方の手をひねりあげているように見えるのだが、気のせいだろうか。

「先生、わるいことしてないよね？」

「してませんよ」

即答する。性格が悪い人は、もしかしたら、嘘もためらいなく言う人なのかもしれないな、と夏梅はなぜかこの瞬間想像した。神西は何事も耳元で言ったようだった。それで、マフラーの人の表情が変わった、ような気がする。

「なるほど、君とは気が合いそうだ」

え、と今度は夏梅だけが声を漏らす。

「ではこの二つはもらいましょう。やるなら、この先にしてください。この車両から後ろは、私が使いますので」

「——ふむ、いいだろう」

「ひとつ言いますと、ここから後ろに来た場合は、容赦できませんので」

「肝に銘じておこう」

なんだろう、何が起こっているのか。分からないままに、マフラーの人は先頭車両の方へ行き、神西は夏梅に、レモンのうち一つを手渡ししてきた。

「これ、食べれないよね」

「そうですね。でも、おもしろいものですよ。さあ、ここまで来てしまえば、後で来てくれというのも野暮というもの。入りましようか、坊ちゃん」

「先生がいいならいいけど……」

ノックもせずに、神西が入る。

夏梅は、後が続いて、父に声をかける。

「おとーさん、神西先生が……って、あれ、ねてる？」

「そのようですね」

先に入った神西は、コップを持っていた。夏梅が父に手渡した、ジュースの入っていたコップだ。父は寝台に上半身を横に倒して眠っている。まるで、座った状態で、寝落ちたような体勢だ。

手元のすぐ下の絨毯には、染みができている。

ジュースを零したまま、眠ってしまったのだろうか。

「こんなふうにして寝てたら風邪ひいちゃうのに。先生、おとうさんねてるけど、健康診断はあとでいいよね？……先生？」

神西は、コップを備え付けの流しで洗ってくれていた。

「ありがとう、先生」

「いえいえ、きちんと痕跡は消しておかなければなりませんので」

「？ コップ洗うのは大事かもね」

『痕跡』とはなんぞそれ。

夏梅は父の寝台の前にしゃがんだ。

「おとうさんってば、お客さん来てたのに、ねちやってるなんて。鍵もつけないで、ぶようじん過ぎない？」

寝ているのをいいことに、夏梅は小声でぶつぶつ不平を言う。

額にかかる赤い髪を払うと、目の下の隈がはつきりと見える。父の首に巻かれた鎖編みの髪を、首から外す。

「いつか自分の首絞めちゃうぞー」

みんな寝る時間。

洗ったコップは、洗面台の鏡の下にある白い棚に、逆さまにして戻されていた。

乾いた未使用のコップと、使用して水にぬれたコップがふたつ並んだ。

医者の几帳面な性格が出たのか、きつちりと揃えられている。

自前のハンカチをスーツの上着ポケットから取り出した神西は、濡れた手をふき終わると、ハンカチをしまい、上着を脱いだ。さて、と両手を組んで伸ばす。

「健康診断ですが、いま簡単にやっておきましょう。体を起こさせてもらいますね」

神西は、腕まくりをした。夏梅はいやそうな顔になる。疲れているだろうから、休ませてあげたい。夏梅は横浜に来た時から、父が眠っているところを見たことがなかったので余計にそう思っていた。口をとがらせて抗議する。

「眠ってるんだから、あとにしたらいいのに」

「眠っているからこそ、きちんと測れることもあるんですよ」

「……………体を起こすの、手伝おうか？」

「いえいえ、これしきのこと、坊ちゃんの御手を借りるまでもありません」

初老の体で、父の体格の成人男性を移動させるのは難しいと思ったけれども、そこは医者というのか、苦も無く抱えて動かした。

神西は、父の瞳孔を調べたり、どこから取り出したのか聴診器で胸の音を聞いていた。

「坊ちゃん、今からいう数字を覚えていただけますかな」

「いいけど……………めもとかもってきてないの？ かそうか？」

「いえ、形に残したくないもので。坊ちゃんの記憶にとどめておかれましたら、またあちらでお聞きできるでしょう？」

チツと舌打ちが聞こえた気がした。

夏梅はなんとなく天井を見上げた。天井から、がんがんと音が

立ったかと思えば、それが遠ざかっていく。鴉でもいたのだろうか。「さて——余計なネズミも消えましたね。いやはや、同類の考えることは清々しいほど読めますね」

「トリじゃない？　ねずみはあんな大きな音たてないとおもうけど」
「確かに。あれはネズミというには派手好きですね。このままおとなしく下がってくれたらよいのですが……まあそうはならないのでしよう」

腕を組んで考えてみたが、やはりわからない。

「……ぼくと先生、ちゃんと会話できてる？　なんだか自信ないな」
「私は坊ちゃんとの会話はとても愉しくさせていただいておりますよ」

「……へえー」

よくわからない人間というのは疲れる。父を休ませてあげたい気持ちはあるのだが、こうして眠っている間に体をいじくられるのを見ていると、なんだか癩に障るのだ。

「あーあ。おとうさん、はやく起きないかなあ」

疲労を込めてそう言ったのだが、神西は父から眼を離さないまま肩をすくめていう。

「あと一時間ほどは目覚めません。診察中に目が覚められたら困りますからね」

「先生、やっぱりなにかやったんだ、そうなんだ」

「まあ、仕込んだのは私ですが、こうなったのは成り行きですよ」

ペンライトをもって、父の瞳孔を詳しく見ている神西が数字を告げる。

ペンライトの光を決して胸ポケットにしまいこんで、神西は父の顔から手を離れた。

「計画とは思った通りに行かないのを含めたものが、醍醐味だと私は思っていますので」

少し父から離れて、手を握って脈を測りだすのを眺めながら、夏梅は父とは向かいにある、自分の寝台に向かって歩き、ずっと手に持っていたレモンとジュースの入ったペットボトルを置いた、「ねえ先生」

思えばいろんなことがあったのだ、瀬戸の屋敷から離れて横浜へ来てから。

「なんです?」

「大叔父さんの探偵社ってすごいんだよ。いろんな人がいてね、ぼくはあんまり他の人とは仕事について行ったりしないんだけど」

「ほう」

たくさんの人に出会った。

この異能力のせいなのもあるけれども、会えない人に出会えたと思う。

特異で、個性的で、びっくりするような人たちに。

「とくにね、江戸川乱歩さんっていう人が、とってもすごいんだよ。ちよつと見たり、聞いたりしただけで、ぜんぶわかつちやうんだ。事件もすぐに解決させたんだよ」

「なるほど。興味深いお話ですな」

夏梅は、同じ職場の人が褒められてうれしくなった。

あ、そういうえばと夏梅は思い出して、にこにこしながら神西に話した。

「その事件の帰りにね、乱歩さんに言われたんだー。『おとうさん、ねてることみたことないでしょ』って」

「ほう? 寝不足、というのなら、一目見てわかりますがね」

父の目の下の隈は、誰が見ても不健康そうだ。

早寝でそこそこ早起きの夏梅は、それでも早朝に起きたときに父が眠っているところはみたことがない。

「うん。でも、乱歩さんはぼくが早起きしてるのを知ってて、それでかしらないけど、おとうさんのことそう思ったみたい」

「いいところに目をつける方ですね」

「そうなの?」

「はい」

ふうーん、と夏梅は、壁にもたれる形で寝台に座る、父の寝顔を眺めた。

はい、終わりですといった神西は、手早く父の衣服を整えた。そし

て、なぜか父の腕を窓枠の棧にのせ、頬杖をつかせる。

「何やってるの、先生？」

「偽装ですね」

「ふうん……あ、能力テストは？」

「それは、またあとで行う予定です。準備は整えております。夏梅坊ちゃんにはまた、私がここにすることは知らぬ体ツ……!？」

ガンツと音がしたかと思えば、悲鳴があちこちで上がる。

車体が大きく戦慄いた。

神西は咄嗟に、父の体をかばうように身を乗り出した。夏梅はただその場でよろめいたただけだ。

「作之助殿は無事ですすよ」

「さすが、神西先生。ありがとうございます」

医者つてすごいよな、と探偵社の与謝野を思い浮かべながら、あたりの喧騒に耳を傾ける。

「——くだんよっだれかうちの子を助けて」「乗務員はどこよっ」「血を流して倒れてる」「おいっ このパソコンには会社の重要な取引先のデータが詰まってるんだぞ、このスプリンクラーを止める!」「やめとくれ、じいさまがこけているんだ」「ゆうちゃん、どこー!? 戻ってきて!」「車掌はどこだ!」「お医者さまはおられませんか!?!」「おい、こんなの聞いてないぞ」「どうなってるんだ」「足がいたいよ」「おねえちゃんかめをあけない」

叫び声と、どたどたと走る乗客たちの混乱した足音が、部屋の外から響いてくる。

「なんだろう、何かあったのかな」

「大人しくするどころか、仕掛けて来たようですね。行ってみましょう」

「うん……おとうさんも起こさない」と

父に近づいて肩をゆすった。

父はゆっくりとした深い呼吸で、眠りから覚める様子はない。

「ねえ、おとうさん、起きて。おとうさん?」

「作之助さんはお疲れのようです。私たちだけで行きましょう」

神西は父の姿勢を整えるばかりで、まったく起こそうという空気を感ぜられない。

眉を吊り上げた夏梅が、神西が羽織り終えた上着の袷を引っ張って強い態度に出た。

「おとうさんが眠っている間になにかあったらたいへんなんだけどっ」

「では、内側から鍵をかけておきましょう。ちよつと細工すれば外からでも鍵を閉められますので。そうすれば、外から勝手に中へは入れないはずですよ」

外から鍵をかけられるなら人ならここにいるみたいだけどね、と夏梅は突っ込んで良いのかわからず、唇を震わせてから結局ため息をついて頷いた。

「……わかった」

「あと、これは持って行かせてもらいますね」

夏梅が襟元から手を離すと、神西はそれを直して、夏梅の方の寝台に近づいた。

そこでレモンの横においてある、開封済みの、ちよつとコップ一杯分が減ったペットボトルを手に持った。

「いいけど何するの？」

「コップがあつたということは、口をつけていないということでしょう？　けが人に水分摂取させるものは重要ですから」

なんだから、腑に落ちなかつたけれども、それを突き詰めている時間はないのでここは流すことにした。

夏梅は、ペットボトルを持った神西とともに扉を出ようとする、乗客があわただしく走り抜けていくところだった。人がいなくなるのを待ってから、外に出ると、何処から出したのか、糸で取っ手の鍵のところ細工をして引き戸を閉めた神西が、糸を引っ張ると、かちりと金属音を鳴らして糸を回収した。

夏梅は、取っ手に手をかけて開かないのを確認する。

「すごいね」

「お褒めに預かり光栄ですよ」

これは密室完成ってことにならないかな。それって事件で使われてたら、ややこしくなりそうだなと考えて、夏梅はそもやもやを言葉にした。

「なんか、犯罪者寄りだよ、神西先生の出来ることって」

「ああ……なんとという悲しくなるお言葉でしょう。どうか、そういったことを他の方に感じて、そのように言ってくれますな」

「え、ご、ごめんね、じゃあなんていえばいいかな」

「そうですね……『多彩なことができるのですね』と言われると、嬉しいのではないかと」

「わかった。こんどからそうするよ」

廊下を走って来たほかの乗客をひとり神西が捕まえた。

「私は医者なのですが、みなさんどうなされたのですか」

「医者!? ほんとか!! ああ、来てくれ、うちの子が」

「お医者さまがいるの? こっちに来てちようだい」

「医者!? どこに」

人が聞きつけて集まり出した。

神西はあちこちから手を伸ばされたが、夏梅を背中にかばった。

「——治療は全員します。落ち着いてください。怪我が浅いものは最後尾の大広間に集めてください。重傷者は、私が先に順番に伺いますので、まずけがをされた方の容体を再度確認してください」

初老にしてなおぴんと伸びた背に、年を重ねた低く、朗々とした声は、人を落ち着かせる効果があるらしい。集まっていた人が我先にと戻っていく。

「重傷を知らせてくる方が戻ってくる前に、最後尾へ向かいましょう」
「ここで待たないの?」

「準備することがあるのです。それに、彼らも私が軽傷の方の治療のために大広間にいくことは知っていますでしょうから。どちらにせよ、この列車内は一方通行です。すれ違いにはなりませんよ」

「たしかに……」

大広間へ向かうと、乗客たちが人が抱えてやって来た。

神西からペットボトルを受け取りながら、眉をひそめていった。

「なんだか、子どもばっかりじゃない?」

「そのようです。治療が急がれますね。坊ちゃん、怪我をした方のご家族や友人と一緒に固まるように伝えてください。心細いでしょから」

「わかった」

「なあ、ここに来れば安全だつて聞いたんだが」

「ここは治療するための人が集まってくるはずだが、そうでない人もやってきているらしかつた。」

「ここでお待ちください。ほかに知り合いの方がいましたら、また動けない方がいましたら、協力してここへ集まってください」

おろおろして何も言えなかつた代わりに、神西が答える。

そんな神西の言葉に、乗客たちは青ざめた顔をしていたが、頷き、従っていた。

唯諾々とした乗客たちに、少々違和感を覚えた。

夏梅坊ちゃん、と神西が小声で呼んでくるので近くに行くと、傍にいる夏梅にだけ聞こえるような音声で説明した。

「……パニックという状況では、会社経営者や医師といった立場の者がリーダーシップをとったり、ほかの群衆はその言葉に素直に従いやすい傾向があるのですよ。その者の適性ではなく、社会的な地位によつて信頼を獲得してしまつたりも」

周囲を横目で見まわした。

神西一人の言葉に従つてここに来ていゝ者たちなので、そういう人ばかりが目につくことになる。ぎゅつとペットボトルを握りしめた。

「坊ちゃんの、そういう聡明なところがとっても好ましく思いますよ」

神西は白い眉を下げながら、微笑した。

「そうですね。たとえば、坊ちゃんの学校が火事になったとき、そこに警察官がいたとします。その人は決して、消防士ではありません。ですが、どうでしょう」

「……たすけてつておもうかも?」

「そんな感じです。さあ、重傷者のところへ行きましょう」

「この準備はもういいの?」

「あとちよつとです」

神西は同じ車両内にある、喫茶処の珈琲をつくる機械をいじった。珈琲の滴が落ちる部分を、そこにあつたマドラーで器用に割り、珈琲豆の代わりに、何か白い粉を入れ、電源を入れる。すると、割った部分から、なにやら気体が出ている音がした。

「これで仕掛けは完了です。急ぎましょう」

「先生、何やったの?」

「気分を落ち着かせて、パニックを広げないための仕掛けです。つまるところ……皆さん方には眠っていてもらおうと思ひましてね」

後半部分は小声で言った。

「眠る?」

「皆さんは、眠る時間なのですよ。知らないのですか?」

神西が、心底不思議といったふうに見てくるので、夏梅はうつと詰まった。

「し、知ってるよ! みんな寝る時間なんですよ?」

そういえば、幼稚園の時には、お昼寝の時間があつた。

つまり、そういうことなのだろう、と知ったかぶりを自分の中の知識で納得するために頷いた。

すると、神西は「その通りです」というと、夏梅に退室を促した。

「さあ、急がないと、こちらもぐつすりです」

「あれ——でもけがの治療は?」

「あとで来ますよ。ああ、今回はこの粉が大活躍ですね」

そういつて、神西は夏梅が抱えていたペットボトルを取り上げた。それは粉ではなく、液体なのだが……。

神西を前にしてその背をついて行く。

最後尾の車両へ向かう人はほとんどみかけなくなった。

人とすれ違うたびに、最後尾へと神西は促し、怪我をした乗務員が倒れているのを見かければ運ぶようをお願いしていた。

あつという間に三つの車両は、静かになり、うめき声とすすり泣き、そして家族か友人かの声掛け以外は聞こえなくなった。この物音でも目覚めなかつたら、父はほんとうにどこか体に問題があるのかもし

れないと不安になった。

向かった先の重傷者は数名で、神西が治療している間は、夏梅は外で待たされた。

うめき声がやんで、静かになる。すると、やがて両手をハンカチで拭きながら出て来た神西が、なかの様子を夏梅がうかがう隙もなくその扉をぴつたりと閉めた。

「こちらはお役御免ですね」

神西は、空になったペットボトルをごみ箱に入れた。

えだにや。

「これからどうしよう……さっきの人たちのけがは、先生じゃないんだよね？」

「心外ですね、私は医者ですよ。怪我人を治す側の人間です。危害を加えるなんてそんなことしません」

たしかに、自分が傷つけて治療はしないかもしれないだよ、たぶん。ふつうは。

ふうん、と相槌を打ちながら、夏梅はつま先を絨毯にとんと突いて、違和感がないことを確かめた。そんな夏梅の足元には、季節外れの緑のマフラーを首に巻き付けた男の人がふかふかの赤い絨毯にのびている。

「いきなり何か投げつけて来ようとするから、びっくりして蹴っちゃったけど、どうしよう。……起きないね」

「気絶しているだけです。すぐに起きますよ」

両手にまたあのレモンを握ったまま、床にうつ伏せで倒れている。この男の人は、おもちや職人か何かだろうか？ レモンに強いこだわりとかあるのだろうか？ 確かにみごとなレモンだけれども。

みんな何が起こっているのかわからず、最後尾の車両に避難している人さえいるのに、ずいぶん、呑気な人だなあ、と倒れた姿はまるでカエルが伸びたような格好になっている男の人を見下ろす。

夏梅はもうひとり呑気な人を知っている。こうして周りだけが人が続出しているというのに、子どもの夏梅よりもぐつぐつと部屋で寝入っている父だ。

「ここで、なにがおきてるんだろ。またおとうさんの運が悪いやつかな？」

母が存命のときに、異能力が使われたのは、三回だったと夏梅は記憶している。

いずれも、父の異能力では察知できなかったり、察知できても逃げ場がなかったりして逃れられなかった死だった。

一度死んでしまった人は、死に易い。

不運な偶然に巻き込まれやすい。運がないのだ、本当に。

「どうでしょう？　結局、〃薬入り〃を飲んだのは、あちらですが……こうして眠っている間に、私たちが問題解決のために動いているところを見ますと……やはり壊滅的に運が悪いのは坊ちゃんの方かもしれませんね」

「なにかいった？」

「いえいえ、何も」

「この男の人、何かに追われてたのかな？　おもちゃなんかぶつけようとして来て……この人もぱにつくだったのかな？　先生、何か知らない？」

「おや？　質問だけして答えを得るような怠惰はいけませんね」

あ、そう？　と夏梅は顎に指を添えて、小首をかしげた。

なるほど、なるほど……。

「じゃあ、別にいいよ。ぼくひとりでみてまわるから」

神西の視線が泳ぐのをしり目に、肩をすくめた。せっかく言うことを聞いてあげようと思ったのに、言わないんじゃないだろうか。夏梅だったら、神西がみせないようにしていた部屋をまず確認するし、いまだに戻っていない最後尾の軽傷者たちのいる車両の様子を見に行くし、この先の車両に行つて状況を確認しに行く。それで、他の乗務員や運転手の人を探しに行く。それと父が起きるのをまったり、大叔父である福沢に電話で連絡を取ったりする。ああ、それか、大叔父に電話を先にして、その間にここで倒れているマフラーの人が起きたら、事情を訊くのもいいかもしれない。どうしてこんなところに一人でうろうろとしていたんですか、なんでもおもちやを投げつけようとしてきたんですか、とか。

まあ、たぶん、夏梅が思いついた行動のどれかは、神西にとってずいぶん都合が悪い状況になるんだろうなと思う。

そういったことを言えば、神西は髭を揺らしてにっこりと微笑んだ。

白い口髭を指でゆっくりと撫でつける。

「それはお待ちを。私の口が過ぎました。ええ。どうか、坊ちゃんは

そのまま、あまり自発的な行動をさせないでいただきたいのです」

「…………『自発的』ってなあに？」

「自分から行動することです。こうだと思ったり、こうしたいと思つて行動することです」

「なんで？」

「実は私が計画していた能力テストなのですが、無難に安全なものを準備していたのです。が、このような事態になってしまいましたでしょう？」

「ぜんぜん、安全じゃないじゃん」

ジト目で神西を睨むが、気にした風もなく微笑んで何度も頷く。

「そうなのです。ですから、この混乱を収めて、また場を整えたいと思ひまして」

神西は、機嫌よく笑う。

夏梅はそんな神西からちよつと距離を取るように窓の横の壁にもたれて、胡乱げに見上げる。

おかしいなあ、神西は医者で、さつき人を助けるために働いていたのに、夏梅の目にはなんだかうさんくさい、悪い人に見えるのだ。

混乱を収める、場を整える…………悪い言葉ではないはずなのに、なんだか不穏に感じる。

ぬぐいきれない違和感を置いて、とりあえずそういうからにはあてがあるのだろうと夏梅は尋ねた。

「じゃ、なにがげんいんかわかつてるの？」

原因と夏梅は言った。列車で同時にたくさんのけが人が出たことから、列車の何がしかの不具合による事故だと思つていた夏梅はそういったのだが、神西はにこりという。

「ええ、犯人はもう捕まえたのも同然ですから」

夏梅が目を見開いたのを、神西は気づいていないようだった。

ふふふと髭に手を遣る神西は、ずいぶんと余裕げなそぶりで語る。

「乗客の安全第一に治療や鎮静のために後手後手に回つてしまいました。が、これからは私にたたかせてもらおうと思ひます」

余裕たつぷりな人はいつも最後に負けてしまうというのは、本でも

映画でも絵本でもそうであって……たしかに、現実にはどうかはわからない。でも。

「先生に任せてほしいじょうぶかなあつて不安かも」

「おや、信用がありませんね」

眼鏡の奥の、開いた赤い目を覗き込んだ。

——この目は凧いでいる。

きつと夏梅は気づかなかつた。

気づいたのは、言葉が多かつたからだ。つまり、『語るに落ちた』というやつだ。

「だって、先生、おとうさんのこと考えてないでしょ」

眼鏡の奥で、開かれた赤い瞳。

こてりと首を倒し、不思議そうな雰囲気の中。その目の前に、夏梅は人差し指を一本、立てて見せた。

「そろそろ、先生が言つてた時間じゃない？」

——1時間。

「ぼくは動いちやダメでも、おとうさんはいいんですよ。あんまり、おとうさんのこと大したことないなんて思つてたら、先生。計画がずれて楽しいなんて思えなくなっちゃうかもね」

「作之助殿を侮つていたわけではないのですが」

神西は後ろに流していた白い前髪を手櫛でとかす。年月を重ねたことによる綺麗な白髪。なんとなく神西はこの色の髪の毛のほかは似合わないように感じた。想像ができない、のほうに近いだろうか。

初老の医師は、静かに朗らかに言葉を紡いだ。

「私としましては、坊ちゃんが、作之助殿の安全を考えて行動を制限していただけたらと思つていただけで……」

「ぼくが思つたことをこうどうしちやだめなんだつて、さつき言つてたと思ふけど」

「坊ちゃんには、協力していただけたらと思つていました……」

「いつからぼくは先生の味方になったの？ みんなみんな。おとなはみんな自分勝手にしてるし」

どうしてショックを受けたような顔をするのだろう。ぜつたい、夏

梅のほうが我慢ばかりしていると思う。神西のその涼しげな顔をゆがませてやりたい、とふいに、なんとなくぼんやり思った。

(――あれ、変だな。そんな悪いこといつもは考えたりしないのに……)

自分の気持ちに戸惑って、胸に手をあてて不思議に思っていると、いつもよりいくらかしんみりとした声で、初老の医者は言葉を紡いだ。

「では、年寄りをお願いを一つだけ聞いてはいただけませんか」

「うーん………聞いてからきめる」

「慎重になられましたね。以前でしたら、『うん、いいよ』と頷いてくださったでしょうに」

視界の端で、指がピクリと動いたように見えた。起きたのだろうかとマフラーの男の人を確かめようと伸ばした手を、神西が横からつかんで止めた。夏梅の耳に顔を近づけてきて、小声で言う。

髭が耳に当たってくすぐったい。

「では、『若しも』です。――若しも、作之助殿が、この男からもらったモノを欲しがったら、あげないようになしてください」

父があのおもちゃ？のレモンを欲しがるようにには思えない。父が欲しがらなければ、神西のお願いは聞かなくてもいいのだ。これはお願いにもなっていないことに思えた。

「それだけ？」

念のために確認したけれども、老医はどこか愉快気に眉をあげて頷くだけだ。

機嫌のいい時の大人ほど、良からぬことを考えているもの。夏梅の、三年間の人生経験からくる独断と、偏見ではあるけれども。

「……何のためにそんなことするの？」

「強いて言ったら、また運試しです」

「――また？ 何やったか知らないけど、さつきもそういつてたよね？ さつきは何したの？ それを教えてよ」

「ご勘弁を。これは私の探求心です。結果が出ないうちは、その過程も申せません」

「また、難しいこといってわからなくするんだから……！」

まゆをよせて悩んだ。一見して意味のないお願いに思えるが、何か神西にとっては意味があるのだろう。でも、その目的の意味にはまったく見当がつかなかった。……分らないなら、仕方ない、と一旦思考を放棄する。

「……わかった。いいよ。おとうさんが、あんなの欲しがると思えないし……けど」

夏梅の目からしても、何の変哲もないつつるのおもちやだ。

特に、心は惹かれないのだが。

「もし、おとうさんが、ほしいってなったら、面白いかも」

夏梅はにこにこ笑った。そうしたら、どうしよう？ 神西はああいうけれども、夏梅が父におもちやを譲ってあげるのも面白そうだ。想像してくすくすと笑っていると、視界の端でマフラーの人の肩が動いた気がした。近くにある、神西の顔をどけて確認しようとした。

「あれ、もしかして起きたんじゃない？」

「それは私が確認しておきましょう。坊ちゃんは、お部屋を見てください。そろそろ起きられるでしょうから。あと、くれぐれも、もう一つのお約束はよろしくお願いしますよ」

その言葉を受けて、肩をすくめる。

ほらね、一つだけと言っておきながら、結局他にもお願いしてきているのだ。大人はずるい。

ここにいれば、また神西にお願いと称していろいろ頼まれてしまいそうな予感がする。

これ以上は、夏梅だつて手いっぱいだ。言うとおりにするのは癪だけれども、父のこともあるだろうし、さっさと客室に戻るのが一番だ。

「はーい」

父の目が覚めるときに、夏梅がいないと困るだろう。マフラーの人は、こう見えてでもやっぱり医者である神西に任せるのが良いのだろう。よし、と決めて、夏梅は客室に戻ることにした。そして、少し行って立ち止まって振り返る。

「鍵開かないんじゃないかな？」

「ああそうでしたね……では、私も行きましょう」

そう言つて神西は、両手でこぶしを作り、体の前で軽く打ち付けた。まさかこぶしで殴つて鍵を開けるのかと戦慄く夏梅の前で、神西のそのこぶしは振り下ろされた——色眼鏡をかけた、倒れた男の人の顔面に。

「ぐっ……」

ばきや、くたり、と色眼鏡が破壊される音と力なく弛緩した体に、夏梅は言葉もない。いや、驚きのために声をあげる。

え！　なんで、どうして!?

「えだにや!？」

噛んだ。滑った。理解ができない。

ぐつと奥歯をかみしめて恥ずかしさを耐える。

「これで行けます。さ、行きましょう、坊ちゃん」

神西は何でもないことをしたかのように、マフラーのその下の襟首をつかみ、夏梅を先導する。

呆然としていた夏梅は慌ててその後ろを追いかけて、そのマフラーの人の顔面を見て、思わず口に手を遣つた、「うわ……」

これは酷い。

理由のない、ただただ理不尽な暴力が、無抵抗で無力でこれといって罪のない失神者を襲つたように、夏梅の目には見えた。この初老の、人の良さそうな顔をした人が医者だなんて、今この場面を見た人は信じられないだろう。夏梅もだ。

唐突な暴力のせいで、夏梅は頭が回らない。なんだろう、これから鍵を破る前に、こぶしで試し殴りでもものだろうか。

いくらものを投げて来ようとした人に対してであっても、これはひどい。

戦々恐々としている夏梅の前で、神西は血の付いたこぶしを扉にたたきつけることはせずに、普通にネクタイのピンで鍵を開けたことで、夏梅は開かれた扉の前で硬直した。

「……えっ……なぐつて開けるんじゃないの……?？」

「おや、殴つて開けようだなんて。そんな野蛮な。何故そんなことを

？」

なぜって、それを聞きたいのはこちらなのだが。言葉にならず、くちをもごもごさせて、結局言えなかった。

そうして神西の手によって難なく開かれた扉の前で立ちすくむ夏梅へ、それでは先頭車両の方へを見てまいりますとにこやかに辞する神西の手に、ずっと掴まれたままのマフラーの人の襟首を見ながら、夏梅は手を振った。

「……なんか、疲れたな」

部屋に入ると、出たときのまま、健やかに眠る父の姿が目に入り、むっとした。

「おとうさん、そろそろ起きてよ」

夏梅は父の鼻をつまんだ、「おとうさんってば！」

起きた父は、やけにぼんやりとしていて、ちよつと心配になった。一時間も熟睡していて、物音にも気づかなかつたらしい。思わずむくれる。なんなんだ、大変だったんだぞ、夏梅は。父が眠っている間に大変だったことをいろいろ言いつけてやろうと思ったが、父に教えてはいけないと言われていた神西がらみの話が多すぎて、結局口を閉ざすしかない。

父に神西がこの列車にいることは内緒である。

なら、このねぼすけの父に嫌みを言えることとはなんだろう。

夏梅は考えて、あつと思いつく。

父と同様に呑気な人がいた。その人は、さきほど神西によって理不尽に酷い目に合っていたけれども、そもそもこの人はこの部屋を訪ねようとしていた。

「ぼくが戻ってきたとき、マフラーのお兄さんが来てたのに」

父は寝ていたから、その人は神西に連れていかれてしまった。

「どうしようって思ったよ」

夏梅は口をとがらせて言った。

ねぼすけだ。

それを放せと父は言った。

それでも放してやらない、と夏梅のなかの天邪鬼が顔を出し、すぐさまそう返していた。

「おい、夏梅！」

異能力者である父だが、その手から逃れるのは案外簡単だ。 視てから動けばいい。未来が見えたとしても、体がそれに反応できるかと言われたら……かなり身体能力のいい父はたいいのことに反応しきってしまう。

それでも人間辞めているわけではないのだ。——いったん死んで、生き返ったことのある人間が、人間をやめているかいないかでは賛否があるだろうが、それはこの際おいておいて。

できないことだつてある。

さつきまで眠っていた人がすぐに動けるかと言えばそうではないように。

「っ おいー！」

咄嗟に体が動いたことで、図らず夏梅は、神西の言いつけ通りに動いてしまった。

しかし、どうだろう、この状況。

夏梅はレモン片手に、今のこの有り様を振り返る。

このなんの変哲もないレモンだが、父の固執ぶりを見るに、あの神西の思惑の裏をかくのに、ふさわしい道具となるのではなからうか。

父の手を紙一重で回避。

寝台の上から飛び降りて、一跨ぎで距離を取る。

どうしてかこのレモンを手にしたらしい父を外へ誘導しながら、最後尾の車両に行くのはどうだろう。神西は夏梅が考えて行動するのを嫌がっていたが、父が問題の解決に当たることについては明確に否、と言っていない。ひとつの案が頭に浮かんだとき、背中が呻きがある。

「うっ…」

部屋の隅にまで行って部屋の外へ出てしまおうか思っていたが、うめき声を確認するために振り返ると、今まさに父が転んでしまうところ、たいへん焦った。

変な体勢で顔をあげた父は、膝さえつき、だいぶかなりきつそうだったが、まあ大丈夫そうだった。

ほっとした。

まだ腕を伸ばしてくる父に対して、レモンを掲げる。

好しよし、これをニンジンにして、父を連れ出そう。

レモンをニンジンにだなんて、変な話だけれども。

「おとうさんてば」

父のことを実験のモルモットにしかとらえていなさそうなあの神西に、一泡吹かせてやろう、その光景を思い浮かべ、愉快になった夏梅は、この寝坊助の父の軽口をまず一笑に付すつもりで口を開いた。

「ねぼすけだ…」

閃光だった、突然の光がはじけ、音が頭を殴る。

頭がぐらぐらする。

これはなんだろう。父が眠っていた時に多発していた轟音が多重に頭の中を反響しているようだった。いや、きつと音ではない。振動だ。頭の中が揺れている。

平衡感覚を失った夏梅は、まず父を呼んだ。

さて、自分の声が聞こえない。

キーンと耳鳴りがするので両手で塞ぐ。

自分の声は聞こえなかったので、喉がつぶれたのだろうか？

そして視界は真っ暗だ。トンネルにでも入ったのだろうか。

天井に穴でも開いたのか、雨が降って来る。

頭に何か被さってきて、雨を遮った。

そこで列車の音も何か被さってくる音も聞こえなかったことに気付く。

声が出ないのではなく、耳が聞こえないのかもしれない。無音で真っ暗で、そして手の指先からは温度が抜けていくようだった。

冷たい、とてもつめたい。

顔を動かすと、髪が瞼に触れるのを感じた。

トンネルではないのか。ただ、目を閉じていただけなのか、そう気づいて目を開いた。

『——見えない？』

しかし、見えなかった。

言えたと思った自分の声も聞こえなかった。

なるほど、耳が聞こえなくなっているのは確定らしい。

手を宙に浮かして彷徨わせる。父はどこにいたんだっただろうか。

すると何かに体を包まれた夏梅は、脚が宙に浮いた。

そのまま、どこか——寝台だろう——に横に寝かされたのまで分かった。

焦げた肉の匂いが鼻腔をくすぐる。

それが自分からのものだと気づかなかった。

『おとうさん？』

何が燃えているのだろう。燃えているというよりは、焦げている匂いだった。熱は感じない。少なくともこの個室の中で火が燃えているということはなさそうだった。

父に呼びかけても、自分が聞こえないのでは仕方がない。

何かが目元に乗せられた。そのまま頭を撫でられたので、父がいることが分かった。

しばらくすれば、聴力も視力も戻ってくるだろう。耳鳴りが遠のいていくが、視界は閉ざされたままだった。頭を動かすと、吐き気が襲ってくるので、じっとして回復を待つ。

夏梅の傍らから、遠のくのは耳鳴りだけではなかった。

父がいるであろう場所へ手を伸ばすが、空を切った。

『……………うえ』

体はぴくりともしないくらい、具合が悪かった。背中を寝台に付け

ているので、床からの振動はしっかりと伝わってきた。
その足取りはしっかりと知っているし、大丈夫だろう。

悲壮な思いに浸っていた夏梅は、少しの間、眠ってしまったようだった。

そのことに気付いたのは、夏梅が寝台の下に落ちたことよって、目が覚めたことによる。

ガンガン、と進行方向が切り替わる、金具の打ち付けあう振動。
勢いよく曲がる空間。

静止していたものは、その変化に置いていかれる。

『ぶえっ……』

夏梅は寝台の下にごろごろところがっていた。

なんだなんだと鼻を押さええると、分厚い絨毯を通して何か激しい摩擦をしている振動が伝わってきた。体を引っ張られるような引力を感じた後、体を起こした夏梅は、車体の揺れに上半身のバランスを崩してしりもちをついた。

「いたっ」

なんだろう、急カーブでもしたのだろうか？

体を支えるために手をつくとき、鈍く——けれど自己主張する痛みに小さく悲鳴をあげたが、まず痛みよりも、自分の声が聞こえることに気が付いた。

「あ、おとうさんは……外だっけ」

目も見えず、耳も聞こえないとき、寝台から伝わってくる、足音の振動が部屋の外へと向かっていったのを感じた。どこからかぼんやりとすすり泣きも聞こえてくるのに、不安をあおられて、夏梅は部屋の出入り口である引き戸へ手をかけ、開いた。

同時だった、ガラスが砕け散る音、銃が発砲される音。

夏梅の目の前で、父が倒れるところだった。

びゅうびゅうと割れた窓ガラスから、勢いよく吹き込んでくる風が、夏梅の髪をもてあそぶ。広くないこの廊下に人はふたりだけだっ

た。夏梅は倒れているふたりのうち、父の方に駆け寄った。

「おとうさん！ 大丈夫？」

左手を床に置いて片膝を立てる。

父の顔に耳を近づけると、呼吸しているのがわかって、ほっとした。

「え、いやいや……また寝るの？」

さすがにおかしくはないだろうか。

心配になりながらも、倒れているもう一人に目を向けると、うつ伏せに倒れている人は特徴的な緑のマフラーをしていた。神西に連れたいかれた男の人で、大の字になっている。背中が上下しているので、眠っているのだろう……。

なぜこんなところで寝ているのだろう。

父の手には銃が握られていて、窓へ向けて発砲したようだった。

眠りにつきながら発砲した、なんてことありうるのだろうか？

そしてもう一つ不思議なことに、先ほど垣間聞いたすすり泣きはすっかり已んでいた。——いや、不思議も何も、聞こえたのが気のせいだったのかもしれない。

「こんな大きな音たてても誰も来ないんだな……」

最後尾の車両に集まっているからだろうか？

そういえば、このマフラーの人は、神西に引きずられ、先頭車両へ行ったはず。

だが、ここに連れて行ったはずの当の神西の姿はない。

意識のないまま連れていかれたはずの人が、ここにいる。

そして、連れて行った人はいない。

「先生、やられちゃったかな？」

ひとり呟いてみるが、応える人はいない。

なんだか、みんな眠っている中で自分だけ起きているのは、不公平な気がする。

何をしていてもむなし。

「……とりあえず、床で寝るの良くないよね」

子どもを置いて、暢気に眠っている大人ふたりを部屋で寝かせようと、まず父の脇の下に手を入れて、引っ張る。重い。あと、なんか硬

い。

いったん動きを止めて、硬いのは何かと父の上着を脱がせてみた。すると、替えの弾倉やらハーネスやらで武装されていたので、ちよつとでも軽くしよう、運びやすくしよう、とそれらを解除して、ついでに靴も脱がせて引きずった。なんだか妙に利き手に力が入りにくかったが、泣き言なんて言つてられない。

「おもいおもい重いー……なんか手いたいー」

かかとで踏ん張つてなんとか部屋の中に入れる。そして寝台にもたれ掛けさせると、自分は反対側に回つて、再び脇の下に手を入れ、思いつき後ろに倒れ込むようにして引き上げた。そこでひいひいはあはあ、膝に両手をついて、肩で息をする。

「はあ…はあ、ああー…ううー…づかれた」

足元へ回つて、一本ずつ寝台の上に乗せていく。長身である父は、足も長い。もちろん重たい。夏梅のようなひよろひよろとは違つて、筋肉量だつて違う。

もう、一人分だけで酷い運動量だつた。

それでももうひとり残っている。

鉛のように重い体を、引きずるようにして、また部屋を出る。

うつ伏せに倒れたままの男の人も、同じように脇に手を入れて引きずり、体を運んでいく。すると、マフラーの男の人の体に合わせた形で、絨毯が暗い色をしているのに気付いた。

「なんだろう」

マフラーの男の人を右手に抱えたまま、膝をつき、左手でその絨毯の暗い色の部分に触れた。左手を床から離すと、なんだか手が濡れているような気がした。みると、少し濃くなっているように見えた絨毯は、何かでうつすら濡れているようだった。それはこうしている間にも薄れていくようだった。水ではなさそうだ。乾くのが速すぎる。

父の時もそうだったのかもしれないが、その時は必至で気が付かなかった。

「なにこれ？」

学校の化学では、薬品を調べるときの調べ方に、匂いを嗅ぐという

手段を習った。そうでなくとも、何となく濡れているそれが何か調べ
るのに、そうするのは割と動物的な行動なのかもしれない。

何かに湿った手を顔に近づけ、気が付いたら——真っ暗だった。

ごうごうという吹き付ける風の音に囲まれたまま、膝にマフラーの
男の人を乗せたまま、夏梅の意識は暗転した。

うそだー。

近くの、ごそごそ、かちやかちやという物音。
しかし真つ暗な視界。

また目が見えなくなったのか、悲観に暮れたが、おもむろに足音が近づき、自分の目元にある何かを、ひっぺがえされ、やっと目元に濡れたハンカチを置かれていて、瞼を閉じて射たままだったと気づく。重みを失った瞼を開ければ、ひっぺがえした人が見えた。

「――え、先生？　なんでおとうさんは？　どうしてここにいるの？」
予想していなかった顔に、矢継ぎ早に質問する口は止まらなかった。

髪の毛が少し乱れた神西が、白髪を撫でつけながら、微笑む。

「作之助殿もいますよ、ここに運びました」

「……先生、いつ来たの？」

なんだか、頭が妙に鈍い。

意識が途切れる直前にはいなかった人物が最初に目に入るのは変な気分だった。

状況を把握しようにも寝ころんだままの視界には焦げた天井と神西しか映らないので、上半身を起きこそうとした。

しかし、それを神西にとめられた。

手袋に包まれた指がつつと夏梅のあばらの間に置かれ、起き上がりかけた拍子に割ときつめに圧迫された。夏梅は一瞬自分の鼓動が乱れるのを、相手の指先の部分で感じた。

華麗に寝台へ舞い戻った夏梅は、柔らかな枕に後頭部を沈めながら、ちいさくえずついた。

ひどい、散々だ。

「はい御免なさい、坊ちゃん。まずは指の手当てをしなくては」

「ゆびっ。」

なんのことだ。いぶかしんで自分の手を見ると、右手の指が何本か

無くなっていた、「うえええい……ぎぎ」

まったくもって気づかなかった。

これは酷い。見てられない。

神西はなんてことなさそうに、骨と肉と神経が丸見えの焦げた断面があらわな夏梅の手を取る。

「すぐに終わりますので、気分がすぐれないようでしたら、そうですね……あちらを向いてください」

夏梅は神西が示した方向ではない方を向いて、そこに父を見つけた。

……神西、なんてやつだ。わるいやつだ。ぷりぷりしながら、夏梅は頬が緩んだ。

よかつた、いた、とほつとして……そしてぎよつとして声をあげる。

「おとうさん、まだ寝てる!!!まだ!!!」

まだ寝るの!?! いつ起きるのか。夏梅が起きるのを待っているのが、横浜での日常だった。それなのに、ここに来てから夏梅は父が眠っているのを眺めるのがほとんどになっている気がする。

これはもう先生に言いつけるレベルだ。もうなんなんだ、病気?

病気なのか?

……そうなのだろうか?

夏梅は神西の上着をつい、とつかんだ。

「……先生、おとうさん病気じゃない?」

「病気ではありません。安心してください、ちよつとした副作用ですよ」

「そっか!……それって平気なの?」

なんだか、物々しい単語が聞こえた気がした。

なんで『副作用』とは……?

表情をくもらせたまま尋ねる夏梅に対して、神西はひげの生えた顎に指を遣って思案するように言う。

「いえ——どうでしょう。先ほどの作之助殿の言動は少々不可解な部分もありました。これは薬の副作用と言っているのか。できるだけ安全を考え、後に引きずらないものを選んではいるのですが」

「まっつて、何言ってるの、分からない」

「わからなくてもよいのです。そのように話しました」

あれつと首を傾げた。ふつうは、だ。

「わからなくちや意味ないよね、せんせい」

「それでもありません」

むっつとして半身を起こす。「動かれなさいますな」という注意は耳を素通りし、ぎよつと硬直する羽目になる。

「かわりに運んでくれてありがとうって言うべき？　でもなんで床？

あと、この緑のマフラーの人、さつきよりひどくない？　どうしたの？」

膝をつく神西の脇に、大きく膨れた黒い鞆。その同じ床には、ポロポロになっっているマフラーの男の人がのびている。……この人は何がさせられすぎでは？

先ほどはうつ伏せに倒れていたので気づかなかったが、顔面青あざだらけだ。

父とこのマフラーの男の人は、一緒に倒れて眠っていた。だから、父がこの人をこんな目に合わせたと考えられるかもしれないが、父の得物は主に銃だ。対してマフラーの男の人は、打撲傷がほとんどだ。

だから、おそろくきつとこんな状態にしたのであろう、神西が、今ここでなんと夏梅に説明するのか。無意識に身構えつつ言葉を待った。

「こちらへ戻ってくる際に、起きてしまいましたね、少々絡まれてしまいました」

「……ふーん。そういうえば、先生その鞆さつきもってなかったよね？」絡まれたから、どうしたのかをあいまいにしたままの医者。

それをわざわざ突くのは、面倒だった。きつと聞いても楽しくないことだ。

そろりとマフラーの人から目をそらした夏梅は、次に目についてのについて尋ねた。

「これは治療器具が入っているのです。さきほど他の乗客の治療をしましつてね」

「ふーん……みんな寝てるの?」

さつき別れる前には、懐やらポケットやらの中から聴診器やペンライトを取り出して父を診察していたが、鞆の中に、他の道具を持ってきていたのか。やけに大きく硬いものが入っているらしいと、中身の角が張り出している窮屈そうな黒鞆を一瞥してそらす。

怪我人はみな最後尾車両に避難しているはずなので、神西は先頭車両から、最後尾車両に再び戻ったらしい。だが、肝心の患者はまだ寝ているのだろうか。父やマフラーの人の様子を見るに、眠っていそうではあるが。

「ええ、みなさん寝る時間ですからね」

「……なんだか、そうみたい。ぼくも寝てた方がいいかな?」

寝る列車はほんとに「寝る」列車だったようだ。

思ってたより、寝る時間が多いなあと肩をすくめた。

昼間からみんなで一斉に寝るというのは、それはそれで面白いかも。

仲間外れで寝られない子は面白くないだろうけれど。

「作之助殿が起きられたら、退屈してしまいますから、起きていて差し上げてください」

夏梅の頭は、みんなで寝るのがこの旅の楽しみ方なのだという考えにたどり着いて、もはや父を起こそうとは考えなくなった。むしろ、このまま眠ったままの方が正しいのでは、と思いつく。

「きつと疲れてるだろうから寝てた方がいいのかも」

父の方をみて、朝からぼうっとしてたなあと思り返す。

探偵社では『愉しんできなよ』と言って送り出してくれた人の顔が思い浮かんだ。——ああ、そういえば。

「あのね、先生、おとうさんさ、横浜で、えっと。……たぶん昔の知り合いだったんだと思うんだけど」

上手い説明が苦手な夏梅の、ときれときれの言葉を先回りしたように、神西が当てる。

「作之助の記憶にない方ですか」

「うん……たぶん、仲が良くて、友達だったんだと思う」

「自壊の回避行動でしょうか」

「そう、みたい。首のところを掴んで、怒鳴ってた」

「作之助殿らしからぬ行動ですね。分かりました。瀬戸に着きましたら、そのことも注意して観察してみましよう」

「うん……」

襟首をつかまれていたのは、太宰だった。

何の話をしていたのか、解らなかった。聞き取れなかった。

でも、普段仲が良く見えるふたりが、そんな風になっているのを見て、夏梅はショックだった。

哀しいと思った。

父が昔、母と夏梅のことを忘れてしまった際に、母にしていたときもそうだった。

失った記憶に係る人がその空白部分に触れると、その相手自体を排除しようと動くのだという。

父が悪いのではないと母は言った。

ただ、ないものを直視し過ぎると、自分が崩壊してしまうのだと。自分の根底を揺るがすものを、消し去ろうと動いてしまうのだと。

夏梅はかなしいと思った。

忘れられてしまった人はかなしい。忘れてしまった人を見るとかなしい。

きっとしあわせだったこともあったのに、それを忘れてしまったら、その人にとってははないのと同じで、かなしい。

太宰は、忘れられてしまった人だ。

部屋の隅の荷物の上に乗っている麦わら帽子を眺めながら、なんだかずいぶん昔のことにように感じられる今朝のことを思い出す。

父が忘れた人たちは、みんな父に優しい。

夏梅はそのようにできるだろうか。たとえば、父が夏梅のことを忘れてしまったとして。

「——ところで、坊ちゃん」

手当が終わった指をふって、なに、と首を横に倒すと、神西は、ちよつと黙ってから、にこりと作り物の笑顔を浮かべた。

嫌な予感がする。

「え、なに」

「実は、この列車——」

神西は声を潜めた。

列車が竹林に入ったのか、窓の外が暗くなる。なんて空気を読む列車だろう。

薄暗くなった室内で、神西の声はやけにおどろおどろしく響いた——ように夏梅には感じられた。

「どうやら出るらしいのです」

「でる？ 何が？」

「お化けが」

夏梅は神西の顔を見た。

そして平坦な口調で返した。

「嘘だー」

「ばれましたね」

「え、ばらすのはやすぎる？」

「坊ちゃんの顔色が良くありませんでしたので、冗談でもと思いましたが」

「せめてそれらしいじょうだんにしてよ」

竹林を抜け、外はキラキラと光を反射する池が見えた。

夏梅は呆れてしまって、寝台の上で膝を抱えた。

目の前でにこやかな笑みを浮かべてもなおこの医者印象が寒々しいのは、きつと心が冷たいのが表れたからでは、と三歳児は悪意なく純真に考えた。

「冗談のつもりでしたが、しかし」

「しかし？」

首を傾げた。

「しかし、あながち間違いでもないかもしれない」

「何が？」

「作之助殿が、妙なことを言っていたのですよ」

神西が顎に手を遣って思案するように言う。

妙なこと？ 最近、父が変なのは通常になってきていたが、そのなかでもあつと思ひ出すことがあつた。

「そういえば、おとうさん、ここのところぼうつとしてたり、ひとりごと言ってることが増えたかも」

「ほう——では、出たのかもしれない」

「なにが？」

「亡霊です」

今度は夏梅はうそだーとは言えなかつた。

信じたからではない。論理が飛躍し過ぎたからだ。

「へえー……」

話を通じない人は、自分よりも多くの情報を知っているからだ。夏梅は思う。夏梅が知らなくて、その人が知っている情報があるから、話が理解できなくなるのだと。

神西のこの場合は、言い忘れたのか、隠したのか、伏せたのか、意地悪したのか、知らないけれども。

「これは福沢殿からの情報なのですが、坊ちゃんの通っている学校で、不登校になっている生徒が少しずつ増えているそうですね」

そんな話は聞いたことがなかった。しかもそれがなぜ大叔父の口から出るのだろうか。

「その生徒たちは、あるクラスがほとんどで、みな女子生徒とのことです」

「女の子だけ？」

あるクラスというのは、少なくとも夏梅のところではない。

学年が違えば、夏梅の耳に入ってこなくとも不思議はないが。

「そうです。そしてみな言ったそうですよ、『影が追ってくる』『幽霊だ』と」

「おかあさんのときと似てるみたいだね。……でもほんとに話聞いたことないけどな」

「その女子生徒たちは、家にこもりきりだそうで、学校へは情報が行きにくいのでしょう。仲の良い友人とも連絡を取っていないようです。ちなみに、この情報はその学校に通う子どもを持つ警察官からだ

そうです」

あれ、とひとりの男子生徒の顔がひらめく。

「でも、それがどうつながるの?」

「さきほど、作之助殿が妙なことを口にしていました。この男が倒れ、床に付しているというのに、作之助殿はそれには目もくれず、『その男から離れる』と誰もいない宙を見据えたまま話しかけていました」

夏梅は生唾を飲み込んだ。

ここで神西の口から発覚する、まさかの父の奇妙な言動である。

「ここという『その男』とはこの梶井でしょうね。では、作之助殿はいったい誰に——いや、何に話しかけていたのでしょうか?」

不可思議な点を挙げていく神西の口調に、夏梅はしばらく黙り込んだ。

長い沈黙の末、ぼそりと零した。

「なんか、こわい」

神西は小首をひねって、微笑んだ、「私は楽しくなってきました」

窓の外はきらきらと若葉が光を反射していて、新緑豊かな山の風景だ。

暖かな日差しが差し込む初夏の窓辺で腕をさすりながら、この医者とは友達になれないな、と夏梅は思いました。

???

???

常駐している家が長年追いつけている事件に進捗が見られたということで足を延ばして横浜へ行き、春野という事務員を介して、情報の共有を行った。その帰りに、瀬戸へ里帰りしに行くふたりの親子に、影ながら同行することにした。

この事件というより、とある少女が与えた影響の行く末を見届けた。それが男の行動理由だった。

男は医者だが、研究者でもあった。

とある少女は死ぬ前に、こういったのだ、『わたしを識りたいのなら』と自分の子どもを指さして。

了承は得ている。問題はない。そう何も。

さて、不安定な状態の織田作を観察するのか、それとも仮眠を取らせた後の経過を観察するか。どちらも興味深かく、しかし時間も機会も限られていた。自分で選べないのなら運に任せてしまえばいい。

人ごみに紛れながら、織田作が自動販売機で購入したジュースを盗み見て、同じものを購入。そして、ボトルに小さく穴をあけ、溶かした粉末を注射器で混入させる。透明なテープで小さな針あとを塞げば、まあよく観察しなければいけない程度の代物ができる。

あとはどうにかしてこの睡眠薬入りの飲み物と取り換えるだけ。

持ち前の手先の器用さ——あるいは手癖の悪さ——で、飲みかけのジュースを掏る。直に手で持っている織田作に対して、隙があるのはリュックの脇のポケットに入れてある息子の方だった。

歩みにそれとなく合わせて抜き取る。できたのはそこまでで、あとは不自然だが、落としたと言って渡すのが間違いない。しかし、さすがに自分で渡すのを避けるため周囲を見合わす。

できるだけ警戒心を与えないような者がいい。

すると同じ車両に並んでいた、小さな女の子がひとりぽつんと立っているのを発見する。父親らしき男は、荷物を乗務員に手渡ししながら、肩からパソコンのバックを提げ、片手で電話をしていた。そして母親らしき女は、きよろきよろとして周囲を見渡し、すぐ隣の女たちの集団を見つけると手を振っていた。車両内に入った後は、きつとそちらへ合流するのだろう。両親がそれぞれ娘から目をそらしたとき、何気なく近づき、女の子へ、落とし物で代わりに届けてくれないかと頼む。女の子は、不思議そうな顔をしていたが、善良な性質なのだろう、夏梅へと声をかけに行ってくれた。仕込みは上々。

子である夏梅の方の飲み物に仕込んでおいた眠り薬を飲んだのは、果たして織田作のほうだった。

どうしてそうなったのか、なかなか経緯が気になる。

普通であれば、息子の方が飲む確率が高いというのに。

それを予測して、広告メールの最後のところに『Dより』とわざわ

ざ打ったのだ。

それはドクターの『D』だ。

前もってメールで同乗することを知らせておいた息子のほうには必要のないもので、それは織田作向けに与えた手掛かりだった。まあ、そのメールに気づかないかもしれないが。そうしたときには、無言電話をかけ、同じ番号の履歴に注目させるつもりだった。

息子である夏梅の方が展望車へ向かうのが見えたから、それにも必要がなかったことだが。

息子が展望デッキへ続く扉を開ける前に、声をかける。

夏梅を連れて、喫茶処へ誘導する。そうして展望デッキの柵に括りつけておいた、ガスマスクと手袋と分厚い外套が入った黒い診察鞆を見られるのはしっかり防いだ。

静かにしよう。

「見えない何かに襲われたら、それはあの人のせいさ、是非この美しい芸術的形態の檸檬を窓に投げつけると善い」

「はあ、それはそこに置いておいてください。あー、えーと……あの人がって？」

「もうちよつと関心持つて聴こうか、君」

手当てしながら、夏梅は何の気なしに尋ねると、駄目だしされた。事実あんまり、興味ない。

ちなみに、レモンは押し付けられた、『おまもり』だとか言う。

へーって気分だった。

そんなに興味ない。

「手当てしてるのに、よそみなんてできないよ」

「それにしても、不器用だね。君、医者には向いてないね。当然、科学者にも」

「別になりたいなんて言ってないけど」

なんだろう、とてもイライラする。

なんで夏梅は勝手に否定されて、駄目だしされているのだろう。

神西が出て行くなり、ぱちりと目を開けたこの男の人は、口に羽でも生えているかのように軽やかにべらべらと喋りだした。手当にも集中させてくれないくらいのマシガントークに、夏梅は父が起きないか気にかかりながら、好きにさせていたが、なんというか次第に気がささくれ立った。

大人、自由すぎる……！

押し付けた綿布をぐいぐいと押し付けてやると、奇妙な声の悲鳴をあげた。

なんだろう、鳥肌が立つ。

不思議な寒気に、夏梅は腕をさする。

「君が良く知っている人さ」

「なに？」

「あの人のことだよーまたまたー！」

あの人。それは神西のことか、とその時は思ったのだ。

「不可逆なる『死』を今なお超えつつあるという不条理！ その情報をたどって、この列車に来たはいいものの」「いいところで……なかなか食えない同胞もいたものだよまったく」「それにしても自分が持っていないよい被検体を持つているのは何とも羨ましい！」「これから僕も科学の命題を証明するための実験を続けなければならない」などなど……正直うるさくてならない。

「周りの人寝てるんだから静かにして」

「そんなこれからも繁忙が約束されているこの僕を！ 助けてくれた誼に、ひとつ耳よりの情報を与えよう」

「……………」

夏梅はきゅつと襟首を絞めてやった。

「静かにしよう、ね」

???

「はあ……………」

やたら疲れた気がする。

なぜか、車両の窓を割ってそこから出ていったマフラーの後姿を見送った夏梅は、引き戸を開けて部屋に戻る。

おお。父は今起きたところらしい。

「ねぼすけだね、おとうさん」

健やかな眠りから目が覚めたらしい父は、ちよつとどころではなく寝ぼけているようだった。

父の質問に、神西のことをごまかしながら答えていくと、不思議なことにはぼ嘘偽りを言う羽目になった。神西がしたことを、夏梅がしたことにする。夏梅が神西にされたことは、緑のマフラーの男の人ともい、梶井がしたことにする。すると、なんとも不思議な話になった。なんてことだ、神西。そしてマフラーの人。

父はその説明で頷いた。ごめんなさい、夏梅が悪い。でもさ、おとうさん……………大丈夫か。

夏梅が嘘つくわけないって？ いやいや、三歳児だつて作り話はするんだよ、おとうさん。

……疑われない根拠がそれなら。

夏梅は自分の罪深さゆえに、そして父の曇りない信頼さゆえに、切ない気持ちになる。

そして、父に痛みのことを聞かれたときは少し焦った。

「いたく、ないよっ」

気持ちが悪く着くと痛み出した指に、たまらず、神西に痛み止めをもらって飲んだのだが、その薬の出どころを探られては、どう言い訳したものかわからない。

幸いにも、父は水兵服セーラーを着ていた女の子に気を取られていたからうまくごまかせたが。

それにしても、だ。

夏梅が扉を開けてみたとき、そこにいたのは倒れていたふたりしかなかった。

もちろん、銃の音にびつくりしてどこかの部屋に逃げ込んだのかもしれないけれども……。

こんな状況で、女の子が倒れている人を前に、放置して隠れたりするだろうか。

しかも服装も不自然だ。

「へんなの……」

父を見上げる。考え込んでいるが、夏梅の支離滅裂な話を根拠に推理しているようだ。

とてもご苦労なことだ。

果たして、夏梅の証言をもとに考え、正しい事象が捕らえられるだろうか。

(ぜったい、無理——)

ぎゅっと唇をかんだ。

嘘の情報をばらまいた本人である夏梅は確信する。

とりあえず、夏梅は父の見たことを中心に考えてみることにした。

女の子だ。

しかし、セーラー服を着ている女の子なんて、この列車には不似合
いだ。

もつというと、夏梅はそんな服装の少女を、見かけていない。ほと
んどぎりぎりに駅に着いた夏梅と父は、乗客の中でも最後のほうに来
ただろう。けれども、旅行客のなかで制服を着た少女というのは目立
つはずだが、見かけなかった。死角にいたり、あるいは隠れて——た
とえば、おそらく神西のように——いたのなら、夏梅の記憶にはない
のもうなずけるが。

おかしいということを感じさせるために紡いだ言葉だが、父は夏梅
の体のことに気を取られて、なかなかうまくいかない。

夏梅の目から見れば、父の方がよっぽどこか悪そうなのだが。

「おとうさん、きようは寝てばかりだよ」

俯いてぼそぼそいうと、父はその大きな手のひらを頭に乘せてき
た。

全然信用ならない「大丈夫」という言葉とともに……未だかつて
こんな信用ならない言葉を聞いたことがあるだろうか？ ——答。
結構ある気がする。

ぼりぼり補助食を口にしながら、無言で過去を回想する。

あのときやこのときや、あんなときや、そんなとき……うん、頭が
痛い。

でも、現実から離れることはできない。

父から手渡された補助食を食べたり、今度は神西を介してではな
く、梶井からじかに受け取った『おまもり』たるレモンを見せたり、父
と状況をすり合わせたりしてから——夏梅の話はほぼほぼ偽りなの
で役に立たないどころか、真実からは遠ざかるばかりだが——他の乗
客たちの様子を見に行くことになった。

夏梅は多くの怪我人たちが、最後尾の列車に移動していることを
知っていたけれども、部屋に残っている数人の重傷者とその身近な人
たちがどうなっているのかはわからない。しかし、この情報はもちろ
ん父はこのすべてを知らない。

様子を見に行く割りには、銃を装備する父をしり目に、夏梅は凶器となるレモンは部屋に置いて出た。乗客を見に行く分には、必要ないからだ。

思った通り、空き部屋だったり、眠っている部屋を順々に回っていく。途中、夏梅に落としたペットボトルを拾って届けてくれた女の子がはいていた靴が、片方だけ落ちていた。

(……お医者さんがいるし、だいじょうぶだよね?)

考え込んでいると、父に名前を呼ばれた。いくつか確認されたが、父は尋ねる相手を決定的に間違えている。何とも言えない心地で応えていく。

「さっき受け取った物を渡すんだ」

父が言うが、それは部屋に置いてきている。

周りの乗客を見る分には必要ないから置いてきた。しかし、だ。

「ガスか」と父は口にする。

これは、あの梶井が言っていた『おまもり』の出番では、と夏梅は反応する。

それと、銃弾の替えも必要かもしれない。

「おとうさん荷物を持ってきていい?」

「ああ、構わない」

父が眠っている間に中身を入れ替えておいた荷物を持って、これからの行動の方針を決めたらしい父の後をついて行く。どうやら、ガスマスクをつけた人がいたという車両へ向かうらしい。ガスマスクのことはテレビで見た覚えがある。あまりよくない思い出で、それは父が瀬戸にいるとき、母が健在だった頃に、父が巻き込まれたガス漏れ死亡事故のニュースが流れたときだった。死亡者には、父が含まれていた。

「ガスマスクを追おう」

夏梅のしんみりとした気持ち、心的外傷トラウマなんて、当人は知らないの
で、こっそりため息をつく。

「はいはい」

父と昼ご飯を食べに行くはずだった、優等客車両の専用ラウンジ。

ついで、二時間ほど前のことが随分昔に感じられる。

先行する父のうしろを、ついて行く。

父が前を警戒するので、夏梅は父の背後で、後ろと周囲を見回す。すると、案内図を見つけた。車両内の見取り図だ。

父の後ろから離れて、そちらへ足を延ばす。

夏梅達がいるこの優等客車両とその前後の一車両分が描かれていた。

棒人間のようなものが夥しく描かれているところは、人の手で描き込まれたものだ。

そして、それはこの車両のひとつ後ろの車両……。

これを描いたのはきつと神西だ、と夏梅は思う。

本当には、最後尾の車両に人はいるはずだが、この案内図には、この車両とその前後しか描かれていない。

だから、描かれている車両のもっとも後ろに人が集まっていることを表す絵を描いたのではないかと思う。はたまた、医者である神西が、本当の患者を巻き込まないために、一つ前の車両で何かを仕掛けるのではないか。どちらにせよ、これは「誘い」だ。

「おとうさん」

父を呼ぶ。呼ばなくても、辺りを警戒しながら、父は近づいてくるところだった。

父に描かれているものを示す。

そして隣の車両へと誘導するように言葉を紡いだ。しかし、父の様子がおかしかった。落ち着かなげに、いや少し緊迫した風に、顔を陰しくしていた。

「おとうさん？」

「お前はここで待っている」

背中から近づいた父が肩をつかみ、夏梅をもと来た廊下へ押し戻そうとした。

いったい、急にどうしたのか。

父を振り返ろうとしたとき、何か細長い鈍器のようなものの衝撃が脳天に叩き込まれた。

(ああ、これ——だめなやつ)

父の名前を呼んだかもしれない。言わないといけない。

夏梅が異能力で回復する間に、父が怪我をしたら。死にそうになったら。

慌てて夏梅を抱き起す父へ、持てる気力を振り絞って、夏梅は——。

お医者さんがいるよ、と夏梅は言えただろうか。

嬉しいね。そうだな。

気が付いたときには、父はいない。

そして誰もいない倉庫に、やってくる人の息遣い。

ひとりここでやってくる者に知られぬよう隠れしのぶことが、この状況をかいくぐるための最低条件だ。

——さて、ここでさっそく問題が。

(ふぐ……つ)

埃で鼻先がくすぐったくなるという、普段であれば問題にもならないことが、この状況で夏梅を窮地に追いやろうとしていた。ぎゅっと五指揃った手で鼻も口も塞ぎ、なんとかかむずむずする鼻の刺激をごまかし、今にも飛び出そうになるくしゃみを我慢する。

横目で何うと、相手の影が、木箱の隙間から見えた。

首をすくめて、足を縮こまらせる。………心もとない。

(体勢が悪いな、ズボンはひもだからずれないけど、肩が大きくて動きにくいし……このまま気づかないで、先に行ってくれないかなあ)

手足を縮めると、首から下がっている母の形見の懐中時計に指が触れた。

それは、服の上から体温が移り、ほんのりと熱を持っているように感じる。母の一部が入ったそれを握りしめて、落ち着こうと努力した夏梅は——目をあげたことで逆に顔が緊迫から強張った。

影が、ぴくりと動いて、刹那——ぐりんとこちらを向いていた。

(ばれた——)

夏梅は困って、荷物の中のレモンを取ろうと思ったが、荷物をラウンジで落としてきたらしいことに気付く。影が近づいてくる。夏梅は一か八かに出た。

父の外套を放り投げる。布は軽く、滞空時間も長い。夏物の外套であることが幸いした。相手の視界を奪う。それが夏梅と相手との間にとどまっている隙に、飛び出し、出入口へと駆け寄る。

投げた外套によって相手には夏梅が見えなかっただろう。

夏梅にも相手が見えなかった。

しかし、相手の脇を通って躲するとき、はああああ、ああうあ…という息遣いの後ろで声が聞こえた。それは一つではなく、複数で——女の子の声だった。不思議なことに夏梅の頭の中で反響しているように感じられる。こわい。

「いいいい……い……い……こつちに来ないでよ」

喉から漏れる自分の声はひきつっていて、自分の声も怖い。

がむしやらに、何も考えず——いや、思ったことはすべて口に出しながら走って、走っていると、後ろから追ってくる複数の女の子の声と鈍器が壁を打つ音が急ぎ立てる。さらに間の悪いことに、だんだんだんと車体を揺らすような足音が前方から迫ってきていた。

「ななななに!? 他になんかいる!? もうやだああああ」

夏梅は、思わず文句を叫びながら、迫りくる複数の声から逃げるため、前方の車両へ続く扉を開けた、瞬間、襟首をつかまれて夏梅は空にひっぱりあげられた。うわあお空きれい……。

夏梅が先ほど通った扉が、ガンと音を立てて、内側から殴打の形に歪曲した。ぶつかった人はさぞかし全速力で走ってぶつかったのだろう。どれだけの速さで追いかけられていたのかを想像するのも怖いし、ぶつかった衝撃でその人がどうなってしまったのかを考えるのも怖い。

ましてや、あそこに立っていたら、夏梅はまた死にかけたのではなからうか、と考えるだけでもう、もう……。

ぶわつと涙が出てくる。

「——夏梅っ 無事か!?!」

「おとうさんんんん」

頭の後ろで父の声がした。襟首をつかんで車両のうえに引き上げられた夏梅は鼻をすすりながら振り返り、その手の主である父にがしつとしがみついた。夏梅の手はとても冷たくなっていて、父の体が温かく感じられた。

人肌の温度に何もかもが決壊した。

「ごわがっだああああああ」

夏梅はわんわん泣いた。

父に抱き上げられて、しがみついた。

十歳ぐらいに身体が以前より退行した夏梅の涙腺は脆かった。

???

「やあ、なんか小さくなってるね、君いく。面白い！ 是非、実験したい。実験したいね！ ねえ、君いく僕の被験者として協力してもらえないかな〜？」

頬をつつかれるのに、むかつときた夏梅は噛みつこうとした。さつと指は引つ込み、夏梅の歯は音を立てて噛み合わさった。

むつとして首を伸ばして噛もうとしたが、父に抱えられたまま、止められた。

夏梅は父を振り仰ぐ。

「おとうさん、何でこんな人と一緒にいるの？」

「…………成り行きだな」

くやしい。なんか悔しい。

なんとなくの流れが想像できるだけに悔しい。

「流されやすいな、おとうしゃん」

「しゃん…………」

父が夏梅の失態を強調するように繰り返す。

悪意がないことは分かっている。

だが、夏梅は父のこれがあるから、かみかみになるのを気にしている。

「パパって呼べばどうかい〜」

「…………ばば」

昔の呼び方を言う。これが無難だと思った、梶井に言われるのは癪だけれども。

父はちよつと目を見張って、顎に手を遣る。

「なんだか、懐かしいな。言葉を覚えたての頃を思い出す」

「ほくまだ三歳だけど」

べつにそんな昔の話じゃないんじゃないか。

鼻水をすすりながら突っ込む。

風当たりが抜群の列車の装甲の上は、傾きかけた陽光を遮るものがないので、肌をじりじりと焼くような光はそのままに、吹きすさぶ風で涼しいのか熱いのかよくわからない。

今こそ水を飲みたいものだけれども、夏梅は我慢する。列車の中に行けば追ってくるだろう誰かのことを思えば、ちよつと水分が足りなくて頭がくらくらするくらい大したことではない。——いや、やつぱり大したことになってるかもしれない……。

目は時々眩んで、呼吸は浅い。考えはうまくまとまらず、手足の先は初夏にしてちよつと冷たい。感覚を探ろうとしたら、意識は散り散りになり、五感がよく利かない。……なので以下は、夏梅のそうした状態であることを加味していただきたい。——いつもだったらもつと巧い行動がとれてたはずってことを……！

「あくそれで——だから——爆弾を——」

「そうか——だが、それを行動に移した場合、俺はお前を——」

「ふむ。ならば止すでしょう——では何が望みなんだい」

「——それは——穩便に」

未だ、夏梅と父と梶井は列車の上にいる。何を隠そう、父と梶井の議題は、この列車で起こっている怪異の収束方法についてだった。突拍子もない内容だったので、是非聴いてほしい。

「ではこうだ！ 要は、奴が動ける環境条件を崩せばいい！ つまり！ 解決方法は、この列車すべての窓を割っていけばいいというわけさ」

「なるほど」

「……なるほどなの？」

なるべく黙っていようと思っていた夏梅はつい、口を挟まずにはいられなかった。

もちろん、見えない敵とやらがいて、それは密閉した空間内では動かけないという説明は受けた。しかし、だからといってこの列車の窓を全部割るとするのは、どう、なのだろう。

突拍子もない発言で、父の賛同を得たマフラーの男の人。

梶井は両手を広げて、ちよつと納得のいかない夏梅の目の前で、上向いて哄笑する。

そして自信満々に言う。

「超解決さー！」

「……これが科学者の言うことなの？」

はなはだ怪しい。夏梅は父に助けを求めて視線を送るも、父は、

「確かに窓ガラスを割れば、ガスマスクが充満させた催眠ガスも空気が入れ替わるだろう。乗客たちが起きれば、安否がわかる」

「聞いて納得なやる意義がこわい。これいけないことだよね？」

そして乗客が眠っているのは、ガスマスクの人のせいだと思われているらしい。

いやあれは、神西で、眠っているのは、神西が何かしたから——あれ、神西がガスマスクの人？

……神西が患者を眠らせていたのなら、『寝る時間』なんて嘘っぱちな可能性があるし、夏梅がわからなかった人物像が一つ減ることになる。ガスマスクの人＝神西。しかし、眠らせておいた人には、きつと理由があるはずだ。いや、わからないけど。

「な、なにか理由があつたんじやないかな!? そういう眠る薬つかつたのも！」

「薬? 何を言っているんだ、夏梅」

父が不思議そうに瞬く。

夏梅は「えつ」と肩をはねさせた。薬という単語を使ってしまったのはまずかったようだ。父はそういえば、ガスと聞いていたし。

動揺を顔に出さないように、と気を引き締める。乾いた唇を舌で湿らせて、目を泳がせて父から目をそらすと梶井が目に入る。列車の装甲の上では、父の横に夏梅が横向きに、そして父の向かいに梶井がそれぞれ顔が見えるように列車の屋根に座っている。

梶井の色眼鏡から視線を感じるような感じないような気がして、そこから目をそらす。

「あ、いや、なんだろうっ……えつと」

夏梅が語るに落ちてる……！

戦慄した。

口は禍の元。沈黙は金なり。

夏梅は神西の言葉ではないけれども、自分から余計なことを言わないようにした。もういっぱいはいっぱいで、どこからぼろが出るのか、自分でも予想ができない。

そして、ちよつと挙動不審が過ぎたかもしれない。……父はまたうっかりしてくれないだろうか。そして、梶井もちよつと色眼鏡でよくわからなかつたりしてくれないだろうか。

他力本願なことを考えていると、梶井が大きくなずいた。

何を言う気だ、と疑っていると、意外にも夏梅にとって良い流れだった。

「いやあ、確かに、あのガスには意味があつた。乗客たちが眠っていたおかげで、混乱なく自由に動くことができた」

「たしかに」

「たしかに」

夏梅と父は納得した。

夏梅は、神西の考えに、父はたぶん、梶井の言葉に？

それはちよつと気に入らない。

「あ！でもさつき、追つてくる人を見たんだよ！おとうさんといるとき頭を殴つて来た人！」

父がなぜか夏梅の頭を撫でようとしているところで、手を浮かせた状態で動きを止めた。その手はどうするんだ、と思っていると、父が首をかしげる。

「夏梅、何を言ってるんだ？」

え、なにがと夏梅は顔をあげる。

ぼかんとした顔は、父と梶井だった。

父は夏梅の頭頂部の髪をゆっくりと梳いてくる。

「見えない敵にお前はやられたんだぞ」

「——え、でも」

確かに頭を殴られたときは、攻撃は見えなかつた。しかし、その凶

器の形状は分かっている。そして夏梅は、倉庫でそれらしい凶器を持った影を確かに見た。

「ちゃんと、人だった——あれ」

姿を見たといったが、夏梅が見たのは、積み上げられた箱の合間から見えた影であってその顔を見たわけではない。脇を通り過ぎるときだつて、投げつけた父の外套で何も見えなかった。そもそも——ひとりの人から、複数の声が聞こえるものだろうか。

「な、なんでもない……」

父と梶井は、一応、代案がないか討議している。

夏梅は生唾を飲み込みつつ、手持無沙汰になり、梶井と話している父の首に懐中時計を掛けたあとは、父の腕に掴まり、胡坐の間に座り込んでいた。父は暑いだろうに、疎ましがりもしない。座っているのが夏梅だからだろう。

初夏の白昼の日差しは、寒気を感じる肌にじんわりと優しく届いた。

背中 of 父の体温もまた、鳥肌を宥めてくる——

『どうやら出るらしいのです』

『でる？・何が？』

『お化けが』

ぎゅつと父の腕をつかむ自分の細く小さな腕の鳥肌を撫でた。

神西の首を絞めて問い詰めてやりたい。

あの会話、本当に意味あったのか、と。

???

それから先は、思い出したくない。

夏梅は父が季節外れにもマフラーをした不審者と一緒に、日々の窮屈な生活に不満を降り積もらせた学校の不良よろしく豪快に窓を次々に割っていくのを、車体の上で三角座りしながらぼうつと眺めていた。

ここはどこだ。寝台列車だ。

夏梅は父と一泊ここで過ごし、生家に里帰りする予定である——であった。

現在父は、バスで一緒に乗り合わせ、さらにこの列車にも同乗しただけの男の人と一緒にあって窓ガラスを割っている。何やってるんだろう。誰か、この心境を共有できる人がほしい。でも、神西はいやだ。

「ここで最後だな」

最終車両に先にたどり着いたのは父だった。

「ぱぱ、そこ、人がいると思うから、気をつけて割ってねー」

「そうなのか？ 了解した」

夏梅の言葉を拾って、父が銃弾ではなく、銃の底で端の方を静かに罅を入れて割った。最後尾の車両も窓が割られる。神西はどこにいるか知らないが、困っているのだろうか。

虚空に向かって言い訳する。

「せんせいのいった通り、なにもしてないよーぼくは」

そしてこの様だ。

手のひらに顎を乗せて、うそぶく。

「せんせいもきつと、おとうしゃ……ぱーぱのこと見直したかな」

さ行が苦手。なんとかしたい。

列車の両側を、梶井と走りながら窓を割っていたふたり。

最後のガラスを割り終えて、何かを為したようすつきりとした風が二人の間をふいているように見える。

「青春……？ だねえー」

そして、父は、ハイタッチしようと手を掲げた梶井を唐突にねじ伏せた。

また異能力で、相手の行動を先取りしたのかもしれない。相手が悪かったんだなあと眺める。

父は絞めていたタイをほどいて、それで梶井の手を縛る。

ここまできれいに決まったそれに、口を半分開いた夏梅はそのまま

ま、ぱちぱちと乾いた拍手を送った。

「ないすー」

「どうも」

父は余計な愛想を振りまくことなく、きよとんと不思議そうな顔を倒しつつ返してきた。

「うーん、百点」

「何がだ？」

かわいさかなーとぼんやり呟いたが、それに首を傾げた。夏梅は何を言っているのだろうか……？

梶井のマフラーをほどいて、それで足を縛ろうか迷っている父が夏梅の言葉に視線を寄越してくる。夏梅は中腰で何とか立ち上げる。風の抵抗に慣れてきたら、ズボンを払って、汚れを落とす。先ほどから、ちらちらと車体の端から、白い手袋が揺れていた。——はいはい、さっそく催促ですね。

「いやなんか、勝手に口が動いた」

「それは大変だ。何か乗り移ったのかも知れない」

「こわいこといわないですよ」

夏梅は、平衡感覚でとんとんと軽く歩いて父に近づく。

父を見上げた。随分と高い。

「ぱーぱ」

「なんだ」

父は夏梅を見下ろす。夏梅は反対に、その顔を見上げながら、欠けない指を折って、人差し指で、列車の下を指さした。

「梶井のおにいさん、逃げたよ」

あ、と父は言った。

父の足元にはもう、梶井の姿はない。

父は夏梅が指さした向こう側の雑木林を向いている。どんどん遠ざかっていくそれは、すでに他の木々によって見えなくなった。ずっと遠いところを見ていたから、気が付かなかっただろうが、梶井はす

ぐ真下にいる別の人物によって捕らえられている。

うっかりしたところのある父よりは、しっかりねっちりした気質の医者の手によって捕まえられれば、安心だ。きつと逃れるのは並大抵ではない。しっかり見張ってくれるだろう。なんせ、負けた方が貧乏くじを引くものだからだ。

「ぱぱの勝ちー！」

夏梅はにっこりと機嫌よく笑った。

白旗代わりに白い手袋を掲げた人は負けを認めて、後片付けをしてくれる。

だから、夏梅は待ち望んでいた列車旅を父と楽しもう。

「みんなが起きたらね、列車の探検……はもうしたから、ごはんを食べようよー！」

「この時間だと、夕食か。何が食べたい？」

夏梅は少し考えて思いつき、にっこり笑う。

「カレー!!」

「それは善い。腹が減ってきたな」

父はそういつて頷いた。夕焼け色でもっと赤く染まった父は、夕日の中で微小に笑んだ。

ご機嫌な父の様子に、夏梅も幸せな気持ちになった。

父の小脇に抱えられて、車両の開いた扉から綺麗に着地する。

ほどなくして、薬が切れたのと窓が割れる物音がしたのとで覚醒したのか、乗客たちの声が聞こえだす。

そして、まもなくしてプロ意識溢れる乗務員によって、目に見える範囲は最低限度に整えられ、事の惨状を鑑みれば、再開した業務は恙なく熟されているようだった。

夏梅は父と一日目を愉しんだ。

とても長く濃い一日で、きつと忘れられない。

……父が忘れても、夏梅はきつとこの記憶が夏梅の心をいつも温めてくれると思った。

ここからの夏梅は、父との寝台列車での嬉しい出来事を記憶している。

車体の屋根の上から父と見た夕陽も、夕食のカレーのあとに一緒にしたトランプのババ抜きも、夜に寝台の上から見た満天の星も、寝る間に父が作った寝物語を聞く夜中も、全部ぜんぶ、夏梅の記憶に楽しい思い出となって刻まれた。

新しい太陽が昇り、一番最初に停車できる駅で、全員が下車する。車体の修理と爆発事件のためで、警察も来たという。しかし乗客の誰かが犯人を引き渡した。犯人は有名な爆弾魔だったらしくそのまま連行され、乗客たちは大した聞き取りもされずに、次の交通の手段で目的地へ向かうため、ばらばらに散っていった。

夏梅はリュックをもって、父は乗った時と同じ荷物を持って下車する。

その時、後ろから、「忘れものですよ」と手袋をした手が、夏梅の頭の上に何かを乗せて来た。頭に手を遣るとそれは宮沢から旅の饞別としても貰った麦わら帽子だった。

振り返った夏梅だが、届けてくれたその人物を見つけることはできなかった。

前方から、父が呼ぶ声がする。

振り返らず、父に駆け寄る。

これから向かう場所で、その人に会えることを夏梅は知っている。

「ばあ」

「なんだ」

「嬉しいね」

父と手をつないでわらうと、父もわらった。

「そうだな」

幕間 それぞれの裏側 & 小噺
水琴窟と茶室

年のころは二十を超えないだろう。黒髪を一つにまとめ、無駄な装飾をそぎ落としたような西洋風の女給姿だが、薄化粧を施されたその顔は、年頃の娘らしい澆刺とした笑顔に彩られている。……太宰が好みそうな相手だった。

「ご注文はお決まりでしょうか」

「カレーライス
咖喱飯辛さ10倍をひとつ。夏梅は？」

「カレーライス辛さ3倍。おねがいします、お姉さん」

「あら。——はい、承りました」

騒動の後ということを感じさせない、職業意識の高い給仕ウエイトレスの女性は、夏梅の愛想のいい笑顔に思わずといった仕草で口許に手を伸ばした。そしてそこに本物の笑顔が顔を出す。なるほど、余所行きの笑顔と思わず出た素の笑顔とはこれほど違うものなのだ。

「あと三種のチーズのチキンサラダをひとつ、トマトジュースを一つ」

「あと、珈琲コーヒーもだよな？」

それぞれ追加を記入した給仕は、洗練された笑顔でもって了承した。

日が沈みかけた、空は窓枠によって絵画のように切り取られている。列車に乗車してから最初のまともな食事は、晚餐だった。硝子が散乱していて乱雑に散らかされていたテーブルには、神経質な芸術家が几帳面に一ミリ単位で整えたようなテーブルクロスがかかっている、運ばれてくる料理を美しく演出していた。

「こちらは三種のチーズ、イタリアから取り寄せた、リコッタ、モッツアレッタ、パルジャミーノ・レッズジャーノを使用しています。リコッタとモッツアレッタは水牛の乳から作ったものを厳選しています。パルジャミーノ・レッズジャーノについても、現地の生産者と直接契約をとった輸出品となっています。ソースは蜂蜜扁桃ハニアーモンドと橄欖油オリーブオイル、ヨーグルトがあります」

サラダといってもレタス、玉蜀黍^{トウモロコシ}、セロリ、紫キャベツ、トマト、薄くスライスされた玉ねぎが盛り付けられた皿が中央に置かれている。香ばしい匂いは、油で揚げた大蒜で、中に混ぜ込まれていた。想像以上の量だった。

先にサラダをつついていっていると、見計らったように^{カレー}咖哩皿が運ばれてくる。

わあ、と夏梅が手を叩いて歓声を上げる。

幅広く口にするとはいえ、妙なところで偏食気味な我が子のお眼鏡には適つたらしい。

メインである^{カレー}咖哩に舌鼓を打ちつつ、外の景色を眺めて優雅な時間を過ごした。

「辛さが足りない」

「こちらを食ってみるか？」

「おとうさんのは辛すぎるからいい」

華奢な顎がふい、とそっけなく反らされる。

差し出したスプーンに乗った、^{カレーライス}咖哩飯は息子のお気に召さなかったらしく、空しく振られた、「……そうか」

口に含めば、牛筋が柔らかくほどけて、角が崩れて丸くなった^{ジャガイモ}馬鈴薯と煮込まれ青臭さの抜けた人参は、子どもでも受け入れられやすいだろう。違うのは、辛さの度合いだけだ。

自分が好ましく思っているものが受け入れられないと、まるで自分が受け入れられなかったように感じられる。個人の趣向にとやかく言える権限は親子と言えど、ありはしない。その結果を、ただ受け入れるしかない。

「……しょんぼりしないでよ」

そう言うと、夏梅は 妙な味の砂を噛んだような顔で、身を乗り出し、スプーンを口に含んだ。銀製の、品のある煌きが、薄い唇に閉ざされる。以前より幼げになった顔だちの、特に膨らみが戻ってきた頬。それが、^{カレー}咖哩を含んで、丸く突き出た。咀嚼する姿は、さながら料理を判定する審査員のような。それを待つ新人料理人のような心地で待つ。

「……どうだ？」

待ち切れずに訊いた。

すると、眉間にしわが寄りつつも、『悪くない』といった表情で肅々と告げる。

「かつらい。……けど、このピリピリ、飲み込んだ後は忘れてどんなピリピリかわからなくなる……」

「もう一口食うか？」

「お父さんも僕の食べていいよ」

「いきなり出てくる日熊の店主が咖哩屋さんなのはいいけど！」

晩御飯が咖哩だったせいかなって思うから、と夏梅は声を荒げ、両拳を目の前で振ってくる。やけに好戦的だ。ふたりでババ抜きをするという正気をも疑うような遊戯の後だからか。そも、寝る前にこんなに興奮していて眠れるのだろうか。

「生まれたときから黄色い前掛けの恰好だったのかなあ……と思えるほどその格好がなじんでたって何??？」

「思い浮かんだんだ。ちなみに年がそれなりにいって、頭頂部は少々禿げている。戦闘の際には、お玉を手に獅子奮迅の如く活躍を」

「熊なのに獅子みたいに戦うんだ……」

「彼は無敵だ」

夏梅は、細い指を額に押し付けた。

ぐりぐりと指を動かして、何かに苦悩したような横顔を見せる。

そして顔をあげたとき、あたかもそこに余分な感情という感情が全てそぎ落とされたように、息子はただただ穏やかであった。

「——わかった。つつこんだら、話があつちこつち飛び跳ねて先に行かなくなるんだね。黙ってるよ」

小さな両手で口を塞いだ息子だが、結局その口はそのあとも何度か開くことになった。

旅を旅らしく愉しめたのは、ほんの束の間で、まるでため息をつい

ている間に終わってしまった。夏梅は、随分と疲れ切り、二回りほど小さくなってしまった身体を投げ出して寝台に眠っていた。昨晚、即興で作った話を聞かせていると、たくさんの突込みの手が緩んだかと思えば、睡魔によつて既に斃れてしまっていた。聴衆を失ってしまったままひとり語りをすることほど空しいことはない。しかし睡魔は我が子を襲い眠りの縁から突き落とすだけでは飽き足らず、未だ起きている人間をも眠りへ引きずり込まなければ気が済まないようだった。

私は、無防備に眠りに落ちた息子へ綿毛布タオルケットをかけ、寝台に倒れ込む。優等客室というだけあって寝台は、程よい発条スプリングが効いていた。

美しい星々に見守られるように感じた。

人は死ぬと星になるという。それは慰めにしかない言葉だ。ただ、いつもそこにあつて無くなることがない。そして不安になった時に、下を見るのではなく上を見ることを促す。そうやって浪漫溢れる言葉を、彼女は戯れに解きほぐしていった。

その強い輝きの中に、彼女はいるのだろうか。

腕を伸ばして、夏梅の髪を撫でた。つややかな黒髪は、彼女譲りのうちの一つだ。

目を閉じて記憶を探ろうとして、それは暗闇の中でぶつりと途切れた。

昨晚、注文を取りに来た給仕ウエイトレスの女性が再びやってきた。

朝から輝かしい笑顔で、乗客を迎える姿はさすがのプロ意識だった。

「お早うございます。朝食は如何致しましょう」

「昨晚と同じ咖喱カレーで」

「おはようございます。今度は、辛さ8倍のカレーをください、おねえさん」

「お気に召していただきまして、誠にありがとうございます」

寸分たりとも歪みない綺麗な笑顔のまま、給仕ウエイトレスの女性は注文を厨房

へと持つて行つた。咖哩は昨晚と遜色なく絶品だった。

咖哩の芳香を漂わせながら、ふたりして下車する。その駅には、警察関係者が多数集まっていたが、ほどなくして引き上げていった。いつの間にか、麦わら帽子をかぶつた夏梅に、袖を引かれた。

「お父さん、電話が鳴つてるよ」

出るとそれは義父からで、常駐している医者の神西とともに車で迎えに来るという。

待ち合わせの駅まで、鈍行の電車を乗り継いでいく。

その駅には、好々爺とした義父と老医の神西が黒塗りの車で待つていてくれた。

「御無沙汰しています」

「ごんにちは」

夏梅は借りてきた猫のように私の襟衣の裾を指でつまみ、半身を隠すようにして、おとなしく挨拶をした。

大きな門構えが、堂々と佇む。

到底出迎えられるとは思えないほど、重厚な扉を前にする。

それは内側から開かれた。

響いていたのは、竹が石に当たって撥ねかえる音。

音がないよりも、静寂をより一層感じる。屋敷の新しく増設した部分、庭に突き出た四角い和室に、夏梅とふたり並んで正座し、義理の父がたてる茶を待つ。はじめは行儀よく膝を折っていた子どもだが、長時間じつと正座するのには限界が近いようだった。俯いて微動だにせず、我慢強く耐えている。

義父は、最近凝りだしたという茶道の腕前を自分たちに披露してく

ださるという。昼食の準備が終わる間、和室で義父みずから歓待してくれていた。

「……足が……しびれ、る……」

「あと少しの辛抱だ。堪えてくれ」

夏梅は俯いた顔を横にして顔をのぞかせる。何という目をしているのだろう。人や状況に裏切られ、傷つけられ、猜疑心に凝り固まった目を向けてくる。

「あと……少し？」

闇に落ちた人間というのはこんな目をするのだろう。

幼くなった声は、だのに地を這うような低い声で言う。

「あと少しって、どのくらいあと……？」

「……希望を持って待て」

……それから夏梅と私が解放されたのは、一時間後だった。

「にっがい……」

夏梅は半泣きだが、祖父の前ではちゃんと猫をかぶって、ひきつった笑顔で応えていた。この年でこれほどの忍耐力を備えていることは驚嘆に値する。頭を撫でて、ふくれっ面の息子を宥めておいた。

気疲れをしたのか、夏梅は夕方には目をこすった。義父はそれを見て、早く休めるよう、部屋へと案内する配慮をいただけた。案内する使用人の顔には見覚えがないが、夏梅は顔を知っていたようで「結婚したんだ、おめでとうございます」と声をかけていた。それに対して甚だしく喜びを見せる。微かな微笑一つで、人を動かすところは、彼女に似ているなと思った。

丁寧に首を垂れて下がっていく使用人に、夏梅はその気配が完全に去ってからのため息をついた。

「なんか……疲れちゃった」

「そうか。お疲れだったな、夏梅。今日は善く休むといい」

「きょうも、だよ。あーあーあー、寝てばかり！でも眠い！」

あーあーあーと奇声をあげる夏梅を眺めて、疲れているんだなどの毒に思った。

「じゃあもう寝るか」

「寝る前に、あの話の続き聞かせてよっ 気になって気になって仕方ないよ！」

「気に入ったのなら、善かった」

即興で作った童話を聞かせると、夏梅たちは元気になる。

彼女も夏梅も、その登場人物キャラクターについていつも興味を持ってくれた。今日もこうして記憶の欠けた自分は物語と作る。きつとそれが欠けた何かを埋めるものでもあると思った。

夜が更ける前にはすっかり寝静まる。都会とは違った夜は、容赦なく視界を埋め尽くす黒だった。ここでは小さな灯りの果たす影響が限りなく日常のなかで身に迫って感じられる。

武人と初孫

正面から向かい合う。

祖父のこだわりは、無手であること。

武器がなくとも、自分の身を守るように、と。

夏梅が祖父の正直から習ったのは、一般に護身術といわれる。

空気を引き裂く音が銃声よりも恐ろしい、と言ったらその迫力が伝わるだろうか。

眼には捉えられない速さだった。

来ると判って警戒していたのに、武骨で硬い手のひらは、夏梅の首を掴んでいた。

夏梅は、いつもは軽く伏せている目を見開き、握られた方の手の五本の指を伸ばして強く張った。そして肱をわき腹に付けて腰を落とす。手首を中心に、肱を相手の胸に突き入れる。

「つく——」

相手の手が離れる。

夏梅はその隙を見逃さずに、後ろへ逃げた。

基本は逃げの姿勢だ。

十分、相手との距離を保つてから、脇から力を抜き、夏梅は窺うように祖父を見上げた。

「……………お爺さん、大丈夫?」

「ああ、よくぞここまで成長したな」

どうやら感無量で、言葉が出なかつただけらしい。

一通りに教わった技を確認する。

一度習えば、忘れない夏梅はどうやら教え甲斐があるらしく、指導に熱が入ってくる。

気力溢れる祖父の後を、夏梅は重い足取りでとぼとぼついて行く。

お堂の床に素足で歩いていき、膝を折る。

このように正坐して向き合うというのが、一般的な祖父と孫との普通の光景なのかはよくわからない。

しかし、妙に格式ばった対面だという意識はある。

指を三本立てたら、祖父は夏梅が何歳なのかを思い出してくれるだろうか。

「姿勢がよろしい。礼は重んじなければならぬぞ、夏梅」

「はい……お爺さん」

『武道は礼に始まり礼に終わる』とは、とても大切な教えらしい。この言葉は、技の力量以外に礼儀を重んじる精神鍛錬が必要であることを意味している、らしい。ただ単に技や力量だけが強くなればよし、ということでもない。精神が重要なのだとか。

ちよつとよくわからない。

「座り方一つとっても、作法がある」

武道所における一通りの礼儀作法として、敬礼、黙礼、目礼、座礼、立礼があり、武道所での座り方というものも存在する。正坐は、多少の違いはあってもおおむね次のようにある。まず、左足から膝をつき、次いで右足を曲げ着座する。そして、正坐した両足の間隔はこぶし一つあるいは二握り分ほど空け、両手は大腿の付け根にそつと置く。顔の位置も決まっている。正面を見つめ、顎を引き、背筋を伸ばす——と共に両肩の力を抜く。注文が多過ぎである。もつと細かいことまで言うと、足の親指は重ねるのだ。

武術とは——そんな口上で、雪のように真っ白の髪を後頭部で一つくりにした祖父が、正座で夏梅に説いている。

「武術を鍛錬して武徳を涵養し以て神霊を慰め——これは、術の身体的修練を積むことによつて、戦わずして敵を威伏せしめる『武徳』の人格・精神が形成されるという論理をいう」

「はあ……」

相槌なのか、ため息なのか、ただ吐いた息なのか。

夏梅自身もよくわからない。

外ではちゅんちゅんと小鳥がいないいた。
楽しそうだ。恨めしい。

開かれた引き戸は、麗らかな日差しを浴びる小鳥が遊ぶ中庭を良く見せているのに、夏梅は屋敷にある鍛錬部屋で座っていないければならないのだ。

理不尽だ。

ちなみに父は、神西のもとで診察中である。

滔々とした祖父の言葉がラジオのように流れる。

「武道を講演し以て武徳を永遠に伝ふ——これは、武徳の普及伝承の手段として、身体的・可視的な『術』とは別に、部の道理を解いて演べる」

三歳児にもわかるような言葉を遣おうよ。

率直に聞いているけれども理解できない。

「ここまでで何か判らぬ言葉はあるか？」

「えー……えー……の、のべるって何？」

「広げるといふ意味だ。つまり、精神的・観念的な方法で得る『道』が存在することになる」

なにが、つまりなのだろう……。

道がどうしたのか。迷子にでもなっているのか。周りの人に訊けばいいのでは？

頭の中で迷子になった夏梅は、げっそりしながら祖父に訊いた。

「諭吉大叔父さんがやってたっていう、刀の使い方これから教えてくれるんだよね？」

無手にこだわる祖父が、珍しく武器の扱いを教えるというので仕方なく顔を出したのだが。

「刀でもさまざまなのだ。剣術、剣道、抜刀術、居合術などだ」

「剣道だけだと思ってたあ」

まどろっこしい話は置いておいて早速、実践を……なんて展開を夏梅は望んでいる。

祖父の話は今のところだいたいわからない。

「うむ。諭吉のは、一刀流だ。お前にはあまり合わぬのだが、基は同

じ。一刀流の系統の教えでいえば、二つの目付の事——これは、相手の全体を見るなかで特に重きを置いてみるところが二つあるという教えだ」

「はえ……」

難しい話過ぎて、気分が悪くなってきた。

眩暈がする。

しかし祖父の話は終わらない。

「その二つとは、剣先とこぶしを見る。心の変化によって気が起こり、これが形となって最初に現れるのは剣先とこぶしであり、この二か所を見るというものだ」

「……うん」

動きを知るには、刀の先っぽと握ってる手を見ればいいってことかなど辺りをつける。

ここだけちよつとわかった。

「有形と無形を見るというものもある。これは、肉眼で実際に相手の有形の動きを見ると同時に、相手の無形の心や意図を観察するのだ」
「へあ」

もう駄目だった。

「あとは、相手と自分を見るところというものだ。相手の虚を見ると同時に、自分が勝つところや敗れるところを顧みる。さらに、目に見たことをいつまでも心に留め残してはいかん。留め残すと『目の居付き』となって不覚を取ることになる、という教えもある。これは『止心』や『拘り』を戒めたものだろう」

「えー……ししんとこだわりはだめなんだね」

祖父にわかったかという視線を送られてきたので、直前の言葉尻を繰り返してそれっぽく悟ったふりをする。

「その通り」

何の通りだったっけ。

「ほ、ほほう」

次に、攻めについてだ、と顎を撫でた。

怖い顔だなあ、と夏梅は思った。

あと、まだ続くのかあ、と。

たぶん口にしたら、泣いちゃうかもしれないから言わなかった。

「攻めは、『気で先をとる』『中心をとる』『有利な間取り』の三つに集約される。『気で先をとる』とは端的に言うのと、相手に勝つという堅固な意思の集中とその持続だ。『中心をとる』とは、剣先によって相手の中心を制圧することと同時に、自分の中心を堅持すること。『有利な間取り』とは、自分にとって有利な間取りを展開すること、すなわち相手を自分の陣地に容れないようにしながら、自分は相手の陣地に踏み込んでいくこと。なお、攻めはこの三つの働きが統合一体的に発揮されてこそ効果が現れるものだ。頭に留めておくように」

「うえい」

「何か質問はあるか」

「あー……あとは、お父さんに教えてもらうかな」

「作之助君は、暗殺を得意としていたのだ。暗殺と武道とは異なる」

「そうなの……?」

「暗殺は、虚と虚の絡み合いだからな」

「……………へえ」

結局その日のうちに刀の扱いを教わることはなかった。

祖父からは、刀の目利きについて教えてくれて、どうやら無手至上主義は変わらず、夏梅に武器を持たせる気もないようだった。刀の扱いというのも、手入れの仕方だという……。

「どうしたんだ、夏梅」

「ふーてーねー」

父は少し考えこんだ後、「不貞寝か」と納得した。

空蝉と老医

どこからか衣擦れの音が聞こえた気がして、目が覚めた。

目を開くと、施工した時に付いたのだろう、人の手形のついた天井が見えた。

「……知らない天井だ」

だが何処かは判っている。——ここは、妻の実家の客間に当たる和室だ。

隣には起き抜けの布団があり、掛布が、そこで眠っていた者の形を残して、むなしく空洞を作っている。……蝉の抜け殻か何かのようだ。そして、そろそろ、そういつた季節だ。

「夏梅のやつ、随分と早起きじゃないか」

寝付きは良かったように思うので、枕が変わって眠れなかったという事態ではないだろう。

夏梅を探しに行かなくては、と身を起こす。

朝食の時間になれば、屋敷の誰かが呼びに来るからだ。

隣の布団へ手を伸ばして、躊躇した。

その空洞を潰してしまうのは惜しい気もした。

それは空蝉を壊すことへの躊躇に似ていた。

ただ、物質というわけではなく、そこに温かな命が存在していたという残滓を読み取ってしまうからだろうか。

「……なんだ？」

降ろしかけた手のひらは、下の敷布に触れる前に、何かに当たった。

掛布をめくると、そこには手首から肘ほどの大きさの、精巧にできた黒髪を持つ人形が丁寧に寝かしつけられていた。まるで、その布団で寝ていた主の代わりのように。これは——

「夏梅のものか？」

夏梅に人形遊びをさせるといふ考えが思い浮かばず、絵本や積み木を与えていた自分の子育て内容には、大いに反省する余地があるかもしれない。

十を幾つか超えたくらいはまだまだ子どもといった容貌は、一見すれば、小学生の高学年くらいだ。しかし、内面は、三歳児。人形で遊びたい年頃なのやも。

「……しかしこれは」

聊か、精巧につくられ過ぎているような。

細部まで見ずとも、その手の込みようは、まるで生きている少女をそのまま小さくしたような完成度の高さだった。これが最近の子どもの人形遊びの流行なのだろうか？

「この、顔は」

その面差しには見覚えがありすぎた。——黒髪を持つその人形の造形は、夏梅の顔立ちに似ていた。陶器で出来ている肌には、仏像の玉眼のようにはめこまれていた。暗色の石が、満天の星を映す夏の海辺のように輝いていた。それは夏梅のものよりもずっと生氣に満ちている。……無機物である人形に劣る生氣のなさというのはどうしたことでだろう。

「誰に似たんだかな……」

手で人形を動かしてみると、きらきらというよりはぎらぎらと光を反射する人形の瞳は、静謐な仏の玉眼に例えるには輝きが過ぎている。人であれば、生を余すところなく謳歌してやる、というような野心すら感じられる。

この物質である人形から、そのように感じてしまう。

物質が生を得ようと考えるはずはない。だが、もしそういう思念を持ったのなら、その瞬間、その物質は命を得たということになってしまうのだろうか。

「いのちか……」

死んだ瞬間を知らない自分は、とぎれとぎれの記憶の延長上に生きているようにしか感じられない。確かに、『死んだ』という場面は抜け落ちていて、だいたいは空白を挟んでの前後の自分がある。何が変

わったか、何が無くなったか、判らない。

何度も死んだという実感すらない。自分にとって、生は今も昔も続いている。

さて、と目を人形に落とす。

夏梅の持ち物にこんなものはなかったはずだ。この家の誰かからもらったのだろうか。

当人に聞けばよいだろうが、この広い屋敷のどこにいるのか。

ここは自分の『妻』の実家であり、自由に行動することがはばかれる場所だ。

探しに行くより、夏梅がここへ戻ってくるのを待つのが良いのかもしれないが、どこかで迷っているかもしれない。この屋敷は広いのに、まだ増築を続けているらしかった。

敷かかれている布団を畳み、隣の夏梅の分の布団も片付ける。

その上に、そこで眠っていた——夏梅によく似た人形も乗せておく。

荷物を探り、手早く着替えてから外に出ると、心臓が一瞬縮む思いがした。

別に、幽霊ではない。

軒下に座って庭を眺める、この屋敷の主の姿が見えたからだ。

「やあ。お早う。善く休めたかね、作之助君」

和服の袖に腕を突っ込んだ七十半ばのその人物は、義父であり中村正直まことなむらという。中村家では「真一郎」という名を代々の当主が襲名する。義父は先々代の当主だ。実子はいるが、随分と破天荒な性格だったらしく、家に縛り付けられるのは嫌だと瀬戸を飛び出しいったつきりだという。代わりに盟友であった福沢家で実父を亡くした和枝が養女として迎えられた。先代は、夏梅の母で「真一郎」の名を継いだ。がすぐに返上し、夏梅が成人した暁には、夏梅が中村家の当主になる——というちよつとした背景があったりする。

そのため、義父には、夏梅とも妻とも実際の血縁関係はない。

つながりの希薄な者同士も、一つの家族のくくりの中に迎え入れ、そのように気にかけて養育する姿勢は、昔の武士の家制度につながる氣質に似ている。

布団を片付け終わった部屋へ座布団を出して向かい合う。

久しぶりに正座をして、頭を下げつつ思う、義父との向き合い方の手引書はないものか。それを教本に、相對する前に三遍通りは読み込んで、会話に臨みたいものだった。

「お早うございます。善く眠れました」

実際、死んだ鯖のようによく眠れた。

あの深い暗闇の底から再び起き上がったことに自分でも驚くほどだ。

目尻と頬の陰影を深くして、義父は頷いた。

「それは善かった」

私は首を振った。

「よく眠り過ぎて、夏梅が起きるのに気付きませんでした」

「なに、気にするな。ここは君たちの家なのだから。それに、あの時分の子どもは元気が有り余っているものだからな」

身体が変化してから、夏梅は一気に活発になった。その変化について行けなかったのは、自分のほうだった。父親として失格だ。夏梅にとって片親しかいないのだから、もつとしっかりしなくてはならないのに。

すると、義父が苦笑を浮かべた。

「君はまだ若い。若い頃に子を持てば、やってやれることの幅は間違いないが多くなる。だがだからといって、できないことを気にし過ぎるものでもないぞ」

その言葉に内心首を傾げた。

私が周りの同僚と比べても浅学非才の身であることは理解している。

だからこそ、できないこととできることとの区別はきちんとつけていると思っていたのだが。

「はい。以後気をつけます」

「……相変わらず生真面目な人だな、君は。和枝とはまったく正反対だ」

「和枝……さんは、とても、優等生だった気が、します」

確か、義父の前では「さん」付けで読んでいた気がする。

一言発するだけでも、神経がギリギリと張り詰められて悲鳴をあげているようだ。

「うむ……まあ、僕はあの子の父親だからな。身内のひいき目で、悪い娘ではなかったと思っておる……おるが……」

「はい」

義父はこうして今も亡き義娘を想っているのだ。

その想いに、自然と視線が自分の膝に落ちる。

「——いや、なに。こうして思い出を話せる相手がいることは僕にとって幸運だ、君がいてくれてよかったぞ、作之助君。さて——」

和装を体の一部のように着こなした老年男性は、いつの間にか立ち上がった。

座布団の上に座っていた自分は自然、見上げる形になっていた。油断といえるだろうか。格上で目上の相手と場を共にするという緊張は常に身を包んでいた。自分は自ずと気を張っていた筈だった。それでも、気が付けば一つの動作は終わっていた。

染みついた習性から、危機感が身を占めたが、表に出たものといえはほとんどない。

「ついて来なさい、作之助君。場所を変えよう。——久方ぶりに戻ってきた婿殿と、したい話と見せたい物があるのだ」

入り婿に拒否権はない。それは他に選択肢がないということ、悩まなくて済む。

つまり一言いえばよいだけだ。

「——はい」

自分は頷いた。

ご隠居が障子を引いて廊下へ出るのを、一拍おいてから追った。中村のご隠居の背中を二、三步後ろでついて行く。少し視線を上げれば、足袋をはいた足が、そして落ち着いた色合いの和装をきつちりと着こなすご隠居の後ろ姿が見えた。

面と向かつてはしげしげとは見られない御仁だ。後ろからであればそっと目を向けることができた。背は頭一つ分くらい低いけれども、隙のない歩みが武人を彷彿とさせる——事実その通りなのだ。

和風造りの家屋は、時代ごとに増築されているらしく直線的な廊下の曲がり角を幾度も経ていく。必要のために新たに継ぎ足された渡しの廊下の板が真新しかったり、古い木目に切り変わったたりしている。そういったものを見てみると、徐々に方向感覚に自信が持てなくなってくる。

角を物音なく曲がったご隠居の背を追っていると、

『……から……は……し……つ……』

柏などの草木の葉の揺らぎに雑じって背後から聞こえた。

『……た……も……』

振り返ると、細く切り取られた、縁側の景色が見えた。そちらは外だったか。風がゆったりと流れ込んでくる。それほど大きな声でなくとも、途切れ途切れの音が聞こえてくるのはそういった関係だろう。

瞬きを止めて目を凝らすと、そこに腰掛けているのだろう、夏梅の足がぱたぱたと揺れている。

見える縁側の先の庭に伸びる、小さな子供の影が幾つか。近所の子どもと話でもしているのだろう。

「——作之助君、どうかしたのかね」

ご隠居が立ち止まって振り返っていた。そちらへ目を戻すと、さらに二、三步の間隔が大分開いていることに気づいた。

「いえ。何でもありません」

そうかね、とご隠居は和装の袖に両手を入れていたのを、片方だけ取り出して顎をさすった。その目がちら、と自身の肩を越えていくのが判った。ご隠居の目にも夏梅の姿が垣間見えたことだろう。明らかに目じりが緩むのが判って、この人にとっての夏梅は孫なのだということを改めて実感する。

他者が他者を慈しむ心。そういったつながりに関わっている自分が、その一端を担っているという自分が、かつての灰色の暗殺者であった少年時代の記憶とはあまりにもかけ離れているというのに、不思議となじみがないとは感じないのだ。

「まあ、今は儂の用事に付き合ってもらおうかね」

「はい」

頷いた。足を止めさせてしまったのはこちらであるけれども、もともとのつもりだったのだから当然だ。

もう一度、夏梅のほうを見遣る。夏梅は本当にこちらに気づかないようで、横顔をぴくりとも動かさず、足をぶらつかせていた。物憂げにも見えるが、きつと何も考えていない。何の拍子か、夏梅がぶらつかせていた足を大きく蹴り上げる動作をしていた。

ご隠居が歩みを再開する。先導者の板張りの床のきしむ音に促されて、それについて行く。

再び先導し出したご隠居に案内されたのは、特に変わったところの見当たらない和室だった。座布団を引き出したのに恐縮して、促されるままそこに座った。ご隠居は、上座に腰を下ろすでもなく、隣の子を引いて続いている隣室へと姿を消す。

その間に、頭の中でここまでの道筋を組み立てて、描きだしていく。すると、ここは玄関に近く、比較的新しく増築された北の区画だった。夏梅が、地元の子どもたちとの外見年齢的なくびきを取り

払った交流を育んでいた縁側は、日当たりのよさから見当をつけていたが、やはり南側だった。

「君に来てもらったのは、他でもない。——和枝の絵画のことだ」
「和枝…さんの」

夏梅の母は、絵の才能に秀でていた。学生時代の頃から、それは顕著であったが、地元にいる間は、閉鎖的な地のため、周りに広く知られることはなかった。それが、あるきっかけで横浜の女学校へと転校した際、そこに赴任していた美術教師の目に留まり、瞬く間にその筋では知られるようになったらしい。

「実は和枝が死んでからも、ちよくちよく個展を横浜で開きたいという話が諸方から来ていてな」

「横浜で」

「そう。ちょうど作之助君も横浜にいる。夏梅にも、あの子の母親の絵を見せたいと思ったのだ。きちんとした展覧会で、描かれたものを見、そこに来る人々を見、和枝が——あの子の母親がどんな人間だったのかを自分の目で見てほしい。あの子の少ない母の記憶を少しでも増やしてやりたいのだ」

自分は諦めたことを、この人は考えていた。

失ったものはかえらない。だから、見ないようにした。

前を向いていかなければと。

「儂は、作之助君。君にも見てほしいのだよ」

振り返ってもいいのだと言われた気がした。

「だが、その前に見てほしいものがある」

戻ってきたご隠居は、何かを抱えていた。布をかぶせられたそれは、四角い形をしているということくらいしか分からなかった。

「なに、ちよつとした確認だよ」

姿勢を正した。腕に抱えているものと何か関係があるのだろうか。

「まだ——早かったようだな」

天井が見えた。赤い梅の花が広がっている。

青い空が見えた。そこは廃墟で、煙が立ち上り、いや違う——黄金の瞳がこちらを見ていた。

後頭部が畳の感触と、鈍い痺れが相まって、自分が何を見ているのかどんな体勢なのか違和感を抱いた。眉をしかめると、ぬつと手が視界を遮る。義父の顔が見えた。逆光でその表情は暗くて見えない。

「事を急ぎ過ぎていたようだ。投げ飛ばしてすまなかつた、電話をするから、神西に診てもらいなさい」

その手を掴むと、引つ張り上げられた。

その手は力強く、何もわからないうちに立ち上がった。

障子を閉めた音で、我に返る。

『神西の方を訪ねていきなさい』

義父はそういって、自分に退室を促した。

そうだ、行かなければ。首に巻き付けていた鎖編みの髪に触れようと手をあげると、小刻みに震え、指先がひどく冷たくなっていることに気付いた。

「あ、何を——」

何を見せられたのだったろうか。

両手で顔を覆ったが、その拍子に首に巻いた鎖編みの髪が喉を絞めつけて咳き込んだ。

頭の中から——何者かの愉し気な笑い声が聞こえてきた、気がした。

???
???

この屋敷でもっとも通^{かよ}った場所は、いくら増築を続けていたとしても、だいたいの方向さえわかれば、たどり着くことができた。夜勤明けの朝日はいやだと東を厭い、白昼の光は標本に悪いと言って南を避け、夏の夕日は目に悪いと言って西を嫌い、最終的に光の届きにくいじめじめとした北東の一角に、この屋敷に駐在する老医は診療室を構えていた。

「お仕事を中断させてしまい、申し訳ありません、神西先生。織田です」

「おや、こんにちは、作之助殿。今日も、良いお日柄ですね」

老医は口元に穏やかな微笑を浮かべて、こちらを振り向いた。

窓枠から空を見ると、晴れ渡る空に、大きな入道雲が見えた。もう空は夏だった。

「はい。雨も降らず、善い天気です」

目許の皺を刻んで笑み、しばらくして「……変わりませんねえ」と何かにしみじみ感じ入ったように呟く。そのまま首を少々傾ける。

「それで——ご気分は如何です」

光を反射する眼鏡のつるを指で支えてかけなおす。

その手には手首まである手袋をはめていた。

「体調は特に問題はありません」

「……そちらのことではないのですがね」

そちらのことではない、とは……。

医師が気にかけるのは身体の不調の有無だろうと思つての返答だった。体調のことではないらしい。

「まあ、体に不便がないのは良いことです」

「——記憶のことでしょうか」

思い当たるのは一つだった。

中村家に常駐する老医神西は、精神科医の面もある。横浜の福沢の

邸宅から彼女の実家である瀬戸へと越したのも、そういった利便性があつてのことだった。あの時分、神西にはよく世話になっていた。

だから、てっきり記憶障害についてかと思つた。

「それも違いますが……いえ。まあ、違わなくはないかもしれませんが。こうして会話で来ているということは、意識があるということ、思考があるということ。思考されたうえで行動は、あなたがあなたであることを規定する。今のあなたを動かすのは紛れもなくあなた自身ということ。ならば」

座つていた回る椅子の背もたれを支えに立ち上がると、神西は眼鏡を外してじつとこちらを見てきた。

「ふむ——まあ、心配のし過ぎでしたかね」

「何かご心配事がお在りなのですか？」

医者という職についていれば、頭を悩ませる事も多いのだろう。人間同士で争う戦場ではなく、病を敵として常に戦っているようなものだ。比べることでもないだろうが、数多ある生業のなかでも最も崇高な職のひとつであるだろう。

自分が過去、神西に何度も救われているように、また誰かのために頭を悩ませているのかもしれない。——いえ、と彼は首を横に振つた。

「経つた今、ひとつは解消されました。作之助殿とのこうした会話のお蔭でね。ありがとうございます」

「お役にたてたのなら佳かったです」

内心ではまたも首を捻つていた。この短い間に、私の何がこの老医の問題を解いたのだろうか。頭のいい人間の考えることは分からない。……そういえばこの医者は、老医とはいうが、妙に声が若々しい。もつとも、目じりの皺や、慌てたところなどを見たことがない、落ちて着いた物腰は経て来た長い歳月を感じさせるのだが。

「自我の乖離はどうしましょうか。……和枝君の遺物を持っている間は、精神が落ち着くという今までのデータでしたが。横浜での生活は、福沢殿の異能力の制御の下で安定している。しかし、忘却部分の記憶に触れてくる対象が多いようですね。——さて」

「作之助殿。人形は気に入ってくださいましたか？」

「にんぎょう？」

思い当るのはちょうど一つあった。

今朝の人形は、夏梅の物ではなかったらしい。

「あの人形の髪は、和枝君のものを使っているのですよ」

一拍おく。

二拍置いて。

目が眩む。

それは、それが、それで。だから。そうだ……。

「——ああそれなら」

何かが自分の体を使って何を口走ろうとしていた。

開きかけた唇に、手袋に包まれたひとさし指が触れた。

「——嘘です」

老医はにっこりと微笑み、そして再び言った、「嘘です」

老医の言葉に、自分の中から何かがあふれて来ようとしたのが、硬直する。立ち止まる。つま先はいつの間にか、出口を向いていた。それに気づいて驚く。

今、どこへ行こうとしていたのだろう。

足がすくんで呆然としている自分を、老医は椅子に脚を組んで座り、腕を組みながら診ていた。

作之助殿、と彼は目を細めた。

「あなた****に、****ますね？」

どこからか蝉の鳴く声が聞こえたような気がした。

そうだ——そろそろ、そんな季節だった。

第三幕 絵画は真実を騙らない。 赤点だらけ。

母方の祖父の屋敷は日本家屋で、増築が繰り返されている部分には、和洋折衷になった区画が多々ある。その屋敷は毎年増築を続けている。横浜から久方ぶりに瀬戸へ戻ってきた者にとつても既知と未知が入り乱れていてちよつと混乱する。回廊の継ぎ目は真新しいところから、古い方へ。そうやって、小走りで進みつつ、かち合いそうになる人がいれば、たくさんある曲がり角の一つに身をひそめた。そうして誰にも見つからずに足を向けていくと、目当ての部屋を見つけた。

換気と日干しのために開けられている障子の間をすり抜ける。なかに人は不在だ。この部屋の主は、いつもこの時間に早朝稽古をしている。その時間を見計らって、こつそりと部屋に入る……これは身内の犯行ですね、と脳内で実況しながら、電気のつかない部屋を進む。まず日当たりのよいそこは来客用の部屋で、その奥に二つの部屋が引き戸で区切られている。合わせてこれら三つの続き間は、すべて祖父専用の場所になっていた。

奥の奥。来客用、寝室用、その奥が物置になっている。奥に進むほどに暗さが比例する。

最も奥に進んで、薄暗いその部屋へ行く。光が届きにくい部屋で、そこには祖父が大事にしまい込んでいる、とあるものがあることを、夏梅は知っていた。

箆笥の最も上の棚の、左側。そこにあるもの——。
手を伸ばせば、〃それ〃に届いた。

そこに掛けられた布をといて、中身を見る。埃一つ被っていない。祖父が時々眺めていたのか、それとも最近開いてみたのか。指先で、ちよいとつまんで中身を見る。

——ああ、やっぱりそうだった。

そこにいるのは、父と母と抱かれている幼児。これは母が描いた絵で、そろって描かれているのはこれ一つしかない。祖父たちが見せないようにしてきたもの。まだ体が小さいときの夏梅には手が届かなくて、高いところにしまわれるそれを下から見上げていた。

母の顔は自分にそっくりだった。それはいい。その人が抱える幼児は――。

布をかけなおして、それをしまう。

記憶にもふたをして、目を閉じた。

寝台列車の騒動によってふいにされた神西の抜き打ちテストは、その後、瀬戸の屋敷に着いてから改めて準備され、執り行われた。その結果や、診察、その処置により、父の経過観察のため、もう少し滞在を引き延ばすことになった。

???
???

少し大きな麦わら帽子を手で押さえながら、まだやってきていない新幹線を待つ。父は……見るだけで苦い顔になるウグイス色の小さい紙袋を複数個もっている。なかには抹茶と茶菓子が入っている。それを見ると、瀬戸で父とともに、祖父に付き合わされた茶を思い出す。足の指がびりびりと痺れる感覚が戻ってくるようだ。

「ね、おとうさん。グリーン席？」

「いや、一般自由席だ。席が決まっていると時間をずらせないからな」
「席、空あいてるといいねえ」

「この時間だ。滅多なことがなければ空すいているだろう」

音楽が流れて、新幹線がやってくることを知らせた。

行きとは違い、戻りは数時間だ。

勢いよく到着する新幹線の車窓からなかを見て頷く。

「ほんとだ、人少ないね」

「まだ8時前だからな」

始発である。

人はまばらで、席はすかすかだった。

選り放題だから、荷物の多い夏梅たちは、車両の中でも一番前の席で、座席の前のスペースが広い場所に座った。麦わら帽子を脱いで、膝に乗せると、父が夏梅の前髪を整えてきた。

「熱はもうすっかり下がったな」

「どうやら、熱もついでに測っていたらしい。」

疲れからか、夏梅は熱を出していて、それも横浜へ戻るのが遅れた理由の一つだった。

「長居したな。社長が、急な休暇の延長を認めてくださってよかった」
父はいつもと違い、一般的なスーツを着ていた。白いシャツに、黒いスラックス、そろいの上着はこの時期には暑いので、腕にかけているが、一見して一般の会社員のようだ。ネクタイを片手で緩めて、少し息苦しうにため息をつく。この後父は、横浜で探偵社とは別件で用事が入っている。

「んー。お母さんの個展の話が長くかかっちゃったもんね」

「夏梅の新しい戸籍の作成もな。しかし、二歳刻みで予備の戸籍を作る作業は必要だったのか」

「ないよりは有った方がいいんじゃない？ ……あーあ、高校生も終わりかあ」

まさか、あれでお別れになるとは思わなかった。抜き打ちテストも受けずに、さよならも言わずに、自分は急な引越により転校する手続きをこちらでしていた。あれで最後だったなら、もっとなにか、やりたかったこと話したかったことがあった気がするのに。

「考えたら、お前は3歳なのに、よく高校へ通えたな。授業は問題なかったのか？」

「そういうこと、もうちよつと早くに考えられたら、善かったんじゃない？ おかげで赤点だらけだったよ」

「そういうえば、成績表を見たことがない。どこかへやったのか」

「違いますうー。此れからもらうところだったんです。通信簿もらう前に辞めれてよかったかも」

「新しい学校は、探偵社で乱歩さんが直々に決めてくれるらしい」

「学校行かなくてもいいけどなー」

だが、なにやら探偵社へ来た依頼で、とある学校へ潜入しなくてはならない案件があるらしい。

夏梅と、もうひとり誰だかは分からないけれども、宮沢か中島かのどちらかだろう。

あるいは教師として潜入するのなら、与謝野が保健の先生、国木田が数学の先生、太宰は……なんだろうか。父は文章を書くのが好きだし、国語の先生とかだろうか。

そんなことを考えていると、早起きして車に乗って駅までやってきたせいか、あるいはおとこの熱で疲労が抜けていないのか、いつの間にか父の隣の席で眠りこけてしまっていた。

ふつと目の前が陰ったような気がした。

目を開けると、見覚えのある天井がみえた。それは夕焼け色になっていて、それをぼうつと眺めた。探偵社の天井だ。どうしてこれが見えるのだろうか。寝ぼけた頭を横に倒すと、向かいのソファに座って本を繰っている、太宰の姿が目に入った。

夏梅のぼんやりとした視線に気づいたのか、太宰は顔をあげず眼だけこちらへ遣し、にこりと微笑を口許にのぼらせた。

「——やあ、お早う、でいいのかな？ よく眠れたかい、夏梅くん？」
「……え。……なんで、太宰さん？」

びつくりして思わず体を起こすと、どうやら自分は二人掛けのソファに横になっていたらしかった。服装は、新幹線に乗った時のものと同じ。それで父はどこだろう。さつきまで一緒だったはずなのに。日付は変わっているのかいないのか。

「きみのお父さんは、先方の学芸員との打ち合わせに行つたよ」

だいぶ小さくなってしまったね、と太宰が呟きのように言いながら、小首をかしげてつづけた。

「なんでも、きみのお母さんの遺作である絵画の展覧会を検討してい

るらしいね?」

「うん……。そっか、おとうさん、行ったんだ」

「きみを預かるよう織田作に頼まれてね。ちょうど暇を持て余していた私が、読書がてら傍についていたというわけさ」

夕暮れに赤く染まる空間は静かだった。他の社員たちはみな帰路に就いたのだろう。

太宰はこうして夏梅を見るために残っていたのか。

持っていた本を閉じて、頬杖をつきながらこちらを見てくる。

その本が、いつもの自殺に関するものではないことに、ほっとした。「織田作がきみを預けてまで、その時間に向かった。身内関係者、それも亡くなった作者の配偶者でありながら、一個人の都合では日取りどころか時間をずらすことができない会合。……これはなかなか大きい規模か、早急に進められることが必要なスケジュールのようだ。急な計画であったとしても、早急な段取りをきちんと踏んでくるあたり——きみのお母さんはとても期待された画家だったのだろう」

「……そうかもね」

そうなのかもしれない。そうでないのかもしれない。

屋敷の人たちは母の絵を特別飾りもしていなかった。

むしろ、布をかぶせていた。

「きみのお母さんって、どんな人なのかな?」

細められた太宰の視線に、夏梅は目をそらした。

視線をそらした先に、自分の小さくなった足が見えた。

これでも実年齢よりはずっと大きい。

でも、本当は夏梅はただの三歳児だ。

「わからない。ぼくが1歳の時に、お母さんは死んじゃった。お父さんに聞いても、おとうさんもそんなにお母さんのことは覚えてないし」

白いカーテンと、色とりどりのキャンバスが、潮風に吹かれていた。

そこにいたのは母で、隣の部屋では父が小説を書いていた。

絵筆をとる母と、ペンを握る父。

父は架空の物語を作り出すが、母は……。

「でも——『絵』はいつもほんとのことがかいてあるんだよ」

この意味が、本当の意味が、解かるときが来るのだろうか。

太宰の顔を今度ははつきりと見て、夏梅は力なく笑った。

「太宰さんも、見てみればいいよ」

今度、横浜で開かれる個展のため、ぞくぞくこの地へ母の絵がやって来る。

そこに『あの絵』があるのならば。

瀬戸から運ばれてくる数々の絵画の中で、『あの絵』もやってくるのなら。

夏梅は見て、見なかった振りを選んだ。

父は、見たものを拒絶したという。

ならば、それを見た上で答えを出すのは、あの絵に関わる人の中にはもういない。

しかし、なぜだろう。あの絵に描かれている家族をみて答えを出すのは、目の前の、包帯だらけで痛々しいこの男の人ように感じた。

「では、無事に展覧会が催されることを願おう」

「お父さんたちがちゃんと準備してるから、大丈夫だよ思うよ」

包帯だらけの人は、夏梅の言葉に、思い出したように破顔する。

「織田作が！ 昼間からスーツ着て、普通の会社員のように出かけていくさまは、なんというか、ここが違う世界線なのではないかと感じさえしたものだ——だが、問題は別のところでおきそうだね。この横浜で、少々厄介なことになりそうなのだよ」

「厄介なこと？」

「ああ。敦くんを知っているだろう？」

「……………覚えてるよ！ お休みは長かったけど、そんな忘れてたりなんかしないからね！」

思いがけない問いに、驚きでちよつと返答に間が空いてしまったではないか。これでは逆に怪しく聞こえる。ちがうのだ、ちゃんと覚えてるし知ってる！

父は忘れる可能性が微少にあるけれども、夏梅はそれこそ胎内にいるときからの記憶が（略）

「それは善かった。私の事も覚えていてようだしね。実年齢が三歳児と言ったけれど、それとは見合わないほどに、聡明で記憶力も抜群だ」
「ほめられてるの?」

「その心算つもりだとも」

「……ありがとう?」

なんだか、純粹に褒められているというより、毛並みを撫でながら反応を見てくる研究者を前にしているような、居心地の悪さを感じながら、一応お礼を言った。

「どういたしましたして。それで話を戻すけれど、敦くんに掛けられていた70億の懸賞金のことは? あ、『懸賞金』とは、その人をつれて来た人に与えられるお金のことだよ」

「へえー。……知らない」

懸賞金という言葉も、それが掛けられていたという中島のことも。どちらも。

「まあ、つまり敦くんを連れてきたら、大金がもらえるわけだ。大金持ちになれる」

「大金持ち」

「なりたいかい? 大金持ちに」

なれるものなら、何にでもなった方がいい——とは夏梅の持論だ。野球選手も、先生も、医者も、画家も小説家も。犯罪者は別として、夏梅はあらゆるものに、なれるものならなりたいと思う。

だから、大金持ちひとつになりたいわけではないが、夏梅はまあ、なれるものならと領いた。

「お金はないよりも有った方がいいと思う」

「ふふふ。きみは欲があるのかわかりづらいね」

「それで、そのお金って誰が出してくれるの?」

「そこなのだよ」

そこなのか、と夏梅は周りを見回した。つまり、どこだろう?

ハハハハ、と太宰は笑いながら指摘してくる。

「そのことは、ここのごくかではなく、先ほどのきみの着眼点についてだ」

「へえ……」

そこがここどこが何だろう。分からなくなってきた。

混乱して、理解できないまま、とりあえず相槌を打った。

「反応薄いよ、夏梅くん！」

「ごめんなさい」

なんか、似たような会話したなと思い出す。

「つまり、『WHO?』——いったい誰が、敦くんに懸賞金をかけたのか。それもこの国では望外なほどの大金を、という問題について」

この国では、ということとは言葉。

この国では望めないほどの金額ということ。

「じゃあ、その人は外国のひとだったの？」

太宰は片目をつぶって、指を鳴らした。

人差し指は夏梅の方を向いている。

^{That's}「その通り！」

「ふうん……」

夏梅の薄い反応に、大仰な仕草で肩をすくめて、太宰は言う。

「これから大変なことになるよ、この横浜は。だから同じ時期に開かれるという展覧会については懸念していてね。織田作の奥さんの作品には私も多大な関心があるし、無事に恙なく滞りなく開催し閉幕することを祈るよ」

「太宰さんは、お母さんの絵に興味があるの？」

「いや、正直に言ってしまうえば、奥さんのこと自身に尋常ではなく実に深刻にもものすごく興味があるけれどね！ だって、あの織田作に奥さんだなんて！——まあ、それについては置いておいて、いや置いておけないけれども、ここは苦渋の選択で、脇に置いておいて。そう。それに遺作という話だからね。そうでなくとも、作品は一点ものだから、失われてしまえば戻っては来ない。懸賞金の黒幕の件が終わった暁には、一番に拝見させていただこう」

饒舌に語ったかと思えば静かに臉を伏せる。その様は静謐で、この

包帯の男の人は多弁でも寡黙でも、面に出る落差の激しさの一方で、心のうち——そのどこかはいつも静寂が占めているのではないかなんとかなく思った。それを眺めながら、ぽつりと言う。

「なんだか、愉しそう」

「——そう、みえるかい？」

不思議そうに首をかしげる太宰に、夏梅は頷いた。

「うん。お父さんに会えるの、愉しみだったんだね」

息をのむ音が聞こえた。

斜陽で陰った視界のなかで、きつと太宰は微笑んだのだろうと夏梅は思った。

似るの似ないの

集中していた作業から、意識を離す。すると、夏梅の机からよく見える窓の外の青い空。そこに、白い色鉛筆でひいたような飛行機雲が、端から消えていくのを見送った。一度またたき、そして二度目にまたたく。

そして、唐突に、傍らの本棚の前に立ち、資料をあさっていた父へと言葉を投げかけた。

「四年前なんだけど、おとうさんは知ってる?」
「なにがだ」

首に巻いた鎖編みの髪に窮屈そうな顔をしながら、父が振り向いた。

すると、別方向からも反応があった。

「何の話だ?」

「何の話かい?」

「……いや、ボクも耳に入って気になりましたけど、皆さん食いつき過ぎじゃありませんか?」

上から、父、国木田、太宰、谷崎兄だ。

父に話しかけたのだが、横から顔が増えてくる。

「……僕も潤お兄さんと同じふうにおもうよ……」

暇なのだろうか。とりあえず、太宰の頭を書類の束で叩こうしていた国木田は直前まで報告書を書いていたし、谷崎兄はその隣で調査書の整理を行っていたのだから、無罪。そして、父も夏梅が声をかけるまで、江戸川に言い渡されていた資料を洗っているところだった。あまりに集中し過ぎていて、夏梅が見る限りもう4時間通して作業していたため、小休止に声をかけたつもりだった。

釣れたのは、父だけではなかったが。

よって、暇人の容疑者は太宰ひとり。

「ちようど聞こえたもんでな」

「私は暇だったからね」

暇なんだ……。国木田の持っていた書類は、太宰の頭に落ちた。

紙の重さ自体はとても軽い。でもそれが何枚も束になっていれば、ちよつと重たげな音が出るものだ。とりあえず、その重みは太宰の完了していない仕事なのだろう。

「太宰、お前は受け持っているお前の仕事を済ませてからにしろ」
「もつと言つてやつてくれ、織田作。織田作の言うことならこいつは結構聴くからな」

「もう、余計な入れ知恵しないでくれないかな」
べつと舌を出す太宰に、父は真顔で言った。

「太宰、お前は受け持っているお前の仕事を済ませてからしろ」
寸分たがわず繰り返された言葉を、太宰は両手を肩の位置にあげて受け取った。

ひらひらと手のひらを揺らす。

「今聞きたいんだよ。考えてもみなよ、織田作。時間は不可逆なんだ。この時を逃したとして、また同じ顔触れで集まったとして、同じ話にはならないように、今でなくては聞けない話がある。そうは思わないか？」

「確かに」

「おい、織田作」

太宰の言葉に納得した父に、国木田が声をあげる。

うわーという顔をした谷崎兄と夏梅は顔を見合わせる。

心通わせたが、情勢は刻一刻と変化するものだ。

「そして報告書は、いつ手を付けてもまとめる内容は同じことだ」
「たしかに」

書類と宿題は似ている。

提出期限があり、それを家に帰ってするか、授業中に内職するか、提出前の直前にやるかは個々人の選択にゆだねられている。つまり期限内に済ませればよいし、求められている内容は手を付ける時間帯によつて変化するということでもない。

「くっお前もか、夏梅」

国木田の苦々しい声を背景に、夏梅は同意した。

心通わせていたはずの谷崎兄は、諦観が異様に似合うその眼差し

で、ふっと零すように呟いた。

「いやア、やっぱり親子なんですなエ」

嫌にその言葉が部屋に響いた。

夏梅はその言葉に、谷崎兄の方へ目を向けたが、他の面々も同じようにしたため、注目はひとりに集まることになった。へつと肩をびくつかせた谷崎兄だったが、

「そりゃあそうだよ」

それにまず答えたのは、太宰だった。今度は太宰の方へ目を向ける。そこで、噴き出す音が聞こえて、事務所の入り口の方をみる。そこには、湯呑の乗った盆を片手に、口元をもう片手で隠す、谷崎妹がいた。

「——なるほど、確かに」

今度は、実感のこもった国木田の声が聞こえてそちらへ——とその視線を向ける途中で、同じように視線を運ぶ父と目が合った。そして——同時に首を傾げた。

おお、シンクロ。夏梅は首を起こすと、父もそのようにしているところだった。

噴き出す音があちこちから聞こえる。

周りを見回せば、父と夏梅以外は肩を震わせていた。

父へと目を向けると、父も夏梅へ視線を向けてきていた。

「……なんだろう、みんな体調不良かな？」

「働きすぎかもしれないな。俺たちがいない間、大変だったみたいだしな」

「そういえば、新しく女の子が入ったんだってね」

「らしいな。時間が合わず、俺たちは会えなかったが。確かお前と年が近いんじゃないか？」

「それって四歳くらい？」

「十四歳だそうだよ、彼女」

谷崎兄が整理中の調査資料を手に、夏梅に教えてくれる。

湯呑を各人の机の上に置いていった谷崎妹が、最後に谷崎兄の机に置いてそのまま体の前で盆を抱えて、上機嫌な猫のように笑って、谷

崎兄へ指を向けた。

そこで目を覆われた。

なんですか、とその手の主である国木田に尋ねると「じょうそうきよういくてきにだな」とやたら長い名称を言われたので、ぽかんとする。除草？ 教育？ 助走？

「体育？」

「おま、何故それを……っ 今時の教育は何だと——そうか高校に通っていたからか！」

盲点だ、と叫んで一人でなにやら忙しそうな国木田の声——それでも目隠しをしてきたままだ——を聴いていると、もう一つ声が降ってきた。不思議そうな声色で「何の遊びだ？」と父が尋ねてくる。すると、国木田が懇々と父に説教をしているのが聞こえた。手をそろりと外して見ると、父は分かっている顔だった。夏梅もわからん。

「十四というと、賢治くんと同じだね」

太宰が顎に指をかけて、上向いた。

その顔を見下ろしていた父が、ふと疑問を口にした。

「最近の探偵社は、未成年の雇用が多いな」

「その言い方は誤解を招きかねないぞ、織田作。ひとりはお前の子だろうが」

「そして、一人は社長がスカウトしてきたな。太宰が引つ張ってきたのは、十代後半だとして、その中島が今回の女兒を連れて来たのだったな」

「や、やめろ。その通りだが、もつと他に言い方があるだろ。同じ十代の敦が鏡花を連れて来たのに対して……」

国木田が頭を抱える。一つくくりの髪が目の前で揺れるので、掴みたい誘惑と戦った。苦悩する国木田を前にして不謹慎だぞ、夏梅！

「……賢治の場合は、十代半ばの子どもを連れて来たのが、社長になるじゃないか。いや、その通りだが、なんだ。太宰の方がまだ常識的に聞こえてくる。事実がちよつと違うだろう。いやなんか、もつとこう！」

「すまない。何と言えはいいだろうか」

そう言われるとだな、と国木田が目を泳がせる。

その隣で、谷崎妹が上機嫌に事務室を出ていくのを見送った谷崎兄が、疲れ切った会社員サラリーマンのように乾いた笑いで頷く。先ほどは妙な奇声をあげていたようなのだが、何があったのだろうか。

「まあ、事実ですモンね……ボクを含めて」

「今までの最年少は、賢治で……いや、夏梅がいたか。三歳は拙いのではないかとあの時はさすがに社長に申し入れたな」

ちよつと前までの夏梅は高校生らしい容貌と、身長を持っていた。

宮沢よりも背は高かったので忘れられがちだが、夏梅は三歳である。

そして国木田には悪いが、社長は夏梅が攻略済みの状態で、入社までにこぎつけてあるので、大叔父のその葛藤の段階は超えた後である。

「俺も、夏梅がここに来ることになった時は、夜に親子会議をしたな」
「親子会議……」

神妙な口調だが、口元を押さえている太宰へ、夏梅は、笑いたいなら笑えばいいと思うよと言おうかと思った。その震える肩を見て。何がツボったのか知らないが。

「夏梅は早く眠気が来るから大した話はできなかったが。……そういえば、今日は宮沢を見ていないな。非番ではなかったはずだ。依頼に出ているのか？」

素朴な父の疑問に、

「あ、はい。敦君と一緒に」

「何?! まさか賢治を見本として同伴させたのか!?!」

答えたのは、谷崎兄で、間髪入れずに反応したのは国木田だった。

「え、はい。だって、賢治君の成績はいいですし……」

国木田と谷崎兄は、何やら中島と宮沢の話が白熱しだしていた。……いや、白熱しているのは、国木田だけかもしれない。真面目な人は何にだって真面目に、全力で取り組めるのだからすごいと思う。それだってすごい気力エネルギーを費やす。……えらいと思う。

それで、夏梅は邪魔をしないように距離を取って、父の方へと近寄

る。

どちらも立っているけれども、やはり身長が前より縮んだことで、父の顔が遠い。

「それでね。四年前のことでね、おとうさん」

「ああ、なんだ？ お前は生まれていないな」

「そうだね。なんてったって、お母さんがまだ学生だったときの話だもん」

「そうか。ということは、まだ結婚していない時か？」

「だよ」

「おおうつと私もそちらの話に入れてくれ給え！ 実に興味ある話だ」

くるくる回る椅子で回転しながら傍に移動してきた太宰にスペースを空ける。

「いーれーてと言われれば、いーいーよと返すのが幼稚園児たちの鉄則である。

まあ、そうでなくとも明晰な太宰に聞いてもらえたら、情報が零れるだろう。

そして、零れた情報をきちんと拾いもするだろう。太宰がなんでもないように見える事象から拾い上げた情報。そしてそれを処理する能力が高いことはこの探偵社の人間であれば皆識っている。

ちらりと太宰に目を向けると、太宰はうん？という風に目を開いてきてから、にこりとわらった。こう見えて、だ。さて、それでも気を配って、この父の友人にちゃんと情報を拾わせなければならぬ。夏梅は気合を入れた。

まずあらすじから語らなくてはなるまい。

「——四年前、僕のお母さんは、この横浜の大叔父さんの家に住まわせてもらってたんですけど」

「社長と呼ぶように、夏梅」

「はい、社長」

「……………うん？」

「うん？」

父が首をかしげるので、夏梅も首を傾げた。

割って入ったのは包帯をした腕だった。

「はい、ストップ。親子して不思議世界ワールドに入らないでくれ、私が寂しい！」

「あーあと、話も進まないもんね」

こてりと首をかしげて言う。父との会話はいつもこうだ。気を取り直して話し出す。

「お母さんが通っていた女学校で」

「女学校。魅惑の響きだね」

太宰は、組んだ腕に顎を乗せて目を細めた。

夏梅はちらと太宰に視線を向けて言う。

「亡霊を見たっていう目撃騒動があったらしいんです」

「亡霊？」

「実はその学校、昔は女子高だったんだけど、共学に変わったんだって」

「そうなのか。和枝の通った学校は今でもあるのか……」

「織田作は行ったことはないのかい？」

「ない……とは言い切れないが。残っている記憶にはない」

「なるほどね」

太宰は、目を伏せて相槌を打つ。

夏梅は父の顔を覗き込んで聞いてみた。

「行きたいの、おとうさん？」

「そうだな。校舎を見てみるくらいなら」

「行けるよっ」

父と太宰の視線が、夏梅に向けられた。

夏梅の肩を、温い風が撫でていった。

「乱歩さんが僕に用意してくれるらしい新しい学校、そこだから」
「……そう、か。乱歩さんがそこを取り計らってくれるなんて」

「いや、待ちなよ、織田作。そこ素直に感動する場所じゃない。乱歩さんがわざわざそうすることは何か意図があるはずだ。夏梅くんもそういう意味でこの話を振ったのだろう」

「うん、そう。そこでね、白骨が出たらしくって」

あ、いつとくけど、人間の骨だからね、と念押しをする。

「そんな学校ならば行かせられない、直に取りやめるように掛け合つて」

「落ち着くんだ、織田作。何も、夏梅くんひとりに行かせようっていうんじゃない、これは乱歩さんの指示なのだから、仕事だ。双^{バディ}人での行動なのだろう」

「そうだよ。それに、おとうさん、そんな学校だったらじゃない。そんな学校だから行くんでしょ」

この場から出ていこうとしていた父の袖を引っ張って、その場にとどめながら夏梅は太宰とともに言葉を尽くして、引き留める。しばらく口を閉ざして黙考していたが、やがて領きが得られたので、夏梅は続きの仔細に少し触れた。

「それが、行方不明になった生徒のものなんだけど、年代が、四年くらい前のものらしいよ？」

夏梅は、父と太宰の顔を順繰りに見ていつて、ゆつくりと瞬いてから顔を横に倒した、「興味ある？」

夏梅は指を掲げた。

「興味ある人この指とーまれ」

きよとんとする父に、にんまりとする太宰。

太宰がまず指にとまり、ふたりで顔を合わせて意味深に笑み、一緒に父を見た。瞳を揺らしながら、父の手が伸びてくる。

とまったー、と夏梅が声をあげる。その声に谷崎兄や国木田が振り向いて何事か聞いてくるが、もう締め切りである。ちょうど、国木田の机にかかってきた中島からの悲鳴のような電話でうやむやになる中、夏梅は父と太宰へにこりと笑いかける、「じゃあ、今日の夜、うちに集合だよ！ 僕は今は学校もないし、明日は太宰さんは非番でしょ？ お父さんも明日の個展の打ち合わせが、来週に見送りになっちゃったし、みんな時間あるんだから、今日はみんなでお泊り会で夜更かししよう！」

大の大人がふたり、目を白黒させる姿が、とつても愉快だった。

立ち直りが早かったのは、もちろん父ではなく、太宰のほうだった。

その晩、急遽、太宰を招いて、太宰と父と夏梅とで、学校の怪談話をすることとなった。居間に布団を敷いて、川の字になって語っている。夏梅には気づかなかった何かを、太宰が拾ってくれていると信頼を寄せて、夏梅は早々に眠りについた。朝起きると、酒瓶がころがっていて、横浜では眠っていた姿を見せなかった父は、寝息を立てて眠っており、その後目を覚まして二日酔いを耐える太宰の姿を目撃することになる。まあ詳細を語る機会があれば、また今度。

蛇足として、父は夏梅の最近のブームが電車からお泊り会に移行したことを頭痛のする額を押さえながら把握したようだった。

痛い痛い痛くないの

一見して、十二、三といった年頃の容貌は、少し成長が遅い中学生に見えなくもない。だが、外へ出るにはやはり幼すぎるので、探偵社では事務方に回っていた。日中誰もいない家に残すのを心配した父と、子持ちではないにもかかわらず子守りに慣れているような大叔父の取り計らいにより、ほとんど毎日職場にいるようになった夏梅は、一通りの簡単な事務仕事はひとりでもできるようになっていた。

さて、今日もまた電話がなる。受話器を取り上げて耳に当てる。

「はい。夏梅です」

国木田がパソコンを打つ音と、宮沢が植木の枝を整える鋏の音、与謝野のご機嫌な鼻歌を背景に、夏梅はのんびりとした心地で、電話に出た。すると、相手は、初仕事に出ていた鏡花に同伴していた中島からだった。

朝に大叔父のところへ瀬戸のお土産である抹茶を持っていった。そこへちようど来ていた中島へ依頼を渡したのも夏梅だった。『荷物をお届けする簡単なお仕事だよ』と。

完了の報告かなと思っていると、中島の声の後ろで人のあわただしい声が響いていた。

「はい、敦お兄さん？……うん、はい、えー……うわ、はい」

話を聞いてく内に、ひきつる顔と、微妙な声音に、他の面々からの意識が寄せられるのを感じながら、とりあえず夏梅は助けを求めて、しつかり者の国木田へと助けを求めることにした。

受話器の口のところを片手で押さえて、席を立つ。

「国木田さん……」

「ああ。敦の仕事は、例の新人を連れていたな。何か問題が起きたのだろう……厄介な」

国木田はパソコンを打つ手を止めて、光る眼鏡を片手で掛けなおし手ため息をつく。そして、わざわざ席を立ててくれた。

「あいつらはどうしんだ？ 何をやらかしたと？」

「あの。依頼人がいる建物を停電させて、その依頼主の人を感電させ

ちやつたらしいです……どうしよう、ですか？」

「——は？」

動揺して、夏梅は変な言葉遣いになる。

「あはははは！ 随分と面白そうなことになってんじゃないのさあ。ええ？」

与謝野が腹を抱えて爆笑するが、夏梅は肩を震わせていまだ目立った反応を示さない国木田に戦々恐々とした。

「あいつらー!! 物を届けるだけの簡単な仕事だろう!! 何をどうやったそんな大事にできるんだツ!!」

夏梅は国木田の激高を前にして、肩を縮めた。受話器からも、中島が謝る声がある。手でふさいでいても、聞こえるものは聞こえるのだ。もつとぎゅつと握っておけばよかったかもしれない。心配させてしまうなんて、裏方で支える事務失格だ。

落ち込んでいると、宮沢が傍に来て「大丈夫ですよー」と頭を撫でてくれる。ちよつと国木田から距離を取って、お日様の香りがする宮沢の後ろに隠れた。

父は珈琲が切れたとかで事務の人に頼まれた買いに出ていて、江戸川はお菓子を買いたいとかでついて行ってここには不在である。

ひとしきり叫んで落ち着いたらしい国木田に、顔を出すと、大きく深呼吸して指示を出した。

「とりあえず、社長に知らせよう。確か今回の依頼人は、社長のお知り合いらしいからな」

冷静な声だった。一呼吸おいてその沈着ぶりを見せる国木田は、眼鏡の蔓に指をかけて直しているところだった。

夏梅はその言葉に頷こうとしたところで、ぱんつと事務所の扉が開かれた。

「よし、夏梅くん、君が社長に伝えてきたまえ！」

「うえっ!!」

なんだいきなり。

そう思ったが、口から出てきたのは、奇妙な声だった。恥ずかしい。

「扉は静かに開ける、太宰！」

間髪入れずに櫛が飛ぶ。

長椅子に寝転んで、何かの写真をスクラップしていた与謝野は、夏梅がその写真を目にする前に表紙を閉じて、頬杖をつく。ちろりと、見ていた夏梅へ何か意味深な笑みを向けてきて、茶目つ気たつぷりに片目をつむる、「坊やにはまだ早い。大人になったら見せてあげるよ」うう、と見ていたことがばれた夏梅は気まずくなつて、電話を両手で握る。

大人の女の人、なんだかこわい。

「ふむ、しかしねエ。夏梅の坊やに行ってもらうのはなかなかいい案じゃないかい？」

「そういえば、社長は夏梅君にはなんとなく雰囲気柔らかいですもんね」

ぱちんと手を合わせて与謝野の言葉に同意する宮沢は、顔を傾けてきて、夏梅と目を合わせて来た。いつも朗らかな光が浮かんでいる瞳と至近距離で目が合つて、夏梅はちよつと照れてしまつて目をそらした。すると、そこには与謝野のにやにやとした笑みがあつて、口元が引きつった。なんだらう。何も言つてないのに、目が物を言い過ぎである。姦しい視線から目をそらした。

なんだか、目をそらし過ぎて、ちよつとくらくらする。

「わ、わかつた。……敦お兄さん」

『聞こえたよ。ごめんね、お願いできるかな、夏梅くん』

「うん！　じゃあ、あんまり心配しないでね。今度の依頼主の人は、僕も前に届け物したことあるから。あのね、子供には優しい人だから、大丈夫だと思う」

夏梅は、そういつて心配かけてしまったらう中島を気遣う。ひいては、新人の子へ気休めになるように。きつと優しい中島は、新人の女の子に対して、大丈夫だよと声をかけるだらう。探偵社の社員はみんなそんな人ばかりだ。戸惑う夏梅を、先ほど宮沢が宥めてくれたように。

電話を切ると、国木田に襟首をつかまれている太宰の姿が目に入つて、ちよつと目をそらした。

「じゃ、国木田くんと賢治くんは二人を迎えに行ってきたまえ」

夏梅は大叔父にことを説明して、先方に取り成してもらったことができた。次の依頼では、夏梅をご指名だというが、夏梅はしばらく表へは出られないので、丁重に断ってもらった。

そんなやり取りののちに、大叔父はどこかへ出かけるようで、それを見送るためについて行くと、あわただしく、国木田と宮沢が出ていくところだった。

「社長、ポートマフィアが例の新人に接触するようです。急ぎ現場へ向かいます」

「行ってきまーす。夏梅くんもあとでね」

手を振る宮沢に、夏梅もにっこり笑顔で手を振り返した。

大叔父と国木田、宮沢が同じ昇降機に乗り込むのを見送った。

さてと。

「ポートマフィアってなんだろう……」

ぼそりとつぶやくと、影が差した。

上を向くと、見知った包帯の首が見えた。

なんだか、神出鬼没だなあと思った。

「知りたいかい?」

照明で逆光のため顔が良く見えない。しばしばと瞬きをしつつ、夏梅は意味を解釈する。そして、ああと頷く。知りたくないか、知りたいかと訊かれたら、まあ今の時点でどうやら必要な情報らしいので、知りたい。

「うん。有名なの?」

「そうだね。きみたちが乗った列車を襲った人物も、ポートマフィアの一員なのだよ。梶井基次郎。そして異能力者だ」

「ああ、そうなんだ……ちよつと間抜けな人だったけど。なんだか、身近なんだね」

「ふふふ。身近ね。まさしく言いえて妙といったところだ——そういえば、君には僕の経歴中^あてをやってなかったような。でも残念なことに、今は周知となっているから、ひとつ恒例^{イベント}行事を逃してしまっただね、いやあ残念」

「残念？」

「君が僕の経歴についてどう思いつくのか。織田作の回答の次に気になるもの」

「ふうん……まあ、昔はいいや。今は今だし」

夏梅はイベントに参加せずに今日までに至ったことを後から知らされ、ちよつとむくれて強がった。

「そうかい」

手のひらが、見上げたままの夏梅の額にかぶさった。思わず目を閉じる。前髪を整えられる。柔らかい髪は、黒色。閉じた瞼の裏に浮かび上がった、家族の肖像画が形になる前に、目を開いた。

「小さくなってしまったね。戻ったというべきなのかな」

「大叔父さんがいるから、これでもそんなに変わってない方だよ」

「——ああ、元は三歳だものね。でも以前のきみは十歳以上も年上に見えた」

ああ、それは。

「その時は、何回か死にかけたんです」

鎖骨の間へ指を置く、「ここと……」言いながら、その指を今度は^{こめかみ}蟬谷に当て、それから、と夏梅は腹部へ手を当てる、「あと、脚…は違うかな。じゃあ、あとは」迷った指を今度は、さきほど太宰が触れた額に自分の指で触れた。

「……」

夏梅はこちらを見下ろす太宰へと顔をあげた。

見上げすぎて、首が痛い。照明もまぶしくて、夏梅は目を細めてから、俯く。

「順番に、銃で撃たれたり、鉄棒で殴られたり、蹴られたりして、回復が追い付かなくなつて、体中がぐちゃぐちゃに混ざるような音がして、気が付いたら、今までで一番大きくなつた。もしかしたら、途中でいままでで一番小さくもなつた気がするけど、最終的にあんな感じになつてた」

そういえば、左胸にも小刃^{ナイフ}をつきたてられたなと胸に手を当てる。実感がわかない。

体はそんな傷を覚えていない。

だから、すぐに忘れてしまう。感覚を忘れる。記録として夏梅の記憶には残るけれども。

でも、きつと気のせいだよ、悪い夢でも見たんだよ、と言われれば、ああそうなのかもと思ってしまうくらいには、実感が伴わない。

結局のところ、夏梅には今だけなのだ。今を生きて、今を生かすことだけ。

夏梅は両手を体の前で組んで、大きく伸びをした。

「——それで、太宰さんは、ポートマフィアについて詳しいの？」
もともとその話をしていたんだ。

話が脱線するのはいつものことだけれども。

「そうだね、人並み以上には」

「太宰さん、何でも知ってそう」

きつと人並み以上よりずっと詳しく知ってそうだ。口ばかりは謙遜するけれども。

「どうかな」

にこりと太宰は笑った——のだと思う。

身長差は人の表情を読めなくさせるなあと夏梅は肩を落とした。

?? ? ?? ?

「いやあ、織田作くんはいい駄菓子屋をたくさん知ってるねえ。大漁だ」

紙袋いっぱい駄菓子を腕に抱え、珈琲豆を手に持つ長身の織田作の横で、江戸川は紙袋を指さす。身長差から少しかがんで中身を取れるようにすると、その中から棒付きの水飴を取り出して歩き出す。

「いえ。そんなことは」

「うん、旨い。僕が褒めてるんだから喜び勇んで受け取るがいいよ。」

でも、ホントにこれは誰の趣味だい？」

棒付きの水飴の封を切り、さつそく口に含んで機嫌のよい江戸川の問いかけに、うん？と首を傾げた。

「だって、君の子ども、こういう駄菓子よりも、洋菓子が好きだろう？ それなのにこういう穴場を知っているわけだ。でも、君だってこういうお菓子が特別好きってわけでもないだろう？」

「……………確かに」

織田作は首に巻き付けた自分の髪が窮屈に感じた。

「どうして、俺は、この店を知っているんでしょか……」

自分の事なのに、他者に聞くとというのは実に可笑しなことだろう。しかし、相手が江戸川ならば、自分自身よりも本質を見て取ってくれる。

江戸川はにっと笑った。

「簡単なことさ。君は知っているから、知っているんだ」

なるほど、と織田作は頷いた。

そのまま行くと、光が燦々と降る道に出る。

商店街の連なっている屋根が途切れたのだ。

目をくらませて、首を振っている時だった。

「おとうさんっ」

声がした方を見ると、夏梅が走ってくる場所だった。

隣の江戸川とともに立ち止まった。

行き交う人の流れに逆らうように走ってきた夏梅は既に汗だくで、どのくらい走り続けていたのかわからないくらいだった。そして、ひどく焦燥した表情だった。

「夏梅？… どうしたんだ」

様子に気づいて、思わず肩が揺れた。

その肩に、江戸川の手がのる、「お菓子、落とさないように！ 気を付けてくれよ」

意識を向けると、紙袋を落としかけていたことに気付いて持ち直す。

「うーん、ちょっと状況が悪いみたいだね」

眼を細く開けた江戸川が険しい顔をしていた。

夏梅はひとにぶつかりながら、やって来る。

「っ お父さん、乱歩さんー」

目の前にやって来た夏梅は膝に手をつけて肩で息をしていた。

額から滴る汗を拭いてやろうとしたが、手が埋まっている。

代わりに江戸川が動いて、織田作のポケットにある手巾を取って――

―そこに入れているとは一言も言った覚えがないのだが――夏梅の

顔を拭いてやっていった。甲斐甲斐しい。意外だった。

「あ……ありがとうございます。えっと、大変なんです」

「ポートマフィアの襲撃かい？」

「も、なんですけど。怪我で運ばれて来てて。敦お兄さんも、女の子

も、それから、ポートマフィアの女の人も」

「なるほど。三つ巴かな。どうやら奴さんも動き出したようだ」

「う、はい。お父さんも、乱歩さんも、急いで行ってほしくて」

夏梅は、舌を噛みかけて焦ったような顔をした。

どうやら切迫した事態のようだった。

菓子を抱えてそんな報告を聞くのは、なんだか座りが悪いが。

「襲撃か。分かった、急いで探偵社に戻る」

「いや、違うね。僕たちのこれからの行き先は探偵社の事務所じゃない

「い」

「……はい。これから講堂へお引越しです」

だから、その、と夏梅が江戸川に視線をちらちらと送る。

江戸川は心得たように頷く。

「りようかい。さ、行くよ、織田作」

「ありがとうございます。大叔父……社長も、そちらへ先にいます。――

―お父さんは、このまま乱歩さんと一緒に行ってね」

「夏梅、お前は？」

まるで、子は一緒に行かないような口ぶりだった。

「僕は、えっと、ちょっと探偵社に戻るから」

「それなら俺たちも……」

「いいからいいから、僕たちは急ごう。あつちでの準備もあることだしね。——ま、無理しないようにね」

「……はい」

夏梅は何故か何かを見咎められた子供のような顔をしていた。

「それじゃ、寄り道しちやだめだからね、おとうさん！」

「ああ。お前も気をつけて戻れ」

「……うん」

夏梅はにこりとわらう。

「夏梅くん」

「——はい？」

走って戻ろうとする夏梅へ、江戸川が声をかける。

「一つ、いいことを教えよう。鼠が肝要だよ」

「え、ネズミ？……えつと……」

「覚えておくといい」

心当たりがないらしい夏梅は、それでも戸惑いつつ頷いた。

「それじゃあ」

なんだか少し引つかかって、夏梅を引き留めようと珈琲の入ったビール袋を肘にかけて、手を伸ばしたが、それを横から江戸川に掴まれた。夏梅の背は、路地を曲がって見えなくなった。

「さあ、僕たちも行こう」

「……はい」

夏梅が消えた方をじつと眺めていた織田作だが、腕を掴まれているので、歩き出した江戸川に付いて行かざるを得なくなった。

それから与謝野の異能によって全快したらしい国木田、宮沢、中島なども講堂へ続々と移って来た。しかし、探偵社の異能力者のなかの面々に、夏梅の姿はなかった。

きらいすぎじゃない

車掌の控室に、煤に汚れたトランクを一つ足元に置いた夏梅は、窓から身を乗り出すようにして、借りた双眼鏡をかざし、遠方を確認する。

春野と谷崎妹は車で逃げているらしかった。それは青い車で。今は、ブドウの木によって空中に押し上げられていた。

金髪碧眼の青年と長髪の黒髪の男。

そこへ助けに来たのは、谷崎兄と国木田だ。

一分だけ蒸気機関車が止まるようにしている、という。運転室へ引っ込んでしまった運転手がそう教えてくれた。

そこへ江戸川からの連絡が来て、びっくりするやら、驚くやら。……いや、どちらも同じか。

双眼鏡から見ると、首のなかから木が生えている敵が見えた。ちよつとぞつとしない光景で、夏梅がその場にいらないことに安心するくらいだ。隣にいる黒髪の長髪の男も、首の角度が怖い。

そんな異色で不気味な相手と対峙しているが、どんな敵であろうと、あの二人ならば大丈夫だろう。

それより、木々の間からやってくる二人へ手を振る。

雑木林の、滑りやすい斜面から降りてくる、二人に外傷はないようだった。

「春野さーん！ ナオミさーん！」

二人は夏梅に気付いて声をあげる。

一瞬で喜色に変わる表情に、ここにいるのが自分で申し訳なく思った。

ただ、ちよつど居合わせて、連絡が来たのでこうして出迎えただけなのだから贅沢も言えないのだが。

「夏梅さん！ 来てくれたんですね」

「まあ、夏梅くん！ 良かった、わ…きやあつ……」

「春野さん、どうなさったの…!?!」

歩きにくそうな格好の春野が突然立ち止まり、地面に座り込む。

そして、足を止めて振り返った谷崎妹もまた、動きを止めた。

「なに、どうしたの——?」

そのとき、谷崎妹の体が宙に浮いた。

いや、先ほど双眼鏡で見た異能力を鑑みれば、植物によって捕らえられているとみるべきだ。

扉を隔てた先から、石炭車で石炭を炉に入れて働く気のいい従事者が夏梅に呼びかけてくる。

「坊主、そろそろ出るぞ、しつかり座つとけよー」

車掌の控室に荷物ごと置かせてもらっている夏梅を、気にかけてくれるのは、きっと駅員がお願いしてくれたからだけではないだろう。

親切な人柄で、訳ありそうな子どもを気にしてくれる善い人だ。

しかし、今は時間がない。

「——うん！ ありがとう」

夏梅は返事だけよくして、車掌の控室から身を乗り出していたところから、窓枠に足をかけた。息を整える。渴きかけていた額の汗。そこに張り付く髪を鬱陶しく払うと、すぐに飛び降りた。

「夏梅さん、いけませんわ！」

谷崎妹は夏梅が、戦闘向きの異能力でないことを知っているのだから。う。

重い靴でなんとか斜面を駆け上がると、地面から木の根が絡みついていた。

そして、夏梅の足も枝に取られて、宙づりになる。

「夏梅くん！」

春野の悲鳴を背に、夏梅は腹筋でもって宙づり状態から、靴裏まで手が届くように上体を起こす。そして、靴裏に仕込んである小型ナイフを枝に突き立てる。後は、ナイフの柄が折れないように、半円を描くように突き立てた部分を中心として重心を移動させる。すると、枝は切断される。しかし、やはり小型ナイフでは刃先がゆがんでしまっ

ていた。地面に着地して、すぐにとらわれている二人へ駆け寄ろうとしたが、すぐに二人を捕らえていた杖が退いた。

不思議に思っている暇はない。

おそらく上にいる谷崎兄と国木田がなんとかしたのだろう。

「はやく、列車に乗って。ナオミさんは先に行つてて！ 春野さんは僕が連れていくから」

「わかりましたわ」

ゆがんでしまった使い捨ての小型ナイフを地面に捨てて、座り込んでいる春野へ手を貸して立たせる。すると、既に出発の汽笛を鳴らす電車。「急いで」と声を掛けつつ走った。先に最後尾へと飛び乗った谷崎妹に続いて、夏梅は、手すりを掴む、

「春野さん、前に跳んで」

「っ はい！」

夏梅は、腕の力で、宙に跳んだ春野の体を一気にデツキへ引き上げた。

「あり、がとうございます。夏梅くん」

「どう、いたしまして」

夏梅は息の乱れをぐまかしつつ、にこりと疲労の濃い顔に笑顔を浮かべた。

「夏梅さん、とてもお疲れのようですね。私たちのために」

「本当だわ、早く中で休んでください。社長も心配されるわ」

「ああ、これは違うんです」

「？ 違うんですの？」

目を丸くする谷崎妹。その顔を見て、先ほどまで緊張は随分と強張っていたものだったのだなと気づく。それに気づいたら、説明しようとした諸々の事情についての口を閉じた。束の間ではあるが、今だけは余計な心配をかけまいと、いろいろ飲み込んで、首を振り、ほほ笑んだ。

「……はい。えっと、ここも危ないので、移動しましょう」

「そうね。いつまた、あの木の根が出てくるか気が気じゃないもの」

「そつちはきつと、もう大丈夫だとは思ってます、国木田さんと潤お兄

さんがきつと何とかしてくれてるはずですから」

「ああ、さすが兄様ですわ！」

はーとを周りに散らす元気も戻ってきたらしい谷崎妹につられて、春野も顔色が良くなる。夏梅は提案をする。

「あの――、車掌の控室があるんです。そちらに行かせてもらおう……ましよう。話はしている……いますので」

「本当に？ 良かった、ちよつとゆっくりと深呼吸したいところだったんです」

夏梅は表情が戻ってきた二人を見て、目を細めた。

「じゃあ、僕が案内しますから、行こう……えつと行きましようか。次の駅で、探偵社の誰かが待っているそうなので、心配ないです」

「楽に話してくださいな、夏梅さん。とても頼もしいですわ。さつきは、助けに来てくれてありがとうございます」

「……………うーん。何もできなかったけどね」

眉を下げて力なく笑いながら、夏梅は小声で返す。

「そんなことありませんわ。ほつとしましたもの。気を張っていたのが緩んでしまいましたわ」

「そうですよ。とても安心したんです、私たち。やっぱり男の子がいてくれると心強く感じるものなのね」

ふたりが口々に言うものだから、少し慌てた。

「でも、また誰かが追ってくるかもしれないから、あんまり気を緩めないでね」

「はい」

「わかりましたわ」

それぞれ頷いたが、いまいち顔に緊張が見られないので、ううと前を向きなおした。

すると、前からやってくる子どもがいた。

夏梅はその子を避けて、身をかわした。

夏梅の動きを見て、谷崎妹と春野も通路の端に寄った。

「じゃ、こつちです」

先導している夏梅や、それに続くふたりは、通路の真ん中で立ち止

まり、振り返る子どもにも気付くことはなく、次の車両に移っていった、「……あーあ」

車掌の控室の扉を開けて入る。横になれるような、繋がった座席に、トイレと流しがついている四角い小部屋だ。壁の隅には、夏梅の荷物であるトランクが置かれている。

ふたりに席に座るように促した。慣れない逃走にすっかり参ってしまったようで、お互い倒れ込むように肩をくっつけた。

「お疲れさまです。次の駅までゆつくりできますよ。ふたりとも無事でよかったです」

ほんとうに、と二人は顔を見合わせて微苦笑し、ちよつと目を閉じた。

その間、夏梅は周囲を警戒した。

窓の外でも、敵が追ってくる様子はない。

寝息が聞こえて正面を向くと、ふたりは眠ってしまった。

次の駅まではすぐだが。肩をすくめた。休ませてあげよう。

ふたりは普段こういったことは慣れていないはずなのだ。

追手が来ない、ということとは上手く上の二人がやってくれたのだろう。

それはあの木を操る異能力者たちだけに限った話だが。

なんとなく、ここで終わるといふ感じはしなくて、自然表情が険しくなる。

今は、気を遣う人たちは寝入ってしまったているので、表情を取り繕う必要もなかった。考えながら、しかし周囲に気を配りながら、流しで手を洗った。先ほど使った小型ナイフで、手のひらを少し切ってしまった。

(もつと巧くならないとなあ……)

指をはじいて水気を飛ばしながら、トランクの上に腰かけた。その煤に汚れた表面をそつと濡れていない手の甲で撫でた。

これを守るのに、苦労した。もし、前回の寝台列車での異能力によ

る体の修復がなければもつと苦戦していただろう。

その際は、大叔父の異能力の下での最初の発動だったせいか、過不足のない身体の変貌だった。

今まででは、急な成長のために、筋肉量が生命活動ギリギリしか備わっていないかったり、脂肪が薄かったりと、日常生活においても不調をきたす体になったものだが。今回はしっかりと健全な肉体での回復が見込めていた。瀬戸でそれが判明したものだから、新しい武術の三つや四つ仕込まれたが。

(まあ——なんでも、やつとくものなんだなあ)

手のひらは、肉刺ができていたが、ここ最近は事務仕事ばかりしていたため、それも薄くなっていた。父の検診中に、夏梅は道場で頭がおかしくなるくらい、同じ組手や刃物の使い方を仕込まれていた。寝る際に目を閉じれば、刃の白い軌跡が幾重にも瞼の裏に浮かび上がるほどだった。

蒸気機関車の煙突から音が鳴る。

「おーい坊主、そろそろ着くぞー」

石炭車から大きな声がかかる。

すると、目の前の二人がびくりと目を覚まして、周りを見回す。

夏梅は苦笑して、大丈夫と身振りジェスチャーで伝える。

「はい。ありがとうございます、おじさん！ お仕事頑張つてね」

「おうよー！ 坊主ありがとよっ」

「こちらこそー」

石炭車では、物音が聞こえにくいため、大声で話すらしく、夏梅はそれに乗った時に知っていたから大丈夫だったけれども、何も知らない二人にとっては驚きだっただろう。

「ここで降りますから、準備してくださいね」

「ええ。——もう、私たちだったら、安心しちやっつてつい寝てしまったのね」

「まだまだ気は抜けませんわ。といっても、私も眠ってしまったのですけれど」

自分の頭を小突く春野と小さく笑う谷崎妹に、申し訳なく眉を下げ

た。

「駅では、太宰さんと敦お兄さんが待つているそうですから、合流したら、すぐにまた潤お兄さんとも社長とも会えます。そのときにまたゆっくりしてくださいね」

トランクは車掌室に置かせてもらったまま、外へ出ようと扉に手をかけたところで、止まる。腕をあげて、二人をかばう。

「だれ？」

扉は動かない。

ふたりへ後ろへ下がるように、腕を後ろに下げた。夏梅も一歩下がる。

「そこにいるのは判ってるんだよ。誰？」

再度誰何すると、ゆつくりと扉が開いた。そこには人形を腕に抱いた子どもがいた。夏梅よりも年下くらいだろうか。

「こんにちは」

「こんにちは。きみ、さつきの子……？ どうしてここに？」

怪訝そうに夏梅は聞く。

「珍しいところに行くんだなと思って気になって着いてきたんだ」

後ろで、谷崎妹が息を詰める音が聞こえた。

なんだか壊れた人形のような子だなと感じた。

ちよつとでも間違つて触れたら、いや——間違つてなくても何かしたとたんに、破裂する水風船のような危うい雰囲気を感じた。

「へえ。……そう、なんだ」

にこりと夏梅は微笑んだ。首をかしげて、続ける。

腕はふたりをかばうように上げたままだ。

「あのね。ぼくたち、ちよつと外に出たいんだけど、そこ避けてもらってもいい？」

「うーん……うん、いいよ」

子どもは横にずれてくれた。

「ありがとう」

夏梅はそういって、横を通り抜けようとした。すると、子どもがちよつと体をずらしてきて、夏梅は避けたが、後ろにいた春野には当

たってしまったっていた。

「あつごめなんさい。大丈夫？」

子どもは口元を弓なりにしていった、「だいじょうぶですよ」
「なんだか、善くない気がする。」

「春野さん、ナオミさん、先に行つててください」

「——ええ、行きますわよ、春野さん」

「え？ あ、はい。本当にごめんなさいね」

谷崎妹に連れられて春野が駅のホームへ降りるの見送つて、夏梅が子どもを振り返る。

「ごめんね。あと、この先は乗客は入っちゃいけないところだから、戻つた方がいいよ」

「ここで降りるんだね」

「え……？ うん。まあ、そうだけど」

光を吸い込んだような目が夏梅を見た。

それを見返しながら、首を傾げた。

「僕もここを降りるんだ」

へえ、そうなんだ、と夏梅は返したが、なんだか舌が苦く絡まるような嫌な心地がした。

列車を降りて、後ろから着いてくるのを背中で感じ取りながら、夏梅は前を向いた。

「敦お兄さん！ ……と、太宰さんは？」

「太宰さんはちよつとトイレに」

「……へえ」

仕方がないとはいえ、半眼になる。

「あれ、後ろの子は誰？」

「え？ ——ああ、えつと、この子は」

その瞬間、肌を濡れた魚で撫でられたような不愉快な感覚がした。

——同時に、振り上げられた、獣化した白い腕と、春野の間に入った。半ば、春野の背を付き飛ばすようにして割り込む。掌底に傾きを加えて受け流した。

「下がってて」

春野と谷崎妹へ向けて言葉をかけつつ、崩れた体勢の中島の胴体が、立て直す前に地面へと完全に倒れ込ませようとした。瞬きの刹那でその方法を瞼の裏に思い描く。その通りに自分の体を動かしていく。地面に着くのが一点だけにするため、片足を崩し、両腕を頭上にひとまとめにして、胴体を同時に地面に着くようにさせた。

かはつと、夏梅の体の下——中島の口から肺の中の息が吐きだされる音がした。

「敦お兄さん、あぶないよっ……ねえ、どうしたの？ 敦お兄さん？」

暴れようとする中島の体の関節を押さえるようにして、膝と肘を置いて行く。目を見れば、焦点が合っていないことには簡単に気づけた。

「敦さん！ いったいどうなされたの？」

「あなたも危な……ねえ、ナオミさん！ さっきの子どもがどこにも」「え、そんな、さっきまでそこに。もしかして、あの子、敦さんの様子がおかしいのに、何か関係が？」

ありそう、と気持ちの中で同意したせいだろうか。腕が緩んで、関節を押さえるひじの角度が甘くなった。それもほんのちよつとだけだったのに、瞬間夏梅は、地面に背中がくっついていて、首を絞められていた。驚異の怪力だった。

「な、あ……」

悲鳴をあげて、ふたりが近寄って来ようとするのを、首を振って止めた。

ここには、中島のほかにもうひとりいるはずだ。

夏梅は意を決して、自分の首と中島の手との間に、指を入れる。首の骨を、唾液を飲み下す要領で動かし、そこに指を入れる。知識と知っていたわけではない。ただ、それしか考えつかなかったからそうしたが、想像以上の痛みに、目がかすんだ。

ほんとうは目線でふたりに、太宰を探しだして、逃げるように伝えようとしたが、指を入れる瞬間の苦痛に、力が抜けた。

「やめるんだ、敦くん！ よく見……」

声が聞こえた。薄く目を開けると、太宰の顔があった。
なんだ、ちゃんというではないか。

指を差し込んで気道を確保するように動かす。少し楽になったと思つて、顔の筋肉がほんの少し緩んだ。

「あ……夏梅——！」

声が聞こえた。呼び捨てなんて、その人にされたことはなかったのに。その人は、戻ってきた視野の端から、どたばたと本当に取り乱したように駆けてきて、夏梅の首を押さえる腕と中島の肩に手をかけた。

「よく、見るんだ。敦くん」

中島が我に返ったように腕を解いた。夏梅は、指を入れておいたおかげで、せき込みもせずに、普通に地面に足をついた。

「なんで、こんな、ただ、助けようとして……ああ、僕はっ」

足元で、膝をつく中島へ、夏梅はかがんだ。

「大丈夫だよ、敦お兄さん」

「そんなつもりじゃ……ごめん、ごめん、夏梅くん……僕は、いちゃいけなかったんだ」

太宰は離れて、どこからか見つけた人形を手にし、異能力を発動させていた。

おそらくそれを媒介にして、中島に幻覚か何かを見せていたか、操っていたかしたのだろう。

「……………」

中島が、夏梅の膝に頭をつけて蹲った。

「僕は、誰かを傷つけてしまう、僕は、僕は……いちゃいけない存在なんだ」

「そんなことないよ。お兄さんは、助けようと思つてたんだよね。ちゃんとわかつてるよ」

操られたにせよ、幻覚を見せられたにせよ、中島が人を傷つけるためにその力を振るうことはないことを知っている。だから、夏梅は、首を絞められている最中でも、即座に対処ができていた。きつと中島が操られていると思つたから。

「ちゃんと、しってるよ」

探偵社には、そういう人が集まっていると夏梅は思うから。

「大丈夫だよ」

それでもなかなか立たない中島だった。まるで、自分の中の何かの声夏梅よりもずつと言葉をかけ続けているように。その言葉しか耳に入ってこないかのように。

「お兄さん？」

年上の少年の、その真っ白な頭を撫でながら、夏梅はにつこりと笑った。

丸い頭を抱きしめると、なんだか木綿の布に抱かれているような心地になった。

震えが、止まった。

「大丈夫だよ。生きている限り、取り返しなんてたくさんつくんだよ。それに僕は、こうしてへっちゃらだしね」

「夏梅くん……僕は」

痛いと呼んでいるような目をして中島は顔をあげた。

「っ 君の首がっ」

「首？ あーあとついてるかな。まあ、少ししたらなくなるんじゃない？」

明日になれば晴れるよと天気の話でもするように口にした。

女の子でもないし、男児である夏梅が気にすることでもない。

肩をすくめていう。

「ほら立って」

「あ、ありがとう。あの——春野さん、ごめんなさい」

「いいえ。私は夏梅くんがかばってくれたので無事でしたし」

夏梅がかばって、のところでうつつとまた痛そうな目を夏梅に向けてくる中島を見て、春野はふんわりと微笑む。

「その夏梅くんが、大丈夫というんです。大丈夫ですよ」

中島が顔をあげて、その目の端に涙を浮かべた。口がへの字に曲がる。

夏梅はほっこりとした気分になり、中島から太宰へ視線をスライド

させて、腹の底が冷たく凍った。

口元で微笑んだ、「太宰さん」

「何か、」

ばん、と頬を平手で張った。

「そっち、トイレじゃなかったでしょ。——なにやってたの？」

顔を張られた状態の太宰を観もせず、夏梅は自分の赤くなった手のひらを握った。

「単独行動は、善くないと思うよ、こんな時だしね。何のための^{パティ}双人がわかんないよ。中島のお兄さんをひとりにして、さっきの子どもかな？——が異能力者で、見抜けなかった僕も悪いけど、ここに僕がいたのも偶然だった。それで、僕がいなかったら、春野さんかナオミさんが怪我をしたかもしれない」

中島が開きかけた口を固めて、息をのむ。そして俯き、自分の上で見る。

春野と谷崎妹は、おろおろしていた。

「僕はそう簡単に死なないからいいよ。でも、太宰さんのさっきの行動、判断、思考……」

そんなことを意に介せず夏梅は、赤みが引かない右手を宙に振った。

「僕はそういうの、嫌いだな」

滅多に、『嫌い』という単語を使わない夏梅が、はつきりと口にした。

自分への驚きもない。ただ、ただ冷たく静かな感情が夏梅を形作るものとなっていた。

言える言えない

ちよつと居づらい空気が流れる。

そうしたのは、夏梅だけでも。

「……耳の痛い話だ。先ほどは私が読み間違えた。済まない、みんな」
「そんな、太宰さん」

その人の声が、周りの人の声が聞こえたが、だんまりを決め込む夏梅は、くるりと皆に背を向けた。中島によつて地面を転がされた際に、汚れた背中や、肩を手で払う。ちりちりと手の平が痛んだ。切り口にばい菌が入ったのかもしれない。そんなのも、どうでもいい。

ぎゅつと手のひらに爪を立てて握りしめた。

「な、夏梅くん……」

深呼吸して、表情を作る。

振り返るには、気持ちの整理が必要だった。振り返れば、そこにはたつた今、夏梅が平手で打った太宰も視界に入ってしまった。乱暴なところを見せてしまったふたりの事務員もいる。汚れを払った手をはたく動作をゆつくりとして、最後に気持ちを落ち着かせて、振り向いた。

心配そうな、春野と谷崎妹の顔が夏梅の方へ向けられている。足が震えそうになる。いつもは、「いい子」と頭を撫でてくれるふたりに、今どんな顔をすればいいのかわからなかった。

それでも、声をかけてくれた春野を無視するなんてできない。

何の心の準備も整わないまま、夏梅はわずかな震えが止まらない両手を、背中に回して、握り込む。

ここには、太宰だっている。
顎をあげ、表情を見えにくくさせた。誰にも夏梅の内面なんてのぞかせない。

ああ、もしかしたら、今の夏梅はとても冷淡に見えるのかも。でも、そうであってもいい。いいや、そうであれ。

「ここにいても、埒があきません。春野さんとナオミさんを安全な場所へ案内してください」

「え、夏梅くんは？」

「僕は、他に遣ることがあるので………ちよつと、やつぱり、頭も冷やしたいし、ね」

目を伏せて、言葉の後半は自分用に、小声で呟く。ため息をつく。ため息をつけるような立場じゃないかもしれないけれども、徒労感が酷かった。誰にも理解されない。でも、誰に頼ることもない。

目頭が熱くなりそうになるのを、首を振ってごまかす。誰に、頼ることもない。

「やることつて」

「……言えないんです。ごめんなさい」

太宰には偉そうなことを言ったが、この危機に、行動の内容をいえない夏梅のほうこそ、悪いだろう。よく他人ひとにいえたものだなあ、と自分をなじる。

顔を洗いたい。汗でべたつく額や首が不快だった。

握りしめた指はとても冷たく感じた。

息がしづらく感じた。ここにいたくない。

俯いて、髪で顔が隠れるようにして、乱れる息をごまかす。

それじゃ、といって駅を後にしようと歩き出す。

「——夏梅さん、お気をつけて」

「私からも。夏梅くん。ここまで助けに来てくださってとても嬉しかったです」

「あ……」

背中から言葉を投げかけられ、思わず取り繕わない顔で、二人を見た。

優しい顔で、微笑んでいた。

「行ってくださいいな。私たちはもう大丈夫ですから。太宰さんも、敦さんもいますもの。それと遠くからでも兄様が私を守ってくれますわ」

その言葉に夏梅はばつと顔をあげ——絶望した。

……なんで受け入れるんだ。

夏梅はその笑顔から逃げ出したかった。

走って走って走ったら、自分が無くなってくれる気がした。だから、走って走ったら——呼び止める声があった。

「なあ、おいっ 夏梅か？」

振り返ってはいけないはずだった。でも、そんなことを気に掛ける余裕はなくて、振り返ってしまった。見知った顔だった。同じ高校生として過ごした、一番の仲良しの安井だった。どうしてここに、と思ったが、そういえば、ここは横浜だった。偶然、すれ違った、今ここで、この場で——？

偶然、というものに過敏になっている夏梅は、ごくりと喉を鳴らし、こわばった顔で安井の顔を見上げた。

すると、安井の方は夏梅の顔がよく見えるようになったのだろう。顔に、落胆の色を見せつつも、どこか好奇心をそそられた様な、決して暗いばかりではない表情を浮かべる。

「じゃ、ないか。でも、すげえ似てんな。……なあ、もしかして織田夏梅の兄弟じゃないか？」

「う——うん」

思いがけない再会で、思いもかけない言葉を投げかけられる。

前の姿の夏梅と、今の姿の夏梅と兄弟、という？

「えっと」

いや、夏梅はひとりだけだな、と思ったが、さすがに口にしはしない。

代わりに何と言ったものかと、視線をさまよわせていると、あることを思い出す。それは、例の寝台列車の騒動の際に、神西が話したことだ。夏梅の学校で、不登校の生徒が出ていたこと。もうその高校へは通えなくなったが、きつと安井はその様子を探るときに必要なって来る、はず。

「僕は……夏梅……お、お兄さん？の……えつと、お、弟だよ？」

「やっぱりか！……それにしてもそっくりだな。名前なんて言うんだ？ あ、俺は安井浩二こうじ」

浩二つていうんだ、と思った。知らなかった。

ちよつと肩の力が抜けて、夏梅は学校の時の自分が顔を出した。

「僕は、中村……えつと、カズ……カズ、キつていいいます」

「中村？ 苗字違うんだな？」

咄嗟に母の名前である『和枝』カズエをもじつて名乗った。そこには突っ込まれなかったが、そういえば、苗字が違うことをとんと忘れてしまっていた。探偵社ではいつも夏梅と呼ばれるし、瀬戸では中村家で過ごしていたから、言われても中村の坊ちゃんといわれるぐらいで、織田という姓である自覚が無くなっていた。

「あ、えつと、それは」

「そういえば、夏梅から弟の話なんて聞いたことがないような……悪い。言いにくければ無理に言わなくていいから」

安井が坊主頭を掻きながら、続ける。

「無神経なこと聞いたな、会ったばつかなのにさ。悪かった。よく言われるんだ、無神経だつて——その時は気い使い過ぎだつて思ってたけど、その通りだったかも」

それは二谷にだろうか。二谷な気がする。

今の夏梅には聞けない話題だ。

「ああ……えつと……」

無理に話さなくともいいと安井は思ったが。しかし、他人様に言えない話なんて、余計に気になってしまうのが世の常だろう。そうでない人もいるのはわかっているが、どこから変な噂が広まるかわかったものではない。

何も無いのに気にされると変なことになってしまうかも。

——たとえば、母のように。

「僕は、えー…そうっ おとうさんとおかあさんが離婚しちゃってて」
——してないけど。

頭を必死に回しながら、焦りに口がぺらぺらと動く。

「小さい頃に別れちゃったんだけど、えっ」と

……本当にこれは自分の口なのだろうか。

「僕の…あえっとお兄さんのほうは…えー、おとうさんについて行って、僕はおかあさんに引き取られたんだ！」

母は既に他界している。……ここは母方の家にしておけばまだよかつただろうか。祖父に引き取られたことにして…いや、しかし。初対面の人に、母が亡くなっている話などするだろうか。

ここはこれで一応正解だ、たぶん、きつと。

万が一、再び、弟でもなんでも無い、高校時代を共に過ごした夏梅として安井に会うことがあったとして。母は亡くなっているということが知れても、初めて会った人にすべての事情を話しづらかったんだよ、と言いつつ訳をすればいい。

頭がぐるぐると言い訳作りのために回る。

その反面、この思考は余計な事なのではとも思う。本当に心配すべきところを見落としているような、いないような。…だいじょうぶだろうか。

「お、おお、なんかやけに力入ってんな」

「えっ」

安井の言葉に、冷や水をかけられたような気分になる。

せっかく頑張って説明したのに。

「あ、いや、突っ込んだ話聞いて悪い。カズキとは今日会ったばかりの知らないやつなのに——いや、カズキ。お前ちよつと危機感なさすぎないか？ 知らないやつについて行くなよ？ お菓子貰ったりするなよ？」

「しないよー」

安井は目を丸くして、嘖き出した。

「なんかそういうところ、夏梅そっくりなんだな」

うっと詰まった夏梅は、あははとごまかし笑いする。

カズキといわれて頭の中で一瞬、疑問符が量産されたが、自分の偽名かと気づいた。

「でも、兄貴より滑舌がいいな」

それはきつと今回の異能力による身体への変化が、以前よりも最適化されたからだろう。

ぽんと頭に手を乗せられた。

その瞬間、共に過ごした数か月の高校生活が想起された。

懐かしい、と思うのは、手が届かなくなってからだ。

物が言えない夏梅の前に、かつての学友は、目を細めて零した。

「ああ、夏梅にそっくりな髪だな」

ぐっと唇をかみしめた。

何かが口から洩れそうになった。

「なあ、あいつ、元気にしてる？ 突然、転校だつていうからさ。連絡もなしに、なんか事故とか事件に巻き込まれてないか心配だよ」

「……うん」

友人は長身で、夏梅は小さくなった。夏梅が変化して、目線が変わって。

でも。友人が人と話すとき、少しうつむきがちなところはそのままだった。

見たことがなかったポロシャツの私服姿で。

どうしてだろう。

「また、兄貴に会うことあったら、ひとつ言っといてくれよ。なんかごたついてるんなら、それが終わってからでいいから、連絡寄越せって。学校違っただけで友達じゃなくなったーなんて抜かしたら、ふざけんなってな」

「……うん」

心配をかけていたんだと。

こんなにも、心配してくれる人がいたのだと。

一方的に、ああ、関係は終わったのだと夏梅が思ったのさえ、見透かされていて、喉の奥が苦しくなった。

しめつぽくなる声をなんとか普通に聞こえるように努力して、夏梅は顔をあげた。

「ぜったい伝えるから」

おうっと安井は明朗に笑った。

連絡先を交換しようとするのを、夏梅に聞くから(変な話だ)といって、その場を去った。安井は手を振ってくれていた。わざわざ足を止めてまで。

夏梅も大きく手を振り返した。

また会える。違った関係でも築いていけるのだと、教えられたようだ。

今度はとぼとぼと下を向いて歩く。

自分がどこを歩いているのか、どこにいるのか、確かめるように、足元を見た。

夏梅の足は、小さい。でも、本当よりは大きい。

自信なさそうに一歩一歩踏み出す。当てなんてなくて、こっちだよと教えてくれる人もいなかったけれど。

そう。そうだった。

本当は、嘘だった。建前だったのだ。

学校の不登校になっている生徒の実態について知るために安井を相手にすると頭で考えたこと。それは一番、夏梅がわかっている。――横浜へ来て、初めて学校に通った。まったく解らない授業、みんなで座ってノートをとること、静かにすること、その時の流れで、友達と話をしても怒られない時がまれにあること。勉強はわからなかった。難しいというより、未知の内容だった。でも、何もかもが新鮮だった。そんななかで、安井は、そこでできた夏梅の初めての友だちだった。

「ひとりじゃないよ」

自分に向けて言う。自分で考えて行動をするようになって、はじめて自分が孤独だということ強く感じるようになった。疎外感、不

安、焦燥、苛立ち……。太宰に吐き捨てた言葉も、平手も、夏梅の心にゆとりがあれば、そこまでしなかったかもしれない。

事務員の二人に対しても、もっと気遣ってあげられたかもしれない。

ひとり蹲る中島に、どこか自分が傍にいられると感じたのではないか。

ぎりぎりの気持ちになるように追い詰められ、走らされ、選択を迫られ、窮地に置かれて。たった、一度きり。バスで同乗した、花束を持っていた黒髪の男の人に、どうしてこれほど執拗に狙われるのかわからないまま、夏梅は数時間を一人で逃げた。母の形見であるトランクを抱えて。その後だったから、余裕がなかったから、誰にも相談できなかったから、ずっとずっと怖かった。

平穏だった時間を共に過ごした人と再会して、思い出した。
一人ではなかった。

たとえ、父にも言えないことがあったとしても。
自分には、誰かが傍にいてくれた時間があった。

「ありがとう、安井」

でも、この呼び方は、これからの関係にはそぐわない。

「浩二お兄さん、かな？」

その響きが耳慣れなくて思わず笑うと、轟音が聞こえた。

自動車の事故だろうか。びくついた肩を自分で宥めて、つま先をそちらへ向ける。

なんだか、嫌な予感がして、夏梅は走った。

さつきまでのがむしゃらなものとは違う。一步踏み出した時点でわかった。

夏梅はここにいる。

人通りの少ないところで、夏梅は、車へ突っ込んだ形の状況を目の当たりにする。煙が出ている。赤い血がフロントガラスに散っている。

慌てて駆け寄った。さきほどは夏梅の持ち物だと知っている安井のため、出せなかったスマホを片手に、救急車を呼びながら、ドアに

近づいた。

「大丈夫ですかっ」

近づいて、言おうとした言葉が途切れ、スマホが手から滑り落ちる。

「太宰さん……？　なんで」

『夏梅く、んか。どうしてここに』

窓ガラスが閉まっているために、太宰が口を動かしているが何を言ったのか聞き取れない。それは向こうも同じことだろう。

夏梅は、ドアを開こうとした。

開かない。鍵がかかっている。当然だ。

「太宰さん、鍵を開けて」

のろのろと動いて、鍵を開けてもらった。ドアを開くと、太宰を引っ張り出す。

その奥の運転席で、呻く男の人を見つけた。そちらはもつとひどい有り様だ。

「太宰さん、そこにあるスマホで救急車呼んでて」

夏梅は、運転席の人のシートベルトを解いて、腕の下に体を滑り込ませて、片腕を担ぐ。できるだけ、振動させないように慎重に移動する。

落ちた眼鏡を拾い上げて、車の外へ連れ出した。

夏梅は自分の上着を脱いで、地面に敷き、その上に男の人を寝かせた。

「呼んだよ。ありがとう、助かった」

「……ちようど通りがかっただけなので。でも、この人は誰ですか？」
太宰を前にして、いくら気持ち切り替わったとしても、さきほどの夏梅の行動が消えるわけではない。ひんやりと頭の奥が冴えてきて、硬い敬語になる。

「……昔馴染みかな」

「ふうん。友達なんですか？」

答えを求めたわけではない。だから太宰が口をつぐんでも、気にしなかった。

……ただ、さっきの平手のことを怒っているのかなあとと思うだけ

で。——嘘だ。やっぱり夏梅は気にしている。でも、謝るのはきつと違う。謝って許してもらえたとして、夏梅が伝えたかったことをなかつたことにするのは嫌だった。だって、本当に、それが嫌なことだったから。

それだつたら、夏梅が罪悪感を抱えたままでもいい。苦しくても、謝って終わりにしたくない。謝つたら、負けたような気がする。前はそれでもよかつたけど、今はダメだと感じた。だから、謝らない。

夏梅は眼鏡を折りたたんで、男の人の胸に置いた。

ちよつと考えて、両手を組ませて、同じように体の上に置いた。

ぐふぷ、と頭上から妙な音がして見上げた。

太宰が口元を押さえていた。

「き、聞いてもいいいかな?」

「——なんですか?」

夏梅が今何によって動いているのか聞かれると思った。

偶然にしても、こうして会ってしまうなんて運が悪い。

言われるだろう質問を覚悟して待っていると、

「それはどういう言う意味でやったのかな?」

要領を得ない問いだった。

「——はい?」

なにがだろう、そんな疑問が顔に出たのか、太宰は、真面目な顔になつて再び口を開く。太宰は、意識を失つた、体の前で手を組んで横にした負傷者を指さして、可笑しなことを言った。

「彼、まだ死んでないよ?」

「知ってますよ?」

何言っているんだ、とその顔を見上げる。

「……」

「……」

奇妙な沈黙が流れる——流れていることに気付いて、はつと夏梅は口を開く。

「え、なに?」

「何がだい?」

間髪入れない訊き返し。

何が何で何を……？

「え、なんだろう……？」

しばらく両者見合つて、相手からの答えを待つ。

しかし、相手の目を覗き込むと、その答えは出てこないだろうということがわかるばかりだった。お互いに混乱した眼差しで見つめあつた末に、それぞれが望んだ答えが得られるとは到底思えない。

悟つて早々に、夏梅は半眼になる。

太宰は真顔でふむと頷く。

「あ、あなたたち……」

ぱつと夏梅は振り向き、太宰は頭の後ろで腕を組んで暢気に見下ろした。

同じ車に乗っていた同乗者に対する配慮とは思えない。

果たして、この人に赤い血は流れているのだろうか。

夏梅のほうがよく甲斐甲斐しく、中腰になって負傷者へと問いかけた。

「あの、だいじょうぶですか？」

「こ、れが、大丈夫に、見えますか？」

「うーん……見えない？」

頭からはぶしやーと血が流れた跡がある。

顔色が悪い。というか、普通に良くない状態だと分かる。

なぜこんなことを聞くのかと怪訝に思いながら答えた。

「いやいや——なぜ疑問形なんです？ 全然大丈夫じゃありませんよ

！ 運転席めがけて法定速度かそれ以上の速さで車が突っ込んできたんですよ？ 右脚はピクリとも動きませんし！」

夏梅としては、例えば全身から血を流してさらに胸から包丁を生やした重傷者が自ら他の人に、『私が無事に見えるか！』と至極決まりきった問いかけをするような状況に面食らっているだけなのだが。

答えは——。

「えと、大丈夫じゃないの、見たらわかりますよ？ 頭から血が出てるし、ほつぺたに青あざできてるし、指の関節は赤くなつててちよつと

肉が見えてるし、脚も曲がつてる方向ちよつとおかしいし……あ、あと、救急車は呼びました、太宰さんが。希望を持って待っててください」

でも、意外と元気そうだなと傍らにひぎをつく。ああそうだ、気が付いたのならば、眼鏡をかけさせてあげよう。

夏梅は親切心をはたらかせて、恭しく眼鏡をかけさせた、「あ、どうも」

「つて。救急車呼んでくださったの、貴方じゃないんですね。というか、そんなに詳細に言わなくていいんですよ！　うう、急に痛みが……あなたたちは！　こんな怪我人放っておいて一体何なんなのです！」

「私は同じ怪我人だしね。まあ、怪我の度合いは異なるけどもね？

日頃の行いのおかげかな？」

「貴方の日頃の行いでそれなら、私は無傷どころか、連日の激務の疲労も回復してなきや可笑しいですね」

嘯く太宰はともかくとして、つまり、負傷者を放っておくのが良くないと当人は言いたいのだろう。——道理である。

相手がいくら元氣そうな怪我人であろうとも。

「あ、ごめんなさい。ぼく、おじさんの傍にいるよ！」

重傷の方の怪我人が顔をひきつらせた。

傷が痛むのだろうか。痛くないはずはないけれど。

だが、口からでたのはうめき声ではなかった。

「お、おじっ」

「あ、安吾がおじさんだって、おじさんんん！」

お兄さんの方が良かったかな、とちよつと反省する。

でも、三歳児からしたら、父と同じくらいの年代の人はみな「おじさん」枠なのだ。見逃してほしい。しかし、江戸川はその範疇ではない。

夏梅は、この微妙に愉快的な負傷者に付き合いながらも、もやもやとした気持ちを抱えたままだった。——途中で、莫迦らしくもなつたけ

れど。

知ってる知らない

「……僕、向こうの車の方見てくるね」

二人から離れて、夏梅は衝突してきた車の様子をうかがうことにした。

自家用車だ、普通の。蜘蛛の巣状にひび割れた助手席の窓からは、向かいの運転席の様子を見るのは苦労したが、はつきりと見て取れる。白い風船のようなものがハンドルから飛び出た状態の運転席は——もぬけの殻だった。思わず首をかしげる。

「血もないし……こっちの人は怪我なかったのかな？」

夏梅は今度は、ひび割れた助手席ではなく、後部座席の窓に移動し、中を覗き込む。

車内は、実に飾り気がない。交通安全のお守りも、箱ティッシュも、座席の座布団も、暇つぶし用の文学雑誌も、家族や故人の写真も——何一つない。誰が乗っていたのかという手掛かりを見つけられず、夏梅は諦めて相手の車から離れる。

辺りに人影はない。

昼間であるにもかかわらず、ちよつと意外なほどの静かさだ。

「見たた人もいないし、運転手もないし。……じゃあ」

夏梅がこの現場に駆けつけるまでに、逃げ出したのかもしれないけれども、そうなるか……。

「……ひき逃げってこと？」

なんだか引つ掛かりを覚える。交差点に差し掛かったところで衝突した車。太宰が乗っていた車が走行中に、別の車が停止せず衝突してきたと思ったけれども……。

夏梅はちらりと重傷を負っている、運転席にいた太宰の知り合いの人に目を向ける。地面に横たわり、いまだに指一本としてピクリとも動かせない。

その近くに立ち、会話している太宰にも。

何か腑に落ちない。

使用感のある年代物の車のわりに乗っている人の人柄が分からない車内、いつの間にかいなくなっている相手の運転手、そして——太宰の乗っていた車のほうの、タイヤの跡の不可解さ。まるで、ここで最も大げがをしている安吾という人物が、自ら交差点の中で車を停止させていたように見えるタイヤ痕。見晴らしの良い交差点で、止まっている車が見えているはずなのに、相手の車はぶつかってきた……。
「変なの……………」

うろろうろと視線をさまよわせた結果、二人のもとへ戻ることにした。

???
???

近づくくと、やり取りする声が大きく聞こえる。

負傷している割に、口はとても元気であるようだった。

「涙が出るほど面白いですか。あなた、ちよつと情緒不安定なのでは？」

「棺に納まった死人スタイルに仕上がった君に言われるとね、ちよつとばかり精神を平静に保ってられないのだよ。ねえ、安吾、私今から花屋にでも行って、君のその胸の上に組んだ両手に持たせる花束でも用意してきてあげるべきかな？」

「馬鹿馬鹿しい問いかけですが、敢えて忠告しましょう。私は死んでもいませんし、死ぬつもりもありませんので、 unnecessary 労力ですね。ご自分で善く悟って行動することをお勧めしますよ」

「定番は白い菊かなあ？ 百合の花も善きそうだよね？」

いつかの夏梅を思い出させる台詞である。

彼岸の時期でもないのに、なんだろう。誰か亡くなったのだろうか。

太宰の近しい誰かが亡くなったのではないことを祈ろう。

「人の話を聞いていますか？ それがああなたの悟った上での結論なのですか？」

喧嘩しているのだろうか、と近寄るのを躊躇する。

すると、そんな夏梅に気付いたのか知らないが、思い出したかのよう
に太宰が振り返った。

「そうだ、これは返そう」

夏梅は差し出されたスマホを受け取った。

瀬戸の有島の海の写真がホーム画面になっている。

これは瀬戸の別荘にある母のアトリエの窓から見える景色を写真
に撮ったものだ。

「……うん。救急車はどのくらいで来るかな」

「あと五分ぐらいで来るのではないかな」

ほんのちよつと時間があるようだった。

緊急連絡はパスコードが掛かかっていてもできるので、太宰は救急車
を呼べたのだ。

夏梅はちよつと考えてから、パスコードを解除して、連絡先から父
の電話番号をタップした。夏梅は、事故に遭った際に、警察よりも会
社にいる夫に電話するという話を、父親が警察官である安井から聞いた
ことがあるのを思い出し、電話した方の奥さんの気持ちがかかった
気がした。

「もしもし……お父さん？」

コールは二回ですぐにつながる。しかし、接続が悪いのか、何かが
地面を引きずるような音が聞こえた。聞きなれた父の声が耳に届い
た瞬間、ほつとした。

『夏梅、無事か。いつまでたっても講堂に姿を見せないから、何かあつ
たのではないかと心配したぞ。今までどこにいたんだ。今は、どこに
いる？』

淡々と、しかし矢継ぎ早に問いかけられて、ちよつと黙ってから夏
梅は答えた。

「うーんと、乱歩さんから連絡が来るまでは、美術館の施設の人のとこ
にいたんだ。で、ちよつと用事を済ませて……今は」

言いかけて、スマホの奥から、金属をはじくような音と知らない人
の喚き声が聞こえて来ていることに気付く。さっきの妙な音も、接続
が悪かったからというわけではないようだ。

『どうした?』

「なんでも。今は太宰さんと、知り合い?の人と一緒にいるよ。……お父さんは何してるの?　なんか、変な音と声がするけど」

何かが地面に落ちる音、うめき声。

『太宰がいるなら大丈夫だろう。俺は今は、そうだな……招いていない客の応対をしている』

「なんだか大変そうだね」

ガン、ガンツと銃声が聞こえて、何かが地面に打ち付けられる音――その拍子にうめき声が聞こえたので、打ち付けられたのは人だろう――の後、父の声が再び耳に届く。

『そうでもない。来ることは乱歩さんが予想していたからな。それに――ちようど今終わったところだ』

夏梅は生唾を飲み込み、父の言葉をちよつと違うニュアンスで繰り返した。

「今、ちようど終わったところなんだ……」

『ああ』

父の声は平坦で、カケラも動揺したところが見られない。

あ、そう、と肩をすくめる。ちよつと期待外れの反応だった。

……どんな反応を期待していたかは自分でもわからないので、別にいいけれども。

「そっか。でも、お仕事中は電話切つててくれていいんだからね?」

『そうしよう』

講堂へやってくる敵がいれば、撃退という役割と担っていた父は、相変わらず息切れ一つしていない。すごいなあと思う。夏梅は、不器用に駆けずり回って、汗と埃と土ばっかりだというのに……。

まあ、ともかく、取り込み中の仕事が終わったのは善いことだ。

「終わってよかったね。おめでとう」

『ああ。ありがとう。ところで、お前はいつこちらへ来られるんだ?』
いつと言われると、用事を済ませてからと応えるしかないのだが。

「うーん……もうちよつとしたら」

『そうか……。あまり遅くならないように。晩飯は何がいい。社で出

前を取るらしい。今、点呼をとっている』

「そうなんだ。何の料理？ なんでもいいの？」

『ああ』

云ったな。何でも善いという言葉を簡単には使つてはいけないとは、老医の神西からの受け売りだ。夏梅は心の中で父にも言う。そして頭の中でじつくりと考えて、最も困難だと思ふような要求をしようと思つた。……が、夕食の要望程度では、父を困らせることができるようなものは現時点では夏梅には思いつかなかつた。

ちよつと難易度が高いなあと、夏梅は自分の欲求を素直に告げることにした。

「じゃあ、カレーがいい。赤い漬物はなしでね」

『福神漬けは無しだな』

父が深々と頷く気配がした。

「辛さは辛口ね」

『ああ。ちなみに俺もそれにする心算だつた』

「……知つてるよ？」

『そうなのか？』

実に、不思議そうな声音だが、このことに関してそうと察しない人は、父の知り合いにはあまりいないのではないかと思う。いたらそれはモグリだ。

「そうだよ。じゃあね。たぶん、5時には帰るから」

『晩飯には間に合うんだな。ではその時間に合わせよう。太宰も一緒なら、できるだけ離れずに行動するんだぞ、誘拐されないように、知らない人にはついて行かないように。ああ、そうだ切る前に、太宰の出前も聞いておいてくれ』

「はいはい」

太宰とは別れて行動しなくてはならないことがあるのだが、それについては黙つていい子のお返事をしておいた。スマホから耳を離して、太宰に問いかける。

「太宰さん、夜ご飯って何がいいですか？ 出前にするらしいんです」

「それで、カレーか。君の“お父さん”もそうなんだろう？」

「そうですよ。やっぱりわかるんですね？」

「そりゃあね」

目を細め、父を思い浮かべているのか遠い目をする太宰は、笑いの呪いが掛かっていたのかと思いきや、姿からは脱却したらしい。父の友人としての付き合いの深さが感じられる。きっと父の記憶がない分も。いつもの姿だ。

ね、と夏梅は頷きつつ、太宰の返答を聞く。

「私も同じものにしようかな。あつ 辛さは控えめで頼むよ」

「控えめって、中辛ですか？」

夏梅は首をかしげる。控えめに辛いということだろうか？

尋ねると、太宰は何を思い出したのか、ちよつと顔をこわばらせた。

小さく舌を出し、手で口元を仰いでいる。……なんだろう、口のかなかでも暑いのだろうか。

「…………いや、甘口でお願いしたいかな。なにしろこれから胃がきりきりしそうな案件ばかりが起こりそうな気がしてね。ちよつとばかり嫌な予感がしているのだよ。今のうちに胃を労わっておきたいのさ」

ぺらぺらと早口になった太宰は、妙な汗をかき、へらりと笑いながら手のひらを振る。——いつもの太宰だ。太宰の知り合いは、ふんと小さく鼻鳴らし、空気に消え入るような控えめさで「……なら咖哩カレーは辞めればいいでしょうに」と呟いた。ちらりと見ると、言った言葉の後悔したように唇を噛んでいた。呟きの声はなんだか暗いように聞こえた。カレー、嫌いなのだろうか？

夏梅はちよつと意外な気持ちになりながら、父に太宰の注文を伝えた。

「太宰さんは、カレーの甘口だって」

『了解した。ああそうだ』

父は、言葉をつづけた。

『太宰と一緒になら、そこに谷崎もいるだろう。聞いておいてくれ』

え、と夏梅は吃驚した声が出た。

『いるだろう？』

疑問形だったが、当然そうだという事象を確認するような響きだった。見落としたのは自分かと、夏梅は周囲を見回す。

しかし、橙色の特徴的な頭は見つからない。

どころか、相変わらずの人通りの少なさだ。車の一台さえ通りがからない。

『いないのか?』

「……うん」

夏梅は、車の事故の不可解なところが次々に思い浮かび、刹那の思考に、うわの空になる。

『可笑しいな、太宰が外へ出かける際に連れて行った筈なんだが』

何かがかみ合いかけたところで、太宰の知り合いに「どうしたんです?」と声を掛けられて、ぼうつとしたところから我に返り。慌てて曖昧にわらった。まとまりそうだった何かがふわりと解けていった。「えっと、ね……太宰さんの知り合いの、安吾さんっていう人はいるけど」

通話中であることを気遣ってくれたのだろう、太宰の知り合いの人は黙って横を向く。もっとも、通話先の声は聞こえないだろうが、こうした配慮が大人だなあと夏梅を感心させた。

『安吾? ——知らないな』

父も知らないのだな、と夏梅は納得する。それもそのはずだ。

「まあ、太宰さんの知り合いだからね」

『それもそうだな。谷崎は別行動しているんだろう。また別に連絡する』

谷崎兄のことなら、谷崎妹に聞けばよいとは思ったのだが、父が夏梅の嗜好を知っているように、夏梅が父の嗜好が分かることに気付かない父に言うのもなあと思っ黙っておいた。

「それじゃあ」

『ああ。晚饭までにはちゃんと戻って来るんだぞ』

通話は切れ、夏梅はホームに戻った画面に、いくつかの不在通知か来ていることに気付く。何だろうと思っていると、下から声がした。

「親御さんですか」

「うん。お父さん。『今どこにいるんだ』『いつ帰って来るんだ』『遅くなるんじゃないぞ』ってね。ちよつとうるさいけど」

「善い父親じゃないですか」

太宰の知り合いの人は、ふつと笑った。否定はしなかった。

不在通知を未読にしたまま、スマホをポケットのなかに入れ、静かに握りしめた。

???

???

曲がり角を曲がると完全に目で追うことはできなくなり、耳に届くサイレンの音もが遠ざかっていく。

よく喋っていた割に、大怪我だった。探偵社の与謝野がいれば、すぐにでも治るのだろうが、それは異能力者であることを明かすことになってしまう。珍しい回復系の異能の持ち主であることを知られるのは、ただの異能力者がそれと知られることよりずっと危険だという。

「早く怪我が治るといいね。……太宰さんの知り合いさん」

「坂口安吾。奴は『鬼札』さ」

「おにふだ?」

物か何かのように言われているように感じた。

気のせいだろうか。

「異能特務課。政府のエージェントさ。異能力犯罪者を取り締まるのが仕事」

「それは大変そうな仕事ですね」

「そう。でもそれが仕事なのさ」

「仕事だったら、仕方ないですね」

太宰は少し笑った。

救急車に乗せられていった安吾と呼ばれる人を見送った夏梅は、同じ車に乗るほどの間柄にも関わらず救急車に同乗しなかった太宰を

横目で見上げて、どう行動したものかと内心でぐるぐると考えてしまっていた。

そうした夏梅に気付いているのか、太宰ははあ、と擦り傷の目立つ腕を伸ばした。そこでどこからか、ばきり、と音がした。夏梅は辺りを見回していると、頭上から太宰の声が降りてくる、「却説、夏梅くん——」と太宰の顔がこちらを向く。

「どうしよう」

「……どうしたんですか、太宰さん」

真面目な顔をした太宰が、腕を伸ばしたままの状態で停止している。なんだか嫌な予感がしつつも、おとなしく続く目を合わせないように目線をすこし下の位置で彷徨わせながら言葉を待っていると、夏梅は伸ばされたその腕が小刻みに震えていることに気付いた、

「あれ——腕どうかし」

「折れた」

「え?」

思わず顔をあげる。

生気を感じさせない張り付いたような笑みが、科学の実験で加熱中のビーカーに入れた沸騰石の動きのように絶え間なく、震え出す。その振動に合わせて笑みという表情が徐々に壊れだしていた。

「もしかして、さっきの事故で折れてたんです?」

「いや——今、折れたんだ」

「え?」

腕を見る。ピンと伸びている——ように、片方は見えた。

もう片方は、なんだか奇妙な曲がり方をしている気がする。『今』とは?

「いやあ、これは予想外、いや、ホント」

「え?」

正気だった人が狂気に落ちていく過程を目の前に行っているような、

笑みの壊れ方。そうと感じて、一抹の不安と凶器を同時に覚えながらも、逃げ出すわけにはいかず、ただ、現状を受け止めきれずにいた。上からさらに声が降って来る。

「折れた、ようなんだよ。——今さっきのことさ」

脂汗が滲んでいる額はきらりと光り、夏梅は何とか事態を飲み込もうとして、現状を振り返る。

救急車を呼んだ。負傷者を乗せて、病院へと去っていった。

その後に、軽傷だったはずの太宰は、伸びをした拍子に自分で腕を折った……？

「え？」

「うう、痛いっ」

腕以外の体をあらゆる方向に曲げながらもだえ苦しむ姿を視界に留めていると、なんだか自分の頭がおかしくなってくる気がして、空を仰ぎ、はるか上空を横切る小さな飛行機の雲を見ながら、明日は雨かなど現実逃避してから、視線を隣に戻す。

「太宰さん」

「な、なんだね？」

何故か蟹股の、海老反りの、首捻りの状態で目を合わせてくる父の友人へ、表情の乏しい夏梅の、それでも滅多に出ない真顔を向ける。

「——間抜け過ぎじゃないんです？」

夏梅は、与謝野の異能の利かない太宰を連れて病院へと付き添った。

右腕の骨折のため、包帯を首からつるしている太宰は、夏梅の用事にも付き合ってくれた。特に大したことはしないし、待たせるだけなので恐縮なのだが。

横浜のとある駅の改札口を通り、桃色に染まる雲が美しいほんの

ちよつとの時間、定刻通りにやって来た電車に乗り、すぐに降りる。そして、そのまま改札口へと戻る。改札口を通る前は持っていないかった大きな旅行鞆を引きずり、改札口で待っていた太宰とともに駅を出る。

「それはなんだい？」

「お母さんの形見です」

「大切な物なのだね。君には大きすぎるだろう。私が運ぼう」

「そんなに重くないから平気。太宰さんだって腕怪我してるしね」

「君よりは力があるよ、大人だからね」

そう言つて太宰は、夏梅から旅行鞆を攫つていった。

燃えた匂いがする。その奥からしみついて取れないのだろう、絵の具の匂いがする。

「中には何が入っていたのかな？」

太宰は軽い口調で尋ねてくる。

旅行鞆の中身がないことを、持ったことで分かつたのだろう。

夏梅は、質問を質問で返すことで、正解を半分だけ教えた。

「誰だと思つう？」

夏梅だって、知らないことだったのに。

来るの来ないの

低くなり始めた太陽が、赤くなる前に。

立ち止まった太宰を振り返る。逆光の中にあるその人の顔を見て、夏梅はなんと云えばいいものか解らず、口を開け閉めしたあとに結局、言葉ではなく肺にたまった息を吐きだす。

「——やっぱり、これは僕がもつよ。僕のお母さんの物だから」

夏梅は数歩先に歩いていった分を戻り、太宰の手から旅行鞆を取った。

そうして太宰の隣からまた歩き出す。

太宰の足元から続いている影の先を踏み越える前に、夏梅は振り返った。

「来ないんですか?」

「ここから先へは。」

???

???

探偵社には現在、一人の行方不明者がいる。夏梅が彼女を見かけたのは、夏梅と数か月違いで新人の中島と共に、探偵社員として依頼を受けに行った初日のこと。夏梅が何度かお世話になったこともある判事へのちよつとしたお遣いの筈だった。

「新しく入った、鏡花お姉さん、大丈夫かな。酷いことになってないといいけど」

「心配か?」

そりやあだつて女の子だよ、と夏梅は振り返る。

父の肩が見えるより先に、頭を固定される。

夏梅は欠伸をこらえる。好物のカレーを食べた後の時間は、とても眠くなる。

「動くな。うまく拭けないだろう」

父が夏梅の頭を両手で支えるようにして、向きを戻してくる。

そして濡れている夏梅の髪をタオルで拭き続ける。

あの日の初依頼は上手くいかなかったため、新人の二人を迎えに、国木田と宮沢が二人を迎えに行ったのだ。

そこまで思い返して、あれ？と夏梅は首をかしげる。

「次はドライヤーなんだ。熱い思いをしたくなかったら、大人しく動かないことだ」

「ねえお父さん」

「なんだ？」

「なんで、あの日、依頼がうまくいかなかった敦お兄さんと鏡花お姉さんを、国木田さんと賢治くんのおふたりで迎えに行ったのかな？別に一人でもよかったんじゃない？そもそも、迎えに行く必要あったのかなって」

父は少し黙って、「ああ……あの日か」と頷く。

ドライヤーのコンセントを入れながら、再び夏梅の後ろに膝をつく。

「さあな。それは夏梅の方が知っているんじゃないか？俺は、乱歩さんと商店街で駄菓子を買っていたからな」

「駄菓子ってあの酸っぱい昆布のこと？」

「他にも色々、たくさんだ」

へえ、と夏梅は頷くと、父がドライヤーの電源を入れた。

「だが、中島たちはポートマフィアとギルドとか言う外国の異能集団に襲われた。独歩たちが加勢さえできていなかったなら、命を落としたり者がいるかもしれない」

国木田と宮沢の二人が行ったことで、結果的には最悪の結果にはならなかったかもしれないということだろう。

だが、夏梅はそのことに関しても、引つかかることがあるのだ。

夏梅は薄く目を開けて、ちよつと考え込み、あのね、と大きめの声を出す。

なんだ、と父も大きめの声で応える。

「国木田さんと賢治くんが行ったのはね、たしか、太宰さんが二人で行ってっていったからだったんだ」

「そうなのか」

「でも、すぐには行かなくてね、太宰さんと話をしたのかも。僕は大叔父さんに、依頼の人が怒っちゃったって言いに行つてたからわからないけど、たぶんそう。大叔父さんはそのあと出掛けるみたいで、僕が見送りに行つたら、その時に国木田さんたちがエレベーターに乗るところだったんだ。だからエレベーターに乗ったのは、その三人だった」

それで、おそらく、大叔父である福沢は夏梅が依頼失敗の内容を伝えるよりも前に、別の誰かと話していた。夏梅が社長室に入ると既に、書斎の机の上には湯呑が二つ置かれていたからだ。

夏梅はそれが、太宰の物だったのではないかと思っている。

「なんだか、皆、隠していることがある気がしない?」

「だとしたら、夏梅はどうする?」

父は動じていない様子だった。

夏梅は——どうするのだろうか。

夏梅は自然界のドキュメンタリー番組を流す、つけっぱなしのテレビへと顔をしかめた。

「なんで隠すのか教えてほしいって思う」

「教えられた後はどうする」

「うーん……そうだったんだーって納得する?」

父が再び問う前に、夏梅は自分で考えた。納得した後は——?

夏梅は何を求めて、この問いを始めたのか。

「理由を知らされていけないのは、その時ではないからだ。俺はそう思っている」

「……お父さんも、分からないの? 気にならない?」

「お前もよく俺に隠し事をしているだろう」

父の濁いた瞳が見えて、ちよつと目をそらした。

動くな、と位置を正される。

「今回の事だけではないが、おおよそ見当はつく。俺の記憶の穴が原因だろう」

諦めたような口調に聞こえるが、それはきつと夏梅自身の心境によるもので、父はそんなに何も感じてはいないのだろう。もともと執着

の薄い性質だから、あるものがあることを受け入れはするが、無くなったとしてもきつとそれほど抵抗することなく受け入れるのだから。

柔らかな髪が頬に着く頃に、ドライヤーの電源は切れた。すると家のなかがこの上なく静かに感じた。

温風で、乾燥した目を擦りながら、ゆっくりと瞬いて、口を開く。「つまり、お父さんが関わったことがある人が今、何か関係があって、皆で隠してること？」

「さてな。ただ、今回、講堂を襲ってきたポートマフィアとかいう組織の男は『なんで生きている』と口にしていたから、昔、何がしかの関係はあったのかもしれないな」

「知り合いならさ、襲うのやめてくれないのかな？」

他力本願になるがそう思ってしまう。

だって、死に易かった父を生き返らせる人はもういないのだ。

それに、父は悪いことをする人間ではないので、酷いことをしないでほしいと思う。

父が危ない目に合うたびに、夏梅の心臓は潰れてしまいそうになるのだ。

「友人であれば違ったかもしれないが、敵同士だったなら、相手も辞める道理はないだろう」

「あー、そっか」

斃したと思った相手が、実は生きていたということになったら、驚きはするだろうし、もう一度しっかりと念入りに斃さなくてはと思うのかもしれない。……なんだか、周りに父の死を望まれているような気がして、悲しくなった。

「パパ——お母さんは、生きていてほしいと思ったから、お父さんを生き返らせたんだよ」

父が髪の毛を梳いてくる。

「……そうだろうか」

「そうだよ。じゃなきや、何度も何度も死んじゃうのに、生き返らせてないよ」

母はそんなの面倒くさいと思う人だ。父は覚えていないだろうが。夏梅の髪を梳く手が止まった。

「そんなに俺は死んでいたのか？」

「何回、お母さんに生き返らせてもらってたか聞きたい？」

父は長い沈黙のあと、首を振った。

「いや、聞くのは——今はやめておく」

「それがいいかもね」

夏梅は立ち上がった。

夜のニュースでは、倉庫で火災が発生したということが放送されていた。

見覚えのある倉庫が黒焦げになっている。荷物の移動が間に合っ
てよかったとため息をつくとともに、テレビを眺めていると、画面の
端に、メモ紙がアナウンサーの服についていることに気付く。しばらく
くアナウンサーは気づかずレポートを進めていたが、カメラマンに指
摘されたのか、マイクを持つ袖のところについていた、四つ角に赤い
梅のあるメモ帳を取ってでくしゃりと握りつぶしていた。

時間にして一分も経たないだろうが、夏梅にとってはもつとずっと
長い時間を感じた。

「夏梅、布団を敷いた。テレビを消して寝る準備をしろ」

足音が近づいてくる。

「夏梅？ どうした」

父が顔を覗き込んでくる。

「……………どうしよう……………」

喉が引きつった。うつと声が喉から洩れた。

「おかあさんの絵……………」

???

???

その駅の近くには、住民から親しまれている最寄りの郵便局がある。こじんまりと小さく、建物は年季が入っているが、日々掃除を欠かさず清潔さを保っていることが分かる。それはたとえば、建物の外においてある植木鉢の回りを掃いた模様であったり、窓を拭いたのが乾いた水垢であったりだ。

段差を乗り越えて、夏梅は中に入る。郵便局の入り口前の小さな段差には、夏梅の背が低いため、身の丈より少し低いぐらいの旅行鞆を持ち上げるのがちよつと大変だった。その時、後ろから太宰が助けてくれたので、助かった。

「これを郵送するのだね」

「うん……まあね」

もつと深く訊くかと思つたのに、太宰はそれ以上尋ねはしなかった。

柔らかな斜陽の光が、光鳥の窓から郵便局のなかの陰影を淡く照らし出している。

「こんにちは。荷物を送りたいんです」

白い襟のきつちりとした居住まいで窓口に控えている受付令嬢の一人が笑顔で立ち上がる。

黒髪を赤いリボンでくくつた、若い女性だ。

「こんにちは。荷物つてその旅行鞆スリッケースかしら。重たい物は入っている？」

「ううん。空っぽです」

「貸してもらえるかしら」

夏梅は頷いた。窓口の近くまで引いて行くと、窓口の受付嬢が身を乗り出して荷物を受け付け台の上に引き上げた。

「ほんと、思ったより軽いわね。でもこの大きさだとちよつとお値段が高くなつちゃうの。勿論距離も関係してくるけどね。宛先の住所は書けるかしら？」

頷くと、受付嬢がにこりと微笑んで、用紙を手渡してきた。

「じゃあ、ここに書いてくれる？ 私は隣で重さを測つて料金を出す

から、分からないことがあったら何でも聞いてね」

「ありがとうございます、お姉さん」

前もって調べておいた住所をスマホで出し、渡された黒いペンと紙に、記入していく。

事務仕事でもやったことのある作業だったので、受付の人に聞くこともなくすべて埋める。

書ききると、受付嬢も料金を教えてくれる。

「ここは私に譲ってもらおう」

え、と慌てた夏梅がセオリー通りに断る前に、太宰は片目をつぶって見せた、「今日、君がついてくれたこと一通りへのお礼だ。ささやかだがね、今回の催しには個人的に協力したかったのだよ」と断りずらいことを言う。

様子を見守っていた受付嬢へは、不意打ちで輝かしい笑顔を向ける。笑みを向けられた受付嬢は「……はい」と頬を染めながら言う。お代を払うだけなんだよね？と呆然としている間に、太宰が払うことに決まったようだった。邪魔をしないように一、二歩下がった。

財布からお金を取り出して受付嬢に払う太宰を後ろから眺める。

なんとなく外の景色が気になって窓へと目を遣ると、そこにはいつの間にかメモ紙が貼り付けてあった。ちよつと肩が跳ねる。近づく、それは無地の四つ角に赤い梅が描かれているもので、夏梅が探偵社で普段使っているものと同じだった。

そこに書かれている内容を見て、夏梅はすぐにそれをはぎ取ってポケットのなかに入れた。

「ありがとうございます。またお越しください」

受付嬢の声がやけに遠くで聞こえた。

見つけた見つけてない

父の話し声が聞こえて、夏梅は目を覚ました。ぼんやりとしながら、目を開けると、スマホを耳に当てた父が傍に腰を下ろして誰かと通話していた。今は何時だろうと枕から顔を浮かし、頭を巡らせて、壁に掛けてある時計を見る。すると、もう正午も近い時間になっていることが分かった。

「そうか………じまの異能なら……何と……もなるだろうが。……ずみが警察に捕らえ……れたの……たいな」

頭を動かしたことで、夏梅が起きたことに気付いたのだろう父が、大きな手のひらで夏梅の頭を再び枕に沈み込むようにしてきた。そして、髪を梳くようになでてくる。耳にかかっていた髪が避けられたので、今度はしつかりと言葉が聞き取れた。

「ああ、こちらは無事だ。昼過ぎには、夏梅と探偵社に向かおう——ああ、ではまた」

通話を切る父の横顔を寝転んだ状態で見上げながら、聞いてみる。「相手の人は誰？」

「独歩からだ。中島がギルドの手に落ち、泉が警察側に捕らえられたらしい」

探偵社の国木田から父に掛けて来たらしい。

探偵社は今、ギルドとポートマフィアと三つ巴の抗争に入ってしまったっているらしい。

それなのに、鏡花が捕まったのは、ギルドでもポートマフィアでもなく、警察だという。

警察を巻き込んで、四つの組織が争うということだろうか。

……警察がそれを分かって、参戦するとは思えない。

「なんで鏡花お姉さんが、警察に捕まるの？」

「三十五人の殺人を犯したからだ。警察は泉を指名手配していた」

「そうなんだ」

それは正当な理由だった。云ってみれば、警察は、警察の倫理で動いている。

夏梅はちよつと黙ってから、父に聞いた。

「……探偵社は何もしなかったの？」

「中島に関しては手立てを打つ。そのために、社に呼ばれている。お前もな。だが、泉に関しては、難しい問題のようだ」

「——人を殺したから？」

探偵社に人を殺めていない人がいつたい何人いるだろう。

肘について上半身を起こし、枕を見下ろした。

「いや、単に泉の心の在り方に問題があるとみているようだ、探偵社はな」

裏試験をする前にこの出来事だからな、と父は平坦な口調で言う。

ふうん、と夏梅は、枕に掛け算の記号を何度も指でえがいた。

「……じゃあ、お父さんは？」

「泉の処遇に関してか？ それとも、心の在り方についてか？」

「心の在り方のほう」

父のことだ。鏡花を見捨てるはずがなく、助けるに決まっている。

他の探偵社員にとつてみても同じことだろう。

夏梅、分かり切ったことは聞かない主義である。

それより、何度も死に、何度も生き返り、その度に記憶を失くしている父が、心をどういったものとして捉えているのが気になった。記憶はその人自身であると言っても過言ではないくらいに重要なものであるはずなのに、その重要な部分だけが著しく欠けている父は、自分の心とどう折り合いをつけているのか。

子である夏梅ですらわからない。

「難しく考えることでもないと思っている。それに人の心の在り方を問うことなどできないさ。——人に他者の心は縛れない。悪にも正義にも。そうだな、きつと生の保障でも死の恐怖でも、何によってもできはしないんだろう。世界は案外と簡単にできているのだから、と俺は思う」

そうだろうか。夏梅は首をかしげる。

人は、悪に染まったり、正義を掲げたりする。

しかし確かに、悪に縛られたり、正義に縛られたりするという人を、

夏梅は見たことがないかもしれない。

人がそれらを選び取ることはあっても。

「じゃあ心は自由ってこと？」

夏梅が父の顔をうかがうと、それは少し違くと父は首を傾けた。

そしてカーテンを透過した光に、父はまぶしそうに目を細めた。

一瞬、ここが、家族三人で過ごした瀬戸の別荘であるかのように思えた。

閉まっている窓は、潮風が入って来て白いレースのカーテンを揺らし、寝汚く午後まで横になっていた白いシートの上を吹いていく。家の扉や窓はいつもどこかが開いていて、海の風を感じることができていた。

——錯覚だ。

夏梅は善く聞こえる耳で、考えられる頭で、父の言葉を拾っていく。

それは赤ん坊のころにいつも聞いていた潮風に似ていた。

「本当の自由というのはきつとどこにも存在しないのだろう。それだけ自由という言葉についてくる責任は重いものだ。本当の自由を手にしたとき、人は自分を縛る何かを欲するんだ。それが正義であったり、悪であったりするだけで、当人が望まないものに、本当の心は縛れはしないんだろう」

「ふうん……？」

枕の上に肘を立て、両手で組んだ上に顎を乗せて父を見上げる。

父は片膝を立てた上に乗せた腕の先を見ながら言った。

「それは自己犠牲的な献身さえ、当人が望まないのなら、心まで縛れはしない。葛藤するのなら、それは少しでもそれを望む心が自分にあるからだ」

「やっぱり難しい話だね」

「そうか？ 望む心と、それを行動したという結果だから、分かり易いと思うが」

「見えない心と、見える行動がどっちも必要ってことでしょ？ ……でもきつと行動が難しいんだよ」

体を起こして三角座りする。膝に顎を寄せながらしゃべると視界

がぐらぐらする。

父の声は、静かな部屋によく響いた。

「だが、それを探偵社は要求している。正直に言うと、俺はお前が探偵社の社員に合格しなくていいと思っていた。今も、多少なりともそういう部分はある」

からかうように言う。

「ちゃんと話し合いしたのにな」

「親子会議、か」

「そうそう」

連日連夜に長引いた会議だ。その頃の夏梅は大変な早寝であったので、夜8時で会議は終了していたけれど。

探偵社の社員に求められていること。それは、見知らぬ誰かのために自己を犠牲にできるか。

夏梅はその試験を合格した覚えがない。あの探偵社での人質事件でさえ、父が人質になるよりはと思って行動しただけだ。知らない誰かのために、夏梅は、父を残して自分を捨てることができるのだろうか。それを父に望まれているとは思いはしなないけれど……。

自己犠牲。犠牲とは何のためかと言われれば。

「そっか。それは、自分の他に誰かがいないと成り立たないものだね」
自分を犠牲にしても残るものがあるから、それを選ぶ。その時、それが自分の命より尊いかどうかを考えるまではしないのだと思う。なぜなら、自分の命より尊いものなどそうそうないのだ。自分の命を考えるより、他の人の命を尊重しようとする気持ちが先行して、行動してしまふのだろう。夏梅には、想像することしかできないけれども。

知らない誰かを見捨てることさえないのなら、知っている誰かを見捨てることはないのだろう。

ここで捨てる命は、きつとこの誰かによって想いを引き継がれていく。

「そっか。人間は他の人がいない自由がとっても寂しく感じるんだね」

だからきつと、探偵社にいる限りは、独りぼっちになることがないのだろうと思った。

夏梅は目を閉じた——昨晚のやり取りがぼんやりと思い出される。

『夏梅。——絵は、必ず守る』

安心しろ、と父は言った。

???

???

「ようやく来たか、織田作、夏梅。息子がついているせいか、時間通りだな」

「近所のおばあさんに話しかけられたんだが、夏梅がうまく切り上げてくれた。いつも助かっている」

「……そうか。いや、もう何も言うまい」

事務所の扉を開いてすぐのところまで仁王立ちしていたのは、国木田だった。

夏梅は父の後ろから顔をのぞかせてその姿を確認すると、走って飛びついた。

「おおお!! なんだ急に」

「……なんでもー」

腰のところにぎゅうと顔を押し付ける。

事務室の奥から江戸川が顔を出し、ふむと眼鏡を直して「成程、そう来たわけか」と意味深に言う。その声を聞きつけて夏梅は、国木田から慌てて離れた。

「乱歩さん、あの、ネズミ……」

「勿論、判っている。そのことについても話そうと思って呼んだんだ」江戸川はくるりと一回転したのちに、段々担ってる本棚の上を駆けのぼり、天辺に立つ。

掲げられた指はなぜか三本。

「ようやく集まったな、凡人ども。却説——今この探偵社はふたりの

人質ひとじちとひとつの物質ものじちを取られている!」

三本指を立てられる。その間に、与謝野や谷崎兄妹、宮沢らもやって来る。口々に挨拶を交わしながら、江戸川の眼前に集まる。そこに太宰の姿は……なかった。

「ひとつ、中島敦がギルドに連れ去られた。ふたつ、泉鏡花が警察に逮捕された」

誰も、鏡花が探偵社員ではないとは言わなかった。

夏梅は、江戸川の次の言葉を待った。

「そして——みつつ、社長の亡き姪である中村和枝の絵画が、横浜への運送中に何者かにより奪取された」

驚いて、夏梅は江戸川を見上げ、父を振り返った。

父は夏梅の肩に手を置いた。

「中村和枝は、織田の妻であり、夏梅君の母上だ。早逝しているため、ポピュラーではないが、そちらの業界では期待された画家で、かなりコアな蒐集家コレクターもいるらしい。皆も知つての通り、今回横浜で個展がひらかれる予定だったが」

そこで江戸川は言葉を切る。

「整理しよう。僕たちは、ギルド、ポートマフィアとで争っている心算になっていた。さっき挙げた人質二名に関しては、ギルドの計略にすっかりはまってしまった結果だが、物質に関しては、この二つ以外の勢力によるものだ」

その組織の名は——

???

???

悪夢を見た子どものように、嗚咽する我が子を何とか眠らせる。眠っている間も少し険しい顔で眠っている夏梅に、布団を肩まで掛けてやりながら、片手でスマホを操作した。

夏梅の傍を離れ、夏梅が着ていた服のポケットを探る。そして、そこに夏梅が使っているメモ紙と同じ模様のメモ用紙が一枚入っているのを探り当てた。

一度、夏梅がしつかりと眠っているのを振り返って確認し、居間に行ってから、電話を掛けた。

「——ああ、太宰か。夜に遅くに済まない。例の紙だが、見つけた」
『日本語かい?』

何かが書かれていることは知っているのだろう。

郵便局の受付の衝立の反射で、夏梅が背後で妙な紙をポケットに入れるのを見ていたというのだから、抜け目がないというか、細やかなことに気付くというか。

さて、それよりも問題はメモの事だ。英語ではないことは確かだ。生憎と母国語以外は、辞書も繰らないので、大した判別はできない。「いや、外国語だな。どこ国の文字かはわからないが」

『写真を撮って送ってくれ』

わかったと頷き、写真を撮る。こうした時にいい絵が撮れるようだというのだが、自分では手やスマホの影が入らないように調節するくらいが精々だ。昼間であれば割と簡単なのだが、室内であったり夜であったりすると天井からの照明でうまくいかないことが多い。夏梅の方がよほどうまくとる。まずは昼間我が子に、写真の撮り方の教えを乞うべきだろうか。

『成程。これは露西亞語だね。人間には、幸福のほかに、それとまったく同じだけの不幸がつけねに必要である』と書かれてある』

「お前は露西亞語もできるのか。相変わらず、多才な奴だな」

『……ふふふ。まあ、そうでもないさ』

それにしても、悲観的な言い回しだ。

ありふれた内容ではあるが。

「夏梅は露西亞語はできない。これを読めたとは思えない」

『最近スマートフォンで写真を撮るだけで、自動翻訳してくれるアプリもある。それを使えば、誰だっって意味を理解することは可能だろう。——ま、精度のほどは知らないがね』

夏梅が本当にこの文章を翻訳して読んでいるのだとしたら、写真の撮り方だけではなく、アプリの使い方も習うべきかもしれない。

「だが、その文章を読んで一体どうするというんだ?」

『文章だけではないさ。それだけなら、夏梅くんも不可解に感じるだけですぐに忘れただろう。……しかし彼はこのメモに過剰に反応した』

それは何故か——？

太宰の言葉に緊張を飲み込む。

「メモ帳を使った異能力か？」

『ふむ、面白い意見だ。もしそうだとすると、僕がそのメモに触れた時点で、無効化されるだろうから話は単純なんだがね』

「そうではないと？」

『物事はもつと複雑なのさ。夏梅くんにとってそのメモに書かれていた事柄が無視できないものになっていったのかもしれない。わざわざ夏梅くんの使っているメモ紙を同じものを使用しているのだからね。いつそう得たいが知れなく感じただろうし』

「夏梅の物なのか、これは」

『勝手に、減っているらしいよ。春野さんからの情報だ。私も見覚えがあつてね、確認してもらつたんだ。夏梅君くんの引き出しの鍵を開けてもらつたんだけれど、誰も使っていないはずなのにね』

「なんだか気味が悪いな。夏梅はそのことに気付いているのか？」

『おそらく半信半疑なのだと思うよ。でも、いつも使っているものだから、角の折れ具合とかで、何か感じるものがあるかもしれないね。まあ、メモに書かれた内容を私たちが見たのはそれ一つだ。その他にもメモを受け取ってそこに決定的なことが書かれていたのかもしれないし、実際に何か仕掛けられたのかもしれない。最近、何か夏梅くんに変わつたことはなかったのかい？』

変わつたこと——たつぷり五分間考えたが、首を振つた。

「いや、特には」

言いかけて気づいた。

「ここ数日、俺は妻の個展の打ち合わせで、あまり夏梅についてやれていなかった。だから、気づくことができなかつたのかもしれない」

『……ビンゴだ、おそらく』

「なに？」

太宰の口調が変わった。

『ちよつと大掛かりになってきそうだよ。嫌な予感はこれだったのかな、まったく性質の悪い嫌がらせだよ』

「どういうことだ？」

『狙われているのは、記憶だよ、織田作。君の奥さんの絵が物言わないことを良い事に餌にするつもりだ』

視界が、溶かしたバターのようにゆがむ。その単語を、口にしてくれるな。

スマホが手から滑り落ちる。床に膝をついて、頭を抱える。

スマホから太宰の声が聞こえてくると、真っ黒なもので視界が覆われ、いつの間にか通話が切れていた。燃える車、直前まで叫んでいたはずの***たちの悲鳴は届くことなくはじけ飛んだ……誰の悲鳴だ？

「お父さん！」

「夏、梅……ああ、生きていたんだな。善かった、よかった、よかった、よかった」

夏梅の華奢な腕が頭に回り、耳をふさぐ。

夏梅の小さな脈動が聞こえた。いや、自分の物なのか。

「絵は——」

首につきりと何か冷たい物が触れた気がした。背中から床へと沈んでいく。床の下は暗く、底はない。どこまでも沈むなかで、白い腕に押しつけられた。

「あん、しんしろ……なつめ」

底のほうで、笑い声が聞こえたような気がした。

まさかたまさか

江戸川に計画の段取りを指示され、細かい内容を詰めていくために社員たちは場所を移動することになった。いつもの会議室には、人数分の椅子と飲み物、資料が用意されており、一席には既に座っている者もいた。

黒髪の蓬髪、『首』という字が使われる体の部位には白い包帯が巻かれており、とても痛々しく感じる。夏梅は、父と一緒に、あれはどうして傷ついたものなのだろうと話し合ったりした。結果、父が直接、本人に尋ねて持ち帰った内容によると、どじっ子かな、という結論を夏梅に下させていたが、父はまた違った結論を持っているようだった。

「太宰いいいい！」

国木田が弾丸のようにすつと飛んで行って、太宰の襟首を絞める。振り子のようにぐらぐらと揺れる首を仰向けて、太宰は血の気の引いた顔でにこやかに微笑する。

夏梅は時々、父の、この友人の神経を疑う。きっと常人ではありえない、感覚の持ち主に違いない。

「御機嫌よう、諸君」

イー天気だねえ、と話し続けるので、夏梅は今日の天気を思い浮かべた。生憎とこの部屋には窓はないのだ。

しかし、じつくりと思い返す間もなく他のメンバーは次々に席についていくので、夏梅も父を引き連れてその隣に座った。

「御機嫌よう、ではないわ！ 何、この大事に堂々と遅刻している！」

「誤解だよ、国木田くん。私はこれらの資料をまとめていたのさ！」

ね！ 春野さん！」

大叔父と共に会議室に入ってくる春野へと声をかける太宰。

大叔父のために椅子を引いた春野が、太宰へ向けてにこりと微笑む。

「はい。昨晚からわたしがナオミさんと印刷したものを、太宰さんが先ほど五分前に来て、全員分の資料と予備、合わせて12部をホツチ

キスで留めてくださいました。その後、わたしとナオミさんでお茶をご用意し、太宰さんには席に座っていただきました」

「ほらあー」

得意げに太宰は襟首をつかむ国木田を振り仰ぐ。

夏梅は春野の説明を聞き、太宰が邪魔になっているのではと思ったが口にしないでおいた。

黙っていてよかったと思う。

「何が、ほらあ、だ！ 戯け！ しつかり邪魔になっているではないか！」

同じことを国木田が云ったので、二度手間は防がれたと思う。

会議は、こうして国木田の怒号のような悲鳴、あるいは悲鳴のような怒号によって開会した。

全員が席に着くと、いるはずの人がいないことを再確認させられる。中島と鏡花の席は空だ。誰もがその場所を確認する。

「計画を練る前に、一つ私から情報を提供させてもらいたい」

「なんだ、太宰。最初から貴様が建設的なことを云うとは珍しいな」

「私だつて今回の件は、苦々しく思っているとも。……小さな友人に、平手を貰ってしまったからね」

びくりと肩を揺らすと、太宰が片目をつぶって寄越してきた。

怒っては……ないようだった。それにしても、友人？ ちよつと夏

梅は戸惑った。

嬉しくないとは云えば嘘だった。けれども、なんだか落ち着かない気持ちだった。

国木田が訝し気な声でオウム返しに云う。

「小さな友人……？ まさか妖精とでもいうつもりはないだろうな」

「きみは本当に浪漫人だね、国木田くん！ だが、冗談ではないのさ。実は、こう見えて今回の私はかなり本気だよ？」

また沸騰しそうな国木田を、ひきつった顔で谷崎兄が宥めに入る。谷崎妹はにこにこそれを見守っているし、与謝野は欠伸をしてい

る。江戸川の席にはどつさり駄菓子積み重ねられて、それを物色している。宮沢は椅子の後ろ脚でバランスをとっていた。大叔父は眠っているように目を閉じ、春野はその後ろに柔和に微笑んで控えていた。中島と鏡花が居たら、きつと夏梅と同じように戸惑っていたかもしれない。

父は——まったりと緑茶を啜っている。太宰は、父の友人だ。夏梅が友人だと言われると、認められたような気がしてじわじわと嬉しくなる。けれど、やっぱり太宰の友人は父だ。それが一番しつくりくる。うん、それがいい。

夏梅は、父を観察することにした。

「美味しいな。こういう味がするんだな、あの抹茶」

「え、お土産のお茶なの、これ？」

「らしいぞ」

再び、父が茶を啜る。春野か谷崎妹と話でもしたのだろうか。父は事務員からの頼みごとを良く引き受けるので、何気に仲がいいようなのだ。

湯呑を口から離すと、しみじみという。

「お前のお爺さまも、このくらい淹れられたらいいんだが。あのお味も、頭の芯が痺れるような感覚が新鮮だったが」

「それは、頭の芯まで痺れるような苦さっていうのが本当のところなんじゃないかな。……もう、正直のお爺さんは、淹れてもらう側の人なんだから腕前なんて要らないのにな」

「たった一人の孫だから、手ずから淹れてやりたかったのだろう」

片目を開けた父が、夏梅の方を視てくる。

「お前のことだぞ、夏梅」

夏梅は湯呑に手を伸ばして、ふうと息を吹きかけた。

進まない会議に、絶対的なひと声が投げかけられる。

「それで、情報とはなんだ、太宰」

襟首を掴まれていた太宰は、ふっと笑った。……笑ったのだと思う。でも、それはとても暗い目をしていて、恰も二つの洞があるように見えた。

「……太宰はなんだか機嫌が悪いみたいだな」

「そうみたい」

父は片目で周りを順繰りに見ていきながら、肩を傾け、夏梅へと小さい声で話しかけてくる。夏梅も頭を父の方へ寄せて相槌を打った。

夏梅は揺れる湯呑の中を見下ろしながら、中島と鏡花のことを思い出していた。孰れも人質であり、かかっているのは人命だ。しかし、母の絵は、人ではない。誰かの命にかかわってくるようなものでもない。江戸川は物質ものじちといつて表現してくれた。しかし、他の誰が見ても、それは絵画ぶっしつという物質だ。

「ね、お父さん」

「なんだ」

「絵ってね、紙と絵の具でできてるよね」

「そうだな」

「紙ってね、植物からできてるんだよね」

父は少し考えてから頷いた、「そうだな」

「絵の具も植物とか、虫とか、鉱物とか、あと動物からもつくられてるんだよね」

「そうなのか?」

「お母さんが云ってた」

父はそうか、と頷いた。

それに夏梅はちよつと笑った。ちよつとしたやり取りだ。けれども、夏梅にとっては大切なことなのだ。こうして、生きていた母の傍で見聞きしたことを、何も知らない父に伝えられることが。

人は、価値を比べたがる生き物だと夏梅は思う。

鉛筆と命なら、命をとる。

動物の命と人間の命なら、人間の命をとる。

人間の命であっても、その人間によって尊さを決めたがる。

例えば、権力があるかどうか、世界に大きな影響を与えられる才能があるかどうか、お金があるかどうか、健康であるかどうか、性格が良いかどうか、周囲の人に願われる人であるかどうか。

例えば、自分の天職か画家か小説家と信じている人が鉛筆を捨てら

れるだろうか。

例えば、肉親が生きていたとしても、そのすべてに捨てられた人が、唯一心を開ける飼い犬を、捨てられるだろうか。

命と天秤にかけたとき、その人にとっての命と同等かそれ以上の物が、他の人にとっての何の価値もないものに見えるかもしれない。……でも、それは他の人にとっては理解できないものだ。

だから、探偵社の仲間の命と、ただの絵とを同等に扱われる筈がない。……傍から見ればそうだ。夏梅にとっては替えの利かない、一度失ってしまったえば二度と戻らない、母の遺作だ。父にとって、母を知ることができる大切な、かけがえのない依代だ。これからどれだけ時間が経とうとも、減ることはあっても増えることはない。

でも、それは周りからしてみれば、ただの絵なのだ。

この一大事に、たかが絵の一枚や二枚、三枚や四枚、幾らでも喪失したところで、人の命には代えられない——そう云われても不思議ではないのに。

絵なんか大したものではない、と。

「そう云われると思ってたから……」

夏梅は、誰にも云えなかった。俯いた夏梅の頭に、馴染んだ手のひらが乗せられる。

夏梅はしばらくうつむいたままだった。

泉鏡花の身柄についての交渉は、既に昨日の時点で進行中だったらしい。太宰と谷崎とでその準備段階を済ませたという。後は、時期を見計らい、与謝野の異能力の行使を交渉材料として、取引するらしい。そして、中島敦については——

「敦君なら問題ない。きつと、脱出する」

太宰の言葉が耳に届く。その言葉は確信的で、少なくとも、夏梅には中島への信頼感とは別に、何がしかの根拠を持ってそう言っている

ように感じられた。

中島は、夏梅があつた駅から離れたあと、事務員を傷つけかけたことで自分を信じられなくなり、谷崎と国木田に任せて、頭を冷やすと言つて一人で出かけたのだという。そこで、何やらひと悶着あつたようだ。敵のギルドのメンバーが、ポートマフィアの芥川により、殲滅されるところに居合わせ、ポートマフィア、ギルド、探偵社のメンバーが抗争するという悪夢のような場面を、鏡花の参入により命からがら抜け出した。結果、ギルドの船にいた構成員は散開したというが、追いつめられたギルドは、奸計により、中島と鏡花の二人を罠にはめた、と。

「それが昨日一日の間に起こつたのか？」

父が淡々とした口調ながらも、不可解そうな表情で言つた。

船のギルドの構成員が殲滅されかけたその日のうちに、鏡花と中島がギルドの仕掛けた罠にはまり、鏡花と中島が捕らわれたその日のうちに、太宰らは対策のための行動を起こした……。

「実は、リークがあつたんだよ、織田作。それは、さつき乱歩さんが言つていた、みつつめの物質ものじちに関わつていた、組織からのものでね。……奴ら、余程この横浜を愉快な遊び場にしたらしい」

太宰の言葉を引き継ぐようにして、江戸川が結論を簡潔にまとめ上げる。

口からはみ出した酢昆布を口内に放り込みながら。

「まあ、敵組織が、二つから三つになつたつてだけの話。探偵社ウツヂがやるべきことをキミらに分かり易く云つてやると、敦君を取り返し、鏡花ちゃんを救出し、夏梅君の母上の絵画を展覧会まで保護すること。以上だ」

「展覧会まで？」

有り難いがいいのだろうかど夏梅は眉を提げて江戸川を見上げた。

「奴らの目的は、絵画自体ではなく……」

江戸川の視線が、夏梅の隣へと移る。

「まあ、守れたらいいのさ。僕の言うとおりにしてたら間違いない！」

「……………乱歩さんが云うなら？」

夏梅は頷いた。父の方をうかがうと、どこかぼんやりしている気がして腕を引く。

すると、我に返った顔をする。目を開けたまま、眠っていたのだろうか？

「……ここで、注意すべきはポートマフィアの『Q』だ。奴の異能力は凶悪だ。ポートマフィアが手綱を引いて、我々かギルドのメンバーを狙うのならまだいいが、『Q』が単独行動をとり横浜の市民に異能の力を振るったり、万が一『Q』の能力がギルドの手に渡ったりすれば、その被害は甚大なものになる」

「その異能力はどんなものなんだ？」

夢から醒めたような顔をしていた父が、ふと不思議そうに尋ねる。

太宰は、顎を引いて、目を閉じる。

「異能の中でも最も忌み嫌われている“精神操作”の異能力だよ。『Q』を傷つけた相手を呪うのさ。呪いの発動は、持っている人形を破壊されること。こういった状態になるかは……敦君がいたら説明してくれただろうけど、つまりは幻覚を見せて発狂させるんだ。そして敵味方関係なく襲わせる」

「ん、敵味方関係なく、だと——？」

国木田が反応する。

そう、と太宰は頷く。

「ポートマフィアも手を焼いて、長年座敷牢に閉じ込めていたんだが、よっぽど切羽詰まっていると見える。とうとうあれまで解放してしまふなんて」

「相当な脅威であることは理解できた。ポートマフィアの『Q』が、もし探偵社ではなく、ギルドだけを狙っていたとしても、放置することはできないということも。万が一というのは起こり得るからな」

国木田が頭を抱えて唸る。

「はあ。その方が一とやらは、考えたくもないな。ポートマフィアの手にも余らせるような異能力が、ギルドの手に渡るなど……」

「連中が、しっかりと手綱を握っていることを祈るよ」

太宰が閉じていた瞳を開けた。

「だが、探偵社として『Q』の確保ということも念頭に置かなければならない。万が一に備えてね。今後の方針については、国木田君——きみに任せるよ」

太宰が片目を閉じて見せた。

「戯け、資料の通りだろうが」

国木田が咳払いをして、資料を手に持ち、ページを繰る。夏梅もそのページを探して開くと、驚いたことに、すべてが書いてあった。国木田はその内容をなぞるように言う。

「泉の身柄についての目途は立っている。今後は、絵画の保護を進める。全五十八作品ある中でも、個展のために用意されたのは三十三点、うち十六点が未だに美術館に届いていない。夏梅が独自に蒐集家^{コレクター}や学芸員と協力して保護できたのは、十七点。俺たちがすべきことは、敦君が捕らえられた場所から脱出するのを待ちながら、『Q』の動向を監視ししつつ、散開した絵画を保護していくこと、だ」

国木田が、大叔父へと目を向ける。

「宜しいでしょうか、社長」

大叔父は、閉じていた目を開いた。皆が立ち上がる。夏梅も遅れて立ち上がる。周りの表情を見て、そういえば、どうして与謝野が押掬いの一つもしないのか、いつも話しかけてくれる宮沢が話しかけてこないのか、谷崎兄が内容を問いかけてこないのか、父が母の絵画が狙われていると言っても、驚きはしなかったのか。

大叔父の顔のその目を見て、夏梅は解った。はじめから、こうするつもりだったのだ。

夏梅はたつた今知らされただけなのだ。

「これより、探偵社から奪われた三つを取り返す」

夏梅の想いは見捨てられなかった。

会いたいと思った。中島と鏡花に。そうして一緒に喜びたいと思った。探偵社は中島も鏡花も、そして夏梅も見捨てなかった。——だから、もういいと、そう思って、夏梅は微笑んで、ポケットの中のメモ紙を握りつぶした。

倖あれかし

握りつぶしたメモの言葉は、罪への誘惑だ。

“そのうそをまもりたいか？”

船舶という主要な基地を失ったギルドは、異能力と思しき飛行船を拠点に据え直した。そして、そこへ中島は捕らえられているという。海が駄目なら空ということなのだろう。そうできる用意があるということは、素直にすごいというしかない。……中島は自力で脱出するはずと太宰は云ったが、夏梅は、上空を移動する飛行船からどのように脱出できるのか、見当もつかない。太宰の期待を背負う中島に同情する一方——もしかしたら、と夏梅も期待してしまうのだった。

さて——中島と鏡花がそれぞれギルドと警察の手に落ちる騒動となった襲撃事件だが、その時、船が停留していた港の倉庫は破壊され、収納されていた貨物、物品は甚大な被害を受けた。その近くには、一時保管場所として、コンテナが積まれている。

「この中に、ナツメくんのお母さんの絵が入っているんですかー？
ぼく、芸術作品つてよくわかりませんが、こんなに暑いところに置いたら傷んじやったりしないんですか？」

海からの潮風に麦わら帽子を片手で押さえながら、少年——宮沢はちよつと思案深げな声で、「収穫した果物や野菜なら、こんな密封した鉄の箱に入れちゃったら、一時間もしないうちにすぐ腐っちゃいますけど……」と懸念を口にする。

「うーんと……」

麦わら帽子からはみ出た、キラキラとした金髪が太陽の光を反射する。港には日陰になるような建物はなく、強い陽光が白いアスファルトの照り返しで、目を焼く。夏梅は目を細めながら、確認をとるように隣の蒐集家である茨木へと視線を送った。それを受けて茨木は、夏

梅へと日傘をさしていない方の手で、眼鏡の蔓の部分を押上げて頷いた。

「ええ。中には、私が独自に持ち込んだ携帯型の空調機器により24時間体制で、温度・湿度を制御しているので、保存状態は完璧に近いと自負しています」

「……だって。外は暑いけど、中は結構涼しいんだよ？ 絵の具も溶けたりしないんだって。そこは溝地さんが何度も確認してくれたんだー」

「へエ〜？ そんなに好い塩梅のコンテナなら、妾も入りたいぐらいだねエ。……ここは暑いったらありやしないよ」

与謝野は手持ちのレース付きの日傘を差していたが、まだ暑いらしく、空いている手で首元を仰ぎ、気怠そうに嘆く。天気は快晴。ずっと晴れ間が続いており、あの日みた長い飛行機雲は何だったのだろうか。と夏梅は首をかしげるばかりだ。

几帳面に解説してくれる茨木の隣で、日傘も帽子もなしに、ハンカチで顔をふきふきしている男性学芸員の溝地が、しゃべるだけでも大変そうにせかせかと周囲に視線を走らせて焦燥に駆られたように、夏梅達を急かした。

「は、早く、移動先へと移しませんと……こ、ここに置いたら、また盗られてしまうかもしれないでしょう？ ぶ、ぶ物騒なことに中村先生の作品が巻き込まれるなんて、わわ、私の細い肝が悲鳴を上げそうですよ。は、は早くこの子たちも安全なところに連れていきましょよ」

過保護な親のように早く早くと急かす溝地は、亡き母の個展を開きたいと、瀬戸にまで再三の連絡を寄越してきた人物の一人で、熱心な母の絵画の信奉者である。数少ない母の絵は、瀬戸の屋敷にあるもの以外の、世に出回っている作品はもともとの絶対数が少ないことも相まって、蒐集家間では高値で取引されているため、実物を見る機会を他の一般の市民にも——と熱意溢れる文面で何度も何度も分厚い手紙を寄越してきていたらしい。

……夏梅は知らなかったが。きっと父も知らなかったと思う。母

は自分の絵の評価について、夏梅たちに語りはしない性質であったし。

その父とは個展の打ち合わせで何度も顔を合わせているらしく、夏梅とは父の話でも盛り上がる——とはいえ、学芸員としての高い技術も持ち合わせているため、半ば押し売りのように夏梅の取り組みに参加を申し込んできていた。

実際とても助かっている。

蒐集家たちが、車をチャーターして運転まで都合をつけてくれても、絵の保管方法については、専門家ではなかったからだ。

「じゃあ、戻りましょうか。これで十五、十六、十七点目です。与謝野さん、賢治お兄さん、ありがとうございます。……それから」

夏梅は振り返る。そこには協力してくれた蒐集家の茨木たちと溝地がいた。母の絵のために奔走してくれた人たちだ。夏梅は目を伏せる。

「皆さん——母の絵を、大切にしてくれて、有難うございます」

頭を下げる、夏梅の手は震えていた。温度を感じなくなっていた夏梅の肩に、与謝野の手が、もう一方の腕には宮沢がそれぞれ寄り添い、夏梅の冷えた手を、宮沢のあたたかな手のひらが包んだ。その温度に、顔がクシヤリとゆがみそうだった。

あれから四日——中島はまだ脱出の気配を見せない。

そして、太宰の予言染みた言葉の通り、『Q』はギルドの手に落ち、ポトマフィアの手から離れた。まさか、という言葉は誰の口から洩れたのかは定かではない。一刻も早く、事態を収拾し、対策を練らね

ばならない。

依然として何一つとして問題が完全には解決しないまま、新しい問題ばかりが起る。

白々しいほどに快晴の空には、苦々しくも、異国からやって来た巨大な鯨が泳いでいる。

行方不明であった母の絵画の回収は、佳境に入り、残すところあと三点を残して完了となる。その作業を、夏梅は担当していない。担当しているのは――

海沿いの歩道を行くと、売家になっている建物がある。住居と店舗が併設されており、住宅街からは離れているが、海に近いことから夏には観光客もやってきそうな立地の一軒家だ。脇には駐車場もあり、なかなかの優良物件と見えるが、未だ買手はつかないらしい。

……それもその筈だ。店舗のひさしは破れかぶれで、雨風に汚れるままになっている。出入り口に扉はなく、少し覗き込むだけでも、床には縁の欠けた食器やら黒く汚れた調理器具やらが散乱していた。

「……解っていたことだけれど、悪趣味としか云いようがない」

「そうか？ 立地はいいと思うが」
「……………」

やっと口を開いたかと思えば、同行者はまた黙り込む。

バス停から降りて、地図の通りに進んで来たが、共に行動している太宰は口数が少なく、バスの乗車中に至っては黙り込んでしまってい

た。腹でも壊したのかもしれない。しかし、大の大人である太宰に便所を勧めるのは少々憚られる。当人が耐えているのなら猶更だ。……限界が来た時には、黙って送り出そうとは思うが。

「あと三枚か。やつとこここまで来たな」

「……夏梅くんは、よくぞ一人で十七点も集めたものだよ」

江戸川の推理があっても、実際に足を運んで絵画を集めるには相当な時間を要した。

そして、江戸川が云うには、夏梅が取り戻そうと奔走したときは、妨害さえあつただろうという。それに比べれば、今まで私が太宰と共に回収してきた絵画の置き場所にはほとんど妨害や障害といったものはなかったと云えよう。

「そうだな。だが、協力者の力も大きかっただろう。皆、かなりの資産家だったのは驚いたが」

どうやって調べたのかは知らないが、協力者としてリストアップされていた蒐集家コレクターたちの総資産の額すら資料には記載されており、それを余すところなく音読されたときは、世の中、金があるところにはあるのだなという実に平凡な感想を抱いた。

「主に、個人で築き上げた富だろうね。それだけに趣味に費やすこともできるのだろうが、きみの奥さんが描いた絵に傾ける情熱は大したものだよ。自宅の地下に専用の展示室を造つたり、絵のための別荘を建てたりと金も手間も惜しみなく注いでいた」

「なんというか、个性的な人物が多かったな」

「个性的で風変わり。一つ共通点を挙げるとしたら、誰かに見せて自慢するというより、徹底して自分一人のためというのが共通していると云えるだろう」

「……なるほど」

太宰の人間観察の炯眼には素直に感心させられる。

夏梅が自主的に動いて保護し終わっている十七点の作品は、個展に関わる学芸員と蒐集家たちの手を借りて数か所に保管しているという。江戸川の作戦により、それらをすべて一か所に移すことになり、夏梅は探偵社の与謝野と宮沢と共に、一か所ずつ保管先から絵画を移

す役割に分担されている。

絵画の保管には、蒐集家の個人的な資産が投じられていたり、立ち入りが禁止されている私有地などに厳重に保護されている。その門戸を訪ねるだけでも、画家の子である夏梅本人が居なくては扉を開けもしないという偏屈な者が多いらしかった。そのため、夏梅が絵を取りに行くことは決まっておらず、絵の保管のために学芸員がついてくることになっていた。

——夏梅達の計画では、襲撃を懸念して、作品を数か所に分けて保存することにしていったようだが、今は武装探偵社の総力を挙げて保護するため、一か所に集めた方がよいという指針に転換した。

探偵社からは、移動の際に敵の襲撃があった場合に備え、一般人である蒐集家と学芸員の安全のために与謝野が、そして重量のある絵画の移動のために、力仕事に適した宮沢が選ばれていた。襲撃により、一般人である協力者が負傷したとしても、与謝野であれば治癒することが可能だ。幾ら多く見積もっても、十二ぐらいにしか見えない夏梅は、力仕事には幼過ぎる。また与謝野も女性であるので、見た目以上に重みのある絵画の移動には、人手が必要であった。その点、数居る異能者の中でも屈指の怪力の持ち主であろう宮沢という人選は適当と云えた。

加えて、探偵社は絵画の収集・保護だけではなく、中島と鏡花の身柄のこともある。中島は自力で脱出するということを想定して、その脱出の補助のために、なんに使うのか知らないが、スモークを大量に用意するために国木田が、そして隠密行動で準備を進めるために谷崎が、中島の脱出補助のための人員に割かれている。鏡花の段取りは、太宰が時期を見計らっている。その時が来れば与謝野も駆り出されるが今はその時ではない。そのため、絵画の収集には、国木田と谷崎以外の社員総出で奔走している。

新たな絵の回収には、私と太宰が割り振られた——これは云ってしまえば消去法だろう。

江戸川から手渡された地図には、この何の変哲もない売り物件に星

印が記されており、同行している太宰の体調が優れないようであるので、太宰に代わって率先して様子を見ることにした。構造を把握するように建物の手前で全貌を眺めていたが、それ以上動こうとしない太宰を残したまま、扉のない入り口に近づく。

「地震にでもあったのか？ だいぶ散らかっているな」

扉がないためか、外からの埃と、雨風のためにできた黒い汚れが、うつすらと床に落ちていいる食器類を覆っている。もし現在の所有者が本当に真面目にこの物件を売りに出したいと思うのなら、最低限の掃除カリフォームはすべきだろう。それにしても、だ。

「どうしてこんなところに、妻の絵を持ち込んだんだ？ 散らかっているだけで、本当に罨の一つも仕掛けられていないようだが」

伝え聞いた妻の身の上を照らし合わせたか、縁もゆかりもなさそうな一軒家をわざわざ移動先に選んだということへの違和感が先行する。江戸川の推理だったが、なんとというか、納得がいかない。……そんな疑いを持ったところで、江戸川の頭脳は本物だ。今まで外れたためしがなく、これからもそうだろう。……自分の根拠のない感覚というのはつくづくあてにならないものだ。

「——これ自体が罨のようなものだよ。当人よりも周りに悪意をばらまく醜悪さ。謀った奴の腹の底が見えるような悪辣な手口だ」

背後で、足元の割れた皿の破片を踏み砕いた音がした。振り返ると、出入口を一步入ったところで立ち止まった太宰がいた。その靴先へと目を落とすと、大きな血痕を踏みつけていた。

——床一面に広がる、血溜まり。

そんなものがあつたかと慌てて顔をあげると、黒服の影がいた。崩壊しかけた躰を繋ぎ止めるかのような包帯が各部位を覆う。いつものような瘦躯の目立つ首や手首は痛々しく、加えてどんな暴虐の中にあつたのか、片目までが包帯に覆われている。黒服と肩に羽織った外套が、その包帯の白を目立たせている。華奢な部類だ。だというのに、深淵を覗き込んだような瞳が、圧倒してくる——思わず生唾とともに瞬く——と、それは陽炎のように消え失せた。当然、床には調理器具や割れた皿とその破片が散乱するばかりだ。

「——虫唾が走るよ」

床の様相を目で追っていると、未だ入り口前で立ち止まったままの太宰が喋る。

生暖かい白昼の光が入り口から差し込んでくるが、それは太宰の背後からは逆光になっている。目が眩んだのか、太宰の表情が視えない。

「太宰——？」

「悪夢を追体験させられているようだ。こうして軌跡を辿らせてご丁寧は無自覚の被害者へと無知の罰を配っているのか。裁定者にでもなったつもりか。——あの子を連れてこなくて正解だった」

俯く太宰は、体の横でこぶしを震わせていた。指先は白く、物凄い力が入っている。——此れは怒りだ。筆舌にしがたい憤りに空気が震え、私に伝わってきた。誰かが、知らず太宰の逆鱗に触れてしまったのだと私は漸くそこで気づいたのだ。

「きみ達を翻弄しようとするのなら、愚策だったと言わざるを得ないが、私を苛立たせようとする意図だったなら、利口な手だよ」

「太宰。お前、苛立っているのか？」

「そりゃあもう、血管がはち切れそうなくらいだよ、織田作」

我慢ならないとばかりに、太宰は喉から感情を絞り出す。

……これほど、感情をあらわにするとところを初めて見た。

目は怒りのためか、赤く充血している。何となく、太宰は本気で起こった時は感情を失くしたような顔になると思っただが、こんな風に起こることもできるらしい、と不謹慎にも納得した。

太宰の充血した目が私を捉える。

「痛みを失ったきみの代わりに私が怒ろう。最悪だと云っている。こんな最悪な状況が起こって善いはずがない。当事者たちは知らない。それが救いになるならば兎も角……知らないことが此れほど皮肉で、救いがないということ当人ではなく、第三者にそのように認識させてくる辺り——壊滅的に性質が悪い」

あまりの感情の波動に、臆した私は欠ける言葉を失くしていたが、太宰の握りこぶしから、赤い血が一筋流れるのを見て、思わず名を呼

んだ。

「おい太宰、止せ！ どうしたんだ、急に」

「急に？ 急にじゃないさ。ここに来る道中もずっと。ずっとだよ、織田作」

慌てていたため、多少乱暴に太宰へと近づいた。足元で、細かい破片が砂を砕くような音を立てる。

両手の手首を握ると、その細さにぎよつと怯む。それでも離さずにいられたのは、夏梅の方がよっぽどだったからだろう。

しかし、何時にない——尖った犬歯がのぞくほどに顔をゆがめる太宰を、私はぼんやりと見送る。目の前にいる太宰は、いつものように砂色のコートを着ている。いつも通り、の筈だ。

太宰が両手で顔を覆う。

「……ここで嘗て起こつたことも、ここで今行われていることも、きみ達は知らなくていい」

声が掠れていた。声が掠れるほどの、憤り、だろうか。

両手がゆつくりと下される。そこに、先ほど見た幻影が後を引いているのか、現れた双眸は、闇より底のない色をしていた。

よく研がれた小刀ナイフのような言葉。思わず心配になる。その研がれた言葉の切っ先は、太宰自身に向いているように思えたからだ。そのようなことはある筈はないが。

「人の過去を土足で踏み荒らす。最低な連中だよ。ああ……気分が悪い」

慌てて太宰を確認すると、太宰は口元を手で覆っていた。

先ほどのバスで乗り物酔いでもしたのか、吐き気がするのかもしれない。

「太宰、体調が悪いのならあまり無理をするな。お前は泉鏡花の救出の交渉役もあるだろう。……絵については、云ってみれば、俺と夏梅の家庭的な事情だか」

らな、と言い切る前に、「織田作」と太宰に呼ばれる。透徹した声だった。平坦な人生ではなかったと自認する私よりも、ずっと重い物を背負ってきたかのような老成した空気を漂わせることがある。織

田作——この呼び方を最初にし始めたのは太宰だった。他の探偵社の面々もその呼び方で馴染み、いつしかそれが日常になっていった。「……織田作。私は今きみがこの場からいなくなったら、こんな企みを謀った大本の人物へと単身で迫って自分でも何をするか判らなくなることを気に留めてもらえると嬉しいかな」

「それは……」

視線を斜め上に遣りつつ、思索する。

天井の染みは、雨漏りの跡と黴の繁殖によるものだ。放っておかれた人家の名残だと思えば、物悲しく詫びしい。——それは際限ない深みにはまりそうな程だ。些末なことに目を止めて感慨深くなるのは、歳のせいか。

首を振り、太宰の言葉を咀嚼する。

「つまり、俺はここにいればいいってことか」

「私の目の届く範囲にいてほしいということだよ、親友」

太宰の言葉に、動揺する。親しい友人だと思っていた相手から、明確に言葉にされる。それはとても唐突で、何の脈絡もない台詞に聞こえた——少なくとも私は。まるで夜の田圃の道を歩いていたら、空から血の付いた鍬が降ってきたとかそういういった程度での衝撃。しかし——その言葉を聞くことができたのは、とても幸福なことだと思う。だが、ここで「有難う」などと云うのは意味が^ナない^{セン}ことだ。「勿論だ、友よ」と返すことも。何故なら、互いに同じ気持ちだからだ。そして……何より、この口から出た瞬間に、その言葉の持つ力がこの世界では色褪せてしまうような気がするからだ。

「……そうか。お前がそう望むなら、そのようにしない道理はない」
努めて当たり前といった風に、返す。言葉にしたから、言葉にされたからと云って、この関係が崩れるはずもない。非凡な年下の友人は、私のことをそこまで見做してくれている。ならば、そのように思われるに相応しい者であろうと、非才のこの身で努力するだけだった。

「二階にはなさそうだな。居住区画の二階だろうか。確か外に、階段があつたな。……太宰、無理はするなよ」

「……その言葉をそっくりそのまま返すよ」

太宰は静かに返した。

何処にでもあるありふれた造りだからだろう、私は苦も無く階段を上り、扉^{ドア}の取っ手^{ノブ}を回す。明るい外から室内に入ったからだろう。目の前が眩んだ。何度か瞬くと、暗いカーテンが取り払われたように視界が戻る。そこは——子供部屋のようだった。

クレヨンが散らばり、野球ボールが転がる。木製の二段ベッドの柵の部分には、武骨なナイフが刺さっており、そこに額に納まった絵画が掲げられている。

「……特に、罨はなさそうだな」

正直拍子抜けした。もう一度用心深く辺りを見回すが、嘗ての住人である子どもたちが和気あいあいと暮らしていただろう空間に不似合いなナイフが目につくくらいだ。子供部屋の中で違和感を発揮するそのナイフだが、それよりも私にとっては、描きかけの絵であったり、使い込まれたグローブであったり、ベッドの脇の柵に塗られたクレヨンの跡であったりを見つける度に、酷いめまいを感じた。長い間換気されていないからだろうか。

停滞した空気は、生温い。

「大丈夫かい、織田作。絵は見つかったのだから、このまま帰ろう。目的は果たされたのだから」

「そう、だな」

太宰の云うとおりだ。私は絵を回収した太宰が先に外へ出るのに着いて行く。しかし、最後にもう一度、振り返る。

そこにいた子どもたちは、今はどのくらい成長しているのだろうか。そう想像したとき、瞼の裏には、少女の姿が思い浮かび——思わず笑みが零れた。

——子らに倅あれかし。

そう念じれば、少女少女たちはそれぞれ各々の笑顔を見せた。

みつけたわ

不思議不可思議

青々と広がる海原が望める道路は空すいている。白いカモメが海に突っ込んで、銀色に光る小魚を器用に捕まえていた。その鳴き声は聞こえない。車内は紫外線を避ける遮光シートが張られた窓ガラスにより木陰のような薄暗さで、乗っている人たちの静かな呼吸音と、不快を感じさせない温度の空気に満たされていた——そう、すっかり眠気ムードだった。高級車に乗れるなんて滅多にないといつて満喫しきっていた与謝野は三日ほどで飽いてしまったのか、外の景色も観ずに腕を組んで目を閉じている。宮沢もまたはじめの方は歌を唄ったり、天井が開いて風が舞い込むのに歓声を上げたりしていたけれども、絵画を乗せた帰り道では湿度と温度の管理のため窓も開けられない。ここ数日の帰り道は、すっかり座席に背中を寄りかからせ、麦帽子を顔に乗せるなり、すやすよと寝息を吐いている。

睡魔が這い寄る午後の日差し。車のなかは、絵画のためだけに空調機器を稼働させているため、人間にとつては特別暑くもなければ寒くもない。もつというと、適度な湿度があつて、涼しくもない。車のなかの停滞した空気に、ひと仕事終えつつあること、そしてここ数日間の疲れと共に、ため息をつくように目を閉じていた。

夏梅はというと、故郷の海を思い出すように、外を眺めていた。

潮の音が聞こえなくとも、夏梅の耳には車窓を隔てた先からその音が届いているように感じられた。

ふと——この反対側へと目をやった時だった。

「——あ、」

窓に手をつき、夏梅は運転してくれている茨木へと声をかける。声を上げた瞬間、今まで起きていたかのように与謝野と宮沢が目を開くが、夏梅が指さす方を確認して、表情を緩めた。

太宰は黙ったまま、絵画を抱えて階段を下りる。今回の絵画は比較

的小きなものだ。とは云っても、額縁を含めたら3kgはあるだろうが。このまま次の絵を取りに行くことができないこともない、そんな大ききさだ。

この絵を抱えたまま次の目的^{ポイント}地まで行くか、それとも一旦、絵画蔵に置きに行くか考えながら通りまで出ると、どこからか夏梅の声がした、「おとうさん！」

そんな筈はない、そうは思いながらも首を巡らすと、郊外方面から走って来る一台の車——黒光りする高級車の窓が開き、夏梅が身を乗り出していた。

「危ないぞ、夏梅っ」

その声が届いたかはわからないが、夏梅は車に身を引つ込め、高級車は売り物件の脇にある駐車スペースに停まった。そして重々しい車の扉を開き、夏梅が降りて来た。絵画の移動の経路^{ルート}と被ったのだろう。私は太宰に声をかけようと振り返ったが、太宰はぼんやりとした表情で眺めていた。

「……夏梅くん？」

「ああ、太宰。どうやら、絵の回収の帰りらしい。丁度いい。見つけたその絵も持って行ってもらおう」

私は太宰の抱える額縁へと目をやった。

車の進行方向は、他の絵画を収めている蔵がある方角と同じだった。

夏梅が走り寄ってくる。その後ろで、同じ高級車からは、与謝野と宮沢も出てくる。

幼い夏梅は、私の脚に飛びついてきた。

「お母さんの絵、あつた？」

「ああ、あつたぞ。お前は絵を回収できたんだな？」

「うん。あ、太宰さんが持つてるものが……？」

夏梅は離れたところで立ちすくんでいる太宰の方を向いたかと思うと、少し顔色を変えて駆けて行った。

太宰の腕を飛び跳ねてつかみ、ずらして絵を覗き込んでいた。

我が子にしては強引な行動だった。

「…………ちがう、これじゃない」

夏梅は安堵したようにつぶやく。

「もう…………太宰さん、なんか困ったみたいなの顔してたからへんな心配しちゃったよ」

「——なんだ、知ってる絵があるのか？」

「違うよ。ちがうから。別にそんなんじゃないし」

…………反抗期だろうか。顔を覗き込もうとすると、首をそらされた。

果ては、太宰の影に隠れるようにして逃げられる。

「そうか。ならいいんだが…………」

夏梅は顔をそらしたまま、太宰の脚に張り付いた。

ぶつきらぼうに頬を膨らませると、太宰の腕をぺちりと叩いた。

「この絵、茨木さんたちに預けて仕舞ってもらおうように頼んでおいたから。——お父さんたち、次の絵を探しに行くんでしょ。僕もついでに行くから」

私は目を丸くする。じつと夏梅の横顔を見据えてみたが、視線を嫌がり太宰の脚に顔をくつつけた。こうした——顔も覗たくないと云った様子なので、てつきりすぐ帰るのかと思ったが、どうやらついてくるらしいと分かったからだ。子ども心というのは捉え処がない。…………誰の心も完全に理解することなどはできないのだろうか。

「絵の…………運搬についてはその心算だったから正直助かる。また戻って出てくるのも面倒だしな。…………だが、夏梅。お前が着いてくると云っても、お前には別の仕事があるだろう。あと移動が必要な絵はどれだけ残っているんだ？」

「もうこれで終わり。だから、与謝野先生も賢治おにいさんもいいって云ってくれたよ」

尖った声を出す。よほど腹の虫の居所が悪いのだろう。

こうした時は嵐がやって来たとも思っ、あまり干渉しないのが一番だ。

それにしても十七点もの作品を回収し、その運搬全ても今完了するところだという。実に優秀だ。少々親バカの気分浸っていると、今

まで黙り込んでいた太宰が、生気の抜けた声で疑問を口にする。

「織田作、夏梅くんも連れていくつもりかい？」

「ああ。別に、危険でもないし構わないだろう？」

「いけないの？」

夏梅はじつと太宰を見上げる。太宰は静かにそれを見返していた。しばらく両者の視線が交差し、折れたのは太宰のほうだった。

太宰相手に一步も引かない態度を取る、我が子の太々しさを注意すべきか。

「判ったよ。きみがそこまで云うのならね」

「お前はここで帰ってもいいんだぞ、太宰。このところずっと具合が悪いんじゃないのか」

「そうなの……？」

夏梅が気づかわしげな表情で見上げる。幼くなったせいか、とても大きな目が印象に残る。

対する、太宰はうつむいていて表情がうかがい知れない。その表情を観れるとしたら、目線がはるかに下にある夏梅だけだろう。

「寧ろ、具合が悪くなって然るべきなのは、私ではないのだけれどね」顔をあげたとき、そこにはいつもの太宰がいた。

包帯の巻かれた首をかしげつつ微笑む。

「私はいたって元気だよ」

「そんなに包帯まみれなのに？」

我が子が鋭い質問を投げた。

絵画を抱える腕の包帯をほごうとしているのが解った。……常々、包帯の下を見てみたいと口にしていた我が子の行動力に、目が回りそうだ。

太宰は重々しく答えた。

「これはね、私の体の一部なのだよ」

「そうなの!?! ……そうなの?」

電柵に触れた猫のようにびくりと包帯から手を離れた。

しかし、その声音を若干変えて夏梅が眉根を寄せる。

その頭をくしゃくしゃと撫でた。人を思いやれる優しい子どもに

育つてくれて誇らしい。

「却説——次はどんな悪夢を見せてくれるのだろうか？　まあ……見当が、付かないわけではないけれど」

「次の目的地のことを云っているのか？」

持っていた地図を開いて、次の目的地を探す。その傍らで、夏梅が宮沢を呼び、太宰の腕にあつた絵画を運んでもらうように頼んで、絵画が車へと運ばれていく。残り二点だが、どうやら次の地点が最終地点らしい。

「ここだ。森——いや、雑木林か？　緑に囲まれた一軒家だな。ちよつと大きめだ。どこかの邸宅なのかもしれない。行きはそうだな、夏梅もいるし、タクシーを使うか」

車のエンジン音が聞こえた。

探偵社の同僚と妻の絵画を乗せた高級車が走り去っていく。夏梅は大きく手を振って、それを見送っている。

私は、友人へと顔を向けた。

「じゃあ、行くか。太宰」

タクシーの運転手のおじさんは、白い手袋をしていて、木目が美しいハンドルを握っていた。地図を持っている父が助手席に、そして後部座席には太宰と夏梅が座っている。運転手のおじさんはとてもおしゃべりで、父を相手に話しかけている。

「お客さん、その屋敷に行くんですか」

「はい」

父は短くうなずいた。

会話がぶつ切りになりそうだなと夏梅は思っていたけれども、運転手は手強かった。

「あんな辺鄙なところにいったい何しに行くんです？——ああ、いやいや、詮索しようってんじゃないんですがね、あの屋敷は人が住まなくなつて長いんですが、一度火事になつたんですよ。だから、子どもさん連れていくようなところじゃないなつてことを言いたかつたんです」

「火事に？」

夏梅はちよつと首を伸ばした。

もちろん、絵というのは紙に描いたものなので、とても燃えやすい。

「絵、無事かな？」

「悪さをする連中が屯してなければ無事だろう。人が寄り付くような場所でもないし」

父と話をしていると、運転手が話しかけてきた。

「お客さん、何か忘れものでもしたんです？」

「うーん、そんな感じですよ」

夏梅は、事情の説明に困つて曖昧に頷いた。

運転手にとつてはそれでもよかつたようだった。

「そうですね。なら、きつと大丈夫だと思いますよ。私は横浜でタクシードライバー運転手をしていて長いんですがね、その屋敷までお客さんに乗せていったのは、あなた方と女の子の学生の二回だけですよ」

「女の子？ 一人だけで？」

運転手は頷く、「ええそうですよ。もう……そうですね、四年ぐらい前でしょうかねえ」

隣で、太宰が顔をあげた。少しは元気になつたのだろうか。

「あの時の学生のお客さんは、今ではさぞ素敵な大人の女性になつて
いることでしょう」

「ふうん……？」

学生と分かつたのは制服でも来ていたのだろうか。

それにしても、学生の女の子がそこで何の用があつたのだろうか。

「ああ、でもその時のお客さんはね、その屋敷に行こうとしたんじゃないんです。さつき話した火事の話、実は、通報したの、私なんですよ」
「へえー。その時、近くを通つてたの？」

「そうなんですよ。その時のお客さんはね、横浜では見かけない制服を着ていて、雰囲気も『アツこの子は他所から来たんだな』って分かるような子でしてね。何か理由があつて横浜へ来たんでしようが。とても大きな旅行鞆を持っていましたよ。女の子ひとりで引越してきたのかもしれないね」

運転手は海沿いの道から、木々が見える道へと入っていく。

「駅から拾ってきて、でもあんまり引越し先に早く行きたくなくなつたんでしよう。行き先を聞いても、あまり口にしないでね。……今思えば、横浜に来たばかりで地名も、引越し先ぐらいしか分からなかつたんでしよう。けど、私は横浜のことを好きになつてもらいたくて、今みたいに色々話をしてたんです。まあ、性分でもありますが」
運転手は恥ずかしそうに笑う。

「それで彼女は、さつき通つてきた、海が見えるところでちよつと反応したんです。私は長く色んなお客さんを乗せてきましたからね、『ああ、この子はもしかしたら海が見えるところから来たのかもしれない』って思いました。だから、ちよつと表情の硬いお嬢さんでしたから、喜んでほしくて海の見える道、海沿いから続く今走っているこの道を運転していったんです。……実はその時、寄り道分のお代を頂かない心算でした」

「どうして？」

夏梅は運転手のおじさんの話に夢中になっていた。

いつの間にか座席に張り付くようにして、尋ねていた。

仕事をしていたのに、お金をもらおうとしない理由は何だろうと。

「恥ずかしながら、私には長年別れた妻と娘がいるんですが、事情があつてずつと会えていませんでね。同じくらいの年頃のお嬢さんだなどと思つたら、明るくない表情が妙にかかりまして……まあ、私の娘は、私の顔に似てしまつていて、あの時のお嬢さんくらい目を見張る別嬪さんという訳でもなかつたんですが愛嬌のある娘です……娘恋しさもあつたのでしよう。そのお嬢さんが、今の坊やのように外の海を眺めている間は、悩みも忘れた表情になつてましてね。調子に乗つて、ここまで……そこで煙が見えたんですよ。ここら辺で建物

と云えば、あのお屋敷しかありませんからね」

「消防車を呼んだんだ？」

ええ、と運転手は穏やかに頷いた。

夏梅は席に座り直した。

「火は消えたのかな」

「消防車が到着したところには、すべてが燃えてしまった後だったようです。私は通報した後、お嬢さんを連れて、云われた通り、指定された場所から少し離れた公園で降ろしました。きつと歩いて気持ち悪く落ち着けたかったのでしょうかね」

「そっか……」

人にはそれぞれ事情を抱えている。

何年も前に夏梅たちと同じ道を、同じタクシートの運転手に連れられてやって来た女の子にも事情が合つてここまでやって来た。その時のタクシートの運転手のおじさんも、事情を抱えていた。

こうして聞いてみなければ、知らなかったこと事実——それは父の寝物語を聞いているような心地だった。

タクシーが停まる。そこは雑木林が広がっている。

よく見ると、道もあった。それは一本道だ。

「さあ、ここですよ。屋敷までは車が入れませんので、歩きで行つてもらわなくちゃならないんです。ここは他のタクシーも来ませんから、ここで待つとります。忘れ物を持って来たら、またこっちに戻つてきてください」

「助かります」

何も言わずに降りる太宰、そして礼を述べて扉を閉める父。

運転手は片手を上げることで応えていた。

夏梅は、運転席のドアのところに行つて、話しかけた。

「おじさん、さっきのお話も有難う」

「なんだか不思議な話でしょう？」

「うん。あのね、その女の子は、おじさんが運転手で良かったって思ったよ、きつとね」

「坊やにそう言ってもらえると嬉しいねえ」

運転手は目深にかぶっている帽子のつばをずらすと、眉をあげた。
「おや」

運転手は皺の深い顔に、しゃべり口調からは想像もつかないほど穏やかで落ち着いた目をしていた。そこが笑顔になると、深いしわが刻まれる。よく日に焼けた顔だ。来る日も来る日も運転してきたんだろうなどと、ずっとずっと働き続けて来たんだろうなどと夏梅に感じさせる顔だった。

「なんだかねえ、坊やは——あの時のお客さんのお嬢さんに似てる気がするんだよ」

不思議だねえ、と運転手は呟いた。

緑の黒髪

最後の絵を洋館の廃墟から回収し終えた夏梅と太宰は砂埃にまみれていて、双子のように咳き込んでいた。犯人もここに最後に来ることを見越していたのか、捻くれた仕掛けをしていた。凝った謎かけを解読しようと躍起になる友人と我が子に加わることができず、壁際にもたれかかって待ち——ようやく見つかった絵は二枚。これで十六枚。夏梅の絵と合わせて、合計三十三点。

四日目にしてようやくの完遂だった。

絵画蔵に預けて、やっとの解散——

五日後には、亡き妻の個展が開かれる。

中島と泉は無事なのだろうか。

いまだ状況の進展は見られず。

?? ? ?? ?

横浜での住居は1LDKの一室だ。広めの居間のほかに一室あり、そこは寝室としている。友人が泊まりに来るときは、居間の細々とした家具やら転がった積木、高等教育の生物学の教本、漢字やひらがな練習の雑記、執筆用の原稿とペンなどを乗せたローテーブル卓を隅に寄せて雑魚寝したりもする。

頭を拭きながら脱衣所を出ると、廊下に転々と濡れた足跡が続いているのを見つけた。足跡は、最近ようやくと見慣れるようになった大きさ——さて、犯人は誰か。

腹にまで届く髪を一つに束ねつつ、肩にタオルを掛けて足跡を避けつつ辿っていく。

居間へと続く扉を開けると、先に風呂からあがっていた夏梅が背伸

びしていた。膝までの丈の下衣から伸びた脚は細く、日焼けはない。爪を立てるように素足をつま先立ちにさせ、食卓の上に乗せたコップに苦心して牛乳を注いでいる。毛先が触れる肩は濡れていて、頭を拭いていないのは明白だ。

「なっ……」

言葉を掛けようにも、我が子のあまりに真剣な姿を見守ること、数十秒。結局私は黙って踵を返し、首にかけているタオルとは別に新しい物を洗面所から持ってくる、ひと段落着いたらしく満足げな夏梅の頭に被せた。

「ちゃんと頭を拭け。乾かさないと風邪をひくぞ」

「ひいたことないもん、風邪。……おとうさんがいつも乾かしてくれるからねー」

夏梅が水の入ったグラスを手渡してくるので、片手で受け取った。

推定、水道水。冷蔵庫にミネラルウォーターはない。

ただ、酒盛り用のグラスに入っている。

「きちんと乾かさないと、お化けが背中に張り付いて風邪をひかせに来るんだぞ」

「……………そんなの嘘っぱちだよ……………」

夏梅は両手でコップを持ち微動だにしないまま、目だけを慌ただしく動かした。部屋の隅から隅までの影を確認する動きに、しばらく黙った後、私は冗談だと白状した。

「ほらー、知ってたもんね」

夏梅はあははと硬い笑い声を響かせた後、沈黙——血色の戻った顔をして唇を尖らせ、ふんと鼻を鳴らす。そして、自分では一切タオルに触れないまま、コップに口をつけて豪快にあおる。当たり前のことだが、その動きに頭に被せていたタオルはずれ落ちるので——腕を伸ばして宙でつかんだ。見れば、既にぱたりぱたりと滴り落ちた水滴が床を濡らしていた。これは放っておいても夏梅に踏まれず、無事に乾くだろうか。

私は結末の予想できない水滴の行く末より、気になることを尋ねることにした。

「湯上りに牛乳だなんて、どこで覚えたんだ？」

零れかけたグラスに口をつけながら尋ねる。

あまりに定番の組み合わせだが、夏梅の周囲でそんな習慣のある人物は私を含めいない筈だった。きつと誰かが教えたのだろうかとは思ったが、これといってこの人物という確証は持てなかった。

しかし、食卓の上にコップを戻した夏梅の口から出てきたのは、私のあまりよく知らない人物たちの話だった。

「前の学校の友だちで、背が伸びないって云ってる子がいたんだー」

「その相手は背が低かったのか？」

「僕よりちよつと低いだけだったよ」

私の視線が、夏梅の頭上に行くのに気付いたのか、慌てたように付け足す。

「ちよつと前の僕の身長だよ！」

「お前は、それなりに背はあったんだったか。その相手はどのくらい低かったんだ？」

記憶は定かではないが、夏梅は中島よりは低く、江戸川よりは高かった気がする。

夏梅は首を傾げた。

「うーん、8糶センチくらいだったかな？ 女子の三谷と同じくらいだった」

「そうか……」

知らない名前が増えた。どうやら今まで出てきたのは同性の友人であったようだ。異性の生徒とも交友があったのだろうかという事を知り、感慨深くなった。同級生だろうか。

「それでね、その背が低い泉田に、寝る前に牛乳飲んだらいいって安井が教えてたのを思い出したんだー」

成程、と頷きかけて、私は首を傾げた。

つまり、だ。

「夏梅は、背を伸ばしたいのか？」

こういうと不謹慎かもしれないが、夏梅の今の身長も過去の身長も、そういつた食事で何とかするよりもずっと手っ取り早く効果があ

る。今の姿とて、実年齢と比べれば、ずっと成長している姿だ。

「特には」

「……そうなのか？」

明確な理由などないのだろう。私は追及をやめ、長椅子ソファに腰かけ、間に夏梅を座らせた。掴んだタオルで粗方の水分を拭く。髪は長くないため、すぐにドライヤーで数分もすれば乾く。

「……うーん、暇だからかな。強いて云えば」

夏梅はここのところ随分と忙しかったように思うのだが、本人からしてみればそうではないのかもしれない。若さ溢れる子どもと、生い先が見え始めた大人とでは、感覚が違うのかもしれない。

「なんか、今日お父さんと太宰さんと絵を取りに行ったけど、なんかあんまり……なんていうか、何にも起きなかった……よね？　いつもあだったりするの……？」

「いや、今日が特に何もなかったただけだな。他の日は、それなりに色々あったぞ」

「どんなこと？」

私は少し考えた。まず、廃楼閣ビルの裏口の取っ手を回した瞬間に仕掛けられていたらしい爆弾に出迎えられた——危ないところで、取っ手に触れず、太宰を外に待たせてから便所の窓から迂回し、爆弾の解除を終えるという作業だったり、絵の隠し部屋の前の屋上で待ち構えていた猟奇的殺人鬼の相手をさせられたりしたが、おおむね順調だった。

「順調ってなんだったつけ……？　そこにいた人が、絵をとつちやつた人なの？」

いや、と私は口で否定した。一見ただけで分かる。その場にいた殺人鬼は、芸術に関心を示す人間には——少なくとも絵画を好む人間には見えなかった。夏梅の協力者である、蒐集家の面々と話をすればそれは顕著に知れた。口にする言葉からして違う。それは興味深い事だった。

彼らは揃って知的であり、孤独を好んでいる節がある。……子どもは好きなのかもしれない。夏梅の計画には快く協力しているよう

だった。

これまでの段階で何度も考えたことだ。幾つもの回収場所に足を運んだが、絵を強奪した人物は影すら一向に見えてこない。どういった人物で、どういった思想の持ち主なのか、男なのか女なのか、複数犯なのか単独犯なのか。

「そこにいた奴は、ここ数年にわたって起きた複数の強盗、殺人に関わった犯人らしい。廃楼閣ビブルには『ここにお前の獲物が一人でやって来る』と云われたらしく、数日間潜伏していたとのことだが……まあ、麻薬中毒の状態だったから、人に云われたというのも幻聴かもしれないが」

「……………その人、誰にそんなこと云われたのか詳しく訊いた？」

「太宰が吐かせた情報によると、見慣れぬ異国人だったらしい」

夏梅が振り返った。乾いた髪がふわりと宙に滞空する。その軌跡を目で追いながら、今度は自分の髪を乾かす。長いばかりで艶はなく、手間はかかるし、見苦しいばかりだ。だが、切ろうとは思えなかった。

「外国の人？ ギルドの人、じゃないよね？」

「ギルドの連中ならば、もっと分かり易く意味のある行動をするだろう。犯人は捕まり、そこで打ち止めだ。これが相手側の計略であるなら、連中の先手を打って潰すのに骨は折れないだろうな」

「……………つまり、ギルドの人じゃないってことだよな？」

猟奇的殺人鬼は、太宰に踊らされ、薄い紙のように軽くなった舌で辺りに唾を撒き散らしながら今まで犯してきた罪状の数々を披露した。極度の興奮状態にあり、一目見て正気ではないことは明らかであり、打ちつばなしのコンクリートの床に転がる注射器や広がった瞳孔から直前まで何をしていたのか想像するのは明日の天気を当てるより容易い事だろう。標的の選別から、家屋の浸入方法、実行の手順など事細かに白状した後、高笑い。乾いた拍手でもって注意を引いた太宰が外套のポケットからスマホを取り出し、通話中の画面を見せる。警察への通話状態を維持されていたことを悟った犯人が逆上、しかしすでに現場へ急行してきた警察官に取り押さえられ逮捕。

「異能力者ではなかったからな。俺たちは手を加えていない」

「へえ……」

警察と殺人鬼が去った後に、塔^{ベントハウス}屋のなかの、配管の中身が取り除かれた空間にきっちりと防水シートで覆われた絵画を回収した。

「絵は無事だった。不思議と云えば、云い方は悪いかもしれないが、爆弾が仕掛けられていたところでも、麻薬中毒の殺人鬼が暴れまわるよなところでも、絵だけは別室に置かれたり、金庫のなかに入れられたりしていて、嚴重に保管されていた。……その点は妙だとは思ったな。相手は何をしたいのか、何を望んでいるのか全く見当もつかん」

「お父さんはそうやって考えるのを諦めるのが早いよね」

夏梅は膝に肘をつき、両手を組んだ上に顎を乗せた。
猫が理性を持てば、このような目で人間たちを見上げるのかもしれない。

凡人の思考より経験に基づく直感の方が当てになることも多い。

非凡な頭脳でもあればよかったのだろうが。

「考えても分からんものは分からんからな。そういうのは乱歩さんか太宰に任せた」

「……物は言いようだね。他には？」

「似たり寄ったりだがな。ああ、ただ、関係してるかは判らないが、目的^ル地へ車で行く途中で事故に遭いかけた」

工事中の看板が掲げられたところを迂回した進行^{ルート}経路上に仕掛けられた地雷——ブレーキをかけて避けることは可能だったが、後から続く何も知らない市民の車に被害が及ぶと推測されたため、進行を塞ぐように車を横向きに急停車したため後ろの車が突っ込んできて乗っていた車は損壊。すぐに太宰と逃げ出したが、玉突き事故になり乗っていた車は前に押され地雷を踏んで吹っ飛んだ。保険会社から保険が降りるらしいので不幸中の幸いだろう。

「太宰が出ている表示が可笑しいと云わなければ、ブレーキも間に合わなかったかもしれない」

「それって死にそうになったっていうんじゃない……？」

その点については問題はない。

問題になったのは、別のことだ。

「ギリギリ間に合う速度だったからな。だが、シートベルトを外すのに手間取ったときは、もう駄目かと思った。太宰はシートベルトを締めていなくて、脱出もスムーズだった。これからは俺もそうしようかと思う」

「うしろの席に座ってね」

夏梅が長い息を吐く。幼いのに実に深いため息をする。

俯くので、細く白い項が見えた。

この子は将来苦労性になりそうな気がしてならない。

「太宰さんがいてくれてよかった。まあ、なんだかんだ、大丈夫なんだろうけど。……それでお父さんたち、今日は車に乗ってなかったんだね」

夏梅は呆れたような口調で上向き、その眉を顰める。

神経質そうな動きで瞬きしながら、重く口を開いた。

「色々、危なかったね」

「ああ。それと、工事中の表示は偽物だったらしく、他の被害者も保険は適用されるようだ」

「……別に保険が降りるかどうかが危なかったっていう意味じゃなかったんだけど……よかったね」

夏梅は長椅子の上で抱えていた両足を放し、床に届かないそれらをぶらつかせた。

「で……それだけ？　なんか、こう、ひっかけ、みたいななかった？」

夏梅の言葉は抽象的だ。語彙が少ないというのもあるかもしれない。

だが、生後三年にしては上出来ではないだろうか。

「建物の中に入ったら停電になった場所があつてな。窓が一つもないのか真っ暗だった。その入り口の前にライターが落ちていたんで、火をつけて灯りにしようと思ったら、中に瓦斯が充満していて、爆発するところだった——こういうことか？」

「それよく無事だったね」

「異能を使ったからな。ちなみに、絵は外の郵便受けポストの中にあつた」

「そうなんだ……じゃなくて！ 謎かけみたいのはなかったの？」

夏梅は怪訝そうに尋ねてくる。自分の乾かし終わった髪を、一本に編んでいく。こうしている間は、単調な指先の作業により思考が落ち着く——基もと、余計なことを考えずに済む。それに編み込んでいくことで、単純に長さが短くなるのだ。日々繰り返しているため、職人のように速度も速くなる。

「謎かけ……暗証番号を中あてなければならぬ場面はあったな」

江戸川の地図によると、絵がある地点のうちの一つは、裏社会にかつて存在していたある組織の首領ボスの一家が住んでいたが、全員が次々に不審死を遂げ、後に移り住んだ住民たちも原因不明の病により急死したという曰くつきの空き物件だった。そこでその物件を管轄している仲介業者である不動産に、購入を考えていると出まかせを云い鍵を受け取り、太宰が見取り図を貰って潜入した先で、設計図にはない地下室から毒瓦斯が発生していたことに気付かなかった。

「地下室があつたなんてどうしてわかつたの？」

「なんとなく……気になった床板があつた」

「へえ……」

ちなみに絵は書斎の金庫の中にあり、暗証番号は太宰が推理して当てたため、比較的楽に入手することができた。地下室の毒瓦斯は、組織の現役時代に海外から取り寄せたらしい薬品やら火薬やらを、人間の出入りが無くなったため閉ざされた地下室の中で取り残された鼠が食み、死んだものが腐り、発生した瓦斯が火薬や薬品と化学反応を起こして人体に有毒な瓦斯となり、建物の中を充満していたものだと判った。

語って聞かせたが、夏梅が求めている内容ではなかったようだ。

「うーん……そういうんじゃなくて、何か、変な紙とか落ちてたり、貼つてあつたりとかー、なかった？」

「紙——？ 心当たりはないが」

「んーならいいや」

夏梅は興味なさげに、顎をそらすと、落ちかけていた生物学の教本を膝にのせて眺め始めた。後ろから覗いたが、写真が多く、文字を讀

まなくても絵本のように楽しめるのかもしれない。

???

???

かみはみどりのくろ。ながれるすみのようになめらかだった。

ひとみはこいかつしよく。しめったつちのようにおちつくいろ。

そらを見あげ、ながれるくもをおつて、あなたははしる。

はだはあおぎめたしろ。いつもへやにこもつていたのね。あなたのはだはわたしとわたしたちとだいすきなうみべをあるき、たいようにあいされたまなつのいろをしていたのにね。ここはいやなところだわ。

めじりはまっかつか。かなしいことがあったのかしら。わたしがそばにいるわ。わたしたちがそばにいくわ。……どうしてわたしたちをみないのかしら？

そのてはとでもつめたかった——いいえちがう、わたしのからだがあつかった？

きつとそうね、だつてわたしたちはあなたのことをごだいすきなのだから。

あなたのりょうてがわたしのくびにそえられる。

あなたはうつくしい。うつくしいかみがとばりのようにおちてきて、ひかりをさえぎり、ぬれたじめんのようになじむひとみにみおろされ、みずのまくがはってしんぴてきなめじりのあかはくちづけたいほどにあなたのいろをしていた。ねえ、わたしたちのことばはとどいてる——？

もっとみたい。もっといたい。もっともつとちかづきたい。あなたのそばに。

あなたをみつけるとわたしたちのむねはたかかった。わたしはあなたが好きだった。わたしたちはみんなあなたが好きよ？ わたしたちのめはいつもあなたをおってしまふ。みつからないのはふゆかいよ。でもみつけたわ、どのくらいじかんがたつたかしら。わからないわ。でもいいの。あなたはいい。おもいにじかんはかんけいなのよって。ねえ、なんてすてきなことば。でもあなたがいうから。いっとうすてきな。あなたのことばはわたしをいかしてくれない。みつけれなくなつても、だいじょうぶ。とだえたりなんてさせないわ。わたしたちがあなたをえいえんにするの。だからあなたはえいえんなのよ。

ねえ、あいたいわ。わたしたちはあなたのことがだいすきな。みつけたわ、あなたのカケラ。

わたしたちはあなたたちのことがいっとうだいすきな。

無理危ない

「パニック」という語源は、ギリシャ神話の牧神パンに由来するといふ。山羊の脚を持ち、頭に二つの角を生やしていた。彼がひとたび叫び声をあげると、周りは恐怖に満たされる——という。

悲鳴が聞こえた。逃げ惑う人々行き交う道々のどこを向いても、悲鳴が聞こえる。夏梅は探偵社のなかにいた。外には出るなど言われた。硝子窓の外をみれば、人通りは少ないのに、悲鳴が聞こえる。どの建物の中からも。

「童よ。ここから見える外はせかいどうじゃ」

「心配。大丈夫かなって」

「童は優しいのう」

夏梅の腹の前には、あでやかな和装に身を包んだ女の人の腕が回っている。外そうとしても外せそうにない。片腕は腹に回され、片手は夏梅の頭に置かれている。指先に至るまでの所作がとても洗練されており、夏梅は何とはなしに目がつられた。

彼女はポートマフィアの幹部、尾崎紅葉。

人見知りである夏梅は、目を窓の外へと再び戻した。

探偵社から見える景色は、いつもと同じようできて、全く違う。

夏梅が感じることはとつてもシンプルだ。

「そんなんじゃないよ」

きつと正解なんてないはずなのに、褒めるように頭を撫でてくる尾崎の手を避けるように俯く。

夏梅は、夏梅の知っている人の無事が心配なだけだ。

「その幼さで、『優しい』という言葉を受け入れぬとは、聡過ぎるのも考えものじゃの」

「……叱られてるの?」

夏梅は——叱られるのはきらいだ。

父は叱るとき本当に怒っているのかどうかわからないことが多いから平気だ。大叔父はいつも怖い顔をしているから別にいい。でも……夏梅を可哀想な子を見るような目で駄目だと諭してくるような人は、大きらいだ。この人はそうなのだろうかと静かな口調に、夏梅は眉をしかめた。

「私が叱るときは怖いぞ。大の男が、尾を刻まれた野鼠のように地べたを跳ね回り、最期は這い蹲って哭いて赦しを乞うほどよ。……それにしても私の口から優しい、か。どれほど振りじゃ、このような言葉を口にするのは。はてきて、無垢な幼子にどう説明したものか」

尾崎は、紅を引いた薄い唇を噛み、悩むように眉間にしわを寄せる。そして、何かを思いついたのか、夏梅を見下ろした。

「童に分かり易く云う前に確認じゃ——『優しい』という字がどう書くかわかるか？」

夏梅はちよつと視線をさまよわせた。

尾崎はふふつと笑って瞳を閉じ、和歌でも謳いあげるように諳んじた。

『「人」を『憂う』と書くのじゃ。……『憂う』というのはの、無力な己を知ることじゃ。世に諦観しつつも、決して己の手には届かぬものを想い続けること。——童の言葉を借りれば、想い患い、心配する。想い過ぎて病を得たような有り様になる——どうじゃ、そなたのことではないか？』

「心配しすぎの……病気？　それが『優しい』？」

ころころと鈴が鳴るような声が出た。

夏梅は真剣であるのにと、じと目で睨むと、尾崎は目尻に浮いた涙をぬぐうところだった。

「私の言葉からそう解釈したか。ほんに面白いのう。童と話すのは、癖になりそうじゃ」

「もう——」

「駄目じゃ。止めよ、やめよ。そうむくれて睨んでくれるな、愛いやつめ、全く愛いだけじゃからな」

ひとしきり笑うと気が済んだように落ち着いたようだった。

……大人はみんな勝手だ。

はあ、と息をついた尾崎は切れ長の目尻をほんの少し緩ませた。

「——そうか、心配し過ぎの病か。成程、不思議と趣があつて好し」
納得はいかないけれども、尾崎の言葉の分かり易い部分だけをくみ取り、尾崎ははつきりと明言しないので、夏梅は曖昧に頷いた。すると、賢いの、と尾崎はあでやかな袖を、口許に当てる。空気が震えるだけで、笑った、と夏梅は判らなかつた。つい、とその瞳が窓の空へと向かう。

「——うん？ おや……あの小僧め、大した度胸じゃ。ほんに脱出しおつたわ」

脱出と聞いて、夏梅は顔をあげる。蒼い空から降りてくる白い影。遠すぎて夏梅の目には見えないが、きつと中島だ。

「おお、パラシュートを破かれたな」

「えっ 敦おにいさん!？」

窓の棧を掴んで、爪先立つ。

何とか顎をあげてみようとしたが、見えない。

すると、後ろに立っていた尾崎が脇の下に手を入れ、持ち上げてくれた。

「あ、ありがとう、おねえさん……」

眺めに切りそろえられた前髪で隠され、片側だけになつている目をほそめ、陰に融けこみそうな密やかさで微笑む。礼には及ばん、と。拒まれたのかと思つたけれども、夏梅は、これがこの女の人なりの『どういたしました』なのかなと思つた。

「のう、童よ。……その眼にこの世界はどう映る?」

陰りの中に咲いた鈴蘭のような人だった。薄暗がりから見下ろしてくるその眼差しを受け、夏梅は今聞いた『優しい』の言葉が一番似あうのは、この人な気がした。

?? ? ?? ?

「敦お兄さん!」

「あ——夏梅くんっ」

若白髪の散切り。斜めの前髪という特徴な髪形をしている中島へと、夏梅は駆け寄った。心配していた。父のことを心配もしていたけれど、父はおそらく平気だと思っていたから、本当に心配していたのだ。——引け目もあった。夏梅は中島の救出には何の手助けもできていない。

だのに中島は、夏梅の顔を見て本当に心配していたという顔で振り返った。

「大丈夫だったかい!? 怪我してない? 斬られてない? 滅多打ちにされてない? 言葉の暴力は受けてない???」

「——え? あ、うんえ、え?」

名前予備からの開口一番の質疑の数々に夏梅は困惑する。

見るも痛々しいボロボロの状態の中島は、夏梅の肩に手を乗せて視線を合わせて来た。

「あのポートマフィアの女人ひとの監視を任されてるって太宰さんから聞いたけど! 酷い事されてない!」

あー……、と夏梅は視線を太宰へと向ける。太宰は父の肩に腕を乗せて耳元に顔を近づけ、内緒話しているようだったが、夏梅の目に気付けてにこりと笑い、手を振って来る。——そう、表向きは、夏梅は探偵社で人質のような立場にあるポートマフィアの幹部を監視するという名目で、夏梅を探偵社に取り残したのだ、太宰は。しかし、ふたを開けてみれば、夏梅の方こそ、尾崎によって外へ出ていけないようにと見張られていた。これは謂わば、子守だ。

「だい……だい、じょうぶだよ」

敵の組織の人に子守をされていたなんて白状することは夏梅の幼くとも慎ましく育っている矜持が許さなかった。早く話を変えよう、と夏梅は中島へと顔を向け——ふと、首を傾げた。

空から降ってきた後の中島は、どこか前とは雰囲気違った。

どう違うのかは言葉にできないのだが。

「敦くん、打ち合わせをしよう」

「あ、はい。太宰さん」

夏梅は中島の袖を思わず引いてしまった。振り返って首をかしげる中島に、ちよつと慌てた。無意識だった。父と太宰もこちらへ来るのが見えた。何か言わないか、と思つて、夏梅はうろろと会話のとっかかりを探し、咄嗟に質問した。

「あの、何の打ち合わせ……？」

ああ——と中島は頷く。

会話が聞こえていたらしい父も、太宰へと視線を向け、不思議そうな顔で中島を見遣る。父も知らないらしい。

「ポートマフィアと手を組むことを社長に提案したんだ」

「そうそ、敦くんに最初聞かされたときはほんとに驚かされたよー」

太宰の言葉が耳を素通りする。

首をかしげていた父も、夏梅もぎよつとして口を閉じていた。

大叔父と中島とはその件について既に話し終わったところらしい。

そして明日の昼には、ポートマフィアと探偵社が密会し、同盟を結ぼうと持ち掛けるのだという。

「いや、それは無理だろう」

「いや、それは無理でしょう」

父と言葉が被ったが、心配で心配で、続けた。

「危険すぎる」

「だって、危ないよ」

夏梅は父と言ひ募ったが、それでも中島の決意は固いようだった。

「協力するという訳じゃありません。でも、互いに足を引っ張り合わないことはできると思うんです」

「その点さえ保証されれば、探偵社^{ウチ}だけでなんとかなるからね」

太宰が父を見る。その父はきよんとしている。

……この二人は、きちんと意思の伝達ができているのだろうか。

「国外の異能力者たちだったから、情報が手に入らず後手後手に回っ

てしまった。しかし、ギルド単独であれば、織田作ひとりでも殲滅は不可能ではないだろう」

「それは……大いに買い被り過ぎだ太宰」

「私はそうは思わないね。他のみんなだつて同じ意見だろうさ」

突然の重い期待が父にのしかかった。……今、どんな気持ちなのだろう。

ちろりと父の友人であるはずの太宰へと目を向けると、ため息をついているところだった。

太宰の友人でいるのはとても大変そうだと夏梅は思った。

「ただ、問題はその次だよ。織田作が抜けた後、探偵社をポートマフィアに襲われた場合、デیفエンスが心もとない——というより、まあ持たない」

確信した口調だ。それもその筈で、ポートマフィアというのは数が多すぎるのだ。末端はいつたいたいどこまでなのかすら曖昧。それはこの横浜の街と長く密接に関わってきたからだ——とは太宰の言葉だ。「ポートマフィアとの接触はでくるだけ避けたいのだが……そうもいかなくなっていく。だが、せめて、邪魔さえ入らないと約定を取り付けければ、織田作一人でもギルドを殲滅できるだろう」

太宰の言葉に、中島も口を開く。

「この一大事に、互いに争う余裕なんて探偵社にもポートマフィアにもない筈です。この横浜で戦争をするなんてことをどちらも望んでいない」

夏梅は絶句。父は「正気か……」と思わず口を継いで出たようだけれども、中島の表情のなかに何を見たのか、それ以上は反対しなかった。

「お前が決め、太宰が腹をくくり、社長もその意志ならば、俺に云うことはない。手が必要ならば云つてくれ」

「ありがとうございます、織田作さん」

夏梅は太宰へと目を向ける。ポートマフィアが危険な組織であることを説明してくれたのは、太宰だった。きつと中島を止めてくれると思ったが、太宰はにこりと微笑むだけだった。……こうなった

ら、中島のことを助けられるのは、父の精神状態を診てくれる瀬戸の老医である神西しかないのだろうか、とスマホを取り出して、それでも指が右往左往した。

「大丈夫だと思うんだ、夏梅くん」

「敦お兄さん……」

「彼らが横浜の街を思う気持ちは、本物だと、僕は思う」

「想う………?」

「うん……なんか、感覚になっちゃうんだけど」

気弱そうな顔になる中島に、夏梅は首を振った。そういうことではなくて。

想うことは、優しいという言葉につながる。そう夏梅に話して聞かせてくれたポトマフィアの尾崎あの人は、悪い人には見えなかった。夏梅の目で見た印象と、中島の言葉、太宰の言葉。より近いと感じるのは、中島の言葉だった。誰の言葉を信じるのか——あるいは自分の見たものを信じるのか。

「ぼくは……」

夏梅は、スマホから指を離れた。中島の顔を見あげた。初めて会った時より、随分と高い位置にある。

それだからか、夏梅には中島の存在がとても大きく感じられた。

夏梅は——掴んだままだった中島の袖を離れた。

「おい、太宰、敦！早く来ないか！」

国木田が会議室から上半身を傾けて、二人を呼んでいた。なるほど、姿を見ないはずだ。

その後ろから谷崎兄が、「国木田サン、そう急かさなくとも……敦君に至っては脱出したばかりで疲れてる筈ですよ」

「大丈夫です！今行きます——それじゃ」

夏梅の手が外れて、太宰と共に去りかけたとき、中島が立ち止まって振り返った。

「そうだ。お母さんの絵、無事で善かった」

怒らないの、と聞きたかった。でもそれをきくのは、自己満足だと思った。

夏梅は咄嗟にゆがんだ顔をなんとかえがおに替えて、頷いた、「うん——いってらっしゃい」

手を振って見送る。後ろ姿が扉の外に消える。

パタン、と扉が閉まる。

「ごめんなさい、と云わないようにするのがとても難しかった。降ろしかけた手は途中で、父に取られた。父の手のひらは温かった。」

翌日、昼の密会にて——休戦の約定を取り付けた探偵社は、その晩にギルドの団員に囚われていたポートマフィアの『Q』を奪取する。選ばれたのは、夏梅と父と、太宰だった。どうしてと思ったが、父が頭を撫でて来たので、きつと気に病んでいる夏梅のことを知っていて、人選に捻じ込んでくれたのだろう、と夏梅は思っている。

夏梅よりいくつか年上の少年は、起きていたら、もしかしたらおしゃべりができたかもしれない。ポートマフィアにも、小さな子どもがいた。友達になれるかな、と夏梅は父に背負われている夢野久作という少年の手を握った。

その後、何やかんやありながらも、父のおかげで難なく敵を沈黙させることに成功——ちよつと抜けているように見えて、なかなかどうして父はハイスペックだった、いつも通りのことだけれど。

引き渡しにやってきていたポートマフィア側の人に、その子を渡すのは太宰の役目だった。

そして、別に動いていた江戸川と与謝野によって、ギルドの情報が手に入り、探偵社の大きな指針が決められた。

ギルドとの全面对決であり、そして——探偵社の一員である泉鏡花の奪還。

この二つについて、次のように決定した。

まず、ギルドの本拠点である飛行船を叩くこと。これは太宰の言葉通り、父がひとり担当する。またしても太宰の重い期待を背負わされた人がいるわけだ。今度はそれが父ときて、白状すれば、夏梅はちよつぴりグロッキーな気分だった。空ということで、谷崎兄の異能力【細雪】によりヘリコプターを迷彩して飛行船まで父を連れていくという。

そしてついに、鏡花の奪還の交渉に、太宰が動く。

ここで何故か、与謝野ではなく、夏梅が太宰の知り合いの見舞いへ付き添いを頼まれた。太宰が先に病室に入り、夏梅は三十分ほどあとで入室するように言われた。与謝野の出番は交渉の後らしい。

夏梅はいつ太宰がその交渉するのか判らないままだったけれど、太宰に連れ立って病院へと入る。

大量の見舞いの花と果物を両手に、太宰は夏梅に笑いかけた。

『待っていてくれ給えよ。何、すぐ終わるから』

——そう、そこで、夏梅は何の準備もなしに病院に来ていたことに気付くのだ。

見舞いには、花が必要なのに。

夏梅は待合室の長椅子から立ち上がった。

「久しぶりだねえ、安吾。ご機嫌いかがかなー？ 未だ治りきらないその怪我、我が探偵社で治療しようと云ったら、どうする？」

刹那よりも永く

何のために——とある人が問うた。

瞬きをする。

その合間にはもう既に情景は刻々と表情を変えていた。眼前で零れ落ちていくような時を留めたいと願ったから。

私は目を見開く。

過敏になった神経が様々な些末な情報を無差別に拾い上げ、それらを恣意的に関連付けて意味のないでたらめな物語を紡ぎ、脳内の小人たちが姦しく支離滅裂のそれを喚き立てる。情報は主に視覚から。瞳孔は限界まで広がり、血は眼球へと引つ切り無しに送られ、張り詰めた目尻が痙攣する。視界の大部分を占める色彩は大まかにいうと『黒』に分類される色。その中に浮かび上がる物体を観察する。それはゆらゆらと踊っていた。

蠟燭——木蠟から作られた和蠟燭。炎は大きく揺らめき、一定しない。炎の先頭の、細かく裂けたところから生まれた煤が、暗室の闇に融けて消えていく。

陰影の中から気まぐれのように、瞼を閉じた少女の白貌を浮かび上がらせた。薄く開く、血の気の引いた唇は紫に変色し、乾燥によりひび割れ、暗い洞を縁取っている。

制服を装った胸の上で組まれた白い指——そこに生えそろうた爪の先は赤黒い色に染まっていた。

“芸術”は、刹那の一瞬を、それより僅かでも永く世界に留めようとしたところから始まっている。

——…ひ……あ

横たわる少女が作る洞から、空気が漏れた気がした。

生きている——いや、死んでいる？

その場で耳を澄ます。音はない。息を止めて、耳を傾ける。無音だ。しばらく待って、動きだしはしないかと目を細める。動きはない。埒が明かない。大股でそちらに近寄り、見下ろす。大きく揺らめく小さな炎の陰影で、動かない少女の白貌に勝手に表情を見出す。馬鹿馬鹿しい。傍らに膝をつき、顔に掛かる髪を耳の後ろで押さえながら、少女の唇が形作る洞に耳を近づける。何の感触もない。

呻いたと思った。身じろいだと思った。苦悶の表情を作ったと思った。息を漏らしたと思った。——それは幻だった。

留めなければと手を伸ばした一瞬が、そこで息をし損ねた。それは物質になってしまった。

だから私は絵を描いた。

???

「——おっとと。これは失敬」

白い花束と果物籠を抱えたその人物は、大げさに驚いて済まなそうに眉を下げて見せる。

場違いに陽気な声が響いたのは、部下たちが報告をしに病室へ訪れているときだった。外から人が近づいてくることを察知し、早めに口を閉ざした部下たちが警戒し臨戦態勢に入っていた。中は緊迫していたが、何の躊躇もなく開かれた戸に、部下の内の新人の方は身体に力が入り過ぎ、硬直していた。ちらりともう一方の部下がその新人へと視線を向ける。その視線がこちらを仰ぐように向くので、目で制して首を振る。

「止よしなさい。ここはいいから、お前達は指示通り動くように」

寝台の上から退室を促すと、目礼で応えた部下たちは太宰の脇を通り、病室から去っていく。

病室の扉を躊躇なく開くなり、その男は一方的に用件を述べたのであるが——次の瞬間には、中に他の人間もいることにたった今気づい

たかのように、伺うような素振りを見せる。恰も小鳥が首をかしげる様を彷彿とさせる仕草だが、どうしてこうもこの男に似合うのか、中身を知っているだけにこれほど薄気味悪くなるのも中々ない事象だった。

「済まないね。仕事の打ち合わせ中だったかな？」

ため息が零れ、頭痛が酷くなった気がした。

自分が胡乱な目をしているだろうことは自覚している。

「ノックぐらいしたらどうです」

「退屈しているだろう君に、新鮮な驚きサブライズを届けたくてね」

悪びれない態度にため息がまた一つ。

動く方の手で眼鏡の位置を直し、その際に視界に入った手のひらを見る。

改めて自由になる身体の部位の少なさを実感する。湧き上がってきた些末な感慨を握り潰すように拳を固めた。

「――扉の掛札を見なかったのですか？」

扉には仰々しい字体の『面会謝絶』の札が掛かっている筈だ。

人と会うのを避けるためのもの。

太宰は、片目をつぶって見せた。

「無論見たとも！」

元気のいい返答だが、顔面通り見たかどうかを聞きたかったわけではない。

寝台の上で横になって指示するしかない歯がゆい状況と山積みの問題、自己管理の甘さへの自責で、苛立っていた気が緩み、別の意味で頭痛がしてきた。

「……見ただけですか」

「いや、見て判断したとも。つまり私の他に面会者はいないと思ってね？」

つまりこの男にとっては、札は何の効力も持たず、ただの情報の一つにしかないのだった。

「どうやってこの病室に辿りついたのです？」

「我が社に稀代の名探偵がついているのは知っているだろうか？」

目を閉じる。噂に聞く人物。

「——ええ。幾つもの難解な事件を解決へと導いてきたあの御仁ですね」

「そうそう。——けれど、この場所に関しては私が検討をつけた！」

太宰の言葉に、がっくりと肩を落とし半眼で睥睨する。

太宰は視界の中をちよこまかと動き、寝台を迂回するようにして移動し、抱え持っていた見舞いの品々を隣の机に置いた。横目でその動向を監視する、白い花束。総じて色のない花。香りの薄い花。白い花々は気が付けば病室の白い壁に埋没していく。

「身動きできない入院生活はどんなものだい？ 何もかもを白衣の天使にお世話をしてもらえるなんて羨ましい限りだけれど」

「代われるものなら代わってもらいたいものです。骨身が腐ってしまいそうなほどに怠惰な生活ができますよ。最も……貴方に入院の必要はないようですがね」

片目で睨み付けるも、飄々とした男は首をかしげて全く無垢な様を装っている。この男の過去が、乾く間もない血塗られたものと結びつける者が何人いるだろう。

「あの事故のおかげで、連日連夜掛けてもまだ終わらないという仕事量が僕の机の回りに日々堆うずたかくなっているようです。滞っているところではありません。見ての通り、こうして一々部下を呼びつけて指示しなくてはならない始末ですからね」

「それもこの件を君が受け入れたなら、あっという間に解消さ」

「積もりに積もった仕事を片付けるといふ問題まで解決されるわけじゃあないでしょう」

「それは君の仕事だもの、安吾」

仕事——そう、それが自分の仕事だ。選び取った正義。進むべき道。

そこに、かつての友はいない。すべてあの時間、あの場所に置いてきた。

すべては過ぎたことだ。

「ええ、それが私の仕事です」

視線をずらすと、持ち込まれた果物籠が目に入った。色のない花束と違い、見舞いの籠に盛られた林檎の果皮は艶々としている。瑕疵のない甘蕉や網目模様の細かい舐瓜がぎっしりと詰められていた。

色のない花か、果実からか、どちらのものか知れぬ、仄かに甘い香りが混ざり合い病室を漂った。……気分のせいか、瑞々しいはずのそれらに、どこか腐乱したものが鼻腔にとどまるような心地がした——溜め息をつく。

「……それで、見返りにこちらは何を提示すれば？」

「話が早くて助かるよ、安吾。物事はこうしてきりきりさくさく進めなければね？」 却説——実は今、軍警に捕らえている探偵社員ひとりがあるんだが、彼女の解放を頼みたいんだ。何とか取り成してはもらえないだろうか」

軍警察に捕らえられた探偵社員——異能力者で、『彼女』——女性と来れば、該当するのは一名しかいない。そして、解放の手続きというのは特務課であれば可能だ。脳内で換算していると、一つ指が立てられた。視線がそちらへと向かう。

「——そしてもう一点」

言葉を切った男は、傍らの椅子に腰かけた。

包帯の巻かれた両手を、足の間に置く。——武器は持っていないよ
うだ。

こうした確認はもはや職業柄、癖になってしまっていた。

「特務課にギルド攻略の協力を仰ぎたい」

眉間にしわが寄る。

特務課で頭を抱えるような事案はかなりあるが、ここ最近ではこの探偵社とポートマフィアとギルドという三つ巴の抗争が最大の懸案事項となっていた。その真っ只中である今、安吾は全治一か月以上の怪我を負っているため、病室へ持ち込んで熟す仕事量も限られており——怒りと焦燥で夜も眠れないほどだった。……単純に、部下が泣きついてくる電話のせいもある。

そんな状態にある自分のことを知ってか知らずか——十中八九

知っているだろう——目の前の男は、明日の天気でも説明するかのよ
うな軽薄な調子で流れるように要求を語った。

「具体的には、飛行船への突入とその後の補助だ。突入のための手段
として、輸送機かヘリコプターなどの貸し出しは勿論のこと、人員を
いくらか割いてほしい。優秀な電網^{ハック}潜士^{カー}である特務課の捜査員と、物
理的な攻撃からの盾となる異能力者あるいは隠密に長けた異能力者
を頼みたい。こちらからは探偵社員二名を派遣する。うち一名は、潜
入の際の補助役だけけどね。どうだろう？」

「どうだろう——？」

肺の奥から空気を絞り出した。

「突っ込みたいところが山ほどありますがね」

頭痛が痛い——そんな重言が今の心境にぴったりだった。

眼鏡の蔓を押し上げて、知った顔の男を見遣る。

にこりと、男は笑む。その男は、黒々とした闇を集めたような眼を
している。何処かの時間で同じような眼をしていた。錯覚しそうな
なる。自分の立場は四年も前からとうに明確になっているというの
に。

「どんどん突っ込んでき給え」

「——捕らえられている異能力者ですが、三十五人殺しのことを云っ
ているのでしよう。確かに、特務課ならば免責を手続きし、身柄の拘
束を解くことは可能です」

「それは善い知らせだ」

にこにこ男は両手を組み、予想の通りなのだろう言葉を受けて頷
く。

「そして、特務課からの突入と云いましたが、確かに特務課ならば指定
された捜査員たちを派遣することは可能です。ギルドという異国の
異能力組織から横浜を護るのに否やはありませんから」

「これもまた善い知らせだね」

にこにここと微笑む男は、日向にいる筈なのに、過去に片足を突っ込
んでいるような顔をしている気がした。

「——ですが、それもこれも、目につく粗が幾つかあります。まず、三

十五人殺しが、本当に探偵社員なのかどうか。そして、ギルドという組織の動向をきちんとあなた方探偵社が把握し切れているのかどうか」

薄笑いを浮かべるかつての「友人」であった男は、白昼の中でも鳥肌が立つような——昏く狂気的な笑みを浮かべた。

?? ? ?? ?

赤色の花は、一本だけでもとてもきれいだ。

白色の花は、さいごに瞳を閉じた母の瞼の影に似ている。

黄色の花は、元気になりそう。

どの色が良いだろう？

?? ? ?? ?

「安吾、君が気に掛ける必要がないことは私が保証するよ、その孰れいずの点もね」

どんな免罪符があつてこの目を直視できるだろう。安吾は、言葉少なに目をそらす。この男を怒らせるなんて、どこの命知らずか、とその対象を思ったが、そのうちのひとりひとりが紛れもなく自分自身であることに思い当ると、全く皮肉なものだった。冒した過去は変わらない、変えられない、「——そう、ですか」

淡々とした言葉が、行き場を失った感情を纏つて、口から零れ出る。力のない言葉、意味のない悔恨、ただ無言のまま流れたに歳月。

「先の件、受諾しました」

「それは善かった、お互いにね」

違和感を覚える程穏やかに、太宰は莞爾として笑う。

白い病室に、それが何故だかたった一つの汚点しみのように感じられた。

「——ところで、ひとつ尋ねたいことがあるのですが」

「なんだい？」

「車が突っ込んできた事故。あの時は年端も行かない少年がいたため、言及しはしなかつたことですが。本当に、可笑しな話なのですがね。いくら何でも怪我の度合いに差があり過ぎる。もつと言え、緩衝エアバッグ囊が僕のだけ開かなかつた。そして、未だに突っ込んできた運転手の足取りが全くつかめない。僕がこのような状態になつてしまつたあの出来事について……何かご存じないですかね」

太宰はゆっくりとひとつ瞬き、口角をわずかに歪めた。

その時、廊下から微かな足音が聞こえて来た。そして扉がノックされる。

太宰に目を遣ると、肩をすくめるのを認めて、「どうぞ」と入室を許した。

「安吾先輩、外にこんなものが落ちていました」

「なんです——チューリップですか？ それがどうしたというんです」

「この花束に、妙な紙がついていたんです。妙な紙っていうか、妙な文字？ なんですが」

部下が太宰を気にしながら報告してくるが、その内容はどうも判然としない。自分の目で確認するしかないかため息をつきかけたとき、傍らで椅子が盛大に倒れた。

「太宰君？」

「ちよつとその紙片を見せてくれ給え」

太宰は、正方形に切り取られた紙を取ろうと手を伸ばす——部下がその手を避けようとしたが、安吾は首を振り、太宰に渡させた。眼鏡

をした遠目からでも、その文字は見慣れぬものだった。だが、見覚えはある。確か――

「これ、は――」

「なんです、それは」

太宰は口元を押さえた。

「……奴らは『本』^{あれ}を狙っている筈……いや、奴らの目的のためには、手段は『本』^{あれ}でなくともいいのか？」

「何か心当たりがあるんですか？」

太宰の顔を覗き込もうとしたとき、突然、顔をあげた。黒い蓬髪が乱れ、顔は虚脱したように呆然としていた。まるで、幽霊を見たかのような表情だった。

「――ああ、死者^{あの人}だ」

声を掛けようとしたとき、太宰の手元から、ぐしやりと紙が潰れる音がした。

小さな紙片は、角に赤い梅の花が印記されている。持ち主の愛らしさを感じさせるものが、今は太宰の手の中で無残に扱われている。瞳孔が開いた瞳を虚空に漂わせていた男が、唸るように息を漏らす。

「そうか、そういうことか」

ああ、なんてことだ――と、男はどうとう吠えたのだ。

?? ? ?? ?

夏梅は花屋にいた。太宰と車に乗っていた知り合いの人を見舞う、花束を買いに。

ただ、太宰が既に花束を持って行ったので、夏梅はそれよりも小さな花束を買う予定だ。

軒先に並ぶ花々。

日当たりのよい花屋はそこにあるだけで、気分が良くなる気がする。

夏梅の目を一番にひいたのは、形のシンプルなチューリップの花だ。

邪魔になるなら無い方がいい。

けれどもできたら傍においてほしい。そうできるものを、そんなものを。

夏梅はチューリップの歌をぼんやりと知っている。その歌詞は覚えていない。きっと聴覚がまだしっかりしていない頃に聞いたのだと思う。

緑のバケツに入った花はどれも綺麗で、きつとどれを選んでも綺麗な花束ができる。

けれど、太宰の知り合いに渡すものだから、夏梅はしっかり選んで決めたかった。

じい、と目を凝らして、バケツの一つ一つを覗き込んでみると、ふいに影が落ちた。

「こんにちは、中村夏梅くん」

夏梅は振り返った。

???

???

追って連絡する、と安吾に言い残した太宰は、その場から足早に立ち去る。病院から最も近い花屋への道筋を辿り、何かの痕跡がないかを具に見ていく。足がかりになりそうなものは、ない。争ったような

形跡はなく、散った花びら一つ落ちてはいない。

——落ち着け。

砂色のコートのポケットに手をつ突っ込み、携帯電話を取り出す。番号を押して、電話を掛ける。数コールの末、相手が出た。太宰は、その声を聴いていつも覚える安堵とぬるま湯に浸っているような幸福感と共に、今は強い焦燥感に見舞われた。

魂の底から絞り出すように云う、「——済まない、織田作」

『太宰？ どうしたんだ』

「此れからすぐに戻るが、きみにだけは先に伝えなければならないと思った」

『……どうした』

「夏梅くんが攫われた」

電話の奥で、息を飲むのが聞こえた。間髪入れずに云わなければならなかった。

引きつる喉に、咳払いで何とか言葉を絞り出す。

「私の、失態だ。だが絶対に必ず取り戻す。だから——だから、どうか織田作、早まった行動だけはとらないでくれ」

『夏梅はどこにいるんだ、太宰』

「聞いてくれ、織田作！」

しばらくの沈黙があった。その沈黙の時間のうちに、焦燥が全身を覆い、火達磨になったかのような苦痛に苛まされる。そして——返答があった。

『聞いている』

「……きみは落ち着き過ぎじゃあないかい、織田作」

『夏梅はよく攫われるからな』

一寸^{ちよつと}どう反応したのか解らなかったので、流すことにした。

緊急事態だった、これでも。

「夏梅くんは無事だ。……この先も落ち着いて聞けそうかい？」

元々俺は落ち着いているが、という言葉は実に不思議そうで、電話の向こうで首をかしげている織田作の姿が目には浮かぶようだった。感情を読み取らせない朴訥とした声でひとこと返される。

『——聞こう』

「……奴らの目的は一つだが、それに至る手段としての可能性を、もう一つ見つけてしまった。だから、ギルドの連中は、その両方に手を掛けようとしている」

言葉を切って、電話の向こう側の音に耳を澄ませた。探偵社の誰かの声が聞こえてきた瞬間に、言葉を継ぐ。

「おそらく、ギルドの目的は死人の蘇生だ。そして——織田作、きみはそれを為し得た女人ひとを識っている」

『……太宰、ちよつと待て。お前は今どこへ向かっているんだ』
「私は——」

『行くな、太宰。計画の練り直しだ、と乱歩さんが云っている』
立ち止まる。ちよつと横断歩道が青になっている。

それでも、足を止めずにいるには、注意を引きすぎる言葉だった。

「このまま私に行くなというのか、織田作——きみが」

『嗚呼、そう云った。何度でも云う、一人で行くな、太宰』

言葉が、立場が逆転していた。あの四年前と。

「いっしょいっしょいっしょ」

太宰が扉を開くと、机の上に胡坐をかく江戸川とそれを囲むように探偵社の面々が既に待機していた。——その中に織田作の姿もあった。

隣でいきり立つ国木田の肩を押さえて宥めているらしい。今回の遅刻は本意ではないのだが。

「——さて、揃ったな」

江戸川が机の上から飛び降りて床に着地する。

既に眼鏡を掛けていることから、江戸川に抜かりはないらしい。

「ギルドの所有である飛行船は未だに横浜の頭上だ。そしてリーク情報と裏取りにより、ギルドの主だった異能力者のみならず、その他のメンバーも地上に降りたということが分かっている。……裏取りに動いてくれた国木田と谷崎に拍手——」

まばらに拍手が起こる。

その中で、谷崎妹の拍手は軽やかだった。

身を寄せ合うふたりの回りだけ周りとの距離が開いた。

「いい感じの気の抜けた拍手だね。宜しい。この二人にはそれで充分というものだ。そしていちやつくなら後にしてもらおう。——で、問題はその後だ。バラバラに行動しているギルドのメンバーの幾人かの動向を引き続き探ってもらっていた。——すると、だ。何がしか命ぜられていたような動きを見せていたギルドのメンバーたちが次々に待ち構えていた特務課に捕まえられている」

片手で眼鏡のつるを押し上げた江戸川が、俯く。

表情は見えない。その頭脳はいま常人ではありえないほど高速で情報を整理し分析し解釈し処理していることだろう。

「軍警がギルドに買収され、逮捕させたギルドの一部異能力者を解放したかと思えば、今度はどうやら特務課が手を回してギルドの鎮圧に乗り出している。それもいつそ白々しいほど円滑スムーズにね」

太宰の方を向き、確認を取る。

「夏梅君は攫われた——だったね？」
それに頷く。

「太宰——何があった。そして考えを聞かせてもらおう」
顔をあげると、全ての面々が太宰の方を見ていた。

その顔を順繰りにみていく。

この中で、嘗て死んだ者がいる。

赤い長髪を鎖編みで一本にしている長身の男。

そろそろ無精ひげが生え始めた嘗ての友は、再会してみれば男やもめだと聞いた。

織田作が、生きている。実際に、現実には。——記憶だけがないまま。
それが異能力によって蘇った代償なのだとしたら？

記憶を闕くのと引き換えに死から蘇らせる異能力者が存在すると
して、そんな特異な異能力者のことが噂にも上らないのはあまりに奇
怪だ。

しかし、異能力が開花して比較的短期間で宿主が没したのだとした
ら？

記憶のない織田作が、何故か縁もゆかりもなさそうな瀬戸という横
浜から遠く離れた土地で数年を過ごした意味は？

本当は——ずっと前からその可能性に気付いていた。

「……とある病院にいる、特務課の然る捜査員エージェントに、泉鏡花の身柄の解放
と、ギルドの本拠地である飛行船への突入手段と補助の応援を交渉し
に夏梅くんを伴って行っていた。機密保持のために、夏梅くんには席
をはずしてもらい、人のいる待合室で待ってもらっていた。そして—
—おそろく花屋へ行ったんだ」

「花屋？」

首をかしげる面々の中で、一人だけ得心がいった顔で頷く者がい
た。

「ああ、見舞いの花か」

織田作の言葉に、遅れて皆が頷きあう。

「ああ、確かに」

「律儀な奴だ」

「そこがナツメくんの好いところですよ！」

「その時は交渉の途中だったんだが、他の捜査員が部屋に入ってきて花束を持ってきた。そこには夏梅くんのメモ紙がつけられてあった。

——夏梅くんが選んだ花束だろう」

国木田が首をかしげる。

「犯人は病院で夏梅を攫ったのか？ 花束が落ちてたんだろうが、だとすると花屋からは無事に戻ってきたということだろう？ ペンか何かなら辺りが騒がしければ落ちたのに気づかないかもしれないが、花束を落としたままにするか？」

「病院の中で花束が落ちてたら、不自然には思うだろうねエ」

国木田の言葉に与謝野が続く。

考え込んでいた中島が、顔をあげた。

「もしかして——犯人は、夏梅君を攫ったってことを、太宰さんに知らせたかった？」

太宰は、沈黙した。

「ナツメ君をさらった犯人はギルドじゃないんですか？ それだと知られるようなことしないはずじゃありませんか？」

さらに続く宮沢の疑問には首を振った。

「こきり、と首の骨が鳴った。」

包帯に包まれた首筋に手を当てて答える。

「まず、攫ったのは、ギルドではない。しかし、ギルドが夏梅くんを狙っているのは間違いない。……敦君にあれほどの巨額の懸賞金を掛けられる財力を持ちながら、わざわざこの横浜まで来たのはなぜか」

この世で、大抵のことは金で解決できる。それこそ、巨額の金は暴力にも正義にも勝り得る。

そして70億もの賞金を懸けられるほどに、財力も潤沢にあるギル

ドが、それでも叶えられない願いを抱き、『あれ』に、そして『あれ』につながるだろう——中島敦に固執している。

「少々の額じゃない、今までの人生で関わったこともないような巨額の金を前に出されれば、大抵の望みは叶う。人の命だって買えるだろう。人間によって叶えられる範囲のことは大抵が叶うだろう。だが、買えないものもある」

「それは……………人の心か？」

太宰は口角を上げた、「——ほんとうに浪漫人だよ、国木田君は」
気色ばむ国木田を谷崎兄妹が両方から宥める。

太宰は、その隣に立つ人物へと視線を向けぬまま、告げた。

「死んだ人の、命だよ」

顔をあげる面々。女医である与謝野は腕を組み、眼を閉じていた。
太宰は、それらを見渡した。

「生きている人の命は、買えてしまう。国木田君辺りはこういう話を嫌うだろうがね」

「……………そういつた現状があることは知っている」

国木田が理想と書かれた手帳を胸に答えた。

そこには、揺るぎない——いや揺らぎはするが決して手放そうとしない理想がある。

「しかし、ギルドの望みはそういった金で帰る代物を欲しているんじゃない。ギルドは——ギルドの長はおそらく死人をよみがえらせようとしている」

「……………与太話をしているんじゃないんだよな？」

「全くもって素面で真面目だとも」

理性的な国木田は眼鏡をはずして椅子にどかりと座り込み、頭を抱えた。

黙っていた中島が、声を上げる。

「——待ってください、太宰さん。それが、どうしてギルドが夏梅君を狙うことにつながるんです？」

「いい質問だ、敦くん。それはね、ギルドが夏梅くんを狙うのは、死人をよみがえらせる異能力が夏梅くんにあると思っっているからだよ」

成程つながった、と江戸川が呟く。

「そうなのだ、これは――」

「死人をよみがえらせる……?」

「いや待て、そんな異能力があるのか?」

中島はぎよつと目を見開き、言葉を失くす。

対して国木田が、思わずと云った顔でしかし疑い深そうに隣へ視線を向ける。

隣に立つ織田作へ目を向けるので、他の面々も皆そちらへ集中する。

――織田作は仕方なさそうに口を開く。

「夏梅の異能は、そんなものじゃない」

「だよな!」

国木田は乾いた笑い声を立てる。

周りもそれによって強張った顔で笑う。

「夏梅の母親がその異能を持っていた」

「まじか
!!!!」

渾身の叫びが国木田の喉から飛び出す。

与謝野が口元に手を当てて、顔を陰しくさせる。

奇跡のような異能力であるのに、その他の総じて顔色はよくない。

いや、中島はいつもと変わらなかった。その対比が際立っていた。

与謝野が、険しい顔のまま口を開く。

「だが、夏梅の坊やは母親を亡くしているんだらう?」

「そうです、織田作さんの奥さんはもう亡くなられてて、お墓参りにも……あつ」

気を遣ったらしい中島が織田作の顔色を窺って申し訳なさそうにする。

織田作はその視線に気づいたが、意味は伝わらなかったらしく首をかしげていた。

「墓参りには行つたな」

「はいいい！ すみません！」

「中島が入ってくれたから、行けたんだ。感謝している」

中島は青くなったり白くなったりと顔色を変え、頭を抱えてしまった。

收拾がつかなくなりそうになりかけて、江戸川が口を開く。

全員の目が江戸川へと注がれた。

「——ということは、僕たちのやるべきことは、ギルドの飛行船を叩いて横浜から出て行ってもらふことと、夏梅君を攫ったやつをぼこぼこにして妙な情報を流させないように口を塞ぐこと、当然として夏梅君を取り返すし、鏡花ちゃん救出（……と裏試験）もある」

中島が一部聞き取れなかったらしく首を捻っている。

「いい感じにギルドの主戦力以外のメンバーは特務課に捕らえられている様だし、強力な異能力者が下手に暴れまわって横浜に被害を及ぼす前に、探偵社ウチでも補助サポートに回る。——ところで厄介ウチごとをもう一つ君たちにプレゼントしよう」

皆が固唾をのんで言葉を待つ。

「絵画蔵から、絵画が数点減っているらしい。学芸員のみ……なんだっけ？ が鬼電話してきたよ。僕が見た限り四六時中舐めるように監視してくれたのに、いつの間に関点また一点無くなってるってもう血相変えて大慌てでさ」

「夏梅くんの引き出しからメモ紙が減ったように、ですか」

太宰が尋ねると、江戸川がキャンディーの包装を破きながら、頷いた、「まあ、同じ異能力者だろうね」

口を開いてキャンディーを入れる。そのまま話した。

「おひよろく、飛行船にはほぼ人員は残っていないでやろう。部下たちを夏梅君の捜索に回しているてよいうことは、ギルドの長は飛行船にいるままでや。ギルドの戦力にもにやらないような下っ端は既に異様に速やかに特務課によって捕らえりやりりえていりゆし」

「特務課ってすごいですね……」

「対異能力組織の専門家だからな」

中島の感想に、国木田が言葉を添える。

それだけではない——

江戸川はどうやらそれに触れないらしい。

「問題は、飛行船にいるだろうギルドの長と残留者の無力化、飛行船を操作して横浜から離れたところへ移動させること、鏡花ちゃんの救出、夏梅君の回収だ。飛行船のなかであれば、隠密に長けた異能力者と共にある程度内部を突破したら、催眠瓦斯で昏倒させてから、電網潜士との連携で、地上から飛行船を操作するって計画はそのまま実行できるだろう。敵がいることが分かっているのが、この飛行船と夏梅君のいるところかな。地上は特務課が情報源を持っているらしい。それについて行けば待ち伏せし放題、鏡花ちゃんは交渉次第だからね」

キャンディーで頬の形を変えた江戸川が眼鏡の奥から叡智に光る瞳で見回す。

「他のギルドの動きを追っても、夏梅君には辿りつかないだろう。そういう情報が操作されるとみていい。飛行船は手薄になっている。けれど、ギルドの長の異能力は定かではない。だから、臨機応変に対処し得る人員を選らぶ。そのほかは、地上に降りた強力な異能力者の対処に回ってもらう。そして、夏梅君の行方を探すには——まあ、見当はついている」

「わあー、さすがです」「すごい！」「さすが乱歩さん」「さすがです！」「さすがだねエ」

口々に上がる称賛の声に、いつもは機嫌がよくなる江戸川が渋い顔をしていた。

「そこには、絵画も一緒だ」

「ええと、それっていいことじゃないですか？ 一遍に取り返せます」
中島が首をかしげる。

「物質ものじちって云っただろう。大切な物であることを逆手に取って来る。あるいは——そうであるからこそ、なのかもしれない……」

謎めいた言葉に首をかしげる中で、一つの言葉が投げられた。

「夏梅より、大切な物ではない」
織田作が弄っていた鎖編みの髪を放って、ひとこと云った。
静まり返る。でも——と、細く瞳を開けた江戸川が織田作を見上げる。

「夏梅君にとっては、違うかもよ？」

振り分けられた役割に、各々が準備をしだす。
太宰は、口数少なに織田作のもとへと近づいた。

「織田作……」

「夏梅のことは心配だ。——だが、無事の筈だ」

「……どうして判る」

織田作は長い鎖編みの髪を手のひらで玩んでいた、「——それは」

???

目を開けた——でも、そこは真っ暗だった。

何かが焦げつくにおいがする。

硬い靴音が聞こえた。

かかとの部分に鉄板を打ち付けてあるのは、夏梅のよく知る人の靴と同じ。

そうだ、この足音は。

「——神西先生？」

しかし、夏梅を呼んだ声は違う人の物だったように思うのだ。

それに、老医は夏梅のことを、いつも『夏梅坊ちゃん』と呼ぶのだから。

「先生、ここに居るの？　ねえ、先生だよ？　先生」

無言のまま足音が近づいてくる。

「ここどこ？　真っ暗で何も見えないよ。ねえ、先生」

手探りで近づこうとしたけれども、腕も足もぴくりとも動かない。

無理やり動かそうと力を入れると、肩と親指の付け根ところが痛んだ。腕は、何かを隔てて後ろ手に回されて固定されているようだ。

「せんせい？」

夏梅の頬を何か実体のないものがぞわりと撫でた——きをつけて、と。

複数の声でもって。

ないないあるない

沢山の声が散り散りになる……。そうして硬い靴音が止んだ。立ち止まったのだ。遠いところから目の前まで近づいてきた歩調はよく耳にする音に似ていた。でも、きつとそんなはずないと思うのに。夏梅は引き裂かれるように霧散した声たちの悲鳴、その残響に鳥肌を立たせながら、呼びかけた。

「ねえ、先生でしょ」

靴音が止んでしまうと、何もわからなくなる。

気配を読めと、祖父は言っていたけれども、その『気配』という言葉が今一つよくわからなかった。

「神西先生——なんでこんなことするの？」

靴音の主は、「そうですね」と呑気な雰囲気で云う。

聞き馴染んだ、神西の声だった。

でもなんでと混乱する夏梅を、靴音の主はさらなる混乱の渦に叩き落した。

「まず注射を入れさせていただきますと、老医——神西清は既に死んでいるのですよ」

その声は、夏梅の聞き知った神西のものだった。

ところで、この声は何を言っているのだろうか？

「——え？ 先生はここにいますでしょう？」

硬い靴音が間近にまでやって来る。覆いかぶさるように見えない圧が近づき、夏梅の両耳を通って腕が回される。髪をいじられているのかと思えば、それは夏梅の両眼を覆う布の結び目をほどく動作だった。

「坊ちゃんにとっては、最初から最後まで私が神西でしたね」

目を開くと、白い照明の強さにギョツと目を閉じ顔を伏せる。ゆっくりと目を開くと、膝の上に落ちる黒い帯が目に入る。……これがあつたから、何も見えていなかった。

神西がいつもしている白い手袋を外すと、そのまま素手を見せてくる。

「なに」

「ふむ。此れでは判りませんか。では——」

神西が、耳の付け根の辺りに指先を引っかけていた。白い肌なので黒い爪が妙に目立った。そしてめりめりと言わせて、白い髭が生えた肌を引きはがした——その下にもまた、皮膚があつた。下から出てきたのは、つるりとした肌で、目許の皺がなんともちぐはぐに見えた。「ここまで来たら、全部取りましようかね」

目許の皮膚も引きはがし、出てきたのは皺のない滑らかな表面だった。

なんだか、玉ねぎみたいだなと思った。

「……先生ってそれなりにお爺さんかと思つてた」

「初老の医者ではありましたよ、神西清はね」

じゃあ、と夏梅は見上げた。

「先生は誰？ なんなの？」

「なんだと思いますか？」

夏梅は考えた。見たところ、父とは年もそう変わらない気がした。三、四歳くらい年上だろうか。そのくらいだろう。赤い目が夏梅を見返してくる。……質問に質問を返してはいけないといったのは、どこの誰だっただろうか。神西ではなかったかなと夏梅は思うのだ。

「先生は、先生だよ」

夏梅は、むくれて顔をそらした。

すると、神西は、肩を震わせた。

「笑いたいのなら笑えばいいと思うよ」

「いえ、これは失礼をば」

咳払いをした神西は——やっぱり夏梅にとっては神西は神西だった——酷薄な眼差しで夏梅を眺めて微笑した。

「とても好い返答が得られたのでね。私が何者か、というと」

笑いを抑えた神西が、肩をすくめた。

その拍子に、下がった肩口から照明の光が目にかかって、夏梅は顔をしかめた。

「——実は、私にも判らないのですよ」

「え、わからないの？」

目を丸く仕掛けて光が目突き刺さり、顔を歪めた夏梅は、胡乱げに聞き返す。

だって、この神西が判らなかつたことなんて、夏梅は一度も知らないのだ。

「私には記憶がないのです。作之助殿のように」

「先生も、死んじゃったの？ それでお母さんに生き返らせられた？

お父さんみたいに？」

「さあ——判らないのです」

ただ、何か大切な記憶を失くしてしまった気がするのですと神西は——今まで神西として振る舞っていた男の人は迷子のように俯いていた。

これは大変に困った事態だった。判らないことは中村家では最終的に行きつく先が神西となるほど頼りにされている。性格がちよつと油断ならなかつたりするけれども、頭は頗る優れていて何でもかんでも知っている。夏梅だって、父に聞いて分からなさそうなこと、父に聞いたら拙そうなことは、神西に相談していた。その神西が、判らないというのだ。

「ええと——……」

困っているのはそれだけが理由ではない。何と言葉を掛ければいいのか、夏梅には解らなかつた。なぜなら夏梅は、記憶がなくても、なくなつても、傍に居ようという覚悟はあつても、記憶を取り戻させようという考えは微塵も持つていながつた。それは諦めかもしれないし、子としての想いであるのかもしれない。——そう、それはきつと『優しい』と——『心配し過ぎの病氣』といわれるような気持ちであつて。

「わからないから、思い出したい？」

長くけぶるような白い睫毛がゆっくりと瞬いた。

赤い双眸がのぞくと、まるで血が滲み出てくるように見えた。

「そうですね。それが私の『救い』であつた気がするのです」

「すくい？」

「魂の解放でしようかね」

「待って、もっと難しくなってるりよ」

僅かばかり噛んでしまったけれど、父と違って神西は一応できる大人として見て見ぬ振りで流してくれる。ので問題ない……………問題ないっただら問題ない。

夏梅は神西と『救う』という言葉の意味をすり合わせた。

なるほど、と得心のいった夏梅を前にして、神西は思い出したように零す。

「そういえば、作之助殿がおっしゃられた言葉がありましたね」

「どんなこと？」

「人は自分を救済する為に生きている。死ぬ間際にそれが分かるだろう、と。もしかしたら忘れてらっしゃるかもしれません」

「お父さんがそんなこと云ってたんだ……………？　なんだからしくない言葉だけ」

実際に死んだ人がそれを言ったと思うと、夏梅はちよつと空恐ろしくなった。

それで父は救われたのだろうか、と考えてしまうではないか。

「私は私を救済するためのあがこうと思うのです」

「でも先生は、いままで僕たちのことを助けてくれてるよね？」

偽悪的に振る舞うそぶりを見せたが、それすらも取り払って神西を装う男は、ため息をついた。

手持無沙汰に、白い髪をひと房取ると編み始めた。手慣れている。

父と同じかそれ以上には。

「失くした記憶を取り戻すという点において、作之助殿の診療はそうでなくてもとても有意義でした。特殊な事例でしたが、きっと私のこの状態も同じぐらいには特殊でしょう。幸いなことに、私はやろうと思えば、何でもできた。研究はもちろんの事、医療も。神西清は、優れた医者でしたが、それは主に人格の面においてです。私は技術面で秀でていましたから、老医の後釜として中村家へと受け入れられました。……………この変装は、まあ、理由はあるのですがまた今度ということ」

夏梅は黙り込んだ。沈黙が流れて少ししたころ。

時計が遠くで鳴る。ゴーン、ゴーンと幾度めかの鐘がなり終わるころ、照明がどこかで一つ点いた。目を凝らすと、暗闇の中で母の遺作が一点浮かび上がっていた。それは蒐集家たちと学芸員と探偵社とでかき集めた母の遺作のうちの一つに違いなかった。慌てて周りを見回すと、他にも何点か照明に照らし出されて、細部も露わに浮かび上がっている。これは絵画蔵に納めておいたはずの絵画だった。顔が強張り、硬直した状態でその絵を凝視していると、その絵の額は、天井から降りた黒い紐とつながっているようだった。

焦げつくような匂いがどこからか漂ってくる。……夏梅はどうとう、後回しにしていたことを聞くことにした。

「先生、何してるの？ お父さんの、検査じゃないよね？」

「髪を編んでいます。——あと一寸です」

気を張っていた夏梅は深いため息をついた。

「……………そつちじゃないよ」

「判っておりますとも。——そろそろ好いかと思ひまして」

夏梅はうつむきながら、「……………何が」と尋ねた。

「坊ちゃんも、作之助殿も、振り返ってほしいのですよ。忘却された記憶を」

「……………記憶は戻ってこないんだよ、だってお母さんが『死相』と一緒に食べちゃったんだから」

「ええ、そうですとも」

神西は頷き、出来上がった編み込みを、耳の後ろに回している。夏梅は、だからもう戻らないのだと言おうとしたが、神西が手袋をはめていない指で音を鳴らすと、照明と共に、夏梅の前にもう一人現れ、思わず目を奪われる。

それは、三脚の物が多いなか四つの脚を持つ画架イーゼルの、本来キャンバスを置くところに座らされた状態で足、腕、肩を縛り付けられた、白い肌に黒髪と暗い瞳を持つ子どもで——それは大鏡に映った夏梅の姿だった。

神西が、夏梅の肩に手を置いて、共に大鏡を覗き込みながら微笑した。

「だからこそ、和枝お嬢さんは描いて遺されたんでしよう？　あの絵を」

夏梅は弾けるように顔をあげた。あの、と神西は言った。でもそれがなぜだか随分と近くの絵のことを云っているように感じられたのだ。

妙な動悸がしてきて、落ち着こうと思っても落ち着けない。

「ねえ！　待つてよ、言わないで。ねえ、違うよね？　持つてきてないよね？　だつて、溝地さんのリストには載つてなかつたよ？　だつて、違うよね？　お父さんたちが集めて来たものの中にも、僕たちが集めて来たものの中にもなかつたよ？　嘘ついてないかつてぼくちやんと他の人がいなくなった時にだつて探しててなかつたんだから！　違うでしょ？　持つてきてないでしょう？　ないんだよね？　無いんだよね、ここには！」

夏梅が悲鳴をあげると、神西は、一步身を引いた。

どこからか、足音が聞こえて来た。ばたばたとこの会話をこの空間を踏み荒らすような足音が。

「ここにある和枝お嬢さんの絵には、綿混の布を縊りあげた紐に廃油を吹き付け、熱感知式の発火装置につなげてあります。個々の照明は白光で発熱量は多くはありませんが、三十五個の照明が点けば、なかなかの熱量になり、発火装置はその熱量に比例して熱を持ち、一定上で発火します。そして、徐々に照明をつけていくので、消費電力の増加も急ではなく特務課にも感知されにくい」

神西の口から特務課という言葉が出てきたことにも驚いた。

けれども、それ以上に、夏梅にとって聞き逃せないことがあった。胸騒ぎがした。

「……三十五個？」

「夏梅坊ちゃんの照明を入れていきますよ」

「お母さんの、絵は……三十三枚だけだよね」

母の絵がここに一点あるだけでも、その他の絵画まで神西の手に落

ちたのだと夏梅は悟った。

しかし、それでも三十四個の照明の筈だった。

夏梅の懸念に、神西はにこりと微笑んだ。

暗い尖った爪が示す方向は、夏梅から遠い場所。

「——もう一点持つてきました」

そこは未だに暗くてどこか分からない。

「……な、にを？」

夏梅の声はしわがれていて、我ながら老人のようだと思った。

指さしていた手を唇に持つてきた神西は、若い男の人の声でうつそりとわらう。

「お三人の、家族の肖像ですよ」

時計が再びなる。時間ですね、それでは、と神西はくるりと背を向け、羽織つていた白衣もが翻る。鉄板を踵に打ちつけた靴が、硬い音を響かせる。照明が点く音がして、また一つ光が増える。

遠くから近づいてくる慌ただしい音。ボタン、ボタンと扉が開け閉めされる音が、徐々に大きくなってくる。——ねえ、と夏梅は遠ざかる神西の背に呼びかけた。

「その絵も、燃やしちゃうの？」

「お二人して顔を背けるのならば、それも善いことでは？」

白衣を着ているというのに、照明の下を離れると神西の姿は驚くほど闇に融けこみ、肉眼でとらえる輪郭があいまいになった。声だけが夏梅の耳に届く。

「一寸床にも細工をしまして、地雷を設置させていただきました。」

這って行こうとしていたら、何度瀕死になるかわかりませんよ。それについてうっかり絵が画架から落下してしまえば、重い物だと地雷に振動を与えて木っ端みじんになってしまうやも。和枝お嬢さん、そして夏梅坊ちゃんの主治医としてご提示できる安全策は、そこから動かず、一回きりの作品鑑賞を限られたこの時間にされることです。まあ、何とも人の天稟が透けて見えるような低俗な拘束ですが、そのような輩に好かれるのも親子なのでしょうようか」

やめてよ……と夏梅は呻いた。

夏梅が悪いのだろうか。

ふと、ポケットのなかに入れたままだったメモ紙を思い出す。

“そのうそをまもりたいか”

「ぼくは——」

ボタン、と扉が開かれる。そこだってあまり明るくはないようで、緑色のぼんやりとした光があるだけだった。おそらく非常口の誘導灯の光ではないかと思われた。

扉をあけ放つその人は、斜めに前髪を切った白髪の少年だった、「夏梅くん！」

「あ、つしお兄さん、来ちゃだめだよ！　じらいがあるって！」

夏梅の言葉に、中島は扉から踏み出しかけた足を止めた。

その後ろから、顔を出した人物に、夏梅は目を丸くし——そして舌の上の苦味を覚えた。

「太宰、さん……」

きゆうと眉が勝手にひそめられるのが判った。

緊張を抑え込むために、夏梅は唾液を嚥下した。

「随分趣味の好い誘拐犯だね、これは」

「うえ……これが趣味いいの？」

夏梅はドン引きした。

太宰の隣で、中島も引いていた。

「……うーん、判ってるとおも、わないけど、冗談だからね？」

「それも実は……冗談だったり？」

中島の言葉に夏梅も心底同じように抱いた疑問だった。

その二人の後ろから、他に人がやってこないのを確認すると、夏梅は顔を歪めた。

父がいるのと太宰がいるのと、どちらがより悪いのか、夏梅には解

らなかつた。

うそうそついた？

戻ってきた敦が見たのは哭きすぎる、夏梅の姿だった。

「お願いだから、先生」

柔らかな髪のかかるその額には、硬い鈍色の銃口が突き付けられていた。

???
???

いつもはちよろちよろと歩き回っている子がいない居間は、生き物が息絶えた水槽の中のように寂れてみえた。静かなキッチンで熱い珈琲を淹れる。自分とは別の気配のない空間は、頭の思考を鈍らせ、眼球がぼんやりと立ち昇る湯気を追う。

何となくその気になれなくて、淹れたての珈琲を食卓に置いたまま、身支度を進める。今回は強敵だということが判っている。能力についても、別途、情報を得たので、対策は十全にするつもりでいる。順当にいけば、戦闘系異能力者である、宮沢賢治や新しく入ってきた中島敦が突入に適しているだろうが、作戦立案を担当する江戸川と太宰によって選ばれたのは何故か自分だった。……臨機応変というのが重視されたようだが、あの才気ある二人の後輩たちよりも——苦し紛れにも——強いて挙げた利点といえば踏んだ場数の多さぐらいのものだろうか。

両肩に吊具ハーネスを通し、左右にある拳銃ホルスターに8ミリの拳銃を二挺とも仕舞い、薄い外套を羽織り、居間を振り返る。生者が減った部屋はとても静かだったが——……敷布シーツを頭から被ったような長い黒髪は透過した光によって揺らめく、華奢な影はやはりそこに佇んでいた。

「今日は、あまり喋らないんだな。……心配なのか」

——半透明の長い黒髪が宙を泳ぐ。それをしばらく見守る。

窓は締め切り、風などない筈なのに、それは揺らめいている。ここが浅瀬の海中のようににも感じられる。音が遠く、しかし仄かな光が海面から揺らぎながら差し込んでくるような、五感の幾つかが機能しな

くなつた異空間。

「……………俺はそう思っているが」

今や自分の頭で考えて行動するようになった。

それを妨げるのはいかかがの物かとも思う。悩ましき葛藤だ。

「ああ、判った。……………**くくれるのは助かる」

日除けのカーテンから洩れる淡い光に滑らかな髪を揺らめかせた影は、空気に融けた。

影の行き先を想い、やっと私は少し冷めてしまった珈琲カップに指を掛けた。

カップの中の珈琲が、半分になる頃、携帯電話が鳴った。

相手は同僚の太宰だった。段取りの細々とした連絡事項を伝えてくる。それを記憶しながら、いつもの癖で我が子の座る席へと目を向け、そこが空席であることに気付き、太宰への返答が少し遅れた。

『大丈夫かい、織田作』

「ああ、何も問題ない」

夏梅の救出には、信頼する友人と新鋭の後輩が行くことになっている。

自分は信頼し、そして割り当てられた役目を熟すだけだ。しかし、これだけとはと、友人へと万感の思いを込めて言葉をかけた。

「そちらは頼んだ、太宰」

『了解した。……………ねえ、織田作。きみは本当に善かったのかい。絵の、夏梅くんの方に行かなくて』

「中島は大した男だ。お前が連れて来ただけはある。俺が行くよりよほど頼りになるだろう」

首に巻いた鎖編みの髪の編み目を指で数えながら応えようと、太宰は小さく笑い声を立てたあと、すっかり声音を様変わりさせて云った、「それは本気で言っているのかい、織田作」

???

???

強^{あなが}ち冗談でもなさそうに聞こえる太宰の言葉を流しながら、敦は夏梅のほうを確かめた。小さな背中だ。縛り付けられて動けないその子どもは、首を捻ってこちらを見ようとしていたが、やがて目の前にある大鏡に映る姿で充分だと気づいたのか、無理に体を戻そうはしなくなった。

幼い両手が後ろ手に縛られているのが見えた。磔のように縄がその子の体の自由を奪っていた。

痛々しい姿だった。ずっと一人でこんなところにいたのか——と思いかけて、ふと気になることを思い出し尋ねてみることにした。

「そういうえば、夏梅君。さつき、誰かと言い争うような声が聞こえてこつちだと判ったんだけど、ここに誰かいたの？」

「……………うん、いたよ」

大鏡の前で、子どもは床の一点を注視するように首を垂れていた。その姿からは身体的にも精神的にも疲労がたまっていることを感じ取らせた。早くなんとかしないと顎を引いた敦の鼻に、何かが焦げつく匂いが届く。すぐに顔をしかめた敦の隣から、太宰が重ねて子どもに尋ねた。

「君の知っている人だったかい？」

「……………どうかな」

太宰の質問には、子どもは言葉を濁した。

窓もない暗闇だ。視界がとにかく悪く、相手の人相までは分からなくてもおかしくはない。しかし、判らないのならばそう答えればいいはずだ。子どもの物言いは、何か心当たりはありそうな感じに聞こえた。ただ単に、知り合いに似ていても自信がないだけかもしれないが。

しかし、事態は少し複雑なようだった。

「ずっと知っていると知ってた人が、実は知らない人だったかもって、さつきわかったんだ」

「それは混乱してしまうね」

「ちよつとね……………でも、先生は先生だから」

「先生ねえ……」

俯く夏梅に、顎に指をあてて意味深に呟く太宰らは、敦を置いて何か深刻な話をしているようだった。

着いていけなかった敦はとりあえず自分にできる状況把握をと、辺りを見回し、スポットライト照明によつて暗闇にぼつぼつと浮かび上がる、三脚の台に乗せられた絵画を順にみていく。それらは、夏梅が縛り付けられているものよりも遥かに小さな台座だった。よく見れば、夏梅の縛られている台座は他の物と違い、四つの脚があった。まさかとは思う。半信半疑で尋ねてみた。

「夏梅君、その、台座って」

「——ああ、これ？ 絵を乗せるもので、イーゼル画架っていうんだよ」

「そうなんだ……」

画家の子どもらしい一面に、時が時ならば素直に感心しただろう。両足をそれぞれの脚に括り付けられている。やはり本来の用途は絵を立てかける台座だった。

「今はなんでかぼくが座らされてるけどね」

「そんな感じになつてるのに、夏梅君って冷静だね。あ、でも、ここから見るとまるで——」

夏梅の目の前にある鏡を正面から見ることができるところに敦たちはいた。そのため、画架に縛り付けられている夏梅は、暗闇に浮かぶ絵画に囲まれた中央に縛り付けられた子供という一枚の作品のようにも、それを眺めている観客のようにも見え——しかしそれを口にするのは何となく不吉に感じられて敦は言葉を途切れさせた。命のない絵に、今の状況で似ているというのは不謹慎にも思えたからだ。

黙り込んでしまった自分に首をかしげる子ども。敦は慌てて首を振った。

視線をずらせば、灯りのように浮かび上がる絵画に目が行く。

「あ、と……この絵はもしかして」

「お母さんの、描いた絵だよ」

夏梅は頷いたが、その声にいつものような弾みがないように感じられた。ずっと一人で閉じ込められていたのだ、敦も状況は異なれど、

一人独房の中で閉じ込められた経験があるため、その心中を思いやつて自然と口も重くなつた。代わりにというのか、敦を探偵社に引き入れた張本人でもある太宰がその子に話しかけていた。

「さっきの話にちよつと戻らせてほしいんだけど、その人に何を言われたんだい？　どんな話をしてたのか教えてもらいたいんだけど」
「ここには地雷が仕掛けられていること、動かないで絵を見てつてと。……それと」

「それと？」

太宰とともに敦はその言葉の続きを待った。気のせいかと思われた焦げ臭いにおいが、再び鼻をつく。しかし燃えているというよりは、匂いが強い。上のほうからだ。天井に何か燃えるものでもあるのか。不純物の混じつた油の匂いも漂ってくる。

それにしても夏梅の言葉の内容は、先ほどまでここにいた誘拐犯に、動かず絵を見ると指示されたということなのだとは思うのだが、そこに何か理由があるのだろうか。

「それと、この照明全部が点いたら、『発火装置』で絵に繋がってる黒い紐に火がついて燃え移っちゃうよつてことを教えてもらったかな」

太宰は子どもの言葉にうなずいた。

「そうか。矢張り、絵を台無しにすることが目的ではないのだね」

「——え？」

太宰の言葉に、敦は思わず目を丸くして見上げた。

静かな眼が敦を見下してくる。見守られているような気がして、敦は勇気を出して自分の考えを太宰に言ってみることにした。

「あの、太宰さん、犯人は絵を燃やすような装置を作ってるんですよ？　じゃあ、絵を燃やすことが目的では？」

「そうであつたなら、こんな仕掛けを作らなくても燐寸マツチ一本で充分事足りるさ。……夏梅くんを誘拐する必要も拘束する必要もない」

確かにそうだった。夏梅に害をなそうとするのなら、既に夏梅は死んでいただろうし、今もこうして縄と地雷とで身動きを奪つた他は目立った外傷は見受けられない。しかし身代金すら要求していない

め、一般の誘拐とも違っている。

「どうして夏梅君は攫われたんでしょう？　地雷まで仕掛けて逃げられないようにして……」

「そうだねえ……」

太宰は、縛られている夏梅のほうを向いた。夏梅は俯いている。ほぼ背中を向けられている状態なので、照明に照らされた白い項も露わになっていた。太宰は薄い眼差しで何かを見通すようにその小さな背中へと視線を遣っていた。

「まあ——まずは、この状況は打開した後を考えよう。地雷が敷かれています、照明がすべて点灯したら、あの黒い布を導火線として火が付き燃える。夏梅くんの画架イーゼルにはつながっていないことを見ると、夏梅くんに害を及ぼすつもりはないのだろう」

地雷を周囲に仕掛けられているのに、危害を加えるつもりがないだなんて言えるのだろうか。

それに絵画に火がついてしまえば、煙に巻かれて呼吸困難で死んでしまう可能性だってある。

「問題は、このすべての照明という点だが」

「……三十四個の照明が点いたら、燃えちゃうんだって」

唐突に出て来た三十四という数字。その数字を口のなかで繰り返して、何を指示しているのだろうと考えていると、隣の太宰はすぐに把握したようだった。

「成程。三十三点の絵画と、きみの真上の照明というわけか」

敦がない間に進められていたという夏梅の母親の遺作の回収。そこに参加できなかったので、そこを思いつくのは敦一人では無理だっただろう。——或いは仮に、三十五個であったのなら、未だ軍警察に捕らわれたままの泉鏡花のことが思い浮かんだだろう。

首を振り、目の前のことに集中する。

太宰の解説から状況を飲み込んだ敦は、先ほどから項垂れたままぴくりとも動かない夏梅を心配した。だいぶ衰弱が進んでいるのかもしれない。

「ここからだど判りにくいか。——夏梅くん、きみが正面から見て、い

くつの絵が見える？」

夏梅が一つずつ数えていく。夏梅は敦たちに背を向けるような形で座っているため、夏梅の後ろにある絵まで数えられないだろうと思つた。夏梅が数える傍ら、敦も自然と見える範囲の絵をすべて数え上げていく。それはなかなか多く点灯されていた。全部で――
「十六個」

夏梅は言つた。敦は慌てて太宰に声をかける。

「大変です、夏梅君のも入れてもう三十三個もついています！　あと、一つ点灯したら発火してしまいますよ太宰さん！」

「大丈夫だよ、敦くん。十六個だ。夏梅くんを入れると、十七個だね」

太宰が敦の肩を軽くたたいてきた、その指である方向を示す。その先には、絵の台座に座らされた夏梅――いや、鏡に映つた夏梅の姿があつた。鏡に映つた夏梅の方が、表情がまだ見える。紙のように白い顔色だつた。まだ、三歳の子どものものだ。早く助け出さなければいけないのに。

「鏡だよ。鏡に映つた絵で、こちらからは実際の二倍の数に見えてしまうんだ。一応、夏梅くんの身体で隠れて見えない絵がないかを確認してみたけれど、夏梅くんの目の前にある鏡からは、今のところ点灯されている絵すべてが見えるようになってるようですね、だから夏梅くんに数えてもらったのさ」

「な、成程。そうだったんですね」

拘束されている夏梅がその状態のまま鏡を見れば、全ての作品から背を向けていても、照明が点いているすべての絵が見えるということらしい。――しかしだ。誘拐犯の『絵を見ること』といつたらしいが、この状況では、実物の絵は到底見えず、夏梅はただ鏡に映つた絵を見るしかない。何がしたいのか、よく解らない。

「さて、点灯している照明と、未だ点いていない照明はそれぞれ十七個でちょうど半分ずつであるわけだ。この調子では全点灯までに時間の余裕はありそうではあるが、今から残りの十七個の照明が一斉に点いて黒い布に引火してしまうという可能性がないでもない。しかし

ここに犯人の姿がない以上、照明が点くのものにもおそらく規則性があるはず。——何か心当たりはないかい？」

太宰が夏梅へと呼びかける。

「……照明が点くのは、たぶん、時計の鐘が鳴った後だと思う。二回しか見てないけど、二回ともそうだった」

思ったよりもしつかりとした口調だった。そのことに敦は安堵する。

ふと思いついて太宰に尋ねてみた。

「時計を破壊したら、どうなるんでしょう？」

「根本的な解決になるとは考え辛いね」

「そうですか……」

提案してみたが、解決には至らないようだった。

では次だ。何か策はないか。この場所の状況を確認しながら、考えをまとめていく。

「夏梅君と絵を無事に回収するには、導火線になるあの黒い紐を切るのがいいんでしょうけど」

「床には地雷原という障害があるわけだ。却説——きさてどうするか思いつくかな、敦くん」

時計ではなく、導火線もどうにもできないのなら、どうにかできるのは照明だ。

つまり——

「ブレーカーを落とすんですね」

「その通り」

太宰は、砂色の外套を翻して、背中を向けたまま手を挙げる。共に通ってきたのとは反対側の、誰もいない暗がりの通路へとつま先が向いている。既に行くべき場所を識っている動作だった。私が、と太宰は告げて来た。

「ブレーカーを落としてこよう。ここへ来る前から、建物の見取り図はしっかりと予習済みだからね。敦くんはこの場から動けない夏梅くんを見ていてくれ給え。ブレーカーを落とせば、今ついている照明の灯りすらなくなつて完全に真っ暗になってしまふからね」

「はいー」

敦は力強くうなずいた。太宰は肩口から振り向いて小さく微笑した。

頼んだよ、というように。

敦はこぶしを握り締めた。

「ここから私が管理室に行つてブレーカーを落とすまでに掛かるのは、凡そ八分くらいだろう。懐中電灯でも見つけてくるからもう少しかかるかな。ブレーカーが落ちる、最低でも三十秒ぐらい前になったら、敦くんは片目でも閉じておいてくれ給え。電気が切れて灯りが無くなつてしまう前に、片方の虎眼を暗闇に馴らしておくんだ」

「はい、解りました。お氣をつけて、太宰さん」

「ああ。それじゃあ、行つてくる」

それまで静かに沈黙し、俯いていた子どもがほんの少し顎を上げて、消え入りそうな声で言う。

「——いつてらっしゃい」

まるでさようならというような、弱弱しい声だった。それに、太宰の足が少し止まった。そして敦に視線を一瞬向けてきた。先ほどとは違う、真剣な色——敦は頷いた。

花の芳香に紛れる影

それはブレーカーが落ちて電気が消える、十二秒ほど前のこと。

中島と雑談と評した、探偵社の本作戦の全貌について聞き及び、さらにここがどこであるかも聞き出した夏梅は、ある種の理解と無理解の狭間の末に手が震えた。気づかわしげに見てくる中島へと父の居場所を尋ねた。「心細かい」との問いに、夏梅は寧ろ「ほっとした」と返す。片目をつぶって暗闇に備えだしていた中島が驚いた顔を鏡の中で浮かべるので、ぎこちなく笑おうと思った夏梅に——無遠慮な第三者の声が割って入ってきた。

「なるほど、ここに彼は来られないということですか……」

金属音が聞こえた。それは、父の持つ拳銃の撃鉄を引く音に似ていた。

鏡のなかで顔をこわばらせた中島が弾かれたように、声のした方へと体を向け体勢を低くした。

夏梅もまた、相手の出方がわからず、用心しながら、後ろ手に縛られている親指へと指を添えた。

そして——唐突に、完全なる帳は降りた。

闇に煌く虎眼を見つけ夏梅は「敦お兄さん、目を閉じて」と叫んだが、銃声はすぐ後に続いた。

悲鳴は聞こえなかった。

きつと——当たらなかった。

夏梅は逸る頭でそう考え、親指を掴み、ふいに闇だと思っていた中に……蠢く影を見た。

?? ? ?? ?

古典における『影』^{かげ}とは、現在も用いられているような、光によつてできる物体の影ということの他に、人や物体の姿かたちということ

を指す場合と、もうひとつ——夏梅にとつてはとても奇妙に感じられることだけれども、月や灯りそのものを指す場合があるらしい。ひとつの言葉で、対照的なふたつを表しうるということが、とても受け入れがたくて、夏梅は古典を苦手に思っていた。

さて、『こてん』は『こてん』でも『古典』ではない方の『個展』について。

母の遺作を瀬戸の実家から取り寄せて開催する個展の打ち合わせと、探偵社のほうでの仕事の二足草鞋を履いている父は、里帰りから戻った数日の間のスケジュールは特に超ハードであるようで、昨晩は探偵社に夏梅を預けて、20時に迎えに戻ってきた。誰よりも遅くまで探偵社に残って滞っている分の仕事をしていて国木田までもが気を遣い、予定を切り上げて夏梅達の帰宅に合わせ、車で自宅の集合住宅^{マンション}まで送ってくれたほどに父は見るからに疲れ切っていた。……元々の身体能力の高い父がここまで疲弊しているのには理由があつて、それはいわゆる、接待というそうだ。疲れというのも、主に気疲れというやつだろう。父はこの手の耐性があまりないのだ。

夏梅でさえ、瀬戸の屋敷に出入りする見知った顔、知らぬ顔の面々との上辺の取り繕い方は母や祖父、神西の振る舞いから自ずと習得していたのに、父は夏梅が心配になるほど覚束ない。

母の遺作を提供する側である父に対して、個展への準備に並々ならぬ情熱を傾けている面々が設けた場に出向いていたのだ。きつと夏梅のことを考えて時間を気にしていたのだろうが、不器用な父のことだ、巧く抜け出せずに遅くなってしまうたのだろう。

「織田作、忙しいのは判るが、無理を為^して躰を壊すなよ。お前の躰はお前の物だけではない。お前は一児の父親なのだからな」

「お前の云うことはもつともだと思ふ、独歩。だが、一つ疑問がある」
国木田が、眼鏡のつるを押し上げて、「なんだ」と促す。夏梅も父に肩へ腕を預けられながら、不思議に思つて続く言葉を待つ。

「無理というのはどこまでいけば無理になるのかが解らない」

「——ほんとうだね」

言われてみれば確かに分からない。どうなったら、無理ということになるのだろうか。そもそもいつも使っている『無理』とは何の限界や程度を指すのだろうか。それはきつと人によって違うものだけれども、本人の定義だつてあやふやだ。この言葉、どうやって用いれば——？

夏梅が目を大きくしてその疑問に頷くと、大きなため息がして国木田の方をみた。

「お前たち、もう帰って寝ろ」

ぱちぱちと瞬いて、ああと気づく。

もう夜の22時を回っている。

「ここまで送ってもらって悪かったな。夏梅がいるから、運転ができなくてどうしようかと思っていた。助かった」

やっと捕まえたタクシーで帰って来た父は見るからに草臥れていた。

国木田は肩をすくめた。

「気にするな。お前と夏梅にとって、一世一代の至要たる催しだ。抜からず、遮二無二掛かれよ。……太宰の阿呆が飛び切りの愚拳を為でかし目も当てられん大事にならん限り、後は俺が何とか遣つておく」

頼もしい言葉だつた。夏梅は国木田を尊敬した。今とっても。

父も何か感じ入るところがあつたと思う。

「恩に着る。この夜道だ、車通りは少ないだろうが、独歩も気をつけて帰ってくれ」

「送ってくれてありがとうございます、国木田さん。おやすみなさい」

手を振ると、国木田もぎこちなく手を振り返してくる。車が去っていくのを見送つてセキュリティ付きのフロアを通つて、昇降機に入る。父と二人だけになると、気を張っていたものが抜けたため息をつく。それから息を吸うと、鼻に慣れない匂いが刺さる。夏梅がいると滅多に飲酒しない父から酒気がして、夏梅は呻いて鼻をつまんだ。

「……………におうか？」

父はスーツの袖を鼻に寄せた。すると、父の血色のよくなっている顔の、ほんのり色づいた目許に年のせいかな皺が寄った。——ふいに不安になった。

父は順当に年を重ね、而して夏梅は——？

「……洗濯屋に出すか」

「洗っておくよ、それ洗濯できるやつだつて言ってたし」

「誰がだ？」

「瀬戸のお手伝いさん。名前は知らないかな」

階数があがっていくのを見守りながら考える。父は——流石、元少年暗殺者とでもいうのか、どんなに疲れていてもよろけはしないが、夏梅の手を握ったまま壁に肩をもたれかからせていた。そんな父に心配を覚え、様子をうかがいながら開いた昇降機を出た。するりと自宅の扉を開いて中に入り、靴も放つて居間リビングになだれ込む。

父はテレビ前の長椅子ソファに凭れ掛かった。夏梅は放り出された上着を洗濯物籠に入れた。洗濯機に干さずに乾いてしまった洗濯物をもう一度回して居間に戻り、水をグラスに一杯持つてくる。父に手渡すと、言葉もなくそれをあおった。ため息一つ。

「今日は待たせてすまなかつたな。こんなに遅くなるとは思わなかつたんだ」

「……まあ、ぼくはべつにいいけど。……ねえ、これがお酒の匂い？」

「……飲み過ぎたな」

夏梅が起きている間は、父は飲酒はしないのだ。勿論、喫煙もである。

家庭内で身内が飲酒や喫煙をする家は子どもの教育的にうんたらかんたら……であるそうぞうで。

夏梅はちよつと眉をひそめた。二日酔いの不調が長引くようになった、歳のせいかな、と頭を押さえる父の姿を夏梅は見たばかりだったので。

「飲めませんっていえばいいのに」

「和枝が生前世話になつたらしいからな、そうもいかない。どうやら随分と年長者に好かれる性質だつたんだな」

故人の人となりを感じ深そうに言う父。好かれるかどうかは知らないが、母は人嫌いであつたまる。向かい側の卓上に頬杖をついた夏梅がその顔をじつと見上げると、実を起こした父の大きな手のひらが頭に乗った。夏梅にとってそれは重く感じられるものだったが、そう思つた瞬間、手のひらは少し浮いた。

「和枝のおかげか、その道の老大家にいびられるということがないのは有り難い。派閥の立ち位置の微妙な違いに巻き込まれつつあるような気はするが」

「それってやばいやつじゃ……」

「やばいのか……だが、悪い事ばかりでもない。今まで知らない和枝の一面を知ることができた、と思う。さすがに、度数の高い酒から勧められるのは、勘弁願いたい」

普段父が使わないような言葉も復唱している辺り、自分も何を喋っているのか定かではないに違いない。

前向きにとらえようとしてちよつと失敗している父に、夏梅はため息をついた。

「顔色が変わらないから、お酒に強いって思われたんじゃない？」

「そうなのか？」

いや知らないが、ここまで来て知らないよとは言えない。

「ぼくはそこにいたわけじゃないからわからないよ、だから想像ね」

「そうぞうか……」

言葉尻もおかしくなってきた。この後も勧められて断れぬまま流されて深酒を続けるようなら、国木田か太宰に言いつけて何とかしてもらおうと半眼になる。その時だった——ぴろりろりん、と洗濯機が家人を呼ぶ。長椅子に沈んでいる父と素面しらふの夏梅では、幾ら三歳児であつても誰が行くべきかは自ら悟るといふものだ。

ネクタイをしめたまま、スーツにしわを作りつつ長椅子に横になつた状態で落ちた父に代わり、夏梅は洗面所に行く。横開きの洗濯機は、乾燥機能もついていて、雨の日も物干し竿いらすの優れもの。探偵業という勤務時間の不規則な中村家——もとい横浜こゝでは織田家——にとっては必要に駆られた不可欠品となっている。

父が酔っぱらっていたから、夏梅が代わりに。

不可思議なその手紙を見つけたのは偶然だったと、夏梅は記憶している。

なぜなら、父が酔いつぶれていなければ、自分で服を着替えて、それに気づく、あるいは気づかず洗濯機の中に入れて消滅してしまったかもしれない、メモのようなものだったからだ。その時はまだ、メモ紙は夏梅の普段使いの物とは違い、ただの白い紙片に過ぎなかった。無地のそっけない紙切れの裏表面面に、ミミズがのたくったような模様がそれぞれ描かれていた。

不思議に思った夏梅は、それらをスマホで写真に撮り、瀬戸にいる老医の神西へ書面メールに画像データを添付して送った。すると、ものの四十秒ほどで返信が帰って来る。

まず、表には『真実はどんな色をしている？』とあり、さらに、裏には、『解——それは、赤』と書かれているそうだった。——何やらとても興味をそそられる、面白いことが起こりそうですね、との神西の言葉がおまけのようにくっ付いている。こんなちよつとの文面から面白みを見つけ出すなんていう高等技術は夏梅にはなかった。……神西と友だちになれないと思うのはこういう時だった。

神西が同時に両方とも訳してしまったので、問いと答えを一度に得てしまった夏梅は、なんともつまらないなぞかけだなど肩をすくめる。それにしても、父はいつたいどこでこんなものをくっつけて来たのだろう。そんなことを思いながら、スマホをポケットにしまった夏梅は、居眠りをしている父にタオルケットを掛けにパタパタと廊下を小走りになった。

それは、花束の芳香に抱擁された黒髪の青年に追われるほんの数日前の事だった。

?? ? ?? ?

離れたところから中島の声でした。

「夏梅君！ 無事かい？」

一瞬にして戻ってきた暗闇の中に蠢く影たち——夏梅が折ろうとした親指に込めた手が何者か、大勢の手によって掴まれる。一度に夥しい数の人の手の感触を覚え、驚きの声をあげる前に口はどこからか伸びて来た手の大群に塞がれた。

「夏梅君！」

切羽詰まった中島の声に応えられない。

目を、開けている。夏梅は、目を開けている心算だが、何も見えない。何も見えないのに、そこに誰かが居た。誰かが居る。生温い、甘い香りと腐敗した切り花の茎のような匂いが混ざり合って咽そうになる。

沢山の少女たちの声に晒され、言葉が夏梅を惑わし、夥しい数の手が伸びてくる。頻りにみつめた、みつめた、逢いたかったと繰り返すその声は知らないものだった。そんなの知らない——と喉に絡みつく腕、口を塞ぐ手がなければ叫んでいただろう。夏梅は——手袋に包まれた短い指によって乱暴に髪を掴まれた。

「とても……残念です」

声が頭から降ってきた。あの時、肩を支えてくれた与謝野はいない、手を握ってくれていた宮沢もいない。その代わりに、温度のない、暗闇から生えた異常な数の手が、夏梅を囲い込んでいた。

「ここにお二人がいらっしやれば、中村先生の、最後の絶筆を見せていただけると聞きましたのに……」

その人は、心底残念そうに言い、夏梅を引き留める髪を掴んだ手を捻りあげた。

夏梅の肩が軋んで、音を立てた。身をかがめたその人の、恨み言葉が耳元に注がれる。

「非道い、これは酷過ぎるじゃあ、ありませんか。こんなに耐えて来ましたのに」

その声の主は、地雷原の床を通り抜けて夏梅の傍らにまで無事にたどり着いていた。手袋に包まれたその手には、いつも携帯しているのですと教えてくれた沢山の私物の中にあつた多機能ナイフがとりだ

されているだろう。冷たい感覚で、夏梅の首筋にじつとりと当たっていた。血が出ているのか、何か痺れる感覚があった。

「こうしてこの子たちを危険にさらしてまでお待ちしていたのに。織田さんは来ない。それどころか、あなた方は私に約束の対価を支払おうともしない。ここまで漕ぎ着けたのに。ただ一つそれを御見せくださるだけで宜しいのに。何という傲慢の羊なのでしょう」

神に訴えかけるような声音だった。

その手のどちらにも銃はない。それを確認した夏梅の目尻から、生理的な痛みからくる涙が溢れた。

男性学芸員——溝地が宙に吹っ飛んだのは、夏梅の濡れた頬に風が当たったのとほぼ同時だった。

「夏梅君！」

咳き込んだ夏梅を支えたのは、地雷の危険を顧みず、夏梅のところまで一瞬で接近した中島だった。夏梅の座らされている画架の柱に捕まり、宙に浮いた溝地までも抱えたのだろう。柱の軋む音がした。足音はなかった。もしかして、あの一瞬で、入り口から跳躍したのだろうか——夏梅の処まで。

「だいじょうぶだよ」

夏梅はどくどくと動悸が聞こえる脈拍を聞きつつ答えた。気をつけて、と中島の声があった。——もう一人いる、と。

黙れる黙れない

少年が云った、「この人からは硝煙の匂いがしないんだ」と。
微かな秒針の音。

時間は刻々と進んでいる。

幾多の画架に立て掛けられた絵画は、墨汁を零したような闇にひっそりと沈んでいた。

灯りも窓もない閉じた空間に、ゴーン、ゴーンと年季のいった時計が鳴る。

海底から轟くような低い音だった。

大型の画架にしがみつき、息をひそめていた少年と台座に腰かけている子どもは小声で会話していたのを途切れさせた。暗闇の中で目を凝らし、耳を澄ませる。

カチリとどこかで照明のスイッチが起動する音がした——ただそれだけ。

主電源の切れた照明が点くことはなかった。

少年と子どもは杞憂と知って肩を下ろす。少年の方はしがみ付いていた画架の柱からそろそろと床に足をつけていく。そして地面があるか確かめるように、慎重に立ち上がった。少年が片腕に抱えていた男を床に降ろし、ふたりは辺りを見渡ししながら、小声で話し込んでいる。

「じゃあ、銃を持っている人がここにいるってこと？」

子どもが少年に問いかけた。

会話に耳を傾けながら、「それ」は手持ちの物を数え……思いついた。

?? ? ?? ?

電子書面^{メー}の着信を知らせる振動が伝わった。

外套の衣囊ポケットの中に収めている、夏梅と揃いのスマートフォンを手取る。

一年前では最新型だった機種も、今や型落ちとされる。時間の流れはいつの時代も同じである筈なのに、急速な変化は目まぐるしく、対応していくことができなければ自分だけが取り残されたように感じられた。いつまでも、古い型の拳銃を愛用しているような者にとっては、それも現実に即した自己把握なのかもしれない。

新着の書面メールには、図が添付されていた。

正方形に、その面積の五対一程度が二重線により区切られた図だ。面積の広い方には、逆三角形の記号が散らばり、その中でひとつだけ黒丸があった。対して、面積の狭い方には星形の記号が一つあった。——その図の意味するものはいったい何なのか。

織田作は、最後に書面の一番下に『Dより』とあるのを見つけ、イニシャルにDが付く人物を考えた。……太宰だろうか。真つ先に思い浮かんだ社の年下の同僚であり、親しい友人でもある男のことだった。しかし、太宰がこんな謎めいたものを送るだろうか。……送ってくるかもしれない。

しかし、わざわざ『Dより』と宛名を打つだろうか。

「アドレス、太宰のものではないのか」
悠長に悩む時間はないので、太宰の連絡先に添付データを送りつけることにした。

そして、作戦の定刻には谷崎兄の待つ場所へと辿りつくよう車を回した。

特務課から特別に借用したヘリの操縦は、谷崎兄が受け持つ。

織田作は、片耳に取り付けた通信機からの音声による指示で動くことが決まっている。

指示を出すのは探偵社外部の協力者で、意外な人物だった。

はじめは特務課に依頼するつもりだったが、優秀な助っ人が向こうからやって来た。その実力は江戸川が太鼓判を押すので、疑いようもない。

「織田作さん……こんなこと今言うべきじゃないと思うんですけど、夏梅君のこと、心配ですよね」

プロペラと風の音で直接は聞こえない。

耳当てから機械を伝って耳に届く声はいつもと違う声音に聞こえた。

「太宰がやると云ったんだ。やり過ぎないか、相手のほうに同情する」
「う……相手の人、大丈夫なんですかね……」

「三文小説のようなありきたりな終わりは迎えられないんじゃないか」

ひい、と少女のような細かい悲鳴が耳当てから響いてくる。

織田作は、ヘリが雲の上を通過するのに目を止めた。霧の塊のような雲はうつつすらと視界から消えていく。

戦慄く谷崎兄は、寒いのか歯を鳴らしていた。確かに上空は気温も低くなり、肌寒い。

「お、怖ろしい。何が怖ろしいってこの探偵社が一番危ないんじゃないかってことですよ……!」

「谷崎も探偵社員だろう」

「そ———そうでした」

悪寒がしたらしい谷崎兄は操縦桿を持つ方の肩を震わせていた。

織田作は口ごもったが、これだけはと口を開いた。

「安全な操縦を頼む」

「あ、はい」

谷崎兄は、然るべきヘリの操縦に戻った。

飛行機に乗るより先に、飛行船に乗ってしまった———記憶にある限りだが。

これを夏梅に知られたら恨まれそうだった。乗り物が好きらしいので、仕事でも一人で乗ったと知られれば拗ねられる。この一件が終われば、どこか……船でもいいから連れて行くなりして機嫌を取ろう。

そんな算段をつけながら、織田作は空に浮かぶ敵地を目視した

?? ? ?? ?

「この人からは硝煙の匂いがしないんだ。だからもうひとりいる筈だよ」

夏梅はたくさんの少女たちの声と手のひらを思い出した。

ひとり、だけではないと思うのだけれども。

その時、時計の音が鳴った。驚いてびくつくが、どこにも照明が点いたりはない。

ほっと胸をなでおろす。

そして縛られた状態で柱にしがみつくと中島の方へと首を捻り、途端に首筋に痛みが伴う、「——あ、痛たた」

「あ、一寸待ってて、夏梅君」

夏梅が目の縁に涙を浮かべていると、暗闇のなかで中島が何やら身じろぎ、掴まっていた画架の柱から軽々、夏梅のすぐかたわらの床に降り立ったのが分かった。そこはちようど溝地が立っていた場所だった。地雷がないことを分かっていたのだろう。中島が無事でよかった。夏梅としても、そんなに近くに地雷があるのは……やや稍困る。

どさりと何かが床に下される音がした。

溝地のうめき声が足元から聞こえた。

「ぶ……ぶ……ぶ」

蛙がつぶれたような声だった。

真つ暗で何も見えないため、夏梅は溝地が起きているのではないかと思つて声をかけてみた。

「溝地さん、起きてる？」

「——いや、気絶してるよ。もう暫くは目覚めないと思う」

応えたのは中島だった。夏梅は中島の云う『暫く』の長さがどのくらいなのだろうと考えて黙り込んでいると、心配していると思われたのか、中島が声音を柔らかくして告げて来た。

「大丈夫。加減はできてたから、骨とかは折れてない筈だよ」

「……そっか」

中島のおかげで拘束が解け、夏梅の両手が自由になった。

「ありがとう、敦お兄さん」

「夏梅君、大丈夫かい」

「うん、大丈夫。敦お兄さんは？」

「僕は平気だよ。でも、夏梅君は怪我をしているから手当てが必要だよ」

「けが……」

中島は夏梅と問答しながら、ごそごそと足元で動く。

縄がぶちぶちと切れる音がする。

その中島の手にはどうやら溝地から取り上げた多機能ナイフがあるらしく、それで縄を切ってくれたようだった。解放された手で痛みが走った首筋に触れてみると、何かでぬるりと濡れていた。——なるほど、これは血だった。

「傷口に触っちゃだめだよ、夏梅君」

「うん、ごめんなさい。……虎の鼻ってすごいよね」

中島はちよつと困ったように笑う。

「これで全部かな。動ける？」

夏梅は足や肩に引っかけかかった縄を手で降ろした。

画架の腰掛けの上で体が動くことを確認する。

「うん、ありがとう」

「どういたしまして」

夏梅は足を伸ばして、地面に触れた。

足元がぐらぐらとする。妙な感覚だった。

「この人が持っていたのが、銃でなくて本当に善かったよ」

そういえば、首に突き付けられたのはおそらく溝地の多機能ナイフだった。

銃を持っていたのなら、わざわざナイフに持ち替えたのは少し不自然かもしれない。

「じゃあ、銃を持つてる人がここにいるってこと？」

それだと、神西がここにいるということになってしまうのだろう

か。

そもそも、神西は、銃が使えるのだろうか。もうここを去ったと思っただけでも。

では、銃を持っている人物が別にいるのか。

夏梅の脳裏には意外に若かった神西のすました顔が思い浮かんだ。

「……：せんせいってば、結局かえったんじゃないのかな。未だ、ここら辺をうろろしてて悪だくみしてなきやいいけど……でも……」

この場から立ち去った神西はどこへ向かったのだろうか。

夏梅は唇をかみしめる。あの「絵」——あの「絵」がここにある。

今は太宰もいない。でもあと数分でやって来るだろう。……何とかなすることはできないのかと夏梅は焦る。

どうしてこんなことに……。そもそもこんな事態を招いた主犯だろう神西がいつ横浜へ来たのかも不明だった。いつから計画されていた？ まさか、母の個展が開催されたと決まった時点からではないだろうけれど。……それに、ここに設置されているという地雷や発火装置なんでも、神西に用意できる伝手でもあるのだろうか。横浜に来たばかりなのに？ そういえば、神西は、特務課の事も知っているような口ぶりだった。溝地とも知り合いになっていたのだろう。神西は日頃から、何かをしでかそうとする人を見つけ出すこと、そしてその共犯者になるのが特技のようなもので、今回もきつとそうなのだろう。溝地の云っていた『約束』というのも神西としていたのだろうか。——それでも、なぜだかしっくりこない。寧ろ、このやり口は、あの花束を持っていた男の人を彷彿とさせる。

しかし、あの絵の存在を知っているのは、神西だ。……夏梅の考え過ぎなのだろうか。

中島と太宰は、神西とは入れ違いにやって来た。……神西は、夏梅以外に関わる気はないということだろうか。あの「絵」のことはどうするつもりなのだろうか。

「どうしたの、夏梅君？」

口のなかで聞こえないような声で、いない人のことをぶつぶつと呟いていたのだが、中島が聞き留めたらしい。

夏梅は虎の聴覚の良さに舌を巻く。慌てて話をずらす。

「その、敦お兄さんって今どのくらいが見えるの？」

「ぼんやりと輪郭が見えて、動くものが分かるくらいかな」

思った以上に見えているらしい。

「……すごいね。ぼくはなんにも見えない、」

よ、と夏梅が云いかけた時、遠くで何か硬いものが落ちる音がした。

夏梅と中島はびくりと身構えた。

カラン、カランと金属の軽い物が床に転がる複数の音。それは最後に重めの音を残して途絶える。夏梅は、それがちょうど神西が消えた進行方向だと気づいた。けれどもその意図が掴めなかった。神西がいるのか。目を細めて何とか見通そうと思ったが、黒の他には何も見えなかった。

すると、傍らで中島が口を開いた。

「……僕が物音がした方へ、確かめに行ってみるよ」

危険を顧みない、中島の言葉に夏梅は慌てて口を挟む。

神西がことさら危険だとは思わない。しかし、行く手を阻むのは地雷なのだ。

「でも、敦お兄さん、あっちに行くには、地雷があるところを行かないでしよう？」

「大丈夫、この男の人が通った道は何となく覚えているから、そこを辿っていけばいい」

「太宰さんが懐中電灯を持ってくるまで待とうよ」

夏梅が袖をつかんで引き留める。

しかし中島は首を振った。

「それが一番避けたいことなんだ。相手は銃を持つてる。銃が使われたこともきつと音で太宰さんが気づいたと思う。その太宰さんがこの暗闇の中、懐中電灯をつけてきたら、きつと真っ先に狙われる」

「……どこにいるか、ばれるから？」

虎眼が光ったように、懐中電灯の明かりでその人物の居場所が。

中島が頷いたのがわかった。

「そう。それに、太宰さんは、僕たちのようには丈夫じゃないから」

「それは……」

夏梅は言葉に詰まった。その通りだったからだ。太宰なら銃声を聞きつけただろうから、用心して懐中電灯をこの部屋の直前で消すかもしれないが、中島を信頼して、敵を倒したと思いついて警戒を怠るかもしれない。何せ、父に対しても子である夏梅の目から見ても過剰と断言できる期待さえ寄せていた太宰なのだから。

「じゃあぼくも行く」

「夏梅君には——ここにいて太宰さんを待ってほしいんだ。誰かがここに居ないと、後からやって来る太宰さんが心配するだろうから。それにね、探偵社みんなが、君をとっても心配してるんだよ」

「……行くの、気をつけてね」

口をとがらせて言った。

中島は笑った。まさか、夏梅の顔まで見えているのだろうか。

「うん、行ってきます」

泣きそうになるのをごまかすように、夏梅は冗談めかして言う。

「わ、わざわざ危ないところに行こうとするなんて、『虎穴に入らずんば』
なんとかかんとか、みたいなの？」

「虎だけにね」

笑みを含んだ声の中島に、夏梅もちよつと笑った。

勉強した国語はこうして緊迫した状態でも人を笑わせてくれるのが不思議だった。

「心配しないで、夏梅君。虎の毛は、銃も刃物も通さないから」

夏梅は元々、資料からその異能力の強さを知っている。

そして今、優しいお人好しの心が、力強い意志によつて支えられていることも知った。

「……でも、敦お兄さん、本当に気をつけなきゃだめだよ。催涙瓦斯とか毒瓦斯とかに知らないうちに巻かれていたり、爆弾とか地雷とかの仕掛け罠フービートラップに気付かずに踏んじったり、手投げの閃光榴弾フラッシュグレナドとかが突然天井から降ってくるかもしれないし、かと思ったら通路全部に化石燃料ガソリンを撒かれて逃げ道が無くなったりするかもしれないから……」

「そ、それはだいたい、過激すぎじやないかな……」

夏梅は中島の最もな言葉にうなずいた。

「うん、一番大変なのは、煙で喉が焼けちゃうことだったよ。息ができないもん」

「……………え、若しかしてこれ経験談？」

愕然としたような声が聞こえてきた。うんうんと夏梅はその時の苦労を思い出し何度も頷いた。

あの絶体絶命の時には、江戸川の言葉が走馬灯か、天啓のように耳に蘇ったものだ。

「あそこで病院に棲みついてた鼠ネズミが通路の端を逃げていくのに気付かなかつたら、たぶん、逃げ道を見つけられなくて、ぼくもお母さんの絵も燃えちゃってたね」

その後、事務員回収のための列車に乗り込んでいた夏梅は、谷崎妹と春野と合流し、そして駅で待っていた中島と太宰にも合流したのだ。太宰は、お手洗いに行っていたと口実をつけていたけれど。

平手を打ったことまで思い出して、夏梅は苦い思いになる。

「……………あとで詳しく訊こうかな。太宰さんが聞いたらきつとすごく怒られると思うけど」

引きつった声で急にぞつとしない言葉をいうものだから、それをききつけた夏梅はその内容におっかなびっくりしながらもお願いしてみる。駄目もとはなく、中島だったら聞いてもらえるかもという打算も含んだお願いだった。

「——敦お兄さんにはお話しするから、太宰さんには黙っててもらえない？」

頼んではみたけれど、難しい問題だなあ、と中島はぼやかして、それでも正直に教えてくれた。

嘘でも気休めを言わない辺り、人の好きが表れている。

「じゃあ、行ってくるよ。あんまりぐずぐずしていると、太宰さんが戻って来てしまうだろうから」

はらはらとしながら、画架イーゼルから立ち上がって待っていた夏梅は中島からの声を待ちながら、溝地が横たわっているのだろう場所へと目を

向けてみた。もちろん、何も見えない。その場にしゃがみこんで、すぐそばに横たわっているであろう溝地へと首をかしげて目を細める。小さく謝った。

「ごめんね、溝地さん……」

ある意味、溝地だって、巻き込まれた被害者なのだ。

「若し溝地さんが、それを憶えていたら」

あの悪魔的な研究者をちよつとは殴ってもいいと思う。

夏梅は暗闇の中では、何も見えない。

だから——夏梅の足元で横たわっていた溝地の指先がピクリと動いたことにも、そう。

そう、少しも気づかなかった。

罰、だったのだろうか。

真実の色は

どうしてそんなことをするのだろうか。どうしてすべてを壊そうとするのだろうか。どうして夏梅からたった一つのそれを取り上げようとするのだろうか。もしそれを取り上げられたら、それが違うと示されたら、夏梅の存在が分からなくなってしまう。知られたくない。知りたくない。なくなるならいい。でも、ちがうなんて嫌だ。ぜったいに、いやだ。それなら。そんなことになってしまいうらいなら――

?? ? ?? ?

白い手袋に覆われた両手を掲げる男は首を傾げた。

「二つ提案です。――見逃してくださいませんか」

実に簡単なことだった。一見して意味のないことをしている状況。とある画家の絵画を横取りし、画家の子どもを誘拐して、逃げないように取り付けられた地雷と、時間が経過すれば燃焼するように仕掛けられている絵画。問題は、子どもに動く余地を残しつつ、時間の制限を与えているという状況は――まさに実験室での条件づけられた環境だった。

この場を用意したのは、絵画に愛着を持つ学芸員などではない。そして、この状況を作りながら、実験者が完全にこの場を去るといふのはちぐはぐだ。

こうしてすべての状況を見渡すことができる場にいるというのが、実に似合いだった。

だから、太宰は一人で来た。

そういう人物だと知っていた。

ブレーカーを落とした暗闇の中、懐中電灯の光だけを頼りとして、太宰は男と対峙する。

顔に張り付けた皮膚はよく創られてはいたが、陰影の中でも皺が引きつつて見えた。

「それは、随分と虫のいい話じゃないかい？」

太宰は目の前の男へと顔を凄ませた。

男は、そうでしようか、とさも不思議そうに疑問を唱えた。太宰の手にある懐中電灯の光に照らされ、眩しそうに目を細めているさまは、如何にもといった人畜無害さを呈していた。

その時、一発の銃声が鳴り響く。

風鈴の音でも聞いているかのような涼しげな顔で男は云う。

「——おや、聞き覚えのある銃声ですね」

「君の哀れな操り人形が暴走したのではないかな」

太宰が云うと、男は「それは……どうでしょう」と言い、硬い靴音を立てて移動した。

当然、太宰は見咎めた。

「一寸、待ちたまえ。君が作った状況だろうに、いったい何処へ行く心算なのかな？」

「先にお暇させていただこうかと。計画は失敗してしまいましたからね。まったく——来ていただきたい作之助殿にはいつも、思い通りに来ていただけなのですから。……まあ、想定外というのは人生における必要な驚きではありますかね」

律儀に足を止めて男は答える。案外と素直なものだ。男は、予想外だったらしいというのに、時折声を弾ませて尚、足りないとはかりに愉し気にわらう。何とも感情豊かになったものだ。と太宰は苦く舌打ちをする。

「……成程、毎回仕掛けているわけか。道理で、夏梅くんがそんなに動揺していないわけだ」

「動揺はしていると思いますよ、今回は特にね」

「今回は、ねえ……」

あの子の周りを良識を備えた大人が守ってやれなかったのだろうか。

重いため息をつく。問題は解決されたわけではない。

再び歩を進めようとする男の背に向けて、太宰は声をかける。

「私が逃がすと思うのかい」

「脱出への妨害を見越して、私が何も手を打たなかったとでも？ 私の現在の職に関連した手法を考えれば……貴方の云う、私の操り人形がどう動くのか、大方の予想がつくのではないかと思うのですが。それに逃げるわけでもありませんし」

けたたましく硝子が割れる音がした。硝子……？

「――真逆」

「本当は作之助殿に聞いたかった二択なのですがね。代わりといっては何ですが、矢張り――私は識りたいのです」

目の前で堂々と去ろうとする男を置いて、太宰は駆け戻った。

?? ? ?? ?

中島は、先ほど合流した位置からいくらか離れた場所まで、無傷で辿りつけていた。

それは、単なる偶然ではない。

虎眼を瞬かせ、鼻をひくつかせる。

目を凝らせば気が付くかもしれない。そんな程度だった。

電気を消した瞬間、床は微かに光って見えた。何かうつすらと埃のようなものが床にまかれているらしく、目を凝らせば、どうしてか手がかりとなる足跡が見えるのだった。その足跡を辿っていき、音がした場所へ辿りついた中島は、そこに誰もいないことに眉を寄せた。その靴先にコツリと何かが当たる。

「これは――」

それは薬莢だった。薬莢はほかにも幾つか落ちていて、それが壁面へと続いているようだった。抜け道でもあるのかもしれない。犯人が通った道なのだろうか。それにしても怪しいが、手掛かりがこれ一つしかないのだった。

中島は落ちている薬莢をそのままにして追っていき、壁まで無事に

たどり着いた。壁を手で探ると、少し開いた扉があった。僅かに空気が循環しているのが判った。

背後を振り返り、声を張った。

「夏梅君、犯人が使ったような抜け道を見つけた！ まだ銃を持っていると思う。僕はそちらを追うから、太宰さんが合流したら、指示に従って」

「——わかった」

中島は、扉を慎重に開き、落ちている藁を辿っていく。そこは関係者が使うような通路であるようで、飾り気なく、狭い道幅だった。点々と続く藁を目印に追うと、一つの角を曲がる。まだ、奥に藁は続いている。そして、開いた部屋の前で途絶えていた。

ここまでの道筋はシンプルだった。絵画の並べられた部屋から出て左に曲がる。

さらに通路で左に曲がり、開いた扉の部屋へ。

誘い込まれている——そう気づきながらも、行くしかない。

警戒しながらその部屋へ入ると、藁はない。何か手掛かりはないかと屈んで、床の表面へと目を凝らし、うつすらと光るその床の真ん中に光っていないところがあることに気付く。それは藁よりも大きい。

「あの形は——」

思わず扉の中へ入った、何かが足に引っかかり、たたらを踏む。

背筋がぞつとする嫌な予感がした。

忽ち、癩癩を起こしたようにゴーン、ゴーンと時計の音が鳴り出す。

「時計が急に……な、何に引っ掛かったんだ」

気が動転しかけた中島は、首を振って、目の前のことに集中する。

何かがあったところを手で探る。

すると、藁よりも大きなものを探り当てた。

「如何してこれだけがこんな行き止まりに落ちて……」

時計の音は近かった。

何かを壁を隔てた先で、銃声が鳴り——鳴ったかかと思えば、けたまましい硬質な素材が割れる破壊音が中島の耳に突き刺さった。そ

それは硝子が碎ける音。衣擦れの音。子どもの悲鳴。銃弾を避けるように瞬時に屈んで、警戒態勢に入っていた中島は、空気の匂いで、先ほどの空間とつながった場所にいることに気付き、知った悲鳴が混じっていることを知った。

「な、夏梅君！」

軽い弾倉を拾い上げていた中島は地雷も忘れて駆け出そうとしたときだった。——時計の音が止まり、照明のつく音がした。明かりは点かない。当たり前だ。安心したが、照明が点く音がもう一度して、振り返りその瞬間、強い光が直接中島の目を焼いた。

「う、眼が……………！」

突然の光に、暗闇に慣れた目を持つ中島は、両目を押さえて悶絶する。

頭痛がした、鋭敏になっていた視覚への強烈な光の刺激に、中島は床へ額を押し付けて呻く。その耳に、自分の呻きのほかに、何か重たいものが落ちる音がして、それを拾う音が聞こえ——それは不思議なことだった——目を閉じているのに瞼の裏に像として情報が結びつく。

「おねがいだから、おねがいだから、やめてよ、おねがいだから」

「それはできないお願いです」

男が云った。

「どうして……………？」

大きな瞳から大粒の涙を零して、ぼろぼろと泣いていた。

それでも聞いてくれない大人を見上げて、年端も行かない幼い子どもは呆然と問うた。

頭を支える細い首が今にも重さに耐えかねて、後ろへ倒れそうだ。

「私は知りたいのですよ、夏梅坊ちゃん」

赤い眼が優しく細められた。それに中島は我知らず、鳥肌が立った。

手袋に包まれた長い指が引き金に掛かる。

鈍く光る銃口が、柔らかな髪の毛の乱された頭に突き付けられた。

「私は知りたいのです。だから、『ひよつとしたら』ここでお別れです」

ハツとして目を開けた時、中島は、中島の背後の一つの照明に照らされて、いくつかの絵画と、気絶していたはずの溝地に銃口を突き付けられた夏梅の姿がはっきりと見えた。

「止めてよ、先生、お願いだから」

自分に銃口を突き付けられているというのに、夏梅は溝地という男にすがっていた。

でっぷりとした腹に、薄くなった頭皮。白い手袋ははち切れそうなほど指が肥えていた——目を閉じたときに想像した光景とは少しずつ異なっている。

しかし、そんなことは消されようとしている命のともし火の前では些細なことだった。

「夏梅君！」

間に合わない。

引き金が引かれた。——弾は空だった。

心臓が止まるかと思った。いや、一瞬は本当に停止していた。

飛びかかろう、そう大腿に力を込める前で、何の気負いもなく再び、引き金が引かれる。思わず硬直する。それは異様な状況だった。弾がないにもかかわらず、引き金が引かれる。カチリ、カチリカチリカチリ……と機械的な音が続いたあと、男は首を傾げた。

「そのまま弾を渡してもらいましょうか」

溝地がぐるりと首を回して、中島の方へ顔を向ける。その腕は、夏梅の顔へと回して拘束し続けている。

「敦お兄さん……」

「夏梅君」

目の前には地雷が広がっている。

「くっ どうして……こんなに早く意識を取り戻したっていうのか……」

「——違うと思う」

夏梅が顎を動かして口を腕の中から出して何かを伝えようとした

ようだったが、腕に力が籠められて、空咳をした。拘束しているほうの手にはナイフがあった。

「そのまま弾を渡してもらいましょうか。でないと、刺します」

「ま、待て！ 解った、今そちらに蹴るから」

中島は拾ったばかりの弾倉を蹴り、溝地へ当てようと思ったが、夏梅が前にいるため正確には狙えない。あるいは手元が狂ってしまった。せめて軽い弾倉からさらに弾を抜こうとしたが、

「そのまま、弾を、渡して、もらい、ましょうか？」

「わ、解った！ 解ったから」

口調に尋常ではないものを感じて、中島はそのまま替えの弾倉を床に下して蹴った。

夏梅の足元まで来たそれを、溝地が取ろうと屈んだ、その時、夏梅が溝地の顎めがけて頭を後ろに振った。ごがごと声を漏らしながら、溝地が崩れる。夏梅が咳き込みつつ、這って中島の方へと行く。

中島は地雷のことを忘れて駆け出した。そして派手に爆発する足元。

爆発に巻き込まれるなか、中島は這っている夏梅の後ろから、ゆらりと起き上がり、拳銃に弾を入れた男を見て、気が遠くなった。

?? ? ?? ?

駆けってくる足音が遠くから近づく。

いつも走ったりしないその足音は、今は慌てているようだった。きつと間に合わない、そう思った夏梅は、中島の背後にある絵に届かないと判りながら、手を伸ばした。

夏梅の目に――母の絵に貼られたメモ紙があることに気付く。

“真実の色は赤”

——その通りだった。

手から力が抜けた。ぱたりと床に落ちる。

さらさらとした手触りの床をさすりながら、自分のもとへ手を引き寄せる。

「夏梅くんー」

名前を呼ばれて、体がこれ以上冷たくなることはないのではないかと思うほどに血の気が引いた——届かなかった。

「……なら、もういいや」

暗闇の中で、それは隠しようがないほど明らかだった。

太宰さん、と夏梅は上半身を起こした。

振り返ると、どうやって地雷を避けたのか知らないけれども、近くの絵画の傍にまで近づき、顔をこわばらせた太宰がいた。亡霊でも見たような顔だった。でも——そうかもしれない。

「おださ……」

「ぼくはね、まもりたかったんだ」

夏梅は訥々と語る。

宗教画でも眺めるように、その「絵」を見上げる。

夏梅がいる場所よりも、数段高い位置に置かれているのが何とも皮肉に感じられた。

「お母さんが残した真実よりも、お爺さんたちが、ううん……僕がついた嘘を」

夏梅の眼から見ても、それは美しいものだった。

その「絵」はとても精巧に描かれていた。

母の絵は、もともとその写実性の高さが特徴の一つではあったけれども。

人間に人間らしさを更に足したような、実物以上の温かみがあった。

人肌と血肉を感じさせる絵。

観念して、夏梅は太宰に、スポットライト照明に輝く一つの絵を指さす。

三人の家族の肖像だ。

父と母と幼い子ども。

写真のように細緻に忠実に描かれている。

「その絵を見てみて。そこにはほんとう真実があるよ」

太宰が、そちらへ目を向けた。

動揺が一瞬顔に現れるのが分かった、「——ね」と夏梅は首を垂れた。

「……………夏梅くん、聞いてほしい」

何も聞きたくなかった。

嘘の色は

柔らかな黒髪を指でつまんで、力任せに引っ張った。
髪を放すと夏梅の指の間に数本残った。

?? ? ?? ?

昇降扉ハッチを開いたそこには、敵のギルド員が居た。

「なっ……いー」

体勢を低くして左手で相手の口を塞ぎ、背後に回り込んで首筋に手
刀を落とす。

くぐもった呻き声を残して崩れ落ち、対象の沈黙を確認する。

「肝が冷えたな……」

素手で対抗したが、初っ端からついていない、と織田作はため息を
吐いた。

侵入してすぐに運悪く鉢合わせしてしまった敵を熨すと、織田作
は、正面からでは死角になる位置へと引きずった。息はあるので、相
手の上着を脱がせ、両袖の部分を頭の後ろで結び、目隠しをする。

次いで、薄手の夏物の外套に付いた埃を払うと、ちようど通信がつ
ながる。

『無事、潜入できましたか』

知性を感じさせる落ち着いた声音が片耳から聞こえる。

吊具から拳銃を一挺抜き取り、両手で構えながら返答する。

「ああ。ここから俺はどちらへ行けばいいだろうか」

『まず、右手に見える通路を通ってください。そして出てすぐの左か
ら二番目の外開きの扉を通り、二十二歩行った先に、中央制御室があ
ります。そこへお渡ししておいたUSBメモリを差し込んでくださ
い。現状こちらからは船内の視覚情報にはアクセスできておりませ
ん。すぐ近くにそちらの組織の人間が潜んでいるかもしれませんの
でどうか、お気をつけて』

「了解した」

潜入の補助をしてくれる蒐集家コレクターでありその界限では名の知れた電網ハツ潜士カでもあるらしい青年実業家へと礼を言おうと、とんでも御座いません、と茨木は静かに恐縮した。

茨木の言葉の通りに進んでいくと、扉の取っ手に触れたところで体が蜂の巣になるのが視えた。

脇の通路に跳んで壁に背を預け、弾雨をやり過ぐす。どうやら、侵入がばれているらしい。

『大丈夫ですか』

相手が確認のために、扉を開けたところで、最初の敵の脚を撃つ。転げて態勢を落としたところで、その背後にいた敵も撃つ。

「ああ、問題ない」

天井から移動している敵に合わせて、両肩の吊具ハーネスにある、もう一挺の拳銃へと手を伸ばす。

?? ? ?? ?

父の友人である、太宰になら見てもいいと思った。

けれども、いざとなるとやっぱり悪足掻きしなくなった。それも無駄だった。

「……聞きたくない。見たらわかるでしょ」

真上から照らす光で、影もなくその“絵”の細部が暗がりの中から浮かび上がる。

——海辺の白い部屋にいる三人の家族の肖像画。

繊細なのに、明瞭な色で象られた輪郭。

細部は、人肌の温かさと、薄皮の下の血管とその脈拍まで想像させ

咳き込むと、切られた喉からの血が逆流してきた。体を折って、口もとに手を遣ったが、指の間から滴った。そんなに深い傷ではなかったと思うのに、血が止まらない。痛みもない。鈍い痺れが手足に広がるだけだ。

指を伝い、ぱたぱたと赤い血が床に落ちる。

この赤が、血ではなくて髪の色だったら、佳かったのに。

「聞いてくれ、夏梅くん。……髪色や瞳の色は成長するにつれて変化することはよくある。持っている色の違いで判断はできない。それに、これは、絵画だ。写真でもない。これが事実をそのまま描いているとは限らない」

「違うよ。知ってるんだ、僕は」

成長すると髪の色が変わってくるのかも、と考えなかったことはない。

高校の生物の教科書や便覧を読んだり、それとなく神西に尋ねてみたりした。

可能性としては十分あり得るし、そういった事例は少なくない。

……しかし、顔だちは？ 耳の形は？ 遺伝によって色濃く出る部位は？

成長によって変化しにくい部位の、明らかな違いは？

この「絵」は——写真よりもずっと、詳細な特徴を伝えてくる。写真であればぼやけるはずの部分も明確な線で輪郭が引かれている。

これは事実だと、夏梅は知っている。

瀬戸の屋敷の絵画には布が被せられてある。

この「絵」は屋敷の主の部屋の、奥の奥の間の、古い箆笥の手の届かないような抽斗の中にわざわざ紫の布で包んで仕舞い込まれていた。それはそれは嚴重に。それは、どうしてだろう……？

「絵には本当のことが描いてあるんだよ」

夏梅は憶えている。

夏梅のことを父は忘れてしまったことがあった。

「だって、お父さんとお母さんが話してた」

いつもは母は、事実をそのままにして描かない。

ないものがあるように描いて、在るものを描かない。

『架空の中に真実を、真実の中に虚構を』って……でも、それでも、この絵だけは、本当のことが描かれてるんだ」

死んで、「死相」を食べられて、死の間際一番強く思った記憶を失った。忘れられたということはそれだけ強く想われた証拠だ。それで、それだけ強い想いを残した記憶を失って蘇った人の気持ちなんて、夏梅は知らない。

茫然自失となった父へと、幾度か既に忘れられた母が語った言葉。

『あなたはペンを、わたしは絵筆を、それで各々の記憶の在り処としましょう』って——この絵はね、お父さんが忘れちゃっても、それがあつたってことを知ってもらうための物なんだよ」

この約束だけは、きっと父の中に残っている。

なぜなら、この約束は忘れられるたびに何度もして、そしてそのあとしばらくして母は亡くなったのだから。

それっきり、父は死んでいない。

この『絵』は母が作った最期の記憶だった。世間では、それを『絶筆』というらしい。

——その絵の中に、夏梅は存在しない。

いるのは、赤い髪に鳶色の瞳を持つ、父に似た面差しの子子だけだ。耳の形も鼻筋も、父のそれをそのまま小さくしたような、そっくりの特徴を持つ子どもだ。

夏梅のような、母に似た黒髪に昏い瞳を持つ、色白の子どもなんて何処にもいない。

母をそのまま小さくしたような夏梅なんて、何処にもいない。

母の胎内にいた記憶があると思っっているのは、夏梅の勘違いなのか。それともそれだけは本当なのか。

……夏梅が自信を持っている記憶だって、この『絵』の前では、意味が揺らぐ。

これは、いったい誰が最初に吐いた——嘘だったのだろうか？

嘘を真実ほんとうにするつもりだったのなら、こんな『絵』なければよかった。

「太宰さん、前に言っただでしょ、『きみはきつとお母さん似だね。あいつとは大違いだ』って。僕を見て、『きみはいつたい、何者なのだろう』って言っただでしょう？ ……ずっと、憶えてる」

父の友人が夏梅に云った言葉だったから。

でも、それ以外にも、夏梅は多くのことを覚えている。

……疑いを持った時から、記憶に残る様々なことが、少しだけ不安に思っていたことが糸でつながったかのように、次々と思い出され

て、夏梅はずっと焦っていたし、不安だった。

「お墓前りに行くときに、横浜で駅までバスに乗った。その時のバスに乗ってた、あの母娘おやこは髪の色も目の色も、顔もそっくりだった。おかしいよね、だってその女の子のほうは風邪か何かでマスクをして、目ぐらいいしか見えなかったのに、似てるって分かったんだよ」

夏梅は自分の顔に触れる。頬は父のように肉が薄くなっていない。手は、親子で似るという。それなのに、夏梅の指も手首も細く、同級生の女子にすら驚かれるほどだった。

「それなのに、でも、じゃあ、僕は？ お母さんには似てても、お父さんには？ お母さんとは血が繋がってたとしても、お父さんとは？ お母さんはもう死んじゃった！ じゃあ、お父さんはぼくのお父さん？ お父さんの子どもはぼくじゃないの？ ぼくは……」

「……夏梅くんきみは」「——ぼくは」

足元の地面が無くなってしまったような気がした。

ぼんやりと夏梅はまたたきをした。

世界はずっと滲んでる。

「ぼくはだれなんだろう……？」

誰に問いかけたのかもわからない。答えだつて返つてこない。

絵画は喋らずに、夏梅にその家族を見せつけてくるだけだ。

「ぼくはなんなんだろう……？」

手を開いて、数本の黒髪へと視線を下ろす。

赤い血に濡れた中でも、髪の毛は黒色だった。

あの絵に貼りつけられたメモ紙の「真実の色は赤」という通り、本当の子どもは赤髪をしているのだろう。では、黒髪の夏梅は偽物で、「嘘の色は黒」とでもいうのだろうか。父と母以外の子どもなら、そんなのいらない。だってそれなら、夏梅はいっただい。

「……だれの子どもだったのかなって……」

誰に問いかけたのかもわからない。答えだつて返つてこない。絵画は喋らずに、夏梅にその家族を見せつけてくるだけだ。

「そんなの、いらない」

その言葉がきつかけだったのか、焦げ付く匂いがした。

最期の一枚の絵にも黒い紐がながれていて、そこは既に煙が上がつているようだった。

ああ、といつの間にか呟いていた。

「燃えちやうんだ」

ぼんやりとした視界の中で、赤い火の筋が見えた。

それは廃油をしみこませた紐という導線を介して、燃え伝っているものだった。

「そっか、燃やすんだ、先生」

手を握りしめる。

それでいいと思っていたのに。
息を吸って足に力を籠める。しかし。

「……ぬわわっ……」

地雷原へと踏み出しかけた夏梅は後ろから猛烈な何かに突き飛ばされた。

何かはその時、わからなかった。投げ出された床は幸いなことに、地雷は無いようだったが、その脇を小太りの溝地が通り抜けていく。その体からは思いもしない俊敏な動きだった。床から何かが巻きあがる。夏梅は何かを吸い込んでぼんやりとしかけた意識を、ぎゅつと目を閉じ首を振ることで引き戻す。その耳に、溝地の雄たけびが聞こえた。

「こ、この子たちを燃やさせるものかあああ」

顎を強か打った夏梅はそのまま、絵画を抱え込み、火の手から遠ざけた溝地を信じられない思いで見上げた。

「うえ、溝地さん……？　なんで」

「大した専門意識だよ、彼は」

太宰が、絵画の側から大きくひと跳びで、夏梅の傍までやってくる。

「太宰さん、どうして——？」

「地雷の事かい？　それなら、君の知り合いが設定していた、織田作への選択肢を考えれば、おのずとどこに地雷が仕掛けられて何処に仕掛けられていないかというのは予想がつくのだよ。実に合理的な、地雷の配置だからね」

溝地は、手に持っている拳銃に、「な、なんだこれは」と叫ぶと、放り捨て、慌てた足元で蹴りつけた。

床を滑り、夏梅の脇を通っていく。

「あ——れ」

ほんの少ししか見えなかったが、その銃は見覚えがあった。

「起き上がれるかい、夏梅くん」

太宰の手が夏梅へと伸ばされた。

夏梅は、自力で起き上がった。

その手は夏梅には過ぎたものに感じられていた。

「そっちじゃないけど……」

「——私からあの『絵』に感じたことだね。そう、確かに私の眼から見ても、あの幼児の骨格や印象は、きみとはまったく違うものだ。きみの云う通り、あの絵が事実を切り取っているとすれば、描かれている幼児はきみでは……ありえない」

「……………うん」

服についた何かの粉をきらって、夏梅は蒼褪めた手で払う。

判っていたことを言われただけなのに、手が震えた。息が震え、目の奥が熱くなった。

「きみには、散々問いかけたね。とても残酷なことを、何度も。そんな私が云うのはとても無責任なことだとなじっても当然のことだ。——だが、云わせてもらうよ、夏梅くん」

聞きたくないけど、とは言えなかった。

聞かなければいけないと思った。

この包帯だらけで傷だらけのこの人の言葉だけは、何を言われても。

夏梅は聞かなければならないと思った、「——それでも」

真実の嘘

上空のどこか――

徐々に近づく敵の気配。それを捉えながら、ハーネス吊具に伸ばした手は――空を切った。

思わぬことに体勢が崩れ、間の抜けた声が口から漏れる。

「あ」

織田作の声に、通信機の先から茨木の声も呼応する。

『あ――?』

一瞬で混乱の縁に立たされた織田作は、呆然とした。通気口から弾が降って来るのを未来視した。驚きから硬くなつた関節を和らげる動きは、体に染みついていていた。体勢を落とし、通気口を破って降り注ぐ弾雨から身をかわして逃れる。

『――如何されたんです?』

「なんでもない。ただ、有る筈の物が無くて驚いた」

『有る筈のものが、無い?』

右の吊具を見ると、そこに本来提げられている筈の拳銃がなかった。朝、両肩から下げた吊具に愛用の銃を入れたのは確かであるのに……。

「……………持っていかれたのか?」

考えても仕方がない。今は現状、有るもので対処するしかない。織田作は、片手で一挺しかない銃を操り、数弾だけ撃つと、指示された扉を開き転がり込んだ。

???

???

「それでも、きみが織田作の子なんだ」

握り込んだ指が震えた。その時、建物が大きく震えた。

鉄骨が軋みねじれる音。物理的に、地面が崩れるような振動。

「う、わ……」

「来たね」

上段から、携帯が鳴った。

地雷の爆発に倒れていた中島の体がしばらくして起き上がる。

その手には、携帯があつた。それを耳に当てながら、中島が口を開く。

「だ、ざいさん、鏡花ちゃんが脱出して、ここへやって来てくれるそうです。夏梅君も、早く、ここから出よう。お母さんの、絵も一緒に」その言葉に、溝地が振り返って、「なななな夏梅さん!」と驚いたような顔をする。

何も憶えていないようだった。

行こう、と太宰が云う。

何処へ行くというのだろう。何処へも行けない、と夏梅は首を振って退いた。

その頬に弾丸が掠めた。

「夏梅君!」

「——え」

咄嗟に振り返り、夏梅は耳の後ろに、強い衝撃を受けた。

一発だった。

弾丸が、夏梅の側頭部を貫通した。

「——両方でしたか」

科学者は興味深そうにつぶやきを残した。

その行く末を見届けてから、窃笑を零す通信を無造作に切ると、その場を後にした。

夏梅の視界を黒い影が覆いつくしていく。

死が——そこにあつた。意外なことにそれがやってくるのには時間があるらしかった。

そうか……これが父が何度も逝った死なのか。

昏い影が傍らに佇んでいた。それに、夏梅は郷愁のようなものを覚えた。

「おかあさん、と言葉が零れた。」

「夏梅くん！」

太宰が、夏梅の体を覆いつくす影を払い、近づこうとした。そして、その手を止めた。

衝撃によつて横に倒れた子どもの体を黒い靄が覆い隠す。

それが徐々に晴れていくと、違ったものが現れた。

——少し骨ばった、少年の骨格。

——鼻筋と耳の形。

黒髪は赤い髪に、色白の肌は健康的な肌色に、細部では、ほっそりとした指先は多少の骨ばった指に——初対面の時の、少女としか思えない、少女と見紛うばかりの容姿から、中性的だが少年と分かるものへと変化していた。髪は長く、肩を越す程までであった。艶やかなそれは、父親のそれとは違って、柔らかさそうで、頬のあたりで撥ねるようにして揺れている。

照明によつて明るくなった空間が急に揺らめいた。

光が飲まれて、黒に浸食されていく。

「これは——」

靄が完全に晴れると、少年は身じろいだ。
その少年が目を開くと、鳶色の瞳が現れた。

「お、ださく……」

びう、と妙な声を立てて溝地が絵画と共に倒れかけ、それを中島が支える。

その中島の手も震えていた。

「え、え？ 何此れ……何此れ?? き、きき、奇跡??」

停止していた胸が、上下した。
そして瞼を開く。

「な、に……死んで、ない？」

喉に引つ掛かっていたが、善く通る声だった。男のそれより高く、女のそれより低い。

体を起こす少年へと太宰は云う。どういう心境なのか、太宰自身にもわからなかった。

爆発音がして、壁に風穴があく。光が飛び込んできて、そこから白い着物姿の少女が天の使いのように、羽でも生えているかのように軽やかに飛行物から飛び込んでくる。その足には切れた楔が音を鳴らしていた。

「援けに来た。早くここを離れないと、この階が潰れてしまう」
「っ 鏡花ちゃん！ 善かった……よよよ、善かった……もももももう、僕には何が何だか……！」

少年は突然の外の光に目を細めて、手で庇をつくる。

そしてその手に違和感を覚えたように見る。そして、顔にかかる髪の毛の色にも。

太宰は、掛けるべき言葉を口にした。

「きみは、間違いなく、織田作と中村和枝さんの子どもだよ」

少年は、太宰の瞳の中に映る自分の姿を見て、ひくりと喉をひきつらせた。

乾いた鳶色の瞳に、水の膜が張り、一筋零れ落ちた。

「でも本当は、きみがどんな姿でも、織田作の子どもであることに変わりなんてないんだ」

その骨ばった肩に、太宰は触れた。

?? ? ?? ?

外に出て、飛行物へ乗り込み、脱出する。土煙を上げて、十四階建てが十三階になる。

ビルは無人状態へと誘導済みであり、ビルの下には防護用のシートが張られている。

……被害は少なく済むだろう。

空に浮かぶ雲のように白い飛行船が、海へと落下する。

そこから白いパラシュートが二つ、それとは別にゆっくりと降下している。

そのうちの一つに目を止めて、赤毛の少年が立ち上がった。

降下先へと駆けていく。

パラシュートを操って、綺麗に着地した長身の男は、立ち止まりかけた少年へと腕を伸ばした。

他の面々は、早々に背を向けて、こそこそと声を掛け合った。

その後も休みなく事態の収拾に動けば、夕日が海に沈もうとしていた。

遠くで凸凹した影が、ふたつ並んでいた。

敦は、夏梅と織田作の後ろ姿を見送って、何故か苦しくなった胸を押さえた。

背後から、太宰が声をかけた。

「敦くん、今回はお疲れ様。大活躍だったね」

「太宰さん……そんなことないですよ」

その眉目に笑みを刷いた太宰が斜陽のなかから声をかけてくる。

何か敦からの言葉を待っていてくれるように感じた。

敦は、おずおずと口を開いた。

「太宰さん、僕は今回、解らないことが増えました」

「それはなんだい？」

港からの潮風が、太宰の蓬髪と外套とを吹き荒ぶ。

昏い瞳は光を飲み込んでしまったように見えた。

「夏梅君が、自分と織田作さんが似ていないことをとても気にしていました。僕の眼からすれば、『ああ、きつとこれが父子おやこなんだ』って、そう思える関係だったのに。——ただ、姿かたちが似ていないというだけで。夏梅君の苦悩が……あんなにも不安になって、追い詰められ

るのが、なんだか共感ができなくて、ただただ不思議で

並んだ背格好が似ていた。背の高さは違うが、とてもよく似ていた。

しかし、そうでない時であっても、二人は親子としか思えなかったのに。

「なんだか、自分に縁がない世界に感じていた分、夏梅君たちは僕にとっての親子の心象イメージになっていったんです。似ている、似ていないというだけで、崩れてしまうほど脆い関係なのかと——僕にはそれが解らないんです。……僕にはそれが元々ないから、かもしれないけど」

俯いた敦が、迷子のように自信なく呼びかけた。

胸の中に渦巻く感情を、何とか人の言葉で、問いとして絞り出す。それが、本当に聞きたいことだったのか敦には解らない。

「——父子おやこってなんででしょう。どういったものなんででしょう」

「誰にだって生まれたからには、父親と母親がいるものだよ。けれど、親子として共に過ごせる人間は限られているのかもしれない。その幸福を、夏梅くんは識っていた、あの幼さでね」

影の中で、太宰は微笑んだ。

「きみにも居た筈だよ、敦くん」

「僕にはいませんよ。孤児ですから……」

砂色の外套コートに両手を突っ込んだ太宰は、背を向けた。

「真実は、受け入れがたいものだ。——すべての真実を知ることにはできない。ただ、人は自分の目で見得たみえと思ったものを真実と思う。け

れど——きみの眼にみえたものは、すべての真実の一端でもあるのさ。信じればいい。……私もそうしようと、今度のことで思ったよ」

太宰が顔をあげて夕日に染まる空を見上げた。

子連れの鴉カモメが飛んでいた。遠くで、『親子連れのカモメですよ！』と江戸川に話しかける宮沢の明るい声があった。それについて何事か江戸川が解説し、国木田が称賛する。その国木田へ、何故だか江戸川が『今晚はよろしく』と言葉を掛け、国木田が戸惑いつつ頷く。

探偵社のいつもの光景に戻りつつある。

「すべての真実を得たとしてそれが何なのだろう。どれだけそれが正しいことであつたとしても、幼い子どもに、自分が父親の子じやないかも、なんて言わせて善い道理なんて、何処にもない」
「正しさは——ですか」

そうだった、と太宰は口角を上げた、「私としたことが」

太宰はゆっくりと目を閉じる。そのまま口元を僅かに歪めた。

「太宰さん……？」

「敦くん。私はこの幸福な現実を享受することにするよ。真実が人を救うことなんてほとんどない。人を傷つけることはあつてもね。真実が人を傷つけるばかりなら、それはきつと見つけなくてもいいものなのかもしれない」

「太宰さんは——何を心配しているんですか？」

首を傾げて、心配、と口にする。そして、目を見開いたかと思うと、くしやりと顔を歪める。

そうか、と。そして、ほっとしたように表情を和らげた。

夕陽が傾いて、闇に包まれようとしている中で、太宰はどこか安堵したように目を閉じた。

まるで夢を見るように。

「そうか。私は心配していたのか。この幸福な夢が醒めてしまうことを」

「夢、ですか？」

太宰は自分の言葉であつたのに、それを否定した。目を閉じたまま、太宰は微笑む。

「——いいや。現実さ。さあ、帰ろう、今日は奢りだ」

目を開けて太宰は、敦へと片目を閉じて見せた。敦が歓声を上げる。

「ほんとですか！」

散々動き回って、神経も使って、今ならば馬一頭でも食べることができそうだった。

途端に、空腹を自覚して——太宰と初めて出会った時のことを思い出す。

その日も、こんな夕暮れだった。

「国木田君のね」

「うわ……太宰さんってば、またそんな勝手に」

いつかと同じ、流れを繰り返す。

しかし、その時とは違い、新たに加わった人もいる。

「おや、じゃあ敦くんは、行かないのかい？」

「行きます！ 行きますからね！ 鏡花ちゃんも一緒に！」

敦の言葉を受けて、離れたところで、ひとり俯いていた鏡花が顔をあげる。

探偵社のだれもが、気にしつつも声を掛けずにいた。

鏡花は望んでいた人からの言葉に、目を細めて、微笑んだ。

そうしてやっと、探偵社の他の面々も笑顔になる。

待ち合わせ時間から、三十分ほど遅れて、よく似たふたりがやってくる。

太宰を睨みつつ、周りから笑顔で集られて、財布を握りしめる国木田を見つけて、ふたりはそっくりの動作で首を傾げた。

「どうしたんだ」「どうしたんです？」

その仕草に、谷崎兄が笑い、他の面々も噴き出した。

不思議そうな顔で、年の近い姿の父子は目を瞬かせた。

多くの組織を敵に回し、複雑に手を組み、敵味方入り乱れた争いはこうして終結を迎える。
宴会にまで発展した打ち上げから、一人席を抜けて切り上げたのは太宰だ。

国木田の奢りといって、それに乗っかる面々とは別に、所用があつて参加できなかった親子がいた。

煌々と明かりが灯る美術館。

そこには、体に絆創膏と湿布を張りながらも、せかせかと歩き回る学芸員の溝地と、その他の施設の人間がいた。地理一つなく磨かれた大理石は、柔らかな光をより輝かしく反射している。

太宰はひとつの絵画の前に、座っていた。

その背後に、ポートマフィアの幹部が近づく。

「横浜は荒れる」

そう口にして、太宰は昔の部下を振り返り、両目でその人物を見上げた。

「ねえ、広津さん。この絵、どう思う？」

「絵、ですか？　そうですね、写真でいいのではと思う出来栄です」

太宰は破顔した。

「所が違うんだよ、これが。この絵はね、嘘ばかりなのさ」

「嘘、ですか？」

聞きようによつては、信じがたいという響きにも聞こえる。

ふふつと太宰は笑った。

「そう。でも——それを真実と受け入れれば、それが一番真実に近い……そんな絡繰りのような、緻密に計算された絵だよ。きつとこれを描いた人は相当性格が捻じ曲がり捻くれまくっている」

「……………私には、芸術方面の感性が乏しく……………」

「ああ、いいんだよ、ちよつとした愚痴だから」

広津は腕を胸の前にして、頭を下げた。

音もなくその場から立ち去る。太宰はそのまま、精巧な絵を見上げた。

そして立ち上がる。

絵画をうろろとすれば、そこには特別展として、一つの絵画が飾られている。

その入り口から覗き込めば、よく似た後ろ姿の二人がいた。

その絵には題目がついている。

見つけたのは、絵をこよなく愛す、執念深い溝地だった。

それなりの期間、催眠を受けていたというのに、そのバイタリテイは流石だった。

『『わたしの何か』だって。何かってなんだろうね、おとうさん』

「そうだな。言葉を定めていないからこそ、それが何だったのかと考えさせられるな……………」

ふたりは並んで、家族の肖像画を眺めていた。

父の言葉に、子どもは、何かを感じ取った様に「そっか」と口にする。

「きつと、おとうさんに、考えてほしかったんだと思うよ。ずっとね。おかあさんのことを忘れちゃっても、おかあさんが死んじやっても、ずっと考え続けてほしかったんだと思う」

子どもが明るい声でいう。

『わたしにとってあなたがどんな存在だったでしょう』ってね」

そうか、と呟く友人の声を背中で聞き、太宰は微笑してその場を後にした。

個展が開かれる、前夜の忙しい美術館内で、水たまりのように静かな場所がある。

そこを通りながら、通り過ぎかけた絵の一つに、太宰は足を止め、その前に戻る。

それは、島々の浮く海が白いカーテンのかかった窓枠から見える、書斎の絵だった。

机には、潮風に吹かれる原稿用紙とそれを押さえる文鎮、無造作に転がる万年筆があり、床には積み木の家が傾いている。

その絵の上の右端に、隠れるように拳銃の影が描かれている。

「織田作は、こんな生活をしていたのか」

見ているだけで、潮風を感じさせる絵だった。

瀬戸か、と口のなかで呟いた。

幕間 隙間を埋める小噺 陰に日向に

表面の壁紙も、継がれた木の柱も燃えてしまったのか、白石が建物の骨のように残っていた。割れてしまったステンドグラスの破片が散り、不思議な色付きの影が落ちる石畳の間には、緑色の自然な縁取りがあり、所々日向に贈り物のような、小さな黄色い花が咲いていた。人がいなくなつた場所だからか、野花が咲いていても踏みつぶされないのだろう。

とても静かな場所だった。

辺りを具に見回っている父の少し後ろから、太宰が包帯の巻かれた手で片目を覆いながら遅れて付いてきていた。夏梅は、仮令そこに罨があつたとしても、致命傷までなら——死ななければ回復できるので何の気負いもなくその場に立ち入った。制止の声はすぐにかかったけれど。

「——夏梅、一人で先に行くな」

「だーいじょうぶ、だいじょうぶ」

其処彼処の暗がりにはさえ静かに白い野花が咲いている。火事があつたというのはきつと随分と前の事なのだろう。そこは、誰も隠れることができいだろう、ひろい間取りだった。

真ん中辺りにはぼつんと白い椅子が一脚だけあつた。

その背もたれに白い紙切れが貼られてあるのを目に留め、夏梅は駆けだした。同時に、後ろで地面がざり、と音を立てるのが聞こえた。

「おそろく心配はいらないよ、織田作」

軽く地面を蹴りかけた父の行動を、太宰が言葉で引き留める。

そして父は太宰の顔を仰ぎ見でもしたのだろう。

二人は立ち止まり、声だけが夏梅の背を遅れて追ってきた。

「こんなにひらけた場所に何かを仕掛けるのは至難の業だ」

「そうは云うが、太宰。あの子は何の変哲もない床でも躓いて転ぶよ
うな子どもなんだ」

太宰の少し考えるような間があつて、慎重な口調で父に対する応えがあつた。

「……それはきつと、夏梅くんがああ姿になる前じゃないのかい？
云つてはおくけれどね、織田作。幼児期の子どもなんて、立つては転ぶのが自然なものだよ」

「そうなのか……」

後ろでごちやごちやと話す大人二人を放つておいて、夏梅は白い椅子に近づいて行く。貼られたそれは、夏梅のメモ紙ではなかつた。手に取つてみると、そこにはパソコンから打ち込まれた数字と文字で、計算がかかれてあつた。一桁の計算だ。

「こんなのかんた……あえ？」

一見して平易な足し算だと思われた。

しかし、よく見ると、それが大変におかしなものだと気づいて、言葉が途切れた。

自然に顔が険しくなる。

「え、なにこれ……」

「——如何したんだい？」

太宰が肩口から覗き込んで来た。それなりに背の高い太宰が屈むと、なんだか落ち着かなくなる。それを抑え込んで、持っている紙を見せた。

「これ、椅子に変なのを書いてあつて」

「変なの……ああ、なるほどね」

納得したような声の太宰に、夏梅は怪訝な顔をする。

「どうした？ 二人して何をそんなに覗き込んでいるんだ？」

遅れてのんびり掛かる父の声に、夏梅と太宰が揃つて振り返る。

口を閉じ、眉をあげ、目を僅かばかり瞠つた顔としかいいようがないけれど、夏梅に言わせれば、ちよつときよんとした雰囲気纏わせていると見えた。

「おとーさん、見てよ、これ」

「織田作、なかなか興味深い問題だよ、これ」

目にいつもの陽気な笑みを浮かべた太宰が、指さす紙面には次のよ

うに書かれてある。

『1たす4たす5は1、3たす7たす9たす0は2、8たす6は3。では、3たす4たす5たす6たす7たす8は?』

おかしい。何がおかしいって、最初から最後まで全部おかしい。

夏梅だつてわかることだ。でも、この訊き方、なんだが馴染みがあるような。

でもまさか。そんなそんな、まさか……いやいや、ない。……ないな。

「問題? 如何いうことだ?」

「つまり、これを解けば、絵の在り処が分かる、ということなのかもしれないね」

「……犯人はどういう心算でこんなことを始めたんだ? これまでのことを考えても、予めこちらに絵を返す気があつたと思えないんだが」

「——え? そうだった?」

父の疑問に、夏梅は首を傾げた。顔を見合わせていると、太宰が見比べるように視線を寄越してきて、ひとつ瞼を閉じた。そして、太宰はやや声の調子を落とし、一石を投じる。

「……却説、どうだろう。ひとまず、ここで考えることではないね。絵を見つけて回収してからでも、考えるのは遅くはないさ」

「それで、今はこの問題を解けばいいんだな?」

とりあえず納得した父が、両手を外套に突っ込む。そして、腰をかがめて夏梅が手に持つ紙面を覗き込んだ。少し離れたところからは流石に見えなかつただろう。さらつと視線で改めて紙面の上の情報を浚っていくのが分かる。

「ね、面白いだろう?」

太宰はさつきからずつと愉快そうな顔だ。なんだか一人だけで分かつたような顔をするので夏梅は怪訝に思ったけれども、次の父の言葉に顔をそちらへ向けた。

「なんだ、計算か」

「計算だけど、おかしいよこれ」

首をかしげる父に紙片を視えるように体を傾けて夏梅は言い募る。
「ここにある計算ぜんぜん後ろの答えの数字にならないよ？ おかし
くない？」

「そうだな」

一瞥して軽く瞬いた父は特に訝しんだ様子なく頷いたが、太宰が
ちつつちと立てた指を横に振り、違う意見を述べた。

「いや、それがこの式のルールなのだよ」

「るーるう？」

わからん。夏梅は父の方をちらつと見る。

ちよつと期待を込めた視線で、けれど半ばあきらめていてもいた。

「……………おとうさん、解る？」

「解らん。こういうことはお前か太宰に任せる」

父は、夏梅の問いかけにのみ、あつさり答えた。もう少しくらい
粘ってくれてもよくないだろうか。仕方ない。整理も何もなければ
ど、こういうことは箇条書きで一つ一つ分離して考えるものだど夏梅
は教わった。

・ 1 たす 4 たす 5 …………… 答えは 1

・ 3 たす 7 たす 9 たす 0 …………… 答えは 2

・ 8 たす 6 …………… 答えは 3

例題が三つある。太宰の言葉を借りれば、これがきつと次の問題の
答えに関係するルールに則った見本なのだろう。全部、納得がいか
ない。

夏梅の気持ちは抜きにするとして、答えなくてはならない問いは次
のようなもの。

・ 3 たす 4 たす 5 たす 6 たす 7 たす 8 …………… 答えは？

もし、これを書いた人が夏梅の目の前にいるとしたら、優しく算数
の計算の仕方を教えてあげる所存だ。先ず問題文から違いますよと。
おふざけはここまでにしよう……。夏梅は反省し、もう一度きちん
と問題に向かい合った。

「うーん」

紙面とにらめっこする夏梅の後ろで大人たちは呑気におしゃべり

をしている。

「織田作はこの問題、本当に私たちにパスするのかい？」

「ああ、できれば頼む。こういう、頭を柔らかくして解く問題は不得手だからな。単純すぎても複雑すぎても俺には解らん。きつと、発想力がないんだろう」

「潔^{いさぎよし}過ぎて詰まらないよ織田作」

そうか、すまないという父の気持ちのこもっていないように聞こえる言葉を耳の外へ流しながら、夏梅は顎に指を掛ける。

この問題で、夏梅が一番はじめに気になったのは、計算があつている合っていない以前に、なぜ $1+4+5$ と表されていないのだろうかということだった。ただ算数の計算の問題なら、 $1+4+5$ プラス プラス イコール 1 でよいはずなのに、そうは記載されず、「たす」という文章で書かれている。そのことに何か意味があるとか。……わからん。

「ややや……考える、かんがえる」

神西がここにいたら、ちゃんと自分で考えないとまた『怠惰』ですよと云われてしまう。それはむつとする。しかし……夏梅のちつぽけな頭脳に入っている知識など高が知れているわけであるし。数式として表記されていないのは、文字通りの計算ではないからとか？でも、それなら数字は何を意味しているのだろう。

うんうん悩みつつ、夏梅はまず答えを見ることにした。すると、求められている問題より前の答えは1, 2, 3と順番に来ていることに気付く。……まどろっこしいこと全てに目を瞑り、安易な考えで答えだけに注目すると、次に来る答えが『4』であったなら。

(1, 2, 3, 4になるなあ……けど、どうだろ)
来^きそうな、来^こなさそうな……。

夏梅はため息を吐いた。

「——ん？」

父と太宰たちが夏梅を振り返った。

大人たちの無責任な視線に、何でもないと言首を振る。再びため息がもれる。夏梅だって判っている。こんな考えで正解に辿りつくはずがない。でも思い浮かぶこともないし。それにいい感じに答えの数

字が順番に並んでいるし……。

とはいえ、だ。もし仮に万が一、その答えが合っていたとしても、問題を解いた気がしない。もちろんそれは、原因とか理由とかを考えないまま、結果だけをみて推測したのでそれは当たり前なのだけれども。そんなすつきりしない気持ちでいるので、夏梅はその答えがあつていると期待もしていない。寧ろあつていないことを期待する。どうしてかといえ、やっぱり夏梅の考えたような答えの順番だけを考えて前の部分が何も関係ない問題なんて、全然たのしくないし、すつきりしないのだ。

でも、絵画は、この答えがないと在り処が分からないらしいのだ。だから絶対に判らないといけない。答えが合っているかどうかだけを考えるのなら、夏梅は、それくらいしか思い浮かばなかった。だって、1, 2, 3まで来ているのだ。次は4が来ると思うのは普通じゃないだろうか。普通じゃなくても、夏梅はそう期待する。これで5とか来るだろうか？

(……そういえば1以外で2, 3, 5つていう順番は教科書にあつたよな。ええつと……たしか『素数』で、でも4は『素数』じゃなくて、3の次に来るのは5だった。もし1と素数の小さい順なら、1, 2, 3, 5つていう並び方でもそんなにおかしくない？ あれ？ でもこれつてそんな話だっけ?)

思考が迷走しだして夏梅は現実でもうなりを口から漏らしていた。

「えー……でも……うう……」

わからん。そうだ、放り投げよう。

夏梅が紙片から顔をあげた時、何も考えていなさそうな父の顔が目に入る。

だめだった。父に任されていたのだ。悩み過ぎて忘れてしまっていた。もう一人担当の太宰の方は……考えてなさそうだし。

むむむと口を引き結んだ夏梅の横で、太宰がにっこりと満面の笑みを向けて来た。

「私、解ったよ?」

「えええーうそだー」

声が大きかったのだろう、屈んでいた上半身を起こした太宰が眉を上げてみせる。

「心外だね。嘘などつかないさ。本当の、本当だとも」

胡乱な眼で、夏梅は問いかけた。

「じゃあ、答えは？」

「その前に、夏梅くんはどんな風に考えたかを聞きたいな」

うーと呻りながら、夏梅は安直に考えたことをそのまま、「次の答えは、4……かなって」とだいぶ渋って答えた。合っているはずがないということくらい、夏梅にだってわかる。

しかし、夏梅の予想は裏切られる。

太宰はにっこりと笑顔で、縦に首肯した。

「同感だ。私の答えも『4』だよ」

まさかの答えが一致。

どうしよう。

「ええええーうっそ……？　うえ、でも、もしかして、ホントに？」

自分の考えは間違っているだろうが、太宰がいうのならその答えだけは正解なのかもしれない……。でも、どうして『4』が答えになるのか。自分で答えておいてなんだけれど、太宰の答えとはつまりこれ偶然の一致なわけで……。

夏梅がうんうん、唸って頭を捻っていると、父が感心したように云う。

「すごいな、夏梅。太宰と渡り合うなんて」

「いやたぶん、わたりあつてないよ……」

俺には解らなかつたと顎に手を遣ってしみじみ感心する父だが、夏梅の控えめた否定の言葉にきよとんとした表情を見せる。こういうとき、夏梅と同じ年くらいの子どもを相手にしているような気持ちになるのが不思議だった。

父は、そうなのか、と首をかしげながら、けれども重要なことを口にした。

「それで、その答えが出たところで、何が分かるんだ？　答えが『4』だけじゃ、絵の手掛かりにはなりそうにないが」

「たしかに」

何が『4』なのか。

「それはこれからだよ。とりあえず、この部屋で、『4』に関するものをみていこう」

「よんに関係するものって？」

「そうだね、例えば、この椅子は四足だね。この紙自体も四つ角だ」なるほど、と父とともに頷くと、夏梅は一緒になって辺りを見回した。

まず何かに気付いたのは父だった。

「——そういえばここの窓は、四角ではなく、上がアーチ形だな」

「ほんとだ……」

「早速、織田作が選択肢を消してくれたね」

太宰が人差し指を立てて、片目をつむって来た、「あとどれくらい『4』に関係するものがあるかな？」

慌てて夏梅は紙を父に押し付けた。

「ぼくも見つける！」

どこに四角いものが、四つの物があるだろう？ 張り切って部屋の中を歩き回り、目を皿のようにして見ていく。だから、夏梅の耳は、太宰が何事か呟いたのを拾うことはなかった。——或いは、その音と通じる『死』であったり、ね。

絵を見つけたのは、それから数時間後の事だった。

はじめの計算の問題からはじまって、いつまで続くのかというほどに謎かけがあった。ねちっこい。夏梅すらそう思うほどで、絵の探索の途中で、にこやかだった太宰もちよと怖い顔をして謎解きを猛然と熟していた。すべての絵を見つけたときは、砂埃にまみれていた。

鼻がむずむずするし、眼もしばしばする。なかなかスリリングな探索だった。

どうやら、廃墟といっても、裏組織の人たちに時折利用されている

のか、明らかに盗品かなと思われるような金の延べ棒であったりという見つけてはいけないようなものを見つけてしまったりした。一番印象に残っているのは、廃墟の床下に、隠された空間があるのを発見したことだ。これには太宰もびっくりしていた。大人ひとりは横になれるかなといったくらいの大きさだけれども。絵画はそこに納まっていた。その下には、ぼたぼたと黒い焦げ跡があった。あれは、火事の時のものなのだろうか？

重たい絵画は、父と太宰が廃墟から運んでいる。

夏梅は自分の身一つ運ぶことにした。つまり、普通に手ぶらで歩いた。

随分と長い間待ってもらっていたタクシーの運転手には、大目に代金を払って乗せてもらった。

高層ビルの前で降り、すぐに絵画蔵へと絵を収める。

そこからは徒歩で戻るのだが、照り付けてくる日差しは容赦ない。

もっと耐えがたいのは、日射よりもアスファルトから発せられる熱の方だ。

「うわあ、見てよ、おとうさん。向こうの道路がゆらゆらしてる。……

あれが蜃気楼？」

「陽炎だな」

「かげろう……」

父は外套を脱いで肩に掛けた。太宰も手で襟元を煽いでいる。

なんとも頭が沸騰しそうな暑さだ。

額の汗をぬぐおうとしたら、じやりじやりと音がしてげんなりする。

「帰ったらお風呂だ、絶対そうだ」

「風呂掃除は誰がするんだったか」

「ぼくだー……もう」

父と騒いでいると、ちよつと昏い顔をしていた太宰が呆然と呟いた。

「織田作んちのお風呂は当番制なんだ……」

お風呂掃除が当番制だからってそんな茫然とされるようなことな

のだろうか？

きつと疲れているに違いなかった。今日は朝からとても暑かった。太宰は俯いて、ひとりくすりとわらった。

「——なんだろう、この会話」

今話しているのは、太宰だけだと思う。

変な独り言する太宰はきつと暑さに参ってしまったているのだ。

夏梅は父の袖を引いて耳打ちした。

都会の中で、瀬戸の田舎を思い起こさせるような構えの店がひとつ。

扇風機が回り、ひんやりとした空気が肌に当たる。

カラン、カランと涼し気な氷とガラスが打ち合う音がした。

「おまけしといたから、皆と仲良く食べるんだぞ坊主」

「ありがとう、オジサン！」

でつかくなれよ、と腕まくりした店主がにかりと白い歯を見せ、夏梅の頭をがさつに撫でてくる。

髪質が柔らかいせいとか、ぐしやぐしやになった。

目にかかりそうになった黒髪を直していると、どこからか、ぷと噴き出す音が聞こえた。

商売人の大きな声だったから、店内のどこにいてもその声が届いただろう。先に出口に向かっていた、発泡スチロールのボックスを両腕に抱えた父へ、扉を開けてくれていた太宰が振り返っていた。

逆光だったけれども、その顔が笑っているように感じた。先ほどの笑った犯人だと覚った夏梅はむくれた。

「……ぼく、いつでもおつきくなれるもん」

その人は遂に、大口を開けて笑い声を立てながら、夏梅を迎える。不思議そうに振り返る父と共に。

絵画蔵へ絵画を収めた後、探偵社に寄って、最後の絵も回収し終わったと報告しに行くことにした。慰労という意味も込めて、暑い日の風物詩であるアイスを買って持って行く。移動中に、幾らか埃っぽさが抜けていったのは、周りの人にご免なさいというべきだろうか。

「おつかれさまです、もどりましたー」

「冷え冷えのアイスも一緒のお戻りだ。さあ今、探偵社こにいる幸運な人間は何人いるだろう？」

「みんな呼んでくればいいよ。……敦おにいさんや鏡花お姉さんもいたらよかったけど」

「そうだね。早く『その時』が来ればと思うよ」

いつのまにか元気を取り戻したらしい太宰は、穏やかに頷く。

太宰の信頼を得る中島が羨ましいと思う一方で、素直にすごいと思う。

きつと夏梅は、そういった意味で太宰の目に留まろうとは思っていないから。

事務所には、長椅子に横になって団扇で顔を扇いでいる与謝野とケースから出した黄色い背中のカブトムシの角を拭いていた宮沢がいた。ちなみに冷房はガンガンに効いている。

「おや、いいところにいい物を持って来たねエ、あんたたち」

「わあーい、アイスです！ ナツメくん、太宰さん、織田作さんもおかえりなさい！」

歓声が上がリ、与謝野が体を起こし、宮沢がカブトムシと共に出迎えてくれる。

「ああ、戻った。人数よりだいぶ多めに用意してあるから、好きなだけ取ってくれ」

「わあ、沢山ですな！ 僕、作業してる国木田さんと谷崎さんも他の部屋から呼んできますね！」

「ああ」

宮沢が出ていく際に、夏梅ににこりと笑顔で、カブトムシを持った手を振るのでそれに返した。

「あんたたちせめて、手と顔を洗って来なよ。砂だらけじゃないか」
だいぶ落ちたと思っただけけど、そうでもなかったようだ。

三人でお互いを見比べて肩を落とした。

「与謝野女医に云われたんじゃあ、断れない。ちよつとシャワー室借りてきます」

「殊勝じゃないか、太宰」

「私は与謝野女医に対しては何時でも殊勝でしょう?」

「どうだかねエ……」

与謝野が意味深に笑って、立ち上がる。その所作が綺麗だな、と夏梅は瞬いた。

夏梅の視線に気づいてか、与謝野が口元に指を持っていく。

その口元が笑んでいることに気付いて、夏梅はなんだか居た堪れなくなつて父の後ろに隠れた。

「妾は乱歩さんアダンを呼んでくるよ。今回の絵の隠し場所探しの一番の功労者だもの。社長の部屋にいたら、一緒にいるだろうから声をかけてくるよ」

蝶の髪飾りが外の光にきらきらと輝く。ひらひらと手を振り、与謝野もまた出ていく。

「これはここに置いておいてもいいと思うか、太宰」

「これだけ冷房が効いていたら、大丈夫さ」

そうだな、と太宰に同意した父が発泡スチロールのボックスをローテーブルに降ろす。そして何処からか着替えを用意してくる。太宰もまた着替えを持っていた。

「用意周到ってやつだね。どうして着替えなんて持つてるの? 太宰さんも、おとうさんも」

「そりゃあ、もしもの時のためにだよ」

「もしも……」

もしもとは。

「仕事によっては、泊りがけの時もある。時間がないときのために、二着ぐらいはこっちに置いてる」

「そうそう。夏梅くんも本格的にここで働き始めることになったら

きつとわかると思うよ」

太宰の言葉の何かに引つ掛かったが、父に背中を押されて歩き出す。

勝手知ったる建物内といった様子で父と太宰が進んでいく。

そういえば、夏梅はここに来はじめてからそんなに時間が経っていないのだなと改めて感じさせられた。

「僕、シャワー室に行くの初めてだな」

「私も織田作もあんまり行くことはないんだけどね」

「家が近いからな」

父はさらつという。さっさとシャワー室から出ると、肩にタオルをかぶせられた。頭を乾かすのが一番時間がかかるのだ。面倒くさい。ドライヤーもそこそこに、三人で事務所に戻ると、他の面々も集まっていた。

「待つてましたよー」

「お疲れでしたね」

口々にねぎらってもらえるけれど、それは夏梅が云いたいことだった。

待つていてくれたらしく、改めて保冷剤をどかした中の色取りどりのアイスを手取る。

束の間の休憩だ。休憩というのは、何かをするための休み時間なので、限られているのは決まっている。

でも、中島の脱出の準備に奔走する面々と、身柄引き渡しのための交渉を進める太宰、そして絵画を回収するというそれぞれ重複した役割を熟しているというのに、夏梅は、そうではない。

俯いていると、太宰が思いついたと云った風に話しかけて来た。

「そうだ、夏梅くん。ちょっと頼みたいことがあるのだけれど」

「頼みたいこと?」

「このアイスを、持って行ってあげてほしい人がいるんだ」

席をはずしている事務員の人でもいるのだろうか。

「うん? いいよ。何処にいるの?」

「その人はね——医務室にいるんだ」

太宰はひっそりと笑んだ。ちらりと父が目を向けてくるのが分かったが、父は特に何も言わず、顔を戻してアイスを齧った。駄目だと云わない父の反応を確認して、頷いた。

「うん、持って行けばいいんだね？」

「ああ、頼むよ」

スイカの形をしたアイスを手には、夏梅は病室の扉をノックした。

古風な誰何を受けて、夏梅は「なつめです」と答えた。聞いたことのない人の声だったので、こんな人いたかなと疑問に思っていると、入っても好いと云われたので、扉を開ける。

斜陽を受けて橙色に染まった医務室のなかで、その女人は呼吸も潜めたように静かに、独り佇んでいた。なんだか……廃墟の日陰に咲いていた白い花を、夏梅は思い出した。

妙な神妙な

両手を組んだ上に顎を乗せて、エプロン姿の父の広い背中を、口をとがらせながら眺めた。漂う……肉と香草、油の匂いの空気を吸っているだけで、もう夏梅はなんだか、胸いっぱい、お腹もいっぱい気分だった。

「……おとーさん、さっきからずっと、なに作ってるの?」

「寝台列車での料理を再現してみようかと」

父は、木べらを手に、「そう、思い立ったのはいんだが……」とその横顔を微かに曇らせた。なにか心配事でもあるのだろうかと思夏梅は首をかしげる。

夏梅の食事が格別注意を払わなくてはならないものだったので、父もまた栄養士並みの知識を持つようになっていた。父は手先も器用なので、料理に凝りだせば上達も早い。きっと今では母よりも父の方が料理上手なのではないかと思う。その父が、料理で何か悩みがあるのだろうか。

夏梅は、いま父が手掛けている料理の具合を見ようと目を細めた。ざつくりと切られた葉野菜はボウルの中に納まり、食卓に出す際に盛り付けるのだろうか大皿は既に作業台にセットされていた。今は火がかけられていないけれども、片方のコンロに鎮座するのは、先ほど完成したカレーの入った厚底鍋だ。

「あそこで食べたものって」

「ああ」

父は頷く。

「……夏梅はちょっと間をおいて首を傾げた。

「えつと……」

カレーのことではないのだろうか。

じつと眺めていた割に、夏梅は目の前の状況を理解できていなかったようだ。

ひとつひとつ、言葉にして確認していく。

「お悩みは……カレーですか?」

こだわりが過ぎて、満足のいくレベルが高すぎているんじゃないかなるか。

父は目線を天井に巡らせてから、「……違います」と首を傾げ、厚底鍋を振り返った。

「カレーは完璧に仕上がってる」

「あ、そう……」

寝台列車でのまともな食事といえば、たった二回だけ。

両方とも、カレーで、サイドメニューが、サラダだった。イタリヤ風の盛り合わせで、油が何だか青い実の匂いがしていた。そういえば、父が料理棚に、黄緑色の瓶に入った新しい食用油を揃えていた。それを使っているのかもしれない。出来上がりを想像して、夏梅は首を傾げた。

「じゃ、サラダなんだよね？　なんだかサラダにお肉を入れるなんて、とんだおしゃれ料理だね」

「肉を焼いて入れるのは、よく分からない肉の代わりだな。他にも、代替している材料が多過ぎて、全く別物になりそうだ」

「……それはそれでおいしそうだよ？」

夏梅はちよつと気まずげに両手をこすり合わせながら慰めた。

その傍ら、サラダに入れる肉が香草とともに焦げる音がした。夏梅は何だか鼻がむずむずとして来て顔をしかめていると、玄関の呼び鈴が鳴った。夏梅は鼻のむずむずから逃れるように椅子から立ち上がると、廊下に出た。パタパタと足音を立てて玄関へ向かった。

鍵を開けて、そのまま開く。私服姿の太宰は、片手に荷物を下げてにこやかに微笑んでいた。

「いらつしやい、ませ。太宰さん」

「お邪魔するよ。……このセキユリテイはなかなかのものだね」

セキユリテイといわれて、首を傾げかけた夏梅だが、ああと見当がついた。

「お爺さんがここにしろってみ、み、みつ」

「『見繕って』くれた？」

「たぶん、そう」

予め伝えておいた秘密番号は問題なく使えたらしい。

……12ケタの英数字の組み合わせをメモも取らずに一度で記憶したのはすごいのではと周りの反応を感を想像してみた。

玄関で立ち話も何である。

「どうぞ」

お邪魔します、と太宰は断りを入れて玄関に入った。扉を閉める。

勝手に鍵が閉まるオートロック式だ。一応、きちんと閉まるか確認してから、先に中に入った太宰へと振り返る。すると、太宰はこちらを見下してきていた。

「夏梅くん」

「はい？」

不思議に思っって首をかしげると、生真面目な顔をして太宰は云う。

「誰か解からないのに扉を開けるのはちよおーつと……いただけないかな？ 君はまだよくわからないかもしれないけれど、世の中っていうのはね、何かと物騒なのだよ」

「ぶつそう……」

「危険、危ないってことだよ」

「はえー……」

眉をひそめた。ここは元少年暗殺者である父がいる家ぞ。そう思った夏梅だったが、確かに、この家に良からぬ目的で入ろうとしてきたうっかりさんは大変気の毒である。——なるほど、世の中、物騒だ。

「だから、玄関の扉も、ちゃんと相手が誰かだか確認してから開けなくてはならないのだよ？」

明るくも諭すような口調に、はいいと夏梅は返事をしたが、いよいよ退屈になってきていたので、その手は既に太宰の袖を引っかけ中へ引っ張っていた。そして顔だけ振り返って奥に声をかけた、「おとーさん、太宰さんが来たよー」

奥から声だけが返って来た。

「ああ。上ってもらってくれ。今一寸、手が離せない」

「はい」

夏梅は、脇に寄せられていた室内履きを揃えて玄関先に出した。どうぞ、とにこりと笑う。顔に笑顔を固定するよう心掛けた。

「有難う」

太宰はにこやかに微笑んだが、出された室内履きを一目見て、頬の筋をひきつらせ、ひとこと「……うーん」と呻りただ立ち尽くす。

「どうしたの？」

夏梅は取り合わない心算だったけれど、乾いた瞳で太宰を見上げた。

「いや……とっても可愛い室内履きだと思つてね」

あーこれね、これこれ……夏梅はげんなりしながら、ちよつと現実から目をそらした。遠いお空の下にいる祖父を思いうかべる。

「正直のお爺さんからもらったんだけど、ぼくのことちよつと子ども扱いし過ぎだよね？ それに白い兎の耳が付いたもこもこスリッパなんて、女の子みたいだし……暑いし」

夏梅がぶつぶつと愚痴を零していると、それを頷いて聞いていた太宰がしみじみとした口調で呟いた。

「それを、私に用意してくれたのだねえ」

「……あ、赤い目、可愛いよね。先生にちよつと似てるんだよ」

夏梅は、自分でこき下ろした室内履きを慌てて褒め、ごまかそうと愛想笑いをした。

他の室内履きが出される気配がないのを察したか、諦めたように太宰が足を突っ込む。

「赤い目の、先生ね……」

「髪はとても真っ白いよ、おじいちゃん先生だからね」

ふうん、と太宰が空いている手で顎を撫でる。

「随分と、お年を召していらつしやるのだね」

何やら考え込んでいるらしい太宰に、何か引つかかることでもいったらうかと内心で首をかしげたが、いい加減、そう広くもない廊下で窮屈過ぎだった。太宰の、袖を引っ張る。

「おとうさんが晩ご飯作っているから」

「織田作の手料理かあ、はじめてだな」

父が料理上手であることを知らないな、と思った夏梅は、太宰の驚いた顔を思い浮かべてちよつとご機嫌になった。奥からは、油の跳ねる音がした。揚げ物をしている最中なのだろう。香辛料の匂いも漂ってくる。サラダ以外もつくっているのだろう。

夏梅は、太宰を引つ張りながら居間に入った。

太宰が土産に持ってきた固豆腐は紙のように薄く切って食べた。これ豆腐なんだよね？　と思いつつ父と共に食べる。不思議なことにとっても美味しい豆腐の味がした。紙のように薄いのに。

「あー……豆腐の角に頭をぶつけて死ぬって、こういう豆腐に頭をぶつけちゃったのかな？」

「そんな物騒な話、どこから聞きつけて来たんだ？」

「物騒かなー？」

物騒だろう、と父は水を飲みながら、不思議そうに言う。

夏梅も不思議に思つて父を見上げた。

すると、太宰が机の向かい側から口を開く。

「この豆腐だったら、死ねないことはないと思うよ。何しろそのために開発したのだからね」

「ああ、例の妙な試みか」

「そう。私の神妙な趣味さ」

父も、太宰の試みについて思う部分はあつたらしい。

当の太宰は気にも留めていないようだけれど。

「……わざわざ固い豆腐を作らなくても、冷凍庫で凍らせてから頭をぶつけたらいいんじゃない？　あ、そうしたら、ほら。遺体が発見されたときには豆腐は溶けて、凶器だつてばれないよ。溶けた豆腐は、ぶつけた頭よりずっとずっと柔らかくてすぐ潰れちゃうから」

途端に太宰が膝を叩いて呻った。

夏梅はぱちくりと瞳を瞬く。

「素晴らしい、実に見事な完全犯罪だ！　才能があるよ、夏梅くん！」
「そうかな……」

太宰が褒めるが、夏梅は「何の才能だろ……」と微妙な気分になりながら水の入ったコップを持った。匙を机に置いた父が、夏梅に向き直った。

「その凶器を使う予定があるのか？」

凍った豆腐を凶器として見做せる父って天然だな、という感想を抱く一方で、夏梅の顔は強張る。つまりこれって、どういう意味で聞いているのだろう。

「……僕が人を殺すと思われてるの？」

夏梅は啞然とする。

わなわなと持っている箸から、食べかけの唐揚げが落ちる。夏梅は食べ物を粗末になんてしない！ 心外すぎる！

あんまりな疑いに戦慄く夏梅へ、太宰が努めて柔らかい声をかける。

「気のせいさ」

太宰がとりなすように父の腕を小突いて目配せするが、父は何のことかくみ取れなかつたのか、首をかしげていた。

夏梅は半眼で父親を見上げる。首を傾げた父が、夏梅に目を落とし口を開く。

「いや、そうでもないなら、お前まで自殺に嵌ってしまったのかと」

「……えっ」

「……ええっ 夏梅くんも？」

太宰が、そうなのかという目できよどきよどきと夏梅の方を見てきた。そんなわけない。自殺にはまるなんてちよつと訳が分からない言葉でもあるし。死んじゃったら、もうおしまいなのに！

こみ上げる憤りと共に力いっばい首を横に振っていると、違うならいいんだ、と父はこめかみに手を遣っていた。

夏梅は、納得がいなくて口をとがらせる。

「しないから。僕はこの先、ちゃんとお父さんのろうごの面倒を看なきやいけないんだから」

「見てくれるのか」

太宰が突如、口に含んだ水に咽た。

夏梅が机にあるティッシュを一枚差し出す。しかし太宰は余計に咳き込んだ。……手の施しようもない。いや、ティッシュの施しようも？

隣で父が向かいの太宰のコップに水を注いでいるけれど、その処置は合っているのか。

ちよつと気になりつつも、夏梅は父の言葉にすぐに反応した。

「そうに決まってるでしょ。だいたい、僕は忙しいんだよ！ 神西先生ももうお爺さんだし、正直のお爺さんも今は元気だけど、もし病気になるって倒れちゃったら、介護しなきゃいけないし」

「か、かいっ……ごほっ」

「介護か。そうしたら、横浜から瀬戸に行かないとな。……太宰はどうしたんだ？」

「そうだね。一か所に集まってもらった方が介護しやすいかも。

……太宰さん、大丈夫？ 風邪？ 病気？ 神経症？」

「お、おかまいなく」

そうか、と父が頷くので、大丈夫なのだろう。

夏梅はにっこりと満面で笑む。

「でも、お爺さんたちもまだまだ元気そうだし、それまでは横浜のここにしようよ。……その間に、是公の伯父さんの気が変わって戻って来るかもしれないしね」

是公とは、祖父である正直の實の息子である。実子がいるのならば、なぜ母を養子に取ったか、と疑問に思うかもしれない。理由は、性格にある。是公は豪放磊落とした気性の持ち主であり、片田舎の型に嵌った暮らしが性に合わなかったらしく、若い頃に出奔したきりだという。勘当の言葉を叩きつけることができなかつたことを祖父は今でも心底悔しがっているらしい——ということはおき、この是公という人物が絶縁状態になってしまったため、後継者不在となり、頭を悩ませているところに、夏梅の母が養子として引き取られたのだ。だー……。だー……。

家系図的には、母の義理の兄という立ち位置にいたので、夏梅は『伯父さん』と呼んでいる。

母は早くに亡くなってしまったし、夏梅はまだ幼い。

伯父が戻って来たなら、瀬戸の実家での夏梅の立場だつて変わつてくるだろう。

「お前は、瀬戸に戻りたいんだと思つていたんだが」

「それはーお父さんのほうだったでしょー」

唇を尖らせる。すると、ふと思いついたように、太宰へ顔を向けた。

薄切りの豆腐を口にくわえていた太宰がそのまま小首をかしげた。

「太宰さん、瀬戸の屋敷に来てみないですか？ お父さんのお友達に会つてみたいつて神西せんせいと言つてて」

夏梅の言葉に首をかしげたのは父だ。父と神西とは患者と医者という立場で、関わる時間が長かった。その人となりも父は夏梅よりもよく知っている……筈だ。

「先生がそんなことを？ そういえば、あの方も、頭が回るし、太宰とは話が合うんじゃないか」

「えええー、私、下手に小賢しい奴とは、合わないんだけどう……」

もぐもぐと豆腐を咀嚼して飲み込んだ太宰が、口を尖らせた。

夏梅はきよとりと目を瞬かせた。

「神西先生は、そこら辺の知患者などより博識で、貪欲な探求心にあふれ、医者者として数々の患者を救わんとするその人格も素晴らしい。だから――」

「神西せんせいは、何考えているかわからないくらいとっても頭が善いところも、変なところで難しーく考えることも、性格がちよつとわあ…などところも似てるから」

「太宰とは合うんじゃないか」「太宰さんとは合うと思うよ」

そのときの表情が写し取ったかのようにそっくりだったのは、本日一番の見物だったとは太宰の言葉である。

「それ……どういう意味だい……？」

どこか消沈した太宰の頭を見つめながら、話題は移っていく。主だった目的だった、白骨の出た学校の話、母の女学生時代の聞きかじった話から、横浜の危ない話へと。夏梅は父を見上げて言う。

「おとうさん、ポートマフィアつてとっても危ないんだね」

「ああ。この横浜で、好き好んで対峙したくはない相手だな」

父はカレーに唐揚げといった脂っこい物の組み合わせに胃もたれたのか、先ほどからずつと固豆腐を口にしてばかりいる。歳か、とぼやくのを横目で見ながら、夏梅は唐揚げを口に運んだ。

まだ若いさ、と太宰がの肩をたたく。

「そういえばポトマフィアって、人間を頭から一口で食べちゃうんでしょ？」

炭酸レモンを注いでもらって飲む。

さすがに口のなかが脂っこかった。

「それは初耳だな」

「なんとも野性的ワイルドだねえ……」

真顔で頷く父の顔、ちよつと呆れのような太宰の顔。

父が、不可解そうな声音で呟く

「昨今のポトマフィアは野獣化でもしてるのか？」

「敦お兄さんみたいだね。でも、お兄さんは人を食べたりしないよ」

夏梅は思い浮かんでしまった中島をかばうように云った。

口にした後に、夏梅が父の言葉で中島を連想してしまったことが伝わってしまったかちよつと気まづくなった。幸いなことに、父は中島のこと意識がいったようだった。

「人食い虎とか言われていたが、結局人は食っていないかったことは報告書にもあったしな」

「私はまず、ポトマフィアの間人が人を食べたという情報の正否を論じたいんだがね」

おかしそうに笑いを堪こらえた太宰の言葉——ふと夏梅が顔をあげて時計を見ると、そろそろ好い時間になっていた。

学芸員と画家の子

精巧な技術によって描かれた絵画は、写真と何が違うのか。其処に意味はあるのか。

溝地タケルはこう答える。

——人は意味がある物を愛すのではない、と。

古代の希臘ギリシアにおいて名高いプラトンという者は、詩人を『パイドロス』にて次のように語った。『ムウサの神々から授けられる神がかりと狂気があり、もし人が、技巧だけで立派な詩人になれるものとして、ムウサの神々の授ける狂気にあずかることなしに、詩作の門に至るならば、その人は自分が不完全な詩人に終わるばかりでなく、正気のなせる彼の詩も、狂気の人々の詩の前には、光をうしなつて消え去つてしまうのだ』と。

圧倒的な画力で見た者の度肝を抜いた、鬼才——中村和枝カズエ。

彼女の絵を、ただ写実性に優れているだけの物と囁る観衆がいる。芸術とは受け手の受け取り方を強制するものではなく、見る者と作品との関係についてどうこう口出す筋合いはない。

だから『私』個人の、私的な意見を云わせてもらえば——彼女の絵は、気が触れたような精巧さで作られた、ひとつの虚構世界だった。そこには、在る筈のものがなく、無い筈のものがあつた。安易に『見たい』と思つたものがなく、切に『見たくない』と思つたものこそがある。

彼女の絵を、一部の界限に知らしめた最初の一枚がある。

それは地下室か倉庫か分からないが、暗所に寝転ぶ少女の絵だ。学生服を着たその少女は、片方のおさげを半ばまで解いた状態で横になっている。分厚い黒縁の眼鏡を胸の上に置き、両手を腹の上に組んでいる。

健やかな寝息すら聞こえてきそうな、血色の良い頬。空間の上部の

空気穴から外の光が僅かに差し込み、少女の顔の半分を照らす——ある種の宗教画のようだった。

モデルの少女は亡くなっており、その死を悼み、その魂の安寧を願って書かれた追悼の絵、とされている。一般には。——しかしそれは事実ではない。

貸し出されなかったものに、彼女の故郷である、瀬戸の海と集落が舞台の絵画がある。

現実よりも美しく描かれた海には、白い影があった。その影は、極細の筆を更に減らして細くした線で描かれていた。見る視点を変えると、その形が見えてくる——あれは海の中に沈む髪の人影だ。長い白髪の隙間から腕を伸ばし、集落の上の方を指さしている。小さく描かれた腕だが、筋肉の付き方からして明らかに男とわかる。

最初一枚も、故郷一枚も、それは事実ではない。
モデルの少女は死んでおらず、沈んでいる男は生きている。

そう、彼女の絵は虚構を描く画家だ。

実際、彼女の在学中に多数の行方不明者は出たものの、皆帰ってきている。

逆なのだ、彼女の絵は。

海の中に沈む男も、死んでいるように描かれているのならば、生きている。

しかし——果たしてそれは、真実なのか。

溝地はこう受け取った。

彼女の絵は虚構だが、真実を描いている、と。
彼女の絵は嘘しか描いていない。

それを見て素晴らしい、本物と見分けがつかないと、本物よりも素晴らしいと賛辞する。

しかしその絵は、真実を受け入れさせるために、事実を捻じ曲げた

虚構なのだ。

けれどもそれは、本質を突く。

——観衆は気づかない。

それは、見たい物だけ見て呼吸することが許される現実社会での生の、あらゆる矛盾をついてくるような、事実よりも真実を表す鑑だった。彼女の絵は、最も目を逸らしたい一片の真実だけを具現化している。なればこそ——それが魅せるものは事実ではないともいえる。事実^{fact ≠ truth}は真実ではないということ^{fact ≠ truth}を皮肉たつぷりに指摘してくる。

人は虚構が好きな生き物なのだ。

そうだろうか？

写真よりも絵画を好む理由を示す必要があるのか。

誰かの視界を、脳内を、覗いてみたいという欲求が備わっていないと言えるのか。

それが悪辣であるほど、興味をそそられる暴力性があるのが人間だ。

けれども、彼女の絵には——希望がある。事実をゆがめながらも正しく本質を描いている。

ただグロテスクな絵を描くのではない。

ただ美しい世界を描くのではない。

しかし狂気のなかの景色を見ようと思うのなら、彼女の繊細な線で描かれた美しい虚構の一枚を見ればいい。

安全な場所から、正気のまま狂気の淵から景色を臨むことが許される。

彼女の見る世界の本質を、ゆがめて受け取りやすくしたものをただ享受する観衆の一人は、間違いなく溝地自身だ。彼女はその人生の殆どを、実家の精神科医にかかっていた。だからだろうか。捻じ曲げて虚構を描き続けた彼女の画家としての生命、人としての命は、あまり

にも短かった。

『——聞いたことはありませんよ。学生なのにとっても良い絵を描く少女がいるとね。でも実際は世に出る前に、引っ込んでしまったという。いいえいえいえ、解りますよ溝地さん。とても有望な絵師だったのでしよう。巨匠の口にも上る程ですから。けれど、どうでしょう？今、彼女の名が聞こえますか？』

『中村先生は……』

『ええ、前回お聞きしました。大変残念なことに、お亡くなりになられたと。お気持ちはお察しします。未来ある素晴らしい若手画家をひとり世に出す前に喪ってしまった。話を聞き齧った私ですら、とても惜しいと思ってしまう』

溝地は今年34になる。あれは、やっとこの大きな美術館の学芸員の職に就くことができ、ようやく一年が経ったところだった。出会ったのは、運命の絵。それまでは、他の画家の作品を礼賛していた溝地は、あつという間に彼女の絵画の虜になった。見る者が見れば、受け取れる真実。そこらの有象無象の観衆たちにはこの悦びは解るまい。

下積みをし、経験を積み重ねてやっと開催する個展の選考を任せられるようになったときには彼女は亡くなっていた。それでも、彼女の絵画を実際に手にして配列を練ること、この画廊に飾ることは諦めきれなかった。他の作家の個展を催しながら、一方ではいつも画家の遺族へと個展の依頼の手紙を送り続けた。

『で、で』

『しかし、ご存じでしょうか？ 私も……他でもない溝地さん、貴方がおっしゃるのですから調べてみました。するとどうでしょう。絵の数は少なすぎるといふほどではないようです。ですが、表に出回っている絵には既に持ち主が決まっています、取引さえほとんどない。これは持ち主が滅多なことでは手放そうとしないことを表しています。また、ご遺族の方々の情報はあまりにも少ない。地方の名士の家とはいえ、門戸は固いことでしょう。何しろ、養子入りした先の家です。

芸術家には複雑な家庭事情を持つ方が少なくありませんが、これはやはり繊細な事柄です。こうした状況で、そのうえ、この広い館内デリケートでひと月もの間個展を開くには、厳しすぎる条件では?』

『遺族の家にもお手紙をお送りし、何度かお返事も頂いています。もう少し、きつかけさえあれば、きつと』

『……その許可が遺族から下りない話ですよ』

溝地よりも年は下だが、この美術館の先達である学芸員はため息をついた。

『何も個展にこだわる必要はないのでは? 新鋭にスポットを当てたのであれば、若手の作品を集めて、紹介する名目で』

『彼女の絵は、他には代えられません』

『それは、もちろんです』

彼女の絵画は、何物にも替えられない。

替えられないのだ。

『溝地さん、これは同僚としてではなく、友人としての言葉です。貴方、****いませんか?』

そうだ、もう一度、溝地の手紙の返事を手ずから届けたあの白髪の老人に会おう。

溝地を訪ねて来た、絵画では海の中を沈んでいた男は——生きているのだから。

???

横浜にちようど来ているとのことだったので、ごり押しで連絡先を交換した。

震える手で会いたいという旨を送信したところ、拍子抜けするほど簡単にOKをもらえた。

鏡の前で、何度も薄くなった髪を梳き、ここのところストレスから多汗症になったために質にこだわったハンカチを両ポケットに入れ

る。滅多に締めないネクタイをダンスから引き出してしつかりと締めめる。年々腹が出てきて、シャツのボタンがはじけ飛びそうだが、何とか持つてほしいものだ。

気合を入れて向かった先は、海が見える喫茶店だ。

何度も深呼吸をして、店の扉をくぐる。

少し早い風鈴の音がした。

店主は厨房にでもいるのか見当たらず、客は窓際の席に青年がひとりいるだけだった。

開いた窓から潮風が吹く。

緊張から汗が吹き出し、用意した二枚目のハンカチに手を付けた。待ち合わせの人物はまだかと胸をなでおろしていると、

「こんにちは、溝地さん。個展を開きたいんだよね、この横浜で」

見知らぬ青年が開口一番に発した言葉に空気をのどに詰まらせた。

空咳をする間に、黒髪に鳶色の瞳をした青年が開いていた本に葉を挟んで閉じた。

「え、つと。では、あなたが？」

青年は目元を細めた。笑っているのだろうか。

指先でテーブルの角を打つと、先日手紙を届けてくれた背の高い白髪の老人が背後からやって来た。

「お待たせしました、坊ちゃん」

「いいよ。ちようど来たところ。座って、神西先生」

そして、溝地にも目を向けた。

感情を読み取れない、深淵を除くような瞳に、知らず唾を飲んだ。

「それに、溝地さんも」

「は、はい……」

気が付いたら言われるがまま、向かいの席に座っていた。この青年には、人を従わせる不思議な風格があった。この青年が交渉相手となるのだろうか、とじろじろと見るようにはならないことを意識して、そつと青年を見る。物静かで落ち着いた青年は、閉じた本の表紙を見下ろして撫でている。その睫毛は赤みがかっていた。光の加減だろ

うかと目を凝らすと、バチリと目が合う。そこでいつの間にか、大変不躰にみていたことに気づいて慌てて謝る。

「何で謝るの?」

「た、大変、失礼なことをしまして」

白髪の老人が青年の隣の席に着く。

潮風に、白い髭が揺れていた。

青年は溝地の言葉に首をかしげた。

「そう?」

「坊ちゃん、何か飲み物を頼みませんか」

初めて会った時もあったが、老人は頭髮が真っ白になるほど年を重ねているのに、声は想像より若々しく聞こえた。青年に気を取られていたが、溝地が連絡したのは、こちらの人物だった。

そつと見遣ると、暑くなってきたこの季節に、長袖に首元まで覆うハイネックの服だが、当人は暑そうなそぶりも見せない。年を取ると暑さや寒さに鈍感になるというが、そのせいだろうか。かつちりとジャケットまで着た溝地も大概ではある。

そのため、この老人の言葉はありがたかった。

「そうだなあ………僕はクリームソーダがいいな。先生は?」

「私は珈琲を。溝地さんは何にされます?」

「わ、私はその、アイスコーヒーで」

なんと、この炎天下の日中に、珈琲をホットで飲むのだろうか。

長い白髪を一つに編んだ老人は、手袋をした手でテーブルの上の小さなベルを鳴らした。

裏から出てきた店員が、老人から注文内容を聞き取って戻っている。

「あ、あの、も、申し遅れました。わ、私は溝地タケルと申します。が、学芸員をして、お、おりました………」

「タケルさんって言うんだ。それは知らなかったな」

青年は汗をふきふきする溝地にお冷を渡してくれた。

「あ、はい。ええと、その、この度は」

「おか………ええと、中村和枝の個展を開きたいんだよね?」

「は、はい！」

緊張で喉の奥がカラカラに干上がったが、大事な場面で水を飲むわけにもいかない。

真剣さが伝わるように、しっかりと目を見つめる。

青年は、ゆったりと瞬きしながら溝地と見つめあい、あつさり言う。

「まあ、それはいいんだけど」

「いい、いいのですか!? ……あ、いや、えと。すみません、失礼ながら……」

ぬか喜びするところだった。だめだ、落ち着けと自分に言い聞かせる。

隣に座っている老人が青年に耳打ちする。

「坊ちゃん、まだ自己紹介をしていないのではないですか？」

「ん？ あ、そっか。そうだった、ごめんね、溝地さん」

「い、いえ」

老人は中村和枝の家の使用人だと聞いた。

横浜へは、所用があつて来たついでに、溝地に手紙を届けに来たと。

「僕の名前は、中村カズキ。おか……中村和枝の身内だから、個展についてはいよいよできるようにできると思うよ」

「な、中村先生のご家族の方でしたか！ お会いできて光栄です！」

溝地は両手を出した。

青年はきよんとんとしていたが、片手を出したので、それを握りしめて上下に振った。

意外に硬い手のひらだった。

「で、では、本当に中村先生の個展を？」

両手を離し、浮き上がった腰を椅子に戻す。

前のめりになって話していることを自覚したが止められない。

「いいよ。神西先生がうまいことしてくれるから」

「丸投げですか、坊ちゃん。いけませんねえ……悪い癖がお付きになつた」

主人と使用人という関係からか、青年は老人に対してだいぶん不遜な態度だった。

しかし、一使用人に任せるような流れに、急に不安になって来る。「大丈夫だよ。神西先生は、うちのかかりつけのお医者さんだもの。……先生、お爺さんを誘導していいように動かしてよ」
「か、かかりつけ医？」

「おか……中村和枝の専属の精神科医だよ」

溝地は目をかつぴらいた。

では、精神を患っていたという噂が真実味を帯びてきた。

彼女は幼少の頃から実家に馴染みのあるお抱えの老医に診てもらっていたと聞く。

「で、では、ずっと中村先生を診ていらしたんですね！」

「——いいえ、ほんのちよつとですよ」

ということは、それほどひどく精神を病んでいたというのは間違いらしい。

溝地は、心酔する画家の精神状態が、それほど深刻ではなかったと知ってほっとした。

ちよつとというのが、程度のことだと思ったのだ。

「個展については、先生に任せるとして、安心してくれていいよ。まあ、ないと思うけど、もし先生がだめだったら、面倒だけど、僕からお爺さんに言ってもいいし」

「おや、坊ちゃんご自身が？　いったいどうされるおつもりで？」

「やりようによってはいろいろあるでしょ」

面白そうな声音の老医に対して、青年は投げやり言い捨てる。

溝地は何か言いかけたが、そこへ店員が注文した品を持ってきたので口を閉じた。

「ありがとう」

礼を言う青年の前には、空よりも濃く青いソーダに満たされたなかに、白いクリームと赤い桜桃が浮かんだ大きいグラスが置かれた。窓の外の海の景色と相まって、四季を感じる。見ているだけで一瞬涼しい心地になった——が、青年は首を傾げた。

「あれ、クリームソーダって緑色かと思った」

「そうですね。クリームソーダは昔はメロンソーダを使っていたので

緑でした。こうしたブルーハワイを使用して青くなったのは最近です
ね」

そういえば、昔飲んだクリームソーダは緑だった気がした。

もう十代の頃、二十年ぐらい前の記憶だ。

「そうなんだ……。じゃあ、想像と合ってるのは、このクリームと赤い
いサクラソボだけかあ」

「ふむ。では、それを合図としましょう」

ゆったりとホットコーヒーに口を付ける老人の後、溝地もアイス
コーヒーに手を付けた。

止まらない汗をふきふき、喉を冷やした溝地は老人の言葉に首を傾
げる。

「は、合図、ですか？」

ほほ笑んだのは老医だった。

隣の青年は俯いて、青いクリームソーダに刺さるストローを口にく
わえている。

透明なストローが青く染まっていく。赤みを帯びた睫毛がゆつ
り瞬いた。

「ええ、そうです。あなたへの」

「わ、私への……？」

個展の話だと思い、溝地は青年から老医に視線を戻す。

溝地は、眼鏡の奥にある、老人の瞳を見た。

「あなたへの催眠の、合図ですよ」

——それは血のように赤かった。

第四章 亡霊は闊歩する。 常々言っていた。

母の名は、和枝。

母は常々言っていた、人が完全に死ぬには間があるのだと。

四年とちよつと前の事だったか、閉鎖的な片田舎に広まりつつある口さがない噂から一時避難をとて、実父の弟である福沢諭吉の下へと身を寄せた母は、とある場所で、とあるひとりの『負傷』した男を見つけた。母の目にはその男は『負傷』という状態だったが、多くの人の目からすれば、その男は『死んでいる』と表現されていた。

母の目は、常人とは格別に異なるものを見方をした。

それは母に宿る力に因った。それは異能力と呼ばれた。

母が身を寄せることになった実の叔父——福沢諭吉は、異能力ありと発覚して幾らか経っていた。世にはあまり知られていない力ではあったが、たしかに福沢諭吉にはそれがあった。そして、今は亡き、母にもあったのだ。

そうしたものの見方をさせた母の異能力は、『死相を食う』というものの。

死相というと、二つの意味があるが、それは時間という軸において全く両極端の事象を指した。

ひとつに、死に近づいたときの顔つきのこと。

ふたつに、死んだあとの顔つきのこと。

死ぬ前と、死んだ後という二通りの事象を『死相』という同じ言葉で表すそうだ。

ところで、死とは一体いつのことなのか。

心臓が止まった時、脳が活動を停止した時、生きる気力を失くした時、正気を失った時、魂と呼ばれるものが肉体を離れた時——初めの二つは目に見え、その次は主観であり、さらに次は客観であり、最後は目に見えない概念的なこと。

先に格別に異なると紹介した母の死の捉え方は、まさにここが異なっていた。

母は常々言っていた——人が完全に死ぬには間があるのだと。

その間とは、49日だという。母の目には、完全に人が死んだときというのは、49日を過ぎると死相が消えて見えるのだという。その後が、完全なる死——物質としての表情を見せるのだと言った。49日間、死体を残すことなど滅多にない。

けれども、母は女学生時代にとある事件により、そのことを知ったのだという。

つまり母が異能力により死相を食らうと、その対象は完全なる物質となるのか、あるいは浮き出た死相を取り払い生者として蘇るのか、どちらかだという。女学生時代の事件により、はじめて使った異能力では、その対象は完全なる物質——物言わぬ本物の抜け殻と成り果ててしまったのだという。母の目には、そう見えたというのだ。

結論を言うと、母はそのひとりの男の死相を食らったのだ。

そして結果を言うと、その男は蘇り、後に夏梅の父となった。夏梅の父は、物質ではなく、生者として蘇った。

しかし、食らうという行為の通り、父はあるものを失っていた。浮き出た死相には何がしかの記憶も含まれている。死の直前に強く思ったこと、または関連づいていることなどの生前の記憶が食われてしまう。

ところで、人間が食物を食らった時、その味が作られる過程や内容までを覚るだろうか。

母は、食らった死相に含まれている記憶がどんなものであるかを知らない。ただ、食事をしたように、記憶というエッセンスの加わった死相を食しただけだ。

母は、亡くなる前にこう話していた、《あのととき食した死相ほど美味なものではなかった。どんな人生を送れば、どんな死を迎えれば、あの味が出せるのか分からないくらいだった。だから、他のどんな死相も味わう気になれなかった。あのとときあなたは死ぬ定めであり、そのほうが良かったのかもしれない。けれども、あなたが生きて話す言葉が好きだった。それを知れてよかった》と、死に際とは思えないほど饒舌に語った。楽しげに、さみしげに、口惜しげに、そして幸福そうに。そしてそれとは対照的に、黙してその手を握る父は何を思ったのか。夏梅はそれをただ見ていることしかできなかった。

今でも時々思うことがある。あのととき、母は自分の死相を食らうことはできなかったのだろうか、と。おそらく母はそうできたのだろうかという結論に辿り着くのだが、同じようにまた、母は自分でそうはせずにはいたのかもしれないとも思う。

母の言葉の通り、父の死相の味以外を口にしなくなかったのかも知れない。一度死相を得た人間は死にやすい。母はあれから何度か父の死相を食らっていた。死にやすい父は、何度か大切な記憶を失っていた。

最も近い死では、子の誕生の記憶を失った。ちょうど、誕生日の贈り物を買った帰りに、ガス漏れの事故に巻き込まれ、数時間後に亡くなった。運ばれた遺体を母が預かって、そこで死相を食らって蘇った時に、子が産まれた記憶を忘れてしまった。いつの間にか、父親である自分に戸惑い、そして子を前にして動揺し、もう二度とは死なないとその両手を握って泣いていた。

父は、母のことも忘れたことがある。母と過ごすうちに強く心に刻まれた、感情を伴う記憶を、失ってしまった。それでも、父は母との関係を再構築した。

思い出もまた自分の中に新たに作っていった。父は、そういったことは乗り越えながらも、子が誕生した記憶を失ったことには耐えきれなかったようだった。

大の大人が年端も行かぬ子の手を取って額に当てて泣いていた。まるで祈るように。

……：父親というのは、子と過ごすうちに親としての自覚をもつようになるという。

だから、父にとって生まれた瞬間の記憶がそれほど重要だったのだろうかとも思う。もしかしたら父は、親としての自覚をもつようになった過程の記憶があるからこそ、それ以上の感情が芽生えた劇的な瞬間の記憶を失ったと思つて、必要以上にその喪失を惜しんでいるのではないかとも考えた。

あまりにも悲痛な声で父は慟哭していた。

何か別の喪失を思い出させたかのように。

父は、母が世話になった叔父の経営する探偵事務所で働くようになった。

母が亡くなつて、二年が経^たつた。

父は死んでいない。

父の名は、中村作之助。旧姓は織田という。

婿養子に入った父には自分の淡々と暗殺を熟す殺伐とした過去など感情をとまわらない記憶しか残されていなかった。

時たま、死の間際に走馬灯を見るものがあるという。その生涯における強い感情を伴う記憶の断片は死相に含まれたのだろう。瞬間的に何かを思い出すことはあるようだが、決して取り戻すことができそうにない部分もある。そこは記憶の穴のように何もないと父はいつた。

父は体に銃弾を受けて死んだ人間だ。母はどこでどうやって父と出逢ったのかを語らなかつた。それこそ、墓場まで持って逝つたというものだ。母が世話になつていた叔父にだけは告げたのかもしれない。

いが。

母は夏梅にだけは秘密を一つ教えてくれた。

魂の定着には二年という歳月を要するということだ。

何かと死に易かった父が、二年を乗り切れれば。

父は、母と出逢った横浜の地へ行った。

そこが父の一度目に死んだ場所でもある。

すべてが不安定な今、少しでも関わりのある地にいる方が何か良い影響があるかもしれない、と老医は云った。

夏梅を瀬戸においてから一年。横浜の武装探偵社で、父が死んだという話は一度も聞かなかった。

瀬戸の屋敷で育てられていた子は、自らの口から言葉を発するようになる、父と共に横浜で住みたいと望んだ。子もまた、異能力を持っていた。

その異能力は、使いこなすことはできないものの、致命的な怪我を負うと、身体が経た時間が狂う代わりに、無傷で済む。死の直前から蘇る、と傍からみえるため、母と似た異能力だと思われがちだが、実態はだいぶ違う。母は他者の死に干渉できたが（母からしてみればそれはまだ『負傷』の域だったため）、夏梅は違う。自分の体にしか異能力が及ばない。この二年間、父を襲ってくる黒服の者達により人質に取られ、銃で撃たれたときから、十歳ほど年老いたのを歯切りに、夏梅の体の年齢は恣意的に巻き戻されたり年をとらされたりしてきた。

父はもう、死んでいない。

きっと、父が死に易い期限は通り過ぎ、生者として世界に受け入れられる。

そう思ったのが、数か月前。

眼を合わせ、

こんなことをしておいて、許されるわけがない。

この罪は、何をしようと償うことはできない。

死んで詫びることはできず、あの世で悔いることもできない。

ならば、さあ——共に歩きましょう。逢いたいと叫びながら。

? ? ?

横浜の並木が赤や黄色に色づく頃、突然姿を見せなくなった少年のことを思い出す。あれから元気にしているのか。夏休み中に、少年をそのまま小さくしたような幼い子どもと出くわした。連絡を超越すように伝えてもらったが、その言葉は無事に届いたのだろうか。学校に通っていた時は気づきもしなかったが、あの少年も複雑な家庭事情を持っていた。——話して、呉れば何かしてやれることがあったのではないか。部屋の窓から、夕陽に染まる街並みを眺めていると、自室の扉が、音を立てて開く。何時もはかけている音楽もないため、少し立て付けの悪い扉が、キイと高い音をたてるのが少々耳障りだった。

顔をしかめて後ろを振り返ると、扉を開ける白い手が見えた。ねえ、と静かな声が、もともとの性格を知っているだけにいつまでたつても違和感を覚える。——実の姉であるのに。

「浩こうじ、焼き菓子を作ったんだけど、あの子にもあげてくれないかしら」

「…………夏梅なつめのことか？ 姉貴、前にも話したけど、あいつは転校したんだって」

長い黒髪が、背中に音もたてずに落ちる。

長いこと日に当たっていないかのような白い肌は、どこかの怪談に登場する幽鬼のようだ。

「あらう？ そうだったかしら。……ああ、そうだったわね。……ええ、そうだった、そうだった」

姉は、自分も先ほど思い返していた少年について強い関心を抱いているようだった。

それは、あの快活で横暴だった姉と、どうしても重ならない。まるで——別人だ。

「どこに行ってしまったのかしら」

「さあな。連絡もないし」

足取りがふらふらとしていて、姉だけ雲の上を歩いているかのようだった。

姉は、二年の留年の後、大学に通っているが、ちゃんとやっていているのか判らない。

父親が警察官だからと云って、子どもが品行方正に育つと勝手に期待するのは、無神経で無責任な連中だ。家族を顧みる暇もない父親不在の家では、まっとうに育つことは難しい。どれほど立派な父親も家に帰らないのなら、いないのと同じことだ。それでも病気がちの母が病院暮らしになり、家と病院とを行き来して、柄でもないのに、まさに母親代わりに家での暮らしを支えてくれた姉は、その反動か、外見を校則から違反するくらいには派手していた。それほど周囲から咎められるような非行に走っていたわけではないと思う。根の世話焼きな面は変わらず、幼馴染で家に引きこもり気味の二谷を外に連れ出してキャッチボールに誘うことだって続いていた。しかし、中学生の時分に夜遅く、他学校の教師に補導されてからは、家にほぼ不在の父親が職場から帰ってきて分厚い資料を食卓にばさりと置き、高校を全寮制の女学校と行き先を一方的に決められた。文句も言う間もなく、父親は職務に戻り、姉は反論する機会も与えられなかった。姉も自分も父を疎んでいるわけでも恨んでいないわけではない。ただ、父はあまりに多忙過ぎだ。家族の時間も持てないくらいに。中学卒業後、姉は黙って父の決めた学校の寮へ入寮するため荷物をまとめ、家を発った。最後に見た姉は日に焼けて真っ黒で、反対に元々地毛が黒だったのを脱色した頭髮は茶色で、癖が強い短髪だった。

中学時代仲の良い友人と同じ高校に通うのだと姉は云っていた。姉の通いたかった高校に自分は通っている。

「じゃあ、ほら、よくうちに来ていた、二谷さんのところのお嬢さんにあげてちょうだい」

「……まあ、いいけど」

別人のようだと思った次の瞬間には、昔の姉の顔が出てくる。横暴で気安く物を云いつけてくる。その度に、安井は何だかよくわからない安堵に胸をなでおろすのだった。しかし、同時に形容しがたい不安は片時も頭を離れることはなかった。

いつまで続くのか。知らない女の顔をする姉に、多忙な父と、体が弱く病気がちの母には打ち明けられない。特に父は、姉が巻き込まれた女学校の事件を今でも追っている。そんなただの違和感を話したところでどうにかなる気はしなかった。

「じゃ、よろしくね」

薄青色の包み紙に、白い紐で口を結ばれている。器用にそれは二重の蝶々結びになっていた。

器用だな、と思う。これは一体どう解けばいいのか。

閉まりかけた扉の隙間から、長い黒髪の一筋を見送っていると、ふと父の言葉を思い出した。

「どんな迷宮入りも解く、名探偵……」

呟いたとき、携帯が鳴った。それは、先ほど話題になった少年からの、やっとの連絡だった。

? ? ?

硬貨を入れ、選択すると、軽い金属音を立てて落下した。計二回。表面に結露を纏わせた飲料を手に取り、ふと感慨深くなった。晩夏に初夏の果実の飲料が手に入るのは、特別珍しい事ではない。

手元にやって来るまでの過程を知らなくとも、その現物は何気なく手に入り、普遍的なものとして自覚なしに受け入れられている。手に

している物の過程が不透明であっても、その情報が欠如していることを不安に思うことがなければ、気が狂うこともない。

人は正気のまま、加工されたものを享受している。

「夏梅^{なつめ}」

冷えた飲料を両手に戻ると、子どもは荷物の上に頬杖をついて、真新しく塗られた緑の壁と海老色の窓枠の外の景色を眺めていた。縁あって個展の関係で出た食事会の席で上がった話のなかに、海外からの気鋭の建築家が設計した建物がここ最近増えてきているというものがあつた。その方面に疎いせいかわ、どれがその作品なのかはわからないが、この頃目にする新築の建物は皆そのように見えてしまう。

「——まだ拗ねているのか？」

「……………しらない」

鼻を鳴らし、ついだとばかりに顎もと反らされる。とりつく島も無い。

肩を竦めて横目で様子を窺う。この年頃の子育ては特に難しいという。それこそ首も座らぬ赤ん坊を抱いた頃に既に覚悟していたことだったけれども、自分一人で自分の子を見なくてはならないという重圧に、耐えきれなくなる母親も少なくはないという。それが男手ひとつで何とかなるのか。幸いなことに、妻の実家の人々や探偵社の面々に助けられ、ここまでやって来ることができた。情けなくも思うが、非常にありがたい。

しかし、今この瞬間、ここには自分しかいない。そして、その子どもの不機嫌がいったい何によるものなのかを知るのは、自分しかないないだろう。……………回りくどいのは性に合わない。私は夏梅の隣に座つた。

——こういうとき、どう口火を切るのか。

アルコールをちびちびと口に含んで速度^{ペース}を遅らせていたはずの国木田が同席する面々の中でも一番の赤面で云うには、まず何を云うか

よりも相手の目を確と視ろ、ということだった。

『父親というものは泰然としなければならん。頑として揺らぐず、深山の奥の巖のようではなければ如何して子が安心して凭れ掛かることができる。一等重要なのは、言葉ではない。存在感だ。先ず目を合わせるのだ』

成程その通りだと頷こうとした時、横合いから否と唱えたのが太宰だった。その言い分はこうだ、

『否々、^{いやいや}国木田君。織田作は気まずい時の話の切り出し方を聞いているんだよ？ 気まずい時に、眼なんて合わせられるかい？』
『何を云う、太宰。眼を合わせて話をせねば、伝わる物も伝わらんだろう』

この二人の掛け合いは実に小気味よく進む。

息の合う二人というのはこういう仲を云うのだろう。感心しつつ横目で窺う。

『うーん、例えばだよ？ 堅物な国木田君には有り得ないことだけけど、国木田君が合コンに出たとする』

『な！ 俺はそんな破廉恥な場に顔を出したりなどせんっ』

世に出れば少数派である稀少な長髪仲間の国木田は、幅広の赤い紐で一つくくりになっている髪を荒野に出る獅子の様に逆立てて、猛然と太宰へ食って掛かる。両手を掲げた太宰がどこか余裕を感じさせる仕草で、気が高ぶった猛獣を相手にするようにどう、どうと宥める。
『だーかーら、例えば、仮定として。それも気に入らなかつたら架空の世界でもいい』

『断固として有り得ん話だがな』

『はいはい、まア細かいところは置いといて、そんな国木田君の目の前に好みの型の女性タイプがいたとするよ。幸いなことに他の強敵ライバル達は他の女性といい感じに話が盛り上がっている。話に混ぜられていないのは、国木田君とその女性のみ。無音の一带、何から話せばいいかわからない国木田君と黙ったままの彼女。さて如何話しかけるか』

太宰が語りだすうちに、私の持っているグラスの中身は空になった。氷同士をグラスの中でぶつけて手慰みにしていると、がたりと音

がした。いつの間にか身を乗り出していた国木田が、カウンターの席で脚をぶつけたらしい。耳半分で聞いていた太宰の、国木田曰く荒唐無稽で到底あり得ない非現実的な仮想話は途中で途切れていた。

太宰は笑みの張り付いた顔のまま微動だにせず、国木田はどこか焦った様に前のめりに催促する。

『ど、どど、如何話しかけるんだ？』

私も興味が湧いて空になったグラスを下ろして太宰を見遣った。

太宰は人好きのする笑顔で復唱した。

『「先ず、目を合わせる」』

『できるか！』

国木田が、グラスをテーブルに荒々しく打ち付けた。

国木田の先の言葉を借りた太宰は、手のひらを広げてひらひらと振った。

『ほらね』

大気に揺らめく紫煙のように軽く、太宰は薄く笑う。マスターが空のグラスに酒を注いでくれた。礼を云い、私は、なみなみと入った黄金のグラスに口を付けた。ふと鼻腔をすつと通る香りがして、その出所を目で追うと、カウンターの席の、ちょうど太宰が座っている席の前に、さりげなく置かれた小皿に白い花が摘んで浮かべられていた。玻璃のグラスを柔らかい布で拭いていたマスターが静かに『薄荷ハッカです』と呟く。成程、薄荷の香りだった。

『国木田君の云うように、先ず目を合わせるなんてことができるなら、話しかけることだってできるのさ』

『難易度の問題ということか。——いや、だが、父と子の会話の取っ掛かりを云うのだろう。うら若き初対面の女人と話すのでは立場が違う。親子間の会話において、互いに目を合わせるといふことは間違っていないと思うが』

どちらも正しい言い分に聞こえた。謂わば正論と正論の水掛け合のようなものだ。非才の身では、如何してこうも矢継ぎ早に論じ合えるのか不思議でならない。私には、ご近所の老人の昔語りの聞き役であったり、言葉のいらぬ幼子のお守りが似合いの凡夫だ。

お行儀のよい銃撃戦の様に順序を守って往ったり来たりする言葉のやり取りが頭上で交わされる中、私は奇跡の様に安穩と喉を通つていく冷たい感覚を満喫していた。そして再び空になるグラス。

『話をするということに対して気まずさを感じる点については同じ状況だと思ふけれど、まあ確かにね。でも、しかしだよ、国木田君』

国木田の指摘に、同意しつつ太宰は反論の姿勢を見せた。

『——なんだ』

それを受けて立つように腕組みした国木田が目を細め、双方の視線が交錯する。何かが始まろうとしていた。私は、マスターに新しい酒を頼み、用意されたそれを口に運んだ。

銃口を向けあう敵同士のように見合っていた二人の内、先に笑んで均衡を崩したのは太宰だった。

『立場というのは、けっこう重要なのさ。父親という自分を庇護する立場の人間と、庇護される立場の人間が目を合わせるというのは、気まずい状態では、庇護される側の人間の方がよほど圧迫感を感じるだろう』

『——威圧してしまうということか』

『眼を合わせるといふ行為は、国木田君の云った通り、大切なことさ。けれど、時と場合によれば、それは逆効果になってしまうことだってある』

『「時と場合」か。……手帳に記しておこう』

太宰は整った眉を上げ、『おやあ？』と疑問符を浮かべる。そして、子どもを持つ予定でもあるのか、と屋台の輪投げのように軽やかに問いを投げかけ、それに弾かれたように国木田が椅子から立ち上がったところで、私はああ、と気づいた。第三者として聞き入っていたが、我がことだった。予定でもなく、私には既に子どもがいるので、それが必要な教訓だった。そして二人の内のもう一方が持つ意見も。

『それで、太宰は如何やって話し始めるんだ』

二対の目がこちらを向いた。しばらくして、国木田が椅子を戻し静かに座る。その様子を見守っていると、咳払いが聞こえて太宰の方を向く。太宰は、カウンターのテーブルに頬杖をつけて、白い薄荷の花

が活けられた小皿を眺めながら、『そうだねえ』と前置きをして云うには、眼を合わせないようにする、という国木田とは真逆の事だった。人に馴れない動物に相對する要領で、過度に視線を向けず、背中合わせか、あるいは隣に立ち、目を合わせないまま話しかける、と。

夏梅の隣に座り、前を向いた。そこには電子掲示板があった。在来線の到着時刻が一新され、時刻と電車名が変動する。そこから足元に視線を落として、私は話し始めた。

「神西先生に連絡がつかなくなったのだから、何か事情があるかもしれないだろう」

探偵社創設以来の大仕事を終え、私事ではあるが亡き妻の個展も無事に開くことができた。妻の絵は、個展のための移送中に何者かにより奪取されてしまった。そのため横浜での個展の開催も危うくみられたが、探偵社とその他の多くの人々の力添えにより、予定されていた絵画三十三点と予定外の絵画一点の全ての絵画を回収することに成功した。

絵画の輸送経路や回収時の絵画の配置の仕方など、あまりにも手際が良いことから、密かに美術館側と身内側の両方に内通者あるいは共犯者がいて情報を漏らしているだろうということは見当がついた。そして、夏梅が裏で人を募って絵画を回収していたことが後から判明したが、用意周到な犯行のわりにその回収を許すというのは不自然だ。……犯行側の人間はおそらく複数人で、そのうち方向性の違いか何かで分裂したか、何らかの思惑で夏梅を誘導し、その行動に手を貸していたに違いなかった。そしてその関与を疑われていた最たる人物が、神西清という、夏梅の主治医でもある老医だ。一般から外れるだろうが、裏切りとは少し違う。

個人的私見では、神西が夏梅に危害を加えるという可能性はないと思われた。

しかしどうやら私は、最初の言葉選びに失敗したらしかった。

「……………おとうさんの、ばか」

暫くの間が空いて、少しばかり湿った声で罵倒される。思わず視線を向けるが、夏梅は俯いていた。僅かに震えている手には携帯電話を持ち、通知の来ない暗い画面を表にしている。連絡がないということは、私にはあの老医が夏梅のことを思つての行動だと思われた。たとえそれが、音信不通とい行動になつたのだとしても。

夏梅はこぶしで膝を叩こうとするのを手のひらで受け止める。

その手に飲料を持たせた。束の間、武器を持たせてしまったかとひやりとする。しかし、実際にひやりとしたのは夏梅の方で、冷えた飲料の感触に小さな悲鳴をあげていた。

唇を噛む夏梅に手巾を渡して遣りつつ、電光掲示板へと視線を移した。眼を合わせずに、考えることは老医のことだ。老医が敵側に回るはずがないことへの根拠はひとつ。神西は夏梅のことを気に入っていた。私が「誰か」と外へ出かけている——とそうとしか思えない記憶の中で、ひとりになる幼児の夏梅を抱え子守をしていたのは神西だった。勿論、義父も見っていたに違いないが、義父は子どもを甲斐甲斐しく育てた経験はなく、手にかかる赤ん坊を見れるほどの知識はなかった。

神西は今も昔も、夏梅のことを気にかけている。そして夏梅にとつての神西は、憶測にはなるが、歳の離れた友人あるいは教師といった特別な存在だつたのではないかと思う。母親を早くに死に別れ、父親は自分を置いて横浜へ。その間、夏梅を見てくれていたのは義父と神西だった。……考えてみれば、自分は酷い親だ。それでも横浜まで追つてきた。実年齢に合わない成長した身体と、子どもではいられなかつた精神で。

我が子を慰められるような、気の利いた言葉一つ出てこない。

口から出せたのは、「機嫌を直せ。……もうすぐで太宰たちも来るぞ」という何とも冷たい言葉だつた。それでも夏梅は、唇を噛んだ歯をどかし、俯けていた顔をあげた時には、いつも通りの、喜怒哀楽の見出しづらい顔だつた。そしてしきりに気にしていた携帯電話を、上着の大きな衣嚢へと放り込み、立ち上がった。

目の前で止まっていた新幹線が出ていく。

「おーい」

聞き覚えのある声が駅に響く。

ふと見ると、電子掲示板が更新されていた。

「みんな来たみたいだね」

膝に抱えていた荷物を背負い直した夏梅が、平坦フラットな声。

鏡越しに毎回見るのと同じ、鳶色の大きな瞳が眠そう瞬いた。

妻の絵画の奪還に尽力した人々を持って成したいという瀬戸の人々の依頼で、探偵社の面々を瀬戸へ連れて期間中案内する。依頼という形だが、実質の社員旅行だ。しかし、瀬戸の邸宅側の人間で、行方知れずの人間が一人。老医だ。理由もわからず、行方不明ということで、初めからこの社員旅行は、暗雲が立ち込めている。

気を張った時、服の一部が引かれた。持て成す側としては、夏梅の方が上手だ。

「任せていいか」

「やや、これをまかせられても……」

なにやら海水浴場にでも行くのかと云った装いの面々を眺めてぼんやりした声で夏梅が答えた。

言いつけを破り、

始めに車から降りた中島が、持っていた浮き輪を落とし、呆然と仰ぎ見た、「……なんですか、これ」

浜の鷗カモメが鳴く。波の音が絶え間なく聞こえてくる。潮風が吹きあがり、我が子の麦わら帽子をさらっていかうとするが、横から伸びた手がそれを押さえた、国木田だった。すぐ後に車から降りたのだ。空いているもう片方の手でずり落ちてもない眼鏡の蔓を押し上げて眼前の建物を見上げている。

「…わあー……」

蒼穹のもと、輝く金髪を揃いの麦わら帽子に隠した宮沢が珍しくも声を途切れさせた。

他の面々も似たようなものだった。

瀬戸の潮風が届く丘の中腹。白い漆喰の壁に縁どられ、手入れされた黒い石畳に舗装された上り坂の路の先へ迎える車から降りると、木製の荘厳な長屋門が出迎える——そこから下り坂を振り返ると、中村邸は、下に広がる港町と瀬戸の青い海とを一望できた。

この屋敷の異様なところは、門から向こう側。

古くから続くこの土地の名士の家は、元は伝統的な武家屋敷であったという。しかし先先代の方針で、年々増築を繰り返してきたため、和と洋とが折衷し、上にも横にも広がり続け、外から見ても凸凹と張り出し、歪に入り組んだ異界のような様相に、初めて訪れた者は大抵が言葉を失う。

「まるで子供が玩具を出鱈目に積み上げたような構造だな……」

国木田の言葉に、確かにそう見えるなど共感した。

すぐ後ろから降りた太宰が、別の箇所を目を付けた。

「ねえ、織田作。このお屋敷はまだ施工の途中なのかな。あの端の部分は未完成のようだけれど」

「そんな時に俺たちがお邪魔してもいいのか」

もの言いたげな太宰と気負った風の国木田の視線を受ける。

それに対し、問題ないと首を振る。

「何時もどこかしら工事中だ。そちらは増築箇所だな。修繕箇所もある」

「歴史のありそうな建物だが、そのせいかな……？ にしても修復というよりは新しい部分がやたら多い気がするが」

「そうだな、と織田作は頷いた。」

観音開きに門が自動で開かれる。木でできた扉が音を立てて開かれると、その先にも木の格子戸があった。その間から門の造りが見えた。開かれた屋根付きの門は、それ自体が小さな家のように、平らな石が敷かれ、屋根があった。事実その門は、人の住める建物になつていて、これは昔の武家屋敷の名残なのだという。平らな石の先には、少し苔むした玄関までの飛び石があった。

格子の扉が開いて、そこでやつと佇んでいた着物姿の壮年の男に気付く。

壮年の男は、そろそろと門の前に立っている面々を見渡し、ふと自分と国木田の間にいる夏梅に目を止めた。しばらく目を細めた。そして他の面々に視線を戻し、中島の所でまた目を止め、静かに目礼した。

中島は突然の銃撃に驚いたように慌てふためき、腰を九十度に曲げて礼を返していた。

「壮年の男は、礼を返し、向き直った。」

「——よくお越しくださった」

気配をほとんど感じ取れない。気配を殺すだけならば自分にも可能だが——この人のそれは違った。ただ、気配を消すのではない、何か。

何の武術を極めればこの域に辿りつけるのか、自分には見当もつかない。

「遠方から遙々疲れもたまっている処だろう。こちらから招いたにもかかわらず、駅まで迎えにも行かず、随分と礼を失した。申し訳ない」「いいえ。とんでもありません。車で迎えに来てくださって助かりました」

南国アロハシャツの襟衣を着た国木田が顔を正して前に出て首を垂れた。

義父が微かに笑った気がした。

「此処にはバス等は通っていないからな。この一帯の住民は皆各自、移動手段を持っている。私は、そのこの婿殿の義父、夏梅の祖父で、名を中村正直と云う」

「私は探偵社の国木田独歩と申します。お招きいただき感謝いたします」

義父は苦笑して首を振った。

「これは我々が探偵社への慰労として招待したもので、こちらの都合で、急遽、女人方には別處に行つてもらつたが、悪意あつてのことではないと理解してほしい。中には妹御もおられたと聞く。招いておいて何だが、何卒、堪忍してもらいたい」

義父が、頭を下げる。妹というと、谷崎妹のことだ。

他に、与謝野、鏡花らの女性陣が別に用意された滞在先へと別れている。

慌てたのは谷崎兄だった。

「え?! い、いいえええ! そんな! 滅相もないです! ナオミも女子会ができると喜んでいましたしっ それに……ボクはナオミが喜んでいるならそれで善いので……」

「それは重畳。——ナオミ殿は良い兄上をお持ちのようだ」

他の面々は何故か、目を反らした。

自分は夏梅とふたり目を瞬かせた。

義父は、妙な空気に不安を持たれたと考えたのか、口を開いた。

「——安心召されよ。滞在の居は異なれど、どちらも中村家が手厚くもてなすことを約束する」

与謝野と鏡花と谷崎妹は義父の知人が提供する高級旅館の特室で宿泊することになっている。

距離がある其処は、屋敷の前から見渡せる港町の海岸沿いの端にあり、駅で中村邸行と旅館行それぞれの迎いの車に乗って別れたところだった。合流は、慰安旅行終了の五日後を予定している。この間の滞在費はすべて義父持ちだという。……それだけ、義父にとつても、今回の個展絡みの一件は恩に感じているということだろう。

「では此方へ。儂が案内をしよう」

義父は背を向けて歩き出した。

国木田からちらりと視線を向けられた。

「——それと、婿殿と夏梅もよく戻って来た」

その視線のやり取りすら、背中に目がついて見えているのかと思えるタイミングだった。

「——はい」

「またお邪魔します、正直のお爺さん」

夏梅が宮沢と麦わら帽子を交互に取り合いながらちらという。

背を向いて進む義父の白頭が頷いたように揺れた。

その背が、どこか安堵しているように見えた。

きちんと手入れの行き届いた庭園に面する通路に沿って進んでいく。外に面した通路は広めに作られている。

先導する義父と少し下がって国木田が会話をしている後ろで、自分と太宰が、その後ろで谷崎兄と宮沢が並び、さらにその後ろに夏梅と中島が話しをしていた。

「谷崎さん、この黒いものって『電話』ですよね？」

機械に疎いらしい宮沢が谷崎兄に小声で話しかけているのが後ろから聞こえた。

電話もない東北の村からやって来たというが、本当だったのかと不思議な心地になって振り返る。

「そうだね。これは旧式の黒電話じゃないかなア」

「旧式があるんですか！ でも電話って、こんなにたくさん置いておくものなんですか？」

「実を云うと、ボクも気になってんだ。さつきから数えてただけけど、今までこの通路に八個も置いて在ったんだ。何か意味があるのかな」

宮沢が指さしているのは、小さな台に置かれた黒電話だ。通って来た通路には既にいくつか通り過ぎたものもある。

「それは連絡用だと聞いている。部屋があまりに多いから、道に迷った時には、そこがどこかを電話で確認するのだと」

隣で上半身を後ろに反らした太宰が、興味深そうに顎に指を遣った。

その状態で歩いている。器用なものだ。

「ふむ。……差し詰め、その黒電話の受話器に刻まれている番号を回すか、つながった先に伝えればいいのかな？」

「転ぶぞ、太宰。——俺はその黒電話は使ったことがないからわからない」

「そうなのかい？」

束の間、明るい笑い声が響く。

谷崎兄が袖の余った手を口元に持っていていき、笑いを抑えて言う。

「そりゃア、太宰さん。織田作さんはここに住んでいたんですから、迷った時用の電話なんて使いませんよ」

ね、と話を振られた。

宮沢からの視線も受け、思い返して頷いた。

「そうだな」

自分が路に迷ったことはなかった。それ自体は事実だったので。

ふうん、と隣で相槌を打つ太宰は、じつと通路に置かれている次の黒電話を眺めていた。

時折、使用人とすれ違ったが、皆部屋を設える用意をしているようだった。招かれた人数と来訪者の人数が異なっているため、部屋割りを変更しているようだった。

義父に着き従っていると、やがて日当たりの良い広間の一室に通される。大人が二十人雑魚寝をしてもまだ広いだろう、大広間だった。造りは和室で、掛け軸と活けられた花、鳥獣戯画の描かれた襖、天井には梁には見事な彫刻の施された飾りが渡され、下は濃緑の縁に仕切られた畳間だった。庭に面しては、滲み一つない白い障子がすべて引かれた開放的な状態だった。

部屋の中央には、長い机が置かれ、それは屋久杉を用いたものと見えた。

「部屋は持て余すほどあるが、来客として都合の良い部屋は限られていてな。この広間で、用意が済むまで待っていてほしい」

「申し訳ありません。江戸川の方は、他の事件に駆り出されていて」
「なに、恩義があるのはこちらなのでな。諭吉も一人では探偵社を回して行けん。そういうものとして探偵社を創ったと承知している」
「ぱん、と一つ手を打つ音が響く。」

乾いた音が、畳や襖に吸い込まれていく。

「畏まったことはなしとしよう。客人には此度の疲れをゆつくりと過ごして労わってもらいたい。……夏梅は後で儂の部屋に来なさい」

「はい」

夏梅が、すっかり日に焼けた手を挙げて屈託なく返事をする。

麦わら帽子をとった夏梅の、自身と同じ、赤みを帯びた髪が揺れる。

義父が頷いた。諸々の用意のため退出の去り際に、足を止めて振り返る。

「それと、この部屋を妄りに出ぬよう。来訪者には皆守ってもらう。この屋敷は見ての通り、入り組んでおる。古参の使用人も迷うほどだ」

「気をつけます」

国木田が首肯すると、義父も頷く。

「ではゆるりと過ごされよ」

義父が障子の開け放たれた通路を出て、曲がり角を曲がり、姿が見えなくなると、どつと国木田が長机に倒れ込んだ。

「お疲れ様です、国木田さん。疲れたでしょう？」

「つ、疲れた……いや、お前のお爺さまにこんなこと云うのはあれだが、威厳があるというか、ここ最近でもいつとう気を張ったぞ……くそっこんなふざけた服装で来たことが悔やまれてならん」

「なんか締まり切りませんでしたもんね」

乾いた笑いで、谷崎兄が傍らに屈む。

宮沢は自分の持つている麦わら帽子で風を送ってやっていた。

蟻が餌に集るように、わらわらと倒れた国木田に他の面々が近寄る。

中心になる人物というのは、こういったところでも判るなと思っ
た。

「私は国木田君らしいと思ったよ?」

「お前も、私と似たようなものだろうが!」

「それは心外だ、国木田君。私はこうして黒で地味めに纏めたのだよ? 国木田君のその真つ赤な花柄の襟衣シヤツとは違って」

太宰は、黒い襟衣を着ている。玄関先で脱いだが、足元は靴はサンダルだった。今もシュノーケルを首から引っ提げている。

こうして論えば、太宰の服装は、国木田のそれとは全く違う。派手さ、地味さという受ける印象はさておき、両者に共通している点といえば、これから海水浴に行く心算なのだろうとどちらも一目でわかることだろう。

「ナツメくんのお爺さん、武士みたいな方ですね」

「ねー。でもこの家、昔はそうだったらしいよ。そのせいか、お爺さん、昔の刀とか集めてもいるし」

「刀!」

食いついたのは国木田だった。

それほどでなくとも宮沢と谷崎兄と中島も興味を引かれたようだった。

「うん、刀蒐集家コレクター。最近は、お茶の器も集めてるとかいつてたかな。

……刀、興味あったら、見に行きますか?」

「いや、それは、さすがに……厚かましくないだろうか?」

視線をうろうろとさまよわせる国木田の横で、麦わら帽子を扇いでいた宮沢が手を挙げた。

「ぼくは見に行きたいです!」

「じゃあ行きましょう」

「若い子たちって、ホント決断早いですねエ……」

「谷崎、お前とてまだ若いぞ……年少組が増えたせいかな、急に年を感じ過ぎてないか?」

谷崎兄と国木田がぼそぼそ話す傍ら、中島は何故かずつと佇んだまま俯いていた。

気にかかり、声を掛けようとしたが、太宰が夏梅に話しかけるのに意識が反れた。

「夏梅くんのお爺さんって、剣道してるのかい？」

「剣道もしてます」

「剣道も、ねえ」

太宰の言葉を受けて、長机に臥せていた国木田が体を起こした。ため息を吐きながら、眼鏡の蔓を指で押し上げた。

「おそらく無手の武道もしているのだろうな。しかしあのすり足に似た足運び、何処かで見覚えがある気がするんだが」

「国木田君の記憶に当てはまるものがない、と？」

「国木田さんが知ってるってことは、論吉叔父さんもやってたことがある武術かも。論吉叔父さんも正直のお爺さんと同じところで武術やってたことあるって言ってたからそれじゃないかな。でも、正直のお爺さんは他にもたくさんやってたから、もしかしたらどれとかじゃないのかも」

「つまり、数多の武術を自ら組み直したという可能性があるということかな？」

「成程な。既視感があるのに、どれも判別できないのはそのためかも知れん」

三人で義父の足運びから武術の流派についての分析に熱が入るのを見守る。

門外漢のため、自然と話から遠ざかる。

「なんだかともすごいそうなお話しですね！」

「ボクらにはなかなか縁のない話かなア」

宮沢と谷崎兄が耳打ちしあっているときだった。

ところで、と太宰が話題を変える。

「夏梅くんのお爺さんって、何してる人だっけ？」

「わかんない」

対する夏梅の返答は実に簡素シンプルだった。

国木田が眉根を寄せる。

「実の祖父の仕事が分からないとかあるのか？」

「じゃ。ぼく、三歳だからわからない」

屁理屈をこねたような物言いだ、途端、辺りに沈黙が降りた。

急に皆が、口を引き結び、その沈黙を守りだす。

まるで猫が今まで食してきた魚の身の上を考えているような顔だった。

沈黙を破ったのは、おそらく契機となっただろう当の夏梅だった。

「もしかしたら忍者でもしてたのかも」

「忍者！」

おそらく当てずっぽうな、口から出た言葉なのだろうが。

目を輝かせる者、訝しげな顔をする者、驚きに目を見張る者、様々だが、突拍子もない言葉に、思わず目を向けた。が、当の我が子から視線を向けられ、同様に他の面々からの視線も受けることになった。

「お父さんが、お爺さんが後ろから来られたら判らなかつたって言うてたぐらいだし？」

「そうなのかい？」

太宰の言葉に、事実であるので頷いた。しかし、頷いた後に、ここで肯定した行動は、義父が忍者であると肯定したようにもとられかねないのではないかと思ひ至り、しばし悩んだ。

そのため、長い机の上で両手を組んだ国木田が、深刻そうな顔で呟いた言葉は耳に入らなかつた。

「織田作が気づかないとは、それはかなり凄いいことじゃないか……？」
ところですみません、と中島が恐る恐る手を挙げた。

皆の視線が集まる。悩んでいた織田作の思考も浮上した。

——そして差し迫った現実の問題へ焦点を合わせる。

「その、あのう……お手洗いきたいんですけど、部屋から出るとまずい、でしょうか？」

「いや、すまない。案内してやってくれ、夏梅」

先ほどから、様子が少し気がかりだったのを思い出した。

しかし、織田作は案内ができないので、すぐに夏梅に頼んだ。

慌てた夏梅が、拳を口許に当てて眉間にしわを寄せる。

「うーんと……そこぐらいならたぶん、行けるかな」

よしと夏梅が立ち上がると、他の面々もそろそろ立ち上がって一緒に手洗い場に向かうようだった。

残ったのは、足が疲れたという谷崎兄と部屋の調度品に興味があるらしい太宰と自分の三人のみ。

「確かこっちだよ」

大広間を出た夏梅が、後ろについてくる面々を振り返って言うのが障子の端で見えた。

部屋の隅々を観察するように目を巡らせていた太宰がふいに振り返って夏梅たちを見遣る。

「どうかしたのか、太宰」

「いや——記憶力のいい夏梅くんがあいまいなこと云うなんて珍しいなど思ってるね」

「そう云えば、たしかに、そうですね」

谷崎兄の同意も耳に入っているのかそうでないのか、太宰は思考の海に沈んでいった。

姿を現し、

ここから出たいといつも思っていた。

組んだ両手を口許に当て、入り組んだ構造の屋敷をぎっと眺め、すぐに視線を下げる。

元の構造が武家屋敷なので、床は顔が映りそうなくらいに艶々した板張りになっている。

見覚えのある木目と板の継ぎ目がそのまま、真新しいものになっていないことを確かめて、「こつちだよ」と行き先を示した。

「わあー！ やっぱりナツメくんは道を覚えるのが上手なんですね！」

「此処は生家だから当然だろう——と本来ならば云うところだが、これだけ道筋があるとすべて把握しきれていなくともおかしくはないものぞぞ」

夏梅は左の指先を壁に沿わせ、数歩前の床を注意深くみながら、宮沢と国木田の会話を聞いていた。

左手が壁を失って宙に浮くところで、曲がり角の壁に沿って手を這わせる。

「こつち、かな」

この先が変わっていないければ。

床の継ぎ目はそのまま、顔を上げると、目的地の前まで着いたことを確認する。

男性用と女性用とに札掛けられ分かれている手洗い場は、広めに作られ、複数人が使用できるようになっている。その際に飛び込んで来た、在るはずのものが無いその景色に夏梅がちよつとの間、動揺している、その後ろから顔を出した宮沢が最初に手洗い場に着いたことに気付いた。

「あー！ ありましたね！」

「うとううああ、すみません！ 行ってきますー！」

掛かっている札を見るなり、中島が駆け込んでいく。

腕に着替えを抱えた国木田が、やれやれと首を振る。

「一寸ちよつとあの大広間から出ただけで四辻を二つ通り過ぎたぞ……。これでは本当にこの屋敷で迷って遭難ということもありそうだ。俺は既に大広間までの帰路に自信が持てん。——しかし、それでも住人は自身の住処を好く解っているものなのだな」

「うーん……」

ぼんやりとした返事を不思議に思ったような顔が二つ向けられた。記憶を探りながら、夏梅は奥まで続いている通路の先を指さす。

「そう……でもないんです。たぶん、ここは前までは行き止まりだった気がするし……」

しかし一番、改築のあとが分かりやすい床の継ぎ目は古いままだった。

これが夏梅のこの方法での困りどころだった。夏梅が知る前から、ここはもともと廊下であり、後からその上に行き止まりの壁を作っていたということ、現在はそれを取り払った状態ということになる。……もしかしたら、ここが袋小路だったというのも夏梅の記憶違いなのかもしれないけれども。

ここに居ると、記憶に自信が持てなくなってくる。

正直にいうと、夏梅はこの屋敷で迷うことはしよっちゅうある。

——これまではそれでも、問題はなかつたのだ。

「物覚えの善いお前もそんな風を感じることもあるのか」

「ここ。迷路みたいですねー」

「先ほども織田作も、知らない内に部屋が無くなっていて、階が増えていたとか云っていたしな」

「それで、なのかな」

生家といっても、父と母が暮らしていたのは海を見渡せる岬の上の別荘で、今は身寄りのない子どもたちの施設としていて、ところなので、この屋敷で過ごしたのは、父が夏梅を残して横浜へ行ってしまった後から、夏梅が横浜まで追いかけて行った間の、ほんの数か月だった。

それなのに夏梅はいつもここから出たいと思っていた。

???
???

記憶が頼りになるのは、その記憶が確かであること、今もまだ面影が残っていることが前提になっていると云えるだろう。その点で、この建物と我が子の相性はそんなに良くないようだった。

「これは前回の墓参りの帰省の時に識しったことなんだが、夏梅は当時の記憶と少しでも違うところがあると、少なからず混乱しているらしい。あれでいてあいつは稀に、驚くほど方向音痴なんだが、そういうことが原因だと」

「へえ。初めて知りました」

「俺も迷ったと聞くこと自体が稀だったから、偶々だと思っていた」
返しながら、義父がしばらく不在のため、広間の座布団の上で脚を崩す。

向かいに座っている谷崎兄は天井を見上げながら思い返すように話す。

「乱歩さんの事件で急遽向かってもらった時も、しっかりと引率してて、とてもしっかりしている子だとナオミが話していたので……つて、ン？」

谷崎兄が長机に身を乗り出し、前のめりになる。

耳の上の橙色の花が落ちそうになっている。駅で谷崎妹に別れ際に飾り付けられていたものだ。

何となくそちらに目を向けていると、谷崎兄が焦燥した顔色で捲まき立てた。

「一寸待ちよつとってください！　じゃあ、夏梅君は、若しかしなくとも自分の家で迷まっちゃうってことではっ」

「そうなるな」

肯定すると、思わぬところから反応があった。

「や、それは拙ちいでしょ、織田作」

太宰が思案の海から還かえって来たようだった。

意外と早かったなとそちらを見る。

「お帰り」

「も、戻りました」

「じゃなくって、と太宰が大きく手を振る。」

その際、首から下げたシユノーケルに首を絞めつけられて咳き込んでいる。

織田作もたまに、首に巻き付けた自分の鎖編みの髪に首を絞めてしまふことがある。

太宰は、咽ながらも顔を上げた。

「それって大丈夫なのかい？」

「問題ないだろう。こういう時はいつも何処からか神西老医せんせいが見つけて回収を……」

織田作がはたと気づいた顔をする。

太宰が、念を押すように確認してくる。

「その先生、電車で話していた夏梅くんの主治医で、いま行方不明の人じゃなかったかい？」

「——困ったな」

???

???

「じゃあ、この先は、ナツメくんも知らないんですね」

「うん。いつも新しく増えていたり減っていたりするから」

「成程な。ひ、広間までの帰り道は大丈夫なんだろうな？」

「帰り道はね」

夏梅は不安げな国木田に自信満々につこりと笑いかけた。

国木田はひきつった顔になる。……失礼な。帰り道の案内はこうして保証しているのに。

「じゃ、僕も顔を洗ってしやきつとしてきまーす！」

列車の中でトランプをしてはしやぎ疲れたあと、すっかり眠ってし

まっていた宮沢は顔を洗いに手洗い場に入り、続いていそいそと着替えを持った国木田もそれに続いた。

ひとり外に残った夏梅は、壁に凭れ掛かって三人を待つことにした。

外とつながる通路から奥に伸びる廊下はそのまた先の外とつながっている。

風通しが良いそこは、昔は漆喰の壁があつたはずだが、障子紙の代わりに硝子のはめ込まれた格子戸になっており、中に茶器や掛け軸が掛かっているのが見えた。

記憶の中の景色とは全く違う。

まるで息をしているような屋敷だ——と夏梅は思う。記憶していた部分と目の前の現実とは少しずつずれ、或いは大きく歪曲し、何もなかった場所に部屋ができ、行き止まりの壁が無くなってその先が続いている。かと思えば、続いていたはずの先がなく、開かない扉が前を塞ぐ。記憶との差異が小さくとも、眩暈がするほど混乱する。——夏梅は、この屋敷が苦手だ。

壁に凭れ掛かり、ぼんやりと格子にはめられた硝子窓に映る自分の姿を眺めていると、手洗い場から出てくる人の物音が聞こえた。

中島が手を拭きながら出てくる。

「ううう。助かった……本当に助かったよ、夏梅君」

「ううん、間に合って良かった。僕もちよつと道に自信なかったから」
部屋と通路は増えたり減ったり増えたり増えたりするものの、水場の位置はあまり変動はない。そのため、ここはあるかもしという手洗い場に何とか辿りついたときは心底ほつとした。

「そうなの？ 余裕なかったからか気づかなかつた。でも改めて思うけど、ここって凄く広い……というか狭いというか。あれ……何言っているんだろ、僕。全然反対になっちゃってるね!？」

広さと狭さを同時に感じたという中島の気持ちに夏梅には何とな

く理解できた。

敷地は広く、その中を、無数の通路と部屋が縦横無尽に、まるで無作為に作られている。

祖父が命じて敷設しているのだから計画的でなにかしら意味があるはずなのに、意味のない飾りの扉すらあつてよく判らない。広い空間を、過剰な扉と部屋と通路とで敷き詰めている。だから狭く感じる。

「ぐちやぐちやしてるってことじゃない？」

「う、うん。そう……。夏梅君のお家なのに失礼なこと云っちゃつてる」

「ううん。僕もそう思うし。頭の中なんてしっちゃかめっちゃかだよ」

「夏梅君でもそう思うんだ」

意外そうな顔をされるが、買いかぶられたときの方が気まずいので強めに肯定する。

「うん。ここ、ひどいときは、朝は部屋があつたところが、夕方にはなくなっちゃつてて通路になつてたりするんだよ」

「うわっ それはさすがに夏梅君が迷うわけだ」

困ったね、と首を横に倒す中島に習って、夏梅も首を倒して「ね」と同意する。

「ところで、なんでそんなに改築してるの？」

「わかんない。お爺さんに聞いてもよくわかんない事返してくるんだもん。だから、乱歩さんに来てもらつて教えてもらえたらなつて僕は思つてたんだけど……」

困った困つたと、夏梅は反対側に首を傾げた。

「へえ、そうだったんだ……。それで」

中島が言いかけたとき、手洗い場の中から「……わあ！」と何かに驚いたような宮沢の声が聞こえた。続けてガタガタと慌てた足音が。何やら話し声があるが、内容までははつきりとは聞こえない。

どうしたのだろうと中島と顔を見合わせていると、中から二人が話しながら出て来た。

「確かに見たんですけど……おかしいなあ」

「外の奴らにも聞いてみればいいだろう」

「何を?」「何をですか?」

夏梅と中島が目を瞬かせていると、中から出てきた二人が顔を向けて来た。

国木田は南国アロハシャツの襟衣から、もう少し落ち着いた水色の襟衣に着かえ、赤い花柄の襟衣は腕に掛けていた。

「賢治が女の子を中で見たというんだが、ここは男子トイレだろう。見間違いじゃなければ、間違つて近所の子が入つて来てしまったとか、お手伝いの方が掃除に来られたのかと思つたんだが」

着替えをしていたので国木田は宮沢が見かけたというその場所から目を放していたのだそう。

出入口の前につつといた夏梅は目を丸くした。

「だれも入ってもないし、出てもないよ?」

「僕が中にいた時も、僕と国木田さんと賢治君の三人だけでしたよ」

宮沢は不思議そうな顔をしたが、肩を竦めた。

「じゃあ、僕の気のせいだったのかもしれない。顔を洗っているときでしたし、ちよつとよく見えてなかったかも。でも確かに鏡に映っているのが見えたと思つたんですけど」

ま、気のせいと分かつたのならそれでいいんです、と宮沢は口を開けて笑つた。

その声がやけに廊下に響いて聞こえた。

——もちろん、道には迷わなかった。

こういうのは得意なのである。

「ただいま」

「戻りましたよー!」

自信満々に夏梅は大広間に顔を出す。続いて、宮沢が顔を出し、不思議そうな顔をする。そのまま、足を休めていたはずなのに何故か前

よりも疲れたような顔色の谷崎兄の方へと駆け寄り、大丈夫かと声をかけていた。

大広間の面々は夏梅達の姿を確認した途端にほっとした顔になったように見えた。なぜだろう？

「……ああ。戻ったか」

「お、お帰りなさい！」

「やア、君たち無事で良かったよ」

父はともかく、谷崎兄と太宰は、まるで夏梅達が遭難したかのような歓迎ぶり、夏梅はちよつと不服だった。

太宰はすぐに夏梅の後ろ姿を現した国木田へと目を向ける。

「おや、国木田君ってば、お着替えしてきたんだね。ここで着替えれば良かったのに。此処に居る私たちみーんな男同士だよ？」

「戯け。家主の方が来られた時に着替え中では失礼だろうが」

一息ついて余裕ができたらしい中島が、大広間を見回しながら空いている座布団に座る。

夏梅は何となくその隣に座った。

「こんな広い部屋があるなんて、やっぱり改めてみると、このお屋敷ですごく広いんだね」

「ここにくるとそう思うよね。さっきは通路ばかりで狭く感じちゃうけど」

「そうだね。でもそもそも敷地がとても広いんだって今気づいた」

「ここそと中島と話していると、父が口を開く。」

「さらに建て増しをしているから余計に、だな」

父が長机に片肘をつけて頭を支えながら、夏梅のほうへ視線を向けてくる。

なんだなんだと夏梅も見返す。

すると太宰が横から顔を出し、不思議な笑みを浮かべて、どこか断定的にいう。

「この部屋は昔からあるみたいだけれどね」

「そうなのか？」

国木田が机を挟んで向かいに回って座りつつ、父に尋ねた。

宮沢は欠伸をして長机に体を伏せている。洗顔くらいではしゃつきりとはいかなかったらしい。

「庭に面した部屋はあまり手を入れてはいないとは聞いた。二階、三階に至っては全くの増築らしいが。この部屋がどのくらい古い年代の造りかは知らないな」

「ふん……お前なら見当ぐらいついてるんじゃないのか、太宰」

鼻を鳴らした国木田が太宰を見遣る。

そのやり取りを隣の中島に習って、余計なことを喋らぬよう口を押えながら見守る。

太宰はにこにここと笑ったままだ。

「おや、買ってくれるね、国木田君。乱歩さんがいないので、僭越ながら私が代わりに推測を披露することは吝かでもないね」

「勿体ぶるな」

太宰は肩を竦め、その推測を言葉に出していく。

言葉というのは不思議なもので、その人が何を見て、何を感じ取って、どう考えたのかを教えてくれる。その人の見えない頭の中のことを伝えてくれる。

「この梁も柱も、構造的には不可欠なものだし。きつと最も古い部屋の一つじゃないかな。——畳は新しく替えるものだけでも、天井を見れば十中八九そうだろう」

神西とは逆のことを言うんだな、と夏梅は思った。

神西は下をみて、床の年代を見ればと判ると。太宰は上をみて、天井の梁を見ればと。……通路と部屋の違いだろうか。悩んでいると、斜め向かいに座る谷崎兄が髪に飾っているハイビスカスの花に触りながら浮かぬ顔をしているのを見つける。

「どうかしたの、潤お兄さん」

「え？ あ……ああ。さつき夏梅君のお爺さんに云われて、ちよつとナオミのことを考えてたんだ。ナオミは如何してるかなって思っただけ。いつも仲のいい妹と離れるのが寂しいのと心配なのだろう。」

夏梅は元気づけるつもりで話した。

「与謝野先生と鏡花お姉さんとスイートルームで女子会するって言うっ

てたよ」

「そつか……。で、でも高級リゾートホテルだったよね。お金がすごく掛かるんじゃないかなって」

お金の心配をしてくれていたようだ。

とても親切で優しい人だと思った。

夏梅が何かを云う前に、応える声があった。

「気にすることはない。儂の腐れ縁が営んどるホテルだ。奴の面倒を片付けてやるかわりに、こうして客人が来た時には持て成してもらふことになつている」

谷崎兄が大きく肩を揺らして後ろを振り返る。

「は、はいいい。ナオミがお世話になります……」

薄い背中を小さくして頭を下げていた。

祖父はいつの間にかそばに居たりするのでびっくりしてびくびくする気持ちはよく分かった。

「部屋の用意ができた。疲れているだろうから14時に昼食を用意する。湯も沸いている。それまで好きに寛いでくれ」

「何から何まで有難うございます」

「否、支度が整わず濟まないな。各々の部屋へ案内しても宜しいか」
背を向けて案内しようとした正直が、ふと振り向いた。

ひとりひとりの顔をじつと見ていき、やや顔をしかめた。

「……誰か、見つかったか？」

足音を聞いたたら、

ギシリ、ギシリと床が鳴る。

先導する者の後について、壁の洋風の灯りに照らされた回廊を進む。

薄暗い中で、照明の灯りへの頼りがいをここまで感じることもなかなかないだろう。

言い訳になるだろうが、この地のこの季節には間々あることだった。

無線の雑音ノイズのような激しい音を引き連れたそれは、古来より人を家屋の中に閉じ籠らせてきた。

人の力では、どうにもならないことは世の中に多々あるものだ。

これはそういったものだった。

事は、大広間にて集い昼食も終わりごろといった時に遡る——何の予兆もなく突然、万の銃弾が一斉に降ってきたかのような音が空気を震わせた。用意されていた真鯛ホウボウや鮎、車海老といった海鮮料理に舌鼓を打ち終えた後、会話が弾んでいた大広間は東の間の静寂ののちに、浮き輪を小脇に抱えていた者もシユノーケルを首から下げていた者も、萎れかけた南国の花を髪に挿していた者も、麦わら帽子を胸に抱えた者も、皆それらを正座して自らの傍らに置いた。

——唐突に、誰かの通夜でも始まったかのようにだ。

季節外れの海水浴を楽しみにしていただろう探偵社の面々に、何と言葉をかけるのが適切なのか思いつかず、我が子を見ると子もこちらを見上げていた。そしてふるふるすると死の間際で痙攣する小鹿のように小刻みに首を振る夏梅は、齧っていた洋菓子の欠片で喉を詰まらせていた。直ぐに、自分の茶を差し出したが、それが熱いことを失念しており、我が子は舌を出して無言で呻きを耐えていた。

小さな惨事だったが、それでも声を出すのをためらわれる状態だったのだ。

打開したのは、屋敷の主の義父であった。

「……この雨では海に出るのは不可能だろう。直に嵐になる雨だ。先刻儂が言ったことは相反するが、外に出られぬ代わりに、この屋敷内を回っては如何か。儂の趣味で蒐集しているものを置いた部屋がある。僅かばかりだが鑑賞には足る部屋も幾つか。興味があれば案内させよう。例えば茶器や——」

項垂れていた筈の面々がいつの間にか前のめりになっていた。

心なしか岸辺に打ち上げられた魚のようだった目に生気が宿ったように見えた。

「その、か、刀は?!」

「刀もあるが」

「刀! 見たいです!」

「……茶器もあるが」

「みんながゆってゆんだかや、かてやなでいいんやない?」

舌を出しながら発した、鶴の一声ならぬ、孫の一声により、義父は沈黙ののち眉間を押さえ首を振った。そして片手をあげるとすぐ傍らに作務衣を着た壮年の男——義父と同年代くらいか——が近寄った。

「客人を、『いの三番』へご案内せい」

「はい、先代」

義父の取り計らいによって再び沸き立つ面々に安堵していると、横に座っていた夏梅が体を倒してきた。

目線を活気を取り戻した面々に向けながら潜めた声で言う。どうやら火傷が落ち着いたらしい。

「みんな、よつぽど海に行きたかったんだね。でももうだいぶ水が冷たいと思うけど」

「それはあまり口に出してやるなよ、夏梅」

「言わない約束?」

「出来るだけな」

夏梅は動かない表情の中でわずかに眉をひそめ、鳶色の目を半眼にして見上げてきた。

額にかかる赤い髪を払ってやると、不本意な色を濃くする。

「でもお父さん、晴れてても今海入ってもいいと思う？」

「勧めないな」

「だよね……横浜にも海はあるのに、みんなどうしてだろ」

「さあな」

自分はここの海を見ると、紙とペンが恋しくなる。

潮風に吹かれる窓辺で、日に焼けた紙を押さえるために銃を文鎮代わりにしていたある一日に、空白が二つ。それを埋めるのが、あの家族の肖像だった。

「横浜は横浜の海、瀬戸は瀬戸の海だろう」

「うん？ そんなの当たり前だよね？」

そういわれると、その通りだと首を傾げた。

だが、合点がいった。

「だからだろう」

「ええ？ でも、海は海なのに」

自分は頷き、我が子は首を傾げた。

その少し硬い髪質の頭をくしやりと掻き混ぜ、非難の声を浴びた。やり取りが耳に入り、「……それは会話として成り立っているのか？ どちらかが納得してどちらかが疑問のままに終わっていないか？」と国木田の思ったことが口を突いて出たが、残念なことに父子には届かず、虚しく空中を漂う独り言となってしまった。谷崎兄が慰めるように国木田の落とした肩に手を置いた。

太宰が両手を上げて、「It's a 織田作家不思議世界」と肩をすくめた。

小さい声と当人たちが思っていたとしても、だんだん声は大きくなり最後辺りは、結構周りに聞こえていたのだった。——其れを知らぬは当人たちばかり也。

斯くして冒頭に戻る。

昼下がりにもかかわらず、回廊は路地裏の如き薄暗さ。

天井の灯りがなく、壁の灯りだけでは心もとない個所もあった。改築されたばかりの場所だったのだろうか。

「此方です」

義父の付き人が壁に手を伸ばし、部屋に灯りをつけた。付き人の手は、指に対して節が異様に太く突き出っていて、短く切られた爪と指先は丸くなっていた。

その無骨な手の下から軽快な音が鳴った瞬間浮かび上がる無機物らは、回廊の艶めいた床よりもはるかに鋭利に光を跳ね返し、部屋を電灯以上に隅々まで明るくした——和洋折衷というには不揃いな箇所が多々あるこの屋敷の一角に、一種展示としての用途向けにあつらえられた室内はさすがに和の色に統一されていた。来客の暇つぶし用に当てられた部屋は、大の男と子どもが揃い踏みしても狭さは感じられない造りになっている。

「わあー！ 壁も台の上も刀だらけです！ あ、見てください、これがさつき聞いたお話の業物ってやつですよ、きつと!!」

歓声と共に、宮沢が真っ先に部屋の中へと入りこんだ。

「この部屋、はじめてみたみたい……」

「あれ、夏梅くんも来たことないの？」

「うん、たぶん。ほかにも部屋はいっぱいあるし、あんまりこの屋敷で過ごしてないしね」

宮沢は夏梅の手を引いていたので、夏梅も右に左にと首を巡らせながらその後を追う。夏梅は、中島の手を引いていたので、結果三人は展示台の間を縫うように、一列にぞろぞろと連れ立って最奥まで進んでいく。

果たしてそこには、一見して如何にもな人目を惹く巨大な刀があった。

「此れ、持てる人いるんだろうか。見掛け倒しで使えないやつじゃ」

「僕はきつと持てます！」

「確かに。賢治君なら余裕で扱えそう……前に交通標識を引っこ抜いて振り回してたし……」

「実はぺらっぺらだったたりして」

「それは無いのかな？」

中島が横から片目を閉じて厚みを確認した。

早々に飽きて欠伸をこらえる我が子が、適当に吐いたであろう言葉にも真面目に取り合う。

傍から見ると、中島は実に好く年少らに付き合っていた。

手前の展示物をすべて素通りした子どもらに、ふと個展準備の日々を思い出した。

慣れないスーツを着て、個展の設営打ち合わせの会ミーティングに参加していた際のこと。様々に意匠を凝らして展示物を配置し、動線に意味を持たせようとした溝地ら学芸員の努力を毎回目にしていた。自分がいない日も続いていただろう議論は、真夏日に、暑くも、しかし涼しくもない部屋で行われていた。すべての配置が決まった日の終わりに、「まあでも見に来られる方は私たちの、拘り抜いた布置に込められた意図を汲み取っては呉れず、見たいものだけ見て帰られるんですけどね……」と背を丸くして哀愁めいた溝地の呟きがこの部屋で漏らされたかのように蘇る。

となれば、この刀部屋の中の配置にも意味があるのだろうか。

入り口で立ち止まっていると、廊下の電話の数を数えていた国木田らが追いつき並んだ。

そして部屋の中を一望して、小さな鳥籠に猛禽の類がぎゅうぎゅうに詰められているのを目撃したかのように唸る。

「これ程のものを個人で、か。この部屋を切り取って展示場と云われでも納得だな」

「同感です。ボクもてつきり刀を数本見せてもらえるのだと思っただんですが。しかも一般の……？ お家でこんなに見れるなんて。茨木さんのご自宅の時も思いましたけど、蒐集家コレクターって、皆さん揃いも揃って凄い熱量をお持ちですよね……」

谷崎兄は国木田の横で硝子張りの展示机の中を見渡し、力なく笑う。

興味はあるのか、台所の陰からそろそろと顔を出す少女のように首を伸ばして刀身を覗き見る。

刀鑑賞に来た面々は並べられてある年代物の刀を各々差はあれど関心を持って見ていた。

「あ、ナオミの使っていた包丁と同じ名前だ。でも、随分古そうな」

「この輝きは……真逆、彼の有名な刀匠の一振りでは?!」

ぱつと谷崎兄と国木田はそれぞれ別の方向へと首を傾けた。

谷崎兄はしげしげと、国木田は刀の隣に置かれた目録に食い入るように覗き込む。

無論、鈍らよりは鋭い方がいいが——入り口の柱に背を預け、回廊をはさんだ硝子戸越しに、外の雨風の音を聞く。橙色の電灯が、?き出しの刀身を照らし、刀身がそれを反射しているのがまばゆい。

刀に特別の思い入れがない自分は、邪魔にならないようにと彼らを入り口の傍で眺めていると、雨のために、改築工事の音が途絶えている筈が、トントントン、あるいはギシ、ギシと木が軋む音がどこか遠くから柱を伝って聞こえてきた。音源を探ろうと柱から身を起こし首を巡らせかけたところ、

「お昼の腹ごなしには実に丁度いいね、これは」

音もなく隣に立った太宰が、肩に肘を置いてきた。

太宰の言葉の内容をもう一度脳内でさらう。

「もともと、外客が多い家だからな。こういった趣向の部屋も幾つかあるらしい。……だっただろうか、田治さん」

「仰る通りです」

同じく入り口付近に控えていた人物へと尋ねる。

案内役にと、義父が付き人の一人を貸し出してくれた。

頭を丸く刈った、どこかの寺の御仏のような、穏やかな面持ちをしている付き人は、壮年でこの屋敷に長く勤めていると聞いた。——夏梅から。

夏梅は、この屋敷で過ごした期間もそう長くはないはずなのに、よく人の事情を知っている。

自分とは違い、こういった目端が利くのはきっと母親譲りなのだろうと思う。

「田治さんと仰るのですね。私は太宰と云います。探偵社に所属して

いまして、職業柄気になることを放つて置けなくて。貴男に二三質問しても？」

「何でしょうか」

「来客が多いのに、このお屋敷は常に改装中なのだとか。これには何か理由でも？」

にこやかな笑みを浮かべて尋ねる太宰に、田治は静かに首を横に振る。

これほど対照的な、胡散臭い顔と実直な顔を並べて見られる機会も早々ないだろう。

「総すべてはこの御家の主人である先代のご意向にて、その意図されることについては私どもの与り知らぬところですよ」

「このお屋敷の主人たつてのご意向——成程。その意図はどういったものなのか、貴方方に何か心当たりはないのでしょうか？」

田治の瞬きが少し遅れた気がした。

だが、気のせいだろう。田治の口調は乱れなく淡々としていた。

「先代が敢えて口になさらないことに、どうして私どもが詮索しましょうか」

「する筈がない、と。ええ成程。しかし、疑問などは抱かれるのでは？」

この邸宅は今の様な雨天以外は工事が続けられ、常にその作業音が聞こえているのでしょうか？ 目に映さない努力はできても、耳を塞いで意識しないことは至難の業では？」

「何事も故在つてのことでしょう。私どもはこの御家に仕える使用人。現在のこの御家を取り仕切る方に唯々諾々と従うのみ。——これ以上はどうかご勘弁を」

「——太宰」

ちらりと太宰がこちらに視線を寄越した。太宰も引きどころだと思つたはずだが、念のため声をかけた。

太宰は、顔にこの上なく胡散臭い笑顔を張り付けて田治に向けて、謝った。

「いやア、申し訳ない。気になってしまつたらつい、在ること無いこと何でもかんでも根掘り葉掘り聞いてしまうのです、ええ此れも職業病

でしょう。此方こそどうかご容赦を」

「いえ」

田治の非常に短く簡潔な返答に対しても、太宰は大仰に腕を広げた。

「それにしても、私は感銘を受けました。貴男は全く素晴らしい忠義人でいらつしやるようだ。この御家の主人からの信頼もさぞ篤いとだろう」

義父の付き人は、太宰からの賞賛に、静かに目を伏せた。

田治はこの通り、温厚な物腰が常だ。しかし実際のところ、見た目通り虫も殺さぬような男でもない筈だ。

何せ、この屋敷の中で、あの義父の付き人として二番目に長い人物というのだから。仮令、大戦時に国の為、諸外国で千の敵を拳で倒してきた歴戦の武人と云われても疑わないだろう。……そして何故だか、太宰との相性が良くないようだった。いや、太宰が一方的に嫌っているだけか。

太宰が目線をくれるので、首を振って返答とする。

義父の付き人の最古参のひとり知らないのなら、当然ぼつと出の婿養子などが知る由もない。

太宰が肩を組んできて、部屋の中へ進む。

田治は静かにそのまま入り口前に控えていた。

「却説、夏梅くんのお爺様は一体何を思い、何の為に此れを成したのか、今も成し続けているのか。それともその行為自体に意味があるのか」

「謎解きか？」

太宰が片眼を閉じて、口角を陽気に上げた。

「乱歩さんがいないからね、ここは私が担当しようかと」

そして両眼で小展示室ともいうべき刀部屋を一望する。

その視線を追っていると、ちょうど同じように部屋を見渡していた中島と目が合った。

「太宰さん、織田作さん」

「どうしたんだい、敦君?」

いつの間にか探偵社の面々は国木田の周りに集まっていた。国木田の語る刀剣の話聞いていた面々の中から、中島は一人離れてやって来た。

「何だか、さつきから離れたところで足音が聞こえるんです」

「使用人の方の足音じゃないか?」

この屋敷には何人もの使用人が働いている。

しかし、中島は首を振った。

「いえ、それとは違っていい」

「何か、可笑しなところがあるというんだね」

太宰の言葉に、中島は頷いた。

「離れたところでなんですけど、ずっと同じところをぐるぐると歩き回っているんです。ただ……」

中島はいったん言葉を切って、迷うように口を開いた、「それが、床板の裏側から聞こえるのがおかしいなって」

光が走った。電灯が点滅し、その後少しして雷鳴が轟いた。

何の話をしていたのか、国木田の周りで悲鳴が起る。

中島はそれに目を向けながら、自信なさげに眉を下げながらいった。

「気の、せいですかね?」

「敦君の虎の耳は優秀だ。気のせいというのは可能性として低いかな」

中島の言葉を聞きながら、ふと柱に背を預けていた時に聞こえていた音を思い出して気づいた。

「ああ、『影人間』か」